IS reve

けやき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　ｒｅｖｅ

【Ｎコード】
Ｎ０６５９Ｕ

【作者名】
けやき

【あらすじ】
神様？の手違いで死んでしまった奥村俊貴。そのお詫びにと願いを叶えてもらい、別の世界へと飛ばされた。
が、その世界は女性にしか反応しない最強の兵器，ＩＳ，が使われている世界だった。

これはＩＳの話ですが、平行空間と言うことで登場しないキャラがいます。本編に近い話になりますが、基本的に自分のオリジナルの話にしていきます。

別世界はＩＳ！？（前書き）

今回はＩＳ登場はしません。次回から本格的にＩＳでバトルやらドタバタな話になります。

別世界はＩＳ！？

目が覚めると真っ黒な世界に一人ポツンと立っていた。
光も何も射し込まない黒い世界。

「あれ？何でこんなところに…」

青年が首をかしげる。
此処に来た理由がわからない。此処に来る前は確か、大学の課題をやっていたような…

ーお？気づいたかー

清んだ女性の声が響く。
が、周りには姿はない。

「あんたは誰だ？此処は何処なんだ？」

とりあえず、自分の状況を、と聞いてみる。

ー私は、輪廻を管理する者だ。此処は、言わゆるあの世とこの世の境界とでも言っておこうー

と、返事が来る。
姿を確認しようと周りを見渡すが、やはり姿はない。

「輪廻を管理する者？…神さまの事か？」

輪廻

つまり、死と再生。それを司る者、オシリスやシヴァ、キュベレーの様な神を青年は知っていた。

ーふむ、それなりに知識は有るようだ。ー

少し声が柔らかくなったような気がした。
肯定ととって良いのかな。

「じゃあ、神さま。オレは死んだって事で有ってるの？」

あの世とこの世の境界にいる、と言われた時点でそう思った。

ー死んだ。こっちの手違いで、死ぬ予定ではない汝が謝って死んでしまったー

申し訳なさそうな声が響く。

あの世界に満足してた訳じゃないから、別に未練はないし良いんだけど

「…オレは誰の代わりに？」

ー汝は、寿命が来た老人の代わりになったー

老人かよ！？
オレまだ２１だぞ！！
どう間違えたの！？ねぇ！

ーうむ、汝の言うことは尤もじゃが、もう死んでしまったから、元には戻れんぞー

「…あれ？オレ声に出した？」

と、聞く。声を出した覚えはないが、無意識に出てたかもしれない。

ーいや、我が心を読んだ。ー

「そーなのかー」

なるほどね、神様になると何でもありな訳ね。あーぁ、口にしなくても会話できちゃうじゃん。何か笑えてきた

精神が崩れてきた。

ーおっと、いかんいかん。このままでは良くないから、汝に提案があるんじゃー

「提案？」

ーどうするかは汝次第。このまま輪廻の輪に戻るか、別の世界に生きるか選ぶといいー

「別の世界？」

元の世界では無いことに疑問を感じる。

ー汝は元の世界をどちらかと言うと嫌っておるな。だから、元の世界ではない、別の世界で生きてみる、という選択肢だー

なるほど、オレの事まで分かってるわけか。

確かに、前の世界は嫌いだ。偉いヤツが毎年二人はコロコロと立場が変わり、最もやるべきことをやらない。
これ以外にも文句はいくらでも出てくる。
違う世界か。興味はあるな。前の世界との違いも気になるな。

「…別の世界で生きてみたいかな」

輪廻の輪に戻るより、新しい世界。
ーそう言うと思った。それで、手違いで死んでしまった汝に、謝罪の意味も込めて願いを聞こうー

「願い？んー…、とりあず高い身体能力が欲しいかな。」

その世界が縄文時代的な感じだったら、キツいし。
ーふむ、他には？ー

ほか？まだいいの？
うむ、と返事が帰ってくる。

「…ってか、その世界がどんな所かは教えてくれるの？」

ーおお、言ってなかったな。汝が行く世界は、男よりも女のが立場が強い世界。‘インフィニットストラトス’という兵器がそういう世界に変えてしまった所じゃー

「女尊男卑、か。前の世界と違うんなら何でもいいか。」

と、軽く決める青年。

ー汝が思ってた様な原始的な世界ではないが、‘インフィニットストラトス’という兵器が普及しているため、平和でもないなー

なら、高い身体能力は有って損はしないな。

「その兵器は簡単に手に入るの？」

ーいや、普通には絶対に手に入らん。男には扱えない、女専用の兵器だからなー

は？何だそりゃ？

そんな物があるから、女尊男卑世界になる訳か。納得ん？普通には？

「…てことは、神様に頼めばオレも使えるのか？」

ーやはり気づいたか。使えるぞ。我が特別な物をやろうー

「ラッキー！」

ーどんな感じのがいい？ー

青年の正面に一つの機械が現れた。

鎧のような感じの機械。

足や腰、腕等の部分に装甲で形成されている。

訓練機のひとつで打鉄というＩＳ。

「これがその一つかぁ…」

カッコいいな、かなり
男なら一度は着けてみたいけど、女専用か…
でも、それを使えるオレは勝ち組！？

と思いながらデザインを考える。

「色は黒と赤かなぁ…。機動力重視で攻撃はどの距離でも充分やれる装備。これにＡＩは搭載されてるの？」

ーＡＩとは違うが、コレはＩＳコアという物が搭載されていて、汝に合わせて動いてくれるようになるー

…ＩＳコア？よくわからんけど、ＡＩと似たような物なのかな

「そのＩＳコアはしゃべるの？」

ーしゃべりはしないが、独自の意識はあるようだ。しゃべらせたいのか？ー

「知らない世界に行く訳だし、機械でも喋ってくれた方が色々助かるかなぁ、と」

言語が違うかもしれないし、他にも前の世界と勝手が違う可能性がなくはない。そんな状況に一人でいることはストレスにしかならない。それを防ぐための手段としてＡＩを思い付いた。

ーふむ、よかろう。言語能力をつけようー

「ありがとう。」

ー形態移行はどうする？ー

「何それ？」

ーＩＳが経験を積んでいくことで、自身の形状や性能を変化させることで進化した状態になるー

「じゃあ、バランスの良い形態と、機動力重視、攻撃重視、三つの形態移行で。」

ー良し、わかったー

ー確認しよう。黒と赤のパーソナルカラーで、機動力重視のオールラウンドの装備。形態移行は、バランス、機動力、攻撃の三タイプ。ＩＳに言語能力付加。間違いないか？ー

「ないね。」

頷く青年。

ー待機形態のデザインはどうする？ＩＳをアクセサリー感覚で持ち運ぶ形態の事だー

「うーん…、黒いアームバンドかな。」

ーわかったー

青年の左腕に黒いアームバンドが装着された。

ー他に何かあるか？ー

「ＩＳの才能が欲しいかな」

無理かなぁ、と思って聞く。

ー良かろうー

「まじか！？」

あっさりと許可がでた。

ー他にはあるか？ー

「…んー、他には無いかな。ありがとう」

ーでは、そろそろ行くか？ー

「うん、行く。わざわざありがとう」

ー何の、こっちの手違いで迷惑をかけてしまったのだ。気にするな。さぁ、この光に向かえ。さすれば、新たな世界が汝を待っているー

「うん」

青年が、黒い世界に顕れた光へと歩きだす。

新たな世界へと向かって

別世界はＩＳ！？（後書き）

こんばんわ。
原作を余り知りませんが、自分なりに調べつつ作成してます。もっとこうしたほうが良い、等アドバイスを頂けると嬉しいです。

今のところ登場しないキャラは一夏と箒です。

では、これからもよろしくお願いします。

最強の騎士との模擬戦

青空に雲一つない快晴。人々が目的を持ちせわしなく動いている。
そんな中、一軒のアパートの一室。ベッドが有るのに床で眠る黒髪の青年。眠るというよりも、気を失っていた。

「んあっ！？」

青年が飛び起きた。
眼は赤く、肩より少し上まで伸びた黒髪。イケメンではないが、整っている顔立ち。
この青年は、奥村俊貴。輪廻を管理する神様に、別の世界に飛ばされた、この物語の主人公である。

「お目覚めですか？」

と、誰もいない部屋に声が響く。

「は？誰…あ、そうか」

左腕に着いている黒いアームバンドに視線を落とす。

「今日は予定が有りませんが、どうしますか？」

んんー、と伸びをする。
予定か…

「なぁ、それよりも先ず、この世界の事を詳しく教えてくれ。」

この世界を全く知らない。それはこれから生きてく上で知らないといけないことが多い。

・・・・・・・・・・・・

「と、まぁこんな感じです」

「ふむ、なるほどね」

ＩＳにこの世界の事を教えられて数十分経った。

女性にしか使えない兵器‘インフィニット・ストラトス’。それにより、男女のパワーバランスが変化、女尊男卑の社会へとなった。

そもそも、‘インフィニット・ストラトス’とは、宇宙空間での運用を想定して、開発されたマルチフォーム・スーツ。だが、軍事用に新たに開発された飛行パワード・スーツとしてのが広く普及されている。

そのＩＳが各国の抑止力として要になっている。

「で、文化とかは幸いにも前の世界と殆ど同じ、か。」

「はい。生活には困らないかと。」

頷くトシキ。

「あ、そうだ。オレもＩＳを使ってみたいんだけど」

「イメージすれば自然と展開しますよ。」

イメージか…

「ってか、場所を変えよう。家の中じゃなくて、外で人に見つからない広い場所はない？」

下手に動いて物を壊したくない。

「そうですね…、ここから北東の方に山が有りますからそこでやってみてはどうですか？」

「よし、そこに行こう。」

立ち上がり、部屋から出て北東にある山に向かう。

・・

アパートの北東の山。トシキはその山の中に立っていた。

「さて、始めようか」

「イエス、マスター」

アームバンドを付けた左腕を体の前にだす。

イメージ、イメージ、イメージ…

頭の中でＩＳのイメージをする。

「お、おぉー！」

自分の体を見下ろして、嬉しそうに声をあげる。腕や脚、腰、胸の部分にベースが黒で、一部やラインの赤い装甲が着いている。

機動力重視のため、脚の装甲以外は、割りと薄く着ている服がほぼ見えている。脇腹と、肩を守る様に胴体の装甲が有る。

腕は小手のように装甲が展開。

腰には、ちょうど左右の位置に電磁砲が装備され、スカート状に後ろに展開している。

脚には膝から下に装甲が展開。

背中側には小さな翼状のスラスターが二つ、肩より少し上に浮いている。

「ハイパーセンサー異常なし、武器を確認してください」

視界の右側に、ウィンドウが表示され、そこに武器が表示されている。

「刀？」

一番前に表示されたウィンドウに載っている、刀のような武器を選択。

すると、手の中に刀が出現する。ただ、普通の刀と違い、刃の部分がエネルギーを使用するビーム状の物。

「おぉー！すげぇ！！」

手に触れる感触を確かめるように、手を開いたり閉じたりする。

「マスター、喜ぶのも良いですが、他の武装も確認してください。」

と、急かされた。
あいよー、と返事をし再び視界の右側のウィンドウを見る。
刀が量子化され、保存される。

次はー、とウィンドウを一つ切り換える。
何じゃコレ？ハンドガンかな。
手の中にハンドガンが表れる。これもしっくりくる。

「おぉー！マジですげぇ！！」

目を輝かせて喜ぶ。

「…マスター」

「あぃ……」

ハンドガンが量子化する。

・・・・・・・・・・・・

武装を確認し終え、次は動きのテスト。
上昇、下降、旋回等を一通りやってみた。

イメージが大事だと教えてもらって、行動のイメージをしながらやってみる。
まだ素早い移動は難しい様で、ゆっくりでも真っ直ぐ移動してみる。

「さすがに操縦の才能を貰っただけは有りますね。一回試して動い

てみただけで、こんな動きはできませんよ。」

「そうなの？」

操縦の才能を貰ったおかげで、正確に真っ直ぐ上昇、下降している。
もうちょっと練習すれば、スピードも上げて上昇下降できるだろう。

「じゃあさ、簡単な戦闘訓練したいんだけど、できる？」

基本的な動きに飽きたため、戦闘の動きも加えようとした。

「できますよ。視界に的を配置しますので、武器でそれを破壊してみてください」

視界に数個の的が現れた。動く物もあり、初心者には割りと難しいレベルな気がする。

とりあえずハンドガン、と

ハンドガンをイメージし、手の中にハンドガンが現れる。

「よーし、3カウント後に戦闘開始。よろしく！」

そう言って、的の位置を確認。

正面に1、左右の木陰に2個ずつ、木の上の方を左右に動く3つ、トシキの後ろに3つ、配置されていた。

3

カウントを開始する。

0　1　2

それと同時に、トシキが動き、正面に設置された的を撃ち抜く。

「1」

斜め前に飛び、木陰の的を連射して落とす。

「2、3、4、5」

左右に動く的の動きを予測、狙いを付け三発放つ。

その三発は、綺麗に的を撃ち抜く。

「6、7、8」

その場で旋回、そして3つの的に狙いを付け、放つ。

2つは直撃したが、1つは木に当たった。

「9、10、…むぅ、はずしたか」

うーん…、と頭をかく。

反動で手がぶれたかな。

腕組をして原因を考える。

だが、その動きは初心者の物とは思えない物だった。動く的を正確に撃ち抜くなんて、ＩＳが補助してくれるとは言え、初心者ないし中級者ですらできない者もいる。
射撃が得意で無い者もいるが、それを踏まえてもトシキの腕は普通ではない。

「才能を貰わなかったら、こんな上手くいかないだろうなぁ」

と、空を見上げた。

「…ってか、よくよく思ったら、初期化と最適化はどうなった？」

一次移行してない事に今ごろ気づく。

「もうちょっとで済みます。それまで適当に動いて慣らしてください」

適当って、と苦笑いしながらも基本的な動きの練習をし始める。

あぁー、そう言えばこんなに熱心に練習すんの久しぶりだな

と、思う。
前の世界では、特にやりたいこともなく、出された課題をこなす、留年しない程度に勉強。
真面目に取り組んだ事は、そんなにない。

「あっ、そう言えば名前付けてなかったな」

ふと思いだし、動きを止めた。

「そうですね、名前を貰ってませんでした」

「だろ?うーん…、何が良いかな」

と、顎に手を添えて悩む。

どうすっか…

好きな言葉、物、色…

機体の色は黒と赤色…

うーん…、ヤバイ、なんも思い付かね

苦い顔をするトシキ。

「マスター!北西に熱源反応2つ。此方に向かってきてます!」

視界の左側にアラートが表示される。

しまった…、こっちの熱源を感知されたのか!

今の状況で、この世界の組織と揉めるわけには…

どうする?とりあえず戦闘の意思はないのをわかって貰おう。

攻撃してきたら…、その時に考えるか

そう思っていた矢先に、二機のＩＳがトシキの前に降り立った。

二機とも灰色がベースの機体で、装備が違うだけで同じＩＳの様だ。

片方はビームライフルの様な物を持ち、もう片方は刀状の剣を持っている。

「何者だ!ここで何をしている!!」

ビームライフルをトシキに向ける。

「エネルギー供給を確認」

トシキにのみ聞こえる潜在意識下の声で、二人には聞こえない。

「…とりあえず、それを下ろしてもらって良いですか?オレに戦う意思は有りません」

手を上げて、ＩＳを外す。マスター！と脳内に声が響く。

ごめん。でもこうでもしないと戦闘の意思がないのは伝わらない

「そうですが…」

二人が、ＩＳを外したトシキに驚き、顔を見合わせてトシキの元へ近寄る。

相手が戦闘の意思を見せたらすぐ展開するから

「…了解しました」

「男、だな?」

戦闘の意思が無いのはわかって武器を下げるが、警戒してＩＳは解かない。

ま、それは予想してたけどねー

「ご覧の通り、男です。」

一人がトシキの回りをグルグルと周りながら見る。

「男がどうしてＩＳを使える？」

声が訝しげ。

何かすげー疑われてる…

「んー…、オレにはわかりません。オレ専用で造って貰った物なのは確かなんですがね。」

女性にしか使えない兵器を、男のオレが使える理由なんて知らないし。

「…それを作ったのは誰だ？」

「うーん…、知り合いなんですが、この世界にいません。」

まぁ、間違ってはいない、よな？神様だし

「他界されたのか？」

「…まぁ、そんなところです。」

他界したのオレだけどねー

「うぅむ、どうしますか？」

ビームライフルを持った方が、刀を持ったほうに聞く。

「私が質問しよう」

トシキを調べ終わったのか、目の前に来て刀を量子化させる。

鋭い目付きの女性がトシキの顔をジッと見る。

「名前は何だ？」

「奥村俊貴です。」

その目に気圧されるトシキ。背中に汗が伝う。

本能が告げる。この人はヤバイ。色んな意味でヤバイ、と。

「何故此処でＩＳを起動していた？」

「もらったばっかで起動してないから、起動してみたんです。人目につかない場所を選んで」

言うこと聞いとかないと、死ぬ！！

「…ＩＳをもらったのは最近なのか？」

「はい。昨日です」

「それを作ったのは誰だ？」

「…ぅーん、わかりません。」

「わからない？何故だ、知り合いなのだろう。」

訝しげな表情になる。

「そうなんですが、名前を聞き忘れてしまったんで…」

頬を人差し指でかき苦笑いするトシキ。

「…まぁいい。では、所属は？」

「所属？…ないです。」

「何！？個人でＩＳを造ったと言うのか！」

トシキを見る目が益々鋭くなる。

「そういうことになりますね。」

あはは、と弱い笑みを浮かべる。

「奥村、お前には不確定要素が多すぎる。私たちと一緒に来て貰おうか。」

拒否したら殺す、と言わんばかりの勢いの女性。

「監視監禁するって訳ですか。」

はぁ、とため息をつくトシキ。

監視ならともかく監禁は嫌だな。逃げるか

「監視はするが、監禁はしない。そのかわり、我々の学校に入って

もらう」

「は？学校？？」

「そうだ、ＩＳ学園こと、ＩＳ操縦者育成特殊訓練国立学園に。」

「ＩＳ学園…」

「詳しいことは学園で話す。付いてきて貰えるか？」

断ったら殺す、と目で訴えかけてくる。

「…はい」

やむ無く、トシキは付いていくことになった。

相手が、織斑千冬なのだ、無理はない。平行世界でその存在は別のはずが、何故かこの人はＩＳ学園の先生として働いている。これも運命なのだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

トシキは、織斑千冬と職員に連れられて、ＩＳ学園の校門にいた。
パッと見は普通の学校と変わらないのだが、グランドはかなり広く
トラックは一周五キロあるらしい。
見てくれは普通の学校だが、大きさが半端ない。
そんな学園に呆気にとられていたトシキの視界に千冬が入る。

「何を呆けている。さっさと付いてこい」

「！はい。」

我に返り、先を進む千冬のあとを付いていく。

・・・・・・・・・・・・

千冬に連れられて、広いドーム状の場所に連れてこられた。
観客席の上の方に位置する、実況席のような場所に四人程がトシキ達を見下ろしている。

「…あれはデータを収集するための人員だ。気にするな」

トシキの視線の先を見た千冬が答える。案外周りを見ているようだな、と呟いたが、トシキには聞こえていない。

「ところで、ここで何をするんですか？何となくわかった気がしますが。」

観客席と、充分な広さの開場。そして、ここはＩＳ学園。

「察しの通りだ。私と決闘をしてもらう。」

ＩＳの刀を出現させる。

「一応聞きますが、何故ですか？」

アームバンドに片手を添える。

「転入という形でお前には入学してもらう。それで、この学園に入学するものは、ＩＳ適正試験を受けてもらうのが決まりだからな。」

「試験か…。ようするに模擬戦ですよね？」

「そうだ、私と戦ってもらう。制限時間は３０分。お前か私のエネルギーが切れた瞬間に終了だ。質問は？」

「オレは自分のＩＳを使っても良いんですか？」

「あぁ、使ってくれ。そうじゃないとデータが取れないからな」

「わかりました。」

イメージをして、黒と赤のパーソナルカラーのＩＳを展開する。

「ほう、黒と赤のＩＳか。第四世代の物だな？」

「はい、そうです。」

事前に世代の事を聞いていたためうなずく。

そして、右手に刀を出現させる。

「初期化と最適化はどうなった？」

途中で中断させられたため、未だに一次移行すらしていない。

「あと凡そ三分程です。」

「三分…、保つかわからんなぁ」

目の前に立つ相手の気迫を肌でビリビリと感じる。

今のちょっとかじった程度の腕では、到底敵わないのがわかる。

「…そろそろいいか？」

「あ、すいません。大丈夫です。」

「良し、ではかかってくるがいい。」

刀を構える千冬。

「むぅ…」

隙がないその構えに唸る。

「相手のＩＳは打鉄。特殊装備なし。」

と、脳内に情報が聞こえてくる。

装備があの刀だけってことは、あの刀に気を付ければいいかな。

「先制できる可能性は普通だったら高い。でも、あの人の場合は低い…、かなり」

左手にハンドガンを取り出す。

「！中距離型か…」

千冬にトシキのＩＳの情報はなし。

そんな未確認の機体相手に他の先生方を当てるよりは、自分がやった方が良い、そう判断した千冬。

それでも、学園の先生は普通に強い。入学するものが先生に勝つ事は、殆ど無い。

「機体は安定しており使いやすい訓練機。反応を見るか」

千冬に素早く照準を合わせ、実弾を放つ。

「！」

斜め左に前進して弾をかわし、そのままトシキへと向かってくる。初めてＩＳ同士で戦闘をするので比べようがないが、その反応は鋭く訓練機とは思えない動きをしている。

「小手調べのつもりか？」

一気に間合いを詰めてきた千冬がフッと笑う。

「バレてたか…」

苦い顔をするが、瞬間加速で自分から間合いを更に詰めた。

「っ！？」

それに驚き、千冬のスピードが落ちる。今までの入学者にそんなことをするやつがいなかったため、驚く。

「はっ」

左足を軸に、右足で千冬の腹を蹴る。

が、後ろに跳ばれて威力を和げられ、少し距離を開けられた。

「…」

その距離を詰めるため、すぐに瞬間加速。

相手にペースはやらない！あげたら確実にやられる！！

攻める。トシキの頭の中にはそれしかない。ベテラン相手に初心者が立ち向かう。経験の差は天と地程の差がある。その中で、勝つためには自分がペースを握り、一気に持てる全力で叩き込む。

「くっ…」

トシキの滅茶苦茶な攻撃は、型通りでないため予測しづらく、機体の性能のおかげで捌きにくい。

「はあぁ！」

「！」

千冬は後ろ斜め右に上昇し、トシキの猛攻をかわす。

が、トシキは左手のハンドガンを千冬に向けて連射。

「やる、な！」

刀で弾丸を弾く。

「後ろです！」

「なに！？」

いつの間にか後ろをとられていた千冬が驚く。

「はっ」

トシキの左手が千冬の腹に当たり怯む。

そのまま、千冬の肩を掴み地面へと叩きつける。

はずだった。

千冬は地面にぶつかる前に体勢を立て直し、瞬間加速。

「な！？」

それに驚き、反応が遅れる。

「甘かった、な！」

千冬が刀を横に振る。

「うっ…」

何とかタイミングをあわせて、刀をぶつける。

エネルギー同士が衝突し、火花をあげる。

「すごいな、あの転入生は。織斑先生と戦って、ペースを握れるなんて」

観測室から見下ろす先生方が感嘆の声をあげる。
「だけど、もう駄目だ。ペースが乱れてる。」
トシキが千冬の猛攻に押され始めた。
「っぐ！」
右腕に千冬の刀がシールドバリアを貫通、籠手を破壊する。
「残りエネルギー、２７０。右腕の装甲破損。戦闘継続可能です」
「このままじゃキツいな…、一次移行はまだか！？」
何とか千冬の攻撃を捌きながらも、脳内で会話する。
「もう終わってます。ついでに二次移行の方も行ってます。一次移行を行います。」
「頼む」
瞬間加速で後ろへと跳ぶ。
「？」
「な、何！？二次移行か！！」
トシキのＩＳの姿が変わり、千冬は動きを止めた。
「いえ、一次移行です。」

トシキがＩＳの状態を確認する。
武装が少し増えて、性能が飛躍的に上昇した。

「今まで、一次移行すらしてない状態で戦ってたのか…、将来が楽しみだな」

初期段階のＩＳであれだけ動けるトシキに苦笑いする。

「うーん…、電磁砲とハンドガン二丁、後はビームシールドが常に展開されてる。」

変わった自分のＩＳを見下ろす。
黒と赤のパーソナルカラーはそのままに、背中に二本の黒がベースで先の方が赤い推進翼が新しく装備された。
基本的に装甲は薄いままだが、スラスターが腰の少し短くなったスカート状の装甲と、脚に装着。腰の左右には電磁砲が、後ろに二丁のハンドガンが交差するように装備されている。

「…エネルギーに余裕はあるけど、オレに余裕がないな」

全身に伝わるＩＳとの一体感を心地よく思いながらも、千冬の力量差に余裕がでてこない。
経験に差が有りすぎて、一次移行しても余り勝てる気はしない。

「相手のエネルギーもそんなに余裕はないはず…。なら、攻めるしかない！」

瞬間加速で千冬へと突っ込む。
二丁のハンドガンを千冬に向ける。

「なんて速さだ…！」

トシキの瞬間加速に驚きながら、自分に飛んでくる弾丸を刀で弾く。

「こっちのエネルギーの事を考えて、攻めに来たか。…！」

間合いに入る寸前で急停止、千冬の上を飛び越える。

そして、地面に落下しながら千冬へと弾丸を放つ。

「くっ…！」

何とか刀で弾く。

「はあぁー！」

地面に着地した瞬間に、再び瞬間加速。千冬へと突撃。

「！」

ハンドガンを腰に装着し、すぐに右手に刀を握る。

二人の刀がぶつかり火花が散る。

ガン、ガン、と音を立て二人の刀が何度もぶつかる。

「…っく！」

次第にトシキが押され始める。

高い身体能力と、ＩＳの操縦技術を授かっても、経験の差を埋めるのは難しい。

「しまっ…！？」

下から振り上げた千冬の刀に、トシキの刀が吹き飛ばされる。

「良くやったが、ここまでだな。」

ふっと笑い、振り上げた刀を今度は降り下ろす。

「何てね」

イタズラっぽく笑い、左腕に装備されたビームシールドを展開、刀を受け止める。

「なっ！？」

予想外のビームシールド。それに加えて、腰に装着された二砲の電磁砲が千冬に向けられる。

「逃がさない」

トシキが右手で千冬の腕を掴み、距離を開けさせない。

そして、電磁砲が放たれる。

千冬のシールドバリアに直撃、爆煙をあげる。

「はぁ、とんでもないやつだな…、お前は」

そう言って、爆煙の中から千冬が出てきた。

「教官のエネルギー切れを確認。転校生の勝利」

アリーナの所々に設置されたスピーカーから声が聞こえてくる。

「今日初めてＩＳを起動したとは思えないな。」

千冬がＩＳを解除する。

中からタンクトップとスパッツを合わせたようなＩＳスーツを着た千冬が、トシキに詰め寄る。

「うっ…」

その格好に思わず顔を背ける。

千冬のボディーラインが強調されるＩＳスーツ。

「なんだ？急に顔を背けて。」

訝しげにトシキを見る千冬。

「…何でもないです。これからどうすれば良いですか？」

なるべく体を見ずに、顔を見ようと千冬に向き直る。

が、それはそれでキツいのに気づく。めちゃくちゃ美人であるため、顔をずっと見てると段々恥ずかしくなってくる。

「とりあえず、手続きをするから付いてこい。」

そんなトシキの心情を知ってか知らずか、千冬はアリーナの入り口の方へと歩き出した。

「あ、はい。」

チラッとアームバンドを見てから、千冬の後に付いていく。

最強の騎士との模擬戦（後書き）

ＩＳが出てこないのはまずいので速めに上げました。

転校初日のいざこざ

ＩＳ学園の初等科１組のホームルーム。
千冬が教壇に立ち、その隣に学園の制服を着たトシキが立っている。
その顔は微笑んでいるが、居心地が悪そうにも見える。その原因は、
トシキの目の前に広がっていた。
クラス全員が女子。今日から入るトシキを抜いても全員が女子なの
である。

「おい、自己紹介しろ」

千冬が自己紹介をトシキに促す。

「あ、はい。」

千冬の顔をチラッと見てから、クラスメイト達の方を向く。

「奥村俊貴です。よろしく」

それだけ言って、頭を下げる。

「…それだけ、か？」

「え？はい」

他に何を言えば？と言わんばかりの表情のトシキ。

「まぁいい。お前の席はあそこだ。」

はぁ、とため息をつき窓際の一番後ろを指差す。
その席付近の生徒がラッキー、と喜んでいる。珍しさと好奇心でトシキと話をしたくてウズウズしているようだ。
トシキが自分の席へと向かう。その姿にクラス中の視線が集まる。

「ふぅ…」

小さくため息をつき、席につく。

「よろしくねー、奥村くん！」

と、周りの生徒達から声をかけられる。

「あぁ、よろしく。」

微笑み返事を返す。

「ホームルームを終了する。授業の準備をしろ」

千冬が教室から出ていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1限が終了して、今は放課。ちなみに授業は、ＩＳでの実戦で使用する各種装備の特性についての説明だった。

その内容を何となく理解する事はできた。

「思ったよりも深いなぁ…」

と、ノートに板書した内容を確認する。前の世界の授業の差が有り

すぎて、逆に面白い。そのため、内容が思ったよりも頭に入る。

「ねぇ奥村くん。」

と、不意に声をかけられた。

「ん？」

ノートから顔をあげて声のした方を見る。
いつの間にか、クラスメイトが周りを囲っていた。
廊下からも他のクラスの生徒たちも見に来ていた。

「奥村くんは何処から来たの？」

「ここの近くだよ。」

そういえば、この街の名前を知らない事に今ごろ気づく。

「へー、寮の部屋は決まったの？」

「寮が有るってのは聞いたけど、まだ部屋は知らない。」

肩をすくめるトシキ。

「そうなんだー」

「失礼しますわ」

そう言って、腰まで伸びた金髪の少女が郡を割って、トシキの前に来た。

腰に手を当て、トシキを見下す様に見る。
それに少しムッとする。

「よろしくて？」

「…何？」

金髪で、白人特有の青い瞳が少し吊り上がっている。如何にも、今の世界の女性の雰囲気をかもし出している。
ＩＳの所為で女性はかなり優遇されている。その優遇のせいで、女子＝偉いというのが当たり前としている女性も珍しくない。
そして、トシキは自分の立場を鼻にかけてふんぞり返る連中が、男だろうと女だろうと心底嫌っていた。

「ってか、誰？」

「なっ！？」

トシキの発した言葉に驚き、体を震わせる。

「この私を知らない？イギリス代表候補生である、セシリア・オルコットを？首席入学者である私を！」

トシキの反応に腹を立てたセシリアが声をあげる。

「首席？なんだそれ？」

トシキが首をかしげる。

「私が入試で唯一人、教官を倒したエリートですから」

と、自慢気に胸を張る。

思ったより胸があるな…

セシリアの胸を見てそう思い、ふと気づく。

「そういや、オレも昨日やって倒したよ、教官。」

「なっ！！」

トシキの言葉に驚くセシリア。

その時、チャイムが教室に響く。

一斉に生徒たちが自分の教室へと戻っていく。

「くっ！」

トシキを睨み付けて、しぶしぶ席に戻っていく。

「何なんだよ…、一体」

はぁ、とため息をつき頬杖をつく。

・・・・・・・・・・・・

「では授業の前に、来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

教壇に立つ千冬が教科書を机に置き、生徒たちを見る。ふとトシキと目が合ったが、顔をそらす。

「ん？」

それが気になり、頬杖をやめて千冬の方に向き直る。

「はーい！奥村くんが良いと思います！！」

「オレ！？」

思わずその推薦者の方を見て、嫌そうな顔をする。

いやいや、めんどくさいよ。そんなことやりたくねー！

進んで生徒会等、めんどそうな事をやろうとはしない。嫌すぎてしょうがない。

しかもあろうことか、他の生徒たちも賛成しはじめる。

「お待ちなさい！納得できませんわ！！」

セシリアが勢い良く立ち上がる。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんて恥さらしですわ！私セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

腰に手を当てて言い放つ。

クラス代表をやってくれるのは良いが、どうも腹がたつんだよなぁ…

やれやれ、と再び頬杖をつき傍観する。

「クラス代表は実力トップがなるべき。それはわたくしですわ！」

と、胸を張る。

「あれ？でも奥村くんも教官倒したって言ってたよね？」

一人の生徒が言う。

「あっ！」

さっき話しちゃったんだ、と慌てる。

千冬がこっちを見て一瞬微笑み、すぐいつもの表情に戻る。

「そうでしたわ！」

思い出したようにトシキの方を向くセシリア。

「本当に教官を倒したって言うの！？一体どなたを倒したとうのですか！」

ビシッ、と擬音が聞こえてきそうな勢いでトシキを指差す。

「…とりあえず落ち着け？」

苦笑いしてなだめる。

「これが落ち着いていられますか！！」

セシリアがトシキのもとへと向かってきた。

「わざわざこんな島国にまで来たうえに極東の猿とくらべられるなんて…、このような屈辱耐えられませんわ！！」

と、拳を握り締めるセシリア。

「…イギリスも島国じゃん」

「くっ！」

「落ち着け、馬鹿ども」

いつの間にか二人の近くに来ていた千冬の出席簿が火を吹く。

「いたっ」「あたっ」

二人の頭に出席簿が一瞬で降り下ろされる。

「よし、クラス代表を決める勝負を二人にしてもらおう。日時は明後日。放課後第三アリーナで行う。それぞれ用意しておけ」

「えー？オレやりたくいんですけど…」

と、嫌そうな顔をするトシキ。

「ほぅ。では、お前を推薦して賛成した者達の意見を無下に扱うのか？」

千冬が睨み付ける。

「うっ…」

苦い顔をするトシキ。
その言い方はズルい…

「…はぁ、やればいいんでしょ。やれば」

ため息をつき勝負を了承する。

「と、いうわけで勝負をする事になったからには、悪いけど手は抜かないよ」

トシキがじっとセシリアを見る。

「…よ、よろしくてよ。」

少したじろき、うなずく。

「よし。では準備しておくように」

「「はい」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「とは言ったものの、どーすっかなぁ…」

ため息をつき、教科書に目を通す。

「どうかしましたか？マスター」

脳内に声が響く。

「あぁ、明後日の勝負をどうしようかと思ってね」

「一次移行も済んでますし、何とかなると思いますが？」

「確かに機体の性能と身体能力では負ける気しないけど、経験の差をどう埋めようか、と」

ページを捲る。

「心配しすぎです。あなたは織斑千冬教官に勝ったのですよ？二回しかＩＳを使ってないのに普通はそんなことはできないですよ。」

「…そだな。まぁ、何とかなるか」

教科書を閉じて欠伸をする。

ふと、教室のドアが開く。

「よかった。まだ教室にいたんですね。」

トシキの元へ眼鏡をかけた女性が近寄ってくる。

「山田先生、どうかしたんですか？」

眼鏡をかけた巨乳の先生。

「寮の部屋が決まったので鍵を持ってきたんです。」

山田先生が鍵を持った手を出す。
それを受けとる。

「今日からでも使えますがどうしますか?」

「オレ荷物特に無いんで今日から使います。」

「そうですか。では、その番号の部屋があなたの部屋ですから、間違えないようにお願いしますね。」

「はーい。」

・・・・・・・・・・・・

「えーと、１０２０。ここか」

自分の部屋の扉を開ける。

「おぉ!すげぇ!!なんだこの部屋は!!」

部屋の広さに驚く。
二つベッドが置かれ、間に二段の引き出しとそのうえにヘッドランプが置かれている。
勉強机も壁際にひとつずつ置かれている。タンスも二つ。
扉が二つ。一つはトイレでもう一つは風呂場のようだ。

「はぁ…。いきなりめんどうな事になったな」

クラス代表を決める勝負。
クラスの中で男一人。そのため大人しくしとこう、目立たない様にと思っていた。なのに、いきなり代表をかけて争うという目立ちすぎる事を起こしてしまった。

「なぁ、オレは一次移行したＩＳの力をどれぐらい引き出せてるんだ？」

腕のアームバンドを見る。

「マスターはまだ４割程ですね。」

「そっかぁ…、４割かぁ。せめて６割は引き出せないとなぁ」

手を組みそのうえに頭をのせる。

「大丈夫ですよ。すぐ全力を引き出せますから。」

「…そうだな。」

微笑むトシキ。

転校初日のいざこざ（後書き）

こんにちわ
執筆してて思ったんですが、やはり原作を読むべきでした。
はじめの方は原作と同じような展開ですが、少しずつ自分のオリジナルな展開になっていく予定です。

シャルとラウラ登場決定しました。

代表をかけた勝負

トシキがＩＳ学園に転入して2日経った。
今日はクラス代表を決める勝負をする日。イギリス代表候補生セシリア・オルコットにいちゃもんを付けられ、やむ無く勝負をすることになった。

「あーぁ、こんなつもりじゃなかったんだけどなぁ…」

控え室のベンチに座って、モニターに映るアリーナを見上げる。
ＩＳ関連の行事は基本このアリーナで行われる。クラス対抗戦もここで行われる。
だが、今は観客もいない静かなアリーナ。
その静寂も後少しで戦闘が始まり騒がしくなるだろう。

「じゃあ、どういうつもりだったんだ？」

後ろから千冬が声をかけてきた。その隣に山田先生もいる。

「目立つことは避けようと思ってたんですけどね…」

苦笑いし頬をかく。

「まぁ女子ばっかの学園に男子一人で目立たないわけがないんですけどね」

ため息をつき自分のＩＳを展開する。

「だが、この学園に来なかったらもっと目立って苦労することにな

ってただろうな。ＩＳを動かせる唯一の男だからな。」

ふっと笑う千冬。

「…その点は感謝してますよ」

微笑んで二人の方を向く。

ＩＳ学園に保護されてなければ、ＩＳを動かせる男ということで世界中の企業から狙われモルモットにされていただろう。

「なら保護した私の言うとおりにするんだな。」

腕組をする千冬。

隣で山田先生が苦笑いしている。

「今はそうしますが、オレをモルモットにする様なら…」

二人の方に振り返りジッと見つめる。

「…」

それに山田先生は生唾を飲み、千冬はトシキの目を見る。

「後、あなた達が間違ってると思ったらオレはあなた達の敵になります。」

「うむいいぞ。私達が間違ってると思ったら遠慮せずにな。」

微笑みモニターの方を目配せする。

「？」

モニターの方を向くと既にアリーナにＩＳを展開したセシリアがいた。

「今は味方ですから行ってきます」

微笑みアリーナの方へと歩いていく。

「行ってこい」

その後ろ姿を二人が見送る。

「本気、でしたよね？」

山田先生が不安げに聞く。

「あぁ。自分の力を理解し、周りの影響を思慮。その力を悪用しようものなら迷わず銃を我々に向けてくる。」

腕組みをしたまま微笑む千冬。

「あわわ、そうなったら彼の腕は確実に大きな障害にしかなりませんよ！」

慌て出す山田先生。トシキの転入試験の時、観測室から試験を見ていた教官の一人だったため良く覚えている。

「だろうな。うちの教官達よりも遥かに強くなるのは時間の問題だ。」

「だが、私はあいつの味方だ。山田君もそうだろう？」

微笑み山田先生を見る。

「私もっていうかＩＳ学園は彼の味方ですよ！」

と、強く答える山田先生。

データはとるが、それを悪用するつもりは更々ない。そんなことをして何処かの企業に漏れれば軍事力を持って排除されかねない。

「身内が誰もいないアイツを我々が救ってやらねばな」

「？」

小さく呟いた千冬の言葉を山田先生は聞き取れず首をかしげた。

・・・・・・・・・・・・

「逃げずに来ましたの？」

蒼い装甲に身を包みレーザーライフルを握って宙に浮いている。

「約束は守る。ちゃんと戦ってやるさ。」

そう言ってセシリアの方を見る。

「敵ＩＳブルー・ティアーズ。セシリア・オルコット専用機。中距離射撃型」

脳内にセシリアのデータが送られてくる。

「中距離射撃型…、近接武器よりも射撃重視って感じだな。」

「あなた！それはまさか専用機ですの？」

セシリアもトシキのデータを確認しようとしたが全て不明。驚きトシキに聞く。

「そうだよ。オレ専用のＩＳ、蜃気楼、だ。」

そう言って、観測室の方を見上げる。
そこには予想通り、千冬と山田先生がいた。

トシキがこっちを見てることに気づいて千冬が頷く。

「？これは…」

視界に表示された情報を確認する。

「敵ＩＳ蜃気楼。奥村俊貴専用ＩＳ。全距離対応型」

「全距離対応…、それに機動力が普通じゃない代わりに防御面が薄い。」

千冬から送られてきたデータを確認する。

「射撃特化の私にそんな機体で挑もうなんて笑止ですわ」

腰に手を当てるお決まりのポーズをとる。

「勝ったきになるのはまだ早いぞ。まだ勝負は始まってない。」

軽く受け流して微笑むトシキ。

「いいえ、確定ですわ！」

セシリアのレーザーライフル‘スターライトｍｋ?’からトシキに向けてレーザーが放たれた。

背中と推進翼のスラスターからエネルギーが放出され上昇しレーザーをあっさり回避される。

「は、速い！」

トシキをロックしようとするが、その機動力で捉えきれない。

「それならっ！！」

セシリアが４基の射撃ビットを展開しトシキの周りを囲う。

「自動制御の射撃ビット…」

自分の周りをヒュンヒュン飛び回るビットを確認する。

「ちょっと様子見…」

と、後退する。

その後をついてビットが動く。

「そこっー！」

セシリアのスターライトｍｋ?がレーザーを放つ。

「！」

それを予想してたのかあっさりとかわされる。

「くっ！」

ビットから一斉にレーザーが放たれる。

「…」

が、そのレーザーは誰もいない場所を通りすぎる。

「何で一斉に放たないんだ?」

セシリアの真上で顎に手を当てるトシキ。

「！いつの間に…」

それに気づいたセシリアがトシキを見上げロックする。

そして、レーザーが放たれる。

「そうか、しないんじゃなくてできないのか。制御に集中しないといけないから」

そう言って、再びレーザーをかわしセシリアと同じ高度に位置する。

それを見たセシリアがビットを展開する。

「これうっとうしいし破壊しようかな」

死角から放たれるレーザーをかわしつつ、腰から二丁のハンドガンを取り出す。

「そんな小さな銃で何ができますの！！」

ビットの攻撃を更に激しくする。

「できるさ。」

トシキがハンドガンから一発ずつ放つ。

その弾丸は二基のビットを破壊する。

「なっ！？」

驚き動きが止まる。

その隙を逃さずトシキは瞬間加速でセシリアへと突っ込む。

背中の推進翼が二本から四本に増え、その分更にスピードが上がる。

「くっ！」

更に上がったスピードに驚きつつも、腰に装備された二基のビットがトシキに向く。

「まだビットが有ったのか！」

それから発射されたミサイルをロック、銃で撃ち落とす。

「ミサイルを撃ち落とした！？」

目の前に広がる爆煙から距離を開けようと後退する。

「逃がすか！」

煙を裂いて実弾が二発、シールドバリアーに当たる。

「なっ！」

爆煙の中からトシキが再び突っ込んでくる。

「はあぁ！」

トシキの手には銃ではなく、エネルギー刃の刀が握られている。

「うっ！」

避けられない

セシリアが目をつむる。

トシキが袈裟方向からセシリアのシールドバリアーを切り裂いた。

そして、ビーッとスピーカーから試合終了の合図が鳴り響く。

「ふぅ」

刀と手の装甲を外す。

「何だ、自分でエリートだって言うわけだ。強いじゃん」

そう言って微笑むトシキ。

「え？」

それを呆然と見るセシリア。

それだけ言って、トシキは控え室の方へと向かっていった。

「…」

それをボーッと見るセシリア。

「すごいですねー。今日あわせて三回目とは思えない動きですよ。」

山田先生が笑顔で言う。

「確かにな。だが、まだまだだ。無駄な動きが多いし、何よりＩＳの力を全部引き出せてない。」

腕組をしてリプレイを見る。

その映像は、推進翼が二本から四本になった瞬間のもの。

「私の時はあれにすらなってなかったからな。」

「そうですね…、でも織斑先生も専用機なら絶対負けなかったですよね。」

「まぁな。あんなヒヨッコには負けん。だが、苦戦はするだろうな。予想外の動きをするから、気を抜いたら負ける。山田先生も足元をすくわれかねんぞ。」

ふっといたずらっぽく笑う千冬。

「むぅ…、気をつけます」

しゅんとしてしまう山田先生。

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

クラス代表を決める勝負を終えたトシキは部屋に戻りシャワーを浴びていた。

「ふぅ、すっきりしたー」

髪を拭きながら風呂場から出てきたトシキ。

「…きゃぁぁ！？」

「…は？」

髪を拭くタオルで前が見えておらずタオルをどかして前を見る。

そこには制服を着てベッドに腰を下ろしたセシリアがいた。手で目を覆っている。

まさか…

「あ…」

油断していた。相部屋でも同居人がいないため完全に自分の部屋の様にしていた。
要するに、トシキは全裸で出てきてしまったため、何故か部屋にいたセシリアに見られてしまっていた。

「あわわ!?ちょ、後ろ向いてて。すぐ着替えるから。」

タオルで前を隠し前を向いたままタンスへと後退する。
そのまま引き出しを開けてボクサーパンツ風の下着をはき、ジャージをはく。

「もういいですか?」

「ん?あ、あぁい…いよ」

トシキが了承する前にセシリアは振り向いた。
…まさか、見てた?

上は着てないが下を履いた状況で振り向いてきた。そう思ったが、まぁないかと頬をかく。

「…」

(ほっ…、バレてなかった。)

トシキの様子を見て安心する。指の隙間からも、後ろを向いてから横目でチラッと見ていた。

（思ったより筋肉質…）

トシキの外見はパッと見なよっちそうだが、体は割と筋肉質で俗に言う細マッチョ。ムキムキではないが、普通よりは大分筋肉がついている。

「…」

それを思い出しボーッと見つめるセシリア。

「ねぇ、何か用が有るから来たんじゃないの？」

ボーッと見てくるセシリアに声をかける。
心なしか顔が赤いような…？み、見られたから？？
あながち間違ってはないが、正解とも言えないトシキの思考。残念な性格。

「あ、そうでした。」

我に返ったセシリアが立ち上がる。トシキの目をジッと見る。

「酷い事を言ってごめんなさい。」

頭を深々と下げるセシリア。

「ちょ、良いから！頭上げてよ！！オレそんな気にしてないし」

慌てるトシキ。

「でも…」

お辞儀をしたまま顔をトシキに向ける。上目使いでトシキを見上げている。

「良いから！」

セシリアの肩を掴んで姿勢を戻す。

「…」

不安げにトシキを見る。

「オレは気にしてないからいいよ。こういう社会だからしょうがないし、それにちゃんと謝りに来てくれた。」

微笑むトシキ。
その笑顔に思わずドキッとする。

「だからオレはもう何とも思ってない。だから気にすんな」

セシリアの頭に軽く手を置く。

（あ…温かい）

その手の心地よさにトロンとし始めるセシリア。
が、手は離れていった。

「で、用件はそれだけ？」

「はい、ありがとうございます。」

名残惜しそうにトシキの手を見るが、余り長居しても悪いとドアの方に向かう。

「では、失礼しますわ」

軽く頭を下げるセシリア。

「あぁ、また明日。」

手を振って微笑み見送る。
それに笑顔で答えて部屋から出ていったセシリア。

閉めたドアにもたれる。

「何か好きになっちゃった…かも」

上を向きトシキの顔を思い出す。胸の鼓動が速くなるのを感じた。

「知りたい…もっと彼のことを…」

胸に手を当てるセシリア。

代表をかけた勝負（後書き）

こんばんわ。

今回は原作のセシリア戦と同じ様な位置でした。

まだオリジナルのＩＳを出してはいませんが、まだしばらくでません。

後、良かったらトシキのＩＳ、蜃気楼、の武器名を考えているのですが、なにか良い名前が有ったらお手数ですが、教えて頂けると嬉しいです。

オリジナルのＩＳもあるよー、って方も教えて頂けるとなお嬉しいです。

では、これからもよろしくお願いいたします。

二組の代表生

クラス代表を決める勝負があった翌日。
初等科一組の黒板にはクラス代表「奥村俊貴」と書かれている。
当の本人は頬杖をつき苦笑いしている。
負ける気はなかったがクラス代表というめんどくさい役職についてしまった。
クラスメイト達はワーっと声をあげ拍手している。
それに笑顔を引きつらせるトシキ。
「では、奥村くんは一週間後のクラス対抗戦の準備もしといてくださいね。」
笑顔で言う山田先生。
「…はい」
ため息をつくトシキ。
「大丈夫ですわ！このセシリア・オルコットが訓練をお手伝いいたします！！」
腰に手を当ててトシキの方を見る。
「あ、それは助かるよ。」

微笑んでセシリアを見る。
一人でやるよりも二人のが効率が良い。それに、専用機持ちのセシリアなら訓練機を借りずとも練習ができる。

「私の代わりにクラス代表になったんです。トシキさんに不様な格好はさせませんわ。」

それにドキッとしながら髪を後ろに流すセシリア。

「そうか、ありがとう。」

「良し。では授業を始める」

千冬の一言で教室の雰囲気が授業モードへと変わる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

グランドの端に集まった一組の生徒達。その生徒達の前に千冬と山田先生。更にその前にＩＳを展開するトシキとセシリア。

「では二人とも武装を展開しろ」

千冬が指示を出す。

その指示通り二人は刀とスターライトｍｋ?を展開する。

「遅い。もっと速く出せるようになれ」

千冬がトシキを見て言う。

「はい」

もっと速くかー…、と頭をかく。ちなみに０．８秒で出した。

「オルコットは流石だが、ポーズはやめろ。」

嬉しそうな顔をした後に表情が固まる。

「ですが私のイメージをまとめるために必要な…」

「直せ」

セシリアの言い分をギロッと睨みつけ阻む。

「はい…」

しゅんと落ち込むセシリア。

セシリアも千冬さんには逆らえないかやっぱり…

そう思いながら頬をかく。

「次はＩＳの基本的な飛行操縦を実演してもらう。その場から急上昇しろ」

「はい！」

二人一緒に空へとかけ上がっていく。

「ふぅ」

ある程度の高さで止まり千冬の方を向く。

「良し。次は急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表から十センチ」

「はい！」

セシリアが先に急降下、地表十センチジャストで停止した。

「おぉー、流石だな。セシリアは」

普通に感心するトシキ。その音声はＩＳを通してセシリアに聞こえていた。

「オレも行くか」

千冬の前に急降下。

「急停止…！」

地面が近づいてきて大体の所で停止。その間は五センチ。

「ふむ、なかなか良いな。」

ふっと笑う千冬。

「…ありがとうございます。」

まさか誉められるとは思っておらず呆気にとられる。その笑顔が思

った以上に綺麗で固まるトシキ。

「…なんだ？」

訝しげにトシキの方を見る千冬。ポカーンとした表情で千冬を見ていたため無理もない。

「あ、いや何でもないです」

我に返ったトシキがあわてふためく。

「変なヤツだな」

ふっと笑う千冬。

「むぅ…」

その様子を見て唸るセシリア。
そしてグランドに授業終了のチャイムが響く。
・・・・・・・・・・・・・・

昼の放課。
昼御飯を食堂で終えて教室に戻ってきたトシキ。食堂でご飯を食べていても同じクラスの子や違うクラスの子達が群がってくる。ＩＳを使える男として興味があるため無理はない。

「放課でも疲れるって…」

安らぎがねぇなぁ、とため息をつく。
ため息が増えた気がするが気にしない。

だが、女子と話してわかったことも色々ある。

まず、この学園は17から24歳ぐらいの子が殆ど。
千冬に憧れて入ってくる子も少なくない。
等、思ったより情報が入ってくるため嫌いではない。

「さーて、今からどうすっかなぁ」

重心を後ろにかけて椅子を前後に動かす。

ボーッとしてると自分の席に座っていたセシリアがトシキの方を見て寄ってくる。

昼飯の時、トシキと一緒に食べようと探したが既に食堂に行った後のようで姿が見えず、諦めて昼飯を食べた。
しばらくして教室に戻ってきたトシキにいつ話しかけようかタイミングを計っていた。

すると暇そうに椅子で遊んでいる?トシキを見て話しかけに行こうとした。

「トシキさん」

「んー?」

顔だけセシリアに向けて椅子を前後に動かすトシキ。

何か言おうとしたセシリアを遮りドアが勢いよく開けられた。

「一組の代表って誰？」

「あ？オレだけど」

ドアの前に立つ声の主に返事をするトシキ。
邪魔をされたとその声の主を睨みつけるセシリア。

「へー。あんたがそうなんだ。」

二人の元へと歩いてくる女子生徒。髪をツインテールにした可愛らしい見た目で制服を改造し肩が露出している。

「オレに何か用？」

「いや、用って程でもないけど対戦相手が誰か気になったから来たの」

自信たっぷりの様子。

「対戦相手？じゃあ君が二組の代表？」

相手が二組というのは千冬から聞いていた。

「そ。私が二組の代表、凰　鈴音。よろしくね」

トシキに手を出し握手を求める。

「あぁ、よろしく。奥村俊貴だ。」

その手を取り握手するトシキ。

「ねぇ、あんたも専用機持ってるんでしょ？」

「持ってるよ。これ」

アームバンドを鈴に見せる。

「じゃあ専用機同士の戦いかぁ。でも勝つのは私だけどね」

自信たっぷりの笑顔を二人に見せ教室から走り去った。

「な、なんですの！？今の方は！！」

セシリアが急に怒りだした。

「凰　鈴音っていってたよ。言いにくいな…」

「そうじゃなくて！いきなり現れて宣戦布告して帰っていくなんて！！」

ハンカチを渡したらキーッと言いながら口で引っ張りそうだ。

「まぁまぁ気にすんなって」

なだめるトシキ。

「それに勝つのはオレだ」

ニッと微笑むトシキ。

「！…トシキさん」

その言葉でトシキが頬もしく見える。

「さっすが奥村くん！奥村くんが勝つとクラスみんなが幸せだからねー！」

今の会話を聞いていたクラスメートが会話に混ざる。

「そうそう！なんたって優勝商品は学食デザートの半年フリーパス券だからね！」

「約束してくれたもんね！優勝してフリーパスくれるって」

「あ…あぁ」

好き勝手言ってくれるぜ。まぁ約束したからには優勝して喜んでもらいたいし。

「そんな約束いつしたんですの！？」

その事を知らないセシリアが声をあげる。

「え？さっき食堂で…」

その剣幕に顔を引きつらせる。

「くうぅ…！やはり食堂でしたか……！！」

拳を握り体を震わせるセシリア。

「まぁきっと勝てるよ！奥村くん」

クラスメートがトシキを激励する。

「あぁ、フリーパス手にいれてみせるよ！」

クラスメート達に微笑むトシキ。

おぉー、とクラスメート達が声をあげる。

「…惚れたら許しませんよ？」

セシリアが怒気を放ちながらクラスメートを牽制する。少しドキッとした生徒達は笑顔を引きつらせる。

「？」

セシリアの言葉を聞いてなかったトシキは首をかしげる。

二組の代表生（後書き）

こんばんわ。
試行錯誤しながらもなんとか書いてます。

クラス対抗戦

「ふぅ、ちょっと疲れたな。セシリア休憩にしよう。」

第3アリーナの宙に浮いたトシキがオープン・チャネルで更に上空で浮いているセシリアに話しかける。

「そうですわね。エネルギーも無くなってきましたしここら辺で今日は止めときましょう。」

残りエネルギーを確認してうなずくセシリア。

二人はクラス対抗戦に向けての訓練を行っていた。経験が圧倒的に少ないトシキの相手は、トシキより遥かに経験を積んだ専用機持ちの凰　鈴音。中国の代表候補生で戦闘能力が高く、動体視力も良いらしい。ちなみに食堂で得た情報（鈴音の事を二組の子達に聞いたら話してくれた）

「よっと」

地面に着地してとなりに降りてきたセシリアを見る。

「今日もありがとな」

微笑んでＩＳを解除する。

「好きでやってますから気にしないでください」

セシリアも微笑みＩＳを外す。

「そっか」

微笑み更衣室の方に向かっていく。

「…気づかれなかった」

しゅんとするセシリア。言った事がトシキにはちゃんと伝わってなかった。

「？」

何故か落ち込んだセシリアを不思議そうに見るトシキ。

・・・・・・・・・・

シャワーを浴びてさっぱりしたトシキはベッドで横になり天井をボーッと見る。

「どうかしましたか？」

蚤気楼の声が部屋に響く。

「いや特にやることないなぁーと思って」

腕の黒いアームバンドを視界にもってくる。

「そうですか。念のため対抗戦に向けて教科書を読んどいた方が良いのでは？」

「…そだな」

特にやることもないし良いか、と机に向かう。

「奥村くんいるー？」

コンコンとドアをノックする音の後に声がした。

「はーい、今開けます」

返事をしてドアに向かう。

「ども。今時間大丈夫？」

ドアを開けるとクラスメートが二人立っていた。

「大丈夫だけど、何？」

「ちょっとついてきて！」

有無を言う前にトシキの腕を掴み部屋から引っ張り引きずる二人。

「？…？」

なんなんだ一体、と思いながら黙って引きずられていくトシキ。

・・・・・・・・・・

「奥村くん。クラス代表決定オメデトー！！」

というわけでパーティーが始まった。

一組の生徒達が集まって準備していたようだ。クラッカーまで持ち

出している生徒がいる。

なるほどね

引きずり出された理由がわかった。

クラスメート達は学校終わりと言うこともあり皆私服。

やっぱり女子ばっかだな、と改めて思う。

「対抗戦頑張ってね！」「わからないことあれば何でも聞いてね！！」

等々声をかけてくれる。ちらほら顔の赤い生徒達もいる。

お酒…じゃないよな？

「ありがとう…」

渡された紙コップの中身をチラッと見てから、クラスメート達に微笑む。

「…人気者ですね。」

セシリアが横目で睨んでくる。

「そう？」

好奇心だろ、と思いながらコップの中身を飲む。

「う…、サイダー…」

透明で泡があるから炭酸だとは思ってたがサイダーだとは思ってなかった。

よくよく思ったら同じクラスでも未成年の子もいるしお酒は出ないか…

内心ホッとするが、炭酸も得意ではないため微妙。お茶とかオレンジジュース等炭酸の無いものか、微炭酸の物がトシキは好きだった。

「ふん」

「…」

なんで機嫌悪いんだ…、と隣でコップのジュースを飲むセシリアを見る。

「あっいたー！奥村くん！」

「？」

後ろで声がしたため振り向く。
そこには眼鏡をかけた生徒がこっちに向かってきていた。制服のリボンが黄色だから中等科の人だろう。首にはカメラを提げている。

「今話題の新入生君のインタビューに来ました！新聞部副部長の中等科、黛薫子です。これ名刺。よろしくー！」

自己紹介し名刺をトシキには渡す。

「ども」

名刺を受け取りそれを見る。

「じゃあさっそく！クラス代表になった感想とか聞かせてくれる？」

笑顔でボイスレコーダーをトシキに向ける。

「皆のために頑張ります」

デザート半年分がかかっている。そこは女子にとって重要だろう。

「…それだけ？もっとコメント頂戴よー！」

ブーブー文句を言う黛。

「えー？そんなこと言われても…、邪魔するヤツはぶっ飛ばすぜ！みたいな？」

「うーん、まあそこは適当に捏造すらからいいや」

捏造するんなら今の言わなくても良かったじゃん！オレ恥ずかしい思いしただけだし！！

いかにもガーンという擬音が聞こえてきそうな表情。

は、恥ずかしい…

「セシリアちゃんもコメント頂戴ー！」

俊貴からセシリアへとターゲットを変更した黛。

「え?あまり好きではないですがしかたないですね…」

満更でも無さそうな顔をして髪をかくセシリア。

「では私が…」

「…長くなりそうだからいいや。奥村くんに惚れたからって理由にしとくよ」

「なっ!何を…!」

黛の発言に真っ赤になるセシリア。

「はは、まさか…」

トシキが苦笑いする。

「えーそかなぁ?」

黛が不思議そうにトシキを見る。

「そっそうですわ!何をもってそんなことを!!」

黛はともかく何故セシリアが怒る…

全く理解できないお馬鹿さんのトシキ。

「まぁ質問はこの辺で、最後に二人の写真撮らせてよ。注目の専用機持ちのツーショット!」

「あ、握手してね。絵になるから」

そういってトシキとセシリアの手を握らせる。

「あっ…」

それに頬を赤らめるセシリア。

「それじゃあ、3、2、1…」

カシャ、とカメラから音がする。

「…」

コイツら…できる！

いつのまにか、二人のツーショットの筈が、二人の周りにクラスメート全員が入り、写真に写り込んでいた。

「ちょ…ちょっと！あなたたちねえ！！」

それに気づいセシリアが怒鳴る。

「まーまー、セシリアだけ抜け駆けはないでしょー。クラスの思い出になっていいじゃん！」

「それに、放課後二人っきりで練習してるんでしょ？」

にしし、と笑うクラスメート達。

「う…」

セシリアがその言い分に黙る。

「欲しかった物ではないけど良い絵が撮れたよ。ありがと奥村くん！」

「いえ…」

その写真を欲しがってクラスメート達が黛に群がる。
それを苦笑いして見るトシキ。
そしてまだまだドンチャン騒ぎは続く。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

特に問題もなく訓練をしながら日々をすごし、遂にクラス対抗戦の日がきた。

「うわ、すげぇ満員だ…」

控え室からモニターでアリーナを見たトシキが驚く。まぁ学園の行事だし人が多いのは当然と言えば当然。それに、唯一ＩＳを使える男子が出場すると言うこともある。

「それだけ注目されているのですわ。ちなみに会場に入りきらなかった人達は校舎内のモニターで観戦してるんですよ。」

「プレッシャーかけるなよ…」

トシキがため息をつく。
クスクスと笑うセシリア。

「大丈夫ですわ。特訓の成果を披露してくださいませ」

片目をつむりウィンクするセシリア。

「頑張ってください！！」

拳を握り励ますセシリア。

「セシリア…」

それに驚く。が、フッと笑うトシキ。

「あぁ、行ってくるよ！」

そういって、蜃気楼を展開しアリーナに向かっていった。

・・・・・・・・・・・・

『1組　奥村俊貴　　二組　凰　鈴音』

アナウンスがアリーナに響く。

『両者　規定の位置まで移動してください』

「あら逃げなかったのね」

俊貴を指差す鈴音。

「当然！逃げる訳ないだろ」

右手に刀を出現させる。

「ふーん、じゃあ容赦はしない。この甲龍で叩きのめしてあげるわ」

双天牙月をトシキに向ける。

『それでは両者　試合開始！！』

合図とともにトシキへと双天牙月を振り下ろす。

「くっ！」

それを刀で受け止める。

二人同時に距離をとる。

「ふぅん、やるじゃない」

嬉しそうにする鈴音。

「まぁ、ただではやられんよ」

刀を構え直す。

「蜃気楼、鈴音のＩＳは近接特化型か？」

蜃気楼へと語りかける。

「はい。甲龍は近接特化型。特殊装備は有りませんが、燃費と安定

性が第一に設計された物です。」

脳内に声が届く。

「他の武装はわからんけど、とにかく攻める！攻撃あるのみだ！！」

左手にハンドガンを装備し、左右にぶれながら間合いを詰める。

「なっ！？くぅ…」

そのスピードにトシキが何人もいるように見え、更にその状態から銃弾が飛んでくる。
それを双天牙月で何とか弾く。

「後ろがら空き！」

さっき目の前に何人もいたはずがいつの間にか後ろに現れていたトシキ。

「なっ！？」

背中をトシキに蹴られ体勢を崩す。

「よっと」

「！？」

鈴音の背中に乗っかり思いきり地面へと蹴り落とす。

鈴音はそのままの体勢で地面に激突した。

「この程度じゃまだ倒せないか」

空中で鈴音を見下ろす。

「やってくれたわねー…」

鈴音が立ち上がりトシキを見上げる。

そこへアリーナの天井を突き破って何かが二人の間に落ちてきた。

「な、なんだ？」

煙が上がり姿はよく見えないが立ち上がった様なのはわかった。

「試合は中止！全校生徒は直ちに避難せよ！！」

千冬の声と緊急事態のエマージェンシー音が響く。

観客席にいた生徒達が悲鳴をあげて慌てて逃げ出す。

「な、なんだあれは…」

煙が晴れてきて姿が見え始めた。

灰色の全身装甲。手には何も持ってないが、量子化された武装を持っているだろう。

警戒しつつ鈴音の隣へ移動する。

「怪我は？」

「あんたに受けた傷ぐらいよ」

チラッとトシキの方を見て答える鈴音。

「そうか…」

頬をかき苦笑いする。

「敵ＩＳ不明。特殊装備不明。型番なし」

頭に敵ＩＳの情報とも言えない情報が聞こえる。

「アリーナのシールドバリアは…、展開されたか」

生徒の避難が終了してアリーナにトシキと鈴音を含めてシールドバリアか展開される。

「先生達が着くまで時間を稼いでくれ！奥村！！」

スピーカーから千冬のの声が響く。

「了解！」

刀を量子化し、腰からハンドガンを取り出す。

「無茶よ！相手は何もわかってない不明なのよ！？」

鈴音が止める。千冬がトシキに時間稼ぎを頼む意味が全くわかって

ない鈴音。

「まぁ何とかなるよ。それに人生はわかんない事だらけ。壁なんていくらでも存在するぞ。」

ヒラヒラと手を振って鈴音に微笑んでから、アンノウンの方を見るトシキ。

「ちょっと！」

瞬間加速で一気にアンノウンへと突っ込んでいく。その風圧を受けて怯む鈴音。

距離を適度に開けつつ二挺のハンドガンから銃弾を放つ。

「なっ！？」

その装甲は銃弾を簡単に弾きトシキへと突進する。

「ちっ…」

急上昇してそれをかわしハンドガンの弾層を取りだし別の弾層に切り替える。実弾からビームへと替える。

方向展開したアンノウンがトシキへと手を伸ばして再び突進してくる。

「そんなもの！！」

瞬間加速でアンノウンの腹下へと潜り込み腹へとビームを二発ぶち

こむ。

アンノウンの体を貫き二本のビームが上へと突き抜ける。

トシキのハンドガンは弾層を切り替えることで、実弾とビームを使うことができる。

「コアを破壊しないとダメか…」

ケーブルが切断された様で電気が漏れている。

「これじゃあ威力が低すぎる。」

保存されている武装の一つ、俗に言うビームライフルを取り出す。

ビームは装甲を貫いたため、実弾よりはいけるはず。

「喰らえ！」

アンノウンをロック、ビームライフルを放つ。

「…」

ビームを横に移動してかわすアンノウン。

当たるとダメージがでかいからか？

「敵ＩＳ腹部にエネルギー供給確認！」

「…やばい！」

トシキと直線上に位置する鈴音に気づき瞬間加速で鈴音に向かう。

「ひゃっ！」

急に体が浮き驚く鈴音。トシキが鈴音を抱えて急上昇していた。

鈴音がいた場所にビームが通りすぎアリーナの壁を破壊する。

「まだエネルギーは？」

鈴音を隣に浮かせる。

「あるよ。半分ほど」

「じゃあ、アイツの攻撃に注意してて」

鈴音の前に立つトシキ。

「冗談じゃないわ！あたしも手伝う！！」

トシキの隣に動く鈴音。

「でも…」

「…わかったよ。」

言うことを聞かなそうだと判断しやむなく頷く。

「私の唯一の射撃、龍砲で援護するわ。」

肩の非固定浮遊部位を指差す。

「わかった。」

ビームライフルと刀を握り締める。

「そっちに合わせるから自由に動いて」

トシキが推進翼を四本に展開する。

「…わかった」

止める前にアンノウンへと向かっていったトシキに呆れて言う。

（あたしの勝手に動いて合わせれるわけないのに…）

そう思いながら龍砲の角度をアンノウンに合わせる。

「いつでもどうぞー」

オープン・チャネルでトシキが言う。その間にもトシキはアンノウンに通り抜け様に刀で斬りつけていく。

だがその攻撃を腕で防ぐ。

「くっ！当たっても知らないわよ！！」

狙いをつけている間にもトシキはアンノウンへと接近して攻撃をしている。

龍砲を二発放つ。

「！」

見えない弾丸がトシキの背中に向かっていく。

が、弾丸はトシキに当たらずにアンノウンに当たった。

「ほい！」

龍砲を直撃したアンノウンの吹き飛んだ先に回り込んでいたトシキがアンノウンを蹴りあげる。

「そこっ！」

鈴音がすかさず龍砲を撃ち抜く。

アンノウンの装甲の一部を吹き飛ばし後退する。

「逃がすか！」

アンノウンの前に先回りし刀を振り下ろす。

トシキの刀は綺麗にアンノウンを真っ二つに斬り裂いた。

「終わったかな」

地面に落ちたアンノウンを見てトシキもゆっくり地面に降りていく。

「あんたやるわね。打ち合わせてないのにちゃんと動き合わせるなんて」

トシキの隣に降りてきた鈴音。

「はは、だろ？」

笑うトシキ。

「アンノウンよりエネルギー供給確認！」

アラートが視界に表示される。

「しつこいな」

振り返ってビームライフルをアンノウンへと放つ。

「！」

アンノウンの腹部に直撃し供給されたエネルギーが暴発した。

「これでほんとに終わりかな」

へへっと笑うトシキ。

その笑顔にドキッとする鈴音。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

アンノウンの突然の乱入によりクラス対抗戦は中断をやむ無くされた。

だが、そのアンノウンはトシキと鈴音により撃破。生徒に被害を出さずに済んだ。

トシキは今、戦闘を終えて外でボーッとしていた。

「俊貴、ここで何をしている？」

後ろから声をかけられた。

「へ？」

振り返ってその声の主を確認する。

そこに立っていたのは千冬。

「どうかしたんですか？」

立ち上がり千冬と向かい合う。

「いや、姿を見かけたから様子を見に来た。」

「そうですか。ちょっと風に当たってただけですよ。」

トシキが笑う。

トシキの言う通りここは優しい風が吹く。

「それにしても、さっきは無事で良かった。先生達がつく前に終わるとは思ってなかったがな」

微笑んでトシキを見る。その顔は優しさを感じる。

「…」

思わずその笑顔に見とれるトシキ。

「ん？なんだその顔は」

ポカンとするトシキに気づいた千冬が訝しげな顔をする。

「あ…いや、何でもないです。」

頬をかき苦笑いするトシキ。

「まぁ、何にせよ無事で良かったよ」

フッと笑う千冬。

「…心配、してくれたんですか？」

トシキが千冬の顔をのぞきこむ。

「お前のか？するわけないだろ」

何を言ってるんだ、と言う顔をしている千冬。

…ですよねー

苦笑いしながら頬をかく。

「何せ私に勝てる様なヤツはそうそういないからな」

フッと笑いトシキに背を向けて学園の方へと歩いていく千冬。

「あー……」

その笑顔に呆然とするトシキ。

クラス対抗戦（後書き）

こんにちわー
昨日気づいたのですが、瞬時加速が瞬間加速になってました。申し訳ありません。
訂正可能部分はていせいしていきます。

ふたりの転校生

アンノウンに乱入されたクラス対抗戦の翌日。

まだ朝早いため割りと静かだ。時間にして6時前。起きてる生徒もいるようで足音や物音がたまにする。

トシキはベッドに腰かけている。

「オレは蜃気楼の力をどれだけ引き出せるようになった?」

「そうですね…約８０%程です。」

「これで８０%かぁ。推進翼をちゃんと展開できるようになったし、後は何だろうなぁ…」

一次移行して電磁砲とハンドガン、ビームライフル、刀の武装を使い、推進翼を展開。後はなにがあるのか…、と考える。

まさか、ワンオフアビリティーか?

「ん?そういえばワンオフアビリティーって何だ??」

一回も二次移行してないし、そもそも最適化できてない。

まだ使えないだろう、と気にしていなかった。

「ヴォワチュール・リュミエールシステムという超高機動モードに変形できます。」

「ヴォワチュール・リュミエールシステム…」

「一次移行でも使えるのか？」

「おそらく無理でしょう。二次移行からのが無難です」

使ってみたいけど二次移行まで待つか。今の状態でもいけなくはないし。

「まぁのんびりいこうか」

立ち上がり伸びをする。

すると急に部屋のドアが開かれ二人の女子が入ってきた。

二人ともちゃんと制服を身に付けている。

「お？早いな。おはよう」

その訪問者二人に手を上げて挨拶する。

「おはようございます！」「おはよう！」

その訪問者はセシリアと鈴音。

「トシキ！朝御飯に行こう！！」

鈴音がトシキの腕をつかみ部屋の外へ連れていこうとする。

「ちょ、ちょっと…！」

慌てて抵抗するトシキ。

まだ制服に着替えていないため準備ができていない。

「お待ちなさいな！トシキさんは私と朝御飯に行くのですわ！！」

空いてる腕の方をセシリアが掴み鈴音を睨み付ける。

「むっ！」

鈴音がセシリアを睨み付ける。

「ちょ…二人とも！」

二人が自分の方へと引っ張り始めた。

当然トシキに激痛が走る。体を左右から引っ張られて痛くないわけがない。

「痛い！痛いから！！二人とも！！」

引っ張り合いを止めない二人に大声を出して止める。

「はっ！すいません、ついムキになってしまって…」

「ごめんごめん。」

「うぅ…」

トシキの声で腕をはなした二人は申し訳なさそうにトシキを見る。

「はぁ…、着替えたら一緒に食堂に行こう？」

腕を擦りながら二人を交互に見る。

「はい…」
「うん…」

二人とも反省したのかしゅんとしている。

「すぐ着替えるから外でちょっと待ってて」

やれやれ、と二人の頭を優しく撫でるトシキ。
二人とも目がトロンとし始める。

「うん」
「はい」

ボーッとトシキを見上げて返事をする。

「はい、外で待ってて」

頭から手を離し、二人を押して部屋の外へと送り出す。二人は物足りなそうな顔をしていたがトシキは気づいていない。

「ふぅ…着替えるか」

ドアを閉めてタンスへ向かう。

「ん？セシリアはちょくちょく朝飯に誘ってきてたけど、鈴音は何でだ？」

キングオブ鈍感のトシキのため鈴音の心境に全く気づいてない。

…鈴音って言いにくいな。鈴って呼んだら馴れ馴れしいかな

終いには論点がズレだすトシキ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ホームルームの前に一つ報せがある。」

千冬がトシキをチラッと見た後教壇の横に立つ。
千冬の変わりに山田先生が教壇に立つ。

「えーと、今日は転校生を紹介します。入ってくださーい」

山田先生がドアの方に声をかける。

ドアを開けて二人の生徒が入ってきた。
一人は金髪を首の後ろで束ねた男子生徒。もう一人は長い銀髪の眼帯を着けた女子生徒。

ん？男子？？

「シャルル・デュノアです。よろしく」

男子の方がお辞儀をする。

「…」

トシキが無言で耳に指を突っ込む。

「きゃー！」
「かわいいー！！」
シャルルの紹介に女子達が声をあげる。
耳栓して良かった…
「うるさい。自己紹介がまだ終わってないぞ」
千冬の一喝でクラスは静かになる。
さすがだな…織斑先生は
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」
それだけ言ってボーッとしているトシキを見つける。
「奥村俊貴！貴様は許さない！！」
「は？」
トシキを睨み付けるラウラ。
おいおい、初めて会ったヤツに許さないって言われても…
思い当たる節がない。
「…」
千冬がトシキをチラッと見る。首をかしげて原因を探しているのが

丸わかり。千冬が苦笑いする。

「デュノアは奥村の隣。ボーデヴィッヒはセシリアの隣だ」

千冬が二人の席を指差す。返事をして二人が席につく。

「奥村俊貴だ。よろしく。」

隣に来たシャルルに手を差し出し握手を求める。

「シャルル・デュノアだよ。よろしくね。」

嬉しそうにトシキの手をとり握手する。

「いやー、シャルルが来てくれて助かったよ！男はオレしか居ないからあんまり落ち着けなくてさ」

アハハ、と笑うトシキ。

「そうなんだ。」

何処と無くぎこちない笑顔を見せるシャルル。

「そこ、授業始めるぞ」

トシキを睨み付ける千冬。

「すいませーん」

「ごめんなさい」

二人が謝り、千冬が授業を始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「次の授業は第三アリーナだ。遅れるなよ男子。」

トシキの方を見た千冬。

「はーい、警告を受けたしすぐ行こう。シャルル」

立ち上がりシャルルの腕をつかんで立たせる。

「わっ…！」

シャルルが変な声をあげたのを不思議に思いつつも教室から出る。

何か柔らかい手だな…

そう思いながら目の前に集まりだした群衆に目を向けるトシキ。

「え…？な、何？」

学園唯一の男子が二人揃って教室から出てきた。

それを待ち構えていた女子達。その雰囲気に圧倒されておどおどするシャルル。

「突破する！」

そういってシャルルを引っ張ったまま廊下を駆け抜けていくトシキ。

ＩＳを装着してないのにも関わらず凄まじい速さで走るトシキ。

ここにきて高い身体能力が役に立つとは…

と顔を緩ませる。ＩＳを使ってる時でもその力は生かせている事に気づいてない。

「わわっ…！」

その速さに付いていけずシャルルが息を切らしはじめた。

「ごめん、シャルル」

「ふぇ？」

何が何だかわかってないシャルルはすっとんきょうな返事を返す。次の瞬間、シャルルの体はふわりと宙に浮きトシキの腕に抱かれた。俗に言うお姫さまだっこをシャルルはされた。

「更衣室が無いからオレ達男子は部室棟の更衣室で着替える事になってるんだ。アリーナからちょっと離れてるから急がないと間に合わない。」

「そうなんだ…」

トシキの腕に抱かれて顔を赤くしてうつむくシャルル。

…何かやっぱり柔らかいな

そう思いながら、急に目の前に現れた女子の壁に急停止する。

「おっとと！」

シャルルに衝撃がいかないように優しく止まった。

「あー！シャルル君がお姫さまだっこされてる！！」

と、一人の女子が声をあげる。

「いいなぁ！私もされたい！！」

「私はむしろシャルル君を抱っこしたい！！」

女子のテンションがどんどんと上がっていく。

んー…間に合うかな？いや、間に合わせようか

壁を後ろにしたトシキが壁の方を向いた。

「え…？」

シャルルが思わず声をあげる。

窓を開けて足をかけるトシキ。

「じゃ、そーいうことで！」

女子達に手を振って笑い窓から飛び降りた。

その高さは三階。

「きゃあああああああ！！！」

シャルルが高い悲鳴をあげる。

が、トシキは下をずっと見ていて気にしていない。

「よっと」

屋上から下に伸びているパイプを掴み速度を落とす。が、パイプからメキメキと音がし始める。
流石に壊すわけには…、よしいちかばちか！

ちょうど二階の壁を蹴りつけたまたま有った花壇の方へと飛ぶ。

その時にもシャルルが悲鳴を上げたが、トシキはシャルルを無事に下ろすことに集中していて聞こえていない。

そして花壇に着地したトシキ。衝撃を膝を曲げて弱める。花壇の土が弱いがクッションになり二人に反動は少ない。

「ふぅ、じゃあ急ごうか」

シャルルを地面に立たせて部室棟へと走り出すトシキ。

「う、うん」

呆然としながらもトシキについていくシャルル。

・・・・・・・・・・・・

何とか授業前にアリーナに着きホッとするトシキ。
あの出席簿を食らうわけにはいかない！
と、一人で顔をキリッとさせる。

「遅かったんですのね、トシキさん」

「ん？」

名前を呼ばれて振り替えるとそこにはＩＳスーツを来たセシリアがいた。ＩＳスーツはスク水の様な物で、ＩＳを使うときに着ていると能力向上やら何やらがつく。それに加えてハンドガン程度の銃弾なら直撃を避けれる。衝撃はいくが。

「まぁ道が混んでてね。」

頬をかくトシキ。
あながち間違いではない。

「そうですか。女性とイチャイチャしてたわけではないんですのね」

ジッとトシキを見るセシリア。

「は？どういうこと？」

首をかしげるトシキ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒさんといたんじゃないんですか？」

「へ？そんな時間ないし、一緒にいたのはシャルルだ。」

隣にいたシャルルが頷く。

「あら？そうですの。」

「何？どうかしたの？？」

鈴音がセシリアの後ろからひょこっと現れた。

「いえ、こちらのトシキさん。朝転校生の方に怒鳴られまして」

「何ですって!?何であんたが怒鳴られるのよ?あんたその子になんかしたの?」

鈴音がトシキに詰め寄ってくる。

「いやいや、オレ初対面だよ。いきなり怒鳴られてもなんの事かさっぱり」

トシキが肩をすくめる。

「あんたが何かしなきゃ相手も怒らないわよ!」

「そうですわ!」

二人がトシキに詰め寄る。

「うるさい。授業を始めるぞ」

千冬がセシリアと鈴音の頭を出席簿で叩く。

「よし、今日は実戦訓練を行う。」

そういって一歩さがった千冬の上をＩＳがフラフラしながら通過、トシキの方へと突っ込んでくる。

「!?」

驚き蜃気楼を展開、ぶつかってきたＩＳを受け止めるが地面を少し転がる。

「いつつ…、大丈夫で…！？」

トシキは馬乗りになる感じでそのＩＳの操縦者、山田先生の上に乗っかっていた。その大きな胸を鷲掴みにして。

や、柔らかい…！

そう思った瞬間に背筋がぞっとした。

「す、すいません！山田先生！！」

慌てて上からどき山田先生を立ち上がらせる。

「いえ、私のほうこそごめんなさい。うっかりバランスを崩してしまって…」

何故かモジモジしながら言う山田先生。

「おわっ！？」

トシキの頭上をレーザーが掠めた。

「オホホホホ…」

引きつった笑顔で銃身をこっちに向けているセシリア。

「ふん！」

勢いよく連結させた双天牙月を放つ鈴音。

「なんの！」

体を反らしてかわす。が、双天牙月はブーメラン状になっており、投擲者の本へと戻ってくる。

「うげ…」

反らした状態で戻ってくる双天牙月に気づく。

が、隣にいた山田先生が手に持っていた銃でブーメランの軌道を変えた。

伊達にＩＳ学園で教師をしているだけあり、普段の山田先生とは別人のようだ。

「では、凰、オルコット。お前達にやってもらおうか。」

「え！？」

「何で私も！？」

「専用機持ちのが簡単にやれるからな」

腕組みをする千冬。

「そんな理由！？」

「アイツに良いところを見せれるチャンスだと思うが？」

フッと笑う千冬。

「！」

二人は同時に体をピクッと震わす。

（オルコットに言ったつもりが凰まで反応するとはな…）

半ば呆れる千冬。

「ふふ、セシリア・オルコット実戦だろうと何だってやりますわ」

髪を後ろへと流すセシリア。

「で、誰とやれば良いの？セシリアでもいいよ。」

小さな胸を張る鈴音。

「上等ですわ！」

鈴音に向けてスターライトｍｋ？を向ける。

「いたっ！」

「うぅっ…」

二人の頭に再び出席簿が振り下ろされる。

「人の頭をポンポンとぉ…」

セシリアが涙目になる。

「お前達の相手は山田先生だ。」

「よ、よろしくお願いします」

山田先生がペコリと頭を下げる。

「先生相手に二人がかりですか？」

余裕たっぷりの鈴音。

さっき双天牙月弾かれてたろ…

と思いながらも成り行きを見守るトシキ。

「あぁ、全力でいけ。負けるだろうがな」

ＩＳを装着してない生徒達と一緒にその場から離れる千冬。

「いくら先生でも代表候補生二人同時になんて無茶よね」

隣に立つセシリアへと同意を求める。

「ですわね。甘くみすぎですわ」

ふん、と鼻を鳴らし戦闘体勢をとる。

「あの二人は負けますね。」

千冬の隣に来たトシキが言う。

「あぁ、負ける。山田先生はあれでも元日本代表候補生だ。」

フッと笑う千冬。トシキにも勝敗が見えていた事が少し嬉しかった。

「あぁ、次はお前だぞ。」

「えっ!?何故!!?」

「花壇を潰したのはお前だろ?」

「あ…」

この授業の前にやったことなのに既にバレていた。
昼ぐらいに怒られるかと思っていたが、恐るべし伝達能力。

そのやり取りを隣で苦笑いしながら見るシャルル。

山田先生と二人の実戦訓練が始まりだした。

・・・・・・・・・・・・

千冬とトシキの予想通り、山田先生は二人を圧倒して勝利をした。
ボロボロの装甲を引きずって歩いてきた。

そして、山田先生が元代表候補生だと言うことを千冬が話す。

呆然とする二人はかませ犬かー!と声を上げてＩＳを修復しに行った。

「さて、メインディッシュの時間だ。」

トシキに前に出るように指示する。

「…はい」

抵抗するだけ無駄だと悟ったトシキ。この人に抵抗しても返ってくるのは倍になった罰と出席簿だけだ。

「では、よろしくお願いします」

ペコリとお辞儀して山田先生の前に立つ。

「はい、よろしくお願いします。」

エネルギーを補給し終えた山田先生が笑顔でお辞儀する。

…集中しないと

山田先生の大きな胸が目について集中できない。ＩＳスーツにより強調されたそれはトシキの思考を乱すのに効果抜群だった。

「はっ！」

瞬時加速で一気に間合いを詰めに来た山田先生。手には刀が握られており、上段に構えている。ちなみな山田先生のＩＳは打鉄。

「くっ！」

ガァン、と音をたててトシキが刀を刀で受ける。

「よっと」

腰に装着されている電磁砲を山田先生に向けて放つ。

「きゃぁ！」

電磁砲の事を忘れていた先生は至近距離で喰らい絶対防御発動。シールドエネルギーを大幅に削られる。
腰の装甲も吹き飛んでいた。

「オレの動きを捉えれますか？」

そういって、高速でアリーナを飛び回る。

山田先生はいつもと違う落ち着いた表情でトシキの動きを読もうとする。

「そこ！」

アリーナの上方に現れたトシキへとレーザーを放つ。

「残念外れ」

「っ…！？」

上空ではなく地上すれすれをトシキが体をクルッと回転して先生へと突っ込む。

「いつのまに！？」

確実に上にいたはずなのに既に下に、目の前にいた。

「はあぁ！」

通り抜け様に刀を振るう。

「うぅっ！！」

何とか刀で防ぐが、体勢が崩れる。

その隙を逃さず、体勢を翻して山田先生をロック、電磁砲を放つ。

「！」

それを避けきれず電磁砲が山田先生に直撃。シールドエネルギーを全て削られた。

「うぅ…、強すぎますー」

ぺたんとその場に座り込む山田先生。

これで全力か？

ーまだです。後１０％。

後１０％もあるのかよ…

蜃気楼を使ってもまだ残りの力があるなんてこのＩＳは…

「うわぁ！トシキって強いんだね！！」

シャルルがトシキに駆け寄ってきた。

「そうか？」

自分のＩＳの力を出しきれてないのに強いとは言えない。そう思っていた。

「そうだよ！」

「そっか」

その嬉しそうな顔に照れるトシキ。

「また腕をあげたようだな」

トシキの肩をポンと叩き微笑む千冬。

「まだまだですけどね」

また誉められると思ってなかったトシキは焦りつつも嬉しくて頬をかく。

ちょうど授業終了のチャイムがアリーナに響く。

「授業終了だ。一同解散。」

生徒達がアリーナから出ていく。

「…くっ」

ラウラがトシキの後ろ姿を睨み付ける。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おーいシャルル。昼飯行こう」

隣の席で授業のノートや教科書を片付けるシャルルに言う。

「え？あ、うん。行こう」

立ち上がりシャルルが頷く。

二人並んで教室を出ていった。

「あれ？トシキさんは何処へ…」

さっきシャルルと出ていったことに全く気づいてなかったセシリアが首をかしげる。

急にドアが開き鈴音が教室に入ってきた。

「あれ？トシキは？」

キョロキョロ教室を見回す鈴音。

「さぁ？知らないうちに何処かへ行ってしまった様です」

肩をすくめるセシリア。

「何よそれ…」

ショボンとして教室から出ていく鈴音。

・・・・・・・・・・・・

夜。
トシキの部屋にはシャルルが居た。男子と言うことでトシキの部屋が空いているためそこにねじ込まれた。

「ふあーぁ、ねみぃ」

大きなあくびをするトシキ。

「…でっかいあくび」

クスクス笑うシャルル。
何処と無く緊張してる感じがするのは気のせいか。

「シャルル、先に風呂入って来なよ」

上半身を起こして微笑む。

「え、でも…」

「オレは後で良いから入ってきなよ。」

またベッドに体を沈める。

「…」

シャルルがじっとトシキを見る。

「…ふあー」

またトシキがあくびをする。

（…いっか、入っちゃおう）

「じゃあ、入っちゃうね」

立ち上がり風呂場へと向かうシャルル。

「あいよー」

手だけ振って会釈する。

「何かすげー眠い」

寝返りをうつ。

だんだん意識が薄れてくる。

・・・・・・・・・・・・・・

「ふぅ、さっぱりしたー。トシキ出たよ…？」

髪をタオルで拭きながら風呂場から出てきたシャルル。返事がないのを不思議に思ってトシキのベッドの横まで行く。

「あれ？寝てる…」

すーすーと寝息を立てて眠るトシキの顔を覗く。

「…おーい」

トシキの頬を指でつくシャルル。

（思ったよりぷにぷにしてる…）

思わず笑顔になるシャルル。

「…んぁ？」

頬を連打するようにつつくシャルルにトシキが目をさます。

「あ…」

頬を突いた状態で固まるシャルル。

「あ、出たの？じゃあ入ってこよっと」

起こしてくれてあんがとー、と手を振りながら風呂場へ向かう。

「…寝ぼけてた、のかな？」

頬をかき苦笑いする。

「ん？」

トシキのベッドの脇に置いてあった黒いアームバンドに気づく。

ギュッと手を握りしめ苦しそうな顔になるシャルル。

「僕は…」

「僕は何をやっているんだ……」

自分のここへ来た目的を思いだし苦い顔をする。
自分の国の、家族のためにとやってきたが、今日1日トシキと殆ど一緒にいて楽しかった。目的を忘れるぐらいに。

・・・・・・・・・・・・

不意に風呂場のドアが開き上半身裸で出てきた。

「！」

「お？どした？？」

シャワーを浴びて目が覚めたトシキが、ベッドの間で突っ立ってるシャルルに聞く。

「何でもなっ…」

トシキの状態に気づいたシャルルが顔を背ける。

「？」

それをキョトンと見る。

「あ、いや何でもないよ。ちょっとボーッとしてただけ」

自分のベッドへと腰かけるシャルル。

どこか落ち込んでるようにも見える。

「…どうかしたのか？」

シャルルの前に座り顔をのぞきこむ。

「！だ、大丈夫だよ。」

シャルルが無理に笑顔をつくる。

「なんもないならいいけど、話せることは話せよ？相談にのるぞ。」

優しく微笑み軽く肩を叩く。

「…うん、ありがとう。でもホントに何もないから」

今度の笑みはぎこちないがホントの笑顔だとわかる。

「じゃあ、寝るか」

トシキが自分のベッドに寝る。

ふあー、とあくび。

「うん、おやすみ…」

シャルルもベッドに寝る。

「おやすみー」

そう言った瞬間に眠りについたトシキ。

「…」

トシキの方をチラッと見てから背を向けて眠る。

ふたりの転校生（後書き）

こんにちわ。
シャルとラウラ登場回でした。
そろそろオリジナルのＩＳを出す予定です。

ラウラの力

第三アリーナにＩＳを展開したトシキとシャルル。
二人はＩＳの訓練をするために来ている。
実戦経験の少なさを埋めるためシャルルに頼み特訓に付き合ってもらっていた。
それを見に来ている生徒たちや、近くで練習をしようと第三アリーナに使用許可を得る生徒たちが続出している。
そんな生徒達を気にせずに、特訓をする二人。

「うお！？」

顔の横を通り過ぎた弾丸にびっくりするトシキ。
シャルルのアサルトカノン‘ガルム’から発射されたものだった。

「よそ見してると当たるよ？」

オープン・チャネルでシャルルが表示される。顔がちょっと笑っている。

「お、おう…」

頬をかくトシキ。
何かちょっと怖かった…

「続けるよ？」

シャルルがガルムからショットガン、レイン・オブ・サタデイ、に持ち変える。

ショットガンの弾を全部かわせたらスゴいかな？

そう思って、、スラスターにエネルギーを供給。

全弾の予測できるか？

ーできますが、あくまでも予測です。

問題ない。やってくれ。本番じゃないしな

ー了解しました。

シャルルがトシキにショットガンを向ける。

「うわ…、せま…」

蜃気楼が予測した軌道を確認、隙間が有るには有るがかなりせまい。

ショットガンから弾が発射された。

「くっ！」

そのデータを元に散弾をかわしながら進む。

が、やはり予測した所に飛んでこない弾丸と変な所に混ざってた弾丸も有り、シールドエネルギーを削る。

「え？」

散弾をかわしているトシキを見て驚くシャルル。
全部はかわしきれてないのはわかるが、何ともでたらめな事をしている。

「ふう…」

弾の嵐を抜けて一息つく。
うん、止めとこう。エネルギー削られるし下手したら装甲壊れる。
普通にかわそう。

「何で突っ込んだの？」

呆れながらシャルルが近寄ってきた。

「いやー、よけれるかなと思ったんだけど四発当たったよ」

アハハ、と笑うトシキ。

（…四発しか当たってない？ショットガンなのに…？）

呆然とするシャルル。

近距離ではなかったが遠くでもない位置だった。弾と弾の間隔が有ったにしても普通はもっと当たる。

「今日はこの辺にしようか。」

時間を確認して聞く。

もう五時過ぎ。いつの間にか、たくさんいた生徒達も殆ど帰っていた。

「奥村俊貴！！」

アリーナにトシキの名前が響く。

「は？」

驚き声のした方を見ると、ＩＳを展開したラウラが立っていた。
トシキと同じ黒色がベースの機体。

「今から勝負をしろ！」

トシキを指さすラウラ。

「…シャルル。先に帰っててくれ。遅くなりそうだし。」

「ううん、待ってるよ。隅っこで見てる」

トシキの目をジッと見る。

「…うん、わかった。待ってて」

そういってラウラの方にいく。

「なんでオレを狙うんだ？」

理由を最近考えていたがやはり思いあたらなあ。

「貴様が知る必要はない！」

そういって右肩のレールカノンを放つ。

「っ！」

刀を取りだしそれを斬りさく。

「戦うきはオレにはないぞ。」

「お前になくても私にはある！！」

ワイヤーブレードをトシキに向けて二発放つ。

その二発も刀で弾き、ラウラの元へと戻っていく。

遠距離だけか？

近接もあるだろうけど、あの自信はどこからくる？

トシキを見る目は怒りと憎しみに満ちている。

そもそもなんでオレが狙われるんだ？アイツになんかしたわけでもないし…、ここに来てまだ1ヶ月経ってないのに。

「しまっ！」

トシキの左足にワイヤーブレードが絡まる。

「馬鹿め！よそ見してるからだ！！」

「トシキっ！」

ラウラはワイヤーブレードを使ってトシキを振り回し地面へと叩きつけようとする。おもわずシャルルが立ち上がる。

「くっ！」

地面にぶつかる前に足に絡まるワイヤーを切断し脱出。
頭が下、足が上の反対の状態のなか、空中でラウラに向けて電磁砲を放つ。

「うっ…」

ラウラの足元に電磁砲が飛んでいきクレーターを作り出す。

かー…、あたんねぇかあの体勢では

素早く体勢をなおして刀を量子化。そしてビームピストルを両手に持つ。

瞬時加速で一気にラウラの方へ接近する。

「くっ！甘い！！」

両腕のプラズマ手刀を展開。
トシキ目掛けて両手を振る。

「よっと」

再び瞬時加速で上に跳び、ラウラの攻撃は空振り。

上からビームピストルを乱射する。

「ちっ、ちょこざいな！」

手刀でビームを弾く。

「それフェイクね」

「！？」

トシキがラウラの後ろに現れていた。
慌てて振り返りトシキに手を向ける。

「！？…な、なんだ、これ」

体が動かない。なんでだ？ラウラか？

「くっ…、」

ラウラのＡＩＣでトシキの動きを止める。

「残念だったな。」

息を乱しながらトシキに近づいてくる。

「ここで、死ね！」

プラズマ手刀でトシキを斬り裂こうと腕を振り上げる。

「…っ！」

トシキの前に立ち、打鉄の刀で手刀を受け止めた千冬がいた。

「そこまでだ、ボーデヴィッヒ」

ＩＳを展開していないが生身でラウラを弾く。

「うっ…！」

動揺するラウラ。

彼女の心のなかは乱れている。尊敬している相手が、今一番憎い相手を庇う。それが更にトシキへの憎悪を増やす。

「そんなに戦いたいのなら、さ来週行われる学年別トーナメントに出るんだな。そこなら文句も邪魔も入らん」

動けるようになったトシキの方をチラッと見た千冬。

「学年別トーナメント…。良いでしょう、そこで貴様を撃つ！」

トシキを指差しアリーナの外へ出ていった。

「…なぜここに？」

「デュノアが教えてくれた。」

トシキのとなりに来たシャルルが頷く。

「そうか。」

シャルルの方をチラッと見てすぐ千冬の方へ向き直る。

「…」

しゅんとしてしまうシャルル。

「さて、もう部屋に戻れ。食堂の時間も無くなるぞ。」

そういって千冬もアリーナの出口へ向かう。

「…行こう」

シャルルに微笑みトシキもアリーナの出口へ向かう。

「うん…」

その後についていくシャルル。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夜。
食堂で晩御飯を済ませ部屋に戻ってきた二人。
シャルルは先にシャワーへ行って、部屋にはトシキがいるだけ。
ベッドに横になり天井を見つめていた。

ＡＩＣか…
アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。慣性停止能力。
対象を任意に停止させることができ、１対１だと反則的な効果を発揮する。だが、高い集中力を有し対複数となると同時に動きを止め

る事ができない。

「厄介だな、どうするか…」

手がなくはないのだがキツい。

風呂場のドアを開けシャルルが部屋に入ってきた。

「出たよ、トシキ」

少し気まずそうなシャルル。ラウラと戦ってから余り機嫌が良くなさそうなのを、余計な事をしちゃったかも、と自分のせいだと思っていた。

「あ、うん。わかった」

声をかけられてシャルルに気づき上半身を起こす。

考えてもしょうがないし頭を冷やすか。

頭をかき風呂場へと向かうトシキ。

「あ、あの…」

シャルルが気まずそうにトシキの背中に向けて声を飛ばす。

「ん？どかした？？」

キョトンと振り返るトシキ。その顔に不機嫌そうな色はうかがえない。

「あ、あのね、僕余計な事しちゃった…かな？」

指をもじもじさせながらトシキの様子を伺う。

その動作は男のそれではない。

「は？」

いまいち理由がわかってないトシキ。

「…織斑先生呼んじゃったから」

チラチラとトシキの方を見る。

「ん？あぁ、何だ。元気が無かったのはそのことを気にしてたからか。」

シャルルに振り返り頭をかく。

「え？」

当然シャルルはトシキの言ってる事を理解できない。

「ごめんな、シャルルのせいじゃないんだ。ラウラの事がちょっと気になって考え込んじゃってただけだから」

「あ、そうなんだ…」

自分のせいじゃないとわかりホッとするが、心の中に曇った感情が芽生える。

そのせいで、今度はシャルルが少し不機嫌そうな表情になる。

「あ、あれ?オレ何か変な事言った??」

原因がわからないトシキは首をかしげる。

「え?あ、いやそんなことないよ。」

両手をブンブンと振り慌てるシャルル。自分でも無意識に不機嫌になっていたのに気づく。

「そう?じゃあシャワー浴びてくる」

振り返りシャワー室へ向かっていった。

「僕…どうしちゃったんだろう」

胸の良くわからないモヤモヤに呟くシャルル。

・・・・・・・・・・・・・

「ほあー…」

シャワーを浴び終わり頭をタオルで拭きながら部屋に戻ってきたトシキ。

また上半身裸で出てきたため、シャルルはトシキに背を向けている。

(うぅ…、何でいつも上を着ないの…)

赤くなりドキドキしながらも平静を装うシャルル。

毎回その状態で出てくるから慣れようとしたが、やはり恥ずかしいものは恥ずかしい。

「…」

そういえばオレが出るといつも背中向けてんな、シャルルは。

「ん？」

シャルルの後ろ姿を見ていて一つ気づいた。

「シャルルって髪の毛綺麗だな」

そういって、シャルルの髪を触るトシキ。柔らかいサラサラの髪。

「ひゃっ！」

シャルルが慌てて振り返る。

「あ、えっとごめん。」

その様子に手を離して謝るトシキ。

「あ…、ううん、いいんだ。ちょっとビックリしただけだから。気にしないで」

あはは、と苦笑いするシャルル。トシキの手の感触が髪に残っていて少し名残惜しい感覚に襲われるシャルル。

「あぁ。でも急に触って

ごめんな。」

頬をかき済まなさそうな顔をするトシキ。
トボトボと自分のベッドに戻るトシキ。

「…」

その背中をモジモジしながら見つめるシャルル。

（…うぅ、もうちょっと触って欲しかったけど、男同士でそんなことしないだろうし…、うぅぅ…）

シャルルがどうしようか悩み始めた。あからさまに悩んでますよ、と言わんばかりの顔で。
それが、ベッドに倒れてごろごろし始めたトシキの視界に入る。

「…なぁ」

ベッドに肘をつきその手に顔を乗せてシャルルの方を向くトシキ。

「え？な、何？？」

ビックリしたシャルル。
それにまた傷つくトシキ。

「…、あのさ、何か悩んでる？」

「え……、何で？？」

ドキッとするシャルル。

「いや、何か考え込んでる様な表情をたまにしてるから。さっきもしてたけど」

「あ…」

無意識にシャルルは悩んでいた。自分の任務を、トシキに言ってない事をどうするのか、たまに考えていた。
それにトシキは気づいていた。

「オレで良かったら相談に乗るよ。頼りないかもしれないけど…」

苦笑いするトシキ。

「そんなことない！トシキはすごく頼りになるよ！！」

「お、おう、そっか。」

声を荒げたシャルルにビックリするトシキ。いつも和やかなシャルルとは違う様子に焦る。

「大丈夫だよ、ありがとう。」

今度は優しく微笑むシャルル。

「あぁ、わかった。でも、一人で抱えこまずに何でも言えよ。力になるから！」

トシキも微笑む。

「うん、そうする。優しいねトシキは。」
嬉しそうに笑うシャルル。
「オレは友達を大事にするんだよ。」
ニシシ、と笑うトシキ。
その温かい笑顔に惹かれるシャルル。
「じゃあさ、一つ聞いてくれる？」
モジモジしながらトシキを上目使いでチラッと見る。
「お、おう。いいよ。」
その仕草にドキッとしたトシキ。
…男じゃなかったら確実に惚れてたな。ってか、女顔にも程があるぞ
ーマスター、脈拍と体温が上がってます
うっせー
と、脳内で蜃気楼と会話。
シャルルのモジモジを見て苦笑いするトシキ。
「あのね、トシキが良かったらもう一回髪を触って欲しい、かも」
「なんだそんなことか、いいぞ。」
トシキが立ち上がりシャルルに近づく。

シャルルはトシキに背を向ける。
触られてる時の赤い顔を見られたくなくて向きを変えたシャルル。

「ん…」

トシキの指がシャルルの髪に触れる。

「…ってか、何で急に？」

くるくると優しく捻りながら遊び始めたトシキ。

「特に理由はないけど、トシキに触れられてると落ち着くから、かも」

ボーッと髪に触れる感触を味わうシャルル。

「ふーん、そっか」

髪を弄るのから頭を撫でるのに変えたトシキ。

「…えへへ」

撫でられて笑みを浮かべるシャルル。
セシリア達がみたら羨む状況だろう。

ラウラの力（後書き）

こんばんわ
原作を1、2巻買って見ました。
少しは詳しくなったと思います。たぶん

買って気づいたこと、ラノベも案外面白い。

さてさて、今回はラウラとの初戦闘。
ラウラのＩＳのウサギみたいな頭のパーツが結構好きです。
キャラ的にラウラは好きですが、シャルが強すぎます。

作者もシャル大好きです。

そんなどうでもいいことはおいといて、上手く描けてるか不安ですが、地道にやっていくのでよろしくお願いします。

学年別トーナメントまで1週間！

「ふわー…、ねむ」

あくびしながら机に頬杖をつくトシキ。

今は教室で授業中。

座学になるとやはり眠くなる。だが、トシキは勉強が全くできない訳ではない。必要な事はやっているため赤点はないし平均以上の成績をしている。

それでも、座学よりＩＳを使った授業のが成績が良い。

あ、雀だ

窓の外から見える木の枝に二羽の雀が仲良く止まっている。

「眠そうだな、奥村。」

「あだっ…」

トシキの頭に千冬の出席簿が振り下ろされた。

それにクスクスと笑うクラスメート達。

「全く…」

呆れながら教卓の方に戻る千冬。

「どうかしたの？」

シャルルが小声で聞いてくる。

「いや、何もないよ」

苦笑いするトシキ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

昼食時の食堂。
そこは何故かやたらと何時も以上に騒がしい。

「ねぇねぇ、聞いた？今年の学年別トーナメントのこと！」

「何かタッグでやるんでしょ？」

「そうそう」

学年別トーナメントは例年通りなら一体一の試合となる。だが、今年はアクシデントが発生した。クラス対抗戦でのアンノウン。それを危惧し、タッグにしてまたアンノウンが来たときの対策とした。先生達が駆けつけるまで、四人なら時間も稼げるだろうという判断からだった。

「それよりも、もっと大きい事があるらしいよ！」

「えー？何？？」

「何かね、優勝すると奥村くんとシャルル君、どっちかと付き合えるらしいよ！！」

「えぇー！ホントに！？」

「ホントだって！」

「ちょっと私頑張ろっかな」

「私もー！」

食堂はその話で盛り上がっている。

「何か今日は賑やかだね。」

トシキの正面で昼御飯を食べるシャルルが周りを見ながら言う。
トシキの隣にセシリア。シャルルの隣に鈴音がいる。

「そうだね、何かあったのかな」

周りの話を全く聞いてないためトシキも首をかしげる。必要ない騒音と判断し完全にセシリア達以外の会話をシャットダウンする。

「っていうか、奥村くんと一緒に戦って優勝しちゃえば良いんだ！」

「あー！ズルい！！私もー！！！！」

「じゃあ、私はシャルル君に！」

と、トシキとシャルルの元へと集まり始めた女生徒達。

「な、一体なんですの！？」

トシキとシャルルの周りを囲む生徒達に驚くセシリア。

「ねぇねぇ、奥村くん。今度のタッグトーナメント一緒に出ようよ！」

「いや、私と出ようよ！！」

「シャルル君はもうペア決まってるの？」

「良かったら一緒に出ようよ！」

当の二人は生徒達の勢いに圧倒されている。

「あ、えと僕は…」

シャルルがチラッとトシキの方を見る。

「ん？…、ごめんオレはシャルルと出るんだ。」

シャルルの方をチラッと見てから周りの生徒の方を見る。

「えぇ？そうなのかー…」

「ざんねん」

ショボンとして生徒達がその場から離れていく。

「ふぅ、何とかおさまったか」

またご飯を食べ始めるトシキ。

「ちょっとトシキ！シャルルと一緒に出るってホントなの？」

鈴音がトシキを睨み付ける。

シャルルがトシキの方を見る。その表情は不安気。

「…今決めたけどダメだったかな？」

「あ、ダメじゃないよ！むしろ嬉しい！！」

嬉しそうな顔になるシャルル。

(なんか前から思ってたけど)
(この子男の子っぽくないですわ。)

と、二人が同じことを思う。

「そっか。なら決定。」

シャルルに微笑みまたご飯を食べ始める。

「くっ…」
「うっ…」

ニコニコなトシキとシャルル。それと真逆でセシリアと鈴音は悔しそうな顔をしている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

学年別トーナメントに向けての特訓に励む生徒達。そのためアリーナに生徒は多い。
だが、第3アリーナにいる生徒達は隅っこに固まり、アリーナの真ん中で戦っている三人を見ている。

その三人は、ラウラと鈴、セシリア。

何故こんな状態なのか。それは朝のシャルルとトシキの会話で、トシキのペアをとられた事を気にしていた。それにイラついているなか、何時も通り鈴とセシリアが噛み合わず喧嘩が勃発。どちらが上かはっきりさせようと言うことになりアリーナで勝負を始めた。
そこへラウラがやってきて乱入。ラウラの目的はトシキのデータを得ることだったが本人はいない。それに舌打ちして帰ろうとした時、ラウラの顔の横をセシリアのレーザー、鈴の双天牙月が通りすぎ、喧嘩を売られたと勘違い。ＩＳを展開し二人と交戦し始めた。

最初は三つ巴の戦い状態だったが、ラウラは別格でキツくなった二人は自然と手を組み2対1に。だが、ラウラはその状態でも二人を圧倒している。

「なん、なのよ！この強さは！！」

鈴音が龍砲を放つ。

空気を震わせたその弾丸は、あっさりとラウラにかわされる。

どうやら砲門の角度で大体の位置を予測して動いているようだ。

「止まらないでください！」

龍砲をかわされた鈴目掛けて突っ込んでくるラウラへレーザーを放つセシリア。

「わ、わかってるわよ！」

慌てて動き出す鈴。

「遅い！」

「っ！」

ラウラのワイヤーブレードが鈴の装甲を破壊しエネルギーを削り、鈴を拘束する。

「あ！」

それを見て動きが止まるセシリア。
その隙をラウラは逃さない。すぐに右肩の大型レールカノンでロック、発射する。

「しまった！」

それに気づいたセシリア。だが、遅すぎて回避が間に合わない。直撃し爆発が起こる。そして、鈴と同じようにワイヤーブレードでセシリアを捕らえる。

そのワイヤーブレードをたぐりよせるラウラ。そこからはただの暴虐が始まった。

「あああっ！」

腕、脚、体にラウラの拳が叩き込まれる。シールドエネルギーはあっという間に減り機体維持警告を越え、操縦者生命危険域へと到達する。これ以上くらえばＩＳが強制解除される。そんなことになれば二人の命に関わる。

だが、ラウラは攻撃をやめない。ただ暴力を振るいＩＳアーマーを破壊していく。

無表情のラウラが、愉悦に口元を歪めた。

「やめろぉー！！！」

怒声を上げてラウラに突っ込んでくるトシキ。手には刀が握られている。

「！」

その刀でワイヤーブレードを切り裂かれ、二人が落下していく。

「くっ！」

瞬時加速で二人を抱えて、ラウラから離れる。

「うぅ……、トシキ…」

「無様な姿を……お見せしましたわね…」

「いいから喋るな…」

まだ意識があることに安堵する。だが、胸の奥からラウラに対する怒りが込み上げてくる。二人に非があるにしても、ここまでやる必要はない。

邪魔をしたトシキを鋭く睨み付けるラウラ。

「何故貴様が邪魔をする！奥村俊貴！！」

怒鳴り付けるラウラ。その声がアリーナ中に響く。

「ここで練習してたクラスメートの子が教えてくれた。もうすぐ織斑先生もくる。」

トシキと一緒に来たシャルルにボロボロの二人を預ける。

「…時間稼ぎのつもりか？」

「織斑先生に頼まれたからね。行くまで時間を稼いでこいって」

「ふん、逃げはしない。ただ、待つのも暇だしお相手をお願いしようか。イラつきがおさまらないんでな。」

「…オレはやる気なかったけど、お前はオレの大事な物を傷つけた」

冷たく鋭い目でラウラを睨み付け腰のビームピストルを両手に持つ。

トシキは静かに怒りを露にする。

「はあぁ！」

レールカノンを連射する。

が急上昇したトシキによりレールカノンはアリーナのバリアにあたり消滅。

「はぁぁ！」

動きながらビームピストルを連射する。

そのビームの嵐を受けて舌打ちをするラウラ。そのビームで反撃ができない。

「原因はどうでもあんなに打ちのめす意味はない！」

トシキが怒鳴り付ける。

「ふざけるな！喧嘩を吹っ掛けてきたのは向こうで、私は被害者だ！！」

と、言いながら二発ワイヤーブレードをトシキに向けて放つ。

「言ってる事は、わかる！でも、お前がしてるのはただの暴力だ！！」

怒声を上げてトシキはワイヤーブレードを腕の装甲で弾く。

今回はセシリアと鈴が悪い。でも限界を越えても戦闘を止めないラウラはもっと良くない。

「そもそも、貴様のせいで！！」

再びレールカノンを放つ。

「ちっ！」

クルクルと円を描くように後退してかわすトシキ。

「チョロチョロ鬱陶しいヤツだな！！」

ヒラヒラと風のように動くトシキ動くトシキを睨み付ける。

「当てる！」

バイザーがラウラの顔に装着される。

「！」

「……そこっ！」

照準がトシキに合った瞬間、レールカノンを発射する。

「それじゃダメだ」

ひらりと横にかわし、トシキのいた場所にレールカノンが通りすぎた。

「もらった！」

トシキが避けると踏んで、回避コースを予測していたラウラが予想通りに動いたトシキへとレールカノンを放つ。

「くっ！」

左腕を体の前に構えビームシールドを展開。
そのシールドにレールカノンは直撃し軽い爆発を起こす。

「そこまでだ！！」

アリーナに千冬の声が響く。
それにビクッと体を震わすラウラ。トシキはまだおさまらない怒りを抑えようと呼吸を整える。

「ボーデヴィッヒ、トーナメントで決着をつけろと言ったはずだか？」

スピーカー越しでも千冬の声に威圧感を感じる。

「し、しかし教官…」

たじろくラウラ。

「事情は知っている。そこの馬鹿二人が今回の原因だと理解している。」

「な、なら」

「だが、止めに来た奥村に攻撃をしたのは間違っている！」

「うっ…」

うつむくラウラ。

「では止めて帰るか、そのまま大人しく特訓をしろ。」

「…」

やるせない顔をしてＩＳを解除するラウラ。それをみたトシキがシャルルの隣に降りてきた。

「今後一切私闘を禁ずる！！解散！」

アリーナに千冬の厳しい声が響く。
ラウラはトシキを睨み付けてアリーナから出ていった。

「はぁ…」

二人を傷つけられた怒りを何とか抑えたトシキはため息をつく。

今回の原因はセシリアと鈴にあるのはわかっているが、そもそもラウラをイラつかせるのはトシキだった。だが、その原因をトシキは知らない。
ラウラのトシキへの怒りの原因は千冬を倒したことにある。
所属していた部隊でまだ落ちこぼれだった頃のラウラは、教官として来た千冬の厳しい訓練によりその部隊のエースとなるほどまで成長した。そのため、ラウラは千冬にかなり心酔している。
そんな千冬を倒してＩＳ学園に転入した者がいると聞いた。しかも、公にされてはいないＩＳを使える男が。
最強と慕い、その強さをめざすラウラはそれを聞き激怒。この世にそんな者がいるわけない。教官はそんなに弱くない。と、トシキを憎悪し存在を否定。
そして、その男の情報を集めてこいとの軍の上層部からの司令。トシキを消すチャンスと学園に転入。トシキと会い戦闘をする。

その結果、トシキの強さに苛立ち、その事実を認めたくないラウラは更に牙を向く。

それが理由だなんて、本人から聞かなきゃわかるわけがない。

トシキ達もここにいてもしょうがないため、帰る事にした。

「…」

「…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ベッドの上でセシリアと鈴が打撲の治療を受けて包帯の巻かれた状態でムスッとしている。場所は保健室で、アリーナの一件が落ち着いてすぐにきた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

二人から出てきた言葉はそれである。

「ふざけるな！あのままだったらどうなってたかわかってるのか！！」

トシキが思わず立ち上がり怒鳴り付ける。感謝してほしくて助けた訳ではないが、本当にあのままだったら命が危なかった。それなのにあの言いようでトシキをイラつかせる。

「うっ！」

その剣幕に二人は怯えた様に布団で顔の半分を隠す。

「トシキ…」

二人の気持ちがわかるシャルルがトシキを宥める。

「あ…、えとごめん。」

二人を怯えさせた事に気づき謝りうつむくトシキ。

「好きな人に格好悪いとこ見られて恥ずかしいんだよ」

「ん？何か言った？」

自分の態度にへこんでいたトシキはシャルルの声を聞いてなかったが、鈴とセシリアはちゃんと聞こえていた様で、顔を赤くして怒り始めた。

「ななな何をいってるのか、全くわかんないわ！これだからヨーロッパ人は困るのよ！！」

「べべ別に私は、そそそういう邪推をされると気分を害しますわね！！」

と、二人とも喚くが顔が更に赤くなる。

シャルルは何を言ったんだ…

「とりあえず落ち着いて、ね？」

笑みを浮かべて二人を宥めるシャルル。

「ふん！」

「失礼しまーす」

そう言って、保健室に入ってきた山田先生。
四人は軽く会釈して山田先生を見る。

「さっきお二人のＩＳを確認してきたんですが、ダメージレベルがＣを越えてます。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じますよ。ＩＳを休ませる意味も兼ねて、トーナメント参加は許可できませんが、いいですか？」

そんなんでこの二人が納得するのか？

「うっ…！わ、わかりました…」

「不本意ですが…トーナメント参加は辞退します…」

そうそう辞退するって。…ん？辞退？？あれ？？？

「わかってくるて嬉しいです。ＩＳに無理させるとそのツケはいつか自分が支払うことになりますから。肝心な所でチャンスを失うのは残念なことです。あなたたちにはそうなってほしくありませんから。」

「はい…」

「わかっていますわ…」

二人とも納得はしてないようだが、トーナメントに参加できないことは理解しているようだった。

「あ…そうか」

二人の態度の原因に気づいたトシキ。

ＩＳ基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三。ＩＳは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ＩＳのダメージがレベルCを越えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある。

それを思いだし、二人の態度の理由がわかった。

シャルルが理由に気づいたトシキに微笑む。

「あ、あの心配してくれたの？」

とりあえず話がまとまり、鈴がトシキに聞くた。セシリアが出遅れた、と鈴を睨み付けてからトシキを見る。

「わ、私の事も心配てくれましたか？」

二人が期待した目でトシキを見上げる。

「…心配してなかったら怒らないよ」

二人に微笑むトシキ。

それを聞いて嬉しそうにする二人と、ちょっと不機嫌そうになるシャルル。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

トシキとシャルルは保健室から部屋まで戻ってきていた。
何時も通りシャルルが先にシャワーを浴びている。

「うーん…、原因はオレなんだろうけど、オレが何かしたと言うよりは、オレのせいでアイツの何かが変わって怒ってる感じだよな…」

唸りながらラウラの怒っている原因を未だに探している。

正解はトシキのせいで千冬の汚名が広がり、最強と唱われた千冬に憧れているラウラは怒っている。最強は千冬のみと思っており、千冬に勝った、しかも男であるトシキに憎悪が募る。

近いようで正解ではないトシキの読み。

「奥村いるか？」

ドアをノックして千冬の声が聞こえてくる。

「はい、いますよ。」

返事をしてドアを開ける。
そこには千冬が立っていた。仕事を終えてそのまま来たようでまだスーツだ。

「どうかしたんですか？」

何かしたか、と思って原因を探る。

「いや、ちょっと話があるんだ。いいか？」

いつもの威厳ある千冬とは違う雰囲気をかもし出している。

「良いですけど、中入ってください。」

部屋の中に入るよう促すトシキ。部屋の前で立ち話では目立つし何より重要そうな話だ、聞かれたくはないだろう。

「いや、外へいくぞ」

親指を外へ向ける千冬。

「…まぁいいですけど、シャルルに言ってきますからちょっと待っててください。」

頷く千冬を見てシャワールームの前に移動する。

「ちょっと外行ってくる。すぐ帰ってくるから」

ノックしてから大きめの声で言う。

「ひゃ!?わ、わかった、気を付けて…」

驚いた様な声が聞こえたが、返事も来たため千冬の元へ戻る。

「び、ビックリした…」

思わずしゃがんでいたシャルル。脱衣場の中には入ってきてなかったが体が勝手に動いていた。

「すいません、いきましょうか」

「あぁ」

二人は寮の外へと向かっていった。

・・・・・・・・・・

二人は寮の屋上に来ていた。この時間寮の外へ出るのは禁じられているためやむなく屋上に移動。幸いにも生徒は誰もいない。

屋上のフェンスに腕を乗せてそこからの景色を見るトシキ。学園のグランドとその奥に見える街並み。前の世界と何も変わらない街並。

「話はラウラのことだ。」

「ラウラ？」

今トシキを一番悩ませている相手の名前が千冬から聞こえた。

「あぁ、アイツは私がドイツ軍の教官をしていた時の生徒の一人だ。」

「ドイツ…」

やはり真面目な話か

「そこでラウラは落ちこぼれだったんだ。」

「落ちこぼれ…？」

にわかには信じがたい言葉が聞こえた。今の強さからして落ちこぼれな訳がない。

「あ、そういうことか…」

と、頷くトシキ。

「落ちこぼれのラウラを千冬さんが鍛えて今のラウラがいる。と」

「うむ、そうだ。」

頷く千冬。

「で、お世話になった千冬さんがオレに倒されたって言うのを聞いて激怒。その憎しみをオレは受けてる訳ですね?」

「…まぁそういうことだ。すまんな、こんなことになって。」

「……いや、気にしないでください。そりゃ憧れてる人を倒されたら腹立ちますから」

苦笑いするトシキ。何かが引っ掛かるトシキ。

「それはそうだが、すまんな。」

「いや、良いですって。それのおかげで強いヤツと戦えるチャンスがあるんですから。」

微笑むトシキ。

「強いヤツと戦うことほど経験になることはないですよ。」

「…そうだな。」

フッと笑う千冬。トシキの明るさがたまに心を温めてくれるのを千冬は感じていた。

「一つ聞いていいですか？」

「ん？なんだ」

首をかしげる千冬。

「オレの情報ってどれだけ外に漏れてますか？」

「！」

驚く千冬。

その事に気づいているとは思ってなかった。戦う時以外のいつものトシキはどこか抜けてる緩い男、という印象。だが、やはり戦っていようといまいとトシキはトシキ。鋭い所もある。色恋沙汰は全くだが。

「少なくともドイツには漏れてる。もしかしたらフランスも」

「…あぁ、その通りだ。秘密を守ろうとしても穴はある。専用機のことも大抵の国は知っている。」

「ってことはあの時のアンノウンもオレの情報を得るために？」

「可能性はある。だが、何処の国か企業かはわからん。」

「そうですか…」

トシキが空を見上げる。元の世界よりも星が綺麗に見える。

「なぁもう一つ良いか？」

「何ですか？」

「お前には身内がいないって言ってたよな？」

「あ、はい。」

「お前が良かったら私の身内にならないか？」

「…は？」

その言葉に止まるトシキ。

身内？どういうこと…だ？

「それはつまり、どういうことですか？」

顔を赤くして千冬を見るトシキ。

「…何か勘違いしていないか？身内と言っても義理の弟だ。」

呆れながらやれやれと説明する。

「ですよねー…」

そうだと思ったよ！別にプロポーズだなんて思ってないし！
恥ずかしさで思わず顔をしかめてうつ向くトシキ。

「なんだ、私の夫になりたいのか？」

イタズラっぽく笑う千冬。

「なっ！？」

顔をあげてますます赤くなるトシキ。

「別に構わんぞ？お前なら」

「あｋｄえｎｓｖｇｒ」

その微笑みにトシキの思考が停止する。

「お、弟でいいですー！！」

猛スピードで屋上をかけ降りていくトシキ。

「全く…」

微笑んで空を見上げる。

「聞いてたんだろ？デュノア」

「うっ…」

屋上の扉の影からシャルルが出てきた。

「焦ったか？」

シャルルをじっと見る千冬。

「…男の僕が何故焦るんですか？」

目を合わせられないシャルルは顔を背ける。

「ほぅ、そうか」

フッと笑う千冬。
その目はシャルルの秘密を見通している様だ。トシキにも言ってない、言えない事。

「…気づいてたんですか？」

しらばっくれてもしょうがなさそうだ、と判断したシャルル。

「まぁな、あの馬鹿が気づいてない方が不思議だ」

頭を抱える千冬。

「で、さっきの続きだがお前は焦ったか？」

「…はい。」

「なら、いつまでそれを続ける気だ？アイツは倍率が高いぞ？？」

「…先生も、ですか？」

じっと睨み付ける様に千冬を見るシャルル。

「……、どうだろうな？だが、嫌いではないな。」

微笑んでシャルルの肩に軽く手を置き屋上から出ていった。

「……」

下唇を噛み拳を強く握るシャルル。

その背中を月が優しく照らす。

学年別トーナメントまで1週間！（後書き）

こんにちわ。

原作通りもそろそろ終わり、オリジナルの展開にもっていこう、と思ってます。

まだもうちょっと原作通りですが……

ふと思ったのですが、キャラ紹介みたいな回をした方がいいですか？

やってほしいというコメントが有ればやります。

学年別トーナメント

学年別トーナメント当日の朝。
トシキとシャルルは既に起床して朝食を終えていた。
まだ時間が早いため一旦部屋に戻り、それぞれのベッドに腰かけている。

「いよいよ今日だね。」

緊張しているのか表情の硬いシャルル。トーナメントのせいだけではないのだが、トシキはそれを知らない。

「あぁ、シャルルのおかげでだいぶ動けるようになったし、いいところまでいけるぞ。」

微笑むトシキ。こういう時に全く緊張感を持たないため割りと本番に強い。

「ううん、僕は殆どなにもしてないよ。もともとトシキは強かったし。」

「いいや、オレ一人だったらきっと上達してなかった。シャルルが一緒にやってくれるって言ってくれたおかげだよ。」

シャルルの手をとり微笑む。

「う、うん。」

顔を赤くしてトシキから顔をそらすシャルル。

「よし、オレ達の力を見せてやろう！」

シャルルの頭に軽く手を置き微笑む。

「うん…！」

トシキの手の温もりを感じながら頷くシャルル。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

寮の屋上にラウラが一人でたっている。

「遂に今日が来た」

千冬によりトシキと戦う事を二度も阻止され、私闘を禁じられた。そのため、トーナメントの日まで鬱憤がたまって何処にぶつければいいのかわからず、部屋にこもっていた。部屋の外に出てトシキに会えば確実に戦おうとしてしまうから。

「奥村俊貴！貴様を今日倒す！！」

空を睨み付けるラウラ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なんだ、この観客の数は…」

控え室のモニターに写るアリーナの満杯になった観客席。それを見て軽く引くトシキ。生徒達も多いが、スーツを来たお偉いさんのような人達も混ざっている。

それは見た目通りのお偉いさんで、主に高等科のスカウトが目的で来ている。

「直接関係あるのは高等科の人達だけど、中等科や僕達は軽いチェックをしに来てるんだよ。」

「ふーん…」

興味がなくなりシャルルの方に視線を写す。

「な、何？」

トシキの視線を感じて体の前に腕をもってくる。

「いや、何もないよ。」

そういってまたモニターの方に視線を戻した。トシキの頭には、未だに二人を傷つけたラウラに怒りがある。

「…」

怪訝に思いながら自分の体を見下ろすシャルル。デュノア社製の特注コルセットで男っぽい肉付きに見せるスーツのため見た感じは男。それを確めたシャルル。

（…バレて、ないよね？）

チラッとトシキの方を見るが、トシキはモニターをじっと見ていてこっちを見る気配はない。

「…むぅ」

それはそれで少しムカッとくる。

「お、あった！シャルルあったぞ！！」

トシキが顔だけ振り返りシャルルを呼ぶ。

「あったって何が？」

訳のわからないシャルルはトシキの隣に駆け寄る。

「ほれ、オレたちとオレたちの対戦相手」

左上の方を指差すトシキ。

そこはＡグループの一番目で、対戦相手は知り合いではない生徒達。

「いきなり試合だよね？」

トシキの顔を覗き込む様に見るシャルル。

「そうだな。ラウラとじゃなくて良かった。やるならもっと上の方でやりたいからな。」

「え？でも、ラウラはその次の試合で当たるんじゃないの？？」

と、自分達の場所から少し下に下げた場所を指差す。

「……」

なんとも言えない顔になるトシキ。
そこにはラウラの名前とクラスメートの名前が書かれており、一回戦を勝てばトシキ達と当たる組み合わせだった。

「…」

アリーナでの一件を思いだし拳を強く握るトシキ。

「感情的にならないでね。彼女は一年のなかで最強だと思う」

トシキの気持ちを悟ったシャルル。

「あぁ、わかってる。」

シャルルと同室であることもあり、トシキとシャルルはかなり親しくなった。殆どシャルルがトシキの気持ちを汲み気を利かすが、トシキもシャルルのことが何となくだがわかるようになった。

「さて、そろそろいこうか」

ＩＳの確認を終えてシャルルを見る。

「うん、いこう。」

頷くシャルル。

・・・・・・・・・・・・

「相手のＩＳは打鉄か。」

アリーナの中央に寄った位置に立つトシキがＩＳを確認する。

その視界の右隅にはシャルルの顔が写っている。

「うん、油断しなきゃ楽勝だよ」

オープンチャネルで微笑むシャルル。シャルルもフランスの代表候補生であり、一般の生徒には負ける気は更々ない。専用機持ちでも負ける気はないが。

「だな。瞬殺する」

刀を取りだし構えるトシキ。

「うん、援護は任せて」

シャルルがヴェントを構えて射撃体制に入る。

「あぁ、二人同時に引き付けるから隙のある方を頼む」

「了解！」

トシキが対戦相手二人に向かって瞬時加速をする。
その速さは打鉄では追い付けない速さ。

「は、はやっ！？」

そのスピードに驚き戸惑う対戦相手。

「よっ」

通り抜け様に二人が持っていた刀型近接ブレードを切り裂いた。

切り裂かれたブレードは爆煙をあげてバラバラになった。
そこへ、風を切って二人の装甲を破壊する弾丸。

「うわわっ！」

対戦相手の一人が破壊された装甲を見て慌てて交代する。

が、その二人の後ろで頭を地面の方に足を天井の方に向けた、逆さまの状態で電磁砲の砲門を向け発射する。

「わきゃあー！」

電磁砲は見事に女生徒の腹に当たり爆発し、女生徒は悲鳴をあげる。

よし、この体勢でま狙いは付けれる。

すぐに体勢を戻して刀を左の腰へと引く。

「おわぁ！？」

トシキばかりに警戒していたペアの子は背中をシャルルの砲撃で撃たれて前に吹き飛ぶ。

その先に移動していたトシキは体を沈めて、勢いよく下から上に向けて蹴りあげる。

低く呻いて女生徒は上に吹き飛ぶ。

「じゃあ、終わりだね」

シャルルがヴェントからガルムに切り替えて狙いをつける。トシキも電磁砲を向ける。

「あぁ、終わりだ」

二人同時にトリガーを引き、二人の砲撃が直撃。
対戦相手のシールドエネルギーは０。

『ビーーー！』

と、アリーナに試合終了の合図が響く。

「シールドエネルギー消失を確認。勝者、奥村・デュノア。」

そのアナウンスとともに歓声がアリーナに響く。

「…あ、しまった、本来ならオレはトーナメントに出るべきじゃなかった」

今ごろ気づいたトシキ。あまり目立たない様にしようとしていたのに、そこら中の企業が来ているなか堂々と戦い、トシキと言う存在を露見してしまった。
それは公に男でＩＳを使える者が現れた事を知らせる。
特にトーナメントに出る必要は無かったのだが、ラウラとの勝負を律儀に受けたため出ることに決めたのがトシキの参加理由。

「…どうかしたの？」

アリーナから控え室に戻ってきてシャルルが訊ねる。

「いや、何もないよ。次は確実にラウラだ。気を引き締めていこう」

微笑んでシャルルの肩に軽く手を置く。

「うん！」

強く頷くシャルル。

一方、観測室。

「ふぁー、すごいですね。少しの時間であんなに連携とれるなんて」

モニターで見ていた山田先生が感心したようにつぶやく。

「奥村くんってすごいです、才能ありますよね。」

神様から才能もらってるからね

「ふん、確かに息は合ってるがデュノアが合わせてるのもある。」

「だとしても、他人がちゃんと合わせてくれる奥村くん自身すごいじゃないですか。魅力のない人に誰も力は貸してくれないですよ」

「まぁ、そうだな」

フッと笑う千冬。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二回戦目。

トシキとシャルルの前には予想通り、シュヴァルツェア・レーゲンを身に纏った銀髪の少女がペアの少女を連れて立っている。

「やっぱり勝ったな」

トシキがフッと笑う。

「当たり前だ。お前を倒す必要があるからな」

トシキを睨み付けるラウラ。その鋭い目は獲物を狙う肉食動物の様だ。

「簡単にはやられないけどな」

「ふん、そんなことやってみないとわからん。」

既にトシキとラウラは戦闘体勢に入っている。ラウラはともかく、トシキにも怒りの雰囲気を感じる。

「トシキ、僕は手伝った方がいい？」

プライベート・チャネルでシャルルが聞いてくる。どこか不安そうだ。

「…いや、オレ一人でやるよ。ラウラの心の鎖をオレが断ち切る！」

そう言ったトシキの顔は怒りに支配されている訳でもなく、どこか頼もしく感じる。

「…わかった。じゃああのペアの子の相手をしてるよ。」

大丈夫そうだと悟ったシャルル。

「あぁ、ごめんな。」

「いいよ。その代わりちゃんと彼女を助けてあげて。」

「あぁ！必ずね」

シャルルの方を向き右の拳を出す。

シャルルも微笑み右の拳をトシキに軽くぶつける。

『ビーーーー！』

アリーナに試合開始の合図が響く。

「はあぁ！」

その合図とともにラウラはトシキへと突っ込む。

「じゃあ、よろしく！」

シャルルに微笑み、向かってくるラウラにトシキも突っ込む。

ラウラのプラズマ手刀とトシキの刀がぶつかる。

「…僕もトシキのためにあの子を倒そう。」

アサルトライフル‘ヴェント’を取りだし、手持ちぶさたなラウラのペアの子を狙う。

「！気づいた」

ロックされたことに気づいたペアの子がシャルルの方を向き横に移動する。

ちなみに、その子のＩＳはラファール・リヴァイヴで、シャルルのラファール・リヴァイブ・カスタム？の元の機体である。

「その機体の事は僕はよく知ってる！」

ヴェントでスラスターを撃ち抜く。

「あ、スラスターが…」

スラスターをピンポイントで破壊されてバランスを崩す。

「はっ！」

瞬時加速で一気に間合いを詰めるシャルル。その間にも特技のラピッド・スイッチでヴェントから近接ブレード‘ブレッド・スライサー’に高速で切り替える。

ラピッド・スイッチとは、事前に武装の呼び出しをせずに戦闘と同時進行で取り出すシャルルの特技。しかも弾薬も高速で供給され、呼び出すのと同時に照準まで合わせれる。持久戦に有利で、相手の装備に合わせて武装を選べる強みがある。

「わわっ！？」

バランスを保とうとしていたペアの子（以下、ペア子とする）の腕の装甲を破壊する。

「まだだよ！」

通り抜け様にラピッド・スイッチで切り替えたショットガン‘レイン・オブ・サタデイ’を放つ。

「きゃあああー！」

散弾によりシールドエネルギーがかなり削られる。

「さよなら」

ラピッド・スイッチでアサルトカノン‘ガルム’でペア子を撃ち抜く。

その直撃でシールドエネルギーは０になる。

「ふう…後は見学をしようかな」

念のためガルムを出したままアリーナのすみの方へペア子とともに移動する。

「くうぅ…」

焦るラウラ。

まだ左目を使ってはいないが、使わないとキツい。それほどまでに

トシキは力をつけていた。

「はあぁ！」

刀を構えてラウラに突っ込む。

「…く！」

当たるギリギリの所でかわして、ワイヤーブレードを二発放つ。

「ちっ…」

舌打ちして刀を上に高く放り投げる。

「！？」

それに驚くラウラ。

トシキは素早く腰からビームピストルを二丁取りだし、ワイヤーブレードを撃ち落とす。

そして、右手のビームピストルを腰にしまい、落ちてきた刀を受けとる。

「くっ…！」

苦い顔をするラウラ。

「そろそろ本気で来なよ。」

「！…良いだろう、貴様の強さを認めて全力で叩き潰す！！」

そう言ったラウラは左目の眼帯を外す。右目は赤で、左目は金色のオッドアイ。

その金色は越界の瞳ヴォーダン・オージェの実験の失敗によるものだった。ＩＳの適合性向上のための措置で、擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号の爆発的速度向上と超高速戦闘状況下での動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシンの移植処理のこと。

それを使用すれば視覚能力を数倍跳ね上がらせる。

「いくぞ！」

瞬時加速でラウラに突っ込む。

「はああ！」

ラウラも瞬時加速で突っ込む。

トシキは右手の刀を、ラウラも右腕のプラズマ手刀を振り抜く。

「くっ！」

通り抜け様に左手のビームピストルを乱射する。

それを急上昇してかわすラウラ。

右肩の大型レールカノンをトシキに向ける。

「墜ちろ！」

レールカノンを発射する。
それを上へと円を描いて回避し元の位置に戻るトシキ。
左手のビームピストルを腰に戻す。
「はあぁっ！」
ワイヤーブレードを四本トシキへと飛ばす。
「くっ…」
刀で四本すべてを叩き落とす。
「よっと」
ラウラの元へ戻ろうとした一本のワイヤーを掴む。火花を上げて戻ろうとするワイヤーを無理矢理自分の方へと引っ張る。装甲が無かったら手は傷だらけになっていただろう。
「なっ！？」
ワイヤーを引っ張られてトシキの方へと引き寄せられるラウラ。
「はっ！」
間合いに入ったラウラを刀で斬り裂く。
右肩の大型レールカノンは大破し、装甲が壊れる。
「くっ…、まだだ！」

トシキの腕を掴むラウラ。

「！」

ＡＩＣを使われトシキの動きが止まる。

くっ…、しまった…

「喰らえ！」

ワイヤーブレード二本を至近距離で発射する。

「くっ！」

身動きが取れず、腕の装甲を破壊され、推進翼の一本が破壊された。

ー被弾、残りエネルギー３５０

半分きったか…、そろそろ決めないと！蜃気楼、何か手は！！

ー一気にスラスターを全開にして無理矢理動けば何とかなると思います

じゃあ、頼む！

ー了解

推進翼と背中のスラスターにエネルギーが供給され、トシキがその場からラウラへと突撃する。

「よしっ！」

無理矢理動きだしたトシキに驚くラウラ。
その速度はエネルギーを大量に供給したおかげでものすごく速い。
かろうじてハイパーセンサーで動いていられる。

「くっ！」

焦ってワイヤーブレードを戻そうとするが、戻る前にラウラの腹を思いきり蹴飛ばす。

「ぐあっ…」

呻き声を上げて地面へと降下していく。

「これでっ！」

ビームライフルをラウラに向けてトリガーを引いた。

「つ…」

ビームはラウラに直撃。
そのまま地面へと落下した。

（私は…）

ラウラの視覚情報がすべてスローモーションになる。
トシキがゆっくりとビームライフルを下げるのが見える。

（私は負けるのか…）

（まだ、まだ私は目的を達成していない。それまで、それまでは）

（私は負けられない！　負けるわけにはいかない……！）

千冬に汚名を着せた本人を消すまでは負けられない！

（力が、欲しい）

ドクン……と、ラウラの奥底で何かがうごめく。

―願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、空っぽの私など、全部くれてやる！

だから、力を！最強を、唯一無二の最強を私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　ＬｅｖｅｌＤ.

Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｔｉｏｎ－Ｕｐｌｉｆｔ.

Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ－Ｃｌｅａｒ.

『Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒｅｃｅ　Ｓｙａｔｅｍ－ｂｏｏｔ.』

「うあああああ！！！」

突然、ラウラが絶叫を発する。

「な、なんだ！？」

トシキは絶叫に気づいき慌ててラウラを見る。

ーあれはＶＴシステムです

脳内に蜃気楼の声が響く。

ヴァルキリー・トレース・システム。通称ＶＴシステム。過去のモンド・グロッソの試合データを元に再現実行するシステムで、現在は使用も製作も禁止されている。

ラウラのＩＳは変形というか、装甲だったものはグニャリと粘土のようになって、ラウラを取り込んでいく。

黒くにごった闇がラウラを飲み込む。

トシキは観測室へ回線を開く。

「生徒を非難させてください！」

「わかっている！悪いが奥村」

その回線に出たのは千冬。声が焦っている。

「オレが時間を稼ぎます！だからそのうちに早く！！」

そう言って、トシキは回線をきった。

前を見ると、形を成し始めた黒い塊。

そのシュヴァルツァ・レーゲンだったものは、黒い全身装甲のＩＳに似た状態になった。ボディラインはラウラをそのまま表面化した少女のそれであり最小限のアーマーが腕と脚についている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲のしたにあるセンサーが赤い光を漏らす。
その手には刀が握られている。

ー『雪片』

それはかつて千冬が振るった刀。似てるというレベルではなく、複写だ。

「！」

黒いＩＳがトシキの懐に飛び込んでくる。刀を中腰に引いて構え居合いに見立てた必殺の一閃。

「お、おもっ…」

刀で何とか受け止めたが、その重さに腕が震える。

何だってんだ…、こいつは！
過去のモンド・グロッソのデータの一つってことはその時の参加者の動き…

雪片擬きを素早く引き上から振り下ろす。

「くっ！」

地面を蹴って後ろへと後退する。だが、雪片がかすり、脇腹を斬る。

「おい！正気にもどれ！！そんな状態になってまで勝ちたいのか！お前は！！！」

声を必死にかけるが、反応はない。

ラウラの意識はあるのか？

『緊急事態発生！トーナメントは全試合中止！鎮圧のため教師隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す』

アリーナに千冬の声が響く。

「トシキ！退こう！！」

シャルルが駆け寄って腕を掴む。

「…」

が、トシキは動こうとせずに黒いＩＳをジッと見ている。

「トシキ！！」

シャルルが珍しく怒鳴る。

「ごめん、それはできない。オレが時間を稼がないとダメなんだ。」

さっきの通信をシャルルは知らない。だから、トシキの言ってることは理解できない。

「でも！」

「違うな。オレがやらないといけないんじゃない。やりたいからやるんだ。誰かがどうとか知らん。それに、ここで引いたらまだ逃げ遅れてる人達が危険だ。」

「…戦うの？」

真剣に聞いてくるシャルル。

「あぁ、言ったろ？アイツの心を縛る鎖を断ち切るって。」

微笑んでシャルルを見てくるトシキ。

「…わかった」

ため息をつくシャルル。

「けど！」

シャルルがトシキに指を指して言う。その言葉は強く、有無を言わさないものだった。

「約束して。負けないって。」

「当たり前だ。こんだけかっこつけて負けたら男じゃない。」

「じゃあ、負けたらトシキは女子の制服で通ってね」

「はっ！上等、負けるわけがないからな！」

と、ジョークを交えた会話で、頭に上っていた血が冷めている。

「じゃあ、いってくる！」

ＩＳの状態を確認し、ちらりとシャルルの方を見る。
言葉は無いが静かに一度頷いてくれた。

それだけで充分

「データで作られた偽物が！」

刀を握りしめ、意識を集中する。

腰をおとして、居合いの構え。その目は正面に立つ黒いＩＳに集中。

瞬時加速で黒いＩＳに突っ込む。

「…」

黒いＩＳがそれを迎撃するように刀を振り下ろす。

「邪魔だぁぁ！」

振り下ろされた雪片を、刀を振り抜く。

「ぎ……」

バラバラに砕けて、雪片を弾く。

「うおおぉぉ！」

振り抜いてすぐに上に振り上げ、まっすぐ縦に振り下ろし黒いＩＳを断ち切る。

「ぎ…ぎ……が…が…ぎ……ご」

紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つになる。
そして、気を失うまでの一瞬ラウラと視線があう。眼帯が外れた金色の目と。
その目は弱り、助けてほしい、と言ってるようにも見える。

「ふぅ…、最初からそんな目してれば助けたよ」

意識を無くして倒れるラウラを抱き、つぶやく。それが聞こえたかどうかトシキには定かではないが。

・・・・・・・・・・・・

「教官はアイツが好きなんですか？」

「馬鹿め、そんなわけなかろう」

ニヤリとした顔でそう答えられた。
この会話は学園に来た当日にした会話。

それを見てますます落ち着かなくなる。自分の憧れた人にこんな顔させる男が羨ましい。
そう、ちょっとしたヤキモチだった。

そして、トシキと出会い、戦って理解した。

「強さってさ、相手をぶっ倒す力とか、お前の思ってる破壊する力も強さだと思うよ。」

「でも、それは一つの強さだ。強さなんて無数に有るとおれは思う。」

…じゃあ、お前の強さはなんなんだ?

「うーん…、おれが思うには自分がどうあるかを常に思うことだと思う。」

…そう、なのか?

「オレはそうだ。自分がどうしたいかもわかんないやつは、前へと進めない。」

前に、進む…

「そ、自分が決めた道を行く。そうじゃないと自分の人生じゃないし、やりたいことやれないから損だ」

では、お前はなぜ強くあろうとする?なぜ強い?

「うーん…、オレはまだ強くないよ。全然ね」

苦笑いしているが、その言葉に嘘はない。ラウラはポカンとする。
あれだけの力を持ちながら、強くないと言うトシキを理解できない。

「おれが強いってんなら、守りたいものがあるからかな。守るために強くなりたい。オレの全てを使って、大事な物を守るために強くいたいんだ。」

守るために強くなる。守るものがあるから強い…

「あぁ、その大事な物の中に入ってんだぞ。ラウラ・ボーデヴィッヒ」

そう言われて、ラウラの胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

「だから、守ってやるよ」

ニヤリと笑うその笑顔。

あぁ、そうか。これが…そうなのか。

ときめいてしまったのだ。

早鐘を打つ心臓。
そして理解した。千冬のあの表情の意味。
トシキの前ではただの女なのだと。

あぁ、これは確かに、惚れてしまいそうだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「う…」

ぼやける視界から天井の光を感じる。

「気がついたか」

呆然と天井を見上げるラウラに、聞き覚えがある声がする。
自らが敬愛してやまない教官の声を判断できない訳がない。

「私、は…」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。動けんだろうから無理するな」

「何が、起きたのですか？」

まだ全身に痛みが走るが、無理矢理上半身を起こし千冬を見つめる。

「ＶＴシステムは知ってるな？」

小さくため息をつき話始める千冬。

「はい。」

「それがお前のＩＳに積まれていた」

「…」

「上手く隠されていたが、操縦者の精神状態、機体のダメージ、何より操縦者の願望。それが揃うと発動する様になっていたらしい。今ドイツ軍に問い合わせている。近く委員会から強制調査がはいるだろう。」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅぅっとシーツを握りしめる。

「私が、望んだからですね」

最強を、自分が思う最強、千冬になることを

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はい！」

驚き顔をあげるラウラ。

「お前は誰だ？」

「私、は…」

続きがでてこない。今の状態では、自分がラウラだと言えなかった。

「誰でもないなら、ラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。時間はあるぞ。この学園に三年は在籍しないといけないからな。そのあとも死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「…」

自分を励ましてくれるとは思ってなかったラウラは呆気にとられた。
そんなラウラに、千冬は立ち上がりベッドから離れる。言うべきことは言った。そう言っている様な背中。

その背中は部屋から出ていった。

自分で考えて、自分で行動しろ、か

完膚無きまでの敗北。けどそれが今は心地がいい。そうラウラ・ボーデヴィッヒは、これから始まるから

学年別トーナメント（後書き）

こんにちわ

前回言ってたキャラ紹介ですが、もうちょっとオリジナルキャラが出てからにします。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標とかんけいするため、統べての一回戦は行います。場所と日時は各自個人の端末で確認の上ー』

と、誰かが学食のテレビを消す。

トシキとシャルルは晩飯を食べに食堂に来ていた。ただ、食堂終了ギリギリの時間。

トーナメントのエマージェンシーの当事者として、さっきまで教師達から事情聴取を受けていた。

慌てて戻ると、話を聞きたかったのか女子がたくさん食堂で待っていた。

時間もないから先に夕食をということでテーブルにつき現在に至る。

「やっぱし、シャルルの予想通りになったな」

「だねぇ。あ、七味とって」

「ほい」

「ありがと」

「うし、ごちそうさま。学食も寮食堂も料理がうまくて幸せだー。」

料理を食べ終えて手を合わせるトシキ。

そして気づく。周りが静かになったことに

「あ、あれ？」

なぜかさっきまで食事が終わるのを今かと心待にしていた女子達が落胆している。

「…優勝……チャンス……消えちゃった…」

「交際…無効…」

「……うえぇぇぇん！」

数十名が泣きながら走り去っていった。

「どうしたんだろうね？」

「さぁ…？」

トシキとシャルルは理由がわからない。何処から広まったかもわからない優勝したら二人と交際できる、という噂を二人は知らないから。

「そういえば一つ聞きたいんだけどいい？」

「うん、何？」

ちょうどシャルルもご飯を食べ終えニコニコ顔で答える。何故か機嫌がいい。

「ＩＳで会話、いや違うか。二人だけの空間的な所での会話ができるのか？」

「え？うーん…聞いたことある気はする。ＩＳ同士の情報交換ネッ

トワークの影響だって言われてるけど、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるっていう、あれかな。」

「たぶんそれだ。波長か…、よくわからんな」

「ＩＳはよくわからない現象が多いよ。作った人ですら全部を把握してない上に今も失踪中だし、自己進化するよう設定した部分があるから、把握するのは無理だって言ってた気がする」

「ふーん、そうなのか」

制作者もわかってないとかなんだそれ…、サボってんのかほんとにわかんないのかどっちだ

そんなことを考えていたら、シャルルの視線が棘を帯びているのに気づく。

「……それってもしかしてボーデヴィッヒさんと？」

「お？よくわかったね。そうだけど…」

「ふーん、そう」

食器を片付けにいくシャルルだが、最近の訓練のおかげで不機嫌になったのがわかる。

本人は隠しているようだが、声が少しだけ強く、歩く速度が速い。

そこへ一人の女性が二人のもとに向かってくる。

「奥村。ここにいたか」

その声の主は千冬だった。

それに気づいたシャルルが一瞬睨み付けるように千冬を見たが、食器を片付けにまた歩き出した。

「この前の話の事だが」

「この前？あぁ、弟になるってことですか？」

「あぁ、その事だがもう必要な書類も出した。」

「あれ？オレ何も記入してないですよ。」

「ん？あぁ、私が全て記入した。お前に渡すのもめんどくさかったからな」

「えぇ！？普通は本人が書くべきじゃないんですか？？」

「まぁいいだろ。もう出してしまったしな。」

「じゃあトシキはこれから奥村じゃなくて織斑になるんですか？」

食器を片付け終わりトシキの正面に座るシャルル。

「いや、苗字はそのままにしといた。その方がいいと思ってな」

フッと笑う千冬。

たまに見せる優しい微笑みはズルいよなぁー

「…」

シャルルがトシキの考えを読んだようにジト目で見る。

「まぁ正式に弟になったら書類がいくだろうからそれを確認しろ。」

「わかりました。」

「話は以上だ。夜更かしはするなよ」

そういって寮長室へと向かっていく。あ、千冬は一年の寮長も兼ねている。

「姉かー…。ってことは家族かぁ。」

トシキがボーッとしながら呟く。

「…姉じゃなくて妻がよかった?」

「な、なんだと!?」

ジト目で見てくるシャルルにトシキが戸惑う。

あの人が妻!?完全に尻に敷かれる!敷かれるというか、もう地面に埋まっちゃうぞ、これ!!

冷や汗を流すトシキ。

「さて、僕は先に部屋に戻るよ」

「あ、あぁ…」

呆然とするトシキを尻目に部屋に戻るシャルル。

「…あれ？オレは弟でいいんだよな？？」

冷静になって考えるとわからなくなってくる。
書類を確認した訳ではないからホントに弟なのか不安になる。

「まぁいいか」

弟じゃなくてもその時はその時だ。それに冗談を真に受ける様な人では無い、絶対に。と千冬を信じる。

「そっか…、この世界だとオレには家族がいないのか。」

自室へと戻るため食堂から歩き出す。

歩きながら、シミジミと今それを感じる。前の世界には当然家族はいた。だが、こっちの世界にはいない。独り、なんだな。オレはーでも、千冬さんは家族になってくれましたよ。まだ正式にではないですが

あぁ、そうだな。そこはかなり嬉しいよ。オレをどんな形にしろ家族として受け入れてくれたこと。かなり感謝してるーそれが婚姻届けでもですか？

廊下の壁にゴンと頭をぶつけたトシキ。

…その時は覚悟を決めるさ。でもそれはないだろうけどね

ーそうですね

ちっ、わかってんじゃんか、おちょくりやがったな

ー…

無視か！

また壁に頭をぶつけた。

「お、奥村くん大丈夫？」

たまたま廊下にいた三人の女子が、さっきからフラフラ歩き壁に頭をぶつけるトシキを心配そうにたずねる。

トーナメントでの一件で疲れてるのか、と本気で心配している三人。

「お？大丈夫大丈夫。ちょっと考え事してただけだから」

あはは、と笑いながら手を振るトシキ。

「そう？ならいいんだけど」

「あぁ、心配してくれてありがとう。じゃあね、おやすみ」

微笑んで三人に手を振り自室へと向かうトシキ。今度はしっかりとまっすぐ歩いている。

他のクラスの子達だろうが、自分のことを心配してくれることに嬉

しかった。

「私たちにわらってくれたよ！」
「手も振ってくれた！！」
「ヤバイ！惚れそう！！」

と、三人が騒いでいるがトシキはその声を聞いておらずそのまま自室へと向かっていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「シャルルは…シャワーか」

部屋に姿がなく、扉の方からシャワーの音がする。

「あ、そういえばボディーソープが切れてたような。シャルルちゃんと持ってったかな？」

クローゼットを開けて予備のボディーソープを確認する。

「あ、持ってってない。」

そこには予備のボディーソープが置かれているため、それを取り出す。

「困ってるかも知れないし、届けるか」

脱衣所とシャワールームはドアで区切られている。とりあえず脱衣所に置いて、声をかけとくか

そう思って脱衣所に入る。

ガチャ

「へ？」

ドア開けたよな？なんでまた音がした？？

思わず後ろを振り返ったトシキ。だが、ドアは開いていない。

あぁ、シャルルがシャワールームを開けたのか。ボディーソープを探すために

「ちょうどよかった。これ新しいボディー……ソー……プ……」

前に振り向くトシキは呆然と目の前を見つめる。

「と、とし……き……？」

「……あれ？」

そこにたっていたのは、見たことの無い女子だった。

胸がある。濡れた微妙にウェーブがかったブロンドの髪。すらりとした体は脚が長く、腰のくびれが胸を強調して見せている。

金髪で碧眼。そこから日本人ではないのがわかる。そのせいか、Ｃカップくらいのバストが大きさと関係なく際立っている。

とにもかくにも女子の全裸。視線を外さないといけないとわかっていても釘付けになる。

「あー…その」

目の前の女子を見たことがある気がしてきたが、如何せん混乱していて思考がまとまらない。

「きゃあ！！」

我に返った女子が慌てて胸を隠してシャワールームに逃げる。
そのドアの音で我に返るトシキ。

「…とりあえず、ボディーソープ置いとくから」

「う、うん」

シャワールームのドアの前にボトルを置き脱衣所を出た。

「落ち着け、落ち着け…」

オレの相部屋の相手はシャルル。
だが、その姿はなく代わりにシャワールームにいたのはブロンドの女子
あー、胸きれいだったなぁー

「違う違う！」

頭を振りさっきのビジョンを思い出さないようにする。

あー、やっぱシャルルは女だったのか
動作とか言葉がたまに男っぽくないから、もしやと思ったけど当たっちゃったか…

はぁ、とため息をつく。なんとなく前からそんな気はしていた。だから、シャルルを男として扱わずに、女として扱うようにしていた。おそらくシャルルはそれに気づいてないだろう。

あー、やべーな、シャルル普通にタイプなんだが…、スタイルも性格も……

と、またシャルルの裸を思い出してしまう。

いかん、考えないようにしないと！そうだ、これは夢だ！！夢落ちに決まってる！！！

そうこうしてる間に、脱衣所のドアが開く。

その音に思わず体がビクッとする。

「あ、上がったよ」

「あ、あぁ」

後ろから聞こえる声はシャルルのものだった。だから、なるべく意識しないように振り向いた。

「ーーー……」

だが、そこにいたのは女子。

・・・・・・・・・・

気まずい沈黙のなか、トシキと目の前の女子はお互いのベッドに腰かけて向かい合っている。だが、視線は合わない。

気まずい…、このままでは何も進展しない！声をかけるか！！

「あ、あのさぁ」

意を決したトシキが声をかけると、女子はビクッと体を震わせる。

そんなに驚かなくても…

泣きそうになるトシキ。

「えー…と、シャルルで合ってるよね？」

「…うーん、半分正解で半分外れ、かな」

あはは、と苦笑いするシャルル。

「…なんか飲む？」

「あ、うん。貰おうかな…」

何となくシャルルのいってる意味はわかったが、何か飲み物があった方が話しやすいと思った。初めて意見が合った気がする。

「…なんもねぇ。お茶でいい？」

冷蔵庫を確認するが、何もなく電気ケトルでお湯を沸かし始める。

「う、うん。」

紅茶のがいいかな?と思ったけども、お茶も好きだと言っていたのを思いだした。

お湯が沸き急須に注ぐ。
そのまま茶葉が広がるのを待つ。

「…」
「…」

茶葉が広がってきたのを確認して、湯飲みに注ぐ。

「もういいかな。はい」

「あ、ありがと……っ」

湯飲みをわたすときに指が触れて、シャルルが慌てて手を引っ込める。それでトシキは湯飲みを落としかけ、握り直したせいでお茶が手にかかった。

「っつ…」

水道のとこまで行き蛇口を全開。水がすごい勢いで流れだし手を冷やす。

「ご、ごめん!大丈夫??」

「ん?大丈夫大丈夫。気にすんな」

そういって、トシキは左手でシャルルの頭に手を置き撫でる。

「あ、ごめ」

無意識にシャルルの頭を撫でた事に気づき慌てて引っ込める。
一方、シャルルは顔を赤くしてトシキを見ていたが、頭から手が離れたのに気づき慌ててトシキの手を強引に取る。

「ちょっと見せて！…あぁ、赤くなっちゃってる。ごめんね」

お湯のかかった場所を痛々しげな表情で見つめる。

「すぐ氷もらってくるね！」

「待った！その格好で外へは行かせれない！！後で自分で往くから」

ドアに向かって行こうとしたシャルルの腕を掴む。
シャルルの格好はいつもの風呂上がりと同じシャープなラインがかっこいいジャージなのだが、バレたからだろう。胸を隠すためのコルセットをしていない。そのせいで体のラインがくっきりと浮かぶ服装をしているものだから、胸があるのがはっきりとわかる。

「でも…」

「それも大事だけどな…、さっきから胸が当たってるんだ」

「！！？！！」

全く気づいていなかったようで慌ててトシキから離れて胸を隠すように自分の体を抱く。

うん、やーらかい。

「……」

若干弱々しいが、シャルルは女子特有の抗議の眼差しを送ってきた。

「心配してるのに……トシキのえっち…」

「うぅ…」

まぁ確かに悪いのはオレだけど、男だからしょうがないよね！興味がないわけないもん！

だが、シャルルの眼差しは抗議だけでなく、恥ずかしそうでそのくせ嬉しそうにも見える顔をしている。

気のせいだな。自意識過剰だ。好きじゃない男に触られて嬉しい女子はいない。

「もう大丈夫だろう。改めて、はい」

「…うん」

今度はちゃんと受け取ったシャルル。一口お茶を口にする。

それを見てトシキもお茶を飲み喉を潤し、質問を始める。

「なんで男のフリを?その方がオレのデータを得やすいから、か?」

「！…、うん、実家の方からそうしろって言われて…」

「実家…、デュノア社の社長、か」

「うん、僕の父。その人からの命令なんだよ」

親がそんなことを言うのか?実の娘になんで…

ってか、シャルルの顔が曇りだしてきてる

「あのさ、勘違いならそれでいいんだ。でも、シャルルを傷つけることになる事を今から聞こうとしてる。嫌ならこの話は終わりにするけど、どうする?」

「…大丈夫だよ。いずれはバレる事だから今日全部話すよ」

表情は曇っているが、その目はしっかりとトシキを見ている。

「…わかった。じゃあ続けるけど、シャルルは社長の本妻の娘じゃなくて、愛人の娘、か?」

家族にそんな泥棒の様なことを普通させない。愛人の娘であってもそんなことをさせるとは思いにくいが、可能性はなきにしもあらず。

「…そうだよ。僕は愛人の子なんだ。」

予想はできてた。愛人の子という言葉の意味もわかる。だが、やはりトシキの心には少しずつだか怒りが湧いてくる。

「引き取られたのは二年前。お母さんが亡くなった時にね、父の部下が来たの。それで色々と検察をしてＩＳ適応が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは絶対に言いたくはないであろう話をそれでも健気に話してくれた。だから黙って話を聞く。

「父に会ったのは二回くらい。普段は別邸で生活してるんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったよ。本妻の人に殴られちゃった。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんも教えてくれれば、あんな戸惑わなかったのにね」

そういって愛想笑いを繋げるシャルルだが、その声は乾いていてちっとも笑ってない。そんなシャルルに愛想笑いが返せるわけがないし、シャルルも望んでないだろう。だが、怒りがどんどんと込み上げてくるため、それを抑えるのに拳を強く握りしめる。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「リヴァイヴが第二世代型だから、か。第三世代型の開発が余り進まずに政府の予算がカットされたって所か？」

「そう、ＩＳの開発はお金がすごくかかるんだ。大抵の企業は国からの支援があるから成り立ってる。でもフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されてる。国防のためもあるけど、資本力でまける国が最初のアドバンテージをとれないと悲惨なことになるんだよ」

あー、なんかセシリアがどうのこうの言ってたな…

『欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中なのですわ。そのトライアルに参加してるのは我がイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型。実

用化ではイギリスがリードしてますが、難しい状況なのです。そのための実稼働データを得るために、私がＩＳ学園に送られましたの』

だったかな。ラウラもそれとオレのデータ両方が絡んでるんだろう。

「話を戻すね。で、デュノア社も第三世代型を開発してたんだけど、元々遅れての第二世代型最後発だからね。データも時間も不足して て形にならなかった。それで、政府からの通算で予算を大幅カット、次のトライアルで選ばれなかったら援助を全面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」

「そっか…、で注目を浴びるための広告塔として男装…」

「そうだよ、それに」

シャルルはトシキから視線を逸らし、苛立ちを含んだ声で続ける。

「同じ男子なら日本で噂され始めた特異ケースと接触しやすい。使用機体と本人のデータを取れるだろう…ってね」

「やっぱり、か。」

予想はしてた。やはりその父親はシャルルを利用していただけだ。ＩＳ適応があったからそれを使おう、その程度でしか感じていないだろう。

それはシャルル自身もずっとわかってるだろう。それで妙に実の父親のことなのに他人行儀に話す。

あれは父親でなく、他人だと区別するために。

「まぁそんなところかな。でもばれちゃったし、本国に呼び戻されるだろうね。」

「…」

トシキの拳が震える。

「なんか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。後、嘘ついててゴメン」

深々と頭を下げるシャルルを、トシキは無意識に肩を掴んで顔をあげさせた。

「シャルルはそれでいいのか?」

「え?」

「いいはずない。親だからって子供の自由を奪っていいはずがない!おかしいだろ!!」

「とし…き?」

シャルルが戸惑い怯えている。けど、昂った感情が止まらない。

「親がいるから子供がいる。そうだけど、親が子供に何をしてもいいはずない!生き方を選ぶ権利は本人にある。それを例え親でも邪魔されるいわれはない!」

言って気づいた。前の世界の両親の事を。親が決めたレールの上を

ただ走る。自分の意思を殺して。自分を納得させるために、親が喜ぶからいいと言い聞かせるようにして。
まるで、自分と被るシャルル。状況は違うが、自分の意思を殺して親のいいなりになる。

「ど、どうしたの？変だよ？？」

「…ごめん、つい熱くなってしまった」

「あ、いやいいんだけど、本当にどうしたの？」

「オレも同じだったんだよ…」

「え…？」

シャルルはキョトンとする。資料ではおそらく両親不在になっているだろうから。

「その事はいずれ話すよ。でも、同じなんだよ。オレとシャルルは」

トシキが斜め下を向く。

「…そっか、でもその前に僕は代表候補生を下ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな。フランス政府が真相を知ったら黙ってないだろうし」

「シャルルはそれに従うのか？」

「僕に選ぶ権利はないから、仕方ないよ」

そういって微笑むシャルルは、痛々しいものだった。絶望を通り越した諦めがあり、シャルルにそんな顔をさせる存在が許せなくなった。同時に自分にも腹がたつ。友人一人救えない、その事に苛立ちが募る。

「…ここにいてくれ」

「え？」

「この学園にいれば少なくとも三年は大丈夫だ。本人の同意がない場合、外的介入は原則として許可されない。」

「特記事項第二一、だね。よく覚えてたね、トシキ」

「…勘違いしてるようだから言っとくけど、オレは結構勉強してるんだぞ？」

「そうだね」

シャルルが今度は屈託ない笑顔になる。

やっぱこうやって笑ってる方が可愛いな

シャルルの顔立ちの良さと、何より優しい雰囲気がトシキの目にかなり可愛く映ってしまって、その無防備さに心臓の鼓動が早くなる。

「まぁ決めるのはシャルルだ。けど、シャルルがいいならオレはシャルルの居場所になる」

「…う、うん」

その笑顔に照れて視線を外した。

「…トシキは、その…僕にいてほしいの？」

「へ？」

顔を上げると、トシキの内心を知ってか知らずかシャルルは顔を覗き込んできた。

その顔は何処か期待してる様な感じがする。

「…そうだな。今まで一緒にいて楽しかったし、オレとしては一番信頼できるのがシャルルだ。できればいてほしいよ」

恥ずかしそうに頬をかきながら素直に答えたトシキ。

その言葉を聞き嬉しそうな、でもどこか迷った感じの表情のシャルル。

「そっか…」

ふと気づいた。シャルルの襟元から見える胸の谷間に。そしてまた心臓の鼓動が早くなる。

「あーと、シャルル、少し離れようか」

「なんで？」

キョトンとするシャルル。

「あれだ、その、胸元がな…」

言われてシャルルは頬を赤らめた。

「としきは胸ばっかり気にしてるけど……見たいの？」

「なん……だと？」

「…」

「…」

シャルルの真意が掴めず動揺する。

シャルルも顔を赤らめて黙ったままで、さっきと違う気まずさがただよう。

すると、その気まずさを断つように部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「「！？」」

いきなりのノックに二人してみをすくませる。

「トシキさんいらっしゃいます？夕食がまだのようですが、具合の方でも悪いのですか？」

訪問者はセシリアのようだ。

「トシキさん？はいりますわよ？」

「まずい！とりあえずベッドに！！」

「わわっ！？」

無理矢理シャルルをベッドに寝かせてその上に布団を被せる。

その瞬間、ガチャと音がしセシリアが入ってきた。

「ど、どうしたセシリア？」

「…何をしてますの？」

セシリアが訝しげな表情をしている。

ドアを開けたらトシキが布団にくるまったシャルルの上に覆い被さっているのだから、無理はない。

「シャルルが風邪っぽいから布団をかけてたんだ。」

「日本では覆い被さる治療法があるのかしら？」

あるわけないだろ、あってたまるか！

「あれだ、シャルルは具合が悪いから寝るって。夕食はいらないみたいだし、一人で行ってくるって話してたんだ。」

「そうそう……んっ」

布団のなかからシャルルの声が聞こえる。

最後何か変な声聞こえた…

「あら、そうですの？では、私も夕食はまだですし、ご一緒しましょう。」

セシリアにそれはきこえてなかったようだが、急に態度を変えて一緒に夕食をとるという方向で話がまとまった。

「すぐ準備するから、外で待ってて」

「わかりましたわ。デュノアさんお大事に」

「うん、ありがと」

そういって部屋から出ていったセシリア。

「ふぅ、危なかった…」

トシキがため息をつく。

「…トシキって、胸が大好きなんだね」

布団から顔の半分をだして恥ずかしそうにいうシャルル。

「え…？」

そういって、自分の手を見下ろす。

「あ…」

その手は布団を下から突き上げる二つの山の一つを鷲掴みにしていた。

布団のせいで感触がいまいち分かりにくいが、柔らかいのはわかる。

「ご、ごめん」

慌てて布団から降りて謝る。

「…別によかったのに…」

その声はパニクってるトシキには聞こえていない。

「い、行ってくるからちょっと待ってて。後で何か定食もらってくるから」

「う、うん。ありがと」

「じゃあ行ってくるよ」

そういって部屋から出ていったトシキ。

「…あんなこと言われたの初めてだな」

お前の居場所になる。
その一言がシャルルの頭を回り続ける。

「嬉しい、けど…」

こんな状況じゃなかったら普通に嬉しいが、素直に喜び辛い。

でも、トシキの言葉はシャルルを動かすのに充分過ぎる威力を持っ

ていた。
その事に全く気づいてないトシキ。

シャルル・デュノア（後書き）

こんばんわ

最近かなり暑くなりましたね。熱中症に皆さん気を付けてください。

奪われた唇　初めてはラウラ

トーナメントの翌日。場所は第三アリーナ。そこにトシキとシャルルが一緒に立っている。ＩＳを展開して、目の前に立つ二人の女子を見ている。その二人もＩＳを展開している。

「はぁ…なんでこんなことに」

ため息をつき、その二人の情報を確認する。
一人は打鉄で、もう一人はラファール・リヴァイヴ。

「しょうがないよ。先生たちが足りないんだから」

シャルルが苦笑いしてトシキを宥める。
その手にはヴェントが握られている。

今は授業中で、専用機持ち二人と、一般生徒との模擬戦を行っている。１組と２組合同なのだが、鈴とセシリアはまだＩＳが治ってないため見学。ラウラもＩＳが治ってないし、怪我も治ってないため出席すらしていない。

で、普通にやれるのがトシキとシャルルだけのため、二人は５７人と模擬戦をするはめになった。

そして今現在は６組目。

「先生ー、時間以内に終わりませんよコレは」

２４組全部は授業時間内に片付かない。既に２０分は過ぎていた。

「トシキ！」

「んぁ？」

ボーッと突っ立っていたトシキにシャルルが声をあげる。その声で我に返ったトシキだが、遅すぎた。目の前に打鉄の近接ブレードを振り下ろす生徒。

「あ、あれ？」

近接ブレードがトシキを切り裂くが、それはゆったりとブレて消える。

「あ、あぶねー…」

いつの間にかアリーナの上の方に浮いているトシキ。ＩＳの名前の通りの蜃気楼を近接ブレードで切り裂いていた。

（…声あげて損しちゃった。後でお仕置きが必要かな）

心配していたシャルルは優しい笑顔を浮かべているが、紛らわしいトシキに銃口を向けたい衝動を何とか抑えている。

「よーし、ペース上げるか！」

刀を展開して、瞬時加速で打鉄へ突っ込む。

「わわっ！？」

上から斬り裂かれ、下から斬り上げられ、最後に斜めに斬られる。

「フィニッシュ！」

腰の電磁砲を至近距離で向け放つ。

「きゃあぁぁー」

打鉄に直撃し爆発。シールドエネルギーが0になり、ふらふらと地上に降りていく。

「よーし、シャルルを手伝うか」

シャルルが戦っている方を向く。

すると、既に終わっていたようで振り向いたトシキに気づいたシャルルが笑顔で手を振ってくる。

「なんだ、終わってたのか」

「トシキがボーッとしてる間に僕は攻撃してたからね」

「そっか…」

笑顔で不機嫌ではないようだが、どこか怒ってるような感じがする。

「よし、次いくぞ」

アリーナに千冬の声が響く。

そして、ピットから新しい相手が二人出てきた。

「今度はリヴァイヴ2機か…」

ため息をつき刀を量子化。
腰のビームピストルをとりだす。

「頑張ろう」

シャルルがプライベート・チャネルでトシキを励ます。

その顔を見れただけでやる気も戻りますとも！

シャルルの眩しい笑顔を見て気力が溢れてくる。エネルギーもそれで回復すればいいのに

「あぁ！」

わざわざプライベート・チャネルで励ましてくれたシャルルに微笑む。

二人を視野にいれてロック、そのままビームピストルを連射する。

「うわわっ！？」

二人はオロオロと慌ててビームをかわそうとするが、ビームが何発か当たっている。

「よっと」

そのまま二人を通りすぎ、クイックターンで電磁砲を二人にむける。

「はっしゃあぁー！」

電磁砲が二人に直撃し爆発。二人を吹き飛ばす。シャルルがいる方へと。

「いらっしゃい」

ニコッと笑うシャルルは天使のようだが、その両手に握られているのはショットガン‘レイン・オブ・サタデイ’。

「あぁぁー！」

二人は同時にエネルギー0になる。

「さすがシャルル！」

笑顔でシャルルの隣に降り立つトシキに、シャルルは微笑む。

「そんなことないよ、トシキがちゃんと僕の方に飛ばしてくれたからだよ」

「おいおい、予めショットガンに切り替えてたシャルルがそんなことというのか？打ち合わせてないのに」

「でも、僕で終わるようにダメージを調整してたでしょ？」

「買い被りすぎたぜ！」

「そっちこそ！」

と、なぜかトシキとシャルルがお互いを誉めあい始めた。

「なんか、イチャイチャしてるみたいで腹立つわね」

「あら、奇遇ですね。私もそう思ってましたわ。」

と、意見が合う鈴とセシリア。二人の額には血管が浮いている。

「何をしているのだ、馬鹿者。後がつっかえてるんだ、さっさとしろ！」

見かねた千冬が二人を声を飛ばす。

トシキとシャルルは慌てて位置につく。

「「ん？」」

二人はシャルルが何故か嬉しそうなのに気づいた。トシキをチラチラと見ながら頬を赤く染める。

（ま、まさか…）

（デュノア君は）

（（そっちの気が！？））

と、シャルルのことを知らない二人は衝撃を受けている。

口をパクパクと金魚のようにして。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして何事もなく一日の授業が終了。５７人の相手も何とか終わった。

今、トシキとシャルルは自室に戻ってきていた。

いつも通りシャルルはシャワーを先に浴びて、さっき出てきた。

その格好はジャージなのだが、バレてしまっているためコルセットを外している。学校から帰ってきて部屋にいるときは完全に女の子として生活している。

訪問者も最近はだいぶ落ち着いたため、油断してると言えば油断してる。

「シャルル、まだ飯食ってないのにその格好はまずいぞ」

シャルルの襟元からのぞく谷間にドキドキしながらも冷静に言う。

「あ、そっか。忘れてた…」

アハハ、と苦笑いするシャルル。

案外抜けてるとこもあるんだな

「まぁいいさ、食堂行ってもらってくるから待ってて。オレと同じやつでもいい？」

「あ、うん。ありがとう」

眩しい笑顔をトシキに向けて、トシキの心を浄化する。

「行ってきます！」

ビシッと敬礼して部屋から出ていった。

「なんだかトシキが前以上に優しく感じる」

そう呟き、思わず自然と顔がにやけるのに気づく。

・・・・・・・・・・・・

「も、持ってきたよー…」

「あ、おかえり。って、なんかフラフラしてない？」

「ん？あぁ、だいじょうぶだ。それよりも腹減ったろ。焼き魚定食持ってきたよ。食べれる？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

ニコッと笑いトシキからトレイを受け取り、テーブルに置いたところで表情が固まった。

トシキもシャルルの正面にトレイを置き椅子に座る。

「いただきまーす」

手を合わせてご飯を食べ始めた。

「い、いただきます」

シャルルもトシキと同様手を合わせて箸を握りおかずをつまむ。

「あっ…」

「あっ…、あっ…」

おかずを落としてシャルルは情けない声をあげる。

そして、今ごろ気づくトシキ。

「しまった…、箸苦手だったのか」

そういえば、シャルルが箸を使っているのを一度も見てない。

「う、うん。練習してるんだけど、あっ…、いまいち、ね…」

魚の身を落とす。さっきから皿の上なのでもったいなくないが、さすがにこのままでは食事が進まない。

「ごめん、スプーンもらってくる」

「え？いいよ、何とか食べてみるから」

と、シャルルの遠慮が発動。

前にもっと頼ってもいいって言ったのに、すぐにはやはり直らない。

でも、その奥ゆかしい所がシャルルらしいというかなんというか。

トシキを自然とくすぐるのだった。

「遠慮するなって、日本人でも箸をうまく使えないやつだっているんだから」

「で、でも」

「前に言ったろ？もっと甘えていいって。そんなに遠慮してたら損するよ」

「うぅ…」

「…まぁ、いきなりはむずかしいだろうし、初めはオレに頼ってよ。オレは全てにおいてシャルルの味方だ。だから、頼ってくれ」

「としき…」

考え込んでいるようだが、食事が進まないのもあり、観念したように口を開く。

「あ、あのね…」

「うん」

「その……トシキが食べさせて」

そわそわしながら言いにくそうにしてる、と思ったら、予想外の言葉に止まるトシキ。

更にトドメと言わんばかりに上目使いで続ける。

「あ、甘えていいって言ったから…」

「あぁ、言ったな。よし、そうしよう」

遠慮ばかりするシャルルが言い出したお願い。それをいま叶えずにいつ叶えると言うのか！

まぁ、その上目使いはオレの心臓を抉るがな…

可愛いくて、守りたくなるような眼差しをするシャルルのお願いを断れるやつがいたらそいつはぶっ飛ばす。

というか、そんな顔を自分以外にしてほしくない、と思った。

「よ、よーし、じゃあ、あーん」

シャルルから箸を受け取り、落としていたおかずをつまみ、口へと運ぶ。

「あ、あーん」

もぐもぐと食べるシャルルは恥ずかしいのか、頬は心なしか赤い。

「うまい？」

「う、うん、おいしい」

「そっか」

「あのね、次はご飯がいいな…」

「あいよ」

箸で一口分ぐらいの量をつまんで、手を添えシャルルの口へと運ぶ。

「あーん」

トシキのあーんに合わせて、ぱくっと食べるシャルルにドキドキする。

「次は和え物がいいな」

「ほい」

と、トシキはシャルルにご飯を食べさせてから、自分のご飯を食べた。それを見てゴメンね、とシャルルが謝るが、気にするなと笑うトシキ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

食事を終えて軽く世間話をしていると、ドアをノックする音がした。

「奥村くんとデュノア君、いますかー？」

山田先生の声が部屋に聞こえてきた。

「はーい」

二人が顔を見合わせて、トシキが出る。シャルルはコルセットをしていないため、慌ててコルセットを着ける。

「どうかしましたか？」

「あれ、デュノア君はいないんですか？」

出てきたのがトシキだけだったのを疑問に思ったのか首をかしげる。

「ああ！今ちょっと着替えの途中でして！」

まぁ嘘じゃないし

「あわわ、そうですか」

赤面する山田先生がうつ向く。

「すいません…」

シャルルがコルセットを着けて、トシキの隣に来た。

「いえいえ。あのですね、お二人に朗報です！」

顔を上げて、グッと山田先生が拳を握りしめてガッツポーズ。大きな膨らみが重たげに揺れた。

「…」

思わず見てしまって、顔を背けるトシキ。

「トシキのスケベ」

ボソッと呟いたシャルルの言葉をトシキはばっちし聞いていた。

「待てシャルル！それは誤解だ！！」

「ふん、どうだか」

くっ…、なぜだ！さっきまで機嫌良かったのに、こんなに機嫌悪くなった！！

「どうかしました？」

「いえ、なんでもないです」

シャルルがニコッと笑う。

「じゃあ続けますね。なんと、今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「な、なんですとぉー！？」

トシキが嬉しさのあまり声を上げる。
それにびっくりする二人。

風呂好きにはたまらんぜ！

「き、今日は大浴場のボイラー点検で、もともと生徒たちが使えない日なんです。で、点検が終わったので、せっかくだし男子の二人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

きたー！！素晴らしい！！この世界に来てトラブルばっかだったけど、良いことがやっときた！！

「ありがとうございます！山田先生！！」

嬉しすぎてその手を優しく両手で包み込むように握りしめて、山田先生を見つめる。

「あ、あのー、そんなに近づかれると、先生困っちゃいます…」

「へ？」

「いえ、なんでもないです！」

山田先生がチラチラと私選をトシキにむける。顔も赤い。

「あー…、んんっ！」

シャルルがわざとらしく咳をする。横目でトシキを見るが、その視線がキツイ。

あ、そうか。さっきシャワー浴びちゃったから風呂が嬉しくないのか！

と、検討違いなことを思うトシキ。

「ともかくですね、脱衣場の前で待ってますから、着替えをもって来てくださいね。先生が鍵を持ってますから」

そういって、歩いていってしまった。

だが、トシキはシャルルを見て気づく。

「どうしよう…」

「う、うん。困ったね…」

とりあえず、部屋に戻る。
シャルルはトシキ以外にまだ男で通っている。しかし、別々に入っても不自然。何より、大浴場使用。そんな使い方をすればひんしゅくを買いそうだ。

「とりあえず、着替えをもって行こうか…」

「う、うん…」

お互いに着替えの準備をして、部屋を出た。

「あ、来ましたね。どうぞ！一番風呂ですよ！」

「は、はい…」

何故かテンションが高い山田先生に見送られ、脱衣場のドアが閉まる。

「…」
「…」

沈黙

風呂に入りたい！
でも、シャルルと入るとオレの理性がもつかどうか…

一度、裸を見てはいるがそれとこれは別。

女子の裸を見てしまうのは極力避けたい。

「えーと、シャルル？」

「は、はいっ！？」

なぜに敬語…

とりあえず顔を合わせる。

「シャルルも今日は疲れただろうし、風呂入ってきなよ。オレは少ししたら部屋に戻るから」

「え？じゃあトシキは入らないの？」

「一緒に入るわけにはいかないよ。だから、シャルルはゆっくりしてきてくれ。オレはシャワーで我慢する」

ペアにしてパートナーだったシャルルのためだと思えば苦ではない。シャルルには恩も礼もある。なら、オレは尽くすさ。できること全てをやってやる。

「い、いいよ。それなら僕が脱衣場で待ってる。シャワー浴びちゃったし、お風呂ってそんなに好きじゃないし。トシキはお風呂好きなんでしょ？」

「大好きだ！！」

温泉とか特に大好きだ！

あれ？なんでシャルルは赤くなってる？？

「どうかした？」

「ど、どうも！？とにかく、トシキはお風呂にどうぞ！僕のことは気にしなくていいから、ね？」

「…いいのか？」

「う、うん」

「わかった、入るよ。」

ここまで言わせて入らないのはシャルルに失礼だ。
シャルルの視界に入らない場所へと移動して服を脱ぐ。

「じゃあ、入ってくるよ」

「う、うん。ごゆっくり！」

入る前に声をかけてみたが、驚いたような声が返ってきた。

「うわっ！すっげぇー！！」

大浴場は湯船大が一つ、ジェットとバブルのついた湯船が二つ、檜風呂が一つ。それにサウナ、全方位シャワー、打たせ滝までついてる。

すげー！半端ねっす！！これは興奮するべ！！！

「待て待て待て。まずは体を洗おう」

湯船に入るのは体を洗ってからだ！！

「くくく、ハーハッハッハッハッ！！」

冴えてる！今日のオレ冴えてるぜ！！

テンションが上がりすぎて大声で笑ってしまう。でも、一人で貸し切りの風呂なのだから気にしない！

テンションが上がりっぱなしで体を洗う。

湯船に入る前に全身を洗うのが、トシキの風呂のルール。

そして、全身を洗い終わり、待ちに待った湯船に身を沈める。

「くぅっーーー…」

全身に広がる安堵感。今までの疲労が何処かに溶けていく。

「あー…、やっぱ風呂はいいなぁー」

大浴場に満足しまくるトシキ。

それで時間を忘れて湯船に浸かっていたら、不意に扉が開く音がした。

あり？

何かタイルを歩く音も聞こえるぞ

「お、お邪魔します」

「ぐはっ！？」

声のしたほうを向くと、タオルを体に当てたシャルルがいた。
それを見て驚き湯船に倒れる。

その瞬間をばっちり見ていたシャルルは顔を赤くして逸らす。トシキのタオルの中身が思わず見えてしまった。

「な、なっ…」

「…あ、あんまり見ないで。トシキのえっち…」

「ご、ごめん！」

すぐ向きを変える。

「あぁー…やっぱり入りたかったのか？なら遠慮せずに言ってくれれば良かったのに…」

「ぼ、僕が一緒だとイヤ…？」

「いやそういう訳じゃないけど…」

イヤでは無い。だが困る。異性に興味が無いわけがない。性的な興奮が無いわけがない。
だが、貸し切りの風呂に女子と二人っきり。それはまずい。
背中越しに聞こえるシャルルの息づかいに、鼓動が早まる。

「やっぱり入ろうと思ってね。め、迷惑なら上がるよ？」

「いや、上がるならオレが上がるよ。堪能したしな。」

「ま、待って！」

立ち上がろうとした瞬間に大声で呼び止められて動きを止める。

「話があるんだ。大事な事、トシキに聞いてほしい大事な話が…」

「…わかった」

大事な話と言われて、聞かないわけにはいかない。
だが、シャルルをみるわけにもいかないから、背中を向けたまま話を聞く体勢になる。

「前に言ってた話なんだけど…」

「前って、学校に残るかどうかってやつか？」

「うん、そう。僕ね、ここにいようと思う。トシキが居場所になってくれるって言ってくれたから。」

「うん」

「…」

何故か相づちをうったのに沈黙が返ってきた。
沈黙のせいで浴場全体がしーんとする。

不意に、ちゃぷっと水が動く音がした。

「しゃ、シャルル？」

「こ、こっち見ないで！あっち向いてて！」

「あ、あぁ、ごめん」

湯気で見にくかったが、シャルルがトシキの方に向かってきてた。

な、なにするきだ…

「トシキがここにいろって言ってくれたから。居場所になってくれるって言ってくれたから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「しゃ、シャルル？」

シャルルの手がトシキを後ろから抱き締める。背中に華奢な体がひっついてきて、鼓動が更に早くなる。

そんななかでも、自分の言ったことがシャルルの役に立ったことが嬉しかった。

「後ねもう一つ決めたんだ」

「もう一つ？」

「うん、僕のあり方。トシキが教えてくれたんだよ？」

「…そうだっけ？」

「そうだよ。自分に関することは鈍感だね。憎たらしいぐらい」

「そ、そっか…ごめん」

「いいよ、許してあげる。でも、僕のことはシャルロットって呼んでくれる？二人っきりの時だけでもいいから」

「それが本当の名前か？」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかった、シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルロットが返事をした。

「あ、あのな。悪いんだが、このままの体勢は流石にきついんだ…」

背中に触れている確かな膨らみがどうあっても気になる。

「あ、ああ、うん！僕、体と髪洗っちゃうね！」

シャルロットもやっと自分の体勢に気づき、ばしゃばしゃ水音をたてトシキから離れて湯船を上がる。

「の、覗いちゃヤダよ？」

「…うん」

「……別にいいのに…」

と、小さく呟くシャルロット。トシキにはやはり聞こえてない。

「なぁ、シャルロット。シャルって呼んでもいいか?」

「え?な、なんで??」

「あ、いやならいいんだ。ただ、シャルのが呼びやすいなぁと思って」

「う、ううん、いいよ。シャル、いいなぁ!えへへ」

と、背中を向けているが顔がニコニコしているのが想像できる。

「あ、後な男子口調もオレだけの時はいいんじゃないかな?」

「う、うん。僕ー私もそうおもうんだけど、なかなか直らなくて」

「…やっぱり女の子っぽくない、かな?」

「いや、そんなことないよ。女の子っぽくないとか、そんなこと全く。オレはシャルは可愛いと思う。」

「か、可愛い?私が?ほ、本当?嘘じゃない??」

何故かしきりに聞いてくる。

「ついてないよ。ほんとにそう思ってる。」

嘘をつくつもりはないため、即答。

「そっか、そうなんだ。ーうん、じゃあ、別にいいかな」

と、頷いているシャル。

そんな会話をして、少し湯船に浸かって風呂場を出た。

着替えは別。

シャルが先にでて、トシキがあとから出た。

「じゃあ、戻ろっか」

「うん」

頷くシャルは、湯上がりのせいか頬を赤く染める。その姿はコルセットをつけていたが、濡れた後ろ髪がトシキをどきどきさせた。

・・・・・・・・・・・・・・・

翌日。

ホームルームが始まっているのだが、シャルの姿がない。
先にいってて、と言われて部屋を出たのだが何かあったのだろうか。
教室にはシャルとラウラがいないが、ラウラは怪我の治療で休みだろう。

「お、おはようございますー…」

フラフラで教室に入ってきた山田先生。

や、やめてくれ！朝からそんなに弾ませたらたまったものじゃない！

フラフラしながら歩いてきたせいで山田先生の特徴である物体が揺れる。

「奥村くん、何を考えてるかはわかりませんが、そんな目で見ないでくださいー…、先生照れちゃいますー…」

照れちゃいますー…と言ってるけど、何か微妙な表情してますよー

ってか、ごめんなさい先生

あ、セシリアが睨んでる…

アハハ、と苦笑いして手を振ってみる。

「…ふん」

プイッと前を向いてしまった。

な、なぜ怒っているのだ！

「今日はですね…、みなさんに転校生を紹介します。すでに紹介は済んでるんですが、ええと」

歯切れの悪い先生。

だが、一つその言い分にピンとくる。

紹介は済んでる転校生。思い当たる人が一人だけいた。

トシキ以外がざわざわしだす。

「とにかく、はいってください」

「失礼します」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

スカート姿のシャルロットが礼をする。トシキ以外のクラス全員がぽかんとしたまま、何故か頭を下げ返す。

な、なんで皆頭さげてんだ…

と、現状を冷静に理解したトシキが苦笑いする。

「デュノア君はデュノアさんでした。そういうことでした。……また寮の部屋を組み直す作業がぁぁ……」

ガクッとうつ向く。

それで落ち込んでたんですか

「…！」

待て待て待て！

何か忘れてる！これから何か良くないことが起こる気がする！！

「デュノア君が女の子だった……？」

「美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「って、奥村くんと同室だから知らないってことはー」
「待って待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったよね！？」

一気に教室が騒がしくなる。

ヤバイ！これはヤバイ！！確実にヤバイ！なんでかって？ヤバイからだ！！！

バァーン！と教室のドアが轟音を発てて開く。

「トシキぃー！！」

凰　鈴音。怒りを顔に表し、背後に昇竜をを纏っている。

なん、だ？あれは…、ま、まさかス○ンド！？いや、ペ○ソナか！！？

「死ね！！！！」

ＩＳアーマー展開、同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

あ、死んだー

轟音をたてて衝撃砲が発射される。

「ふー、ふー、ふー！」

怒りのせいで肩で息をしている鈴。毛を逆立てる猫のようだ。

ん？オレ生きてる？？

「…」

気づいたら鈴の前にはＩＳを纏ったラウラが立っていた。その後ろに、驚いて席から離れていたり、椅子からずっこけているクラスメート達。

よくよく考えたら、すげー迷惑なことしやがったな、鈴は

ラウラは衝撃砲を得意のＡＩＣで相殺したのかな。でも、肩の大型レールカノンがない。

立ち上がりラウラを見るトシキ。

すると、振り返りクラスメートの頭上を飛んでトシキの前に降りてきた。

「助かったよ、ありがとう。ＩＳも直ったみたいでよかった。」

「…コアは無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー、そっかーんんっ！？」

何気なく会話していたのが、何故かいきなり胸ぐらを掴まれ、ラウラに引き寄せられ、唇を奪われた。

「！？！？」

鈴を始め全員が唖然としている。当の本人トシキも呆然としている。

「お、お前は私の嫁にする！既に決定事項だ！異論は認めん！！」

「よ、嫁？婿じゃないの？？」

頭が働いていない。

「日本では気に入った相手を，嫁にする，というのが習わしだと聞いた。だから、お前を私の嫁にする！」

「な、なんだと！？この世界はそんな習わしがあったのか！！」

異世界から来たトシキは素直に信じるが、それはデタラメだ。

「そんなものあるか！」

再び衝撃砲が開く。

「無いのかよ！ってか、オレは悪くない！むしろ被害者だ！！」

「アンタが全部悪いに決まってんでしょうが！！」

はい、話し合いの時間終了。危機を感じて後ろのドアへ向かう。

鼻先をビシュッとレーザーが掠める。ゆっくりと顔をそちらに向ける。

「あら、トシキさん？お出掛けですか？私は大事なお話がありますの。ええ、急を要する大事なお話が。おほほほほ…」

血管マークが浮いているセシリアの手に握られている，スターライ

トｍｋ？’。

ヤバイ！これはヤバイ！

廊下を諦め窓へ向かう。

「あり？」

何かにぶつかった。柔らかいような固いような。

「…」

ＩＳを展開したシャルロットだった。

「にこっ」

「…あ、あは」

可愛い笑顔につられて笑顔を返す。

「トシキって他の女の子の前でキスしちゃうんだね。わ、僕、びっくたな」

「意義あり！オレはしたんじゃなくて、された……、なんで盾をオレに向けるの？」

「何でだろうね」

シャルロットの最強武器、‘灰色の鱗殻’。通称『盾殺し』。

「は、はは、ははは…」

極限を越えると人は笑うしかなくなるらしい。

なるほど、これか！

その日、ホームルームは轟音と爆音、衝撃でクラスが揺れた。

奪われた唇　初めてはラウラ（後書き）

こんにちわ。

また地震がありましね。

皆さん気を付けてくださいね。

三機のＩＳ

シャルルがシャルロットとして転校してきた日の二時限目。

えー、本日もお日柄が良くて心地いーな、おい

ボーッと外を見る俊貴。青い空に小鳥が三羽空を翔ている。

んー、これは昼寝日和だな。うん、寝よう。そうしよう。さぁ、オレを夢の世界に連れてってくれー

「奥村、何処に行こうとしてるんだ？」

「！？」

寝ようとした瞬間に、後ろから冷たい声がした。

冷や汗を流しながら、ゆっくりと振り返る。

「お、織斑、先生…」

…終わった、この一撃でオレはやられる！

千冬はトシキを見下ろしながら出席簿を振り上げる。

ん？千冬さんに怒られてもそうじゃなくても、どっちにしろこれは何処かに行くぞ、オレの意識が。天国か地獄か？決まってる！地獄だよ！！

スバァァン

と、音を発てトシキの頭に千冬のアルテマウェポンが火を噴く。

「あだっ…」

机にぶつかりそうになるトシキ。

ダメだ！無理、机に当たる！！

ガァン、と音を立て机にトシキの頭が当たる。その音にクラスメートが引く。シャルが不安げにトシキの顔をのぞきこむ。

「ん？どうした、奥村」

起き上がらないトシキに千冬が声をかける。

「なんだ、眠るなと言ってるのに、眠ってるのか。しょうがないヤツだな」

再び千冬が出席簿を振り下ろす。

「あ…！」

シャルが思わず目をつむる。

再びスパァンと音を立ててトシキの頭に出席簿が直撃する。

「だぶへ！？」

トシキが頭を擦りながら目を冷まし、周りを見渡す。

「あ、あれ?どうかしたんですか??」

寝ていた、もとい気を失っていた時の記憶がトシキにはない。

周りを見渡して、自分を見てくるクラスメート達に気づき、頭に?マークを浮かべる。

「あ、あれ?何で皆こっち見てんの??」

呆然としているシャルにトシキが聞く。

「え、えっと、額が…」

シャルが額を指差す。

「ひ、ひた…いっ!?」

指差された額をトシキの指が、腫れた額に触れる。

その腫れに引くトシキ。

「全く授業中に寝るヤツがあるか、馬鹿者」

腕組をしてトシキを睨み付ける千冬。

「おぉ…、すいません…」

たんこぶを擦りながら謝るトシキ。

「山田先生、授業を再開してください」

「は、はいっ」

今まで呆然としていた山田先生が、慌てて授業を再開する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「やっと治ったー！」

額を触って、たんこぶがあった場所を触るトシキ。

「…にしても、あんなでっかいたんこぶ初めて見たよ」

シャルが苦笑いしながら答える。その手には濡れたタオルが握られている。二時限が終わって、すぐに濡れたタオルを持ってきてくれたシャル。セシリアとラウラが、やられた！というような顔をしていた。

そのシャルのおかげでたんこぶは昼休みの頃にはなおっていた。

「いやー、シャルのおかげで治ったよ。ありがとう」

ニコニコなトシキ。

「役に立てて良かったよ。」

これまたニコニコなシャル。

「くっ…！」

一緒にいるセシリア、鈴、ラウラが悔しそうな表情。

ちなみに、今は屋上で、トシキの右にシャル、左にラウラ、シャルの隣にセシリア、鈴、と並んで円形になっている。

「俊貴、今日は訓練をやるのか？」

既に昼食を食べ終えたラウラが聞く。ほっぺたに昼食で食べていたパンのかすがついている。

「ラウラ。ちょっとおいで」

トシキがポケットからハンカチを取りだした。

「？」

首をかしげてラウラはトシキに一歩近づく。

「動くなよ」

そういって、ラウラの頭を優しく掴み、自分に近づける。

「！？」

それを見て驚くシャル達。

「…ほれ、ついてるぞ。」

ハンカチでラウラの口元を拭うトシキ。

「！」
「！！」

呆然と見ているシャル達と、一番驚いているラウラ。

「おし、綺麗になった！」

ハンカチを離して、微笑み頭を撫でるトシキ。

「ま、まぁ私の嫁だからな。」

恥ずかしそうに俊貴から顔をそらす。

「…そういうことを自然にやっちゃうんだもんなぁー…」

シャルがぼそっと呟く。

セシリアと鈴の額に血管が浮かぶ。

ーマスター、南西の方角に熱源3、学園に向かってきてます！

「熱源3！？何でこっちに！！？」

「え？何が？？」

いきなり立ち上がったトシキにびっくりするシャル達。

「…織斑先生、聞こえますか？」

ポケットから携帯を取りだして千冬にかける。

（なんで）
（織斑先生の）
（電話番号を）
（知ってるんだ!?）

上から鈴、セシリア、ラウラで最後は三人同時に思った。
シャルは、仮でも姉弟の関係だと知ってるため驚かなかったが、気にはなる。

『なんだ、どうした?』

「至急、グランドにいる生徒達を校舎に避難させてください!学園になにかが三機向かってきてます!!」

『なに!?こっちのレーダーに反応はないぞ!』

「でも蜃気楼が熱源を三つ捉えてるんですよ!今も此方にドンドン近づいてる!!」

蜃気楼の視界のレーダーの反応を伺う。

『だかな…』

「だったらオレが勝手に出たってことにしてください!勘違いならそれでいいんです!!」

『…わかった!お前は生徒達避難と教師部隊が準備できるまで時間を稼いでくれ!!』

「了解しました！」

そういって蜃気楼を展開。

「な、何？どうしたの？」

シャルも立ち上がる。

「何かが向かってきてる。シャル達も生徒の避難を手伝ってくれ！」

そういって、急上昇した俊貴。

「ちょ、ちょっと！」

鈴とセシリアが慌てて立ち上がる。

シャルとラウラはＩＳを展開して、グランドの方に降りていった。

「で、出遅れましたわ！」

「ちょっと！待ちなさいよ！！」

二人も慌ててＩＳを展開してグランドに降りていく。

・・・・・・・・・・

建物にひがいが出そうにない高さに上昇したトシキ。

その視線の先は、熱源３の反応がある方向。

「後どのくらい？」

ーもうすぐ見えてきます

「あ、あれか！」

光る三つの機体を確認した。

ー敵ＩＳ不明、パイロット、所属不明、データにありません

「アンノウンか…」

ビームライフルを展開し、アンノウンの方に向かう。

「おい、何か向かってくるぞ」

「ん？…！た、ターゲットが向かってきてるよ！！」

「はぁ？何で私たちに気づいてるのよ！」

「知らないよ！」

「おい、しゃべってないで準備しろ！パイロット共々捕縛するのが任務なのを忘れるな」

「わかってるわよ！」

「うん！」

三機が俊貴に向けて速度を上げる。

「そこのアンノウン止まれ！」

俊貴が止まり三機に声を上げる。

「うるせぇ！」

三機の内の緑色の一機が俊貴にビームライフルを向けて放つ。

「！」

横にかわすトシキ。

射ってきた…、元から戦闘が目的なのか

「はあぁ！」

青い飛行機型の機体が俊貴に突撃してきた。

どうやら、人型と飛行機の様な型に変形できるようだ。

「くっ！」

その場で横回転し、突っ込んできた青いＩＳを横から回転を利用して蹴り飛ばす。

「うあっ！？」

その蹴りを受けて降下する青いＩＳ。

「そこーっ！」

反撃をしたトシキの隙を突いて、黒いＩＳが手に持ったビームソードを振り下ろす。

「っ！」

ビームシールドを展開しソードを受け止める。
二人の間を火花が散らす。

「！」

俊貴が電磁砲を黒いＩＳに向けて放つ。

回避はできなかったようで、爆煙を上げた。

俊貴がその場から素早く後退した。

爆煙の上がった場所に他の二機が戻ってきた。

青いＩＳは人型になり、その手にはレーザーライフルが握られている。セシリアのスターライトｍｋ？に似ているような気もする。

「戦闘を停止する気は無さそうだな…」

三機が武器を構える。

「何コイツ！」

「うっとぅしい！」

「さっさと片付けるぞ！」

黒いＩＳが俊貴に突撃する。

「おちろぉー！」

レーザーライフルから俊貴に向けてレーザーが放たれる。

直線的な軌道のためにかわしやすい。

横に素早く移動してビームライフルを青いＩＳに向ける。

「させるかよ！」

射撃ビットを二基、俊貴に向けて飛ばす緑のＩＳ。

「ちっ！」

二基のビットからのビームをかわす。

しつこく俊貴を狙ってくる。

ーピピピっ、後方に敵ＩＳ

「うあぁぁぁっ！！」

「っ！」

体を後ろに反らして、黒いＩＳのビームサーベルをかわす。

「もらった！」

二基のビットが体を反らした俊貴にビームを放つ。

「くそっ！」

左腕を後ろに向けて、ビームシールドを展開。そのビームシールドにビームが何発か当たり、腕に衝撃が伝わる。

このままじゃじり貧だ…
一か八か攻めに出る！

スラスターにエネルギーを供給し、一気に真上に上昇する俊貴。

「な！？」

その勢いのまま、俊貴は青いＩＳを狙い、瞬時加速。

「は、速い！」

自分に向かってくる俊貴に驚き、武装を大きな鎌に持ち変える。エネルギー刃の鎌に。

「ふっ…」

息を吐きながら、通り抜け様に刀を振り抜く。

「な、何っ！？」

鎌はバラバラに斬り裂かれた。

その場で急旋回し、更に追撃をかける俊貴。

「はぁぁ！」

右上から左下へと斜めに斬り裂く。

「うあぁぁ！」

青いＩＳはそのまま下に向かって落ちていく。

「キール！」

山に落ちたＩＳへと声を上げる黒いＩＳ。

「シャーリィ！余所見するな！！」

「！」

黒いＩＳは緑のＩＳの声に驚き、慌てて俊貴の方に向く。

余所見した黒いＩＳの隙を逃さず、トシキはビームライフルを連射する。

「っくぅ！」

二発、肩と脚に当たり装甲が吹き飛ぶ。

「そこっ！」

バランスを崩した黒いＩＳに電磁砲を放つ。

「しまった！」

黒いＩＳの腹に直撃し、煙を上げて落下していく。

「シャーリィ！」

緑のＩＳが叫ぶが返事はない。

「ラスト一機！」

俊貴が刀を強く握り締めて、瞬時加速で距離を詰める。

「くっ！調子に乗るなぁ！！」

ビームライフルを量子化して、大きな槍を取り出す。

その槍を中腰に構えて、向かってくる俊貴に突っ込んでくる。

「な！？範囲がでかい！！」

瞬時加速で、斜め下に降下して電磁砲を向けて放つ。

「な、何だと！？」

斜め下からの電磁砲により槍の刃の部分が撃ち砕かれる。

「…」

呆然と空に浮かぶ緑のＩＳ。

「捕獲するべきかな」

様子をうかがいながら近づく俊貴。

ーピーっ、ピーっ、ピーっ

視界にアラートが表示され警告音が鳴る。

「！？」

驚き視覚情報を確認する。

「ぐあっ！」

その瞬間、背中に何かが当たり推進翼を二本破壊された。

「あ、あの二機、まだ落ちてなかったのか！」

レーダーに映る二つの点が一つの点の方に移動している。

「シュレイル！撤退しよう！！」

青いＩＳが緑のＩＳの腕を掴み飛んでいく。

「くっ！逃がすか！！」

ビームライフルを展開して、電磁砲と一緒に青いＩＳの方に向ける。

「邪魔を、するなぁ！」

青いＩＳの後ろに黒いＩＳが移動してビームライフルを放つ。

「くそっ！」

ビームをかわして再び狙いを付ける。

「！？」

俊貴が驚く。黒いＩＳと自分の間にビームライフルがあったから。

次の瞬間、ビームライフルをビームが貫き爆煙を上げる。

「！そういうことか！！」

ビームライフルを爆発させて煙幕として使う。

それは推進翼を二本破壊されて機動力が落ちた俊貴に効果的だった。

「くそっ…、何だったんだ、一体」

爆煙が晴れた時には三機の姿は小さくなっていた。

「すいません、逃げられました」

オープン・チャネルで千冬に報告する。

「そうか。だが、気にするな。三機相手に一人で撃退したんだ。お前が山のほうまで移動したおかげで被害も出なかった。良くやった」

微笑む千冬。

「…ありがとうございます。帰投します。」

「あぁ、気を付けて帰ってこい」

「はい」

ブゥン、とチャネルが切断された。

「戻ろうか」

ーイエス、マスター

ゆっくりとＩＳ学園に向けて飛ぶ。

三機のＩＳ（後書き）

こんにちわ

最近猛烈に腰が痛いです。立つのも一苦労で、湿布貼ってみたのですがあまり効果が感じられません。

うーん…、病院行った方が良いのだろうか…

そんなこより、これからもよろしくお願いします。

とある朝の悲劇と喜劇

「ごめんね、手伝ってもらっちゃって」

「気にしない気にしない」

放課後の廊下を歩く俊貴とシャル。赤い夕日が差し込み、廊下に二人の影を伸ばす。二人の手には今月の学校行事・臨海学校について書かれたプリントを持っている。

「でも、良かったの？今日はセシリア達と街に行く予定だったんでしょ？」

「そうだけど、いいんだ。シャルがいないのに行ってもしょうがないしね」

「え？」

「あれだ。好きな人と一緒の方がいいんだよ。何をするにもな」

俊貴の頬が赤くなっている。それは夕日のせいだけではないように見える。

「俊貴…」

「シャルロット…」

二人しかいない廊下で見つめ合う。そこに言葉はいらない。

廊下に伸びる影が徐々に重なってー

「ーあ、れ？」

ボーッとした頭で状況を確認する。
場所はＩＳ学園初等科寮の自室。時刻は早朝６時。

「……」

シャルはまだはっきりとしない意識のままで、二回まばたきしたところで現状を把握した。

「夢……」

はああぁぁぁ…と深くため息をつく。

（あぁ、せめてもう十秒くらい見てれば…）

夢に思いを馳せ、その名残を惜しむ。
目が覚めると急速に失われていく夢の内容も、執着からなかなか消えずに手元に残っていた。それを、お気に入りのＤＶＤを見るような感覚で、脳内リピートする。

「……」

ぼっ、とシャルロットが赤くなった。
だんだんと夢の内容が途端に恥ずかしくなってくる。

（が、学校の廊下で…）

文字通り夢見心地だった。胸に手を当てると、ドキドキと鼓動が早

くなっているのがわかる。

（わ、私は何を考えてるんだろうね…）

先週の学年別トーナメント以降、シャルル・デュノアではなく、シャルロット・デュノアに戻っているが、まだ部屋割りが決まらず俊貴と同じ部屋だった。

一週間に二回くらいは今のような夢を見るようになり、隣でぐぅぐぅ眠る俊貴に視線をやる。

「あれ？」

今もまた俊貴の方に視線を移すと何かお腹の方が盛り上がっている。

「何だろう？あんなにお腹出てなかったよね…」

首をかしげるシャル。

俊貴の呼吸に合わせてその膨らみも上下する。

「…ま、まさか！」

ハッとして慌てて視線を反らし布団を被る。

（あ、あれがもしかして……）

顔を赤らめてドキドキするシャル。話に聞いた男性の朝の生理現象。

（ちょ、ちょっとだけ…）

布団をちょっと上にあげ、その隙間から俊貴の方を見る。

「あ、あれ？」

さっき膨らんでた布団が平らになっている。
だが、少し全体的にさっきよりも盛り上がっている気がする。

「気のせいだったのかな…」

ちょっと残念そうに布団から出て、また眠りにつこうとする。また夢の続きが見れるかもしれないから。
そんな期待をしながら、シャルはまぶたを閉じた。

（夢ならもっとエッチなのでも私は構わなー）

……

「な、何を言ってるんだろうね、私は」

赤くなりながらまた布団を頭まで被り、ドキドキと高鳴る心臓をなだめるのに苦労するシャルだった。

・・・・・・・・・・・・

小鳥が鳴きながら太陽が姿を現した空を翔る。

「ん…、朝かぁ…」

小鳥の鳴き声で目が覚めた俊貴。

もうちょっと寝てたい…

この気持ちいいまどろみを延長しようとする。この時間をたのしまない人はいないだろう。

ふに

何か抱き心地がいいし…

ふにふに

あり？オレ抱き枕なんてあったっけ？？

そう思いながら、すべすべ柔らかな感触を楽しみ始める俊貴。
今までにない心地よさを放棄できようか？否！できるわけない！！

あー幸せだー…

ふにふにふに

「ん……」

ちょい待ち！なんだなんだ？明らかにオレの声じゃないぞ今の！
…ま、まさかシャル！？

俊貴の部屋にいるシャルが潜り込んできたんじゃないか。
いや、だがシャルがそんなこと…、いや一緒に風呂に入りに来たし…、だがしかし…

ん？待てよ…

一つ閃いた。攻撃を予測したみたいな感じで頭に一つのことが思い付いた。

布団を掴む、勢い良く布団をめくる。

そこには

「ら、ラウラ……いっ！？」

予想通りラウラが俊貴の体に腕を巻き付け横に寝ている。

なんやかんやあったが、今では仲良く会話する程の仲になっていた。

だが、今はそんなことどうでもいい。問題はそこじゃない。問題は、なぜか服を纏っていないことにある。全裸で俊貴の横で眠るラウラ。身に付けているのは左目の眼帯と、待機携帯のＩＳ－黒いレッグバンドのみ。

「んん…、なんだ……？朝か…？？」

「うわわ！か、隠せ！！」

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「そうかもしれんけど、まだ夫婦じゃないだろ！服を着ろ！服を！！」

朝でラウラの格好にパニクる俊貴をそっちのけ、一度目を擦りいつもの顔立ちになる。

なん、だと?あの至福の時間を自ら放棄しただと!?コイツ、できる!!

「日本ではこういうお越し方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれるもの同士の定番だと。それに、まだ夫婦じゃないってことは夫婦になってくれるんだろう?」

フッと笑うラウラ。

「いや、そういう意味じゃない!ってか、ラウラに間違えた知識を吹き込んだヤツは誰だ?」

「しかし、効果はてきめんのようだな」

「?」

「目は覚めたし、なぁ?」

「…み、見るなぁ!」

布団を自分の体に纏い赤面する俊貴。

これで目が覚めないヤツは脳か体がどうかしてる。

「しかし、朝食まで時間があるな」

シーツを身に纏い、束ねた髪をふぁさっと散らす。朝陽を受けた銀色の髪が美しく輝いている。

トーナメント以降からラウラはちょくちょくこういう予想外なこと

をするから焦る…

食事に同席はいいとして、着替えてる時に姿を現したり、大浴場に入ってるときにも現れた。

「…」

せめて寝る時とか、裸になるのを止めさせないと…

「そ、そんなに見るな。私とて恥じらいはある」

頬を染めて視線をそらす。

ぐはっ！それはかなり可愛かった……

吐血してはいないが、出そうな勢いがあった。大人しくしていれば普通にかわいいラウラ。というか大人しいのだが、やることが過激すぎて困る。

「うーん…、俊貴ー、どうかした？」

さっきから騒がしかった事で目が覚めたシャル。目を擦りながらシャルが俊貴の方を見る。

そうだ！

シャルに気づいた俊貴が一つ思い付く。

「ラウラ」

「なんだ？」

「オレはシャルみたいな和やかな子が好きなんだ。」

「ほう」

「えっ！？」

すこし驚いたようにわずかに目を開くラウラ。
シャルも呆然としている。

お？これはうまくいったのか？

「だがまあ、それはお前の好みだろう？」

「え？」

「私は私だ」

しっかりした意志を秘める瞳が俊貴を見つめてくる。心の在りかを示すように胸に当てた手が絵になっている。

「……」

あれ？今のはグッと来ちゃったよ？？

「だ、大体、お前が言った事ではないか」

んん？オレが言った事？？トーナメントの時の事か？？？

「好きなようにしろと言ったくせに…、卑怯だぞ…」

…言いました。だが、ここまで好きにされても困るのですが

というか、上目使いはやめてください。それにオレは弱いのです…

さっきの堂々とした態度から、上目使いで言ってくるのが魅力的に見える。ギャップ差のときめきみたいな感じですか、このやろー

そう思い始めたら、胸に当てた手が、俊貴の視線から隠しているように見える。

「隠せというわりには随分熱心に見てくるな」

「むっ…」

「あっ…、いや違っ」

「み、見たいというのか？朝から大胆なやつだな、お前は…」

「ちょ！待て待て待てぇ！！」

シーツを緩めたラウラに慌てる。

またシーツで隠させようとするが、ひらりとかわされてヘッドの上に倒れる。

「甘いな、ＩＳに頼ってばかりではなくて体術も訓練すべきだな」

なんだこの言い様は。まるで織斑先生だ。さすがは元教え子。目線の冷たさまで似ている。

「し、しかしそうだな…、ね、寝技の訓練をしたいなら、私が相手になってやろう…」

寝技?……!

「女の子がそんなこと言うな!」

「うむ、お前から言いたいのだな?よ、よしいつでもいいぞ?」

「だぁー!違う!!お前は先週オレにあんなことして反省なしか!?」

「あんなこと?」

首をかしげるラウラ。その仕草の可愛らしさにまたドキリとする。

「…き、キスだよ」

あのときのことを思い出してしまい顔が赤くなるのがわかる。

「は、初めてだったんだぞ…」

「え?そ、そっか…」

急に頬を赤くするラウラ。

「お、お前はどうなのだ?」

…この世界では初めてだから初めてでいい、よな?

「お、オレも初めてだった」

「そうか…嬉しくはあるな」

赤くなりながら言うラウラに言葉をなくす。

文句が言えるわけないだろー！こんな可愛い子を前にして！！

「…」

「…」

あり？なんだこの沈黙は。気まずい…意識しちゃって気まずい…

「おわっ！？」

空気を断ち切ろうと立ち上がった俊貴を、ラウラがベッドに押し倒す。

「え、えーと、ラウラ…さん？」

押し倒した俊貴に跨がり頬を赤く染めるラウラ。

「しょ、しょうがないやつだな。…女の気持ちを煽るのがどうしてこう、上手いのかしっかり聞きたいところだ」

そういってラウラがゆっくりと顔をちかづけてくる。

それにようやく気がついたシャル。

・・・・・・・・・・・・

セシリアと鈴が俊貴の部屋の前に立っていた。

「おはようございます、俊貴さん」

「俊貴、朝よ」

そういって部屋をノックする。

「？」

だが、返事が返ってこない。
中にはいるようで物音がする。
二人は顔を見合わせて、セシリアがドアノブに手をかける。

「入りますわよ、俊貴さん」

そういって、部屋に入る二人。

「「なっ！？」」
「あ」
「「ん？」」

上からセシリアと鈴、俊貴、シャルとラウラが声をあげる。

鈴とセシリアが口をパクパクさせる。

俊貴とシャルは呆然と二人を見る。
ラウラは二人に気づいたがすぐ俊貴の方を向く。

ベッドに横になる俊貴の上に裸のラウラとジャージのシャルが覆い

被さり、俊貴は抵抗らしい抵抗をしていない。
シャルはラウラに対抗意識を燃やして一緒になって俊貴の上に乗っかっていた。そもそも、俊貴がシャルみたいな子のが好きだ、と言った時から頭が混乱していてこの行動に繋がる。
他人が入ってきた事により我に返って自分のしてることに気付いた。

「な、何してんのよ！俊貴！！」
「どういう事ですか！」

二人がすごい表情で迫る。

「いやこれは…、その…」

ドキドキして抵抗をしてなかった俊貴が焦って言葉が出てこない。

「え、えっとこれは…」

シャルも言葉が出ない。

「なんだ？夫婦が一緒に寝ちゃダメなのか？？」

ラウラが俊貴から上半身を起こしてセシリア達の方を向く。

「！ば、馬鹿！起き上がるな！！」

慌ててラウラにシーツを被せようと手を伸ばす。全裸だから、起き上がれば見えてしまう。

「「あ」」

俊貴とシャルが同時に声をあげた。

「…しょうがないやつだな。他人にまで見せつけたいのか、私達の仲を」

俊貴の手はラウラの胸を鷲掴みにしていた。
それにラウラは頬を赤くしているが、何処か嬉しそうにしている。

「「と、俊貴！」」さん！！」

三人が同時に声をあげた。

「あ、いやこれは違くて…」

「全く唇の次は胸。じゃあ次は……」

と、顔を逸らして視線だけ俊貴に向けるラウラ。

この状況でその顔はマズイ！いろんな意味でマズイ！！

「いつまで！鷲掴みにしてる気よ！！」

鈴が俊貴の顔面を思いきり殴りつけた。

「だばっ！？」

勢い良くベッドに倒れ気絶する俊貴。

「…」

セシリアとラウラ、シャルが引いた目で鈴を見た。

「な…なによっ！」

やり過ぎた感は充分すぎるほどあった。全く動かなくなったから。

「あたしは悪くない！」

ふん、と部屋から出ていった鈴。

「…俊貴？」

シャルが俊貴の顔を優しくペシペシしながら呼び掛ける。

が、反応はない。

「私の嫁に拳を入れるとは！許さんぞ、凰！！」

ベッドから降りて廊下へ駆け出そうとするラウラ。

「ま、待った！その格好で外へ行くのは良くないよ！！」

シャルが慌ててラウラの腕を掴む。

「は、離せ！嫁を傷つけられて放っておけるか！！」

「だったら俊貴の介抱手伝ってよ！」

「む…、そうだな」

シャルの言う通りだと頷き外へ行こうとするのをやめる。

「ラウラは洗面所で水をくんできて。終わったらシーツ着けたままでいいから部屋に戻って制服着ておいで。セシリアは目が覚めてすぐ学校に行けるように俊貴の制服準備しといて」

「わかった」

「わかりましたわ」

二人が言われた通り準備をしだす。

「私も着替えておこう」

クローゼットから制服をとりだし、ジャージを脱いで制服を着る。

「ここに置いておくぞ」

「あ、うん、ありがとう」

ラウラが俊貴とシャルのベッドの間の小さなタンスの上に水の入った桶を置いて、部屋から出ていった。全裸で

（シーツ着けて良いって言ったのに…）

苦笑いしてその後ろ姿を見送る。

「冷た…」

桶にタオルを浸けて絞る。

「よしっと」

俊貴の額に濡れたタオルをそっと置く。
心なしか気持ち良さそうな表情になった気がする。

「シャルロットさん、制服を出しときましたわ。」

そういって俊貴の制服を大事そうに抱えるセシリア。

（あんまり強く抱き締めるとシワになっちゃうよ…）

「あ、ありがとう…そこに置いといて。ずっと持ってるとセシリアが疲れちゃう」

そういって俊貴の椅子を指差す。

「……わかりましたわ」

名残惜しそうに俊貴の制服を椅子にかける。

「…起きませんわね」

セシリアが俊貴の頬をつつく。
思ったよりもプニプニなのに興味がわいたのか嬉しそうに頬をつつくセシリア。

「そうだね…、モロに入ってたし」

それを苦笑いしながら見るシャル。前に同じように頬をつついたから。楽しそうなセシリアの顔を見て、あんな顔してたのかな、と恥

ずかしくなる。

「…こっちのがいいかな？」

そういって、俊貴の頭を持ち上げて自分の膝の上に乗せる。
太ももに俊貴の頭の重さが伝わる。

「な！ズルいですわ！！シャルロットさん！！！」

セシリアが羨ましそうに声をあげる。

「…じゃあ、半分ずつにしようか」

俊貴の顔をチラッと見てからセシリアをとなりに座らせて膝の上に俊貴の頭を半分乗せる。

何か奇妙な状態になってる…

「うふふ…、可愛い寝顔ですわ」

そういって、また俊貴の頬をつつくセシリア。
どうやらはまってしまったようだ。

「そうだね…」

シャルも思わず俊貴の頬をつつく。自然と笑顔になってることに気がつかない。

「む…、何やら楽しそうだな」

制服に着替えたラウラが、膝枕する二人を見てムッとする。

「あははは…、ラウラもおいでよ。」

あいてる手でラウラを呼ぶ。

そして、俊貴の頬は三人によって目が覚めるまで、つつかれまくることになる。

とある朝の悲劇と喜劇（後書き）

こんにちわー

最近気づいたのですが、多くの人に読んでもらってるようで作者はとても喜んでます。
嬉しすぎて、一人で乾杯してしまいました（笑）

小説を書いてるなんて誰にも言ってないですしね。

そんなことはいいとして、たくさんの人に読んでもらってるってことがわかったのでもっと上手に書けるよう精進していきたいと思います。

読んでもらってる人も、面白いと思ってくれた人も、これからよろしくお願いします。

臨海学校の準備をしよう！前編

時間は過ぎ、場所は初等科寮食堂。
シャル達の介抱で十分後に目が覚めた俊貴。
不思議なことに俊貴はセシリアと鈴が部屋に来たときから後の記憶がない。
シャルに聞いたら、頭を打ったんだよ、と苦笑い。

ベッドに押し倒されていたのは覚えているのだが、頭打つような物があったか？何かベッドの角に頭ぶつけたのかな

それでやっと朝食。
ちなみに、俊貴の隣にラウラ、正面にシャル、その隣にセシリアが座っている。

メニューは俊貴とシャルがが焼き鮭定食。ラウラとセシリアはパンとコーンスープ、チキンサラダ。

うん、コーンスープもいいな。サラダもいいな。

と、つい目移りする。

「ん？ほしいのか？」

「あ、いやそうじゃ…」

「わけてやろう」

俊貴の視線に気づき、自分の口にパンをもっていく。

ん?自分の分を食べたにしては量が少ないし……

「ん……、どうした、かじっていいぞ?」

「そんな食べ方できるか!」

立ち上がり顔を近づけてくるラウラに、顔を赤くする俊貴。

「食事の時は大人しくしてよう?ラウラ」

シャルは苦笑いしているが、口元が引きつっている。

「ふむ、確かに。」

口にくわえたパンを口に入れて椅子に座る。

た、助かった…

そう思って、シャルの方を向き手でありがとう、と会釈する俊貴。

ふと、シャルの格好に目がいく。

「と、俊貴?僕の方を見てるけどどうかした??」

「いや、大した事じゃないけど、女子の制服をしてるシャルが新鮮だなぁと」

「新鮮?」

「あぁ、似合ってて可愛いよ。」

そういってニコッと微笑む俊貴に、シャルは顔を赤くする。

「…夢じゃ男子の服着せたくせに…」

「え、何？」

「な、何でもないよ！？」

突き出した手を振って否定すると、再び朝食に手を戻す。
ちなみに、箸の使い方は俊貴のマンツーマン指導によりかなり上手になった。焼き魚の骨を綺麗に取るのも簡単だ。

「いってぇ！？」

いきなり足に激痛が走り、頬をつねられる。

「私にはそんなこと一度も言ってくれませんわね」

「お前は私の嫁だろう。私の事も誉めろ」

ジッと睨み付けてくるセシリアとラウラ。

「あー…、ふたりとも黙ってると美人だな！」

そういった瞬間、二人同時に足を踏んできた。

「一緒にするな」

あぁ、どう間違えた…
二人とも褒める最高の褒め言葉のはずなのに…

あ、足がヒリヒリすらぁ…

その瞬間予鈴がなる。

「今の予鈴か？」

慌てて立ち上って違和感に気づく。既に三人は俊貴を置いて食堂を出てダッシュしている。

「は？」

今日は織斑先生のホームルーム。

即ち遅刻は死を意味する。

「あ、あいつらっ！！」

急いで寮を出て、校舎の下駄箱に猛ダッシュ。

靴から内履きのスリッパに履き替えた。

「俊貴、早く！」

待っていてくれたらしいシャルが俊貴の手を握る。

「飛ぶよ、俊貴」

「は？」

聞き返そうとした瞬間に、シャルはＩＳの脚と背中の部分展開した。

「お、おおぉぉぉ」

体が引っ張られ、一気に三階に到着する。

…そのスカートで飛ぶのは良くない、良くないぞ。水色のパンツが見えちゃったよ。わざとじゃないよ？偶然、偶然見えちゃったんだよ…

「到着！」

「おう、ご苦労なことだ」

「…あ？」

まだ本鈴が鳴ってないのに鬼神が教室にいる。

「ん？」

チラッと横のシャルを見ると、初めて見る青ざめた顔をしている。

「敷地内で許可されてないＩＳ展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい…」

優等生のシャルが予想外の規律違反をした事にクラスメイト全員が唖然としている。

「ちょ、ちょっと待ってください！お、オレが頼んだんです！！遅刻しそうでたまたまいたシャルにやらせたんです！！」

出席簿を振り上げた千冬の前に立ち、シャルを庇う。

「ちょ、俊貴…！」

嘘を言う俊貴に驚き戸惑うシャル。だが、自分の前に立って庇ってくれた事も嬉しかった。

「お、オレが怒られたくなくてシャルに無理矢理頼んだんです」

この場にいる全員が、それは嘘だと悟った。千冬も含めて？

怒られたくなくてシャルに頼んだのに、わざわざ自分から罪を宣告するヤツはいない。

「…」

「だから、シャルを叩くのは勘弁してください！オレがシャルの分を受けますから！！」

「…ふむ、よい心がけだ。だが、罰は罰だ。」

フッと笑い出席簿が俊貴の頭に振り下ろされる。

…ヤバイ、これ絶対背か縮んだ

涙目になりつつも、頭をさすり千冬を見る。

「デュノアと奥村は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文と特別教育室での生活だ。後、奥村に免じてデュノアは出席簿をやめてやろう。」

「はい…」

二人はシュンとして席につく。
俊貴は未だに頭を擦っている。
シャルは庇ってくれた事に嬉しさが込み上げてきて、自然と笑みが浮かぶ。

「来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物はするなよ。三日間だが学園を離れる。自由時間で羽目を外しすぎないように」
七月の校外実習ー、臨海学校だ。三日間の初日が自由時間。そこは皆遊びまくるんだろう。テンションが俊貴以外上がりっぱなしである。

俊貴は水着を買うのがめんどくさい。こっちの世界に来て、水着なんて持ってないからである。
だが、一人だけ水着なしってのもあれだし、買うか。

「では、ホームルームを終わる。しっかり勉学に励めよ」
はーい、と返事をする1組女子。
それに苦笑いする俊貴。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

放課後、教室には俊貴とシャルが掃除をしている。
そもそも、ＩＳ学園は業者が毎日掃除をするため生徒は掃除をしない。だが、たまに軽い処分として使われることになったそうだ。

「…、シャルは掃除好きか？」

「え？」

「掃除は好きか？」

「うーん…、嫌いではないけど……」

苦笑いして掃除を続けるシャル。気持ちはどうあれ、ちゃんと手伝ってくれるシャル。

「ん、んんー！」

「あ、いいよ。机はオレが運ぶから」

…この机はあの人のか。教科書置きっぱの、自称『フルアーマー机』…だっけ？

「へ、平気だよ。これでも専用機持ちだし…」

そういった瞬間、シャルは重さに耐えきれず足を滑らせる。それを警戒してた俊貴が後ろからシャルを支えた。

「ほら。シャルには怪我して欲しくないから、オレがやるよ。」

「う、うん。ありがとう…」

後ろから抱き締める様に支えた俊貴にドキドキして視線をさ迷わせるシャル。

「ごめん、離れる」

「あ……」

残念というか物足りないというか、そんな感じの表情になるシャル。

「…別に、よかったのに…」

ぷぅ、と頬を膨らませて床をほうきで掃き始める。

「…？」

シャルの態度に首をかしげる俊貴。

（…顔赤くないよね？だ、大丈夫かな？？）

二人っきりの状態でさっきのハプニングもあり、だんだんと胸が高鳴ってくる。

「シャル」

「ひゃい！？」

急に話しかけられて思いっきり声が裏返る。それにシャルはすぐ口を押さえた。

「ど、どうかしたか？」

「な、なんでもない。ちょ、ちょっと考え事してたから」

「そっか」

シャルの言葉に疑問を抱かない俊貴はドンドン机を運ぶ。
これを戻し終わると掃除は終わり。そう思うと、何か寂しく感じるシャル。

「で、聞いていいか？」

「う、うん。何かな？」

「前に二人の時はシャルロットって呼んで、って言ってたろ？それでオレはまだ男のフリしてるのかな、と思ってたんだけど、翌朝女子に戻ったから、どうかしたのかなと思って。」

「あ、それは…その、俊貴にちゃんと女の子として見てほしくて…」

かあっ、と頬を赤くするシャル。

「？オレは気づいてからずっと女の子としてしか見てなかっぞ？？」

「え？それって　…」

予想外の言葉に胸をときめかせるシャル。

「だって男じゃないし」

ニコッと笑う俊貴。流石はキングオブ鈍感。

（うぅー！俊貴って、俊貴って…！！）

脳内で地団駄を踏むシャル。表情も憤りの色に変わる。

だが、そんな俊貴にドキドキしてしまうのも事実。今朝にしても可愛いと言われて胸がバクバクしていたぐらいだから。

（まあ…、嬉しくはあるんだけどね…）

ホントのとこ自分だけに言って欲しい。それが難しい事とわかってはいるが、期待はしてしまう複雑な乙女の心境。

「でな、シャル。頼みがある」

「え？…うん、何？」

「付き合ってくれ」

「—え？」

その言葉を聞いた瞬間、シャルの世界が止まった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「良かった、気持ちいいぐらい晴れたな」

日曜日。天気は晴天。

来週の臨海学校の準備をするために、俊貴はシャルと街に出かけていた。

「…」

なぜか仏頂面のシャル。

「…私は夢が砕ける音を聞いたよ…」

今朝から落ち込んだ感じのシャル。

「なぁシャル。今更言うのも何なんだけど、女の子の格好してた方がやっぱ可愛いな」

「なっ!?」

その言葉に湯気でもあがるんじゃないかと思わせる程の顔を赤く染める。

「うん、やっぱりシャルは可愛いな」

うんうん、と頷く俊貴。

ちなみにシャルの服装は半袖のホワイト・ブラウス。その下にスカート同じライトグレーのタンクトップを着ている。ふわりとしたティアードスカートはその短さもあり、シャルの脚線美を充分すぎるほど演出している。

あー…、やっぱシャルは可愛いな。

そう思っていて、ふと前を見るとシャルは顔を赤くしたまま止まっているのに気づく。

「どうした?調子悪いのか??」

そういってシャルの額を俊貴が触れる。

「ひゃっ…」

驚き俊貴の手を払いのける。

……ぐすん

何かオレ嫌われてる？

あ、だからそんな顔してるのか…

顔が赤いが睨み付けるように俊貴を見るシャル。

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

やっぱりオレ嫌われてる…

でも、そんなことした覚えがない…

流石はキングオブ鈍感。

がっくしと肩を落として落ち込む俊貴。

「…はぁ、どうせ買い物に付き合ってくれ、だと思ったよ。」

深い深いため息をつくシャル。

「…その、ごめん。オレなんかのために付き合わせて。嫌なら嫌って言ってくれて良かったんだけど、ね…」

完全にへこんでいる俊貴。声に生気を感じない。

「あ…」

その俊貴の様子に気づいたシャル。
シュンとしてしまっている。

（すごく落ち込んでる…）

「え、えーと…お礼にパフェをおごるよ」

「え？」

シャルがどうしよう、とあたふたしてると俊貴が声をかけてきた。

「け、ケーキもつける。ドリンクも」

聞き返した事に、不服だと勘違いした俊貴が更に上乗せした。

「わ、わかった。」

さすがにこの落ち込みようが不憫だと思い慌てて了承するシャル。

何だかんだでやっぱり優しいシャル。

「あ、あと、はい」

いきなり手を差し出された。
…？握手ー？
あ、違う。すごい鋭い視線で睨まれた。

手を握ればいいのかな？

そう思ってシャルの手を繋ぐ。
今日は日曜だし、混んでそうではぐれたら大変だしな。さすがはシャルだ。よく考えてる。

「……」

ん？あれ？おかしいぞ。嫌いな相手と手を繋ぐなんて普通しないぞ。
道が混んでてもそんなことするか？
ってか
顔色がまた赤いし、視線も落ち着かない。

「…大丈夫か？」

「ひゃあ！？な、何が！？」

「いや、やっぱり帰って…」

「…大丈夫！い、行こう！」

そういって歩き出すシャルに、俊貴も必然的についていく。

・・・・・・・・・・・・

駅前へと向かう俊貴とシャル。その姿を物陰から見る二人。

「…あのさぁ」

「…なんですの？」

「…あれ、手握ってない？」

「…握ってますわね」

その姿を見た人なら全員がそう返す言葉を、セシリアがひきつった笑顔で握ったペットボトルを握りつぶす。ぶしっと音をたて蓋が吹き飛ぶ。

「そっか、やっぱりそっか。ーよし、殺そう」

鈴の拳にＩＳアーマーが部分展開される。

「ほう、楽しそうだな。私も交ぜろ」

「「！？」」

いきなり背後からかけられた声に、驚き振り返るふたり。そこに立っていたのは、銀髪を靡かせるラウラだった。

「あ、あんたいつの間に！」

「そう警戒するな。今のところ、お前たちに危害は加えない」

「信じられるわけないでしょう！」

二対一で負けた事が二人の懐疑心を強くする。

「あのことは、まぁ許せ」

さらっと言葉を返すラウラに呆気にとられる二人。

原因は自分達でもあるため何とも言えない感じになる。

「おっと、俊貴をおうので、これで失礼しよう」

そういって、すたすたと歩き始めたラウラを慌てて止める二人。

「ま、待ちなさい。未知数の敵と戦うにはまず情報収集でしょ。」

「ふむ、一理あるな。」

「ここは追跡の後、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるへまきですわ」

「なるほどな、そうしよう」

こうして、おかしなトリオが結成された。

・・・・・・・・・・・・・・・

「水着売り場は…、ここか」

駅前のショッピングモールの二階に二人はいた。交通の中心でもあるここは公共交通機関が揃っている。そのためどこからでもアクセス可能。

「シャルも水着を買うのか？」

「そ、そうだね…あの、俊貴はさ、私の水着姿、見たい？」

なんだその質問…オレがどうとなじゃなくて、自分が泳ぐかどうかじゃ…

「そだな、せっかくだし泳ごう。海久しぶりだし、割りと楽しみなんだ」

「そ、そうなんだ。じゃあ、新しいの買おうかなっ」

繋いだ手に軽く力を込めたシャルが何度か頷く。

「男と女は売り場が違うし、いったん別れるか」

「あっ…」

手を離したら、シャルがジーっと俊貴の方をみつめる。何か言いたそうな表情だ

「…どうかした？」

「…ううん、なんでもないよ」

「そっか。じゃあ三十分後にまたここな」

「うん、わかった。」

うなずき水着売り場に向かうシャル。

「さて、オレも自分の選びに行こう」

ここに来て、自分の家族として迎えてくれた千冬によりお金も少しはある。それに引け目を感じていてバイトを探しているが、学園は国が運営してるため色々タダ。楽なのは楽なのだが、何か微妙な感

じになる。

あー…これでいいか。オレのパーソナルカラーは黒と赤だしな、うん

他の色を無視して、黒ベースの赤いラインが入ったハーフパンツのような水着を手に取る。

まだ時間あるけど、女の子待たせるよりはいいか

そう思って、シャルと別れた場所に向かう。

が、そこにはすでにシャルがいた。

「あれ?早いな、もう買ったのか?」

「あ、ううん。俊貴にね、選んで欲しいなぁって思って」

「そっか、じゃあ見に行こうか」

そういって女性用の水着売り場に足を踏み入れる。

「じゃあ、えっと水着を見てくれるかな?」

「あぁ。」

返事をした瞬間俊貴をシャルが引っ張る。

そのままシャルは俊貴と一緒に試着室に入ってしまった。

…へ?シャルはオレをつれてなぜ試着室に…?

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないとわかんないし、ね？」

ね？って言われてもこの状況……オレにどうしろと！？

「す、すぐ着替えるから待ってて」

「じゃ、じゃあ外に…」

「だ、ダメ！」

えー…ダメって言われても…

「時間はかからないから」

そういって、上着を脱ぎ始めるシャル。

「なっ！？」

慌ててシャルに背を向けた。

背中越しに聞こえる衣服の擦れる音が俊貴の心臓の鼓動を早める。

さらに女子の甘い匂いが頭をくらくらさせる。

ヤバイ…耐えるんだオレ！

トドメとばかりに、シャルの脱いだ衣服の上に軽いものが置かれたような音がした。

…もしかして下着を脱いだ？振り向くと今シャルは…裸…

がああぁ！オレにどうしろというんだ！！

（どうしよう…、勢いでこんなことしちゃったけど…）

俊貴が悶絶してる時、シャルも顔を赤くしている。

そもそも俊貴を連れて試着室に入ったのは例の追跡トリオに気づいたからである。

ＩＳの‘コア・ネットワーク’によりシャルはトリオに気づいた。

コア・ネットワークによる位置情報の特定を避けるために、潜伏モードを使用する。

その潜伏モードに三人がなっているため現在位置がわからない。それはわかられたくない状況である事を示す。あの三人が同じタイミングで潜伏モード。それはシャル達二人にきづかれないように尾行しているとわかったわけだ。

（んー…、三人とも早く諦めてくれないかな…）

今は俊貴と二人っきりのデート。シャルはそう思っている。

（で、でもさすがにこれはやりすぎたかも…）

チラッと背中越しに俊貴の姿を確認する。

壁に静かに頭を打ち付けている俊貴がいる。

（…な、何で頭を打ち付けて…？…それより変な子だって思われてないよね…？）

俊貴を止めようにもまだ上半身裸。

（で、でも、俊貴は激鈍だし、……あぁもう、勢いでしちゃえ！）

シャルは真っ赤になった顔で、勢いよく下着を脱いで脚から抜き取る。それを服の上に重ねて、裸の体に水着を着ていく。

「い、いいよ」

「あ、あぁ」

見てもらうために着替えたので当然だが、やはり俊貴の視線にシャルは落ち着かなくなる。もじもじと指を動かし、俊貴の言葉を待つ。

「に、似合っててかわいいよ…」

照れながら頬をかき答える俊貴。

（なんか、あんまり見てくれない…。み、水着が変だったかな?あ、改めて見ると、これって結構大胆な水着だよね…）

セパレートとワンピースの間をとったような水着で、上下にわかれているそれを背中でクロスして繋げる構造。色は鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランスよく膨らんでる胸の谷間を強調している。

「あ、あのもう1つあってー」

「そ、それが似合うよ!うん、オレはそれがいい!!」

また着替えが始まると思い、慌てて答える俊貴。

「じゃ、じゃあこれにするね!」

嬉しそうに答えるシャル。

「あ、あぁ。じゃあオレは外にいるから」

シャルに有無を言わさず試着室を出ようとドアを開ける。

「え？」
「えっ？」
「えええっ？」

ドアを開けたら、そこには山田先生がたっていた。その後ろに千冬を引き連れて。
そして、状況に気づいた千冬が頭を押さえる。

「何をしている、バカ者が…」

臨海学校の準備をしよう！前編（後書き）

こんばんわ！

だんだんと銀の福音戦が近づいて来ました。
割りと好きな所だったりするんで、楽しみではあります。

では、読んで頂きありがとうございます。良かったらコメントもお願いします。

「水着を買いにですか。でも試着室に二人ではいるのは感心しませんよ」

「す、すみません…」

頭を下げるシャル。なんか最近怒られてばっかだな。それにオレのせいな気もする、ごめん。

「ところで山田先生と織斑先生はどうしてここに？」

シャルがこれ以上責められないように話題を変える。

「私たちも水着を買いに来たんですよ。」

「それと、今は職務中じゃない。先生と呼ばなくてもいい」

千冬がそう言ったが、何とも千冬さんと呼びにくい。姉弟となったのに、姉さんというのもなんか照れる。

「それより、そこの二人も出てきたら？」

柱の影の二人に聴く俊貴。

「そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

そういいながら、鈴とセシリアが出てきた。

「街から付いてきてたみたいで、気にはなってたんだ」

「じょ、女子には男子に知られたくない買い物があんの！」

「そ、そうですわ！俊貴さんデリカシー無さすぎて呆れてしまいますわ」

…なんでオレが非難されるんだよ

「さっさと買い物を済ませて退散しよう」

ため息をつく千冬。

その手には水着を持っている。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。場所がわからないので凰さんとオルコットさん、デュノアさんもついてきてください。」

あ、あれ？シャルまで連れてっちゃうの？？

そう思いながら三人を連れて離れていく山田先生。

「…まったく、山田先生は余計な気を使う」

「は？」

「いや…何でもない。俊貴」

「は、はい。何ですか？」

名前で呼ばれてぎくしゃくした反応になる。そんな俊貴に苦笑いす

る千冬。

「さっきも言ったが、今は職務中じゃない。敬語じゃなくていい。この場ではただの姉弟だろ」

「…うん」

どうやら姉弟水入らずらしい。二人が姉弟の関係なのを知ってるのはシャルと山田先生だけである。

「で、俊貴。どっちがいいと思う？」

そういって、二着の水着を見せてくる。
スポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出する黒い水着。
もう片方は、一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白い水着。
どっちもビキニで、露出は高い。

（黒のが似合いそうだけど、白のが好きそう…）

と、考える俊貴。
いやまて、黒いのにすると男が寄り付いてくるんじゃ…
この世界で独りのオレに家族として迎えてくれたこの人に群がる男ども。
…うん、見たくない。なら白い方が

「白の方が」

自然に言った感じだが、なぜか苦笑いする千冬。

「黒の方か」

「！…いや、白の」

「嘘をつけ。黒の方を注視しておいて何をいってる。」

…バレてた

「まったく余計な心配はするな。大体、私がその辺りにいる程度の男になびくように見えるか？」

「いや、見えないけど…。そういえば千冬さんは彼氏いないの？そういう話聞かないけど」

「手のかかるヤツが落ち着いたらな。」

「手のかかるヤツ？」

キョトンと首をかしげる俊貴。自分のことだとは微塵も思ってない。

それに苦笑いする千冬。

「で、お前の方はどうなんだ？」

「え、オレ？何が？？」

「お前は彼女を作らないのか？幸い学園内には腐るほど女がいるし、選り取りみどりだろう？」

いやいや、そういうことじゃ…

「そうだな…、ラウラはどうだ?色々と問題はあるが、一途でいいやつだぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「…確かに」

うんうん、と頷く俊貴。それに微笑む千冬。

「それに、キスした仲だろ?」

…忘れてたことを思い出させてくれる。チクショウ、また顔が熱くなってきたぜ

「まんざらでもなさそうだな」

「まだよくわからんけどね…」

「ふむ、そうか。容姿は好きな方か?」

「…まぁ、可愛くはあると思うよ」

「ほう」

「うん、ラウラは可愛いよ」

そういってうんうん頷く。

パサッと床に何か落ちる音がした。

「「ん?」」

二人が音のしたほうを見ると、ラウラが顔を赤くして立っていた。
足元にはこの水着売り場の紙袋が落ちている。

「まぁ、私の心配より自分の方をどうにかするんだな。私はまだ、弟に心配されるような歳ではないさ」

「…あ、あい」

自分の言ったことをラウラが聞いていた事に気づき呆然とする俊貴。
ニヤリと笑みを残し、千冬はレジのほうへ歩いていく。

「…」
「…」

その場に残されたラウラと俊貴。

「えっと、水着買ったのか？」

ぎこちなくラウラに聴く俊貴。

「う、うむ。新しいのをアドバイスをもらって、買ってきた」

「そ、そっか」

「…み、見たいのか？」

その言葉に、さっきのシャルとの事を思い出す俊貴。

さすがにキツい！

「い、いや、臨海学校まで我慢するよ。その時まで、た、楽しみにしときたい」

と、無意識でそんなことを言う俊貴。

「そ、そうか。ならその時まで楽しみにしていいろ。」

赤くなりながら、慌てて紙袋を拾い上げ走って行ってしまった。

「…なんだ、さっきの微妙な空気は」

俊貴が呆然とその場に立ち尽くす。その場所が女性用の水着売り場なのを忘れて。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

水着も買い終わり、何故かヘトヘトになっていた鈴とセシリアはさっさと寮へと帰っていった。その後に、山田先生と千冬もついて帰る。

俊貴とシャルはその後をゆっくりと歩いている。

「なんで、あの二人あんな疲れてるんだ？」

「え？あぁ、上の階にあったゲームセンターでダンスゲームを二人が勝負しはじめて…」

「それであの状態か…」

「うん…」

苦笑いする二人。

「なんか、結局いつものメンバーで買い物になっちゃったな」

「そうだね…」

頷くシャルの顔が何処と無くシュンとしてる気がする。

「どうかした？」

シャルの顔をのぞきこむ俊貴。

「だ、大丈夫だよ！」

そういって、慌てて顔をそらすシャル。

「ねー、君俺らと遊ぼうよ」

「ん？」

下品な声のした方を二人が見る。

「あ、あの困ります…」

三人の男に囲まれた女子がいた。その顔は完全に困ってる顔。

周りの人は見て見ぬふり。

「なぁ俺らと良いことしようぜ！」

「…シャル、ちょっと待ってて」

そういって、俊貴は三人のアホどもに囲まれた少女の元に行く。

「…まぁ俊貴だし、しょうがないか」

複雑な顔をするシャル。自分だけ見てて欲しいけど、ああやって誰かのために動くのも俊貴なためしょうがないか、とため息をつく。

「なぁ行こうぜ。いいだろ？」

「！い、いや！！」

三人の内の一人が少女の腕を掴む。
それに少女は心底嫌そうな声をあげた。

「おい、汚い手でその子に触んな」

少女の腕を掴む手を思いきり握りしめて腕から離す俊貴。
その力は万力に挟まれたかの様なもので、一人が情けない声をあげる。

まだこの世界にこういう男がいることに驚いたが、それはそれ。
そう思い、ギリギリと手を握りしめる。

「は、離せ！くそが！！」

そういって振りほどこうとする男。

「はい」

勢いよく手を振りほどこうとする男の手をいきなり離し、後ろにずっこける。

少女の前に立ち、男達から守る形で俊貴が男達を睨み付ける。

「おい、何してんだ、このカス！」

そういって、俊貴の胸元を掴む。

「情けねぇな、そんなんだから男はバカにされんだよ。何かと暴力で解決しようとして、頭を使え」

冷静に胸ぐらを掴まれながら話す俊貴に、少女があたふたし始める。

「あぁ？なにいってんだ、お前は」

「わかんないかなぁ…。まぁ無理か。わかるならこんなことしないしな。」

「後三秒で離さないなら痛い目にあうぞ」

そういって秒数を数え始めた。

「はぁ？お前がか？」

「はい、時間切れ。」

そう言った瞬間、俊貴が男の腕を掴む。

「うぐっ！」

その力の強さに胸ぐらから手が離れる。

「警告はした。離さなかったお前らが悪い」

そういって、俊貴は男を一本背負いで男を道路に叩きつける。

「て、てめぇ！！」

男が俊貴の顔面を殴ろうと拳を振るう。

が、その拳は俊貴の掌に受け止められ、思いきり男の顔面を殴り飛ばす。

「あーぁ、結局オレも同じ暴力で暴力をつぶしてんだよなぁ…。会話で止めたかったんだけど」

そう言いながら、腰を抜かす男の方を見る。

「ひ…」

「いいか、一つ良いことを教えてやる」

そういって、男の前に行く俊貴。

そして、おもいっきり男の股の間に拳を降り下ろす。

アスファルトが大きな音をたてて穴を開ける。

「ひいぃ！？」

その腕にはＩＳが部分展開されている。

「本気でやったらお前ら死んでんだよ」

ニコッと笑ってＩＳを解除し、道路から拳を抜く。

「ば、化け物ー！！」

そういって、他の二人を連れて走って逃げていった。

「化け物って…。ＩＳ使っただけじゃん、馬鹿が」

そういって、逃げていく後ろ姿を見る俊貴。

その俊貴の背中を顔を赤くして呆然とし見ている少女。

「はぁ、大丈夫だった？」

俊貴が振り返り少女の方を向く。

「え？あ、はい。大丈夫です。ありがとうございます」

呆然としている少女。

あ、あれ？なんで顔赤くなってるんだ？さっきの連中に怒ってるのか？

まぁ、それはしょうがないか。オレもイラッと来たし。

「一人？連れの人とかいないの？」

周りを見渡して連れの人が来ないか探す俊貴。

「あ、一人で来たんで…」

「そっか、良かったら家まで送ってくけどどうする？」

ニコッと微笑む俊貴。
その笑顔にドキッとする少女。

「そこまで迷惑かけれません。あの連れの人もいますし、一人で帰れますので」

そういって、シャルの方をチラッと見た少女。
それに気づいたシャルがペコリと軽くお辞儀する。
それに律儀にお辞儀し返す少女。
腰まで伸びた長い赤髪がお辞儀に合わせて道路ギリギリまで垂れる。

「そう。じゃあ、気を付けて」

少女に手を振りシャルの元に行こうと向きを変える。

「あ、あの！」

後ろから少女が声をあげた。

「ん？」

振り返ると、少女は白いスカートを握りしめて顔を赤くしている。

「お、お名前教えてください！」

少女の声が周囲に響き、周りを歩いていた人が止まり二人の方を見る。シャルもムッとしながらそれを見る。

「名前？えーと、奥村俊貴だよ」

その周りの視線に苦笑いする俊貴。

な、何故にこんな注目を…

「奥村、俊貴さん。あ、あの良かったら携帯の番号も教えてもらえたら…」

そういって、モジモジしながらスカートのポケットから携帯を取りだし上目遣いで俊貴を見る。

「…まぁいいか」

ちょっと考えて携帯を取りだし自分の番号を赤外線で送信しようとする。

「はい」

ピッと俊貴の携帯の番号が少女に送られる。

「じゃ、じゃあ私も」

「うん」

そういって、少女も携帯を弄り俊貴の携帯に近づける。

ピッと音がし、俊貴の携帯に少女の携帯の番号が送られてきた。

五反田蘭っていうのか、歳も近そうだな

「あ、ありがとうございます」

蘭が緊張した、でも笑顔を俊貴に向ける。

「どういたしまして」

ニコッと俊貴も笑う。

「じゃ、じゃあ失礼します！」

そういって、タタタッと走って行ってしまった。

…何か良い子そうだな

そう思いながらシャルの元に戻ってきた。

「ごめんね、お待たせ」

俊貴が顔の前に手を持っていき謝る。

「…あの子と番号交換したんだね」

ムスッとしてるシャル。目をあわせてくれない。

「あ、あぁ。」

「…ばか」

プイッと顔を背けるシャル。

ううっ…、何か不機嫌だ

「あ！」

ふと気づいた。

何か邪魔されてばっかだし、それで不機嫌なのか！さすがにシャルが可愛そうだな。何か元気になりそうなもの…

「お！ちょっと待ってて。すぐ戻ってくるから」

「うん…」

シャルは呆然と頷く。

俊貴はたまたま見つけたアクセサリー屋に向かっていった。

「すぐ戻ってくるって行ってたし、ちょっと待とうか」

そう言いながら、ため息をつく。

「ごめんごめん」

そういって、俊貴がシャルの元に戻ってきた。

「あ、うん」

それに気づき俊貴の方を向く。

「はい、コレ」

そういって、1つの包装された箱をシャルに渡す。

「え、何？」

手に乗せたまま俊貴に聞く。

「うーん、特に意味はないけどプレゼント。まぁ、今日のお礼として受け取って」

そういって、微笑む俊貴。

「い、いいの？」

「あぁ。いいの。気に入るかはわかんないけどね」

照れながら頬をかく。

「ありがとう、開けていい？」

まさか俊貴にプレゼントを貰うと思ってなかったためドキドキするシャル。

「いいよ。」

頷く俊貴。

シャルが嬉しそうに包装を開け出した。

「わあっ！ありがとう！！」

その箱の中には、綺麗な銀色のブレスレットが入っていた。

それを手に取り嬉しそうに左手首につけるシャル。

「気に入ってくれた？」

「うん！ありがとう！俊貴！！」

屈託ない笑顔でホントに嬉しそうなシャル。

やっぱシャルは笑ってるほうがかわいいなー…

「どういたしまして」

その笑顔につられて笑顔になる俊貴。

端から見たら確実にカップルと勘違いしかねない状況。それをセシリアと鈴が悔しそうに見ていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

その夜、俊貴は部屋のベッドに寝転がりボーッと天井を見上げる。

既に明日の臨海学校の準備は終わっていた。

「んー…、やっぱ一人だとつまんないな」

隣のベッドの方を見る。そのベッドの主はラウラと相部屋になりもうこの部屋にはいない。

まぁ男女が同じ部屋ってのもアレだしな…

そう思って携帯を取り出す。

因みに、この携帯は千冬が買ってくれたものだった。緊急の連絡があるときにないと不便だから、と買ってくれた。

んー…何か千冬さんにもお礼がしたいな、こっちに来てからずっと助けてもらってばっかだし

そう思って、画面を見た。

「ん?メール??」

マナーモードにしていたためまったく気づかなかった。

女の子といるときに携帯使うのはマナー違反だろ。見るなら隠れて見るべきだ

「えーと、差出人は……五反田蘭?」

誰だっけ?

メールを開く。

『今日は助けてくれてありがとうございました!おかげで助かりま

した！！』

「あぁ、あの子か。」

赤髪の少女を思いだしうんうん頷く。

「えーと、どういたしまして。怪我もなかったみたいでよかったよ。っと」

返信

この待ち時間が長いんだよなぁー

そう思いながら、寝返りをうとうとした時、携帯から、ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ！と鳴り響く。

「ビックリした！早いな…」

思わず転がりすぎてベッドから落ちかけた。

『ホントに助かりました！ところで、俊貴さんは何処に住んでるんですか？』

何処に？うぅーん…、教えて良いのか？？……まぁいっか！

「オレはＩＳ学園の寮に今は住んでるよ。」

送信！

んー、何して待ってよっかなー…

そう思いながら、伸びをする。

またすぐ返事がきた。

は、早いな…

「ＩＳ学園!?俊貴さんは男ですよね?」

あ、予想通りの返事きた。やっぱまだ公にはされてないのかな?一般には公開されてないってことかな。

今日出掛けて何もなかったし、知ってるのは企業とかだけだとふんでいいかもな

「オレは何か特別なんだ。ＩＳが使える男って事で、学園に監視の意味を込めた保護を受けてるんだ」

はい、送信

よし、腹筋しよ

「ふん、ふん、ふん」

俊貴が腹筋をし始めた。

が、すぐに返事がきて中断させられる。

『何か、すごいですね…、私もＩＳ学園に行こうかなぁ』

「良いんじゃない?」

送信

したらすぐ返信

『は、入ったら、先輩としてご指導を…』

「あぁ、受かったらね」

『や、約束しましたよ！絶対ですからね！』

「約束は守るよ」

『期待して待っててください！では、おやすみなさい』

「あぁ、待ってるよ。おやすみ」

返信、と

「思ったより返信が早かったな」

携帯をベッドの横の小さなタンスの上に置き、またベッドに横になる。

「誰とメールしてたんだ？」

「！？」

俊貴以外いないはずの部屋に聞き覚えのある声がした。

驚き体を起こすと壁にもたれたラウラが俊貴の方を見ていた。

「ラウラ!?いつからいた!」

「お前が携帯を開いてメールに気づいた時からだ。」

おぉふ…

そんな前からずっといたのか

全く気配に気づかなかった事に反省する。

「で、相手は誰だ?シャルロットか??」

なぜそこでシャルの名前が?

「いや、今日変な輩に絡まれてて助けた女の子からだよ」

「ほぅ、流石は私の嫁だ。そこで悪漢からその女子を助けなかったら私がお前を殺す」

ニヤッと笑うラウラ。

「さ、さいですか…」

苦笑いする俊貴。

「ところで、シャルロットがずっと嬉しそうなんだが、何故だ?」

「さあ?」

肩をすくめる俊貴。

シャルにあげた銀色のブレスレットが予想以上にシャルを喜ばせた

事を俊貴は知らない。

「おっと、こんな時間か。オレは風呂行ってくるから部屋に戻りなよ」

そういって、クローゼットから着替えを取り出す。

「そうだな」

頷き部屋から出ていく俊貴と一緒に部屋に出る。

「じゃあな」

「うむ、また後でな」

手を振ってくれた俊貴に手を振り返すラウラ。その顔は意味有り気に笑みを浮かべている。

その後、大浴場から俊貴の悲鳴が聞こえてきたとかこないとか。

臨海学校の準備をしよう！後編（後書き）

こんにちわ

最近やる気が凄いです。執筆のペースが早いのも読んでくださる皆さんのおかげです。

これからもよろしくお願いします。
感想とかもいただけると嬉しいです。

臨海学校がキター！！

「海っ！見えたぁっ！」

トンネルを抜けて女子がはしゃぎ出す。

今日は臨海学校初日で、天気も晴れ。

「海かぁ…、久し振りだなぁ」

俊貴が海を見ながら言う。

前の世界でも高校から海に行ってなかった。

そのため、久しぶりに海を見て前の世界と変わらない青い景色にどこか懐かしさを感じる。

「シャルもテンション上がるか？」

「う、うん？そうだねっ」

バスで隣になったシャルに聞くが、学園を出てからずっとこんな感じの返事。返事してもすぐ手元を向く。

シャルの腕には銀色のブレスレットがついている。

「そんなに気に入ってくれたのか？それ」

「え、あ、うん。まぁね。えへへ」

昨日買い物に付き合ってくれたお礼として俊貴があげたもの。シャルはそれをにこにこ見ては笑みをこぼす。

ここまで気に入ると思ってなくて、もうちょっと高いのでも良かったかも、と申し訳なくなる。

「うふふ」

ものっそい機嫌がいい。
この笑顔は無くしたくない、そう思う俊貴。

「まったく、シャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

通路をはさんだ向こう側、セシリアがムスッとした顔で言ってくる。

「うん、そうだね。ごめんね。えへへ…」

セシリアの言葉を笑顔で返すシャル。
それを見て、セシリアの額に血管が浮かぶ。

「あー…、今度はセシリアにも上げるから」

セシリアも欲しかったのかな?と予想して答える俊貴。

「約束ですわよ?」

「あぁ、高いのは無理だけどな」

「まぁいいでしょう」

と何とか許してくれたセシリア。

「ラウラ、どうかしたか？」

「！？な、なんだ！？」

ボーッとしていたラウラに声をかける。

すると、慌てて俊貴の方を向くラウラ。心なしか顔が赤い気がする。

昨日、俊貴が入っている大浴場に乱入してきたラウラ。その時、全裸で突撃してきたラウラに驚き、思いきりタイルで足を滑らせてド派手に転び、前を隠してたタオルがはだけ全裸で倒れた。その俊貴のモノをモロにみたラウラは顔を真っ赤にしてその場にしゃがみこんでしまい、起き上がって自分の現状に気づき慌てて前を隠し恥ずかしさのあまり悲鳴をあげた。

幸い誰もその大浴場に向かってこず、ラウラは呆然としながら静かにその場から出ていった。

それが原因で今のラウラがいるのだが、俊貴にはわからない。

風邪でも引いたのかな？

「熱でもあるのか？」

そういって、ラウラの額に手で触れる俊貴。聞くだけにすればいいのに行動してしまう俊貴クオリティー。

「なっ、なんだ！？ち、近い！馬鹿者！！」

「へぶ！？」

顔を思いっきり手のひらで押し返される。

くっ…、心配したのにコレか！まぁラウラなら大丈夫か

そう判断し自分の席に戻る。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

千冬の言葉で全員がそれに従う。すげぇ…

その通りにバスは目的地である旅館に着く。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。」

『よろしくお願いしまーす』

全員で挨拶。女将さんがお辞儀する。

「こちらこそ。今年の一年生も元気ですね」

笑顔で大人の雰囲気を漂わせる女将さん。

「あら、噂の？」

俊貴と目があった女将が千冬に聞く。

「えぇ、まぁ。今年はコレのせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。良い男の子じゃありませんか。」

「そうでもないですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」
お辞儀しようとした俊貴の頭を押して無理矢理お辞儀させる。
「お、奥村俊貴です。よろしくお願いします」
「うふふ、ご丁寧にどうも」
「不出来の弟でご迷惑をおかけします」
「あらあら、弟さんには厳しいんですね、織斑先生は」
「いつも手を焼かされていますので」
えー？オレそんなに迷惑かけた？？あー…、お金の面は確かに迷惑かけてるな…
「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになってますから、そこをご利用ください。」
はーいと返事をしてすぐ旅館に向かう。とりあえず荷物を置いてからなんだろう。初日は自由時間のため皆浮かれまくっている。
「ね、ね、おっくー」
むっ…、その呼び方はヤツだな。
振り向くとスローモーションかと思わせるスピードで向かってくる女子。眠たそうな顔が向かってくる。

ってか、おっくーって…何かおっくーになってくるぜ。オレだけにな！

「面白くないよおっくー。」

何故バレるのだ！

「ところでおっくーって部屋どこー？遊びに行くから教えてー」

その言葉で周りの女子の視線が一気に俊貴に集中する。

「悪いけどオレも知らないんだ。今から聞こうと思っててね」

「奥村、お前の部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬からの呼び出しを無視するわけにはいかないため、のほほんさんに挨拶して別れた。

「ここだ」

「あれ？ここって教員室…」

ドアに張られた紙を見て言う。

「個室を用意すると、就寝時間を無視した女子が押し掛けるだろうと思ってな」

ため息をついた千冬。

「結果、私と同室なら女子もそう近づかないだろうというわけで同

室だ」

「確かにそうですけど…」

チラッと千冬を見る俊貴。

「一応言っとくが、私は教員だというのを忘れるな」

「はい」

頷き部屋にはいる。

・・・・・・・・・・「……」

別館に向かう途中で目の前の光景に呆然とする俊貴。

道端にウサギの耳、俗に言うウサミミが生えている。引っ張ってください、と張り紙付きで。

…なんだ、この罠は

あれか?馬鹿なおっさんを凝らしめるための罠か?オッサンホイホイ?

「抜いてみるか」

興味本意でウサミミを掴んで引っ張る。

「んなっ!?」

何か下に埋まってるのかと思って勢いよく引っ張ったのに、有った

のはウサミミだけ。
そのまま俊貴は後ろに転ぶ。
「いってぇー…」
「何をしてますの？」
「ん？このウサミミが……お？」
声のした方を倒れたまま見ると、そこに立っていたセシリアのスカートの中が見えてしまった。
「と、俊貴さん！？」
スカートを押さえて後ずさる。
白のレース…グッジョブ！！
「違う違う！ごめん、アレだ。このウサミミが地面に生えてて」
親指を立て掛けた手を慌てて押さえ、ウサミミをセシリアにつき出す。
「ウサミミ？」
俊貴の手に握られたウサミミを、恥ずかしさと怒りで赤い顔をしたセシリアが訝しげに見る。
キイィィィィン

「!?何かが高速で来る!」

いきなりシリアスモードになる俊貴。セシリアはついていけず、呆然としている。

「や、ヤバイ!」

謎の飛行物体が二人めがけて突っ込んでくる。
それに気づいた俊貴が、近くにいるセシリアと一緒にその場から離れるように倒れる。

「きゃあ!」

分けがわからぬままセシリアは俊貴に押し倒された。だが、ちゃんと俊貴が怪我しないように抱き抱えていたため傷ひとつない。

「うおー焦った…、なんじゃこのニンジンは」

顔だけを地面に突き刺さったニンジンの方を向く俊貴。

「あ、あの…」

「ん?」

自分の下から聞こえるセシリアの声に、不思議そうに首をかしげて振り変える俊貴。

「あ、怪我はなかった?」

俊貴がセシリアの顔についた砂を優しく払う。

「!?だ、大丈夫ですから、ど、退いてください!」

顔を真っ赤にしたセシリアが俊貴から顔をそらし、視線だけ俊貴を見る。

「あ、あぁ。ごめん、気づかなくて」

苦笑いしてセシリアから離れ、地面に膝をついて手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

恥ずかしそうに胸に手を持っていき、もう片方の手で俊貴の手を握る。

「よっと」

ニコッと微笑み、セシリアを立たせる。

「あ、あり…」

顔はうつ向き上目遣いで俊貴の方を見たセシリアの表情が一瞬で固まる。

「んー?なんだろうなぁ。人が入れそうな大きさだな」

お礼を言おうとしたセシリアに気づかず、謎の物体に夢中になってる俊貴。コンコン、とニンジンを手の甲で叩いている。

(…これだからこの方は)

額に血管が浮かぶセシリア。

「じゃーじゃじゃーん！」

急に二つに割れたニンジンから、女性が出てきた。

「な、なんですの！？」

「と、特盛！？」

セシリアは中から出てきた人に驚き、俊貴はその人の二つの山に驚いた。

「やー、このまま無視だったらどうしようかと想ったよー。あ、そのウサミミ私のなんだぁ」

俊貴の手に握られたウサミミを指差す女性。

「あ、どうぞ…」

俊貴の手からウサミミを受け取り装着。

な、なんだ…この人は？格好が意味わからん…

不思議の国の〇リスのような青と白のエプロンドレス。ウサギとアリス両方取りしちゃいましたみたいなファッション。

「んー？君が奥村俊貴くんかな？？」

ジッと俊貴を見る女性。
その目は興味津々で上から下まで見てくる。

「そうですけど、あなたは？」

怪しさＭＡＸの女性を警戒して、セシリアの前に移動する俊貴。
それに気づいたセシリアが照れながらも、俊貴の肩越しから様子をうかがう。

「私が造ったＩＳでもない、不明のＩＳを使う男の子。年齢は２１。出身は日本、家族はちーちゃんの義理の弟で、現在は寮に住む。」

「！？」

俊貴の情報をペラペラ話始める女性に警戒心が益々強くなる俊貴。

「ところでちーちゃんはどこかな？君にも興味はあるけど、先にちーちゃん！」

ちーちゃん？ちのつく人……ま、まさか千冬さん！？

「えっと、まだ旅館の方に…」

「そっかー！ありがとねとっくん。また後でね！！」

そういって、ものっそい速さで去っていく。

「と、俊貴さん？今のは一体…」

「わ、わからん…」

「で、でも部外者は参加できない決まりでしたよね？」

そう、部外者は参加できない決まりになってるため、ここにいるのはＩＳ学園の生徒と教員しかいないはずなのだ。

「…まぁ、目的は千冬さんみたいだし、ほっといても大丈夫だろ」

「そ、そうなんですの？」

あれ？セシリアはちーちゃんが誰か気づいてないのか…

「たぶんね。それより、オレは海いくけど、セシリアは？」

「え、ええ、私も海へ」

「そっか、じゃあ別館まで一緒に行こう」

「は、はい！そ、それでですね」

ん？何かまだあんのかな？？

「せ、背中にサンオイルが塗れませんから、俊貴さんにお願いしたいのですが…」

チラチラモジモジしながら俊貴を見るセシリア。

「オレで良いならやるよー」

と、軽く返事をする俊貴。それがどう言うことか俊貴にはまだ理解

できてなかった。

「あ、後からナシは認めませんわよ！？」

やっぱりナシはナシってか？

あ、ごめんなさい…

そんな目で見ないで…

つまらんことを考えた俊貴を睨み付けるセシリア。

「わ、わかった。」

焦って返事をした俊貴。

そうこう言ってる間に別館についた。

「じゃあ、また後で」

「ええ、また後で！」

挨拶して更衣室に向かう二人。

俊貴の更衣室は別館の一番奥。それは女子の更衣室を横切る必要がある。中は見えないが、声は聞こえてくる。

「わ、胸おっきー！」

「きゃあ！揉まないでよ！」

「その水着だいたーん！」

「そう？普通だと思うけど」

等々、声が聞こえてくる。

……、早くここを出よう

更衣室に足早で向かい、準備。
よし終わった、さぁ行こう！

「あ、奥村くんだ！」
「う、うそ！私の水着変じゃないよね！？」

「に、似合ってるよ」

目のやり場に困りながら、照れつつ律儀に答える俊貴。

「わー、思ったより筋肉付いてる～。鍛えてるね」
「あとでビーチバレーしようよー」

「時間あったらね」

更衣室から出て浜辺に踏み込んだ時に女子に出会う。水着姿を見て照れる俊貴。

「うお！？」

砂浜に踏み込んだ瞬間、砂の暑さに驚き足をじたばたさせる。
海に来たのが久しぶりすぎて、忘れていたが懐かしさを感じた。

砂の熱を感じながら、海に近づく。すでに多くの女子が溢れて各々自由に遊んでいる。

とりあえず、泳ぐか

そう思いながら軽く準備運動を始める。

「と、し、きー！」

「んあ？」

「意外と真面目ね。体操なんてして。ほら、終わったなら泳ぐわよ」

飛び乗ってきたのは鈴。何か猫みたいなヤツだな。猫は好きだぞ！

あ、水着はオレンジと白のストライプのスポーティーなタンキニタイプで、へそが出てる。

「体操しないと痛い目に遭うって。溺れても助けてやんないぞ」

「あたしが溺れるわけないわ。前世は人魚よ！」

そう言いながら、体をかけ上って肩車。

人魚？認めないね！！その粗末な胸じゃ認めないね！！猿か猫だろ、お前の前世は！！

と、思ってたら膝が鼻を直撃。

「何か失礼なことかんがえてたでしょ」

そういって、俊貴の頭に顎をのせる。だが、顎の感触しかしないことに苦笑いする。

「それにしても高い。ちょっとした監視塔ね、俊貴」

「せめて監視員だろ！」

「いいじゃん、人の役に立つじゃん」

「誰が乗るんだよ…」

「んー…あたし？」

えへへっと笑う鈴。

こ、コイツ…オレを踏み台にする気か、文字どおりの踏み台に…

「ああっ！？な、何をしてますの！？」

声をあげて近づいてくるセシリア。手にはビーチパラソルとシート、サンオイルを持っている。

セシリアは鮮やかなブルーのビキニ。腰にパレオを巻き優雅な感じがする。そして、鈴とは違う胸の膨らみが水着により強調される。

「何って肩車。それより、早く泳ごうよ」

「な！？」

俊貴の上でじたばたする鈴。

「まぁ待て。先客はセシリアだ。鈴ちょっと待ってて」

そういって、しゃがみ鈴の降りやすいようにする。

「まぁ、仕方ないわね。ところで、セシリアは何を俊貴にしてもらうの？」

「え、えっと…」

「何？まだ決まってないならあたしが…」

「し、してもらいます！さっそくサンオイルを塗ってください！」

「「「え！？」」」

ああ…声がでかいよ…

「私サンオイル取ってくる！」
「私はシートを！」
「私はパラソルー！」
「私はサンオイル落としてくる！」

「塗ってあるなら落とすなー！」

あぁ、海に入っていってる…

むなしく俊貴の声が響く。

集まったと思ったら一瞬で解散。

「そ、それではお願いしますわね」

パレオを脱ぐ仕草に、ドキッとした。

「えっと、背中だけ？」

「したいんでしたら、前も結構ですわよ？」

「う…」

その挑発するようなセシリアの表情にまたドキッとした。

「ふふ、背中お願いしますわ」

そういって、首の後ろで結んでいたブラの紐をとき、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。

「ど、どうぞ？」

「あ、あぁ」

セシリアの無防備な背中を見てドキドキする。体に潰されて形を歪めた胸は、脇の下から見えてることもあり、セクシーだ。うつ伏せのせいで、お尻の主張もドキドキさせてくる。

「ぬ、塗るよ」

「ひゃっ！？俊貴さん、サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」

「そうなんだ、ごめん。こんなこと初めてでよくわかんないんだ」

「は、初めてなんですの。それでは、仕方がないですわね」

何か嬉しそうに聞こえた。

そう思いながら、言われた通りにサンオイルを手にとって揉むようにして温める。

そして、セシリアの体に塗っていった。

わー、すっげぇスベスベしてる…、何か気持ち良いな…

「ん…。良い感じですわ。もっとしたの方も」

「あ、あい」

ボーッと言われた通りに脚の方も塗っていく。頭が思考停止している。

「あ！」

「へ？」

セシリアが奇妙な声をあげた。

俊貴がそれに気づき自分の手元を見た。脚から上の方に上がっていき、お尻の方をいつのまにか揉んでいた。

「あ……」

呆然とそのまま固まる俊貴。

「だ、大胆ですわね。俊貴さん」

頬を赤らめて俊貴の方を見るセシリア。

「あ、いや、ごめん！わざとじゃなくて…、その無意識って言うか…」

「無意識に私のお尻を？」

「あわわ、そうじゃなくて、いやそうなんだけど…」

と、パニックになり始めた俊貴。

「うふふ、前の方もどうですか？」

いたずらっぽく笑うセシリア。

「あうあう…」

呆然と赤くなる俊貴。

「はいはい、あたしがやったげる」

「きゃあ！？り、鈴さん、邪魔しな…つ、冷たっ！」

「いいじゃん。サンオイル塗れればなんでも」

「ああもう！いい加減に…」

鈴の適当な塗り方と邪魔された事に怒って体を起こすセシリア。
それは必然だった。紐が外れているから水着がとれた状態になる。

「あ」
「きゃああっ！？」

慌てて胸を隠したセシリアの耳は真っ赤になっている。

「あー…ごめん」

「い、今さら謝ったって…鈴さん！絶対に許しませんわよ！」

「うん、じゃあ逃げる」

と、何故か俊貴の腕を引っ張り走っていく。
だが、俊貴はセシリアのを見てしまい呆然としている。

「ちょ、お待ちなさい！」

水着がついてないため、そのままの格好で怒鳴るセシリア。

鈴は俊貴を引きずったまま海へと飛び込む。

「おわっ！？」

いきなり海に入っていたことに驚き、我に返った俊貴。

「鈴、お前！」

セシリアに謝れなかったことを気にする俊貴。

「俊貴、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前のパフェでおごんなさいよ！」

「ま、待て！セシリアに謝ってない！！」

「後でいいわよ！よーい、どん！」

「あ、おい！」

勝手に始めてブイに向かう鈴。

…ほっとこう。先にセシリアだ

そう思って、ブイとは反対方向に向かう。

「…そういやアイツ、体操してなかったけど…」

波打ち際に戻ってきた俊貴がふと鈴の方を向く。

すると、鈴が何かもがくような感じになっている。

「ま、まさか！だから言ったのに、あのバカ！！」

そういって、急いで海に飛び込み鈴へと向かう。泳ぎに自信がある俊貴がドンドンと鈴へと近づいていく。

だが、次第に鈴が海に沈み始めた。

「鈴！！」

声をあげて潜水し、鈴の腕を掴む。
そのまま鈴は海面へと浮上した。

「鈴！大丈夫か！」

「ごほっ！だ、大丈夫…」

「ほら見ろ！体操しないからこうなったんだぞ」

「ち、違うわよ！あ、あんたのせいで…」

「は？まぁいいや。砂浜戻るぞ」

言ってることがよくわからない俊貴は鈴に背を向ける。

「な、なに？」

「乗れって。運ぶから」

「わ、わかった」

大人しく俊貴の背中にしがみつく鈴。

「水が口に入るようなら肩を二回叩いてくれ。口開けると水はいるかもしれんしな」

「ん」

ゆっくりと陸へと泳ぐ俊貴。

「あ、あのさぁ、俊貴」

「ん？」

「あ、ありがと…」

「ん」

頷いて、砂浜に上がり鈴をおんぶする。

「も、もういいってば。後は自分で…」

「木陰まで運んでやるよ」

そういって、俊貴が木陰に向かって歩き始めた。

「あー！奥村くんがおんぶしてる！」

「ええっ！いいなぁっ、いいなぁー！」

「きっと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！！」

と、騒ぎ始めて女子たちがドンドン集まってくる。そして、おんぶしてもらおうと詰めかけてくる。

な、なに？これだけの数をおんぶは体力も精神的にも持たないぞ！？

「くっ！」

鈴を木陰まで運ぶと言ったからには運んでやる。だが、このままで

はこの女子たちもおんぶしないといけなくなる

「ちょっ、ちょっと道開けて。鈴を木陰まで運ばないと…」

そういって、木陰までの道を開けてもらう。

「えー？凰さんどうかしたの？」

「いや、ちょっとブイまで競争してたら全力になっちゃってバテちゃったんだよ」

アハハ、と苦笑いする。

「凰さんも奥村くんも、子供みたいでかわいー！」

溺れたなんて言って、鈴のプライドを傷つけるわけにはと思って言った事が、逆に子供っぽく見られて笑われた。

それに鈴が俊貴の耳を引っ張る。

（溺れたよりいいだろ…）

（そりゃそうだけど…）

二人だけで会話し、そっと耳から手を離す。

「よいしょっと」

鈴をゆっくりと地面に降ろす。

「ちょっと休んでろよ」

ポン、と頭に手を置く。

「わ、わかってるわよ！」

赤くなりながら顔を背ける。

「奥村くん！私も撫でて！！」

「次！次私も！！」

と、今度は頭を撫でてって事になってしまった。

「わ、わかったからちょっと落ち着こう、皆」

撫でてほしくて跳ねる女子たちを落ち着かせる俊貴。

「あ、俊貴。ここにいたんだ」

「え？」

「あ！本妻と……え？」

声に呼ばれて振り向くとシャルとその隣にはバスタオルを全身を覆い隠した誰かがいた。女子も訝しげにそのタオルお化けを見て距離をとる。

何故かシャルが赤くなっている。

…ほんさい？野菜かなんかか？？

「えーと、誰だ？」

「ほら、出てきなってば。大丈夫だから」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める…」

「…ラウラか？」

タオルでこもっていたが、声からしてラウラっぽい。

「ほーら、せっかく着替えたのに見てもらわないと」

「ま、待て。心の準備というものがあってだな…」

「もー。そんなこと言ってさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどなぁ」

そうそう、ラウラとシャルは同室になった。先月は戦っていたのが、いまはルームメイトとして仲がいいようだ。

「うーん、ラウラが出てこないなら僕も俊貴と遊びに行こうかなぁ」

「な、なに？」

「うん、そうしよ。俊貴、行こう」

シャルが俊貴の手を取り、腕を絡ませる。

「おぉー、さすが本妻。鮮やかな手捌きー」

と、何故か女子たちから拍手。
…シャルがほんさい？
「ま、待てっ。わ、私も行こう」
「その格好のまんまで？」
「ぬ、脱げば良いのだろう！」
覚悟を決めたかのようにバスタオルを投げ捨て、水着を纏ったラウラが日の元にさらされる。
「わ、笑いたければ笑うがいい……！」
黒のレースをたくさんあしらった水着。髪もそのままじゃなく、左右で結っている。モジモジとしているラウラが、とても可愛く感じる。
思わずドキッとする。
「おかしなところなんてないよね、俊貴」
「ん？あぁ、似合っててかなり可愛いぞ」
「なっ…！」
微笑んでしれっと言う俊貴にラウラはともかくシャルまで驚いた。
そのままラウラは赤面。
「しゃ、社交辞令なら…」

「お世辞しじゃないよ。それにそんな器用じゃないよ、オレは」

「そうそう、俊貴は思ったこと言っちゃうしね。僕も褒めてるのに信じてくれないんだよ。あ、ラウラの髪は僕がセットしたの。おしゃれしなきゃね」

「さすがシャルだ。おっと、シャルも似合ってて可愛いぞ」

そういって、ポンとシャルの頭に軽く頭に手を置く。

おー、本妻を褒めた！

と、外野から声が聞こえた。
それにまたシャルの顔が赤くなる。

照れくさそうに髪をいじるシャル。その腕にブレスレットが光っている。

「それ着けてて大丈夫？」

「大丈夫だよ。保護コートしたし、塩水も洗い流すから。せっかく俊貴がくれたものだしね」

えへへ、と笑って言うシャル。

「俊貴」

「ん？」

「ずるいぞ。私にも何かプレゼントして欲しいのだが…」

いつの間にか普段の声に戻ったラウラ。

「よ、よし。帰ったら何かあげようか。」

セシリアも一緒に何かあげようか。

そう考えてる時点で俊貴はもうダメ。だが、俊貴はおそらく一生気づかないだろう

「ぜ、絶対だぞ」

「約束は守るよ。」

「う、うむ」

「ちなみに欲しいものはある？アクセサリーつけなさそうだけど」

「そうだな、私はそういうものに疎い。だから、俊貴が選んでくれる物なら何でも嬉しいぞ」

「そっか。じゃあ、候補としてチョーカー…、ネックレス…、あ、イヤリングも似合いそうだな。可愛いと思うよ」

「か、可愛いっ…！？」

ラウラが指を交差しながら固まる。

「奥村くーん！」

「さっきの約束通り、ビーチバレーしよ！」

「わー、おっくーと対戦ー。ばきゅんばきゅーん」

くっ、あの呼び方はまたヤツか！

「よーし、じゃあシャルとラウラでちょうど三人だし、三対三だ」

返事を聞いた瞬間に素早くネットを広げる。のほほんさんはコートを書いていくが、ものっそい遅い。

「ルールは適当！さぁ行くよー！！」

「あいよー」

「うりゃー！」

いきなりジャンピングサーブ。

「任せて！」

シャルがレシーブに動く。

よーし、オレ達のコンビネーションを見せてやるぜ！

「って、わあっ！？」

シャルが何かにぶつかり悲鳴が聞こえた。

振り向くと、ぼーっと突っ立っているラウラと地面にしゃがんでるシャルがいた。

「だ、大丈夫？」

「いたた…、ラウラどうしたの？」

「か、可愛い……慣れてなくて……うぅ」

シャルの立ち上がる手助けをする俊貴と目が合い、顔を赤くして全力で逃げていった。

「は…？」

別館へと消えていくラウラを呆然と見る俊貴とシャルと、三人。

「これはあれだねー。おっくーのジゴロが発動したんだねー」

のほほんさん、何をいってるのかよくわかりませんよ

「まぁいいか、続けよう」

「はーい」

そうしてまたバレーが始まる。

くっ…、だ、だがこれは思ってたよりきつい…

「そーれ」

身軽な動きでシャルがスパイクを決める。そのたびにぷるんと弾む胸が俊貴の集中力を奪う。

シャルはスタイルが良すぎる！

更に、向こうの女子も一人を除いてぴょんぴょん跳ねるたびに揺れていた。

まずいまずい…このままではまずい！意識してなかったけど一回意識しちゃったら気になってしょうがない！！

「どうしたの？」

「んあ！？な、なんでもないよ」

慌てて顔を横にふる俊貴。

「変な俊貴」

くすっと笑うシャル。

「すきありー」

「へぶっ！」

「あ！俊貴…」

俊貴の顔面にボールが直撃。そのまま砂浜に倒れた。ボールを放ったのはのほほんさん。シャルは慌てて俊貴に近寄る。

「くぅー…、やってくれる…、さすがはのほほんさんだぜ」

鼻をさすりながら上半身を起こす俊貴。

「あ、そろそろお昼の時間かな？午後はどうするの？」

「約束もないし、適当にのんびりしてようかな」

「そっか。じゃあ、お昼に行こ。それと俊貴ってどこの部屋？」

「あー、それ私も知りたい」

「私も」

「わたしもー」

「聞かない方がよかったと思うよ。えーと、織斑先生の部屋だよ」

その言葉を聞いた瞬間に凍り付く女子。

「遊びに来るのは危険だね」

「う、うん…。で、でも奥村くんとは食事時間に会えるしね！」

「だね！でも織斑先生と同じ部屋なんて…ま、まさか先生も！」

「私がなんだって？」

その聞き覚えのある声に全員が固まる。

「お、織斑先生…」

「おう」

あ、水着着てる。

普段のスーツ姿から想像しにくいが、形がしっかりと浮かんでいる

胸はひいき目見なくてもかなり大きい。しかも、その谷間に視線が

吸い寄せられる。

「…俊貴、鼻の下伸びてる」

「ば、バカな!?そんなわけないだろ、シャル」

「見とれてたくせに」

…それは否定できない

「ほら、早く昼食でもとってこい」

「先生は?」

「私はわずかな自由時間を満喫させてもらうとしよう」

「じゃあ、昼食いってきます」

「時間は守れよ」

「はい」

そういって、移動を始める。

「俊貴って、織斑先生が好みのタイプなの?」

「い、いきなりなんだい、シャルさん?」

「別に。僕達と反応が違ったなぁって思っただけだよ」

シャルさんが不機嫌になってしまった…

おかしい、何を間違えた…

「はぁ、ライバル多いなぁ…。強敵が五人はいるし。」

その中に千冬も入っている。セシリア、鈴、ラウラ、千冬、最後にのほほんさん？

山田先生も怪しい気がする。っていうか、学園の生徒全員が怪しい

「強敵？ラウラか？」

俊貴にとってラウラがＩＳの戦闘での強敵。

「そうだけど、たぶん俊貴のと僕のとじゃ違うかな」

「？そうなの？？」

「そうなの。はぁ…」

「考えてもしょうがないよね。ほら、行こ」

「あ、あぁ」

シャルに手を取られ、別館へと向かう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時間は夜。大宴会場で夕飯をとっていた。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなぁ」

「そうだね。ＩＳ学園って羽振りがいいよ」

隣でシャルがうなずく。

今は皆浴衣。

「これってわさび、だよね？」

シャルが刺身の上に乗っかる緑色の物を箸でつかむ。

「そうだよ」

「そっかぁ。はむ」

「え？」

あれ？今わさびをそのまま食べたか？

「つーー！！」

案の定、鼻を押さえて涙目になるシャル。

「大丈夫？」

「ら、らいひょうぶ…」

涙目になっていて笑顔がいまいち決まってない。

「ふ、風味があって、いいね…」

な、なんて子だ…

思わず、その涙を拭い、頭を撫でる俊貴。

「つ…う…」

そんななかとなりに座るセシリアが呻いている。
正座がキツいらしい。

「あ、あんまり無理せずにテーブル席行った方がいいんじゃないか？」

正座のキツい人のためにテーブル席も用意されていた。

「へ、平気ですわ…、この席を獲得するのにかかった労力に比べれば…」

入ってきた順じゃなかったっけ？
あれ？違うのか？

「女の子には色々あるんだよ」

「そうなんか」

「そうなの」

「う…ぐ…」

そしてまだ呻くセシリア。

「食べさせてやろうか？」

「い、いいんですか！？」

予想以上の食い付き

「食事が進まないと料理が勿体ないしね」

「そうですわね！えぇ、えぇ！料理がいたんではいけません！！」

な、なぜにここまで元気が出た…

「よーし、じゃああーん」

「あ、あーん」

箸で刺身をつまみセシリアの口に運ぶ。

嬉しそうにモグモグと刺身を食べる。

「むぅ…」

それを横目で見るシャル。頬がぷくっと膨れている。

そして、そのまま何も起こらず、食事は終わった。

・・・・・・・・・・

夕食後、温泉に入り上機嫌で部屋に戻ってきた。

「あ、あれ？」

部屋には千冬はいない。

と、思ったらちょうど千冬が帰ってきた。

「ん？一人か？女の一人も連れ込まんとはつまらんやつだ」

「…オレをなんだと思ってんですか」

ため息をつき自分のベッドに腰かける。

千冬もふぅ、とため息をつきベッドに腰をおろす。千冬も温泉に入ってきたようで、髪がしっとりと濡れていて色っぽい感じをかもし出す。

「疲れてそうですね」

「この程度、疲れたうちには入らん」

ふん、と足を組む千冬。浴衣の隙間から見えそうで見えないチラチラ感が俊貴を襲う。

「ち、千冬さん！」

「ん？」

・・・・・・・・・・・・

その頃、教員室のドアにぴったり引っ付く女子が二名。

セシリアと鈴の二人。

ドアの向こうから声が聞こえてきた。

『千冬さん、やっぱり固くなってるよ』

『そんな訳あるか、馬鹿者。ん！か、加減をしろ…！』

『はーい、じゃあ、ここは…』

『くぅ！そ、そこは…やめっ』

『すぐ良くなるって。もっと揉もうか？』

『あぁぁ！』

「こ、これは…」

引きつった笑みを浮かべるセシリア。

だが、鈴から返事がない。

『じゃあ次は』

『少し待て』

二人がキョトンとした瞬間に、ドアがいきなり開かれた。

「「はぶ！！」」

「何をしているか、馬鹿者ども」

「こ、こんばんは、織斑先生…」
「さ…さよなら、織斑先生！」

逃走を始めた瞬間に、捕まる二人。首根っこをとられた二人が部屋に放り込まれる。

「あぁ、そうだ。ボーデヴィッヒとデュノアを呼んでこい」

「は、はい！」

鈴が駆け足で部屋から走り呼びにいく。

「あ、セシリア。ちょうどいいや。こっちおいで」

手招きする俊貴。

「え？あの…」

何を思ってるのか、モジモジして赤くなるセシリア。

「ん？」

微笑んでおいで、と手招きする俊貴。

困りながらチラっと千冬を見ると、私に構うなと言ってるような顔。

（そんなこと……　お、女は度胸ですわ！）

やけくそ気味にベッドに横たわるセシリア。

盗み聞きしていたために思考が完全にそっちの方にいっている。

「あー…うつ伏せのがいいかなぁ」

俊貴が苦笑いする。

「え？うつ伏せ？」

「うん」

「はぁ」

よくわからないけど、日本ではそうするのかも、とうつ伏せになるセシリア。

「じゃあいくよ」

「は、はい！」

ドキドキと高鳴る胸。

「ん、」

「い、いたたたたっ！？」

腰に痛みを感じるセシリア。

「な、何をして……あうぅ」

「え？マッサージだけど？」

「…」

急にセシリアが黙る。
俊貴は首をかしげて再びマッサージを続ける。

「気持ちいいか？」

「えぇ、気持ちいいです…」

思わずうとうとし始めるセシリア。
マッサージになれてきて眠気がやってきた。

（いい匂い…）

ベッドの俊貴の匂いを感じて、落ち着いてきて眠り始める。

「！？」

が、いきなりお尻を鷲掴みにされて、眠りから覚醒。

（と、俊貴さん？マッサージとはいえ、大胆な…）

ドキドキと高鳴る胸を押さえ、ゆっくりと振り向くと

「派手な下着だな」

千冬がセシリアのお尻を握っている。その顔はニヤリと笑っている。

「え…」

そのせいで浴衣がまくれお尻が丸見えになっている。

「あ…」

俊貴が顔を赤くして視線をそらす。

俊貴に見られた。その事が恥ずかしさを募らせる。

「やれやれ、教師がいるのを思慮にいれろ、馬鹿者」

「あと、そこの三人入ってこい」

ドアがゆっくり開き鈴、シャル、ラウラが入ってきた。

「俊貴、風呂に行ってこい。部屋を汗臭くされては困る」

「へーい」

臭いかなぁ?とからだの匂いをかぎながら、着替えとタオルを持って出ていった。

「え、えっと僕たちに何か?」

俊貴が黙って出ていってから沈黙が続き、シャルが思いきって話を切り出した。

「ん?まぁ飲み物でも飲め」

そういって、冷蔵庫から四人分とりだす。

「ほれ。他のがいいやつは交換しろ」

そう言われたが、オレンジジュースをシャルが、スポーツドリンクを鈴、コーヒーをラウラ、紅茶をセシリアが受け取った。

「い、いただきます」

全員が飲み物を口にする。

「飲んだな？」

「え？」

そういって、千冬が冷蔵庫からビールを取り出した。

千冬はふたを開け、ごくごくとビールを飲む。

「…」

唖然とそれを見るシャル達。

「さて、本題だ。お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

「私はクラス代表としてしっかりして欲しいだけです」

ふん、と顔をそらすセシリア。

「あたしは別に好きじゃ…」

鈴がもごもご言う。

「ふむ、じゃあそう伝えとこう」

「「言わなくていいです！」」

それを笑って一蹴し、新しい缶ビールをあける。

「僕…私は、やさしいところです…」

声は小さいがしっかりと意思のこもった声を出すシャル。

「あいつは誰にも優しいぞ」

「…そこが悔しいかなぁ」

照れ笑いをするシャル。
その顔を見る鈴とセシリア。

「ラウラは？」

「…強いところ、でしょうか」

「いや、弱いだろ」

「つ、強いです。私よりも」

と、食い下がるラウラ。

「まぁ、あいつは役には立つな。さっき味わっただろうが、マッサ

ージもうまいし、料理もできる。」

だろ？とセシリアに振られ、うなずく。

料理ができるのを知ってるのは千冬だけだった。日曜日に俊貴は千冬の家（今は自分の家でもある）で料理を作っている。一通りの料理はできるようで、味もうまい。

「付き合える女は得だな。欲しいか？」

その言葉に全員が顔をあげる。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

えぇー、と心の中で突っ込む。

俊貴と千冬が姉弟になったということはもう周知の事となっていた。

「奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。私は血が繋がってないし、弟じゃなくて夫にもできるんだぞ。」

楽しそうに三本目のビールをあける。

「自分を磨けよ、ガキども」

部屋でそんなことが起こっているとも知らず、露天風呂を貸しきっている事に鼻唄を歌いながら上機嫌の俊貴。

臨海学校がキター！！（後書き）

こんにちわ

臨海学校初日を一回にまとめたら長くなっちゃいました。

次は銀の福音！

早めに更新するのでお待ちください

今、砂浜に生徒達が集合している。

格好はＩＳスーツ。

場所が場所のためスク水っぽく見えるが気にしない。

二日目は、データ取りが目的の稼働試験。予定ではこれから夜まで行うらしい。

一日とかキッツー…

そう思いながら、ラウラが遅れて走ってくるのに気づく。

「やっと全員揃ったな。遅刻者！コア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい！」

ビシッと姿勢をただし説明を始めるラウラ。

…すげぇな、ラウラは。あんなペラペラ出てこないよ

「っ！」

ラウラが説明してるのを聞いていて不意に、何かが頭の中をよぎった気がした。

なんだ、いまの感覚は？

周りを見渡してみるが目視できる範囲におかしな事は起きていない。

「何をしている、奥村」

一人だけキョロキョロしていたのが逆に目立ち、千冬が俊貴を睨む。

「あ、いや何もないです」

アハハ、と苦笑いして誤魔化す。

変なやつだ、とラウラを列に並ばせる。

ってか、ラウラ説明終わったのか…

蜃気楼、周りを探索してくれ

ー了解、どのくらいの範囲でしますか？

５０キロ範囲で頼む

ー了解しました。なにかあれば連絡します

あぁ

蜃気楼と心の中で会話。何か嫌な予感がする。

「では、各自ＩＳを稼働して奥村の班は奥村に相手をしてもらえ」

「はーい」

千冬の言葉に女子が返事をする。

俊貴は追加の装備やパッケージがないため、ひたすら戦闘の相手として動く。専用機持ちは追加のパッケージが送られてきているため、それをインストールしている。

「あーぁ、何でオレが模擬戦の相手を…。ってか、こんなんばっかだなオレ」

と、文句を言いながらもちゃんとクラスメイトのために動く俊貴。

「よっと」

目の前であたふたしながら、視覚情報を整理しているのだろう。目線がいろんな方向にいく女子の脚を払う。

「きゃ！」

砂浜に尻餅をつく。

「情報は必要なヤツだけ表示しとかないと、相手の動きが見れないよ。情報整理は大事だからね」

尻餅をついたクラスメイトに手を差し伸べる。

「う、うん。ありがとう」

「はい、次から気を付けて」

そういって微笑む俊貴。

「ちーちゅわーん！！」

と、急に遠くから声がした。昨日聞いた気がする声。

気になり振り返ると、砂煙を巻き上げて走ってくる人がいた。

「……束」

千冬が額に手を当てて頭を押さえる。

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！ハグハグしよう！愛を確かめよー……」

束にむけて千冬のアイアンクローが炸裂する。

「うるさいぞ、束。それともなんだ、今言いかけた台詞を二度と言えないようにしてやろうか？」

「ぐぬぬ、それは勘弁。それにしても相変わらず容赦のないアイアンクローだね」

そういって、アイアンクローから抜け出す束。

な、何だと？あの攻撃から抜け出した、だと！？

俊貴が目の前を飛び回るクラスメイトを相手にしながら真後ろで起こってる状況を確認している。

今、俊貴と一般生徒ではこれ程の差がある。

「ところで、ＩＳを使える男の子はどこかな？」

そういって、辺りを見渡す。

「あぁ、それならあそこだ」

俊貴を指差す千冬。

「ちょっと借りるよー！」

そういって俊貴の方に走っていく束。

とおっ！と声をあげて俊貴の背中にダイブする。

ーマスター、後ろから女性が体当たりしてきてます

「ん？あぁ、気づいてるよ」

後ろを確認してたため、ある程度距離が近くなった瞬間に振り返って、体当たりを受け止めた。

千冬は、他人を嫌う束が自ら他人の俊貴に関わろうとしたことに驚き、俊貴が束を受け止めたことに更に驚く。

「昨日会ったよね？奥村俊貴くん？」

「はい、会いましたよ。束さん」

「ちょっと後にしてもらえますか？あの子の相手しないといけない

んで」

そういって、砂浜に下ろす俊貴。

「いいけど、君面白いね。特にそのＩＳ。私が造ったのじゃないし、どうしてだろうねぇ」

そういって、自分の周りにウィンドウを数個出現させて、キーボードでカタカタとうち始めた。

「ごめん、続けるよ」

「あ、うん」

呆然と束を見たクラスメイトが慌てて俊貴の方に向き直る。

…これは中断した方がいいかも

周りを見ると束に視線が集まっていてデータ取り所ではなくなっている。

そもそも束を知らないクラスメイト達が、不審者が侵入してきてる事にざわつき始めた。

「いや、止めとこう。集中力の切れた状態でやっても意味ないし、ちょっと待ってて」

「う、うん」

頷き再び束の方を向くクラスメイト。

「ん？もういいのかな？？」

俊貴を見上げた束が笑顔で言ってくる。

「はい。オレに何の用ですか？」

「データを取らせてもらおうと思ってね！今からとっくんにミサイルをぶっ放ちます」

ニコッと笑ってポチっとキーボードを押す。

その瞬間１６連装ミサイルポットが現れた。

そのポッドからミサイルが放たれる。

「な！？」

慌ててその場から急上昇し、ミサイルをロックしビームピストルで撃ち抜く。

その爆発で近くのミサイルに誘爆し、爆発が広がる。

そして１６発のミサイルが全部落とされる。

「あぶねー…」

爆煙がゆっくりと収まっていき、俊貴は束の方をジト目で見る。

いきなりあんなもの発射するなんて…

そう思いながらゆっくり降りていく。

そんな光景を束は満足そうに眺めて頷いた。

「…」

そんな束を千冬は厳しい目付きで見つめていた。その目付きは敵でも見るかの様なものだった

「うーん…、データ見せてねー。うりゃ」

降りてきた俊貴の蜃気楼の装甲にぶすりとコードを刺す。
またウィンドウが表示される。

「んー…不思議なフラグメントマップが構築されてるね。見たことないパターン。とっくんが男の子だからかな？」

フラグメントマップは、ＩＳがパーソナライズによって独自に発展してく道筋で、人で言う遺伝子。

「ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

あ、寒気がした

「拒否します」

「にゃはは、そうだよね。」

「それよりさぁ、これ改造してあげようか？」

「え？…どんな？」

「執事の格好とか、メイド服？」

「…やめときます」

「じゃあじゃあ、女の子の姿になるってどうかな！とっくん似合いそう！」

「…嫌です」

何だよこの人ー、なんでオレを改造しようとしてんだよー

「たっ、大変です！お、織斑先生！」

慌てて山田先生が千冬に寄ってくる。

「どうした？」

「こ、これをっ！」

小型端末の画面を見て千冬の表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし…」

「あ、あのハワイ沖で試験稼働をしていたー」

「機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみません」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席してますが、それ以外は」

小声でやりとりしていた二人が、生徒達の視線に気づき、軍事関係の手話に切り換えた。

「束さん、コードはずしますよ」

「えぇ？まぁいいか。ほい」

コードを引っこ抜き、ウィンドウが消える。

蜃気楼、反応は？

ーまだ有りませんが、引き続き探索します

あぁ、よろしく

…また何か嫌な予感がする

「全員注目！」

山田先生が走り去っていき、千冬がパンパンと手を叩く。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ」

状況がわからない女子達がざわざわする。

「とっとと戻れ！以後、許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「「「は、はい！」」」

慌てて動き始める。

「専用機持ちは全員集合しろ！」

「はい！」

専用機持ちが全員返事する。

・・・・・・・・・・

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥の大座敷・風花の間では俊貴達専用機持ち全員と教師陣が集まっている。

その部屋に大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

そっか、それで軍事関係の手話に切り換えた訳か

「それにオレ達専用機持ちが対処するって事ですか？」

「その通りだ。衛星の追跡結果、ここから二キロ先の空域を通過することがわかった。」

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、お前達が要だ」

ーマスター、５０キロ地点に熱源３。前のＩＳだと思われます

あの三機が!?目的は銀の福音か!!

ーおそらくそうでしょう。どうしますか?

決まってる!

急に俊貴が立ち上がった。

「なんだ?奥村」

「おい!何処へ行く!!」

俊貴が窓を開け放つ。

「前に来た三機がこの付近に接近中です!おそらく銀の福音が目的だと思います!」

そういって、窓から飛び降りる俊貴。

「俊貴!!」

千冬が窓から身を乗り出す。

ＩＳを展開し終えた俊貴が物凄い速さで飛んでいく。

「ちーちゃん！」

「…非常事態だ、束出ていけ」

いきなり天井から現れた束。

「とっくんに任せるのがベストだよ。あのＩＳは攻撃と機動両方が特化してる。アレ以上にスペックの高い機体は無いよっ」

「…だがな、あいつ一人に任すわけには」

『いえ、あの三機はオレに任せてください。シャル達は銀の福音の対処に』

オープン・チャネルで俊貴が会話に割り込んできた。

「…」

千冬がジッと見てくる。

『任せてください』

千冬の目をジッと見返す。

「…わかった。お前はその三機を倒したら、補給の後、銀の福音に対処してもらう」

諦めた千冬が俊貴に任務をだす。

「了解しました」

ニッと笑い通信を切る俊貴。

はぁ、とため息をつき千冬がシャル達の方を向く。

「それでは銀の福音戦の作戦会議を始める。意見は？」

「はい」

セシリアが手をあげる。

「目標のスペックデータを要求します」

「わかった。だが、口外はするな。最重要軍事機密だ。漏洩した場合、どうなるかわかるな？」

「は、はい」

代表候補生の面々と教師陣が公開されたデータをもとに相談を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃が可能」

「攻撃と機動に特化した機体って、俊貴のＩＳと同じじゃない…。厄介だわ。甲龍よりもスペックは上だし」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。連続しての防御は難しい

気がするよ」

「しかも、格闘性能が未知数だ。持ってるスキルもわからん。偵察は行えない、ですよね？」

「無理だな。機体自体が今も超音速飛行を続けている。それに俊貴の予想戦闘空域と被る」

「俊貴がその空域から離してくれるのを待つしかないんですね」

「うむ、そういうことだ」

ディスプレイのレーダーを見る千冬達。
俊貴が三機とそろそろ接触する。

・・・・・・・・・・・・

俊貴が例の三機の付近まで到達した。

一気に行くぞ！時間もないしな

ー了解です、マスター

瞬時加速で更にスピードを上げて、三機に奇襲をかける。

「な、なんだ！？」

緑のＩＳが警告音に気づき俊貴の方を振り向く。

「気づかれた！…でも！！」

腰からビームピストルを取りだし、三機目掛けて連射する。

「敵だ！シャーリィ！キール！」

緑のＩＳが二機に呼び掛けたようで、二機も俊貴の方を向き、ビームをかわし始める。

「ちっ！」

そのビームの嵐にすべてを回避できず、何発か当たっている。

「うわっ！」

三機の横を通り抜け、その風圧に青いＩＳがバランスを崩す。
俊貴が刀を取り出し、青いＩＳに向けて瞬時加速。

「やらせない！」

黒いＩＳが青いＩＳの前に立ち塞がり、俊貴の刀をビームサーベルで受け止めた。

「はあぁ！」

俊貴が腰の電磁砲を黒いＩＳに向ける。

「しまっ！？」

爆音を上げて黒いＩＳのシールドエネルギーを減らす。

「うおぉぉ！」

「くっ…」

緑のＩＳがビームライフルを三発放ちながら接近してくる。

それを後ろ斜め下に移動してかわす。

「そこっ！」

青いＩＳが肩のミサイルポッドからミサイルを放つ。

それを冷静にミサイルを見定め、ビームピストルで撃ち抜き、爆発が誘爆を起こす。

「はあぁぁぁ！」

爆煙から黒いＩＳが俊貴に向かって突っ込んでくる。

俊貴が黒いＩＳに向かって瞬時加速。

「なっ！？」

それに戸惑い動きが鈍る。

「はっ！」

斜め右から左下に振り抜く。

「ぐうぅ…」

装甲が切り裂かれ、エネルギーがドンドン減る黒いＩＳ。

「さがれ！シャーリィ！！」

緑と青のＩＳが黒いＩＳの前に立ち塞がる。

「飛ばすよ！蜃気楼！！」

「了解です、マスター」

瞬時加速を使い、三機に向かう。

「うあああっ！」

鎌を取り出した青いＩＳが俊貴に向かう。

「ふっ…」

刀で鎌の刃を弾き、がら空きになった胴体を蹴る。

「うっ」

呻き怯む。その隙を逃さず、肩のミサイルポッドを破壊。そのまま、背中のスラスターも破壊する。

「キール！」

緑のＩＳが俊貴に向かって瞬時加速。その手にはビームサーベルが握られている。

「はあああぁ！」

同時に黒いＩＳもビームサーベルで俊貴に斬りかかる。

「くっ…！」

黒いＩＳに気づき、左腕のビームシールドを展開し、ビームサーベルを受け止め、刀で緑のＩＳのビームサーベルを受け止める。

バチバチと火花を散らす。

「もらったぁ！」

「！？」

青いＩＳがバズーカを俊貴に向けている。

や、ヤバイ！

動こうにも左右で俊貴を斬ろうとする二機が邪魔で動けない。

「落ちろっ！」

バズーカから弾丸が放たれ、俊貴に直撃。ギリギリまで二機が隣に居たためその爆発に巻き込まれた。

「くっ…！」

俊貴が爆煙から抜け出し、三機の方を見る。

被害状況は？

ー右腕と両足、肩の装甲が破壊されました。シールドエネルギーも２５０です

はぁ、前より連携がとれててキツい…

けど！まだこんなところでやられるわけには！！

右腕に刀、左腕にビームライフルを取り出す。

「あっちもエネルギーに余裕がないはずだ！一気にいくぞ！」

シュレインが俊貴に瞬時加速。

「アレと銀の福音、両方捕獲よ！！」

シャーリィも瞬時加速。

「ふ、二人とも！」

流石に冷静なキールだが、二人を止めきれない。

「おらあぁぁ！」

「落ちろー！」

二人が同時に俊貴を切り裂く。

「「！？」」

が、切り裂いた俊貴がボヤけて消える。

ＩＳの名前通りの蜃気楼。

「お前らが堕ちろ」

俊貴が二機の後ろに現れ、緑のＩＳを切り裂く。

「く、くそがあぁぁ！」

罵声を上げて、海へと墜ちていく。

「シュレイン！…あぁぁぁ！」

やけくそ気味に俊貴に突攻する。

だが、その直線的な突攻はあっさりと横にかわされ背中のスラスターが撃ち抜かれる。

「くっ！まだ…」

「いや、終わりだよ」

急いで振り返るが目の前には俊貴。既に刀を振り下ろしており、回避不可。

「くうぅ…」

振り下ろされた刀により、エネルギー０。俊貴を睨み付け、海へと墜ちていく。

「シャーリィ！」

キールが海に落ちたシャーリィに声をあげる。

「撤退しろ。もう勝負はついた」

「！……ま、まだだ！！」

俊貴を見上げてバズーカを向ける。

「…」

それをただ黙って見る俊貴。

「うあああっ！」

バズーカのトリガーを引き、実弾を放つ。

「し、しまった…！」

その実弾は俊貴をすり抜けた。

「警告はした」

真下から俊貴が瞬時加速で突っ込んでくる。

「！」

通り抜け様に装甲を切り裂かれ、エネルギー０。

キールも海へと墜ちていく。

ー熱源なし、敵ＩＳ撃墜を確認

「…了解」

はぁ、と深いため息をつき武器を量子化。
体をダルそうに下に向ける。

エネルギーは？

ー残り５０。蜃気楼を二回連続使用が大幅にエネルギーを喰らいました

そっかー…オープン・チャネルで千冬さんの所開いて

ー了解

声に出す気力もなくて脳内会話。

『無事か！奥村』

オープン・チャネルを開いた瞬間に千冬が声をあげた。

びっくりした…

「三機撃墜しました。今から戻ります」

『うむ、補給の準備もしておく』

「了解です…」

『…ボロボロだな』

「はい…、前より連携がとれててキツかったです」

苦笑いする俊貴。

俊貴の今の状態がディスプレイに表示され、シャル達が驚く。
装甲があちこち破壊されている。

「奥村くんがあんなボロボロなんて珍しいですね」

山田先生が心配そうに聞く。

『はは、相手が強かったんですよ』

力なく笑う俊貴。
余力も余り残ってないようだ。

ーマスター！後方から熱源反応ありです！

「な！？もう！！？」

慌てて振り向く俊貴。

その視線の先には何かが尋常じゃないスピードで向かってくる。

『お、織斑先生！銀の福音が奥村くんの近くに！』

山田先生の焦った声が聞こえてくる。

『なんだと!?奥村!そこから迅速に撤退しろ!!』

「無理です。瞬時加速もできません。エネルギーはもう５０切ってますから…」

『諦めるな、馬鹿者!!』

千冬が怒鳴る。

「諦める?そんなこと言ってないですよ。やれることはやります」

俊貴が微笑む。

そういって、通信を一方的に切る。

「勝手に切りおった…」

千冬が苦い顔をする。

「目標を確認。戦闘を開始する」

回らない頭を何とか回そうとする俊貴。

だんだんと全身銀色のＩＳが俊貴に近づいてくる。

そのＩＳは頭部から巨大な翼を生やしている。大型スラスターと広域射撃武器を融合させたものらしい。

「蜃気楼！突っ込むぞ！サポートを頼む！！」

ー了解

攻撃に俊貴は集中するため、回避行動を蜃気楼に任せる。

向かってくる銀の福音に向かって、刀を振り下ろす。

「！？」

当たると思った瞬間、福音は、最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘（シルバー・ベル）》、稼働開始」

オープン・チャネルから機械音声が聞こえてきた。

その瞬間、俊貴の頭を何かがよぎる。

いやな感じだ…

そう思った瞬間、いきなり福音が体を一回転させ、俊貴に突っ込んでくる。

銀色の翼を広げて

「し、しまった…！」

その翼が何なのか理解して、千冬の所へオープン・チャネルを開く。

戦闘の映像をディスプレイに写し出している。

その翼は砲口だった。

俊貴に向けて前へとせりだし、幾重もの光の弾丸が撃ち出された。

「くっ！」

その弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーで、ちょうど羽のような形をしている。それが装甲に刺さったかと思うと、次の瞬間に爆発。

こ、この連射はヤバイ…！

狙いは荒いが、触れれば爆発。連射速度も速い。避けるのが難しすぎる。

「ただでやられるかぁ！！」

爆発があちこちで起こりながら、電磁砲を向けて放つ。

が、福音は簡単にかわす。そしてまた砲口を俊貴に向け、爆発光弾が降り注ぐ。

や、やべっ…

このままじゃ…

エネルギーシールドで相殺しきれない衝撃が何十発と続き、俊貴の体にダメージを負わせていく。アーマーが破壊され、熱で肌が焼ける。

『『『俊貴っ！』』』

ビームライフルを福音へと向けて放つ。

「！」

「へへっ……あたり…」

俊貴の放ったビームが福音の腹に当たる。

一瞬動きが止まった福音は、すぐに光の翼を俊貴に向けて弾幕を放つ。

何人もの声が聞こえたが、俊貴の視界はだんだんと暗くなる。

そして、羽が何枚も俊貴に当たり爆発。

煙をあげてボロボロになった装甲と共に俊貴が海へと落ちていった。

大きな水音と共に伝わる衝撃。

俊貴の意識はなくなった。

「お、奥村くんの反応が…ロストしました。…撃墜確認しました」

山田先生の声が震えている。

「…作戦を中断。各自現状待機しろ。先生方は奥村を捜索してください」

千冬が頭を押さえて指令を出す。その声はいつもの張りがない。

「と、俊貴…」

シャルがギュッと拳を握る。

墜ちる黒い戦士（後書き）

こんにちわ。

今回は三機のＩＳと銀の福音戦でした。
銀の福音戦は今回少ないですが、次の話は丸々銀の福音戦です。

うまく書けてるかわかりませんが、コメント等もらえるとうれしいです。

悲劇の海域

青い海の中をただ下へと沈んでいく。
体にはまだ蜃気楼が展開しているが、その体はドンドンと海底へと沈んでいく。
沈んでいく俊貴の意識は戻らない。
まるで海底を目指すかの様に沈んでいく。

そして、気づいたらまた真っ暗な世界。
周りに何かあるのかもわからない程の黒い世界。

見覚えがある

一度来たような気がする

ーまたここに来る気か？

黒い世界に声が響く。
だが、姿は見えない。

頭…回んないや
オレどうなったのかな…

ボーッとする
考えようとしても何も考えられない

ー思ったより酷い状態だな。

声が響き頭で言ってることもわかる。けど返事ができない。

返事？どうやるんだっけ…

ー1つ言っておこう。汝には余り時間はないぞ。決断は早くするのだ

その声を最後に俊貴はその場で目を瞑ってしまった。

俊貴の頭の中には、シャル達の事も銀の福音の事も忘れるかの様に片隅に追いやられている。そのまま忘れてしまいそうな程に

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「………」

海上二百メートルでうずくまって停止する銀の福音。

頭部の翼が全身を守るように包んでいる。

「ー？」

不意に顔をあげた瞬間、砲弾が福音の頭部を直撃、爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

少し離れた場所からラウラは、次弾を装填し発射する。

ラウラのISシュヴァルツェア・レーゲンの砲戦パッケージ〝パンツァー・カノニーア〟を装備しており、左右の肩に八〇口径レールカノン〝ブリッツ〟を装備している。遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っている。

（くっ！予想よりも速い！）

福音がラウラに向かってくる間にも砲撃をしていたが、翼からのエネルギー弾で半数以上を撃ち落としながら接近している。

「ちっ！」

機動力特化の福音に対して、砲撃仕様で反動相殺のために機動が低いラウラへと福音が右手を伸ばす。

避けられないが、ラウラはニヤリと笑う。

「させませんわ！」

伸ばした腕が、セシリアによって弾かれる。

セシリアのブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲。強襲用高機動パッケージ‘ストライク・ガンナー’により、福音についていける機動力を得たセシリア。六基のビットの砲口を塞ぎスラスターとして使い、全てがスカート状に腰部に接続されている。手にしている大型ＢＴレーザーライフル‘スターダスト・シューター’はビットの分の火力を補っている。

「敵機Ｂを確認。排除行動に移る」

「遅いよ」

セシリアの射撃をかわす福音を、真後ろからシャルがショットガン二丁による射撃を行う。
シャルもステルスモードでセシリアの背中に乗っていた。

ショットガンの近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。
が、一瞬で反撃を始める。
「おっと。‘ガーデン・カーテン’はこのくらいじゃ落ちないよ」
リヴァイヴ専用防御パッケージにより、福音の弾幕を防ぐ。そのシールドは、二枚の実弾シールドと、二枚のエネルギーシールドがカーテンのように前面を遮る。
その間にも、シャルはラピッド・スイッチでアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃する。
それに加えて高機動射撃を行うセシリアと、砲撃をするラウラ。
三方向からの射撃に、福音は消耗を始めた。
「現空域からの離脱を最優先に変更」
全方向にエネルギー弾を放ち、全スラスターを開き強行突破を計る。
「させるかぁ！」
鈴が上から降りてきて両肩の衝撃砲を放つ。
それは不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも福音と同じぐらいの弾幕。
鈴の甲龍の機能増幅パッケージ‘崩山’で、二つの砲門が増加している。
「！」

「やりましたの！？」

「…まだよ！」

鈴の砲撃砲を受けてなお、福音は機能を停止していない。

「‘銀の鐘’最大稼働……開始」

両腕を左右に広げ、翼も外側へ向ける。

その瞬間、まばゆい光がはぜ、エネルギー弾の一斉射撃が始まった。

「くっ！」

「鈴！僕の後ろに！」

一番近くにいた鈴をシャルが後ろに匿う。

「それにしても…これはちょっと、きついね」

福音の異常な連射を立て続けに受けて、物理シールドが一枚破壊された。

「無断で出てきたのに、やられたらカッコつかないじゃない！」

鈴がシャルの後ろで福音を睨み付ける。

現状待機を命じられたが、俊貴を落とされた事に闘志を、怒りを燃やす四人は黙って銀の福音まで向かって行った。ラウラにより銀の福音の位置を特定し、作戦を自分達で立てた。

帰れば千冬が待っている。恐ろしい罰を用意した鬼教官が。だが、

無事に帰れるかは福音次第なのだが。

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「言われずとも！」

「お任せになって！」

後退するシャルと入れ替わりにラウラとセシリアが左右から射撃を始める。

「足が止まればこっちのもんよ！」

鈴が一気に突撃。

双天牙月による斬撃と、衝撃砲を浴びせる。

「もらったあぁぁ！」

エネルギー弾を受けながらもごり押して斬撃を繰り出す。

その一撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ…！どうよ……ぐっ！？」

福音は鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込む。脚部スラスターで加速した蹴りは、一撃で鈴の腕の装甲を破壊して海へと叩き込む。

そのまま片翼の砲門からエネルギー弾を追い討ちをかけるように、海に放つ。

「鈴！」

ラウラが射撃を再開する。それに合わせて他の二人も射撃を始める。

弾幕の嵐により、銀の福音の翼がもげ、海へと落下していく。

「今度はホントにやった？」

シャルが海に落ちた鈴の位置を探しながら聞く。

が、その瞬間、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

「！？」

青い雷を纏った銀の福音が姿を現した。

「まずい！第二形態移行（セカンド・シフト）だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、その声に反応したように福音が顔を向ける。

「キアアアア！！」

獣の咆哮のような声を発し、福音がラウラへと飛びかかる。

「なに！？」

その速すぎる動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。

そして、無くなった翼から再びエネルギーの翼が生えた。

「ラウラ！」

シャルが近接ブレードを取り出した。

「来るなっ！」

ラウラが肩の砲門からシャルに向けて放つ。

「っ！」

シャルの足元に当たり爆発。

「ラウラぁ！」

シャルが爆煙を払ってラウラの方を見ると、エネルギーの翼に抱かれていた。
その瞬間、エネルギー弾雨を零距離で喰らい、全身をズタズタにされてラウラは海へと墜ちた。

「何ですの！？この性能…軍用とはいえ、あまりに異常な…」

高機動による射撃を行おうとしたセシリアの目の前に福音が現れる。

「くっ！」

ライフルを構えようとするが、長い銃は接近されると構えられない。
そのまま銃身を蹴られた。
そして、両翼からの射撃でセシリアは海へと墜ちた。

「あぁぁ…、皆…」

シャルが海上に浮かんできた仲間たちを涙目で見る。
気を失っているが、ＩＳで浮かんできていた。だが、俊貴は何故か浮かんでこない。

「よくも…よくもおぉ！」

シャルが涙目になりながら怒声をあげて福音へと突撃。

「あぁぁぁぁ！！」

エネルギー弾を受けながらも近接ブレードを振り抜く。

が、近接ブレードを左手で受けとめられた。

「な！？そんなっ…！」

福音の右手がシャルの首を捕まえ、ゆっくりと翼がシャルを包み込んでいった。

(ごめんね、皆……、俊貴…！)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ーいい加減目を冷ましたらどうだ？

黒い世界に響く声。

その世界に漂っているように浮いている俊貴がゆっくりと目を開ける。

「こ、ここは…」

辺りを見渡し、状況を理解しようと頭を働かせる。

ー汝を呼んでる者がいる。

「え？」

ー呼んでるよ……行かないと

今度は違う声が聞こえた。さっきから聞こえていた声は清んだ大人の女性の様な声。

今聞こえたのは、少女のような可憐な声。

呼んでる…オレを？

ー汝はまたここに戻ってくる気か？

再び大人の女性の声になる。

次第に意識がしっかりしてきて、頭が回ってくる。

「いいや、まだ戻る気はない！オレは守るもののためにまだ！！」

ー力を求めるか？

それを聞いた時、ラウラの事を思いだす。ＶＴーシステム…

「欲しいさ！欲しいけど、暴走する力はいらない！」

ーだろうな。汝はそんな力を絶対に求めない。だが、その力がなければ守れないのではないか？

「…確かに、道理のない暴力とかから仲間を守るのにいるかもしれない。」

「でも、そんな力で仲間を守れるとは思わない。守るどころか傷つける。ならオレは今のままでも仲間を守るために戦う！」

そんな事考えたこともなかったのに、何故かすらすら口から言葉が出てくる。

ーそうか…

ーじゃあ、行かないとね

「え？」

どうやら俊貴と大人の女性？と少女、三人がこの場にいるらしい。声しか聞こえないけど。

「さぁ、行こう？」

急に手を引っ張られる。

「え、え？」

訳もわからず引っ張られる方を見ると、黒いワンピースを着た少女が俊貴の手を取り微笑んでいる。その背中には、赤い粒子を放出しながら光る一対の赤い翼が生えている。

ーちょっと待て

少女が首を傾げて上の方を見た。

ー本来存在しない汝が今の世界に転生したことで、起こらない事が起こるようになった

「はぁ…」

俊貴には意味がわからない。

だが、既にそれは起こっている。謎のＩＳ三機がまさにそうだ。

ーだから、汝にその事象に対処してもらう

「ち、ちょっと待ってよ！本来の原因は…」

ーそう、我の方にある。だから、ただではない。

「いやいや、そうじゃなくて」

ーすまんな、本来それは我々の仕事なのだが、これ以上世界に負担をかけるとどうなるかわからんのだ

世界に負担？

どういう…

パソコンの容量みたいな感じ、か？

ーまぁ、そうだ。存在しない人間がその場にいることにより、歪みが生じる。その歪みが未知数な現象を引き起こす。放置すれば、その歪みが世界中に広がり世界はおそらく消失する

「…はぁ、わかりました。やりますよ」

こんな話を聞いて放置するほうが無理だ。今の世界には大事な物が有りすぎる。そんな世界を消失させるわけにはいかない。

ーすまんな。ちゃんと汝は礼をする

「いえ、気にしないでください。オレもあの世界に行くことを望んだんですから、それぐらいやりますよ」

ーそうか、助かる。すまんな、時間をとってしまって。では、汝を呼ぶ者の元へ行くがよい

「さぁ、いくよ」

「あぁ」

俊貴が頷き、少女がまた手を引っ張り始める。

段々と景色が変わり始めた。

黒い世界を真っ白な光が照らし始め、俊貴は光に包まれる。

悲劇の海域（後書き）

こんにちわ

ますます暑くなってきましたねー

熱中症皆さん気を付けてください。

次で銀の福音戦、決着です。

不知火

「山田先生、状況は？」

ディスプレイに映し出されたレーダーや各ＩＳの情報を見上げる千冬。

「凰さん、ボーデヴィッヒさん、オルコットさんは撃墜されてます。デュノアさんはエネルギー残り僅かです」

山田先生の声が弱々しい。

千冬達が、部屋から抜け出したシャル達に気づいたのは銀の福音と交戦し始めた時だった。ステルスモードで気づくのが遅れたのが原因だった。

「あの馬鹿どもが…勝手に出ていって、やられていたら作戦をどうしろと言うのだ…」

と言っても、俊貴がいない状況で組み立てる作戦は未だに練られていなかった。

「お、織斑先生！」

「どうした？」

「戦闘区域に熱源反応が！」

「何！？」

二人の顔は厳しいものとなる。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うぅ…」

首を締め上げられ、苦しげな声をあげるシャル。
その力は強く振りほどく力はシャルに残っていない。

翼が輝きを増して、シャルを包み込んでいく。
一斉射撃が始まろうとするなか、シャルは一つの事を思い浮かべた。

俊貴
会いたいな
今すぐに会いたいな
ああ、会いたい

「…き」

無意識に口から言葉を漏らす。

「俊貴…」

輝きを増す翼に、シャルは目に涙を浮かべて目をつむる。
その瞬間、海の中から二発の電磁砲が水柱を上げた。

「!?」

福音はシャルを掴んでいた手を離したが、その電磁砲を受けて吹き

飛んだ。

（な、何が起こって…）

戸惑うシャルの耳に届いたその声は、今一番聞きたい人の声だった。

「これ以上、オレの大切な人を、仲間を傷つけさせない！」

シャルの視線の先には、黒いボロボロの、だが背中に赤い綺麗な翼を放つ機体がある。腕にはラウラを抱えている。

「うぅ…っ…」

瞳に溜まった涙が頬を伝う。

そんなシャルの隣に飛んできた俊貴。

「ごめん、待たせちゃって」

「…った……よかった…」

「心配させちゃったね、ごめん」

済まなそうに微笑みながら、シャルの頭を撫でる。

「ホントだよ…」

涙を拭いながら微笑んでくれるシャル。

「ちょっと待ってて。今度は、オレがやるから」

返事を聞く前に、シャルにラウラを渡して、向かってくる福音へと瞬時加速。

「二度目はねぇぞ」

刀を片手で一本ずつ持ち、斬りかかる。

それをひらりとのけぞってかわした福音に、左の刀で福音の装甲を斬り飛ばす。

「敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する」

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。

そして、一回転し福音の掃射反撃が始まった。

「何度も食らうか！」

俊貴の視界にエネルギー弾雨の予測ルートが表示される。前にシャルのショットガンを避けようとした時と同じ。

赤い粒子を放出しながら、赤い翼が推進翼から現れ、弾幕をかわす。

弾と弾の間を縫うように駆け抜ける。

「はあぁぁぁ！」

蜃気楼のワン・オフ・アビリティー、‘ヴォワチュール・リミュエールシステム’。通称、光の翼。

何故か二次移行してないのに使えていた。

その光の翼が複雑な動きを可能にし、弾と弾の間を縫うように駆け抜ける。

「状況変化。最大攻撃力を使用する」

しならせていた翼を自身へと巻き付け始める。それは球状になり、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった。

ピキーン

みたいな感じで脳裏をよぎる。胸がざわつく。

こういう予感は当たるんだよ…

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる。

それは、周りでダメージを負って弱ってるシャルやラウラ達にも被害が出ることを意味する。

ま、守りきれるか!?

光の翼を展開し、ラウラ達の元へ向かおうとするが、怒鳴り声が響く。

「私達を見くびるな。余計な心配はせずに、ヤツを片付けろ」

「ラウラ……わかった!信じるよ!」

皆を信じる。今は皆を信じて、目の前の相手に集中する。

向きをラウラ達から福音へと変えて飛び込む。

「うおおぉぉ！」

光の翼による高速機動を用いて、両手の刀による斬撃を繰り返し、翼の一つを切り裂く。

だが、もう一つを切り裂こうとする間に、失った翼は再構築されて、強力な連続射撃を行ってくる。

「くっ！」

ーエネルギー１６０、予測稼働時間、二分

相手はまだまだエネルギーが持つようだが、自分はエネルギーが切れ始めてきた。

まずいな…

でも、ここでやられたら皆を守れない

決めたのに！オレの手の届く範囲の人達を守るって、決めたのに！

福音のスラスターで加速された回し蹴りが俊貴の刀を弾き飛ばす。

そのまま福音は俊貴に体当たりをする。

守るって決めたから、立ち上がれた！

仲間を

シャルを守るって決めたんだ！！

蜃気楼！！オレに力を貸してくれ！！仲間を、大切な人を守るための力を！！

「しまっ！」

銀の福音は俊貴の怯んだ一瞬の隙を逃さず、回し蹴りで俊貴の脇腹を蹴飛ばす。

蜃気楼！！

強く心のなかでＩＳの名前を呼ぶ

ーイエス、マスター。第二形態移行（セカンド・シフト）を開始します

そう聞こえた瞬間、俊貴の全身が強い光に包まれる。

「な、何？」

シャルがそれを見下ろす。

「だ、第二形態移行だ」

シャルの腕に抱かれたラウラが俊貴の方を見る。

他の二人もなんとか無事に陸地へ上がり、そこから見上げているようだ。

そして、光が納まり俊貴の姿が見えた。

黒と赤のパーソナルカラーと、脚と背中の装甲以外が薄いのは変わらない。だが、背中には大型スラスターを中心とした、左右対象に配置された大型ウィングが付いた。そのウィングには小さなウィン

グが収納されており、展開すると十枚のウィングが現れる。
腰には電磁砲、ビームピストルもそのまま。

そして、俊貴の様子も変わっていた。
瞳の色が赤から金色に変わっている。ラウラと同じ金に。

おそらく金色なのは神様のせいだろう。あの時ラウラの事を考えたからかもしれないし、ラウラと同じも悪くない。それに本人は気づいてはいないが。

やってやるさ！‘不知火’と共に、守るための戦いを！！

「…こっからが本番だ」

俊貴が両手に刀を取り出した。その刀はエネルギー刃の蜃気楼と同じ構造だが、長さはこちらのが長い。

そして背中の大型ウィングを展開して十枚の翼が現れる。
その先から、赤い翼。

体になじむ
指先の感覚までしっかり伝わってくる
いける…
これなら、この‘不知火’ならやれる！！
何故か名前が不知火に変わっていた。それに言ってから気づいた。

そう思い、福音へと突っ込む。

福音は再び翼を俊貴に向けて、エネルギー弾を降らせる。

「邪魔だあぁぁ！」

赤い翼により、機動力が跳ね上がり俊貴の残像を残しながらエネルギー弾を避ける。

「！」

その速度に弾を降らせるのを止め、すべてのスラスターを使い、真上へと急上昇。

「遅い！」

福音が目の前に不意に現れた俊貴に気づき急停止。

だが、遅かった。

振り上げられた刀は勢いよく福音の頭部の装甲を切り裂く。それにより翼が二つ消滅。パイロットの顔が露になり、ぐったりした表情が見える。

「ラアアアー！」

甲高い声をあげた福音。そこから発せられた声の振動により俊貴は吹き飛ばされる。

「くぅっ…！ラー○フォンかよ！？」

高周波による攻撃？に思わずそう叫ぶ。頭の翼とかちょっと似てるよね。

「だからって！その程度じゃあ！！」

「！」

二段階瞬時加速で開いた距離を詰める。

その速さに福音が、弾幕を展開しながら下がる。

それに赤い翼を展開し、残像を残しながら距離を詰める。

「これで、終わりだ！」

刀を交差して、振り抜き福音の胴体の装甲を切り裂く。

「戦闘続行不可。パイロットの生命を最優先に切り替え」

ＩＳアーマーから、スーツだけの状態で操縦者が海へと落下していく。

「く…！」

二段階瞬時加速で、落ちていく操縦者の腕をなんとか掴み、海面に叩きつけられるのを防ぐ。腕にグッと気絶した人の重みが伝わり、呻くがちゃんと抱き抱える。

その俊貴の元にシャルがゆっくりと飛んできた。

「終わった…」

「うん…。終わったね」

俊貴と肩を並べて、夕陽によって赤く染まる空を眺める。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「作戦完了…と言いたいところだが、お前たちは待機命令を破って重大な違反を犯した。帰ったら、反省文と特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

暴走を止めた戦士達の帰還は、誉められるどころかお叱りをうけるものだった。

腕を組みきつく言葉を放つ千冬に、俊貴は心が砕けかける音がした。

大広間で全員正座。時間にして一時間は経とうとしている。そのため正座の苦手なセシリアの表情が、真っ青になっている。

「お…」

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろこのへんで……。怪我人もいますし、ね？」

「ふん…」

怒り心頭の千冬に、俊貴が声をかけようとしたら山田先生はおろおろしながら言った。

さっきから救急箱や、水分補給パックを持ってきたりと忙しそうにしてる。

…グッジョブ！山田先生。セシリアがキツそうだし、オレも睨まれ

ずに済んだ

怒られるのを覚悟して、千冬に声をかけようとした俊貴はホッとする。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょう。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。」

「へーい」

補給パックを受け取り、さっさと大広間から出ていく俊貴。診察が始まって、部屋から出される前に自分から廊下に脱出した。

（…言われる前に逃げた）

シャルが俊貴の思考に気づき苦笑い。

シャルたちも補給パックを受け取り飲み始める。

「…」

「な、なんですか？織斑先生」

じーっとシャル達の方を見ていた千冬に皆気づき、シャルが代表して聞く。

（…また怒られちゃうのかな）

「……しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え…？」

なんだか照れくさそうだったが、背中を向けられたため表情が見えない。

「あいつにも言わないんですか？」

鈴が聞く。

「…必要ない」

鈴達には背を向けたまま答える千冬。その視線の先は俊貴が出ていった扉のほう。

あらら、扉にもたれて座ってるのがバレてるかな。

苦笑いしながら、自分の診察のために部屋の前で待つ俊貴。

なんだかんだで、身を案じてくれる千冬に、俊貴は心のなかで感謝。

直接言うと嫌がりそうだしね

「ふう…」

小さくため息をつく俊貴。

今回のキツい戦いは終わった。今までで一番キツかった戦闘。

思うことは色々ある。

でも、大事な人を、仲間を守れた。

それを実感して、無意識に笑顔になる俊貴。

・・・・・・・・・・・・・

「ね、結局なんだったの？教えてよー」

「…だめ。機密だから」

パクパクと夕飯を食べるシャルに女子が数名群がって聞いている。専用機持ちで、取っつきやすい俊貴とシャルになら聞けると思ったのだろうが、俊貴はその場にいない。だから、残るシャルに聞こうとしているが、それは判断ミス。専用機持ちで一番責任感が強いから。

「ちぇー。シャルロットってば堅いなぁ」

「あのねぇ、聞いたら制約つくんだよ？いいの？」

「あー…、それは困る…」

「でしょ？なら、この話はおしまい。なにも答えないよ」

「ぶーぶー」

夕飯を食べながら女子を簡単にあしらうシャル。夕飯なのに、朝飯前ってか？

…そんな目で見ないで

そんな大宴会場に、診察を終えた俊貴が浴衣で入ってきた。ついでに風呂に入ってきてた。傷にしみたが我慢。

「お？どしたの、皆」

シャルの周りに集まってた女子達に聞く俊貴。

「んー？何もないよー」

そういって、自分達の席に戻っていく女子達。

「？ふーん…」

深く気にしない俊貴が、シャルが取っておいてくれた席につく。ちなみにシャルの正面。

「いただきまーす」

箸を持ち手を合わせる俊貴。

おかずやご飯をパクパクと食べ始めた俊貴が、ふとシャルを見つめる。

無事で良かった…

と、改めて思う。

「な、なにかな？」

俊貴の視線に気づきシャルが聞く。

改めて、無事で良かった、なんて恥ずかしくて言えず、でも、何でもないと言うと不機嫌になる。

あー…

「シャルロット、浴衣の胸元ゆるんでる」

俊貴が言葉を探していたら、隣の女子がシャルに何かを吹き込んでいる。

ピキーン

あ、何か嫌な予感がする。落とされてから、何故か勘が鋭くなった気がする。

「つ……！！」

案の定、シャルは真っ赤になって浴衣の合わせ目を慌てて手で塞ぐ。

な、何故にその抗議の目をしていらっしゃる…

「俊貴のえっち…」

「な、なんですとぉー！？」

まさかの冤罪。な、何故だ！オレが何したというんだ…

「……うっそー。浴衣はゆるんでません」

「！！」

また隣の女子がぼそりと言う。

それを聞いた途端、シャルは耳まで真っ赤となり立ち上がる。

「…」

「お刺身がおいしーなぁ。あはは」

シャルの抗議の眼差しは隣の女子に移動した。しかし、当人はきにせず料理をつまんでいる。

「それにしてもシャルロットってば、えっちぃなぁ」

「ち、違うよ!?ぼ、僕は、ただ、その…」

しどろもどろになるシャル。女子の言葉に翻弄されてる。

……オレがいない間に何か有ったのか？

「と、俊貴…？さっきは、ごめんね…？」

「へ？あ、うん。いいけど」

いきなり謝られたが、頷き返事。

それからすとんと着席したシャルは、にっこりと笑顔を見せた後、さりげなく隣の女子の脇腹をつねっていた。

・・・・・・・・・・

砂浜に座り、ボーッと海を眺める俊貴。砂浜に押し寄せる波の音だけがその場に響く。

「…」

その場に倒れて、綺麗に瞬く星を浮かばせる夜空を見る。

今日は流石に焦ったかな…

まさか、謎のＩＳ三機と銀の福音を相手にするとは思ってもなかった。

そのおかげで、第二形態移行ができたのだから、まぁいいか

あ…そういえばあの時の夢？はなんだったんだろう

海に落ちた時に何かを見た気がするが、今は殆ど覚えてない。大事な事だった気がするが、思い出せない。

「と、俊貴？」

「…ん？」

いきなり名前を呼ばれて振り向く。

そこには月明かりに照らされたシャルがいた。

「シャル？どした、こんなとこにきて」

「い、いやちょっと散歩だよ。」

「そっか」

隣に歩いてきたシャル。

「す、座っていい？」

「ん？いいよ、隣でいいなら喜んで」

微笑み座るのを促す。

ありがと、と言ってチョコンと座る。

「…」

「…」

二人の間に気まずい沈黙。

「え、えーと…」

「う、うん…」

空気に耐えきれず、他愛もない会話をしようと考える。

「怪我は大丈夫？」

ちっくしょー！なんもでてこねーよ！！体調気遣うしかできねぇ！！

それを表情に出さずに何とか言葉にした俊貴。

「あ、うん。俊貴が来てくれたおかげで三人より軽く済んだから」

「そっか…。もうちょっと早く駆けつけてれば、ラウラ達の怪我も軽かったかも…」

俊貴の表情が曇る。

（…やっぱり気にしてるみたい）

そう思いながら、俊貴の顔をチラッと見る。

「でも、皆俊貴を責めてなんかいないよ。」

優しく言うシャル。

ラウラ達は自分の事よりも俊貴の方を気にしていた。

謎のＩＳ三機と戦ってボロボロだったのに、その状態で銀の福音と戦って撃墜された。

俊貴の場合、怪我がラウラ達の比ではない。

「そうみたいだけど、流石に今回は迷惑かけちゃったな。ラウラ達にも千冬さん達にも…」

「…先生達には迷惑かけちゃったね。私たちも勝手に出ちゃったし」

苦笑いするシャル。

「でも、何とか終わって良かったよ。シャルも無事だったし」

にしし、と笑いながらシャルの頭を撫でる俊貴。

「う、うん…。良かった…」

ボーッと俊貴を見るシャル。

「あ、あのね…」

「うん？」

「俊貴の怪我は大丈夫なの？」

「あー…、何かさ、目が覚めたら治ってたんだよね」

頬をかく俊貴。

「えぇ！？そんなわけないよ！映像で見たときは火傷とか切り傷とか一杯…」

そういって、俊貴の腕を取り袖をまくり月の明かりで照らす。

「消えてる…。ホントに、何ともないの…？」

「うん、治ってるよ。ほら」

そういって、浴衣を上半身だけはだけさせる。

「　っ！」

それに驚いたシャルが真っ赤になってうつ向く。が、チラチラと見る。

「よくわからんけど傷も綺麗に治ってたし、ＩＳの機能か何かかなぁ、って思ってる」

シャルに背を向けた俊貴。

「で、でも、そんな機能は聞いたことないよ…」

何故か手を伸ばし、おそるおそる俊貴の背中に触れ、そこに傷がな

いことを指先で何度も確かめる。

「…結構たくましい」

ボソッと呟くシャル。

……何故にこんな熱心に触れてくるのだ、この娘は

ペタペタ触れ始めたシャルにドキドキし始めた俊貴。

「えーと…、そろそろ浴衣着てもいい？」

シャルがさっきよりも近づいてきてる事に気づき、声をかける。

「あ…！ご、ごめん」

我に帰って、慌てて俊貴から離れる音がした。

「いや、いいんだけど」

苦笑いする俊貴。

シャルが赤くなってうつ向いてる。

その隣に座り直す俊貴。

それを横目でチラッと確認したシャル。

「俊貴…」

「ん？」

「肩、借りていい？」

「…いいよ」

「……ありがと」

俊貴の肩に頭を乗せるシャル。肩にシャルを感じ、良い匂いが俊貴をくすぐる。心臓がばくばくする。

でも、シャルにそれを悟られないように、尚且つ、肩を動かさないように気を付ける。

肩にシャルを感じて、俊貴は一つの事に改めて気づく。

いつの間にか、シャルがとても大事な存在となっていた事にラウラ達も大事だが、シャルの存在はそれを超えている

そんな二人の後ろ姿を見つめる三人の姿があった。

「…なんで」

「あんな」

「良い雰囲気なのだ…」

上から、鈴、セシリア、ラウラ。

・・・・・・・・・・・・

翌朝。朝食を終えて、ＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる。

そして、１０時を過ぎて作業は終了。全員クラス別のバスに乗り込む。

「…」
「…」

座席に座る俊貴とシャル。昨日の夜の砂浜で並んで座り肩に頭を乗せる、恋人同士がするような事をして、今更になって恥ずかしく感じる二人。そのせいで沈黙が二人の間に漂っている。

それを見ていた三人のうちの二人が、その様子を悔しそうに見ている。
あの様子では付き合ってはいないようだが、二人はここにきて、シャルという大きな壁を認識した。

俊貴と結ばれるためには、シャルという壁を越えないといかない。

（このままでは、俊貴さんはシャルロットさんに…）

（あれだけ誉められて油断をしすぎた…）

と、二人は頭を抱える。

そんな状況の中、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねぇ、奥村俊貴くんっているかしら？」

「オレですけどー」

千冬による指定席。真ん中以降にするとバスの中がうるさくなる、と言って、一番前にいた事が幸いした。

その女性は２３ぐらいの、俊貴より少し歳上っぽい鮮やかな金髪。格好はブルーのサマースーツ。千冬のスーツとは違い、おしゃれなカジュアルスーツで、開いた胸元から大人の女性特有の膨らみがわずかに覗いている。

腰を折って俊貴の顔を見つめる。

「へぇ、君がそうなんだ」

俊貴を興味深そうに眺める。好奇心で観察してる感じがする。

「…もしかして」

その顔に見覚えのある俊貴。最近、ホントに最近見た気がする。

「私はナターシャ・ファイルス。銀の福音の操縦者よ」

「！やっぱり…」

気を失ってる操縦者を見た時の事をはっきり思い出す。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、黒いナイトさん」

頬にいきなり唇が触れた。

「…え？は…？」

呆然とキスされた頬を触る。

「じゃあ、またね。ばー　い」

「ど、どうも…」

笑顔で手を振ってバスから降りるナターシャを、俊貴はボーッとしながら手を振り返す。

ピキーン

あ、キタコレ…

嫌な予感がして振り向く。

「浮気者め」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようですわね」

「俊貴ってモテるねぇ」

ハハ、オワッタ…

・・・・・・・・・・・・

「…」

バスから降りたナターシャは、千冬を見つけてそちらに向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

「思ってたより素敵な男性だったから、つい」

「やれやれ…それより、動いても大丈夫なのか？」

「えぇ、問題なく。あの子と、あの人が守ってくれたから」

あの子は、銀の福音。あの人は俊貴。

「やはり、そうなのか？」

「えぇ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。私のために自分の世界を捨てた」

「だから、私は許さない。あの子の判断力を奪い、全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を」

ナターシャの雰囲気ががらっとかわり、鋭い気配を纏う。

「あまり無茶な事はするなよ。しばらくはおとなしくしておいた方がいい」

委員会も動くだろうしな

「…そうしときます。しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線が合い、言葉はそれ以上なくお互いの帰路につく。

不知火（後書き）

こんにちわ

今回で福音戦終了です。
俊貴の第二形態移行で不知火になりました。セシリアの強襲パッケージ以上の機動力をもってます。蜃気楼は同等だったんですけどね。
光の翼は、まさにデスティニーガンダムっぽいです。
そして、エネルギー供給システム。俊貴のヘッドパーツは、光エネルギーを取り込んで、ＩＳのエネルギーとして変換する事ができます。太陽光が一番いいのですが、月光でも電気の光でも、光なら何でも変換できる仕様となってます。光があればエネルギー切れを起こさないのが他のＩＳと違うところですね。

そのうち詳しく紹介をします。

夏休み!!

「くぅ…」

寮の廊下をうちわでパタパタ扇ぎながら歩く俊貴。
今は8月。臨海学校が終わって、期末テストがきて現在夏休み。
ちなみに俊貴の成績は初等科の中の上ほどの位置にいた。

「…夏はキライだ」

俊貴は一年の内、夏が一番嫌い。暑さにとても弱い。けど、クーラーのような機械の風にも弱いため、夏が俊貴にはたまらなくキツい。
扇風機がギリギリ大丈夫なためしんどくてしょうがない。

ゆっくり歩く俊貴の手にはうちわと国際手紙が握られている。
外国からの手紙だが、俊貴にはもちろん覚えがない。

「誰だろうなぁ…」

この世界でも外国に知り合いなんていない。
だが、トーナメントの時に見に来ていた外国の企業かもしれない。

「にしても、静かだな」

いつもは割りと騒がしい廊下を歩きながら気づく。
今は夏休みで自分の家や国に帰っている生徒が多い。そのため、寮にはあまり人がいない。

「千冬さん家…、じゃなくて自分の家に帰るってのもありだけど、

どうすっかなぁ…」

ー帰ればいいと思いますが

頭に不知火の声が響く。

「でも空気に耐えれないかも…。いや逃げてるだけか…」

俊貴が気づく。

何となく恥ずかしくて姉と呼べないのがいい証拠である。

「一回は家に行こうか」

自分に言い聞かせるように言う俊貴。

そして、自室に着き部屋のドアを開けて中に入る。

「さって、手紙を読みますかねー。日本語なら良いんだけどー」

ベッドに腰かけて手紙の封筒を破り、中の手紙を開く。

お、日本語だ。しかも綺麗な字。

「えーと…」

手紙の内容を黙読していく俊貴。

「!…どういう事だ…?差出人はない。でも、‘花旗国の月の良い知らせ’って何だよ…」

内容に驚き差出人を確認したが不明。だが、手紙の終わりによくわからない事が書かれていた。

花旗国ってどっかの国か？その国の月の良い知らせ？
なんじゃそれ…、全く意味がわからん。
それに他言無用で、手紙の処理もしろって…

よくわからない手紙にもんもんとする俊貴の部屋に来客を知らせるノックの音がした。

「っ！？…は、はい！」

手紙を慌てて握り潰しポケットにしまって、部屋のドアをあける。

「と、俊貴…」

「あ、鈴か…。どした？」

そこに立っていたのは鈴で、顔が微妙に赤い気がする。

「あ、あんたさぁ、夏休みなのにどこにも行かないわけ？」

「まぁ、今は行かないな。八月中盤はちょっと用事でいないけどね」

「は？何でよ？」

「ちょっとした事情があんだよ。まぁ９月入るまでには帰ってくるけど」

「なにそれ…。シャルロットかラウラがかんけいしてるの？」

と、何故か睨み付けてくる鈴。

「なんで、シャルとラウラが出てくるんだ？」

全く意味がわからん、見たいな顔をする俊貴。

（あたしら四人のなかで怪しいツートップを上げたのよ！このバカ！！）

「関係あるの？ないの？どっち！？」

「な、ないよ。その用事はオレだけが呼ばれてる」

鈴の気迫に押されつつ答える俊貴。

ふと、俊貴の視線が部屋の時計に移る。

「あ、悪い。山田先生に呼ばれてるから行かないと」

「へ？そうなの？」

俊貴がドアを閉めて廊下に出る。

「あぁ、ごめん。用があるなら部屋で待っててくれ。」

そういって、俊貴が階段の方へ向かっていく。

「わ、わかった！」

手を振る俊貴に、手を振り返す鈴。

「……どこに行くんだろう」

そう思いながら、俊貴の部屋のドアを開けて中に入る。

「…いい匂い」

俊貴の部屋なので、より強くそう感じる。

「あー…」

ベッドに思わず倒れ込み、枕に顔を埋める。

「……何か、落ち着く」

そう呟き、急に眠気が押し寄せてきた。

「…ちょっと、だけ」

そういって瞼を閉じる鈴。

・・・・・・・・・・・・・・

「しつれーしまーす」

そういって、俊貴が職員室のドアを開けて、山田先生を探す。

「あ、ここです。奥村くん」

俊貴に気づいた山田先生が手招きする。
それを見て俊貴が山田先生の元へ歩き出す。

「何のようですか？」

目の前に立つ俊貴を山田先生が見上げてゴソゴソ書類を取り出す。

「これを記入してほしいんです」

山田先生が一枚の紙を取り出して、俊貴に渡す。

えーと、登録国籍がどうのこうの？

「何ですか、これ」

キョトンとする俊貴。

「奥村くんには日本の代表候補生として、これから頑張ってもらいます」

「…は？な、何でオレなんですか？」

「このまま登録国籍がないとなると、非常にまずいんですよ。各国もＩＳは喉から手が出るほど欲しいんです。それで、登録国籍がないと、全ての国が自らの専属操縦者として招く事ができる上に、ＩＳもおまけでついてしまうんですよ」

…なるほどな。そういうことか。
ＩＳ一機であろうとも、存在するだけで国家の軍事力を大きく変えてしまう。

あれだ、前の世界の戦車とかを軽く凌駕する程の力を持ってるからな。そりゃ、力尽くでも手に入れようとする国はたくさんあるだろうさ

「じゃあ、登録国籍は日本で良いんですか？」

「はい、そうです。」

そういって、ペンを俊貴に渡す山田先生。

うーん…、代表候補生になる気は無かったんだけど、他の国に行くよりは良いか

そう思いながら、紙に必要事項を記入していく。

「はい、書き終わりましたよ」

山田先生に紙を渡す。

「……はい、確かに」

紙を入念にチェックする山田先生。

「お話は以上です。わざわざありがとうございます」

「はーい、失礼しました」

ニコッと笑ってから職員室を出ていった。

・・・・・・・・・・・・

「コイツ…、何で人のベッドで寝てんだ」

職員室から戻ってきた俊貴が部屋の、しかも俊貴のベッドで眠る鈴を見て唖然としている。

「ここにいるってことは何か用が有ったんだろうけど、何で寝てんだ」

かつてシャルが使っていたベッドに腰を降ろして、気持ちよさげに眠る鈴を見る。

「…ん？」

ふと、外を見ると学園の正面ゲート前に、白い車が停まっている。

気になって窓をあけ、そこから飛び降りた。

「よっと」

窓の前に生えた木の枝に掴まり、地面へと降りる。

「さて、やっと戻ってこれましたわ」

白い車から降りたセシリアが学園を見る。

（やはり、思い人とは同じ空の下にいたいものですし…）

イギリスの実家に溜まった仕事を終えて、やっと戻ってこられた。

「お嬢様、どうかされましたか？」

呼ばれて振り向くと、幼馴染みであり専属メイドであるチェルシーが微笑みを浮かべて控えていた。

「い、いえ、なんでもなくてよ」

「そうですか。それでは、お荷物の方は私どもがお部屋まで運んでおきますので」

そういってチェルシーはうやうやしく頭を垂れ、もう一人のメイドを連れて荷物を運びはじめる。

チェルシーは、セシリアにとって幼馴染みというよりお姉さんのような人だった。そんなチェルシーは憧れであり、目標でもある。

（さてと、わたくしはー）

「早速、奥村様に会いに行かれますか？」

「チェ、チェルシー!？な、なぜここに？」

荷物を運びに行ったものだと思っていたセシリアが驚く。

「実は、一つ確認しておくことを恥ずかしながら失念しておりまして、戻って参りました」

「そ、そう。それで、確認とは？」

「あの白いレースの下着は奥村様用ですか？」

「ー…」

セシリアが呆然としている。

「お嬢様、派手すぎる下着は却って逆効果と思われます」

「あ、あの、あれはー」

「では、これで」

言い訳をさせず、チェルシーは丁寧なお辞儀のあとスカートを翻して行ってしまう。

「え？」

イギリスに帰ったときにこっそり買った、二重底のスーツケースに隠しておいたのに何故かバレていた。

そして、だんだんと恥ずかしさが込み上がってくる。

（あ、穴があったら隠れたいとはこの事ですわ）

顔が熱くなる。

「お、誰かと思ったらセシリアだったのか」

ドキッとするセシリア。

（こ、この声は俊貴さん！？も、もしかして、出迎えに！？）

ドキドキと高鳴る胸を手できゅっと押さえ、冷静に平静にゆっくりと振り返る。

「やっ」

「俊貴さん、一週間ぶりですわね。ごきげんよう」

スカートを摘まみ優雅に挨拶。でも、内心は穏やかではいられない。

そして、セシリアの妄想が広がる。

『セシリア。待ってたよ。帰ってくると思ったら待ち遠しくて』

『そんな、俊貴さんったら、お上手ですわね』

『嘘じゃないよ。セシリアと離れて過ごす一週間、寂しくてたまらなかったんだ』

『俊貴さん…。あっー』

『もう絶対に離さないよ。マイ・プリンセス』

「…？」

急に身をよじり始めたセシリアを不思議そうに見る俊貴。

「セシリア？」

「ーはっ！？」

「大丈夫？疲れてるのか？」

「い、いえ、大丈夫てす！さっきまで車の中でしたから、少し立ち

くらみしただけです！」

「……部屋までついてこうか？」

ちょっと心配になりそう聞く俊貴。

「そうですね、そうして頂けるとお嬢様も喜びます」

「！？」

急にチェルシーの声が聞こえた。

「ん？あー…、誰ですか？」

「お初にお目にかかります。セシリア様にお仕えするメイドで、チェルシー・ブランケットともうします。以後、お見知りおきを」

チェルシーが俊貴に丁寧にお辞儀して自己紹介する。荷物を運び終えた訳ではなく、何処かの陰から見ていたのだろう。

「あぁ！前にセシリアから聞きましたよ！初めまして、奥村俊貴です」

「はい。奥村様。ときに、ご無礼を承知の上でお尋ねしますが、私の事をお嬢様はなんと？」

「とても気が利く方で、優秀で、優しくて、美人だって言ってましたよ」

「まあ」

にっこりと柔らかな笑み。嫌味を感じさせない、人を包み込むような優しさに満ちてる。

（わたくしには一度も言ってくれませんのに！）

そんな焼きもちを見透かしたように、またチェルシーが微笑む。

（うぅ…、チェルシーもチェルシーですわ…）

この笑顔には勝てる気がしない。昔からずっと。

「奥村様のお話もよくお嬢様から耳にしております」

「！？」

「え？そうなんですか。オレも同じこと聞いて良いですか？」

（ああぁ！チェルシー！お願いだから話の内容は言わないで！）

「くすっ。それは」

今度は動揺を感じ取ったようで、茶目っ気のある笑みを浮かべるチェルシー。人差し指を唇に持って行く。

「女同士の秘密、です」

「ー」

それは同性さえドキッとさせる、ものすごく魅力的な笑みだった。

その笑みに魅了された俊貴が、ぼーっとチェルシーを見ていた。

・・・・・・・・・・

場所は変わって、学園の食堂に隣接しているカフェに俊貴とセシリアがいる。場所が場所のため、夏休み中であっても学園生の姿が絶えない。

「ね、ね、あれ、初等科の奥村くんじゃない？」

「ホントだ！初めて生で見た！」

「やーん、可愛いー。年下っていうのも案外いいわねー」

「でもでも、私的には初等科なのにしっかりしてそうな雰囲気が好きかなぁ」

と、おしゃべりが聞こえてくる。

普段のセシリアなら、嬉しいし自慢したくなるシチュエーションだった。

「…」

けれど、むすっとした顔で、セシリアはアイス・カフェラテをつまらなそうにかき回す。

（大体、初対面なのになんであんなに楽しそうに…）

さっきまでの俊貴とチェルシーの会話を思いだし、モヤモヤと苛立ちがわき起こる。

俊貴は初対面でも平気で人と接する。人懐っこい性格のおかげで、この知らない世界でも上手くやっているのが俊貴だった。

見たことない照れくさそうな、でも嬉しそうな俊貴の態度。自分の本心を知ってるくせに目の前で仲良くするチェルシーにも心がざわざわする。

（あの噂、本当なのかしら…）

先月たまたま聞いた噂。それを聞いてもあまり気にはしてなかったが、さっきの事もありそれが落ち着かなくなる。

俊貴は年上が好き

（つまらない噂話と思ってましたけど…）

さっきのチェルシーに対する態度、そして千冬や山田先生に対する態度を思いだし、あながち、嘘でもない気がしてくる。

（年上って、それはどうにもなりませんし…。）

聞くとどうやら俊貴は２１で同い年。自分が年上になることも、相手が年下になることもない。

だんだん憂鬱になってくる。が、シャルとラウラは二十歳だと聞いて、少しホッとした。

「はあ…」

「なんでそんな機嫌悪いんだ？」

「なんででしょうね」

「…わかんないから聞いたのに」

がくっとうなだれる俊貴。

・・・・・・・・・・・・

「ちょっと！いつまで待たせんのよ！！」

「…」

部屋に帰ってきたらこれだよ
何故か不機嫌なセシリアと別れて部屋に戻ってきたら、鈴がまだ部屋にいて怒っているようだ。

「…いつ起きた？」

「……さっき」

「ってか、一回戻ってきてたなら起こしなさいよ！」

怒られたよ…

「気持ち良さそうにしてたから起こすのも悪いと思って」

「だ、誰が気持ち良さそうに寝てたよ！そんなわけないでしょ！！」

赤くなりながら否定する鈴。

なんなんだ、今日はなんでこんなに怒られるんだ…

「なぁ、オレが悪いのか？」

「当たり前よ！」

即答し部屋から出ていった鈴。

「……何か用があったんじゃないのか」

唖然としながら部屋で突っ立っている俊貴。

「買い物？」

「うん、そう」

寮の食堂で、早めの朝食をとりながらラウラとシャルは話していた。
二人の他にはちらほらと生徒がいるだけで、まったく混んでない。
そして、そのなかに俊貴の姿はない。

二人のメニューは、マカロニサラダにトースト、そしてヨーグルトである。ラウラのメニューにはステーキが追加されている。

「朝からステーキって、胃がもたれない？」

「何をいう。朝に一番食べる方がからだの稼働効率がいいのだぞ。それに、夕食に一番食べるのはおかしい。消化されないエネルギーは脂肪となる。太りたいのなら止めはしないが」

「…そう。それは誰に聞いたの？」

「私の嫁からだ」

「…そうだろうね、ラウラっぽくなかったもん」

感化されやすい性格なのかなぁ。何て考えながら、シャルはフォークの先端にマカロニをするっと通して食べる。

「む。、なんだそれは？」

「なんだって……マカロニ？」

「そうじゃない。どうしてフォークに通したのかを聞きたいのだ。刺すではなく、なぜ通したのかを」

何故か真剣なラウラに、シャルはつい雰囲気に飲まれそうになりマカロニを飲み込むのが遅れた。

「何故って……うーん、なんとなく？」

「ふむ、なんとなく…」

「ラウラもやってみたら？結構楽しいよ？」

言ってからハッとする。

（僕って子供っぽいかな…？ラウラの事だし、もしかして馬鹿にされる……？）

（い、いや！ラウラはきっとそんなこと言わないよ！）

「シャルロット」

名前を呼ばれてビクッと体を震わすシャル。

「これは確かに面白いな。ふむ…せっかくだ。全部の先端に通してみよう」

言ってすぐ、他のマカロニもいじりはじめるラウラ。

本当におもしろがってるらしい。その反応にシャルロットはホッとした。

「あ、シャル。それにラウラも。早いな」

「え？」

名前を呼ばれて振り向くと、俊貴が食器を持ってこっちに向かってきていた。が、その顔はまだ眠たそう。

「お、おはよう。俊貴」

どこかぎこちない挨拶をするシャル。

「……なにしてんだ。ラウラ」

マカロニが通ってるフォークに最後のマカロニを通そうとするラウラ。

「ちょ、ちょっと話しかけないでくれ。これが思ったよりも難しい……この」

最後のマカロニが通らず、悪戦苦闘するラウラ。

…なんだろう。オレ昨日から怒られたり、扱いが…

結構傷つきやすい俊貴は泣きそうになる

それを見てシャルが苦笑いし、隣に俊貴を招き今のラウラの事を説明した。

「できた」

「「おー」」

マカロニを通したフォークを軽く持ち上げたラウラと、拍手する俊貴とシャル。

「それで、買い物には何時に行くんだ?」

「あ、うん。十時ぐらいに出ようかと思ってるけど、どうかな?」

「そうか。せっかくだし俊貴も行こう。うむ、私は良い亭主になるな」

「…あ、あはは…。そうだね…」

「でも、誘って貰って嬉しいんだけど、ちょっと今日は予定あるから遠慮しとくよ」

俊貴が申し訳なさそうに答える。

「そっか…」

「ふむ…用事があるならしょうがないな」

二人とも残念そうだ。

「ごめん。埋め合わせは絶対するから」

「うん」

「約束だぞ」

「あぁ、約束したからには絶対に守る」

そういって、両手の小指を二人に向けて差し出す。

シャルは嬉しそうに自分の小指を俊貴の小指に絡める。

それを見てラウラも俊貴の小指に絡める。

「指切りげんまん、嘘ついたら灰色の鱗殻千本のーます」

「指切った」

そういって笑顔で指を離すシャル。

な、なにげに怖いこと言ったよ、シャルさん…

「じゃあ、僕たちは行くね」

シャルがトレーを持って立ち上がる。

それを見てラウラもトレーを持って立ち上がる。

「じゃあな。俊貴」

「あぁ、またね」

二人に手を振って見送る俊貴。

「…オレも食ったらさっさと行くか。女の人を待たすのは良くないしな」

自分の朝食をモグモグと食べ始める。

・・・・・・・・・・

午前１１時。
俊貴は手紙に指定された場所で立っていた。
その場所は、街のとある公園。その公園内の時計の下にいた。

「ちょっと早かった、かな？」

時計を見上げて、待ち合わせた人物を探す。

辺りに子供連れの人が遊具で一緒に遊んでいる。
その公園に一人のカジュアルスーツを着た金髪の女性が入ってきた。

俊貴に気づき、足早に近づいてくる。

「ごめんね、待たせちゃって」

女性が申し訳なさそうに、顔の前に手を持って行く。

「いえ、大丈夫ですよ。今来たところですから。ナターシャさん」

ホントは十分前には居たけど、そんなこともちろん言わない。

「そう、なら良かったわ」

ナターシャは優しく笑みを浮かべる。おそらくそれが嘘だと気づいているだろう。

「ところで、あの手紙を書いたのはナターシャさんであってますよね？」

「そうよ。あれは私が書いたの。差出人を特定されないようにちょっと手を加えてみたけど、その様子なら解けたみたいね」

「えぇ。初めはわかんなかったけど、後でゆっくり考えたらわかりましたよ」

「じゃあ、花旗国は何だ？」

「昔の中国でそう呼ばれてたんですよね？アメリカは」

「そう、あたり。月の良い知らせは？」

「月は、占星術などで銀と関連づけできる。良い知らせは、ギリシャ語でエヴァンゲリオン。つまり福音。要するに、アメリカの銀の福音。ってことはナターシャさんしかいない、ですよね？」

「へぇ、流石ね。あなたホントにポイント高いわ」

クスッと笑うナターシャにドキッとする。

「えーと、今日は…」

俊貴が本題に入ろうとした。

「ここじゃなんだから、ちょっと場所変えようか」

公園の外を指差すナターシャ。

「あ、はい」

頷き、二人並んで公園から出ていった。

・・・・・・・・・・・・・

「えーと…@クルーズ？」

店の看板を見ながら首をかしげた。

「そう！ここのお店は美味しいんだって！！」

何か嬉しそうに店のドアをあけるナターシャ。

「へー、そうなんですか」

俊貴もその後について店に入る。

「おかえりなさいませ、お嬢様、旦那さ…」

二人を出迎えた執事服を着た金髪の人が固まる。

「二人で。後、隅のテーブルをお願い」

固まる執事を不思議そうに見ながらもナターシャが言う。

「か、かしこまりました。どうぞ、こちらへ」

「？」

執事が俊貴をジッと見てきたため、執事の方を向いたら顔を逸らされた。

あれ？何か見たことある…

希望通りの店の隅のテーブル。
そこに向かい合って座るナターシャと俊貴。

「むっ……やっぱり……」

執事が何か言った様な気がするけど、聞こえなかったからとりあえずメニューを見る。

「私アイスコーヒー」

「じゃあ、オレは紅茶。アイスで」

「アイスコーヒーと紅茶ですね。かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

ぎこちなく一礼して、俊貴を睨み付けてから厨房へと向かっていった。

うーん…、何か見たことある…

でも、なんでこんな所にいるんだ？

「ん？おお、俊貴じゃないか」

「へ？」

いきなり銀髪眼帯のメイドさんが話しかけてきた。

ん？銀髪眼帯？？

「ラウラか？」

「うむ、私だ。何故ここにいる。私に会いに来たのか？」

モジモジしながら俊貴に聞くメイド服を着たラウラ。

「いや、ここにいるのはたまたまだよ。ラウラがいると思わなかったし。ってか、その格好似合ってて可愛いよ。……」

それを聞いたラウラは顔を赤くして、銀色のトレーを胸元まで持って行く。

あれ？ラウラってことは、さっきの執事は…

「お待たせしました。コーヒーと、紅茶です」

執事がコーヒーと紅茶を持ってテーブルに戻ってきた。

「あー！やっぱりシャルだ！！」

俊貴が立ち上がる。

「……」

何も言わずに微笑むシャル。

（もう…何で気づいちゃうのかな…ってラウラが居たから気づくか…。気づいてくれたのは嬉しいんだけど、この格好じゃなぁ…僕もメイド服が着たかったよ）

「しゃ、シャル？」

返事がない事に不安そうな顔をする俊貴。
もしかしたら違う人だったかもって思ってるかも

「あ、えっと、ゆっくりしてってね。俊貴」

ぎこちなく笑うシャル。

「あ、うん…」

なんで執事服…

そう思いながら、シャルから紅茶を受けとる。

「あら、知り合い？」

そこへナターシャが二人を見ながら俊貴に聞く。

「むっ…」

「俊貴…何故この人と一緒にいるのだ?」

シャルとラウラがナターシャを見てむっとする。二人はナターシャをよく覚えている。俊貴の頬にキスをしたから。

「えっと…」

冷たく睨み付けてくる二人に気圧される俊貴。

「私が呼んだのよ。話があるからって」

ナターシャがクスッと笑う。どうやら二人の俊貴への気持ちを悟っているようだ。

「…そうなのか、俊貴」

「あぁ、話があるって呼び出されてたから、二人の誘いを断ったんだよ」

「……」

シャルがジッとナターシャを見る。

「あー…、えっとこちらの二人が何か粗相をいたしましたか?」

と、奥から店長?さんがテーブルに来た。従業員二人が同じテーブルにいる事に疑問を抱かない人はおそらくいないだろう。

「あ、いえ。友達が二人ここで働いてて驚いてただけなんで」

俊貴が慌てて答える。
いつのまにか、店中の視線が集まっていた。しかも、男の客からは睨まれている。

ラウラの冷たい態度に興奮している馬鹿な客が、ラウラから親しげに話しかけられている俊貴を羨ましがりながらも敵視している。

「え？二人の友達？あら、何かメイド服が似合いそう」

「は？」

店長の俊貴を見る目がおかしい。俊貴が、すっとんきょうな声をあげる。

「ねぇ、君も手伝ってくれない？人手が足りてなくて」

「えーと…、とりあえずオレはナターシャさんと話があるんで、その後で良いなら手伝わせてもらいます」

「ホントに！？じゃあ、よろしくね！！」

そういって、嬉しそうに厨房へと消えていく店長。

「…ごゆっくり」

二人がそういって、厨房へと向かっていった。

「…というわけで、早速本題に」

「そうね、私としてはゆっくり君と話したかったけどしょうがない

わね。」

「あ…すいません。勝手に決めちゃって」

「いいのよ。気にしないで」

優しく微笑むナターシャ。

「で、本題だけど、私のＩＳ、銀の福音はね。暴走する前は何の異常もなく動いていたのよ。」

「…、じゃあ、いきなり暴走したってことですか？前触れもなしに」

「そういうこと。原因は不明。でも、おかしいと思わない？」

「そうですね。暴走が偶然起こったにしても、オレが戦った謎のＩＳ三機は銀の福音が暴走するのを知っていた」

そう、謎のＩＳは銀の福音の進行ルートを逆に進んでいて、いずれ鉢合わせとなる状態だった。
何故、銀の福音がそこを通るのを知っていたのか
何故、銀の福音が暴走するのを知っていたのか

「何か裏があるって事ですか？」

「えぇ、おそらくね。しかも国家レベルの大きな組織が動いてるんじゃないかと思うわ」

「…ですね、正体不明のＩＳを三機も持ってる時点で資金も人員もかなりの数ですよ」

「でも、私が思うにその組織と、あの子を暴走させたのは別の人間だと思うの」

「…どういう事ですか？」

「おそらく、今世界中の噂であるとあるＩＳのデータを得る事と、そのＩＳの存在を華々しく世界に知らしめる。その目的のために、あの子は暴走させられた。」

「……とあるＩＳってオレの不知火の事ですね。つまり、オレのせいで銀の福音は暴走したって事か…」

俊貴がうつむき紅茶の氷をストローでいじる。

「あ、君を責めに来た訳じゃないの！私は、その目的を達するためにあの子を利用した人間が許せないの。あの子の翼を奪った人間が許せないの」

そういうナターシャの目は鋭く怒りを帯びている。

「……オレに手伝えることは手伝いますよ。っていうか、手伝わせてください」

俊貴がその目をジッと見返す。姑息な手を使うヤツが俊貴は大嫌いだった。

「…そうして貰えるのはありがたいわ。でも、いいの？あなたが思ってるよりも遥かにキツいことに巻き込まれるわよ」

「…だとしたら尚更ほっとけませんから」

「そう…、優しいのね。君は」

「いえ、こんな綺麗な人をほっとけないだけですから」

頬をかき照れる俊貴。

「あら、上手いわね。」

クスッと笑うナターシャ。

「…何か楽しそう」

シャルがムッと俊貴達の方を見る。

お客さんのコーヒーを混ぜる手の動きが乱れる。

「あ！番号交換してる！！」

「わ！？」

「あっ！も、申し訳ありません、お嬢様！！」

コーヒーがカップから溢れた事に気づき、慌てて拭き取る。

「き、気にしないでください」

お客さんが苦笑いする。

「すいません。」

ペコリとお辞儀して顔をあげると、ラウラもそれを、見ていたようでコップを割っていた。

そんな状態の中、事件は起こった。

「全員動くんじゃねぇ！」

ドアを破らんばかりの勢いで店に入ってきた男が三人、怒号を発する。

何が起こったのか理解できなかった、店内の全員が、いきなり発せられた銃声で悲鳴があがる。

「きゃあぁぁ！」

「騒ぐんじゃねぇ！」

なんと言うか、漫画の様な強盗の格好をした三人にポカンとする俊貴。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちは包囲されている。おとなしく出てこい。繰り返すー」

駅前でもあり、警察は素早く包囲網を作っていた。

「警察の対応古っ！」

俊貴が思わず驚く。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員…」

「うろたえるんじゃねえ！焦ることはねぇ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

リーダー格と思える体格の一人が告げて、二人も自信を取り戻す。

「へ、へへ。そうですよね。俺たちにはコイツがあるし」

硬い金属音を響かせてショットガンのポンプアクションを行う。そして次の瞬間、威嚇射撃を天井に向けて行った。

「きゃあぁぁ！」

蛍光灯が破裂し、女性客が悲鳴をあげる。
それをリーダーの男がハンドガンを撃って黙らせる。

プチっ

俊貴の何かが切れるような音がした。

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

客がパニックになりながらも何度もうなずく。

「おい、聞こえるか警官ども！車を用意しろ！人質を解放したかったら、追跡者や、発信器なんかつけるなよ！！」

そういって、警官隊に向かって発砲する。

「あいつらぁ！」

俊貴が拳を握り、強盗に向かおうとしたのをナターシャが止める。

「待って、まだダメよ。落ち着いて。相手は銃を持ってる。ショットガンはキツイわ」

「でも…」

俊貴が食い下がる。

「…」

俊貴とナターシャが喋ってる中、ラウラはそれをただジッと見ていた。

「なんだ、お前。大人しくしてろっていうのが聞こえなかったのか？」

ボーッと自分達に背を向けて止まっているラウラに、リーダーがやってきた。

「おい、聞いてるのか！」

「まあまあ兄貴。時間はあるんだし、この子に接客してもらいましょうよ！」

「あぁ？何いってるんだ、お前」

「だって、すっげー可愛いっすよ！」

「お、俺も賛成。メイド喫茶に入ったことなくて…」

二人揃ってうれしはずかしな表情を浮かべる手下に、呆れながらソファに腰をおとす。

「まぁいい。喉が渇いてきたし、メニュー持ってこい」

ラウラは何も言わずに、カウンターの中に歩いていき、氷が満載の水をだした。

「…なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニュー欲しいんだけど」

「黙れ。飲め。」

そう言った瞬間に、ラウラはトレーをひっくり返し、氷水が宙に舞うが、それを弾く。

「いってえぇ！？な、なにしやがっ」

「あのバカ！」

俊貴が隅に積まれた灰皿の塔を掴んでラウラに銃を向けたリーダーに一枚飛ばす。

「くっ！なんだ！？」

灰皿が、ハンドガンに当たりラウラから逸れる。

そんなことお構いなしに、ラウラは男の一人の懐へと膝けりを叩き込んだ。

「あ、兄貴！？こ、こいつ」

「うろたえるな！ガキ一人、すぐに片付けて」

「女子一人に二人がかりか？カスだな。お前ら」

俊貴がショットガンを脚で蹴りあげて、手下の肩を、その蹴りあげからのかかと落としに繋げて叩き込む。

骨が、ゴキッと音をたて、腕がぶらんとなる。

「一人、撃破完了。ラウラ」

「問題ない。目標2、制圧完了。さすがは私の嫁だな」

手下を二人気絶させて、二人は頷く。

最後の一人として残ったリーダーは、弾かれたハンドガンを構え直して立ち上がった。

「ふ、ふざけるなぁ！お、俺が、こんなガキどもに！」

その引き金が引かれる刹那、俊貴が灰皿をもう一枚投げて、リーダーのハンドガンを握る手に当たり、ハンドガンを落とす。

そこに、シャルがトレーでリーダーの脳天を思いきり叩く。

「全制圧、完了、だ　ね」

ニコッと笑うシャル。

「ふぅ…、全くラウラはヒヤヒヤさせてくれるな」

俊貴がため息をつく。

「ふん、あんな素人どもに、遅れをとる私じゃない」

ふん、と顔をそらすラウラ。

「もうちょっとさぁ、周りを…」

「信じてたからな。お前が動くのを」

「え……、あ、そっか…」

ラウラがフッと笑顔を俊貴に向ける。

それにドキッとして、照れ隠しで頬をかく俊貴。

「むっ…」

それを見て、またシャルの機嫌が悪くなる。

そして、解放された店内が一気に騒がしくなる。

・・・・・・・・・・

「もう夕方だね」

強盗事件があって二時間後、シャルとラウラは買い物を済ませてデパートから出た。

「買い物は全部か？」

「うん、っていうか、自分のものなのに人に任せちゃダメだよ。女の子なんだから」

「まぁ、そういうな。老けるぞ」

「ふ、老けないよっ」

その言葉にドキッとするシャル。

「あ、そうだ。向こうの公園行ってみようよ」

「公園？」

「うん、城址公園。もとはお城なんだって」

「ほう、それは興味深いな。日本の城は一見の価値がある」

ラウラの価値は戦闘関連の物。城もそういう方向で見てみたいと思っていた。

そのため、シャルも口を挟まない。個人の感覚は押し付けるものではないから。

「それにしても、結構買っちゃったね。店長がこっそりお給料くれたし、色々買えて助かったね」

「む、金か？それなら口座にー」

「え？そんなに持ってるの？」

「私は産まれたときから軍属で、ＩＳの国家代表候補生になってから更に上乗せされている」

それなりにもらってるのに、そこまでもってないよ…

「しかし、引き出しかたを知らん」

あ、使った事がないのか…

「貯金するのは良いことだよ。あとは、お金の使い方も覚えていこっか」

「うむ、よろしく頼む。」

「じゃあ、とりあえず公園についたからクレープ屋さん探そうよ」

「クレープ屋？何故だ？」

「えっと、聞いた話だけど、ここのクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれるっておまじないがあるんだって」

「オマジナイ…、日本のオカルトか？」

「えーと、ジンクスだよ」

「あぁ、験担ぎか」

「…」

シャルはラウラに困った顔をする。

間違ってないけど、女の子っぽい響きがおまじないなんだけどなぁ

そう思いながら、クレープ屋さんを探す。

が、探すまでもなく見つかる。

女子高生が多くいる店があった。しかもそれに混ざって、俊貴とナターシャが並んでいたから。

「…」

シャルがまだ二人一緒にいたことにムカムカしてくる。

メイド喫茶にいた時もムカムカしていたが、店に出てからまだ一緒なことに苛立ちがつのる。

「ん？あれは俊貴か？」

ラウラも俊貴に気づきシャルに聞く。

「…そうだね」

平静を装って答えるシャル。

俊貴とナターシャがクレープを買って、近くのベンチに並んで腰かける。

それを見てから、ラウラの手を引いて、クレープ屋に入る。

そして、クレープを買う。

なんでミックスベリー売り切れ…

「どっちがいい？」

ラウラが、両手に持つクレープをシャルに差し出す。

「……じゃあ、イチゴ」

俊貴とナターシャの座るベンチの真後ろに腰を下ろすシャルとラウラ。

べ、別に話の内容が気になる訳じゃないもん

「なぜ、ここに座ったんだ？」

空気を読んで小声で話すラウラ。

「べ。別に…」

シャルは誤魔化すようにクレープにかじりつく。

上手い

「ねぇ、俊貴くん」

「はい、何ですか？」

二人の声が聞こえてきて、チラッと横目で見る。

「「！？」」

ぺろっと、ナターシャが俊貴の頬をなめた。

「なっ！？な、ななな、何すんですか！？」

「ソースがついてたよ」

ナターシャがクスッと笑う。そして、俊貴は顔を赤くしてパニックになってる。

「そ、そ、そそうですか…、あ、ありがとうございます…？」

自分で言っていて首をかしげる俊貴。そうとうパニックになってるようだ。

…なんであんなに照れてるの、あんな顔あんまり見たことないよ

そう思いながらも、クレープにかじりつく。

ラウラはクレープに夢中で全く気にしてないようだ。

「シャルロット。私のを一口やる」

ふいに、自分のクレープをシャルに差し出すラウラ。

「え？いいの？」

「ああ、気にするな」

「じゃ、じゃあいただきます」

あーん、とラウラのクレープを食べる。

「そういえばあのクレープ屋、ミックスベリーはそもそもないぞ」

「え？」

「メニューになかっただろう。それに、厨房にもそれらしい色のソースもなかった」

「そ、そうなの？よく見てるね」

「当然だ。あれがテロリストの偽装だったら命に関わるからな」

ラウラもやっぱり女の子なんだね！っと思ったけど、そうだと思ったよ…

ガクッと肩を落とすシャル。

「だが、ミックスベリーは食べられただろう？」

「？」

「このクレープはなに味だ?」

「…ブドウ?」

ほんのすこしにやりと笑うラウラを見て、シャルはピーンときた。

「ストロベリーとブルーベリー!?」

「ご名答」

二人はこの時点で気づいてなかった。その声は小声のレベルを遥かに越えていたことに。

「…って、ラウラ!ブルーベリーはブドウじゃないよ!」

「ブドウみたいなものだろう?それに。あそこでブルーベリーと言えばシャルロットは気づいてつまらんしな」

ラウラがイチゴとブドウと言ったときに、店主が笑みを見せたのを思い出す。

「そっかぁ…。いつも売り切れのミックスベリーって。そういうことだったんだ」

うんうん頷き、ラウラに女の子の感性が足りないと思ってたのが恥ずかしくなる。

(そっか…そういうことかぁ…。た、確かに彼氏とミックスベリーを食べたら幸せだよね)

さっきのラウラを、俊貴に変えて脳内で映画が始まる。それは数日間ずっと上映されるだろう。

「……」

俊貴が静かになった二人を横目で見ながら微笑む。

ちなみに、二人の食べたクレープはイチゴとブルーベリー。ナターシャが勝手に頼んで、わけあいっこをしていた。

・・・・・・・・・・・・

「こ、これは、なんだ…」

「んー！かわいーっ。ラウラ、すっごく似合うよ！」

「だ、抱きつくなっ。う、動きにくいだろう…」

「ふっふー。ダーメ。猫って言うのは、膝の上で大人しくしないと」

「お、お前も猫だろうが…」

ラウラとシャルの寮部屋で楽しげな声が聞こえる。

二人は、今日買ったはかりのパジャマを着てみよう！ということになった。

「これは本当にパジャマなのか？」

「うん、そうだよ。、寝やすいでしょ？」

「ね、寝てないからわかるはずないだろう」

ラウラが疑うのも無理はない。パジャマではあるのだが、猫の着ぐるみパジャマだった。

「や、やはり、寝るときは裸でいい。その方がらくだ」

「ダメだってばー。こんなに似合ってるのに脱ぐなんてもったいないよ！」

そうとう気に入ってるのか、シャルはラウラを膝の上に座らせて、後ろからずっと抱き締めている。

「ほら、ラウラ。にゃーん、って言ってみて」

「こ、断る！」

「えー？可愛いのにー。可愛いのは何よりも優先されることだよー」

何ともハッピースマイルのシャルは、ラウラにとってはいつも以上の強敵だった。

「ほらほら。言ってみようよー。にゃーん」

「にゃ、にゃーん…」

照れくさそうに言うラウラにシャルはどんどんと笑顔になる。

そんななか、ドアをノックする音がした。

「はーい、どうぞー」

女子寮ということで気にせず答えたシャルは、ラウラを愛でて幸せいっぱいだった笑顔が、来客により真っ赤になった。

「…何か変わった服着てるな。黒猫と白猫だ」

来客は俊貴だった。

（えええぇぇ!?今まで部屋に一回も来たことないのに、なんで、今日に限って急に!?）

猫パジャマを着てる事に焦るシャルはしどろもどろになる。

「強盗を撃退するときに怪我がなかったか聞き忘れて、ずっと気になってたから聞きに来たんだ」

「え？」

「そ、そうか。うむ。嫁として亭主を気にかける。さすがだな。褒めてやろう」

シャルの腕が緩んだ隙にラウラは抜け出し、腕組み仁王立ちでそう言うが、覇気はまったくない。

猫耳、肉きゅうの黒猫パジャマ。可愛さが倍になっている。

「だ、大丈夫だよ。どこも怪我してないから」

なんとか理性を取り戻したシャル。
でも、白猫パジャマ。

「そうそう、コレをラウラに」

そういって、俊貴の手の中に小さな箱が乗っていて、それをラウラに差し出す。

「コレはなんだ？」

猫パジャマで首をかしげるラウラに俊貴の心はくすぐられる。

「前に言ってたプレゼント。今日買ってきたんだ」

そういって、ラウラの手をとり箱を渡す俊貴。
それにドキッとするラウラ。

「あ、開けていいか？」

「どうぞ」

ドキドキしながら箱を開けるラウラ。シャルも中身が気になって、ラウラの肩越しに覗き込む。

「イヤリング…」

金色の小さな菱形をぶら下げたイヤリング。金色が綺麗に輝いてる。

「あんまり派手なのも嫌かな、と思ってシンプルな形のを選んだんだけど、どうかな？」

「…」

無言てイヤリングを手に取り見つめるラウラ。

「あー…、色が嫌だった？」

「いや、気に入った。なかなか良いものをくれるじゃないか。さすがは私の嫁だ」

フッと、笑って俊貴を見る。どうやら本心のようでホッとする。

「だが、何で金色にした？」

「んー…、それは完全にオレの好みと言うか…」

「なんだ？」

口ごもる俊貴を見上げるラウラ。

「その、オレはラウラの左目の金色が綺麗で好きだから…」

そういって、照れ隠しで頬をかく俊貴。

「す、好き、か…。私の左目を綺麗だと、好きだと言うのか、お前は」

ラウラも照れくさそうに言う。

「う、うん。オレはそう思ってるよ」

「そうか…」

嬉しそうにイヤリングを箱にしまい大事そうに抱える。

「良いなぁ、ラウラ、褒めてもらえて」

ちょっといじけた感じでシャルがラウラに抱きつく。

ホントは俊貴に抱きつきたいが我慢。

「は、離せ！シャルロット！」

「やだよー」

と、俊貴の目の前でじゃれあい始めた二人。

それを見て俊貴はプルプルしだした。

「あー…ごめん、二人とも…」

「「え？」」

急に二人の頭に俊貴の手が置かれる。

それを呆然として見る二人。

「…二人揃って可愛すぎるぞ」

俊貴が顔を赤くしながら頭を撫でる。

じゃれあってる二人を見たこともあり、俊貴も何処か楽しげな顔をしている。要は今の二人にメロメロになっているのだ。

「「か、可愛い…」」

ラウラとシャル、二人の声がぴったりと重なった呟き。
それぞれ呆然として頭を撫でられる。

「そうそう、おみやげも貰ったんだよ。@クルーズで」

そういって、@マークが書かれたクッキーの包みを取り出す。

「とりあえずお茶でも入れるか？クッキー食べよう」

そういって、俊貴は簡易キッチンへと向かう。

「あ、いいよ！僕が用意するから、俊貴は座っててよ」

「その手じゃ無理だろ。オレがやるから」

ニコッと笑う俊貴に言われて、シャルもラウラも、肉きゅうハンドだった事に気づく。

「あ、子猫が二匹だし。ホットミルクにするか？」

「え、あ、うん」

「ま、任せる」

子猫。
そう言われて赤くなり小さく頷く。

「あ、あのさ、俊貴。この服、可愛い？」

シャルは意を決して聞いてみた。落ち着かなそうに手をモジモジさせて。

「ん？可愛いよ。黒猫と白猫ってのがまたいいな。二人とも似合いすぎて可愛すぎる」

「そ、そっかぁ。えへへ、似合ってる、かぁ。うふふ」

「お、お前がそう言うなら、わ、悪くはないな。時々着ることにしよう」

二人が照れくさそうに喜んでいると、俊貴がホットミルクとクッキーを持ってきた。

夏の夜。

ても飲み物はホットミルクで、三人だけのお茶会を過ごす。

メイドと執事　黒ちゃんと白ちゃん（後書き）

こんにちわ

夏休み、シャル、ラウラ回でした。

次は、夏祭りかな？

夏祭り！

八月に入って今はお盆週。

俊貴はとある家で台所に立ち、料理をしていた。

トントントン、とリズムよく音をたてて材料を切っていく。

「…今まで一人でこの家で生活してて、料理どうしてたんだろう」

その家の主は、今はこの部屋にいない。

自室で仕事をしているらしい。

「ま…、あの人の役に立てるなら良いんだけど」

そう思いながら、鍋の蓋を開けて、味噌汁の味見をする。

「うん、こんなもんかな」

頷き蓋を閉じて、また、料理を続けていく。

・・・・・・・・・・・・

料理が完成して、机の上に並べられている。

俊貴と向かい合い座っているのはこの家の主。織斑千冬。家の主にして、俊貴の義理の姉。歳は三つ離れてるというのを最近になって聞いた。

「…料理だけは上手いな」

千冬が俊貴の作った料理を食べながら言う。

「料理だけって…」

苦笑いしながら俊貴も料理を食べる。

千冬は今、上着を脱いでシャツとスカートだけ。
シャツだけのため、いつもより胸の膨らむが目につく。

「千冬さんはずっと家にいるの？」

「ん？いや、ずっとではないが、お盆の間はいるつもりだ」

「じゃあ、オレもお盆の間はここにいようかな」

「好きにするといい。ここは、お前の家だからな」

フッと笑う千冬。

「そうする」

俊貴も笑う。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時は流れ、とある神社のお祭りに来た俊貴。
千冬に祭りの事を聞いたのだが、千冬は行かないと言った。

何で祭りに一人で…

周りを歩いている親子やカップルを見て、イラッと来ながらもゆっくりと石段を上がっていく。

「あ！俊貴！！」

鳥居の下で俊貴に手を振る女子がいる。

「ん？」

首をかしげながらその子に近づく。

「しゃ、シャル！？」

何故かそこに浴衣を着て髪を後ろで纏めたシャルがいた。

「えへへ、織斑先生がね、お祭りがあるからって連絡してくれたんだ」

ニコニコなシャル。

今日は機嫌が良いんだな

ってか、それで行かないって言ったのか

「おー、浴衣のシャルも可愛いな。似合ってるぞ」

「え？可愛い？私可愛い？」

「あぁ、可愛いよ」

このやり取りにもちょっと慣れてきたのか、俊貴が苦笑いする。

「そっか…。えへへ」

またシャルがニコニコになる。

「なぁ、その浴衣どうしたんだ？」

シャルの浴衣を見ながら聞く。
藍色のアジサイ？柄の綺麗な浴衣。
それをちゃんと着こなしている。

「山田先生が着付けてくれたんだ~」

山田先生かー
普段はおどおどしてるけど、やっぱしっかりしてんな~
山田先生グッジョブ！

最近シャルがとても気になる様になった俊貴は、シャルの浴衣を見れてとても満足してる。

ただ、その気になってる理由がいまいち分かっていないのが俊貴クオリティ

「わわっ…」

シャルが人波に押されて前に倒れそうになる。

「ん」

そういう時、ちゃんと受け止めるのも俊貴クオリティ。シャルは俊貴の胸に倒れ込む。

「大丈夫？」

シャルの顔を覗き込んで聞く俊貴。

「う、うん。大丈夫だよ、ありがとう」

シャルが赤くなりながらゆっくりと俊貴から離れる。幸いにもそこは余り明るくないため、真っ赤になったのがよくわからない。

「ここは危ないし、行こっか」

俊貴が人混みの集中する真ん中の方に位置どりし、シャルを外側に行かせて人混みから守るようにする。

歩きやすくしてくれた俊貴に感謝しながらも、逆に俊貴とはぐれそうで戸惑うシャル。

「…はぐれるといけないから、はい」

シャルの内心に気づいたのか気づいてないのかよくわからないが、俊貴が、手をシャルに差し出す。

その手を見てから、俊貴の方に顔を向ける。恥ずかしいのか、照れてるのか、顔をシャルから逸らしている。

「あ、ありがとう」

俊貴の内心がよくわからないけど、素直にシャルは手を握る。

（と、俊貴から手を繋ぐのを催促してきた…！こ、これは、両想いと受け取っていいのかな…！そ、それともただはぐれたくないのかな…）

と、グルグルドキドキな頭を働かせる。

シャルの思考を奪った当の本人は、屋台に目移りしている。

「よし、どっから行こうか？」

ニコッと微笑む俊貴。

「え？えっと、俊貴の行きたい所からでいいよ」

シャルは思考がまとまらないため、落ち着くまで俊貴に任せようと判断。

「んー…、じゃああれをやろっか」

俊貴が金魚すくいを指差す。

「あ、うん。いいよ、や　ろっ」

頷き二人は金魚すくいの屋台に向かっていく。

・・・・・・・・・・・・・

「思ったより屋台があるなぁ！」

「…そうだね」

俊貴のテンションにシャルは呆れ始めた。ドキドキしてたのが馬鹿みたいに思えてくる。

なんたって、俊貴は頭に狐のお面を着け、右手にたこ焼、左手にリンゴ飴、腕に射的の景品で取ったキャラクターの抱っこちゃんをつけている。

（…お祭り大好きなんだね）

俊貴のニコニコ顔を見ながら、好きなものが一つわかった事を素直に喜ぶシャル。

でも、シャルの左手から俊貴の右手を奪ったたこ焼を恨めしげに見る。

「ん？たこ焼食べる？」

それに気づいた俊貴が口をつけた爪楊枝二本にたこ焼を一つ刺して、シャルに近づける。

（つ、爪楊枝でも…、か、間接キス……）

ドキドキしながら、チラッとシャルは俊貴を見る。

「どした？」

けろっとしてたこ焼を、差し出してくるため他意はないようだ。
それが悔しいけど、優しさが嬉しくもある。

「あーん」

俊貴が顔を近づけてきたシャルに言う。

「あ、あーん…」

恥ずかしそうに口を開けて、たこ焼をもらう。

「ん、これうまいね」

「だろ？出店のたこ焼とかって、結構上手いんだよ」

ニコニコしながらまた一個たこ焼をぶっ刺して、シャルの口元に運ぶ。

「い、いいよ。もう。俊貴の無くなっちゃう」

ここで、遠慮がまた発動したシャル。最近は減った気がしたけど、やっぱりまだ遠慮する。

「はい、あーん」

俊貴はそんなシャルを無視して、無理矢理口を開かせようとたこ焼を近づける。

「…あ、あーん」

これは引いてくれない、と判断しシャルはたこ焼を食べるために口を開けて食べる。

「…俊貴のバカ」

その優しさが嬉しいんだけど、ボソッと呟くシャル。

(…でも、誰にでもしそうだよね)

そう思ったら、急に胸がうずく。

自分だけに特別な態度をとってほしい

そう思わずにはいられないけど、俊貴の性格を考えると無理だ、とため息。

「喉渇かないか?」

「そ、そうだね。、暑いし、何か買おうか」

「よし、何かないかなぁー!…」

最後のたこ焼をどうやらくれた様で、近くにあったゴミ箱にゴミを捨てた。

そして、その右手は俊貴からシャルの左手を握ってきた。

「!」

それに驚きつつも嬉しくて心臓が爆発するんじゃないかと思う。

（こ、これは、ホントに両想いととっていいよね？）

チラッと俊貴を見るシャル。

だが、二人だけの時間はあっさりと崩れた。

全く予期せぬ訪問者により。

「あれ？俊貴…さん？」

「ん？」

名前を呼ばれて振り向く。その時、俊貴は無意識に手を離していた。

（…もう、せっかく俊貴から握ってくれたのに）

地団駄を踏みたい衝動を何とか押さえつけながら、その訪問者を見る。

「あ、蘭か」

（…名前、しかも、呼び捨て）

その訪問者を見て思い出す。俊貴とデート（シャルはそう思ってる）の帰りに会った子で、それから俊貴に、ちょくちょく連絡しているというのを聞いた。

「き、奇遇ですね…。こんなところで…」

「だね。知り合いに会うとは思ってなかったからビックリしたよ」

「そ、そうですか…」

蘭も浴衣。
前会った時もヘアバンドをしてたけど、今日はプラスで結い上げて後ろで縛ってる手間のかかる髪型をしている。

「へぇ、蘭も浴衣似合ってるな」

「そ、そうですか。あ、ありがとうございます…」

「むっ…」

赤く染まる頬を隠すように、うつ向く蘭。
その様子から恋心を察したシャルは、警戒しつつも俊貴の隣に引っ付く。

「あー。会長照れてるー」
「そっかあ、誰にもなびかない理由はこれかぁ」
「会長、ふぁいと！」

蘭の後ろにいた浴衣の一行がはやしたてる。

「あ、あなたたちねぇ！」
「きゃー、会長が、おこったー」
「逆鱗触れたー」
「こわーい」

楽しげにふざけるつれに、蘭はあわてふためく。

「学校の友達？」

「え、えっと、その、生徒会のメンバーで…」

俊貴がいつの間にか側にやって来ていて、蘭は言葉を詰まらせる。

「今日は、秋の学園祭のアイディア探しにきたんでーす」
「祭りを学ぶには祭りに行かないと！ってことで」
「でも、もうそろそろ帰ろうかなーって思ってましたー」

「え？何を勝手に決め…」

そんなこと聞いてなかった蘭が戸惑う。

「じゃー、会長」
「私達は帰りますんでー」
「また学校でお会いしましょう」

「えっ、あ、こら、待ちなさっ…」

人混みに消えていく蘭の連れ。
その場に残されたのは、蘭と隣に俊貴、その後ろにちょっと不機嫌になったシャル。

「え、えっと、あの子達、ふざけるのが好きで、ですね」

「あー、そうみたいだね」

「け、けして悪い子ではないんです。ないんですよ！？」

何故か必死にフォローしてしまう蘭。

そして俊貴に詰め寄っていた事に気づく。

「あわわ…」

俊貴から離れて、回れ右。頬は赤く染まっていた。

「あー…俊貴？」

自分をそっちのけで話すのにそろそろ我慢しきれなくなり、俊貴を呼ぶシャル。

「あ、ごめん。名前は知らなかったよな。こっちが五反田蘭。前に助けた子だよ、覚えてる？」

「五反田蘭です」

シャルに事務的なお辞儀をする蘭。その態度も併せて、シャルは蘭がライバルの一人だと理解した。

「んで、こっちがシャルロット・デュノア。前に言ったっけ？」

「いえ、お名前だけしか」

「シャルロット・デュノアです。よろしくね」

「よろしく」

ニコッと笑って紹介するシャル。

（すごい…モデルさんみたいに綺麗…浴衣も似合ってるし……、なんか、ずるい…）

蘭の心中

（この子可愛いな……、明らかに俊貴の事、好きそうだし……、何かモヤモヤしてきた…）

シャルの心中

そして、二人が何かの言葉を期待して俊貴の方へと視線を向ける。

「…」
「…」

その眼差しに、俊貴は焦る。

「な、なに？」

「なにも」
「べつに」

そう答えた二人の視線は和らがない。

「なぁ、良かったら一緒に回らないか？帰るんなら止めないけど」

その言葉にシャルは頭を垂れる。
蘭は逆に、表情が華やぐ。

「いえ、帰りません！ぜひご一緒しましょう！」

がしっと手を握ってきた蘭に、少し驚く俊貴。その顔に気づき、慌てて手を離し赤くなる。

「じゃあ、行こうか」

「はいっ」

「うん…」

喜ぶ蘭と、落ち込むシャル。

・・・・・・・・・・・・

「んー…、蘭も帰っちゃったし、どうすっか」

「そ、そうだね」

あれからまた屋台を回り、時間は八時前。

蘭は射的であてた液晶テレビをもって帰ろうと家族に連絡したら、そのまま帰る事になった。やむを得ず、しぶしぶ帰っていった蘭。

（ま、また二人っきりになれた…）

ニコニコ顔に戻るシャル。

「ま、特にやることもないし帰ろっか」

そう言った瞬間に、爆音と共に空に花火が上がる。

「おー、花火も有るのか！危うく帰るとこだったぜ」

嬉しそうに花火を見上げる俊貴。

「うわぁぁー…」

シャルもそれを見て笑顔になる。

次々と上がる花火を二人並んで見上げる。

（別に、これくらいいいよね）

空を見つめながら、シャルはそっと自分の腕を俊貴の左腕に絡める。

「ん？どかした？」

「ううん、どうも」

「そっ」

一度だけシャルを見た俊貴は、また夜空の花火へと戻す。

夏祭り！（後書き）

こんにちわ

ちょっとストックし過ぎたので、更新を早めることにします。
ちょっと戦闘がないですが、夏休み編が終われば戦闘が増えると思います。学園祭とかね

では、これからもよろしくお願いします。
コメントもいただけると嬉しいです。

二学期始まりました

夏休みはあっという間に終わっていった。
今は九月。

二学期も始まり、第三アリーナに鋭く重い金属音を響かせる。

俊貴と鈴が模擬戦を行っている。
二学期初の実践訓練は、一組二組合同ではじまった。

「うぅ…」

クラス代表同士で始まったバトルは、俊貴がずっと押しっぱなしのワンマンバトルになっていた。

でも、俊貴は全力はもちろん、半分の力も出してない。
全力だと、ワンオフアビリティーとヴォーダン・オージェの発動で模擬戦をすることになる。
半分の力ぐらいでも、第二形態，不知火，は専用機を凌駕する性能。

「あんた、本気だしなさいよ！」

クラス代表戦の時も割りと差があったけど、今はその差が広がりすぎて腹がたつ鈴。
そうは言ったけど、本気だされたらクラスメイト達の前で恥ずかしい思いをする。複雑な鈴の心境。

「でえええぃ！」

俊貴が刀を振り下ろす。

「くっ…！」

双天牙月で受け止める。
その攻撃の重さに腕が震える。

「この距離なら！」

連射性の高い砲撃を近距離で放つ鈴。

「っ！」

鈴を壁の様にして蹴り飛ばし、衝撃砲をかわすが脚に当たる。
そして、その隙を見逃すほど鈴は弱くない。連結状態の双天牙月を投擲した。

「くっ！」

それを刀で受け止めるが、視界から鈴が消えている。

「…そこか！」

ハイパーセンサーが位置を捕捉したのと同時に、俊貴がビームライフルを放つ。

「きゃあ！？」

真下にいた鈴の腹にビームが直撃。

地面へと落下していく。

「おわりー」

ニコッと笑って両手の刀を振り抜く。

その二連撃で、試合終了のアラームが鳴る。

・・・・・・・・・・・・

「くぅぅ！なんであんたに二連敗も…！！」

「あはは…」

前半、後半ともに鈴の敗北で終わった実践訓練。それに悔しくて、地団駄を踏む鈴。

今は片付けを終えて食堂。

いつものメンバーで昼食をとっている。

なんか料理の話からお菓子の話になってる…

流石は女子

と思いながら、ラウラとシャルを見る。

同室になってから仲良くなったな。よかった

初めは、ラウラが大丈夫かな？と思っていたが、それは杞憂に終わった。
それにホッと安心する。

ーマスター、ちょっと良いですか？

ん？久しぶりだな
どした？

ー第二形態に移行したことにより、戦闘スタイルを三タイプに変更できるようになりましたが、どうしますか？

あぁ、そうだった。えっと、デフォはさっきも使ってた状態で、状況にあわせて変えるから、二つの状態を待機形態でよろしく

ー了解しました。武装もそれぞれ確認しといてください

わかった

「はぁ…。それにしてもなんであんな差ができちゃったかなぁ」

鈴がため息をついた。まだ気にしていたようだ

「……返事に困るな」

俊貴が苦笑いして言葉を探す。

「そうですわ。形態移行したら、差がすごく開いてしまいましたわ」

セシリアも頷く。

……何て言えばいい
ここで、オレが強いからだ！何て言ったら最悪だし、鈴もセシリアも充分強い、何て言ったら皮肉にしか聞こえない…
どうすれば……

「でもさぁ、俊貴と組めば負けなしだよね！」

と、鈴がいきなり元気になった。
それを聞いて他の三人も顔をあげる。

「お前は私の嫁だろう。故に私と組め」

そう言いながら、右頬をラウラが押す。
俊貴本人は気づいていないが、四人は頬がプニプニで気持ちいいのを知っている。

最近、ラウラの態度が柔らかくなり、冗談も言えるようになったが、表情の変化がないため少しわかりにくい。でも、何となく俊貴は、冗談かどうかがわかるようになった。

「な、何を勝手な！？それならこのわたくし、セシリア・オルコットも遠距離型として立候補しますわ」

なんか知らんけど、ペアの話に変わってるな

「んー…。でもなあ、別に最近ペア参加のトーナメントなんかないしなぁ」

「いきなりあるかもしれないでしょうが」

「だったら、シャルと組むな」

「へ？僕！？」

シャルがフォークをピタッと止める。
そして、フォークとスプーンを置き、両手をもじもじと組み合わせながら聞いてきた。

「え、えっと、どうして？」

「んー…、ラウラも良いんだけど、シャルが一番落ち着いてやれるんだよね。背中任せられるっていうか、安心する？感じかな」

「そ、そうなんだ……、えへへ」

ぼっと顔を赤くして上目遣いで俊貴を見るシャル。

「くっ！己、シャルロット！」

ラウラが拳を震わせる。

「あんたはマシでしょ。私らなんか名前すら出なかったわよ」

「そうですわ！」

俊貴を睨み付ける鈴とセシリア。

「「「ふん」」」

三人の手刀が俊貴の頭に直撃する。

そんなドタバタがありつつも、昼食が終わり、午後の実習へとアリーナにまた向かう。

・・・・・・・・・・・・

「やっぱ広いなぁ」

俊貴専用ロッカールーム。そこで、ＩＳスーツに着替えようと制服を脱いでいく。

「！」

人の気配を感じて、振り返るが誰もいない。

気のせい、か

そう思ってＩＳスーツを着て、不知火を調整する。

「あ、あれ？」

突然、調整していたはずの画面が消えて真っ暗になる。

「だーれだ？」

は？それオレの台詞

背中越しで聞こえた声は聞いたことない声。

目を塞いでるのは指のようで、さらさらしてて冷たいのが心地よく

て、思考が停止する。

「はい、時間切れ」

そう言った瞬間に視界が明るくなる。

「…誰？」

振り向いた先には、知らない女子が立っていた。

ってか、初対面でだーれだ？はないでしょ…

「んふふ」

目の前の女子は、困る俊貴を楽しそうに笑顔で眺め、手に持っている扇子を、口元へと持っていく。

「えーと、あなたは」

「あ」

「へ？」

後ろを見る二年生につられて、振り向く俊貴。

「引っ掛かったなぁ♪」

むちゅっと頬に柔らか区少し湿った感触が伝う。

「…」

何をされたのか気づいた俊貴がその場で固まる。頬にキスされた。
知らない人に

「それじゃあね。急がないと、織斑先生に怒られるよ」

「え？」

呆然としながら壁の時計を見ると、既に授業が始まっている。

「うおおぉ！？や、やべぇ！こ、殺される！！」

焦って振り返ると、もう誰もいなかった。

・・・・・・・・・・

「…遅刻の言い訳は以上か？」

千冬が俊貴を睨み付けている。

「えっと、ですね？知らない生徒が…」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！初対面で」

「ほう、お前は初対面の相手にキスしてもらってて、授業に遅れたのか」

「は？」

顔にキスマークが付いてることに気づかずにアリーナに来た俊貴。
というか、そんな余裕はなかった。
頬にピンクのキスマークが付いていた。

「あ…」

「デュノア、ラピッド・スイッチの、実演をしろ。的はこの馬鹿者で構わん」

「…」

シャルはそんなことしないよね？しないよね！？
思いが通じたのか、ニコッと笑みが返ってきた。
さ、さすがシャル！

「それじゃあ織斑先生、実演をはじめます」

「おう」

「あ、おわた」

シャルの笑みは、額に血管を浮かべている。
ふわりと空中に浮き、銃器が構成されていく。

「はじめるよ、リヴァイヴ」

「ま、まっ」

俊貴の言葉は銃弾にかきけされた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時は流れ、翌日。

ホームルームと一限目を使っての全校集会が行われた。
内容は、今月行われる学園祭についてである。

全校集会の名前の通り、全校生徒が集まっている。

女子の数半端ないな、やっぱり

改めて女子の多さを感じる。
そして、結構騒がしい。

「それでは、生徒会長から説明させていただきます」

そう言った生徒会役員の一人。その声で、騒がしかったのがシーンとなる。

「やぁみんな。おはよう」

「っ！？」

壇上に立つ生徒を見て唖然とする。
昨日、ロッカールームで会った生徒だったから。
声をあげそうになったが、何とか堪えてその人に視線を送る。

「ふふっ」

一瞬目が合い、笑みを浮かべる。

くっ…、なんかドキドキするぞ…

一人心中めちゃくちゃになった俊貴が、平静を保ちながら会長の言葉を聞く。

「さてさて、今年は色々と立て込んでてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。生徒の長よ。よろしくー」

微笑む生徒会長に、あちこちから熱っぽいため息が漏れた。

…やっぱ女子校ってこういうの有るんだな

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ」

扇子を取りだし、横へとスライド。それにあわせて、空間投影ディスプレイが浮かび上がる。

ピキーン

あ、録な事じゃねぇわ

絶対オレ絡みの事だ

変な予感察知能力がついた

「その内容は、『各部対抗奥村俊貴争奪戦』！」

ぱんっ！と小気味のいい音を立てて、扇子が開く。そして、ディスプレイに俊貴の写真が写し出された。

「はあぁぁ！？」

「えええええええ！？」

俊貴の叫びは、生徒達の叫びによりかきけされた。

そして、一斉に俊貴へと視線が集まる。

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い」

扇子で俊貴を指す楯無。

「奥村俊貴を、一位の部活動に強制入部させましょう！」

「おおおおお！」

「素晴らしい、素晴らしいわ！」

「こうなったら、やってやるわ！」

「今日からすぐに準備をはじめるわよ」

うそーん…

部活なんてやる気ないのに…

ってか、女子の大会にオレは出場できないだろ…

オレの許可は？って聞くだけ無駄なんだろうな…

ジト目で楯無を見る。

「あはっ♪」

ウィンクを返された。

…べ、別に可愛いなんて思ってないんだからね！

盛り上がる女子の群れは止まらない。

こうして、俊貴の争奪戦がはじまる。

・・・・・・・・・・・・

放課後の特別ホームルーム。

クラスの出し物を決めるため、わいわい盛り上がってる。

そして、呆然と黒板を見つめる俊貴。

クラス代表として、俊貴は意見をまとめる立場なのだが、内容が

奥村俊貴のホストクラブ

奥村俊貴とツイスター

奥村俊貴とポッキー遊び

奥村俊貴と王様ゲーム

奥村俊貴と猫遊び

……ツイスターって、お前らホントにやるのか？

ってか、猫遊びってなんだ？

「…却下」

えええええー！！とブーイング。

「こ、こんなの誰がうれしいんだ！」

「私は嬉しいね。断言する！」
「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」
「奥村俊貴は共有財産である！」
「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」
「助けると思って！」
「メシア気取りで！」

…最初の方と最後は知らんけど、真ん中の方の聞くと……

「山田先生、どう思いますか？」

千冬は予想通りいない。こういうことは山田先生に任せると思ってたよ。

「え、わ、私に聞くんですか！？」

…あなた副担任でしょ

「え、えーと、わ、私はポッキーのなんかいいと思いますよ…？」

頬を赤らめて言う山田先生。

…ちっ、この人もそっち側か

「頼むから、もっと普通な意見を！」

「メイド喫茶はどうだ？」

そう言ったのはラウラだった。

…あの@クルーズのバイトでなにか影響を受けたのか？

クラスの面々がポカンとしている。

「え、えーと、皆はどう思う？」

多数決を取ろうと、女子の反応を見る。

が、まだクラスの女子はキョトンとしたままだった。

「いいんじゃないかな？俊貴には執事か厨房担当してもらえばオーケーだよね」

シャルの発言。ラウラへの援護射撃はクリティカルヒット。

「執事！」

「それでいこう！」

「メイド服はどうする！？」

一気に盛り上がり始める。

…まぁ執事ならいいか

…あぁ、メイド服を着させられるのだけは嫌だな……

嫌な予感がする

そうこう考えていると、クラスはメイド喫茶をやることに決定したようだった。

・・・・・・・・・・・・・・・

「やあ」

「……」

千冬にクラスの出し物が決まったことを知らせに来て、職員室から出たら楯無がいた。
ちなみに、千冬はメイド喫茶の発案がラウラだと言ったら大爆笑。

「何か？」

「あれ？警戒してる？」

「…」

自分の行動を振り返ってみなさい

と思ってたけど、ダメそうだ。涼しげに俊貴を見てくる

「あぁ、最初の出会いでインパクトがないと、忘れられると思って」

「忘れませんよ、別に」

そういって、アリーナへと向かう。

「…」

なぜか横にならんで歩き出す。

「まだ、何か？」

ため息をつき楯無を見る。

「ＩＳのコーチをしたげよっか」

「いや、コーチは充分です」

ラウラやシャル、セシリアに鈴。もういっぱいっぱいだよ

「知らないようだから教えてあげるよ。ＩＳ学園において、生徒会長という肩書きはひとつの事実を証明してるんだよね」

「…生徒の長は最強であれ、とね」

「…なるほど」

何となく納得。

何か雰囲気が普通じゃないから、もしかしたらそうかなって思ってた

「ではまあ、一度生徒会室に招待するから来なさい。おちゃくらい出すわよ」

「…じゃあ、一度だけ」

「うむ、待ってるよ。素直な奥村俊貴くんは、おねーさん好きだよ」

「…俊貴でいいです」

「そっか、じゃあ私も楯無と呼んでもらおうかな。たっちゃんでも

可」

「楯無さんで」

この人逆らうの無理だ。

にんまりと笑う楯無。

・・・・・・・・・・・・

「ただいま」

「おかえりなさい、会長」

楯無と一緒に生徒会室に入る。

そこに出迎えたのは三年生の女子だった。眼鏡に三つ編み、いかにも仕事できますって感じの人だった。

その後ろには意外な顔だった。

「わー…おっくーだー…」

おい！人の顔見ておっくーだ、なんて酷すぎる！

あ…、おっくー、だー、か

独特の呼び方をするのほほんさんがいた。

「まぁ、そこにかけなさいな」

「あ、はい」

そういって座った俊貴の頭に、顎をのせてだるーんとするのほほんさん。やたらとこうやって抱きついてくるのが、のほほんさん。

「えーと、のほほんさん？オレの頭は枕じゃないよ？」

「うん、知ってるよー…」

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね。妬けちゃうわ」

「あー、本名知らないんで…」

「ええー！？」

がばっとのほほんさんが起き上がる。

「ひどい、ずっと私をあだ名で呼ぶからてっきり好きなんだと思ってたー…」

「あ…、ごめん」

未だに本名を知らないのはわるい。ってか、今までそう思ってたから抱きついてきてたのか…

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた？さすが、おねーちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私は布仏虚。妹は本音」

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよ。うちはー」

「へー」

「奥村くんも、どうぞ」

「ど、どうも」

お茶をもらってニコッと笑う。

そして、和やかに四人で会話がはじまる。

二学期始まりました（後書き）

こんにちわ

また暑い日が続き始めましたね。
熱中症に気を付けてください。

押し掛ける会長と戸惑うシャル

場所は保健室。
保健室のベッドで眠る俊貴。

「…あ、あれ？」

そして、目をさましボーッと天井を見つめる。

「知らな…」

「目が覚めた？」

……遮られた

俊貴の言葉を遮り、耳に聞き覚えのある声が聞こえる。

そして、その天井を遮るように俊貴の前に顔を寄せてきた。

「…楯無…さん…？」

ニコッと笑う楯無。

ん？何でオレの顔を見下ろしてるんだ？この位置おかしくない？

と、思って気づく。
後頭部に柔らかくて心地よく、いい匂いのする枕があることに。

「な、な、何して…！？」

「ひざまくら」

変なこと聞くね？
って顔してる…
あれ？オレ間違ってる？？

「…！」

ピキーンときた。これはアレだ！嫌な予感だ！！

「…お？」

楯無から離れようとした俊貴の肩に、素早く両手を置く。
そのまま体勢を崩され、再びひざまくらというなの天国に不時着する。

いや、地獄か？

そもそも、何でこんなことに…

あぁ、オレが負けたからか

自分が保健室にいる理由を思い出した。

それは、楯無の一言から始まった。

『ねぇ、一つ勝負しようよ。私が勝ったら、私の言うこと何でも聞いてもらう。君が勝ったら』

『オレの好きにさせてもらいます』

そう言った俊貴に、顔を赤らめてチラッと見る。

『好きにしたいなら、言ってくれれば言いのに…』

扇子で口元を隠し、俊貴を見る。

『……はぁ、何で勝負すればいいんですか？』

これは何か言えば言うだけ深みにはまる。そう思って、話題を戻す。

『押し相撲で、私を床に倒せたら君の勝ち』

『逆に君が続行不能になったら私の勝ちね』

『楯無さんが不利じゃ…』

『いいのいいの。私が勝つから』

『……』

と、会話をしてムッとした俊貴は勝負を受けてたち、その場で押し相撲開始。

そして、楯無の異常なまでの強さを身に染みて感じ、消耗した俊貴は楯無の一撃で体勢を崩し、机で後頭部を強打。そのまま失神。

「……」

それを思い出して、掌を見る。

「あら？私のは柔らかかった、かな？」

「…っ！」

その言葉に俊貴の顔が真っ赤になる。

押し相撲をしてるときに、楯無の胸を鷲掴みした。それにより、俊貴の動きは鈍る。わざとじゃないとは言え、確実に俊貴が悪い。動揺する俊貴を、素早く突き倒し、その結果失神。

「赤くなっちゃって」

ぷにぷに、と俊貴の頬をつつく楯無。

くっ…、この人には勝てない気がする

「俊貴！」

急にドアを開けて保健室に入ってきたラウラ。

そして、目の前の光景を見て、表情が無表情へと変わる。

…ふふ、終わった。まぁ、ラウラに殺されるなら、いいか…

「目標を撃破する」

ＩＳを展開したラウラがＡＩＣを発動。同時に斬り込んでくる。

いいわけねぇし！

「ふふっ…」

起き上がろうとした俊貴を押さえつけ、笑みを浮かべた楯無は、素早く抜き放った扇子をラウラの額へと当てる。

そして、ラウラへと飛び出し、空中で扇子をキャッチして開き、ピンと張った紙でラウラの頸動脈を押さえた。

「なっ…！？」

あまりの鮮やかな手並み、そして早業に、俊貴もラウラも驚きを隠せない。

そして、敗北を悟ったラウラは、奥歯をきつく噛みしめてＩＳを解除する。

「うん、素直でよろしい」

そういって、ポンポンとラウラの頭を撫でると、俊貴の方を向く。

「じゃあ、話もまとまったところで行こうか」

「…、ど、どこへ？」

「第三アリーナよ」

ニコッと笑う先輩に、二人とも勝てる気がしなかった。

・・・・・・・・・・・・

「どう言うことですか！俊貴さん！！」
「俊貴！」
「俊貴、貴様…！」

第三アリーナに移動した俊貴とラウラ、楯無。そこで、シャルとセシリアが訓練を行っていて、ラウラはともかく楯無に対してキョトンとする。

そして、そこで楯無が俊貴の専属コーチとなった事を三人に明かし、いまの状況。

どうしてこうなった…
あ、オレのせいか

「あー…オレの力不足で、その、勝負に負けて、な。うん」

しどろもどろで話す俊貴。

「負けたから私の言いなりって言うことでね」

クスッと笑う楯無。

あぁ…、話がこじれる気がする…

「俊貴っ！」
「俊貴さん！」
「俊貴！」
「「勝負だよ！」ですわ！」だ！」

…うぅ、やっぱり

「まぁまぁ。今は訓練が先よ。俊貴くんの従属権は後々♪」

従属って…

何かオレを見る目が三人とも怖い…

「「「約束だよ！」ですわ！」だぞ！」

「はい…」

三人の剣幕に押される俊貴。

「じゃあ、とりあえずー」

話に区切りがつき、俊貴への訓練が始まった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここ最近、楯無が訓練に参加するようになってハードになった。
適当なのかと思ったら、ちゃんとした訓練をする。大人びてるけど、
子供っぽい。なんと言うかよくわからない。

違うな、わからないんじゃない
わからせないんだ
自分のホントの姿をわからせないようにしてるんだ
それだとどう対処していいのかわからないよ…

「はぁ…」

疲れた。
訓練を終えて自室のドアを開ける。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

「…」

無言でドアを素早く閉める俊貴。

「部屋間違えたな」

そう思って、ドアの横の部屋番と表札を確認。
奥村と書かれた表札を目視で確認。
目標地点到達。帰還する。

再びドアを開けて、目の前に立つ人物を確認。声をかけられる前にまた閉めた。

これはどういうことだ？何故オレの部屋に裸エプロンで待ってる楯無さんがいる？オレは幻覚を見てるのか？疲れか？そうなのか？

またドアを開ける。

「お帰り。私にします？それともわ・た・し？」

今度は閉められる前にドアを手で押さえる楯無。

「えっと…じゃあ…」

あれ？

「選択肢がない！」

「あるよ、一択なだけで」

幻覚じゃない、そこにいたのは楯無だった。

「今日から私、ここに住もうと思ってね」

「…住もうと思ってね？」

オレに相撲で勝ったから？

「いやぁ、皆に自慢できるなぁ。二人しか住んだことのない、俊貴くんのお部屋で寝泊まり。私ってば三人目の女ね」

…流されたの初めてだ

「…生徒会長権限ってやつですか？」

「そう、生徒会長権限」

何でもありか！生徒会長！！

「俊貴くんは反応が可愛いねえ」

俊貴を楽しそうに見る楯無。

「…オレも男です。襲われても知らないですよ」

なるべく見ないように部屋に入る俊貴。

こう言えば流石に着替えるだろ

「じゃん♪水着でしたー」

そんな俊貴を見ながら笑って振り向く楯無。

そこには水着だが、大胆なビキニを着けている。

「…」

「んふ、残念だった？」

「いやいや！それでも同じでしょ！？」

「あは、顔赤いわよ」

「くっ…」

水着を見せつけてくる楯無。

それに照れつつも、ドキドキしてしまう。

ふと、部屋に視線を移し、楯無がホントにこの部屋に居座る気だと言うのがわかり、うなだれる。

もう部屋には楯無の私物がセットされているから。

「せめて、服は着てください。ホントに襲われても知らないですよ？」

ため息をつき自分のベッドに腰を落とす。

「別にいいけど？」

クスッと笑う楯無。

「良くない！オレが良くないです！！恋人でもないのに、そういうのは良くないです！」

俊貴が頭を抱える。

「なら、恋人になればいいじゃん」

楯無が俊貴のとなりに座る。

うぅ…ヤバイ、これはヤバイ…

隣から発せられる心地いい匂いが俊貴の頭を麻痺させる。

すると、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「は、はい？」

助かった、と顔をあげて訪問者の方に向かう俊貴。

ん？ちょっと待て

「と、俊貴。私だけど…」

「しゃ、シャルか！？」

マズイマズイ…

楯無さんを何て説明すればいいんだ……

「は、入っていい？」

「ちょ、ちょっと待って…」

俊貴がドアから離れていく音がした。

（…何してたのかな？）

シャルが首をかしげて俊貴を待つ。

「…？何か声が聞こえる…」

部屋のなかから俊貴以外の人の声がする。

しかも、微妙に聞いたことある気がする。

「あ、わかった。浮気がバレるから必死なんだ？」

「！！」

ドアの方に声が近づいてきた。

「いらっしゃーい。シャルロットちゃん」

俊貴の部屋のドアを中から開けたのは、楯無だった。しかも、裸エプロンのままで。

「……」

シャルが呆然と楯無を見る。

くっ…、止められなかった…、せめて服だけは着せようと思ったのに…

俊貴が頭を押さえた。

「……、俊貴。どういうことかな？」

シャルの顔は笑ってる。いつも見ると癒される天使の笑顔。ただ、そこには普段ない血管が浮かび上がっている。

「えっと、とりあえず中に入ろう？お茶出すから」

他の生徒にまで見つかるわけには…

「うん」

シャルは怒気を放ちながら俊貴の部屋に入る。

俊貴は台所に、シャルと楯無は奥に入っていった。

・・・・・・・・・・・・

俊貴がお茶を準備してるあいだに、何故か仲良しになってるシャル

と楯無。
これだから、女子はよくわからん

「ところで、あの…、さっきから気になってなんですが、何か先輩の私物がありませんか？」

俊貴のいれたお茶を一口飲んで、シャルが聞く。

「うん、しばらくここで暮らすから」

「えっ…！？」

驚いたシャルの手からコップが滑り落ちる。

「あ、あっぶねー…」

シャルの脚にかかる前に俊貴が何とかコップを掴む。

「ど、どうしてですか？」

スカートを強く握りしめるシャル。

「うん。さっきも言ったけど私は俊貴くんの特別コーチをするから、寝食を共にして波長を合わせるの。あと、普段の様子とか観察しないといけないから」

「観察…」

オレは昆虫か何かか…

「そ、それなら僕も…」

ん?な、何故シャルも…?

「んー。だめ」

「なぜですか!?」

「二人部屋」

「あっ…」

そうだね、その通りだね

「まぁまぁ。私は俊貴くんに手出しはしないから」

「ほ、ホントですか?」

「俊貴君から来るかも知れないけどね」

「…」

ゆっくり笑顔でこっちを向くシャル。

「シャルをからかわないでくださいよ…」

「あら、バレた?ゴメンね、ちょっとイジワルしちゃった。あは♪」

「べ、別にいいです…」

その笑顔を見て、小さくため息をついたシャル。
シャルを見て、楽しそうな楯無。
これからの事が不安になってくる俊貴がまた頭を押さえた。

押し掛ける会長と戸惑うシャル（後書き）

こんにちわ。

うーん、バトルがない…

六人目の専用機持ち

ＩＳ学園の第四アリーナ。
そこに俊貴が一人突っ立っていた。
ＩＳは展開してない。ＩＳスーツも着ていない。

そもそも俊貴はＩＳスーツを着なくても性能が変わらない使用になっている。
それにＩＳスーツのピッタリ感が好きじゃなかった。

「おーい、来たけど用がないなら帰るよー」

アリーナ中に俊貴の声が響く。

誰もいないアリーナに俊貴の声だけが響いていた。
誰もいないのは帰宅時間を過ぎてるから。時間にして六時ちょっと過ぎ。

で、何故ここにいるかと言うと、呼び出されたから。差出人不明の手紙をもらい、訓練が終わってからそのままアリーナに直行した。

…返事がない。ただのイタズラのようだ

くるっと向きを変えてアリーナから出ていこうと、入り口に向かう。

「待った！何で帰ろうとしてんのよ！！」

アリーナに聞いたことのない声が響く。

入り口に向かう俊貴は、小さくため息をつき振り帰る。

「さっさと出てこないのが悪い。オレは呼び掛けたよ」

俊貴に向かって歩いてくる女子。その顔には見覚えがない。

…誰？

「あー…、初対面だよね？」

首をかしげて女子を見る俊貴。

肩まで伸びた綺麗な赤い髪。少しつり上がった黒眼。口もへの字になって、気の強そうな感じを醸し出している。

そして、制服を突き上げる二つの膨らみ。スカートから伸びるスラッとした綺麗な脚。

まさに美少女。

「そうよ。今日初めて顔を会わせるわ。でも、私はあんたの事知ってるけどね」

腕組をして俊貴にニヤッと笑う女子。

「…？えーと、知ってるだろうけど、オレは奥村俊貴。君は？」

律儀に自己紹介してから、女子に名前を聞く。

それに満足そうに笑みを浮かべながら答える。

「あたしは如月怜莉よ。歳は２１。血液型はＡ。乙女座のウブな乙

女。初等科七人目の専用機持ちよ」

フフン、と何処か自慢気。

「あれ？専用機持ち？臨海学校の時に居なかったのは何で？」

臨海学校の銀の福音事件の時、初等科の専用機持ちは全員駆り出された。でも、その時一組メンバーと鈴以外はいなかった。

「私、臨海学校の時いなかったのよ。アメリカの代表候補生だから、アメリカにＩＳの用事で行っててね」

「アメリカ？ってことは、ナターシャさんも知ってるの？」

「当たり前でしょ。知らないわけがないわ」

髪を後ろに流す怜莉。

「えーと、それでオレに何の用？」

それに苦笑いしつつ聞く。

「あたしと勝負しなさい！」

ええー？またこの展開？勘弁してよー…

「何？勝ったら負けた方を好きにしていいの？」

はぁ、とため息をつく。

前回、楯無がそうだったため勝手にそう判断。

「なっ！？何考えてんのよ！この、変態っ！！」

「なん…だと！？」

違ったようだ。

唖然と怜莉を見ながら、自分の言ったことが恥ずかしくなってくる。

「あれ？」

何故か怜莉も顔を赤くしている。

「……。でも、それ良いわね。そうしましょう」

赤い顔でうんうん頷く怜莉。

「ぐっ…、余計なことを言ってしまった」

な、何故こんなことばっかり起こるんだ…

「勝負はＩＳ一本勝負！」

「ＩＳで？」

「そうよ！あんた経験が浅いくせに強いって聞くから、一度やってみたかったのよ！」

自信たっぷりな怜莉の態度は変わらない。

そうとう自信が有るんだな。でも、経験浅いヤツに勝負挑んでくるとか…、あ、強いって噂のせいか…

「まぁいいや、早くやろう。寮の食堂閉まっちゃう前に終わらせないと」

俊貴が不知火を展開した。

「あら、余裕ね。私は簡単には落とせないわよ」

怜莉もＩＳを展開した。

両肩のアーマーに刃がビームのブーメランが一つずつ装着されている。
腕のアーマーには二つずつ銃口がむき出しになっている。
腰には刀のような武器が左右に一つずつ着いている。
脚の爪先の方はクローが出そうな溝がある。
背中には六本の推進翼があり、大型スラスターから左右対象に展開。
全体的に赤で統一されたＩＳが俊貴の前に浮いている。

ー敵ＩＳ‘イフリート・ヴァニッシュ’。搭乗者如月怜莉。近接特化型

確かに、初めから展開されてる武装が多いし、火力はありそう。それにあの推進翼で機動力もありそうだ。

ーマスターー、特殊装備があるかもしれません。気を付けてください

了解

「こないなら、こっちから！」

「！」

速い！

でも！！

瞬時加速でもないのに、その速さは訓練機の瞬時加速を遥かに超えるスピードで向かってくる。

が、俊貴にとってその程度、大したことはない。

「な、なに！？」

上に飛ばれて、左腰から抜いたエネルギー刃の刀は空を裂いた。

が、直ぐに向きを変えて俊貴の方へと両腕を向ける。

「お、おぉ！」

腕に装着された銃口から俊貴へと実弾が飛んでくる。

それを回避しつつ、腰のビームピストルを両手に握る。

「でやあぁぁ！」

怜莉が瞬時加速で俊貴の前まで現れる。刀を振り上げて。

「ちっ！」

舌打ちして俊貴は切り裂かれる。

「な！？」

切り裂かれた俊貴はぶれ初めて薄くなり消えた。

「しまった、蜃気楼か！」

ピピピピ、と警告音と共に俊貴の場所を知らせる。振り返って俊貴の方を向くと、ビームの弾幕が飛んでくる。

「くうぅ…」

ビームの嵐を、纏う様に浮いている二枚のエネルギーシールドで防ぐ。

「エネルギーシールドか！シャルのと同じ…」

電磁砲を向けて放つ。

「きゃああ！」

エネルギーシールドに直撃した電磁砲が、シールドを破壊して爆発。

「…っ！やるわね！！」

ニッと笑って両肩のブーメランを掴んで俊貴へと投げつける。

が、それは簡単にビームピストルで軌道を反らされて弾かれる。

「はあああぁ！」

「…だと思ったよ」

ブーメランを陽動に使い、俊貴へと突っ込んでくる怜莉。

両手には刀が握られている。

だが、予測していた俊貴は振りかざされる刀を止めるために腕を掴む。

「なっ！くうぅぅ！！」

振りほどこうとする怜莉だが、振りほどけず電磁砲が自分へと向けられる。

「！」

急に腕を離されてバランスを崩して、電磁砲が直撃。

爆煙を上げるが、何とかその場に浮いている。

「……」

「何でこんな強いのよ…」

話では赤い翼が展開されるはずなのに、まだ赤い翼を使っていない。

それに悔しさが込み上げてくる。

「本気出すまでもないってこと？」

俊貴をジッと睨み付ける怜莉。

「そりゃ、怜莉が本気を出すまで出さないよ」

「！」

（私が全力じゃないのバレてた…）

「私が本気出せば出す、と？」

「…それはオレが決める」

「……やなヤツ」

フフっと笑い、赤いＩＳが更に赤くなる。

「！なんだ、あれは…」

「エクセリオンモード。私のワンオフアビリティー」

機体の性能を一時的に倍に上げて、更に武器の火力も倍になる。

「行くわよ！」

そういって、瞬時加速。

「っ！」

ギリギリで体をのけ反らして、怜莉の刀をかわす。

「！…てやあぁぁ！！」

刀をギュッと握り直して、俊貴へと刀を連続で振り抜く。

「くっ…！」

ビームシールドと、刀の展開が間に合い、連激を何とか捌く。

そして、怜莉の腹を蹴って距離を開ける。

「ぐっ！」

呻きつつも、距離を何とか離されないように踏ん張る。

「今度はオレだ！」

刀を横に構えた瞬間、背中の大型ウィングが展開し、赤い翼が現れた。

「…綺麗」

それに思わず見とれる怜莉。

もちろん俊貴はその隙を見逃さない。

「止まったら敗けだよ」

「え？」

いつの間にか自分の後ろにいる俊貴。

呆然と見ていたら、イフリート・ヴァニッシュのエクセリオンモードが切れ、アーマーがバラバラになった。

「え？…って、きゃあああ！！」

ＩＳのエネルギーが切れて地面へと落下する怜莉。

「オレの勝ち、だな」

「…」

ニッと笑って怜莉を抱き抱える俊貴。

そして、ゆっくり地面へと降りてきて、怜莉を降ろす。

「……」

俊貴も地面に降りてＩＳを解除。

「あれ？どうかした？？」

何故か顔を赤くして黙る怜莉に聞く。

「どうかしたって、あんたが勝ったんだから、あんたの好きにしなさいよ！」

あ、それで赤くなってるのか

苦笑いして頬をかき、怜莉に近づく。

「！…」

それにドキドキしながら、思わず目をつむる怜莉。

「お疲れさん。食堂一緒に行こう」

頭を撫でて微笑む俊貴。

「……へ？」

頭を触られてビクッとしたが、言われた事にキョトンとする。

「ん？食堂行かないの？時間なくなるよ」

俊貴がアリーナの入り口に歩き始めた。

「ま、待ちなさいよ！」

慌てて怜莉もそれに付いていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わり食堂。
時間が終了間際と言うこともあり、生徒が少ない。
そのためテーブルがかなり空いてるため、俊貴と怜莉は返却口の近くに座る。

「いただきます」

「…いただきます」

箸を持って手を合わせる俊貴を見ながら、真似して小声で言う怜莉。

「やほー。おっくー」

ん、最近よく会うな
あ、会長が周りをうろついてるからか

「や。のほほんさん、食べ終わったの？」

トレーを持っていたためそう聞く。

「そうだよー、まんぷく、まんぷくー」

えへへ、と笑いながら俊貴の頬をトレーで突いてくる。

「ちょ、当たってる！当たってっから！」

地味に痛い。

「当ててんのー」

笑顔でそういって、満足したのかトレーを離してばいばーい、と返却口に置き、食堂から消えた。

「…あれ誰？」

俊貴を見る目が何処か冷たい。

「クラスメイトだよ」

何故不機嫌…

「…あっそ」

大きく口を開けて、料理を放り込む。

「…っ、み、見てんじゃないわよ!!」

俊貴の視線に気づき、慌てて大口を開けるのをやめる。

「あはは…、ごめん」

苦笑いする俊貴。

「…」

「…」

初対面のせいもあり、あまり会話が思い付かない。

「ど、どうして何も言わないの?」

沈黙に耐えきれなかったのか怜莉が聞く。

「えっと、それは今の状況の事?さっきの勝負でオレが勝ったに何も言わないこと?」

「後者」

「あぁー…、特に無いんだよね。だって、オレ怜莉の事よく知らないし」

「よく知りもしない相手を名前で、しかも呼び捨てにする？」

「えー？ダメ？」

「…別にいいけど」

ふん、と顔をそらす怜莉。

（…何故か嫌じゃないのよね）

「じゃあ、あんたが勝ってもなんも意味ないじゃない」

「まぁそうだけど、別にいいじゃん。」

にしし、と笑う俊貴。

「…じゃあ、あんたの勝ちは勝ちで良いとして、ごほうびは私が貰う！」

「…は？」

な、何いってるのこの子は？ご褒美は勝った人のものだろ！

「何も頼まなかったあんたが悪い！私があんたの彼女になったげるわ！！」

ビシッと指を俊貴に向ける怜莉。顔は赤いがどことなく勝ち誇った顔をしている。

…意味がわからない
何故、オレの彼女になるんだ?

「拒否します」

「な!?何でよ!」

「だって、オレまだ怜莉のことよく知らないし」

「…くっ!接触が遅すぎたか…」

悔しそうに手を握る怜莉。

な、何だこの子は…

「くぅ!付き合うべきよ!!あんたは!!」

今度は立ち上がっていい放つ。

「えー?」

「…わかった、彼女はまだ早いけど、お互いを知るために友達になろう!」

完璧じゃないか!
と、笑う俊貴。

「……友達じゃいや！」

なん、だと！？

「えー…、どうしたいんだよぉ…」

この子意味わからん…
どうなりたいんだ…
あ、彼女になりたいのか…

「彼女が無理なら！せめてセフ…もが！」

慌てて俊貴が口を塞ぐ。

「女の子がそんなこと言うな！それに自分を大事にしろ！！」

な、なんという子だ…
ま、まさか、せ、せふ…

ど、どうする…
この子色々と心配になってきたぞ。

冷や汗が流れてきた。

「いつまで口押さえてんのよ！」

俊貴の手を無理矢理下ろして言う怜莉。

「あー、ごめん」

手を引っ込める。

「それもダメなら…、あんたのメイドになるわ！」

「えー…」

なんだ、メイドになるって…

…ってか、この子はあれか？

「もしかして、オレと一緒にいたいのか？」

「なっ！？」

どうやら図星だったようで顔を赤くしてうつ向く。

一緒にいたいなら友達でいいんじゃ…

「あー…、わかったよ。好きにすればいいよ。ただ、彼女とかセフレはダメ」

もっと自分を大事にしてほしいし

「……まぁいいか、わかった。好きにする」

頷き、再びご飯をぱくぱく食べ始めた。

俊貴もそれを見て苦笑いして、ぱくぱく食べ始める。

だが、この提案が俊貴を後悔させるのをまだ知らない。シャル達はまたライバルが一人できたことを知らない。

六人目の専用機持ち（後書き）

こんにちわ

急に降ってきた雨に戸惑ってます。

やっとバトル回来ました。
そして、新キャラです。

タイトルと本文で専用機持ちの人数が違いますが、わざとです。
七人目は、原作を知ってるかたならわかると思います。

とりあえずキャラ紹介はそのうちまとめてやります。

では、この辺でノシ
コメントいただけると嬉しいです

俊貴の憂鬱

寝る前の歯磨きをしてた俊貴は、楯無が呼ぶ。

「俊貴くーん」

返事して部屋に戻ると、ワイシャツだけを着た楯無がベッドの上に寝転び脚を泳がせている。

「なんですか？……」

「み、見えてますよ！」

楯無のきゅっと引き締まったお尻。それを覆う薄紫のパンツが思いっきり見えている。

慌てて洗面所に戻る。

「あれー？どうしたの」

「服着てくださいよ！」

「着てるわよ？」

「ズボンかスカート穿いてください！」

「えー？」

その会話中にドアの方に近づく足音。

…押さえよう

「……ドアが開かない」

「…。オレが押さえてますから」

ちょっと可愛いと思っちゃった

「開かぬなら、バラしてしまえ蝶つがい」

「はっ!?」

かきんっ!と小気味のいい音が聞こえて、ドアが倒れる。

…何処の戦国大名かあぁぁ!

「じゃーんぷ」

斜めになったドアに、楯無の体重がのしかかる。

こ、これは…き、きつ…

「私、重くないでしょ?スタイルいいし、日頃から鍛えてるから」

「じ、自分で言っちゃいます!?せ、せめてオレが言うべき…」

「あら、律儀」

重さに耐えきれず、その場に倒れて洗面所に楯無が突入。

「さぁ、観念して私にマッサージをしなさい」

「…は？」

「なんでそれをって顔してるね。んふふ、おねーさんはちょっとだけ情報が早いのよ」

くっ…セシリアだな…

くそー…まずいな

楯無さんのスタイルが良すぎる。胸も腰もお尻も！

まずい、これはまずい！お、オレの理性が…

「むー。抵抗するわねぇ。こうなったら…」

ドアを除けて、俊貴に覆い被さってくる。

「うりゃ、こちょなこちょこちょー」

「あ、あはははは！や、やめ、あはひひふは」

「さあさあ、観念して私にマッサージをしなさい」

「く、くぅ、だから、や、やめ」

「余裕があるようなのでもっと強くしまーす」

「あはふひひはは！し、ひぬ！ひ、ひんびゃう…」

「じゃあマッサージする？」

「やります！や、やらせてくだひゃい！」

それを聞き、満面の笑みで離れる楯無。

「ふー、なかなか強情ね」

「…」

「さぁマッサージをして。おねーさん色々と疲れてるんだぁ」

「下にズボンかスカートを穿いてください」

「…こっちのが興奮するでしょ？」

いたずらっぽく笑う楯無。

そりゃするさ！するけどそれはよくない！

「…じゃあしません」

「えー、ひどいなぁ。じゃあ何か穿いてくるわね」

「そうしてください」

洗面所から出ていく楯無だが、その足がふと止まる。

「パンツじゃないから…」

「言わせないよ！」

色々とまずい！オレの台詞もな！！

もうずっと見えちゃってるから勘弁してください

「これならいーい？」

シャツをめくると、スパッツ。下着のラインも浮いてる。

「…」

「あ、エロい顔」

「…してません」

そんな顔になってたのか？

「まぁ、とりあえずマッサージよろしくね」

「はい」

もう抵抗する気ないっす

「はぁ…、やりますよ？」

「ん、お願い。今より美人さんになるようにしてね」

「そんな無茶な。今より美人さんになんて無理ですよ」

そう言いながら、脚を揉んでいく。

その柔らかさが気持ちいい。ずっと触っていたくなる感覚に陥る。

あ、脚でこれ……や、ヤバイ

「あら、おねーさん、思わずドキッてしちゃったよ」

ホントに照れくさそうにしてる楯無。

あれ？なんかオレ照れさすこと言ったか？

「ねー、次お尻ー。すわってばっかりでこってるの」

「うそーん…」

くっ…、胸じゃないだけましか…、いや、どっちも変わらん…これはまずい……

でも、やるっていったからにはやらないと…

「い、いきます」

覚悟を決めて、楯無のお尻に手を伸ばす。

「ぐはっ！？」

や、やらかい。これすげぇやらかいよ

「俊貴くーん」

「ふへ？」

「鼻血でてる」

「……あい」

……………………

「奥村くん、学食行こうよ」
「そうそう、たまには私たちと食べようよー」
「ねー、専用機持ち組はずるい」

一気に周りを囲まれ、学食に強制連行かと思ったら。

「お邪魔します」

そういって入ってきたのは、楯無。
その手には重箱と思われる包みを持って、ニコニコ笑みを浮かべ向かってくる。

「俊貴ー！いるー？」

楯無が入って来たことに呆然としてるなか、また新たに一人教室に入ってきた。
如月怜莉。手には二つの弁当の包みを持っている。

「…何よ、この群集は」

ジッと俊貴の周りを囲む女子を見てから、俊貴のとなりに座る楯無を睨み付ける。

「そこは私の席よ、退いて」

怜莉が楯無しに言い放つ。

周りがざわつき始めた。

だれー？

また新しい子がきたよ！

倍率高すぎるよー！

「あら、ここは私の指定席であってあなたの席ではないわ。如月怜莉さん」

クスッと笑う楯無。

「！……どういう事？」

俊貴の方を見る怜莉。

さぁ？と肩をすくめる俊貴。

「まぁ、そんなことよりご飯食べようよ。昼放課は永遠じゃないんだよ」

そういって、周りの女子も混ざって巨大な四角を作る。

そして、それぞれお弁当やらパンやらを取り出す。食堂に行こうとしてた生徒たちも、楯無のおべんとうの量の多さと豪華さのおかげでご飯には困りそうにない。

そして、俊貴は怜莉のお弁当を受け取り包みを開く。

「おおー、料理できるんだな」

パッと見普通のお弁当。だが、油断するとセシリアの様な外見だけは綺麗で、味がヤバイパターンもある。

「俊貴くん」

「はい？」

「はい、あーん」

返事をして開いた口に楯無が料理を入れられる。

ピーマンの肉詰め、かな。しつこすぎない味付けと肉の旨味がマッチしてる。

「…あれ？」

周囲の女子が固まってる。

そして、一気に声を上げる。

「え、え、えー！？」

「奥村くんと会長ってそういう関係…？」

「死んだ！神は死んだ！」

「こんな不条理が認められていいのか！」

「会長ズルい！美人で完璧で彼氏持ちなんて許せません！」

「お姉さま！」

「…」

睨んでる。怜莉が睨んでくるよ…

「な、何してるのよ」

「うん、お昼ご飯」

「そういうことじゃなくて…」

「おいしかった？」

「めちゃくちゃ美味しいです」

ニコッと笑う俊貴。

嘘つくとこじゃないし

「…こら、あんたはあたしのお弁当食べてればいいのよ！」

「怜莉ちゃん」

「なんですか！？」

「はい、あーん」

怜莉の開いてた口に料理を入れる。

驚いてはいたが、ゆっくりイスに座る。

「どう？おいしい？」

「うん、…しっかり味がしみてる肉じゃが」

「あは。誉められちゃった。おねーさん、嬉しいなぁ」

その笑顔にぽかんとする俊貴と怜莉、他の女子たち。

そして、他の女子たちにも食べさせ始めた。

その輪に加わり損ねた三人の専用機持ち組は、ただ呆然とその光景を見ている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「…何か、疲れるな…」

最近、楯無が同室になってからそう感じるようになった。

善意でやってくれてて、しかも怒ったりしないため、それに応えないと、と思ってしまう。

今はその特訓が終わったところで、夕飯前にシャワーを浴びようとしていた。

「…はあ」

ザアー、と流れてくる水を受ける。

頭は洗い終わっているため、ボディータオルに手を伸ばす。

が、そこにあるはずの物がなく、手が空を掴む。

あ、あれ？おかしいな…

首をかしげる俊貴の後ろから、ドアを開ける音がした。

「はーい。お背中流しに来たわよ」

「ぬおっ！？」

水着を着た楯無がいきなり入ってきた。

その水着は学校のスク水で、はちきれんばかりのボディーが布地を押し出している。特に大きく膨らんだ胸のインパクトが強い。

くっ…スク水はそんなに好きじゃないが、こ、これは……

ってかオレ裸！！

「ちょ、ちょっと勘弁してくださいよ！」

「あらあら、恥ずかしがり屋さんねぇ。ほら、おねーさんにすべてさらけ出しなさい」

「はい、わかりました！って言うと思ったかー！！大体、この狭いシャワールームに二人で入ってどうすんですか！！」

「んー。密着？」

そういって、ぴとっと背中に触れてくる。

柔らかい感触が水着越しでも伝わり、心臓の鼓動が速まり焦る。

「あああ！もうヤバイから！！ヤバイから出てってください！！」

理性が保つ気がしない。

「ぶーぶー。俊貴くんのけち」

「けちでいいって…うわわっ！？」

背中から腕が伸びてきて、俊貴の胸板を這う指。
それに、背筋がぞくっとして、頭がクラクラし始める。

「ちょ…、マジでヤバ…」

「背中を洗わせてくれたら出ていくわ」

「絶対ですよ……」

何とか理性を保ち短く言う。
ギリギリだった…今のはギリギリだった…

「俊貴くんってば気前いいー」

楯無の言葉を信じて大人しく背中を洗われる。

「かゆいとこ」

「ないです」

「ちぇっ」

楯無の言葉を遮る。

ボディーソープをつけたスポンジが気持ちよく背中をこする。

「ちゃんと動かす用の筋肉になってるのね。素敵な体ねぇ」

「ど、どうも」

「うふふ。はい、よろしい。おねーさんは上がるわ。背中洗い終わったし」

泡を洗い流して楯無がドアを開ける。

はぁ、と小さくため息をつく。

「俊貴くん」

「へ？」

「いいお尻だったわよ」

うふふ、と笑って去っていく楯無。

「…」

や、安らぎが欲しい…

……………………………………

「うあー…」

テーブルに顔を乗せて呻く俊貴を、専用機持ち組が苦笑いで眺めている。

あ、久しぶりの登場だね

夕食の時間だが、食欲もない。
楯無に振り回されて、疲労感がすごい。
理性が保ってるオレってすごい？

「俊貴、お疲れ様」

「うー…シャルー…」

「お茶飲む？せめてそれだけでも飲んだ方が…」

「ありがとー…シャルが天使に見えるよ…」

顔をあげて、お茶を飲む。
皆の夕飯もうまそうだけど、それを見ても食欲がわいてこない。
あー…このままじゃいずれ死ぬぜ…

「それで、あの女はどうしたのだ？」

ピリピリとした様子のラウラ。楯無が同室になってから、ラウラは部屋に忍び込んで来なくなった。それも原因の１つである。

シャルのくれたお茶が適度にぬるく、落ち着く。

「生徒会の仕事があるってさ…」

「そーそー。書類がちょおたまってるんだよねー」

この間延びした声は、のほほんさんか。

ってか、手伝えよ

「私はねー、いると仕事が増えるからねー」

そういって、俊貴の背中に抱きつき、俊貴の頭に自分の顎を乗せる。

「自分で言うのか……」

どかす気力もなくてそのまま放置する俊貴。

それをラウラはジッと睨み付けてくる。

「コホン、……俊貴さん？」

「んー？何ー？」

顔だけセシリアの方に向ける。そのおかげで、のほほんさんと俊貴両方からみられる。

「あの部屋にいるのがつらいなら、仕方なく、人助けということで、武士の情けということで、わたくしの部屋にいらしても構いませんわよ？」

…豪華なベットが部屋を占領してる部屋か

「な、何!?だったら私のところに来い!!」

「ラウラ…、僕たち二人でもう定員オーバーだよ」

シャルが苦笑いする。

できればそうしたいが、残念ながら二人部屋。

「関係ない。同じベッドで寝ればいい。何せ私の嫁だからな」

ふん、と言い放つラウラ。

「おー…なるほどねー…」

いつもは必ず抵抗するのに、納得し始めた俊貴。

(こ、これは)

(そうとう)

(((きてるよ…)きてますわね…)

シャルとセシリアが同時にそう思う。

「あんたら、私を忘れてない?俊貴、こっちの部屋に来なさいよ。トランプあるわよ?」

「なんでトランプ…」

鈴の提案に顔を伏せる俊貴。お、おおー?とのほほんも俊貴の上に倒れる。

背中にやらかい感触を感じるが、どういうわけかなんともない。

…そうとう追い込まれてるな、オレ

「じゃあ、金平糖」

「保育園児かよ…」

なんで下げた。

「なによ、豆がいいの!?」

「…めんどくさい。部屋帰る…」

のほほんさんに退いてもらって、立ち上がり自室へと向かう俊貴。

「「「「…」」」」

「な、なによ?」

セシリアとシャルとラウラ、のほほんさんまでもが鈴をジト目で見る。

「俊貴さんにあんなこと言わせるなんて…」

「お前はひどいやつだな」

「さすがに今のはないよ…」

「おっくー、可愛そうー」

セシリア達がそれぞれ鈴へと言葉を送り、食堂から出ていった。

「……」

ガクッと頭を垂れる鈴。

そして、部屋の前に着いた俊貴がドアノブに手をかける。

「おかえりなさい。お風呂にします？ご飯にします？それとも、わ・た・し？」

…なんでもういるんだ

ドアを開けた瞬間に楯無。

まさにｏｒｚ状態でその場に崩れる俊貴。

俊貴の憂鬱（後書き）

こんにちわ

この更新ペース、いつまで続くか…（汗）

学園祭！

なんだかんだで学園祭当日。
一般解放はしてないけど、生徒たちの弾けっぷりがすごい。

「うそ！？一組であの奥村くんの接客が受けられるの！？」
「しかも執事の燕尾服！」
「それだけじゃなくてゲームもあるらしいよ？」
「しかも勝ったらツーショットよ！行くしかないわね！！」

と、いうわけで初等科一組の『ご奉仕喫茶』は盛況で、朝から大忙し。
詳しく言うと、俊貴目当てのため俊貴が引っ張りだこな状態で、クラスメイト達は割りと普通に楽しそうにしてる。

どうしてこうなった…

「いらっしゃいませ♪こちらへどうぞ、お嬢様」

何故かとても楽しそうなのがメイド服姿のシャルで、朝からずっとにこにこしている。

（似合ってて可愛いって言ったからかな？そうだとしてもやけに上機嫌…）

接客班は俊貴とシャルとセシリア、ラウラとクラスメイト一人。

あー…シャル見てると癒されるー

「おい、ボーッとしてるな。お前の客が一番多いんだぞ」
そういって、脇腹を突くラウラ。
「う…、ごめん…」
何故か不機嫌で、ぶすっとしている仏頂面のラウラ。
「オレが今のは悪いとして、もうちょっと笑って。ラウラ」
「ふん」
ぷいっと顔を背けるラウラ。
「ほら、メイド服似合ってて可愛いんだから、笑顔笑顔」
そういって、頭を撫でて自分の客の方に向かっていった俊貴。
なんかメイドさんがこんな一杯いると落ち着かないな…
金持ちとかホントにこんな状態なのかな…
それはともかく、残りのクラスメイトは、二つの仕事を分担している。片方が調理班、もう片方が雑務全般。
「はーい、こちら二時間待ちでーす」
「ええ、大丈夫です。学園祭が終わるまでは開店してますから」
各種クレームに対応していて、かなり忙しそうにしている雑務班。
なんか朝より列が長くなってね？

そう思いながら、接客の合間にひょいっと教室から顔を出す。
教室の前をほぼ埋め尽くす人。その人の山に対応しているクラスメイトには、頭が上がらない気がする。

「あ！奥村くんだ！！」

やば、見つかった

そう思ってたら、すぐにクラスメイトが飛んできて、教室内に押し込める。

「こらー、出るなって言ったでしょー！」
「混乱度合いがあがるの！」
「お楽しみは最後まで取っておかないとね」

ん？最後のどういうことなの？

「「「いいから戻る！」」」

「あい…」

おとなしく接客に戻る。

「ちょっとそこの執事！」

んー？
振り返ると怜莉。

怜莉は制服を着ていた。

「案内しなさいよ！」

あぁ、客か

「それではお嬢様、こちらへどうぞ」

「…う」

急に切り換えた俊貴にドキッとする怜莉。

「…？どうかなさいましたか？お嬢様」

「な、何よ！そのしゃべり方は…」

「ルールなんだよ」

「…ま、まぁ、ルールなら仕方ないわね」

何かぶつぶつ言い始めた怜莉を、空いてるテーブルに案内する。

「ご注文は何になさいますか？お嬢様」

「そ、そうね…」

俊貴がもっているメニューを凝視する怜莉。メニューをお嬢様に持たせる訳にはいかないらしい。だから、接客班が手に持って見せている。

「ねぇ、『執事にご褒美セット』って何？」

…それを選ぶか

「当店おすすめのケーキセットはいかがですか？」

「こら、答えなさいよ」

「…あんた絡みね」

「お戯れを、お嬢様」

笑顔が引きつってるのが自分でわかる

「あたしはお嬢様よ？言うこと聞くのが執事でしょ？『執事にご褒美セット』ひとつ」

ジッと見てくる怜莉に、こりゃごまかせねぇや。と思い復唱する。

「『執事にご褒美セット』が1つですね。それでは、少々お待ちくださいませ」

丁寧にお辞儀をして怜莉から立ち去る。

ちなみにオーダーは、ブローチ形マイクから音声で通じているためオーダーキッチンに通す必要がない。ここらへんのこだわりはさすが女子。

「はい、どうぞ」

キッチンに来た俊貴に、すぐセットが渡される。アイスハーブティーと冷やしたポッキーのセットで、値段は三〇〇円。

「お待たせしました、お嬢様」

「ふん、早いわね」

ってか、妙になれてる気がするのは気のせいか？

「では、失礼します」

「え？」

俊貴が怜莉の正面に座る。

「な、何で座ってんのよ…。べ、別にいいけど」

「では、ご説明させていただきます」

「うん」

「簡単です。執事に食べさせられるセットがこのセットとなっております…」

それを聞いた怜莉が赤くなる。

「な、何よ、そのセット…。お金取ってお菓子あげるなんて…」

「キャンセルはできませんよ、お嬢様」

「いや、でも、まぁ、注文した以上は…」

「お嬢様。強要はしません。やりたくなければやらなくても大丈夫ですよ。そのときはオレも戻りますが」

「へ、へぇ。じゃあ、なんかもったいないし、せっかくだからご褒美あげようかしらね」

…やりたくないんじゃないのか

ぎこちなく怜莉は一本のポッキーを手に取り、俊貴の方に先端を向ける。

「は、はい…ご、ご褒美」

上目遣いで赤くなりながら見てくる怜莉。

「じゃ、じゃあ、…あーん…」

「あーん」

ぱきっと弾ける音が口の中に響く。

「た、食べさせたんだから、あたしも…」

「お嬢様、当店ではそういうサービスは行っておりません」

言いよどむ怜莉に割って入ってきたのは、シャル。笑顔なのだが微妙に不機嫌。

「そ、そうなんだ。わかったわ」

「…」

「あの、シャル?三番テーブルが注文待ってるよ」

ニコッと笑って、シャルは身を翻して行ってしまう。

「な、何か不機嫌そう…」

「さ、さあ?」

怜莉は赤くなったままポッキーをコリコリ食べてる。何かその様子はなんだか可愛く感じる。

「怜莉。なんか可愛いな」

「ぶーっ!」

飲んでたアイスティーを吹き出す怜莉。そしてむせる。

「だ、大丈夫?」

ポケットからハンカチを取りだし怜莉の口を拭く俊貴。

「あ、ありがと…」

もじもじしながら怜莉がいう。

「はいはい、お客さんが待ってるから急いでね。俊貴くん」

「なぁ!?た、楯無さん?何故その格好…」

いつのまにかメイド服を着こんだ楯無。

「さて、私もお茶しようかしら」

「接客しないんですか」

「うん」

「…まぁいいや」

はぁ、とため息をつく俊貴。

「どうもー、新聞部です。話題の奥村執事を取材に来ましたー」

新聞部の黛薫子。何かあるたびに写真を撮りに来るため顔馴染み。

「あ、薫子ちゃんだ。やっほー」

「わあ!たっちゃんじゃん!メイド服も似合うねぇ!あ、奥村くんとツーショットちょうだい」

言いながら、シャッターを何度も切ってる。楯無はノリノリでポーズまでとってる。

「…帰る」

「ん?来てくれてありがとな」

「ん」

手を振って一組から出ていった。

「あ！良いこと思い付いた！！」

楯無が扇子を開く。

そして、その扇子を使って薫子に耳打ちをする。

「おぉ！それはいいね！」

ピキーン

…はい、あの人の悪のりが始まったか

「はい、メイドさんしゅーごー！」

楯無が手の空いてるメイドを終結させて何かを話している。

そして、俊貴の方へと一斉に振り向く。

「奥村くーん。ちょっと私たちと奥に行こっか」

そう言った瞬間に、俊貴の周りを囲む。

「な、なんで？」

苦笑いする。嫌な予感しかしない

「いいから、いいから」

俊貴を無理矢理引っ張り奥へと連れていく。

「あ、あの楯無先輩。今俊貴を連れてかれると…」

シャルが困った顔で言う。

「いいから、いいから。代わりに私手伝うし」

ニコッと笑う楯無。

・・・・・・・・・・・・

「…どうしてこうなった」

俊貴が鏡を見ながら呆然としている。

俊貴の格好は執事ではなく、メイド服。
頭にはかつらを着けている。

ってか、着てるときに気づけよ…

と、頭を抱える俊貴。
無駄に似合っているため、自分でも驚くが引く。

「奥村くーん！着替えたら早くしてねー。お客さん一杯だよ！」

「くっ…！行くしかないのか！？」

どうする！これはキツい！…だが、このままだとクラスメイトが…

「ええい！着てしまったんだ！覚悟を決めろ！！」

そういって、俊貴が控え室から出ていく。

「わあぁー！」

「すごーい！似合ってるー！」

「これはズルい！」

「ってかヤバイ！！」

クラスに出た瞬間に黄色い声が飛び交う。

「前からもしかして、と思ってたけどここまでとはねぇ」

楯無がぐるぐる俊貴の周りを回る。

パシャパシャと音を立ててシャッターを切りまくる薫子。

「んー♪男の子にしとくのが勿体ないなぁ」

俊貴に飛び付く楯無。

「ちょっ、離れてくださいよ！」

「と、俊貴…なの？」

「へ？」

楯無を離しながら、呼ばれた方を向く。

そこにはシャルが呆然と俊貴を見ている。そのとなりにセシリアとラウラ。

「お、女の子みたい…」

呆然と見ているシャルが呟く。

「……くぅ、死にたい…」

恥ずかしすぎて顔が赤くなるのがわかる。

「す、素晴らしいですわ！」

セシリアが、何故かつやつやしてる。

「わ、私の嫁が……。だが、これはこれで…」

うんうん、と頷くラウラ。

「く…、くそー！」

俊貴が走って教室から出ていってしまった。

「あ、ちょっと、俊貴！」

シャルの手はむなしく空をつかむ。

「…やり過ぎちゃった」

てへっと笑う楯無。

「ど、ど、どうするんですの！？このお客さん達を！」

事態に気づいたセシリアが慌て始めた。
俊貴のお客さんはともかく、普通に来てるお客さんも少なくない。

「まあまあ、私も手伝うからさ」

楯無がセシリアをなだめて、再び喫茶店を再開しだす。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

俊貴がとぼとぼと廊下を歩いている。
メイド服を着させられて、気になってる子にそれを見られ恥ずかしさのあまり教室を飛び出した。
メイド服のままで。

「…思わず飛び出してきたけど、大丈夫かな？」

周りから送られる視線に気づかない俊貴。

「……あ、この格好のままだった」

そして、ふと足元に視線を向けた時に気づく。メイド服だったことに今ごろ。

うあぁ！オレとしたことがこのまま出て…

そこで、ハッとした。

周りから熱っぽい視線が自分に向けられている事に気づく。

「わあ！あなた何組の子？」

「すごく可愛い！」

とか、何か言いながら俊貴の周りに生徒達が集まってきた。

うわわ……か、囲まれた

ど、どうしよう

「あ！ここにいたんだ。さ、行くよ」

その群衆を掻き分けて、金髪のメイドさんが俊貴の腕を取りその場から去っていく。

「た、助かったよ。シャル」

ホッとしてシャルに微笑む。

「えへへ。でも、その格好で出てっちゃうからあわてて追いかけてきたんだよ」

シャルがニコニコしながら言う。

「俊貴。先輩がこのまま休憩行っていいっていってくれたから、どっか回ろうよ」

「そだね、一緒に回ろっか」

「うん！」

ギュッと腕をしっかり組んでくるシャル。

「ね、ねぇ俊貴。この服、どうかな?変じゃないかな?」

上目遣いで聞いてくるシャル。

「バッチリ似合ってるよ」

「ほ、本当!?燕尾服より似合ってるかな?」

「メイド服のが似合うだろ。スカートで可愛いし」

そういって、頭を撫でる。

「か、かわいい…」

「うん、かわいい」

「そ、そっかぁ。可愛いかぁ。えへへ♪」

やたらと機嫌がいいな。すごい笑顔だし

端から見たら女子二人が腕をくんで仲良さげに歩いているだけにしか見えない。

だが、そこには違和感がある。俊貴の背が女子よりも高い。そして、歩き方が女の子っぽくない。最後に何か見たことある気がする。

「さて、どこいこうか?」

「行きたいところがあるんだ」

「そうなん？じゃあ、そこ行こっか」

「うん！」

シャルが嬉しそうに俊貴の腕を引っ張って目的地へと向かう。

・・・・・・・・・・・・

「料理部？」

「うん。日本の料理を作ってるんだって。せっかくだから、作れるようになりたいなぁって」

「シャル、料理上手いからな」

お弁当を何回か食べさせてもらって、その味が俊貴好みだった。
そんなシャルが作る日本料理。食べたいに決まってる！

「う、うん。じゃあ、また今度作ってあげるね」

「やったね、ありがとう」

ニコニコ顔の俊貴とシャルが調理室に入った。

「おお…これすご…」

お惣菜販売なのだが、その数がすごい。
大皿に、肉じゃがや和え物、煮物、焼き物等が豊富に並んでいる。

「あ、これが肉じゃが？」

「そうだよ。昔は女性の必須スキルだったらしいよ」

「ふうん、どうして？」

「肉じゃががうまい女と結婚しろって風習だったらしい。何でだろうね」

「け、結婚…！？そ、そうなんだ…」

シャルは俊貴の言葉が以外だったのか、ビックリしたあとで肉じゃがをじーっと眺めている。

そこへ、料理部の部長らしい人が俊貴達の前にやってきた。

「お！一度は男子だったと噂のデュノアくんだ！それと、…君は見たことある気がするなぁ…」

「ど、どうも」

「あ、あはは」

俊貴の苦笑い。

「あー！わかった！！奥村くんだ！！そうでしょ？」

嬉しそうな部長。

「えーと、まぁそうです」

周りの視線を感じながら答える俊貴。

「どうしたのー？二人でデート？メイド同士で禁断の逢い引き？っていってもミンチじゃないわよ？合挽だけに！なんちゃって」

！こ、この人すごいよ！！この人と仲良くやれそう！！

合挽と逢い引き。なるほど、なるほど

「俊貴、つまんないこと考えてたでしょ」

…なぜばれたし

…ならエロいこと考えてやる！これなら…

「……俊貴のえっち」

赤くなりながら俊貴の腕をちみきるシャル。

ど、どういうことなの！？

「よくわかんないけど、食べていってよ。特別にただでいいから。その代わり、写真撮らせてー」

「い、いえ、ちゃんとお支払いします」

うん、さすがシャル。

「じゃあ、えっと、肉じゃがいただけますか？」

「はーい、どうぞ」

俊貴とシャルに肉じゃがを盛った小皿を渡す。

「おお、これはうまい」

「おいしいね、俊貴」

「うん、うまいうまい」

良い煮付けだぁ、ご飯が欲しくなる

「これねー。圧力鍋使って作ってるのよ。時間短縮だけじゃなくて、味付けも決まるからさぁ」

美味しく食べてるシャルが、部長の話に耳をたてる。

「圧力鍋…、ほ、他には何かコツとかあるんですか？」

「ふっふっふっー。これ以上は秘密よ。知りたかったらうちに入部してね」

「料理部かぁ…。と、俊貴はさ、僕の料理が美味しいと嬉しい？」

「嬉しい！上手いものを食べれるってのは大事だな」

「そう。そうなんだ。そっかぁ……えへへ」

あれ？にこにこしながら肉じゃがを食べ始めたぞ

「ぐぬぬ、見せつけてくれるね！おふたりさん」

「？」

「えへへ」

部長の羨ましそうな顔に、俊貴はキョトン。シャルは、えへへと笑う。

・・・・・・・・・・・・

教室に戻ってきた二人。

相変わらずの盛況ぶりで、またしても戻るなり引っ張りだこになる。

まぁ、休んだし、みんな頑張ってるから嫌なきはしないよな

オレももっと仕事するか！

「じゃじゃーん、楯無おねーさんの登場です」

「…」

職場放棄人間が現れた！

選択肢は二つ。

逃げる

逃げる

逃げるしかない！

「だが、逃げられない！」

「なん、だと！？回り込まれた！！？」

「…俊貴」

「…あい」

そのやりとりを見てたシャルがジト目で見てくる。

「ときに俊貴くん。君の教室手伝ってあげたんだから、生徒会の出し物に協力しなさい」

「…命令形」

「うん。決定だもの」

「オレの意思は…」

「勝手に決定してもいいじゃない。生徒会長だもの」

どこの詩人だ…

「で、何を手伝うんですか?」

「あら、抵抗しないの?」

「無駄な事はわかってますから」

「あら、おねーさんのことわかったつもり?まだまだダメよ、俊貴くん」

つんと鼻先を押される。

「で、出し物は？」

「演劇よ」

「えんげき…」

思ったより普通だな

「観客参加型演習」

「へぇー。……は？」

「とにかく、おねーさんと一緒に来なさい。はい、決定」

「あのー、先輩？俊貴を連れてかれると、困るんですけど…」

おお、シャル！そうだ、もっと言ってくれ！

「シャルロットちゃん、あなたも来なさい」

「ふえ！？」

「おねーさんがきれーなドレス着せてあげるわよー？」

「ど、ドレス…」

あぁ…、シャルが揺らいでる…シャル！

「じゃ、じゃあ…ちょっとだけ」

シャルー…

「んー。素直で可愛い！じゃあ、セシリアちゃんとラウラちゃんと怜莉ちゃんもゴーね」

「「「はっ！？」」」

三人が同時に驚きの声をあげた。ってか、また来たのか怜莉…

「全員、ドレス着せてあげるから」

「まぁ、付き合っても…」
「ふ、ふん。仕方がないな…」
「そ、それなら…」

三人とも陥落。

「ちなみに、演目って何なんですか？」

「ふふん」

ばっと扇子を開く楯無。

「シンデレラよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「俊貴くん、ちゃんと着たー？」

「…」

「あけるわよ」

「開けてから言うのはネタですか？」

「なんだ、ちゃんと着てるじゃない。おねーさんがっかり」

「…なんでさ」

王子さまの格好の俊貴がため息をつく。

「はい、王冠」

「はぁ…」

「なによ、嬉しそうじゃないわね。シンデレラ役の方がよかった？メイド服似合ってたしねぇ」

くっ…！まだそれを言うか…

「嫌に決まってんでしょ！」

「さて、そろそろはじまるわよ」

観客満席。時折聞こえる歓声が更衣室まで届く。

「台本もらってないけどどうすれば？」

「大丈夫、こっちかアナウンスするから、その通りに進めてくれればいいわ。台詞はアドリブね」

…適当すぎないか

「さあ、幕開けよ！」

ブザーが鳴り響き、照明が落ちる。

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

お、普通だ。シンデレラは誰かな？シャルかな？？

そんなことを考えながら、舞踏会エリアへと向かう。

「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰塵を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士達。彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」

……早速違うんかい！！

ちくしょー！まともなの始めだけかよ！！

「今宵もまた、血に餓えたシンデレラたちの夜がはじまる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

「な、なぁ！？」

「おりゃあぁぁ！」

いきなりの叫び声とともに現れたのは、白地に銀のあしらいが美しいシンデレラ・ドレスを、身に纏った怜莉だった。

「おっと!?」

「よこしなさいよ!」

さっとよけた俊貴をキッと睨んでから、すぐさまナイフを飛ばしてくる。

な、何てものを!?

「あ、当たったらどうすんだ!」

「死なせはしないわ!動けなくはするけど!!」

「い、意味がわからん!」

くそっ!発動するしかない!!

俊貴の目が金色に変わる。無駄な能力の使い方。

テーブルをひっくり返し、その上に乗っていたトレーで凌ぐ。

「うりゃあ!」

ナイフの刺さったトレーを飛び蹴り上げで吹き飛ばす怜莉。

バカ!パンツが見え…、スパッツ……

ホッとしたような残念なような

「うおっ！ガラスの靴！？」

ガラスの靴での踵落としが俊貴の前を通り過ぎた。

「これ、強化ガラスよ」

「っつ…」

怜莉と格闘戦を繰り広げていると、ふと赤いレーザーポインターに気づく。

次の瞬間、俊貴の横の物が吹き飛んだ。

「セシリアか…！」

サイレンサー付きで、セシリアの位置が特定しづらい。

「や、ヤバイ！」

連射性も良いようで、何故か狙われる王冠をかばう俊貴。

身を低くして遮蔽物に駆け込む。

「ここももうもたない…」

セシリアの狙撃によりセットが破壊されていく。

やむなく舞台の方にでると、観客席から拍手と声援があがる。

「あ、どうも」

ペコペコ律儀にお辞儀する。

その隙を逃さずセシリアの狙撃が襲いかかってくる。

すぐ走りだし、ステージを移動。

「くっ、行き止まり！？」

ここに誘い込むための罠か…

「だが、これぐらいでぇ！！」

目の前の壁を三角飛びの用量で蹴り、向きを変えて走り出す。

それを見て、おおー！と歓声があがる。

「王冠は私が頂く」

二刀流のナイフを持ったラウラが急に現れた。

「くっ！」

横に回避して、ラウラの斬撃をやりすごし、前を向く。

レーザーポインターが俊貴の額の位置に泳いでいる。

「し、しまっ」

突然、俊貴の前に現れたシャル。手には対弾シールドを持っている。
それのおかげで、弾丸を防ぐ。

「しゃ、シャル、助かった…」

「ねぇ、俊貴」

「ん？」

シャルが弾丸を防ぎながら俊貴の方を向く。

「その、王冠をくれたら嬉しいなぁ…」

「へ？いいよ」

王冠に手をかけてシャルの頭に置く俊貴。

「あ…。や、やったぁ！ありがとう、俊貴！！」

シールドを投げ捨てて俊貴に抱きつくシャル。

「ふえぇ！？」

いきなり抱きつかれて驚き、心臓がバクバクの俊貴。

えっと…どういうことなの！？

「おっと！観客の皆様が参加する前に決着が着いてしまった！！」

ぶーぶーと観客からブーイング。

な、なんだ？

「王冠をゲットしたシャルロットちゃんに、同室同居の権利が与えられましたー！」

「え、えええー！？」

どうやら、楯無の会長権限の濫用のせいだ。

「えへへ、また同室だね」

シャルが頬を赤く染めていってくる。

「あ、えっと、そう、だね…」

なんという事を…

まさか、オレに内緒でこんなことが…

「くっ、またシャルロットが同室に…」

「きー！悔しいですわ！！」

「私に渡しなさいよ！」

と、参加した三人が悔しがっている。

「あ、あははは…」

苦笑いする俊貴。

学園祭！（後書き）

こんにちわ！

昨日更新するの忘れてました。ごめんなさい。

さて、今回は学園祭。
次はオータムさんですね。

亡国機業、襲来

学園祭の演劇が終了し、俊貴は着替えのために更衣室にいた。
生徒会主催のバトルロワイヤルシンデレラ。なんか色々ありすぎて疲れた。

「つ、疲れた…」

「あら、あなた…」

急に更衣室のドアが開き、一人の女性が入ってきた。

「ん？」

俊貴が振り返りその女性を見た。

「おい、やっと見つけたぞ！このクソが！」

ニヤリと笑いながら近づいてくる女性。
その笑みは綺麗だが、何か冷たい感じのする表情。

「さて、ＩＳを頂こうか？」

そういって、俊貴の腹めがけて脚で蹴りをいれる。

「…っ！な、なんなんだ、あんたは」

腹に当たる前に足を手で受け止める俊貴。その力の強さに腕がプル

プルする。

「‘亡国機業’のオータム様を知らねぇのか！このクソガキが！！」

そう言った瞬間、スーツを引き裂き、女の背後から鋭利な爪が八つ飛び出す。

「ＩＳか！？」

足を離して後ろへと跳ぶ。

「ちっ…」

距離をとった俊貴もＩＳを展開。

「待ってたぜ、それを使うのをよぉ」

蛇のような笑みを浮かべるオータム。

「くらえ！」

背中から伸びた八つの装甲脚の先端が割れて銃口を見せる。

そこから放たれた実弾を急上昇してかわす。

その間に、オータムは完全にＩＳを展開。同時に脚の銃口から実弾を放つ。

それを今度は急降下でかわす。

そのまま俊貴は刀を取りだしオータムへと突っ込む。

「甘ぇ！」

「なっ！？」

八本の装甲脚が俊貴の刀を挟み込んで受け止める。

「でもっ！」

俊貴が腰の電磁砲を至近距離で放つ。

「ぐぅ！」

電磁砲を思いっきり受けたオータムはロッカーを吹き飛ばしながら地面に衝突する。

「ハハハ！やるじゃねぇかよ、クソがき！この‘アラクネ’相手にちょこまかと！あまつさえ傷をつけるなんてなぁ！！」

手にはマシンガンが握られており、俊貴に向かって連射する。

「ち…」

その弾丸をビームシールドで防ぐ。腕に連続で衝撃がかかる。

「あんたは何が目的なんだ！」

横へ移動して、ビームピストルを構えて放つ。

「お前のＩＳを奪いにきたんだよ！」

ビームの弾幕をしなやかな動きで回避していく。

あの脚がその動きを可能にしてるのか…

なんとか動きを先読みして…

ふと周りのロッカーに目をつける俊貴。

ロッカー…か

「おら！止まってるなんて余裕だなぁ！」

オータムが再びマシンガンを連射する。

スッと俊貴はロッカーを盾にしてその弾丸を防ぐ。

「ちっ！出てこいやぁ！！」

ロッカーへと突っ込むオータム。

「なにぃ！？」

その突っ込んだオータムに向けて、無数のロッカーが飛んでくる。

俊貴がロッカーを後ろから蹴り飛ばしていた。

「うっとうしい！」

飛んでくるロッカーを弾きながら文句を言う。

「!?」

そのロッカーの中に何個か弾いた感触がない物があった。

「はあぁぁ!」

「!いつのまに」

真後ろに現れた俊貴は刀を振り抜く。

「無駄だ!」

再び俊貴の刀を挟み込んで受け止める。

「ハハハ!貰ったぜ!」

俊貴を地面に叩きつけ、エネルギー・ワイヤーで構成された塊を俊貴に放つ。

「これはっ…!」

俊貴に当たり巨大な網となり、全身を縛り付ける。

「さて、お楽しみタイムと行こうぜ」

網から抜け出そうとする俊貴に、にやにやと笑みを浮かべたオータムが近づいてきた。

その手には、見たことない四本脚の装置を持ち、俊貴の胸元に取り付ける。

「うあああああああっ！！」

俊貴の体に電流が流れる。

体を引き裂かれそうな激痛。

俊貴が苦しんでる間にもオータムは楽しそうに笑っている。

「さて、終わりだな」

電流が収まり、装置が外れて、網からも解放される。

「てめぇぇ！」

俊貴が殴りかかろうとした。

「当たらねぇよ、クソガキ！ＩＳのないお前じゃなぁ！」

逆に腹を殴られ、ロッカーに打ち付けられる。

…し、不知火！

その痛みを感じて、不知火が解除されてることに気づく。

「不知火！おい！」

不知火の装甲すべてが無くなり、制服だけが残された俊貴。

「へっへっ、おまえの大事なＩＳはここにあるぜ」

「な、何でっ！？」

オータムがひし形立体の黒いクリスタルを持っている。それは不知火のコア。第二形態の証として、球形コアよりも強く輝いている。

「さっきのは‘剥離剤（リムーバー）’っつうんだよ！ＩＳを強制解除できるっつー秘密兵器だぜ？生きてるうちに見れてよかったなぁ！」

オータムが俊貴を蹴る。

「うぐっ…」

低く呻く俊貴。

ーって

……何か聞こえた

何か聞こえた気がした俊貴の腹をまた蹴りつける。

ー望みを願って

今度はそうはっきりと聞こえた。

望みを願う…

「じゃあなぁ、クソガキ。お前には用がないから、死んどけ」

ニヤッと笑うオータム。

「く…」

何か手は無いかと頭を回転させる俊貴。

そこへ、ふいにドアが開き声が聞こえてきた。

「あら、そういうのは困るわ。俊貴くん、私の大事な人なの」

ドアの前に楯無が楽しげに立っている。その手にはやはり扇子を握っている。

「てめぇ、どこから入った?今ここは全システムをロックしてんだぞ。……まぁいい。お前も殺す」

「楯無さん!!」

先に楯無を消そうと決めたのか、オータムは楯無に襲いかかる。

「私はこの学園の生徒達の長。ゆえに、そのように振る舞うのよ」

「はぁ?何言ってやがんだ、てめぇ!」

オータムの装甲脚が楯無を貫いた。

「っ!た、楯無さん!!」

「てめぇ!!楯無さんを……よくもおぉ!!!」

ぶちギレる俊貴。目の色が金に変わり、オータムに向かって走り出

す。

「まぁまぁ。落ち着いてね、俊貴くん」

装甲脚に貫かれた楯無が、余裕の表情を崩さずに俊貴に笑う。

「！」

言われて気づく。楯無の体から値が流れていないことに。

「なんだ、お前…？手応えがないだと…」

「うふふ」

にこっと微笑み、その姿が崩壊した。

「！？こいつは…水か？」

「ご名答。水で作った偽物よ」

オータムの真後ろから楯無の声が聞こえる。

すぐに振り向いたオータムを、楯無はランスでなぎはらう。

「くっ！」

「あら、浅かったわ。そのＩＳ、なかなかの機動性を持っているのね」

「なんなんだよ、てめぇはよぉ！」

「更識楯無。そして、ＩＳ‘ミステリアス・レイディ’よ。覚えておいてね」

またにこっと微笑む楯無。その身に纏ったＩＳは俊貴の不知火と似ていて、アーマーの面積が全体的に狭く小さい。

俊貴の場合は背中の大型ウィングが、機動力を上げで補っている。

楯無は、それをカバーするように透明の液状のフィールドが形成されていて、まるで水のドレスのようだ。

左右のアクア・クリスタルにより水のヴェールが展開され、大きなマントのように楯無を包み込んでいる。

そして、ランスの表面にも水の螺旋が表面を流れて、ドリルのように回転をはじめた。

「けっ！今ここで殺してやらぁ！」

「なんて悪役発言かしら。これじゃあ私が勝つのは必然ね」

オータムの猛攻を、ひとつのランスですべてを凌ぎきる。

「くそっ！ガキが、調子づくなぁ！」

腰部装甲から二本のカタールを抜いたオータムは、更に攻撃の手を激しくする。

「そんな雑な攻撃じゃ、水はやぶれないわ」

水のヴェールがオータムの攻撃をすべて受け止める。

「俊貴くん。さっきは怒ってくれて嬉しかったよ。でもね、ここはおねーさんに任せて、君は望みを強く願ってなさい」

そういって、オータムの攻撃を捌く楯無。

ー強く願って

…この声、聞いたことある

さっきから脳に響く声をどこかで聞いた気がするけど思い出せない。

でも、今はそれどころじゃない。

楯無さんも願えって言ってる。

願う…

でも、それでいいんだったら都合が良すぎる…

あの兵器を使う意味がないじゃないか

確証はない。そんな都合のいい話聞いたことない。

そんなこと今はいいか

先にアノ女を捕まえることを考える

そのためには、不知火がいる！

不知火を取り戻す！

不知火はきっと応えてくれる。呼べば何度でも！

それに、押されはじめた楯無さんを助けるためにオレは！あの人を

死なせたくない！！

願う！
不知火！オレに力を、楯無さんを救う力をオレに！！

「ぐ…、まだ…まだだ！」

いつのまにか楯無がオータムを圧倒し始めている。

あ、あれ？
思わず力が抜ける

「いいえ、もう終わりよ。ーね、俊貴くん？」

…手伝う必用無さそうじゃん

オータムは嫌な予感がして、後ろを振り向く。そこで見たのは、左腕を掴み、苦笑いしながら意識を集中している俊貴。

まぁいいや、オレは手の届く範囲の人達を守るために！

「来い！不知火！！」

その瞬間、俊貴は光に包まれる。

手の中にコアが召還された。

コアは光の粒子となり、全身を包み不知火を展開する。

「なぁ！？て、てめぇ、一体どうやって…」

「…システムオールグリーン。目標を確認。駆逐する」

両手に刀を取りだしてオータムに突っ込む。

「ぐうぅ！！」

八本の装甲脚を集中させて俊貴の斬撃を頭上で受け止める。
だが、無理矢理押し込み切り裂く。

「な…」

バラバラに砕けた装甲脚を挟んで見えるオータムが驚愕の表情になっている。

「ぐえっ！」

脚のスラスターを全開にした蹴りが、オータムを壁に吹き飛ばす。
その威力が強すぎて、壁の一部が崩れ、向こう側が見えた。

「！俊貴くん、って言うまでもないか」

楯無が俊貴にオータムを拘束させようとしたが、既に俊貴は動いていた。

「く、くそ……ここまでか…」

圧縮空気の音を響かせて、オータムのＩＳが本体から離れる。

「や、やばっ！？」

「俊貴くん！」

光を放ちはじめたため、慌てて楯無しの体を覆って庇う。

そして、大爆発を起こした。

「だ、大丈夫?俊貴くん　」

珍しく呆気にとられている楯無。

「オレは大丈夫です。楯無さんは大丈夫ですか?」

赤い翼の粒子が膜となり爆発から俊貴と楯無を守った。

「おかげさまでね」

にこっと笑う楯無。

「あ、あの女!?」

「逃げられたわ。ＩＳのコアも、おそらく自爆直前に取りだしているわね。装備と装甲だけを爆発させたみたい。それにしても無茶をするわね。失敗すれば自分だって危なかったでしょうに」

意外に真剣な口調の楯無に、いつもと違うギャップを感じてドキッとする。

「あら、今私のこと考えてた?」

にこにこ笑って聞く楯無。

これも気づかれるのか…

「まぁ、そうですね。考えてましたよ。いつもと違う楯無さんを見てちょっとドキッとしただけ……」

なんで正直に答えてんだオレは…

言ってから恥ずかしくなる俊貴。

「うふふ、私を心配して怒ってくれたし、おねーさん嬉しいなぁ」

にこにこな楯無。

ーマスター、すぐ近くの公園でＩＳの反応が二つあります。一つはシュヴァルツェア・レーゲン。もう一つはブルー・ティアーズです。

なんで二人が…

まさかオータムか！

「楯無さん、ちょっと出てきます！」

「あ、ちょっと待って！」

楯無の制止を無私して、ラウラ達の元へと飛んでいく俊貴。

・・・・・・・・・・

『離れて！一機来ますわ！』

「何…？」

オータムを捕らえようとしていたラウラにセシリアがプライベート・チャネルで呼び掛ける。

ラウラがセンサー域を拡大した次の瞬間に、右肩がレーザーで撃ち抜かれた。

「ぐぅっ！？」

急いでラウラは左目の眼帯を外してハイパーセンサー補助システム‘ヴォーダン・オージェ’を発動。

しかし、二発の連続で飛んでくるレーザーを避けるので精一杯だった。

『ラウラさん！下がって！』

全開にしては即座に弾道から飛来位置を割り出し、高速接近する機体へと照準を向ける。

『そんな…まさか！？』

ロングレンジ用ズームに映し出されたのは、セシリアが見たことのある機体だった。

ＢＴ２号機‘サイレント・ゼフィルス’。

セシリアのブルー・ティアーズを基礎データとして使っている。

「何をしている！？セシリア、撃て！」

「くっ…！」

すぐにレーザーライフルによる狙撃を試みるが、シールド・ビットを展開されて、有効打にならない。

それならとビットを射出するが、簡単に落とされた。

（あのスピードでこの射撃技術!?それにこの連射速度!）

自分を上回る技量に焦るセシリア。射撃ビットが飛来し、セシリアを超える同時六機制御で窮地に立たされる。

「それなら!」

ミサイル・ビットを自身の真下へと射出、空中で制御動作を取らせて死角から向かわせる。

「なっ!?」

必中を確信したセシリアは、ビームが弧を描いて曲がり、ミサイル・ビットを打ち落とした事に驚愕。

（ＢＴ兵器の高稼働時に可能な偏光制射撃!?そんなこと…）

信じられずにその場で動きが止まるセシリア。

今、操縦者でセシリアがＢＴ適性の最高値のはずだったから。

「何をしている!回避行動を取れ!」

「っ!?」

ラウラがセシリアを突き飛ばす。
そのラウラの元にビットのレーザーが向かう。

「ラウラさん！」

爆音をあげてラウラの周りが爆煙をあげる。

そして風が吹き爆煙が収まる。

「ラウラはやらせない」

「ふん、さすがだな。俊貴」

ラウラに背を向けてビームシールドを展開していた俊貴。

「俊貴さん！」

セシリアが俊貴を見てほっとする。

やはり、俊貴が来てくれると何処かほっと安心する感覚がある。

「……逃げられたか」

俊貴がオータムを連れて飛んでいく襲撃者を見て言う。

追い付けなくはないが、エネルギーもあまりない。

「とりあえず戻ろう。報告もかねて」

俊貴の提案に頷く二人。

ラウラとセシリア、いずれも訪れるであろう嵐の予感を感じていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「というわけなのよ」

「…そういうことだったんですか」

夜、寮の部屋。

最近妙な組織が動き始めていたこと、狙いがオレだったこと、その予防策として同居をしていたこと。

そして、更識家は裏の実行部隊、対暗部用暗部らしい。

「しかし、これで当面の危機は去ったようだし、私も少しは気が休まるわ」

「部屋替えですか？」

助かるような寂しいような

複雑な心境に陥ってることに気づく。

「ふふふ、しばらくはいるわよ？あの王冠の勝負は無しになっちゃったしね」

楯無が笑う。

王冠のくだりを聞いた織斑先生がその申請を却下した。

それを聞いたシャルはニコニコ顔から絶望的な顔へと変わってしまった。

「部屋を移ったあとも、独り寝が寂しい夜には来てあげましょう」

「はいはい、わかりましたよー」

この人に抵抗するだけ無駄なのはわかってる。

「うふふ、素直でよろしい」

「はいはい、今日は疲れたしもう消灯しますよ」

「うむ、ぐっすり寝ましょう」

明かりを落とし、布団の中に入る。

「おやすみ、俊貴くん。ゆっくり休んでね」

そんな楯無の優しい声を聞いて、すぐに眠りに落ちていった。

亡国機業、襲来（後書き）

こんにちわ

オータムさんとエムさん登場です。
エムさんしゃべってないですけどね（汗）

というわけで亡国機業が動き始めました。

二度目は…

「えっ！？俊貴の誕生日って今月なの！？」

「う、うん」

寮での夕食。いつも通りのメンバーで食事をとりながら談笑していたら、突然シャルが大声をあげた。
立ち上がって驚いているシャル。

「い、いつ！？」

「九月の二十四日だよ。ちょっ、ちょっと落ち着けって」

「う、うん」

頷き椅子に座るシャル。

「日曜だよね！？」

な、なんだ？なんでこんな熱心に聞くんだ…

「に、日曜だね」

「そっか…。うん、そうだよね、うん」

頷くシャルを不思議そうに眺めてたら、セシリアが話しかけてきた。

「俊貴さん、そういう大事なことはもっと早く教えてくださらない

と困りますわ」

「は？あ、えっとごめん…？」

あれ？謝るところだったっけ？

「とにかく、二十四日の日曜日ですわね」

セシリアが手帳を取りだして、何かを記入している。

「お前はどうしてそういうことを黙っているのだ」

シャルの隣でラウラが少しムッとした口調で言う。

「大したことじゃないし、いいかなーって」

「それはあくまでお前の意見だろ。私達からしたら最重要事項だ」

腕を組俊貴をジッと見るラウラ。

「ごめん…」

確かにそうだ

オレからしたら大したことなくても、人によっては大事かもしれない

さすがに浅はかだった…

猛烈な勢いで反省しだす俊貴。

「九月二十四日！俊貴さん、予定は空けておいてくださいな！」

「あ、ああ。わかったよ」

「あれ？そういえば、‘キャノンボール・ファスト’って二十四日、だよね？」

シャルがそのことを思い出して言う。

「そうだね」

ＩＳの高速バトルレース‘キャノンボール・ファスト’。国際大会として行われるそれだが、ＩＳ学園のあるこの市では特別イベントとして催される。それに学園生徒は参加することになる。

専用機持ちは有利なため、訓練機と専用機で参加する部門が分かれる。

そして、それのために高機動調整を明日から始める事となる。

基本的に高機動パッケージをインストールする。セシリアとラウラはそのパッケージがあるのだが、鈴はそれが間に合わず、シャルは増設ブースターで対応するらしい。

俊貴と怜莉はパッケージ無しで高機動可能なためつける必要がない。

確かラウラは姉妹機の‘シュヴァルツェア・ツヴァイク’の高機動パッケージを調整して使うって言ってたな。

「ふん、いい顔をするようになったな、新兵」

にやりと笑うラウラ。

「お褒めにあずかり恐悦至極であります、少佐殿」

軽くジョークを言い合う二人。ラウラの性格がわかってきて、俊貴は冗談じみた言葉を返す。

最近まで楯無のことでご機嫌斜めだったラウラは、楽しそうに笑う。

こうやって笑ってるとかわいいのにな

そう思いながらラウラを見る。

「…」

「うっ…」

シャルが俊貴の脛を蹴った。

「そうだ、久しぶりに全力演習を行うか。明日の放課後、十六：〇〇より第二アリーナで実戦訓練を行う。いいな」

「了解」

「ふふん、明日は新式装備も披露してやる。今までの様にはいかんぞ」

そういって、ラウラはマカロニをフォークの先端に通す。

すっかり癖になってしまってるようだ。

「身のある訓練を期待しよう」

マカ

「マカロニだけに」

「なんて言わないよね？」

シャルに先読みされた。

「まさか！」

アハハ、と苦笑いする俊貴。

「まー、そんなことはさておき」

そんなこと扱い…

「俊貴、あんた生徒会の貸し出しはまだなわけ？」

「なんか抽選と調整してるって聞いたよ」

「ふーん…」

なんでもなさそうに言う鈴。

学園祭の催し物で一番投票が多かったのは生徒会のシンデレラだった。観客の入りは凄かったが、どうやら観客はあのバトルロワイヤルに参加する予定だったらしい。参加する代わりに生徒会に投票するというのが条件だった。ただ、観客が参加する前にシャルに王冠が渡ると言うハプニングのせいでブーイングがでたが、俊貴を各部に派遣するということでブーイングはやんだ。

おかげで、俊貴は生徒会副会長の役職につき、部活に駆り出されるはめになった。

「あ、そういえばみんな部活に入ったんだよね？」

そんなことを前に聞いた。ちょうどいいし確かめとこ

「鈴は？」

「ら、ラクロスよ」

「へえ！ラクロスか、似合いそうだね」

棒を振り回す辺りが特にね。

「ま、まあね」

「で、セシリアは？」

「わたくしは英国が生んだスポーツ、テニス部ですわ」

「へえ。もしかしてイギリスにいたときからやってた？」

「その通りですわ。よろしければ一緒にいかがですか？」

「いいよ。オレもやったことあるしその内やろう」

「ええ！」

にっこりと微笑むセシリア。

「じゃあ、シャルは？」

「えっ、僕！？」

「うん、なに部に入ったん？」

「え、えっと、その…」

「ん？」

何故か言いにくそうにしているシャル。もじもじと指をもてあそんで、時折俊貴を窺うように上目遣いで見つめてくる。

「…、料理部か？」

もしかして、と聞いてみる俊貴。

「！…そ、そうだよ」

（学園祭の時のこと、覚えててくれたんだ…）

嬉しくてつい顔が緩む。

「おお！やっぱり！！一緒に回ってやけに食いついてたからもしかして、と思ってたんだ。へぇ、そっか。料理部かぁ」

「う、うん。日本の料理も覚えたくて」

「なるほどね。なんか作れるようになったらぜひ一度食べさせてくれ」

「う、うん！もちろんだよ！」

シャルはそういって力強く頷く。

「ちなみに私は茶道部だ」

そう言ったラウラ。

「茶道部か。ラウラ、日本文化好きだよなぁ。…ってか、茶道部の顧問てたしか…」

「うむ、織斑先生だな」

だよねー

てっきり運動部かと思ってたけど、意外に茶道部だった。

「そういや、ラウラは正座平気だったね」

「うむ、あの程度の痺れなど、拷問に比べれば容易い」

拷問と比べんなよ…

「でも、ラウラの着物姿か…見てみたいかも」

「な、なに？そうか……、いいだろう…機会があれば、な」

意外に似合いそうな気がしてきた。

「い、一着ぐらいはあるといいかもしれんな…。今度買うとしよう…」

「ん？わざわざ買うのか？」

「気にするな。今後、使う機会がないともいえないことだしな」

「そっか。…着物なら初詣のときとかいいな。あ、でも皆は国に帰るのか？」

「い、いや。日本にいるとしよう。…お前がいることだしな」

「僕も残るよ」

シャル。

「で、でしたらわたくしも！」

「まぁ、帰国しても面白いことないしね」

セシリア、鈴と続く。

「じゃあ、また神社に行こうか」

「「「また？」」」

「あ…！」

ラウラ、セシリア、鈴が聞き返し、シャルが慌てる。

「俊貴！夏休みに何してたか言いなさいよ！」
「俊貴さん！シャルロットさんとそのような…見損ないましたわ！」
「私に隠れてコソコソと…許せんな」

ガタッと音をたてて三人が立ち上がる。

「べ、別にやましいことは何もないぞ！？な、なあ、シャル！」

「…そこまで否定しなくても…」

「は？」

しゅんとしてしまったシャル。

「あ…、えっと…その…ごめん」

思わず謝る俊貴。

「謝ったってことは何かあったわけ！？」
「説明を要求しますわ！」
「貴様には一度体に教えないといかんようだな」

あ、オワッタ…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ひどい目にあった…」

三人からの詰問地獄から解放され、へとへとになって自室に戻る俊貴。

「おかえりなさーい。あ、お邪魔してるわよ」

「…」

ガン、と壁に頭をぶつける俊貴。
鍵の意味をなさないな、この部屋の鍵は。

楯無がベッドに寝転がってファッション雑誌を読んでる。

「おぉふ…」

な、なんて格好だ…

「どうしたの?あ、もしかしてパンツ覗こうとしてる?」

「スカートで足ぱたぱたしたら、見えちゃうじゃないですか!」

「ふーん、見たんだ?」

「…」

「問題です。楯無おねーさんの下着の色は?」

「…ピンク色でした」

「あは、えっちぃ」

…何て人だ

部屋に来てはこの調子。からかわれまくっている。

「さて、今日は真面目な話があるの」

「…亡国機業、ですか？」

「そう。非公式な情報だけど、アメリカのＩＳ保有基地が襲撃されたらしいわ」

「…もしかして、永久凍結された銀の福音が？」

「おそらくね。でも撃退できたらしいわ。俊貴くんも気を付けてね」

「二度も同じ手にはかかりませんよ」

「よろしい。男の子はそうでなくちゃね。私が惚れちゃうくらいいい男になってね」

「あはは、それは難しいですよ…」

理想高そうだし、実家も名家だって聞いた。
どんな相手だと釣り合いがとれるんだろう…

「あら、おねーさんの心配？大丈夫よ。私だってただの女なんだから、収まるところに収まるものよ」

「？」

「案外、俊貴君を好きになったりしてね」

「あはは、まさか」

苦笑いしかできね

「あー、なによその反応。傷つくわねぇ」

「いや、だってオレなんかを好きになっても…」

「あら、自分の魅力に気づいてないのはいけないわね。おねーさんがおしえてあげよっか？」

「…い、いえ。遠慮しときます」

「まあまあ、今一番おねーさんを惑わせてるのは君なんだよ？」

くすっと笑って俊貴に近づいてくる楯無。

「…」

思わず生唾を飲む俊貴。

ま、まずい

楯無さんのペースに飲まれてる…

このままでは

楯無の顔が俊貴の顔に近づいてくる。

その時、ドアをノックする音がした。

「俊貴、ちょっといい？」

ノックの後に聞こえてきた声はシャルのものだった。

…！し、シャル！？

こ、この状況は…

慌てて楯無から離れて、シャルを出迎えようとドアに向かう。

「い、いらっしゃい」

ぎこちなくドアを開ける俊貴。

「え、えと、お邪魔します」

「いらっしゃーい」

「え…」

微笑を浮かべる楯無を見て、シャルが固まる。微妙に楯無の頬が赤い気がする。

キョトンとした顔が、だんだんと恐ろしい無表情となっていく。

「俊貴、何してたの…？」

「えっと…、ざ、雑談」

「ふうん…。じゃあ僕を出迎えたのは何で？」

「何でって……、シャル、怒ってる？」

「どうして?そんなことないよ。僕は全然怒ってないよ」

…血管が浮かんでますよシャルさん…炎も見える…

「じゃあ私はそろそろ帰るわね。シャルロットちゃん、ごゆっくりー」

「はい」

なん、だと!?この空気をそのままにして何処かに行くのか…

「あ、忘れ物ー」

トタトタ、と俊貴の前に戻ってきた楯無。

「ん♪」

「…んなっ!?」

「なっ!!!」

俊貴の頬にキスをした楯無。キスされて呆然とする俊貴と、さらに激しく炎を燃やすシャル。

「んふ、負けないよ。シャルロットちゃん」

シャルに聞こえる声でそういって、部屋から出ていった楯無。

「えーと…」

「…」

俊貴とシャルの間に沈黙が横たわる。

「と、とりあえず座りなよ。な、なんならお茶いれるよ？」

「うん。でもお茶はいいや」

「そ、そっか」

気まずそうに俊貴がベッドに腰を下ろしたら、シャルは正面でなく隣に座ってきた。

…お？

「あ、あー…」

「なに？」

「ん……。なんでもない」

いつもと違い、すぐ隣からシャルの澄んだ声が聞こえる。

やましいことはないのだが、さっきのキスのせいで思わず黙ってしまう。

「…」

どうする、どうすればいい…

この状況をどうやって抜け出そうか、頭をフル回転させる。

無意識にベッドにあぐらをかく。

「俊貴」

「へ？」

不意に名前を呼ばれてシャルの方を見ると、何処か決心したような顔をしているシャル。

「動かないでよ」

「う、うん…」

な、何する気だ…

言われた通りそのままの体勢で固まる俊貴。

シャルは立ち上がり、俊貴の顔を一度見てから、ちょこんと俊貴のあぐらの上に座る。

「…え？」

俊貴は自分の膝の上に座ったシャルに驚き、頭の回転が止まる。

シャンプーの良い匂いが俊貴を襲い、状況を理解した。

「しゃ、シャル！？」

足に伝わる柔らかい感触が俊貴を焦らせる。

「俊貴が楯無さんとばっかり仲良くしてるからだよ」

「…そっか、ごめんな」

そういって、俊貴はシャルの頭を撫でる。
寂しかったんだな、よしよし

「…はぁ、まぁいいか」

ため息をつき、俊貴に撫でられるシャル。

「そ、それでさあ、話なんだけど」

今度は急にもじもじとしだすシャル。
ん?と首をかしげて頭から手をおろす。
その手を物足りなさげにシャルが見たが、俊貴は気づいてない。

「その、ほら。前に俊貴にブレスレットもらったじゃない?だから、その、お返しの意味も含めてね、俊貴の誕生日に何かアクセサリーをプレゼントしたいなぁって思うんだけどね。どうかな?」

妙に落ち着かないシャル。けど、ぐぐっと顔を寄せて告げてくる。

うぅ…、あまり動かれるとヤバイよ…。は、反応しかねない…
ってか、顔が近い

「で、でもコレがあるし、あれはオレのお礼なんだけど…」

「じゃ、じゃあ!」

ずずいっと、さらにシャルが俊貴に近寄る。

うわわ！ち、近い…！

「と、時計とか…あると便利だよ？」

左の袖を巻くって、華奢なデザインが可愛いレディース・ウォッチを見せてきた。

「へぇ。その時計、いいね」

「で、でしょ！？その、これ、男性用のデザインもあるから、せっかくならおそろいの…」

「んー…時計見ないけど、この際着けてみるか！」

「ほ、本当！？絶対だよ！や、約束だからね！」

そういって、シャルが小指を差し出す。

ま、またか…

どうやら指切りげんまんがお気に入りらしい。

まぁ断る理由もないし、毎回やってるけど。

「指切りげんまん、ウソついたらクラスター爆弾のーます♪」

！？

「指切った♪」

「…うん」

「えへへ。週末が楽しみだなあ」

俊貴の上で前後に揺れ始めたシャル。

ちょ…！それはダメ！

場所が場所だしそれはまずいよ！！

ベッドの外側の方で膝を抱えて前後に揺れるシャル。俊貴は膝の上からシャルが落ちないように気を使う。

「あ…」

が、シャルが案の定膝の上から床に落ちそうになる。

「くっ…」

シャルの肩を掴み、腰に手を回して自分の方に倒れるようにしたのがなんとか間に合った。

二人は向き合ってベッドの上に抱き合った形で倒れた。

「…」

「…」

二人はなにも喋らない。

何故なら二人の唇が重なって、お互いの口を塞いでいたから。

「「！？」」

二人同時にその事を理解して、固まる。
顔が耳まで赤くなるのを感じる二人。

「あ、あわわ…」

「……」

慌てて唇を放した。
俊貴は恥ずかしさのあまり倒れたまま、シャルは自分の唇に触れる。

「あ、あの……シャル？」

「は、はい！？」

上半身を起こした俊貴がシャルを呼び、慌ててシャルが返事する。

「えっと、そのごめん。わざとじゃないんだけど……えっと…」

「あ、えっと…い、いいの。き、気にしないで…」

シャルは未だに赤くなっているが、両手をぶんぶん振る。

「え、えっと…や、約束守ってね！」

そういって立ち上がり、両手で顔を押さえて部屋を出ていった。

「……やべえ、熱い」

未だにドキドキと早い鼓動と、顔の暑さを感じて手であおぐ。

「…やわらかかった」

手の感触と、唇の感触が生々しく残っている。

「…あちい」

またぱたぱたとあおぎだす俊貴。

二度目は…（後書き）

おはようございます。

もう夏休みに入った人もいるのでしょうか？

オレは卒研で夏休み返上……泣ける…

合間をぬって更新していきます。

（髪、変じゃないよね？もう一回見ておこうかな）

約束の時間の四十五分前に既に到着していたシャルは、そわそわしながら十四回目の前髪チェックを始める。

「ん…」

取り出した手鏡を見ながら、前髪を左右にちょんちょんといじりながら、小さくうなる。

（なんか決まらないなぁ…）

実際、気になるほど差はないが、今日は特別そんな気分のシャル。事故とはいえ、キスをしてからシャルはますます俊貴を気にするようになった。

好きな男の子に百パーセントの自分を見てもらいたい。

（でもさすがに早く来すぎたかなぁ）

手鏡をしまったシャルは右手の時計を確認する。
まだ五分しか経ってない。

（ふぅ…。気合い入りすぎたかな。ちょっとリラックスしよっと）

にこっと笑顔の練習をするシャル。

だが、間の悪いことに、その笑みの先には見るからに遊び人といった風体の男が三人いた。

「ねえねえ。カーノジヨっ」
「今日ヒマ?今ヒマ?どっか行こうよー」
「ねぇ、行こうよー」

蘭を囲んでいたおバカさん三人が、今度はシャルを囲む。
どっかで見たことある、と思いながらため息をつくシャル。

「約束がありますから」

「えー?いいじゃん、いいじゃーん、遊びに行こうよ」

「俺、車向こうに停めてあるからさぁ。どっかパーっと遠くに行こうよ!フランス車のいいところいっぱい教えてあげるから!」

フランス、というところでシャルが反応した。

「日本の公道で燃費の悪いフランス車ですか。ふうん」

拒絶百パーセント、作り笑顔マックスのシャルが吐いた毒に、二人の男がたじろぐ。

可能であれば、ラピッド・スイッチで蜂の巣なのになぁ…

(あーあ、やんなっちゃうなぁ…)

男たちをどうやって撃つか考えて、八回ほど虐殺のイメージをする。

そんなシャルの肩に、何を勘違いしたのか男の一人が手を置こうとした。

「オレの連れに触んな」

「いでででで！？」

シャルに触れられる寸前で、俊貴がその腕を掴む。

まぁ、なんと言うかタイミングがいいのか悪いのか。

「お、おい！離しっ！！」

いきなり現れた俊貴から仲間を助けようとした男が、俊貴に腹を蹴られてぶっ飛ぶ。

楯無の訓練のおかげで、肉弾戦が前よりも上達していた。

「俊貴！」

颯爽と現れた俊貴は、悪の魔の手から自分を守ってくれた！

シャルの瞳には俊貴の横顔がキラキラと光って見えた。

「お、おらぁ！」

もう一人が焦って俊貴に向かってくるが、俊貴は腕をつかんでた男を使って、二人で衝突させた。

「おい、二度とオレの大事な人に近寄んな。ってか、警察につき出

してやる」

重ねって倒れる二人を足で踏みつけて言い放つ俊貴。

（すごい！王子様みたい！）

ボーッと見とれるシャル。男たちを踏みつけて、ニヤッと笑ってる俊貴は、王子と言うより悪魔のようだが、シャルはフィルターがかかってるためそう見える。

というか、俊貴の額には怒りの血管マークが浮かんでいる。珍しくイラついているようだった。

・・・・・・・・・・・・

「女性に対する強引な勧誘は条例違反なんだよなぁ。はーい、こっち来てね。おつかれちゃ…」

「お疲れ様です」

異様に渋い声の中年巡査部長の言葉を遮り、俊貴が挨拶した。

チラッと俊貴を見て敬礼して派出所へとバカどもを連れていった。

「…」

「あ、あの、俊貴？」

「ごめん！オレがもうちょっと早く来てれば！」

手を合わせて謝る俊貴。
それを見たシャルは、なんだかキョトンとしていた。

「う、ううん。まだ時間前だし…。その、助けてくれてありがと」

「そんなの当然だろ」

シャルは相変わらずの謙虚ぶりというか慎み深さで、さっきのことをずいぶん恩義に感じてるようだ。

「…」
「…」

案の定、会話が止まる。

「じゃ、じゃあ行くか」

「う、うん」

微妙な空気になりながらも二人はショッピングモールへと歩き出した。

（ふたりきり……て、手を繋いでもいいよね？……だ、ダメかな？変な子だって思われちゃうかな？ああでも、俊貴の手あったかくて…）

ボーッと俊貴の手の感触をリアルに思い出すシャル。

そうこうしてる間にショッピングモールに着いた二人。

「さて、どっから回る？」

「え？え、えっと、あそこ！」

急に話しかけられてあたふた慌てるシャルが確認もせずに指差した。

「え？あ、いや……さすがにそれは…」

俊貴が真っ赤になったのを見て、自分が指差した先を見る。

そこは女性用下着売り場だった。

顔を真っ赤にして、慌てて手を振る。

「ご、ごめん！間違い！違うの！ちがうから！」

「う、うん…」

赤くなって向かい合い、お互いにうつむき加減になる。

そして、顔を一度あげた俊貴が、下着売り場で見知った顔を見つけてしまった。

「あれ？」

「ど、どうしたの？俊貴」

「うーん、あれって蘭だよね？」

そういって、下着を選んでる蘭を指差す俊貴。

確かにそこにいたのは、蘭だった。

そして、蘭が二人に気づいて振り向く。

「と、俊貴さん!?」

手に取っていた下着をさっと背中に隠し、どうしたものかと数秒固まる。

（み、見られた!?私、ぱ、ぱ、パンツ選んでるところ…見られちゃった!?）

最後に会ったのは祭りの時で、顔を真っ赤に染め上げる。

背中で隠しながら白と黒の縞パンツを棚に戻す。

（…って、え?俊貴さん、女の子連れてる…?あ、あの時の…）

俊貴と会うたびに一緒にいるシャルに気づく。

（うぅ…改めて見ると、綺麗な金髪…。モデルみたい…）

つい自分の赤毛と比べる。

（と、とりあえず目があっちゃったし、向こうに行ってみようかな）

シャルの放つオーラに怯みながらも、

（いいもん!大丈夫だもん!私は年下属性で攻めるもん!）

（そうよ！学園祭行けなかったし。これくらいは当然の権利なのよ）

あとで女子特有情報網で得た情報によると執事服の俊貴が接客しているという一大イベントだったらしい。しかも、メイド服を着て接客をした、というのも聞いた。

それを見逃したのは蘭にとって大きかった。

ぎゅっと手を握りしめて、規則正しい歩調で俊貴のもとへと向かう蘭。

「こんにちわ、俊貴さん」

にこっと少女純度百パーセント？の笑みが眩しい。

「よっ。今日は一人？」

「あ、はい。ぶらっと買い物に」

「そっか」

と、談笑を始めた二人。

そんな談笑が始まり、困惑したのはシャル。

「と、俊貴…」

「あぁ、ごめん」

蘭との会話をベストなタイミングで切り上げる俊貴。

その気遣いが嬉しくて、シャルはえへっと上機嫌になる。

（うぅ…！この人、やっぱり笑うとすっごい美人さんだよー。う、う、負けるな私！がんばれ蘭！）

（この子、年下かぁ。俊貴って年下に甘いって言うか、気を使うっていうか、優しさが二割増しだよね。僕だって優しくして欲しいのになぁ…）

自分も年下なのを忘れているシャル。

「来年ＩＳ学園受けるんだって。オレたちの後輩になる予定なんだよな」

「は、はい！ぜひご教授のほどよろしくお願いします！」

びしっとお辞儀する蘭。

「あ、そうだ。蘭、ケータイ持ってる？」

「は、はひっ！」

裏返ってしまった声に恥ずかしがる蘭。

取り出した携帯をダイレクト接続に切り替え、チケットデータの転送を行う。

「これって…」

「今月のキャノンボール・ファストの特別指定席。見たいかな、と思って」

「あっ、はい！ざひぜひ！」

データ転送完了の表示を見て、俊貴が携帯をしまう。蘭も数秒遅れて鞄にしまう。

（う、キャラシールとっておけばよかった。子供っぽいって思われたかも…）

俊貴は、可愛いのつけてる、程度の印象だけど、蘭からすればまたまた失敗のひとつだった。

・・・・・・・・・・・・・

「気に入ったのあった？」

「うーん…」

時計店のディスプレイを眺めながら、俊貴はうなり声をあげる。いままで時計をしてなかったため、いまいちパッと来ない。

シャルが誕生日プレゼントにくれるって言ってんだし、ちゃんと選ばないと

「こちらの商品が売れてますが、どうですか？」

「うーん、それはあまり」

「そうですか」

店員も俊貴も困ってる。

な、何とかしないと…

「そういえば蘭は時計持ってるの？」

「え！？いや、その…」

「うん」

「け、携帯で充分かなって、もってないです…」

「お、それオレも」

にしし、と笑う俊貴。

すると、シャルが両手を腰に当ててお叱りのポーズ。

「もー、ダメだよ。ふたりとも。特に蘭ちゃんは女の子なんだから、おしゃれなのしないと」

「は、はい」

シャルは蘭をちゃんづけ、蘭はシャルをさん付けで呼ぶ。

「でも、その、時計ってお小遣いだけだと買えないですよ…」

「あ、そっかぁ。代表候補生は一応国に所属している公務員に近い立場だから、支給金があるんだよね」

「え？そうなんだ」

知らなかった。っても先月なったばっかだしまぁ、問題ないか

「そうだよ。俊貴はもう日本の候補生になったんだよね？」

「あ、うん。あっさり許可が出たんだって。日本もＩＳが欲しかったんかね」

「そうかもね」

でも、よくわからないＩＳを日本に独占させないために圧力とかないのかな？

「それにしても、このままじゃ腕時計決まらないね」

話を戻すシャル。さすがに店員に気を使い始めた。

「…シャルが選んでくれ。シャルならセンスいいし、喜んでつけるよ」

苦笑いしてシャルに言う俊貴。自分じゃわからないし、センスのいいシャルなら大丈夫だろうと判断した。

「あ、ありがと。じゃ、じゃあ、選んじゃうね」

「…」

ぱあっと表情を輝かせるシャルに、反対になぜかちょっと困った表情を浮かべる蘭。

残念ながら俊貴はシャルの笑顔にボーッとしてて気づかないが、シャルはそれに気づき声をかけた。

「蘭ちゃんも一緒に選ぼうよ。せっかくなんだし」

「えっ、あっ、はい！」

「値段は気にしないでいいからね」

「はい！」

「…あまり高いのはオレが困るよ」

「ふふ、俊貴が気にしちゃってどうするのさ。もらう側なのに」

「まぁ、そうだけど、高いのってつけるのをためらっちゃうし」

「じゃあ、アルバイトして買えるくらいのにしておくよ。それならいいでしょ？」

「それならいっか。でも、ちゃんとシャルの誕生日に同じくらいのプレゼントでお返しするから」

「ん、ありがとう」

「あ、蘭ももちろんプレゼントするから」

「は、はい！ありがとうございます！」

そしてシャルと蘭がプレゼントを選ぶこと二十分。一つの腕時計を持ってきた。

「これなんてどうかな？」

黒を基調にした金属製時計。

「ほら、左手のアームバンドも黒だし」

そう言われて、俊貴は左腕の袖をまくった。

そこには、不知火の待機形態の黒いアームバンドが着いている。

「同じ黒、か」

「い、良いと思いますよ！」

「ああ、蘭も選んでくれてありがとう」

「い、いえ！このくらいのことは、朝飯前です！」

そう言った蘭のお腹が鳴り、顔を真っ赤にする。

「はは、どっか店に入ろっか」

「は、はい…。ごめんなさい…」

耳まで真っ赤になった蘭がなんとなく可愛くて、頭を撫でる。

シャルは腕時計を店員に包んでもらっていた。

「シャル、昼飯どこにする？」

「うーん、どうしよっか」

「蘭は？食べたいものある？奢るよ」

「い、いえ。自分の分は出せますから！」

「まぁ、気にすんなって。あ、向こうのオープンカフェでも行ってみるか？」

「あ、あそこ、結構高いですよ？」

「だから奢るってば。あ、それとも入ったことあるか？」

「ど、ドリンクだけ…」

「うん、じゃあ決まりだな。あそこのランチにしよう」

「は、はい。ありがとうございます」

なんかうつむいてもじもじしてる蘭。

「じゃあ行こうか」

「ああ」

商品を受け取ったシャルが、オープンカフェへと誘導する。

「へぇ、おしゃれだね。ここ」

さぁっと髪を撫でる風に微笑むシャル。それにドキッとする俊貴。

「いらっしゃいませ」

「あ、本日のランチってなんですか？」

「はい。本日は蟹クリームスパゲッティとなっております。デザートは梨のタルトです」

「へぇ、それでいいか？」

「あ、うん」

「はい」

「じゃあ、それを三人前ください」

「かしこまりました」

そんなやりとりをして、店員が帰ってく。

ふと気づくとシャルと蘭が俊貴ん見つめている。

「な、何？」

「いや、手慣れてるから」

「そう？うーん、あんま気にしたことないけど、注文に時間かけないようにしてるから」

「ふーん」

「あ、あの、俊貴さんって、こういう店に来るんですか？」

「いや、外食はあんましないかな」

「そ、そうなんですか…」

「と、ところで、その…」

ちらちらとシャルを見ながら、蘭は口をもごもごさせる。

「どした？」

「と、俊貴さんとシャルロットさんは、付き合ってるんですか！？」

「え…ええっ！？」

「お、おお！？」

「だ、だって、その、仲良さそうですし…。毎回会うと、一緒にいるから…」

「それはあれだ、過去にタッグ組んでたし、同じ部屋に住んでたからお互いをよくわかってる、から？」

「う、うん。まぁね…」

俊貴が首をかしげてシャルに同意を求めると、赤くなりながらも頷いた。

「……付き合ってないんだ……よかった」

「ん？」

「なんでもないです！」

そんなやりとりをしていると、意外と早くランチが運ばれてきた。

「お待たせしました」

そういって、三人にスパゲッティが乗った三枚の皿が並べられていく。

「それでは後ほどデザートをお持ちしますので」

一礼してテーブルを離れるウェイター。

「いただきます」

「いただきます」

「い、いただきます」

三人手を合わせて、スパゲッティを食べ始める。

・・・・・・・・・・・・

「お、送ってくれてありがとうございます」

「帰るついでだよ」

「は、はい」

四時過ぎ。蘭の家、五反田食堂の前にいた。

「そ、それじゃあ、また」

「ああ、大会の時な」

「は、はい！応援します！！頑張ってください！」

俊貴の顔を上目使いで見る蘭。

（や、やっぱりかっこいい……し、……可愛い）

メイドの俊貴の写真をシャルに見せてもらってそう感じた。男の娘的な顔つきを俊貴はしている。

「と、俊貴さん」

「ん？」

「あ、えっと、……おやすみなさい！」

そういって、走って家のなかに入っていってしまった。

「……帰ろっか」

「うん…」

苦笑いして二人はＩＳ学園へと向かう帰路につく。

・・・・・・・・・・

（と、俊貴とふたりきりの帰り道…。ふたりきり…ふたりきり…）

ふたりきりになったとたんにシャルがテンパりだし、そんなシャルに気を使って俊貴は黙っていた。

が、俊貴は口を開く。

「今日、楽しかった？」

「え！？あ、うん。楽しかったよ！」

結局、蘭がいてデートとはいかなかったため、このチャンスをものにしよう、と頭がいっぱいだった。

「ごめんな、二人でって約束だったのに」

俊貴が頭をかきながら苦笑いする。

「う、ううん！いいんだ！一緒にいれればそれで…」

と、シャルが赤くなりうつむく。

「そ、そっか…」

俊貴も赤くなってうつむく。

そういってるうちに、学園のゲート前に着いていた。

俊貴の様子をチラッと見て、決心したように口を開く。

「と、俊貴！」

「ん？」

シャルの様子を見て、何か重要なことを言うのかな、とその場に止まってシャルの方を向く。

「あ、あの、わ、私と…」

「こら、俊貴。出掛けるなら私にも声をかけなさいよ」

腕を組み、俊貴を睨み付けてくる怜莉が二人の元に歩いてくる。

（うぅ…！もう！！やっぱりもっと早く切り出しとけば！！）

地団駄を踏みたいのを何とか抑えて、涙目になるシャル。

……何言おうとしたんだろう

「む、二人で出掛けてたわけ？」

「ああ、買い物にね」

「う、うん」

「ふたりきりでか？」

「いや、蘭がいたよ。偶然あってね」

「う、うん」

さっきからぎこちなく返事をするシャルに、怜莉はぴくっと眉を動かす。

「ふーん、そう」

「時間も時間だし、このまま一緒に夕飯食べないか？」

「う、うん！」

「そうね。せっかくだしそうするわ」

「じゃあ、部屋に戻ってから食堂入り口な。ラウラもいたら連れといで」

「うん！」

「じゃあ、またあとでな」

「うん！」
「そうね！」

笑顔でうなずくシャルと怜莉。

乙女の凱歌（後書き）

こんにちわ。

ストックが大分減ってきたので、週二のペースで上げていこうと思っています。

で、今回はシャルとデートです。ってか、シャルとばっかだな…

どうしよっかな…

「えええええー！？」

朝、学食に叫び声が響く。

「しゃ、シャル！鈴！静かにしろって！」

「だ、だ、だって！だってぇ！」

「俊貴！説明しなさいよ！」

シャルは涙目、鈴は目をつり上げて言う。

「「今朝セシリアが部屋からパジャマで出てきたってどういうこと！？」」

「どういうことも何もそういうことですわ」

ふふんと自慢気に髪をさらっと横に流す。

な、何故ちゃんと事実を言わないんだ…

焦る俊貴を尻目に、セシリアは言葉を続ける。

「一組の男女が一夜を過ごしたのですわ。つまり、そういうことでしてよ」

ちなみにこの情報は六割事実で、四割嘘。

今朝セシリアがパジャマで出てったのは事実。だが、セシリアは昨日俊貴にマッサージを受けていて、あまりの気持ちよさに眠ってしまった。起こすのもはばかられたためそのまま毛布を被せて寝かせ、俊貴も自分のベッドで眠った。

「そ、そんなぁ！」

「俊貴！」

「昨日セシリアにマッサージをしただけなんだけどな。それで、途中で寝たセシリアをそのまま寝かせといただけなんだが…」

と、説明した俊貴。

すると、すとんと椅子に座って安心したように息をつく。

「なんだぁ…」

「ま、そんなことだろうと思ったわよ」

だったら何故そんなに怒ったし…

「正直に言わなくても。俊貴さんのばか…」

「…ん？」

セシリアが何かいった気がしたが聞き逃して、聞き返す。

「なんでもありませんわ」

ぷいっとそっぽを向かれた。

「…」

あれ？何か視線を感じる。

そっと振り向くと、腕組をして仁王立ちするラウラと怜莉がいた。

「俊貴…貴様、寮の規則を破ったのか」

「き、規則？」

「男子の部屋には女子を泊めてはならない、だ！」

「お、落ち着け、ラウラ！」

「ええい、うるさい！お前がそのつもりなら、いいだろう！今日は私が泊まってやろう！」

「はぁ！？」

「待ちなさいよ、何その話は。そういうことなら、私も立候補するわ」

となぜか手をあげる怜莉。

こ、これはまさか…

「ええっ！ずるい！それなら僕も！」

「俊貴！あたしを優先しなさいよ！」

や、やっぱり乗っかってきた。

「朝から何をばか騒ぎしている」

その声が聞こえた瞬間、空気が凍りつく。

組んだ腕の上でトントンと指を動かしているのは、黒いスーツがこの上なく似合う義姉、織斑千冬。

「この馬鹿たれどもが」

五人の頭を華麗に叩く千冬。ちなみに俊貴には特別に拳骨をくれた。

あはは…めっちゃいてぇ

「オルコット」

「は、はい！？」

「反省文の提出を忘れるな」

「は、はい…」

「それと奥村」

「な、なんでしょうか？」

「お前には懲罰部屋三日間をくれてやる。嬉しいだろう」

「あ、ありがとうございます…」

…なんということだ

三日も懲罰部屋、だと!?

「さて、さっさと食って教室へ行け!」

その声を合図に、食堂中の女子が慌てて動き始める。

あれ?牛乳なのに、しょっぱいぞ?

涙の味ってやつか?

「あだ」

なぜか、追加で一発叩かれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とある山の上の空を飛ぶIS三機。目的はIS学園。

「今回の目的は、蜃気楼と新たに開発されてるISを強奪することだ」

緑のIS'グリューネ'の搭乗者シュレイルが三人にオープン・チャネルで言う。

「あいつはともかく、新しいISって何よ」

黒いIS'セーブル'の搭乗者シャーリィが不機嫌そうに聞く。俊

貴に負けっぱなしでいい加減腹がたちはじめている。

「なんでも、訓練機の改良機らしいよ」

青いＩＳ‘キュアノス’の搭乗者キールが、視界に表示された情報を確認しながら言う。

「訓練機の改良？何それ、使えんの？」

シャーリィの表情がますます不機嫌そうになる。

「さぁな。だが、命令が来たからにはやらないとダメだろ」

と、シュレイルが言う。

「ダルい」

はぁ、とため息をつくシャーリィ。

「まぁ、いいでしょ。それに後一人、増援が来るんでしょ？」

と、キール。

「信用できるの？そいつ」

「腕は確からしいよ」

「…ふん、そんなやつの出番はない。私達で充分だからな」

シュレイルが笑う。

「間違いないわ」

ふふっと笑うシャーリィ。

「…無茶はしないでよ」

キールが苦笑いする。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第六アリーナに一組の生徒が集合している。

その生徒達に見守られながら、高速機動パッケージを装備したセシリアと、通常装備で高速機動可能な俊貴がアリーナを駆け抜けている。

もうすぐ行われるキャノンボール・ファストの練習として、二人はアリーナを駆け抜けている。

二人は並走した状態でアリーナの地面に戻る。

「はい、お疲れさまでした！ふたりともすっごく優秀でしたよ！」

山田先生は嬉しそうに、ぴょんぴょん飛び上がる。そのたびに豊満なバストが弾む。

…いいもの見れた

「おい、俊貴。おい！」

「おおふ…。な、何？ラウラ」

「お前もその、なんだ…。む、胸は大きい方がいいのか？」

「…まぁ好きだけど、あんま気にしないかな……って、何言わせんだ！！」

「ふ、ふん！そうか。…そ、それなら別にいい…」

「う、うん？」

「な、何でもない！……ええい、こっちを見るな！」

俊貴の顔をペシッと軽く叩く。

「いいか。今年は異例の初等科参加だが、やる以上は各自結果を残すように。その経験は必ず生きてくる。それでは訓練機組の選出を行うので、各自割り振られた機体に乗り込め。ぼやぼやするな。開始！」

今年は予期せぬ出来事が多く、加えて専用機持ちが多いことから、初等科の時点で参加することになった。

訓練機部門は完全なクラス対抗となるため、例によって景品がでるらしい。

そのせいで女子一同は燃えており、それに触発されてか教師達も指導に余念がない。

特に山田先生は気合いが入っており、今日も胸元の開いたＩＳスー

ツを着ている。

あれはサイズが合ってないだけなのかなぁ…

ボーッと山田先生を見ていたら、俊貴の方に当人がやってきた。

「奥村くん、さっきの実演素晴らしかったですよ。あの機体操縦はすごいです！」

「あ、ありがとうございます」

俊貴の位置は、不知火を展開してることもあり、山田先生を見下ろす。それで、山田先生の顔を見ようとすると、胸元はどうあっても見える。あまり見ないように頬をかく俊貴。

「奥村くん？あっ…」

俊貴がなかなか視線を合わせない理由に気づき、自分の胸を隠して腕を組む。

「あ、あの私ＩＳスーツを新調した方がいいんでしょうか？」

「…まぁ、そうかもしれませんね」

「ですよね、奥村くんが授業に集中できませんし…」

「んー…」

「で、でも、その場合特注なんですよね…。コレも今年セミオーダーで作ったばっかりで、もったいないって言いますか…」

ごにょごにょ言う山田先生。おおー、おおー、何かエロいな

「なら、オレが山田先生をあまり見なければいいんですね」

「それはダメです！ちゃんと目を見て話してください！！」

ジッと俊貴を見る山田先生。

な、なんでそんなにそこにこだわるんだ…

そうこうしてたら千冬が来た。

「奥村」

「はい？」

次の瞬間、俊貴の首にチョップ。地面に衝突しかねない威力に、思考が完全に止まる。

「教師をそんな目で見るとは不謹慎だぞ」

「あ、いや、違っ…」

「デュノアでもおとなしくみてろ」

俊貴の首根っこをつかみ、耳元でそう呟きシャルの方へと投げ飛ばす。

「へぶんっ…」

地面にワンバウンドして地面に転がる俊貴。

ふふ…

なぜ生身でＩＳ展開してる人間を軽く投げ飛ばせるんだ…

あー、空が青いぜ！

そのまま大の字で、アリーナの天井が空いていて俊貴を見下ろす青空を見上げる。

「あ、俊貴♪」

なぜか地面に転がってる俊貴に、気にした風を見せずに手を振るシャル。

「おー、シャル」

にしし、と笑いながら手を振って答えて、スラスターを使って浮き、そのままの姿勢でシャルとラウラの仲良し二人組のもとに移動する。

「二人とも、調子はどう？」

「今ちょうどふたりとも増設スラスターのインストールが終わったところ。これから調整に入ろうって、ね？」

「ああ、その通りだ」

地面に降りて、二人がヘッドギアだけ展開した状態に合わせて、俊貴もヘッドギアだけ展開した。

シャルのヘアバンドのようなギアと、ラウラのウサミミ的なヘッドパーツは見てて可愛い。
インストールされたデータを読み込んでるらしく、二人のヘッドギアは時折ぴくぴくっと揺れる。それが動物っぽくて、俊貴の心をくすぐる。

「二人とも可愛いな」

思わずそれを言っちゃう俊貴。動物っぽくて撫でたくてしょうがない。動物が、特に小動物が大好きで、猫パジャマといい、このヘッドギアといい俊貴のツボを突いている。

「ふぇ!?」

「なっ!?」

いきなりそんなことを言われて、二人の顔が真っ赤になる。

「か、可愛い…」

「えへへ…」

照れくさそうにする二人。

「あ、そうだ。ちょっと見てていいか?オレやることないから」

「え?見るって僕たちを?」

シャルがもじもじし始めた。

「うん？これから試しに飛ぶんじゃないの？」

あれ？、とキョトンとしている俊貴。

「ああ…、そういうことか……。」

「紛らわしいやつめ」

二人が同時にため息をつく。

「いいよ。ラウラと一周してくる。映像回してあげるね。チャンネル３０４で」

「ありがと。やっぱ上級者の視点を見れるのは良いよな」

直視映像と呼ばれるそれは、視界情報の共有ができる。ちょっとしたテレビのようだ。

「私の視点も見せてやろう。チャンネルは３０５だ」

「お、ありがと。勉強させてもらうよ。ラウラ教官」

「ふ、ふん。何が教官だ」

そう言いつつ、満更ではなさそうなラウラ。頬が赤くなっていて照れているようだ。

「俊貴、準備ＯＫ？」

「…おし、大丈夫だ。……って、ライブで自分の顔が見えるって変な気分だな」

「え!?い、いやその、別に俊貴ばっかりみてるわけじゃ…」

「へ?」

「な、なんでもないっ」

慌てるシャルを見てたら、ラウラはＩＳを展開して浮遊する。

「先にいくぞ」

「あ、待ってよ!ラウラってばぁ!」

少し遅れてシャルもＩＳを展開して、二人はアリーナのコースを見事な機体制御で駆け抜ける。

…なるほどね。あのタイミングで減速すればいいのか。

レースの経験なんてないため、かなり参考になる。

「俊貴、どうだった?」

ちょっとして二人が帰ってきた。

「おかえり。さすがだな。ふたりとも」

「このくらいは基本だ。珍しいことなど何もない」

「はは、参考にさせてもらうよ」

「うむ、大いに精進するがいい」

と、そんなこんなでセシリアの方にも行って話をし、やることがなくなり不知火の調整を始める。

ーマスター、当日は機動力にエネルギーを集中させますか？

うーん…、そうしようかな。遠距離攻撃はビームピストルとビームライフル固定。で、刀を一本待機状態かな。

蜃気楼を使うかもしれないし、いつでも発動できるようにしといて

ー了解しました

「奥村くん、どうでした？」

「あ、山田先生。皆やっぱすごいですね。経験の差は大きいのが改めてわかりましたよ」

「そうですか、奥村くんも頑張ってくださいね。本番では妨害有りのバトルレースになりますから、立ち回りが重要ですよ」

「遠距離攻撃で牽制しつつ何とかやってみます」

「そうだ！せっかくだから私と模擬戦してみますか？キャノンボール・ファスト想定の高速機動戦闘です」

「いいんですか？」

実戦想定の訓練ができるのはかなりありがたい。

「はい！私の機体はすでに高速機動戦闘用に調整してあるので、すぐはじめられますよ」

「じゃあ、お願いします」

「はいっ♪」

満面の笑みで頷く山田先生は、ＩＳ‘ラファール・リヴァイヴ’を展開する。

「じゃあ、はじめますよ。奥村くんも準備はいいですか？」

「あ、はい」

俊貴も不知火を展開する。
二人ならんでスタートラインに並ぶ。

「では、はじめますよ！３、２、１、ゴー！」

合図と共に二人は高速機動でアリーナを駆け抜ける。

さっきのシャルの加減速をやってみるか

ちょうどカーブが見えたため、カーブに入る前に減速、加速してそこを抜ける。

おし！いけるぞ！！

スラスターの出力でバランスをとり、また見えたカーブを今度はラウラの突発的加速を試す。

自然減速のあと、一気に速度をあげて、カーブを抜ける。

あ、いた！

そこで山田先生のとなりに並んだ。

が、手だけ俊貴に向けてマシンガンを発砲してきた。

「おっと！実戦だった…」

うっかりその事を忘れていた。

「奥村くん、まだまだですね」

そのマシンガンの弾を、サイドロールで回避した俊貴。

「っ！！」

その回避した先に、ピンの抜けたグレネードが待ち受けていた。

目の前で爆発したグレネード。その爆風でバランスを崩してコースアウトし地面に落ちる俊貴。

「あだ」

地面に叩きつけられた俊貴は、衝撃を受けて痛みを感じる。

ため息をつき体を起こすと、山田先生が目の前に降りてきた。

「お疲れさまでした、奥村くん」

「お疲れさまです。さすがですね」

元日本代表候補生なだけはある。

スラスターを使って体を浮かせ、地面に脚をおろす。

「それじゃあ、先生は他のみなさんのご様子を見てきますね」

「はい、ありがとうございます」

「いえいえ」

山田先生は笑顔でお辞儀して、生徒たちの方にいった。

ーマスター、南西の方角に熱源が３つあります

は？

ー例の三機です

千冬さんにオープン・チャネル開いてくれ

ー了解

目的は何だ…

オレのＩＳか？

ここに来る意味がわからん。何かこの学園にあるのか？

『なんだ、どうした』

視界に千冬の顔が表示される。

「例の三機が、何故かここに向かってきてます」

『…お前の索敵範囲はかなり広いようだな』

「このまま迎え撃ちたいと思ってますが、良いですか？」

『うむ、任せた。先生方にも連絡を入れる。いってこい』

「了解です。」

頷き、俊貴はアリーナの天井の方に飛んでいく。

「…一つ聞いて良いですか？」

天井から出てすぐ止まった俊貴が聞く。

『なんだ？』

「この学園で新しいＩＳを製作したりしてますか？」

『…学園としては製作してはいない。だが、個人でＩＳを組み立てている馬鹿がいる』

千冬は言うべきかどうか迷っていたようだが、話してくれた。

「それが狙いのようですね。たぶん、学園祭の時に情報が漏れたん

じゃないですかね？オータムとか言う女のおかげで」

『ああ、だろうな。すまんがそいつのＩＳを守ってくれ。そのＩＳは整備室にある。おそらく搭乗者も一緒だ』

「はい、そのつもりです。整備室に行ってきます」

ニコッと笑って高速で飛んでいく俊貴。

「あいつは鋭いのか鈍いのかよくわからんやつだな」

改めてそう思い苦笑いする千冬。

・・・・・・・・・・・・

「…」

各アリーナに隣接する形で存在するＩＳ整備室。そこは中等科からはじまる整備科のための設備。

そこに入り浸っている水色の髪と眼鏡をかけた女子がいた。

空中ディスプレイを凝視してメカニカル・キーボードを打つ女子。

そこへ、扉を開けてＩＳを展開した俊貴が入ってきた。

「ここに謎のＩＳが向かってきてる。早く避難を！」

女子に歩み寄って言った俊貴。

「…やだ」

俊貴をチラッと見て短くそう答え、またディスプレイを見てキーボードを打つ。

ーマスター、もうすぐ学園からでも目視できる距離です

…今は時間がない、か

「なら、ここを動かないで。守る。絶対に守るからここから出ないで」

「…わかった」

またチラッと俊貴を見て頷く。

「約束したからね。任せといて」

ニコッと笑って俊貴が設備室から出ていった。

「…」

手を止めてその後ろ姿を見送る女子。

・・・・・・・・・・・・

整備室を出て、すぐ南西に向かう俊貴。少しでも整備室から離そうと飛ぶ。

すると、シャルとラウラ、セシリアの三人が俊貴の横に飛んできた。

「声をかけて欲しかったですわね」
「そうだよ。何も一人で戦う必要はないんだよ？」
「うむ、仲間を頼れ」
と、セシリア達が声をかけてきた。
「はは、その通りだ。ごめん」
一人でやる必要はないんだよな。オレには仲間がいる。こうやって共に飛んでくれる仲間が。
それに気づき微笑む俊貴。
「数は3。もうすぐ目視できる。セシリアは高速機動を活かしつつ射撃。ラウラはオレと一緒に前に。シャルは状況に併せてラピッド・スイッチで援護を」
「わかりましたわ！」
「うん！」
「了解した！」
ラウラが俊貴の横に、シャルはその後ろに、そのまた後ろにセシリアが移動して陣形を組み立てる。
「見えた！」
シャルがガルムを取り出す。
セシリアは、スターダスト・シューターを構えて緑のＩＳを狙う。
「狙い撃ちますわ！」

レーザーを放つ。

「外れた！」

三機が分散して俊貴達へと向かってくる。

「オレは緑を、ラウラは黒を頼む！」

「わかった！」

俊貴とラウラがそれぞれの相手に向かって飛んでいった。

「なんだ！お前は！！」

シュレイルが声をあげる。自分に向かってくる俊貴にビームライフルを放つ。

が、くるっとサイドロールどかわされる。

三人は、俊貴が第二形態移行したことを知らない。

「お前らがなんなんだ！亡国機業の人間か！！」

ビームピストルを連射する俊貴。

「ちぃ！」

急停止して斜め上に後退する。

「うおおぉ！」

瞬時加速で距離を詰める俊貴の手には刀が握られており、中腰に構えていた。

「くそ！」

ビームサーベルを取りだして、俊貴の刀と交差し火花をあげる。

「墜ちろ！」

ラウラがプラズマ手刀でシャーリィに斬りかかる。

「邪魔よ！」

シャーリィもビームサーベルを取り出して、それを受け止める。

「ふん！」

もう片方のプラズマ手刀で、シャーリィの装甲を切り裂く。

「つ…！」

後ろにさがり、ビームライフルを取り出してラウラに向ける。

「やらせん！」

ＡＩＣでシャーリィの動きを止めるラウラ。

「くっ！」

ラウラのＡＩＣを忘れていたシャーリィが焦る。

「逆に隙だよ！」

キールがミサイルを四発ラウラに放つ。

「なに！？」

ＡＩＣを使って動きを止めているため、ミサイルを落とす余力がない。

「させないよ！」

シャルがミサイルをすべて撃ち落とした。

「シャルロット！」

「あれは僕が！」

そういって、シャルがキールへと向かって飛んでいく。

「邪魔しないでよ！」

キールが大鎌を取り出してシャルへと突っ込む。

「そっちこそ！」

シャルも近接ブレードを取り出してキールに向かう。

「「「「！！」」」」

急に鳴ったアラートに俊貴達が三機から離れる。

そして、さっきまで俊貴達のいた場所にレーザーが何本も降り注ぐ。

「新手か！」

一ヶ所に集まった俊貴達が、上を見上げる。

そこに浮かんでいたのは、灰色のＩＳ一機。

自立ビットが六基、背中に戻るのが見えた。

ＩＳ情報なし、搭乗者不明。未知なＩＳです。

歪みのせいか！

「あの灰色はオレがやる！三機を頼む！！」

そういって、俊貴が灰色のＩＳに向かっていった。

「あんたも亡国機業の人間か？」

ビームピストルを握りしめて聞く俊貴。

「…だったらどうする？」

クスッと笑う。

「決まってる！！」

俊貴がビームを連射して瞬時加速で突っ込む。

「ほう、正確な射撃だ」

ＩＳの可動部分とスラスターを的確に撃ってくるビームをかわす。的確なせいで、逆にかわしやすい。

「ふふ、甘いわね」

自立ビットを展開して、俊貴を囲む。

自立ビットの軌道を見ながら、本体の様子をうかがう。

「…なんで撃たない」

ビットがヒュンヒュンと俊貴の周りを飛んでいるが、撃ってくる気配がない。

「提案があるわ」

「提案？」

「そう。あなたのデータは見せてもらったわ。主に一時移行の時のだけど」

「…」

「あなたの力があれば、不条理な力に怯える人達を救えるわ。」

「！」

「あなたが私たちに手を貸してくれれば、多くの人を助けることができる」

「……そのために各国のＩＳを奪ってるのか？」

「そうよ。大事を為すためには必要な物だもの」

「その力をどうするんだ？」

「決まってるわ、この世界を壊すのよ。人間はいつまでたってもいがみ合い殺しあう。愚かだと思わない？そんな馬鹿な事を続けてきたのよ、私たち人間は」

「…」

その言葉は俊貴を惑わすのに十分すぎた。前の世界で、俊貴はそんな世界に絶望していたから。

「ふふ、どう？あなたも私達に力を貸してくれる？」

「……断る」

「あら…、なぜかしら？」

「確かにそう思うけど、世界を壊してまでそうしようとは思わない。今のままでもやれることはある」

「そうね、今のままでもやれるわ。でも、そんなの埒があかないわ。手っ取り早く済ますには壊したほうがいいのよ」

「だったら、オレは絶対に仲間にはならない。この世界でもそれなりに気にいってんだよ。だから、この世界を壊すってんなら、オレはあんたを落とす！」

そういって、ビットを二つ撃ち落とし、灰色のＩＳに突っ込む。

「あらら、交渉決裂ね。残念」

そんな感じを微塵もさせずに、ビットからレーザーを放つ。

それをロールしてかわす俊貴は、ドンドン距離を詰める。

「あらら、全部かわすなんて…」

クスッと笑い、ビームライフルを俊貴に向けて放つ。

「くっ！」

それをかわしながらビームピストルを向ける俊貴。

「おわっ！？」

ビットによる射撃でビームピストルを撃ち抜かれ爆発する。

慌てて手から離して爆発をかわす。

なんだこの人は…

今までの人よりも腕が数倍も上なのを感じる。

本気で行かないと無理だ！

そう思った俊貴の目が赤から金へと変わり、翼が展開して赤い翼を現す。

「あら、やっと本気？」

それを見てもまだ余裕を感じさせる。

「はあああぁ！」

刀を取り出して灰色のＩＳに突っ込む。

その速さに残像が残る。

「あら？これはちょっと…」

浮かべていた笑顔が引きつる。

データで見た情報よりも上をいく俊貴に少し焦りを感じる。

それでも、冷静にビットで俊貴を狙い撃つ。

「あらら、やるわねぇ」

ビットのレーザーをすべてかわして、スピードを下げるどころか上げる俊貴にビームライフルを放つ。

「こんなものっ！」

刀でビームを弾く。

「全く…」

ビームライフルを量子化して、腕から両刃の剣が現れる。

そして、その剣で俊貴の刀を受け止める。

「くうぅ…！」

「うふふ」

睨み付ける俊貴と、それを笑顔で流す女。

バイザーで目が隠れているため笑ってるのかはわからないが、口が笑ってる。

「あぁぁ！」

スラスターを吹かして勢いを強めた蹴りが灰色のＩＳの腹に当たり、下の方に吹き飛ばす。

「っ…！」

短くうめき、俊貴の方を見る。

既に、自分の方へと飛んできていた。

冷静にスラスターを使って体勢を立て直す。

「遅い！」

「!?」

既に俊貴に後ろに回り込まれていた。

両手の刀で装甲を切り裂かれる。

「くぅ…」

苦し紛れにビットで俊貴を狙い、肩の装甲を吹き飛ばす。

「っ…」

「ふふ、やるわね。今日は退かせてもらうわ。あなたを見くびりすぎたわ」

そういって、俊貴を蹴飛ばしてその場から離れていった。

そのあとに続いて三機も撤退を始めた。

「…大丈夫だった?」

シャル達の方に向かいながらオープン・チャネルで聞く俊貴。

「うん、大丈夫だよ。俊貴こそ大丈夫?」

シャルが微笑んで返してくれる。

「あぁ、大丈夫。皆戻ろっか」

「うん」
「はい」
「ああ」

ゆっくりと並んでアリーナの方に戻る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「今日もお疲れさん、と…」

襲撃を受けてから、授業は中止となりそのまま帰宅。
戦闘に出た俊貴達は教師陣から話を聞かれ、新たに現れた灰色のＩＳについてわかってることを話した。
亡国機業、かと思ったが合ってるのか間違ってるのかがわからないため保留。とりあえずは、ＩＳを奪っているということで亡国機業と関連付けて調べる方向でおさまった。

シャワーを浴びて服を着ると、ベッドにそのまま倒れた。ヴォーダン・オージェを使うと疲れるのかな？

そう思ってたら、ドアをノックする音がした。

「はーい」

ドアに向かって、開けるとそこにはラウウラがいた。

「おぉ、可愛い格好してる！」

「！！」

「初めて見るなぁ、その服どうしたんだ？」

ロング丈の黒いワンピースで、銀髪と細身によく似合っている。
腰にさりげなく紐ベルトを巻いていて、俊貴の視線を引く。

「こ、これはだなっ！しゃ、シャルロットと先日買ったものだ！」

「へぇ。良いね。似合ってるよ、ラウラ」

「う、うむ…」

「ところで、どうした？その服わざわざ見せに来てくれたのか？」

ニコニコの俊貴。
そうだとしても普通に嬉しい。

「いや、一緒に夕食でもどうかと思ってな…」

「そっか、じゃあ行こうか。お嬢様」

「お、おじょっ…！？」

さりげなく言った言葉にラウラが固まる。

「あ、あれ？」

「お嬢様……お嬢様…」

「ラウラ？」

「!?な、なんでもない!い、行くとしよう!」

ぎくしゃくと動き始めたラウラ。

何、どしたのこの子は…

可愛いな、おい

「大丈夫?どうかしたのか?」

「え、ええい!うるさいうるさい!!」

脇腹に手刀をくらう。

な、なぜだ…

「お前のせいだぞ…お前のせいだからな!」

「ちょっ!待って、やめ!痛い、痛いから!……ったく!」

手刀を繰り出すラウラの手を握りしめて、がら空きの足を払う。

「っ!?」

ラウラの小さな体がふわりと浮き、俊貴は素早くラウラを抱き抱えた。

「なっ、なっ、なっ……!」

「おとなしくしてないと、落とすからね」

「う、うむ…」

お姫様だっこをされるラウラは、暴れるのをやめて俊貴の腕の中で小さく頷く。

「まったく、そうしてれば可愛いのに…」

俊貴がボソッと呟く。

「む…。なんだ？」

「なんもないよ、お嬢様」

ニコッと笑う俊貴。

「ふ、ふん。そうか…」

その笑顔にドキッとしながら顔をそらすラウラ。

「きゃあああ！？なになに、なんでお姫様だっこ！？」

「ボーデヴィッヒさん、いいなー」

「私も！私も！」

「ああ！なんかお似合いな感じが腹立つ！」

食堂に入った瞬間に、女子に発見されて騒がれる。

その様子を遠巻きに見ている水色の髪の眼鏡をかけた女子。

…よくよく思ったら、ここまでくるのに誰も会わなかったのが奇跡だいや、それどころじゃない。押し掛けてきてる女子をどうする？

「…」

「ラウラは特別。他の方にはしておりません」

「えー!?何それ!!」

「ラウラだけずるい!」

「そーだそーだ」

「ってか、特別って何!?二人は付き合ってるの!?」

ぶーぶーと文句を言う女子達をなだめてたらその言葉が飛んできた。

し、しまった…

特別って言っちゃダメだった…

「あ、いやそうじゃなくて、ラウラにはＩＳでお世話になってるから。そのお礼ってことで…」

苦し紛れに言う俊貴。

「なーんだ…」

「そっか、よかったー」

等など、色々言いながら女子達が席に戻っていった。

「あー…、ごめんな」

ラウラをそっと下ろす。

「ふん、毎度のことながら騒がしい…」

俊貴に抱かれていた腕を抱くように、頬を染めながら腕を組む。

「ラウラは何食うの？」

「…」

（特別、か…）

「おーい、ラウラ」

「な、なんだ！？」

「何食べるの？」

「そ、そうだな！フルーツさらだとチョコぷ…」

「ちょこぷ？」

「い、いや！なんでもない！」

「チョコぷりんか？」

「……」

「ラウラもそういうの食べるんだな」

「ま、前にシャルロットにもらったのがおいしかったからな…」

「そっか。じゃあ我慢しないで食べなよ」

「う、うむ」

と話ながら、夕食を取りテーブルにつく。

「それにしてもラウラ、それだけで足りるの？」

「お、お前が夕飯は少ない方が健康だと言ったからだろう…」

「あ、あの話か。ダイエットしてる訳じゃないんなら、無理しなくてもいいと思うぞ。今のままでも十分細いよ」

「ほ、細いだと！？」

「う、うえ！？なんで怒る！細くていいじゃん！」

「それは…そうだが。むぅ…」

ラウラは納得いってない感じだが、フルーツサラダを食べ始める。

あー、普段見慣れてないから、つい見とれちゃうな…

「？なんだ？」

「な、なんもないよ」

「そうか」

食事に戻る。

そして、当然沈黙が来る。

「…」
「…」

が、二人はこの無言が嫌いじゃない。
むしろ落ち着くくらい。

「俊貴」

「ん？」

ラウラから珍しく声をかけてきた。
食事の手を止めて顔を上げる。

「キャノンボール・ファスト。負けんぞ」

「ああ、オレもな」

二人でニッと笑い、食事を再開する。

その様子をずっと見てた水色の髪の女子は、プイッと背を向けて食堂から出ていった。

灰色のＩＳ（後書き）

こんにちわ

ちょっと長くなっちゃいました。

あと、新キャラ登場と三機のＩＳの名前決定しました。

色で変換してただけなんですがね笑

キャノンボール・ファスト

キャノンボール・ファスト当日。
会場は満員で、空には花火が上がってる。

「雲ひとつない快晴だな。うん」

眩しい日差しを手で遮って空を見上げる俊貴。

今日のプログラムは、最初に中等科のレース、それから初等科の専用機持ち、訓練機組のレースと続き、最後にエキシビション・レースが行われる。

「俊貴。こんなところにいたの。早く準備して」

「ん？怜莉か。いや、すごい客の入りだと思ってね」

「うん、例によってＩＳ産業関係者や各国政府関係者も来ているようだしね。警備だけでも相当な数よ」

へぇー、その人達を抜いてもこの人数か。この世界のＩＳの注目度が高いのを改めて実感する。

あ、そういや蘭は何処かな？

席番号を思いだしながら、そっちの方へと視線を向ける。

「いたたたたっ！」

「早くきなさいよ！まったく、子供じゃないんだから」

「ちょ、待って！子供扱いしてんのは怜莉じゃ……いたた！」

「あんたが来ないと私が怒られるのよ！」

「な、なんで怜莉が？」

「た、たまたま近くにいた私が呼んでくるはめになっちゃったのよ！」

ふん、と顔を背ける怜莉。
ホントはシャル達が名乗り上げる前に、千冬に自分から名乗り出た。
なんて口がさけても言えない。

「さっさと行くわよ！」

「わかった！わかったから離してくれ！」

「もう…」

ふう、耳がちぎれるかと思ったよ
まぁ、ここでボーッとしてもしょうがないし、ピットに戻るか

蘭、迷子になってないよな

・・・・・・・・・・

怜莉とピットに向かう途中、見た顔がアリーナから離れていくのが見えた。

「おーい！どこいくんだー」

俊貴がその子に手を振りながら走っていく。それを見て、怜莉がムッとする。

その子も俊貴の声に気づいて振り向く。

「アリーナの方に行かないの？」

「…行かない」

「え？なんで？体調悪いのか？」

「…ほっといて」

ぷいっと俊貴に背を向けてまた歩き出す。

「じゃあ、気が向いたら見学していきなよ。お大事にー」

勝手に体調が悪いと勘違いした俊貴が、手を振って怜莉の方へと向かっていった。

「…」

ただ、無言でその後ろ姿を見つめる水色の髪の女子。

・・・・・・・・・・

いよいよ初等科のレースが始まろうとしていた。

ピットには俊貴とシャル、ラウラ、怜莉、セシリア、鈴が控えている。全員ＩＳを展開していて準備はできている。

「みなさーん、準備はいいですか？スタートポイントまで移動しますよー」

山田先生の声が響く。

俊貴達は各々頷くと、マーカー誘導に従ってスタート位置へと移動を開始した。

『それではみなさん、初等科の専用機持ち組のレースを開催します！』

アナウンスが響く。
各自位置につき、スラスターを点火。

そして、ハイパーセンサー・バイザーを下ろし、集中する。

そしてシグナルランプが点灯する。

3、2、1

「んお！？」

ゴー！

いきなりバランスを崩し、スタートダッシュを逃す俊貴。原因は、鈴が開始早々に俊貴を踏み台にしていったから。

『開始早々、奥村選手妨害にあった！』

くっ、鈴のヤツー…

素早く体勢を立て直す。

「上等ぉ！やってやんよ！！」

鈴のおかげで闘志に火がつく。

赤い翼を展開。

「奥村俊貴、不知火、行きます！！」

そういって、やっとスタートした俊貴。

何となく言いたかっただけなんだ

『奥村選手！ようやくスタートしました！』

だが、遅れて出たにも関わらずそのスピードは異常なもので、開いていた差がドンドンと縮まる。

「りいぃーんぅぅ！！」

俊貴が怒気を放ちながらドンドンと向かってくる。

「ひっ！？」

それを見た鈴が恐怖を感じた。

どうやら鈴、セシリアがドベ2、ドベ3で、怜莉が二人の前、シャルとラウラがトップを競っているようだ。

そこへいきなり上空から飛来したＩＳがシャルとラウラを撃ち抜いた。

「シャル！！ラウラ！！！」

「あれは……、サイレント・ゼフィルス、！！」

コースアウトするシャルとラウラに、更に速度をあげて俊貴が向かう。

襲撃者はそれを見てなやりと口元を歪める。

「大丈夫か！ラウラ、シャル！」

壁に衝突した二人のもとにかけつけ、ビームシールドを展開する。

その大きさはいつもの倍以上で、後ろの二人を守れるほどの大きさ。

そして、そのシールドにＢＴライフルの攻撃が降り注ぐ。

「うくっ…！」

「俊貴さん！あの機体はわたくしが！」

「セシリア！無茶するな！！」

「ＢＴ二号機、サイレント・ゼフィルス、…！今度こそ！」

俊貴の制止を聞かずに、セシリアは単機で襲撃者へと向かう。

「俊貴！あたしが行くわ！」

そのセシリアの後を慌てて鈴が補佐する。

セシリアのビーム射撃と、鈴の衝撃砲が一気に目標へ向かって放たれる。

「逃がしませんわ！」

「いけえええっ！」

二人の攻撃をかわすことなく、不敵な笑みを浮かべている。

攻撃が直撃する瞬間、ビーム状の傘が開き二人の攻撃を防ぐ。

「なっ…！？」

「くっ！やはり、シールドビットを……鈴さん！多角攻撃、一度に行きますわよ！」

「あたしに指図しないでよ！ったく、付き合ってあげるけどさぁ！」

セシリアと鈴の多重攻撃が始まる。それに合わせて、サイレント・ゼフィルスは飛翔した。

「あれはイギリスの機体が強奪されたものだ…」

「ラウラ！動いちゃダメだ！」

「いや、支援攻撃くらいさせてくれ」

そういって、身を起こしたラウラはサイレント・ゼフィルスに向けて砲撃を始める。

だが、圧倒的な機動性能に翻弄され、その姿を捉えられない。

「くっ！」

セシリアと鈴を相手にしながらも余裕を感じさせるサイレント・ゼフィルス。

「俊貴！ここは僕が！俊貴は怜莉と一緒にセシリアたちを！」

「シャル！ダメージは！？」

慌ててシャルに駆け寄り全身を見る。

「スラスターが完全に死んじゃったよ。ＰＩＣで飛べるけど、あの機体相手じゃ追い付けない」

そう言いながら、ぐしゃっとなっている増設スラスターを切り離す。

「支援砲撃するラウラの防御に回るから、俊貴は行って！」

「……」

ボロボロになってる二人を、苦しげに見る俊貴。

かなり迷ってるようだ。セシリア達の援護に行きたいけど、自分達がボロボロのせいで俊貴を動きずらくしていた。

「…大丈夫。僕達は大丈夫。だから、行って」

シャルは優しく微笑んだ。ラウラも頷く。

「…わかった。二人の方に攻撃が行かないようやってみるから、ちょっと待ってて」

そういって、俊貴がサイレント・ゼフィルスに向けて飛んでいった。

「あの二人には甘いのね」

「…そうかもしれない」

途中で合流した怜莉と共に、連係攻撃で格闘戦へと持ち込む。

「はあぁぁ！」

「…」

ライフルの先端に取り付けられた銃剣で応戦するサイレント・ゼフィルス。

刀の双剣で連続攻撃を行うが、タイミングを合わせてシールドビットが割り込んできてダメージを負わせられない。

「また新型機が狙いか！、亡国機業（ファントム・タスク）！」

「…茶番だな」

「あぁ？」

俊貴の刀を受け流して、蹴りを食らわせる。

「くっ！」

「俊貴！」

ライフルの零距離射撃を、怜莉のギリギリの突進によりかわす。

しかし、サイレント・ゼフィルスはＢＴ偏向射撃を行ってきた。進路を変えてビームが俊貴を追ってくる。

「ちっ！」

ビームシールドを展開して、その射撃を防ぐ。

しかし、俊貴はそのまま壁に背中から激突した。

「うっ！」

「俊貴！！」

最悪の隙を作った俊貴を、サイレント・ゼフィルスがライフルを向ける。

「死ね…」

中央から割れたライフルが、最大出力で俊貴をねらう。

放電状のエネルギーを溢れさせるそれが、俊貴に向かって放たれた。

・・・・・・・・・・・・・

「きゃあああああ！！」

サイレント・ゼフィルスのＢＴライフルの最大出力を受けた怜莉は、強く弾き飛ばされる。

「怜莉！」

「怜莉！なんでオレをかばって…！」

「うるさい…。あんたがバカだからよ…」

「怜莉！」

ペシッと頬をはたく怜莉は、それを最後に意識をなくす。

ＩＳが致命的なダメージを受けたときに操縦者ごと意識を失ってしまう最終保護機能が働いた。

「ざけんなよ…、いつも、いつも、勝手に乱入してきて、オレの大事な物を傷つけてきやがって……」

俊貴が体を起こし、自分に向かってくるサイレント・ゼフィルスを睨み付ける。

その激しい怒りを帯びた金色の瞳が、サイレント・ゼフィルスを睨み付ける。

「！」

その殺気に気づき、急停止するサイレント・ゼフィルス。

「やらせませんわ！」

セシリアが怜莉を抱いた俊貴とサイレント・ゼフィルスの間に入る。
しかも、何を思ったのかその高速機動パッケージの出力を生かしたら体当たりだった。

「うぅ…」

「俊貴さんは今のうちに怜莉さんをシャルさん達の方へ！それまでわたくしがこの場を引き受けましたわ！」

セシリアはサイレント・ゼフィルスの両腕を押さえつけて飛翔し、そのままアリーナのシールドバリヤーに押し込む。
それを四回繰り返した時、バリヤーが割れた。

「貴様…」

「このＢＴ一号機‘ブルー・ティアーズ’の力、存分にお見せしましてよ！」

割れたバリヤーの隙間から、二機の青い機体が飛び立つ。
そして、一気に加速して、市街地へと飛び立っていった。

「…許さねぇ」

「鈴！セシリアの援護行ってこい！オレもすぐ追い付く！！」

「ちょっ！俊貴！！…もうっ！！」

有無を言わさず俊貴は怜莉を抱えて飛んでいった。
鈴も慌ててセシリアを追って飛ぶ。
・・・・・・・・・・・・
セシリアと鈴がサイレント・ゼフィルスと苦戦している時、俊貴はシャルの方に飛んできた。
「俊貴！」
「……怜莉を頼む」
俊貴に気づき、気を失ってる怜莉をシャルに渡す。
「…どうしたの？」
俊貴のいつもと明らかに違う様子に戸惑うシャル。
ここで初めてシャルとラウラは俊貴の瞳が金色になってる事に気づき、表情も優しい人懐っこい感じが、険しく怒りに満ちている。
「…行ってくる」
短く答えてヒュンとアリーナから出ていった俊貴。
「…珍しいな、あんなに怒ってる俊貴は」
ラウラがシャルの隣に来て言った。

「うん…。何だろう堪忍袋の緒が切れそうになってるのかも」

かなり的確なシャル。

今までに溜まってきてたストレスがそろそろ限界に達しようとしていた。

「あんまり無茶しないでね…」

その背中を見ながらシャルが言った。

・・・・・・・・・・・・

超音速での格闘戦が市街地の上空で起こっている。

キン、と刃同士がぶつかるたび、鋭利な音と火花が弾ける。

鈴は既にエネルギーが切れて戦線離脱。

意地でも負けられないセシリアが食い下がる。

だが、サイレント・ゼフィルスは、からかうように飛行している。

（遊んでるつもりですの！？）

ブレードを振り下ろすセシリア。

しかし、その刃はエムの一閃によって弾き飛ばされた。

「！？」

「…お前はもう死ね」

背筋が凍るような冷たい声。
そして、繰り出されたのは無慈悲なまでの連続射撃。

「ああっ！」

それを全身に受けて、シールドエネルギーが一気に削られ、左腕で支えていたライフルを破壊される。

地上に被害を出さないように、急上昇するのに精一杯。

「終わりだ」

ライフル先端に取り付けられた銃剣が、青い輝きを放つ。

「させるかああぁ！！」

俊貴が怒声を上げて、電磁砲を放つ。

「！」

セシリアを斬ろうとしたエムが急停止して電磁砲をかわす。

「はあぁぁ！」

瞬時加速で一気に距離を詰めてエムに斬りかかる。

ブウン、とセシリアの視界にプライベート・チャネルで俊貴が通信をしてきた。

『…まだ何か手が残ってる。そんな顔してるな』

いつもと違う表情の俊貴に、びっくりするがセシリアは頷く。

『はい、私にチャンスをくださいな』

『わかった。オレが時間を稼ぐ。やるなら合図でもなんでもいいから教えてくれ』

そういって、プツンと勝手に切った。

（まぁ強引ですわね。…ふふ、以外と男らしいとこもあるんですのね）

ふふっと微笑みながら、エムと格闘戦をしている俊貴を見る。

そして、ゆっくり封印して推進力に回しているビットをエムに向ける。

けしてやってはならないと言われている禁止動作。

「！」

セシリアが俊貴に短く通信を繋ぎすぐにきった。

合図だとわかった俊貴がエムを蹴って、一気に距離をとる。

「くっ…、貴様！」

「はあああ！！ブルー・ティアーズ・フルバースト！！」

閉じられている砲口空の一斉射撃。パーツを吹き飛ばしての四門同

時発射。
これを行えば最悪、機体は空中分解する。しかし、偏向射撃を使えないセシリアにとって、これは必殺の間合いによる最大級の攻撃だった。

「これが切り札だと？笑わせるな！」

エムが声を荒げる。そして、笑い声と共に、セシリアの射撃をすべて避けてみせた。

「なっ！？」

「死ね」

銃剣がセシリアの二の腕を貫通する。

「あああああっ！」

耐え難い苦痛に叫び声が漏れる。

ぶちっ

「てめえぇぇぇぇ！！！」

俊貴が完全に切れて、エムの顔を蹴り飛ばす。

「くっ！」

そして、エムの顔を掴み電磁砲を至近距離で放つ。

「うぐっ」

エムが爆煙に包まれる。

爆煙を気にせず、俊貴は両手に刀を取りだし、連続攻撃を行う。

「くっ…。調子に、乗るなっ！！」

俊貴のアーマーを銃剣で切り裂き、腹を蹴飛ばす。

「ぐあっ！」

そのまま地面の方に落ちていく俊貴。

「俊貴さん！……お願い、ブルー・ティアーズ！」

何も握ってない左手をエムへと向ける。その心のなかに、蒼い雫がおち、静かに波紋を広げた。

（ああ、そうでしたの。ブルー・ティアーズとは、つまり…）

「…？」

セシリアの意図を図りかねるエム。

そして、ゆっくりと微笑むセシリア。

「バーン」

手で作ったピストル。その指先からは何も発せられない。

だが、次の瞬間、エムを背後から四本のビームが貫いた。

「!?」

BTエネルギーの偏向射撃を、土壇場で自分のものにしたセシリア。しかし、機体はついに崩壊をはじめる。

（これまでですわね…。でも、一矢報いましたわ）

潔いあきらめを顔にするセシリア。しかし、その瞬間に届く好きな人の声。

「セシリアー!!」

最大出力で突っ込んできた不知火は、サイレント・ゼフィルスのライフルとアーマーを切り裂いてセシリアを抱き締める。

「セシリア!しっかりしろ!」

「あら、俊貴さん…。ふふ、遅刻でしてよ」

「ごめん…!」

「仕方ありませんわね。デート一回で許してあげます…わ…」

「!?おい、セシリア!セシリア!!」

俊貴の視界にセシリアの生命反応が送られてくる。気絶してるみたいだ。

（一人で無茶して…）

ビルの屋上に着地する。

（傷はＩＳが止血してる…。でも、早く学園につれてかないと…）

ＩＳ学園には大学病院並の設備がある。

「…」

飛び立とうとした俊貴の視界に、サイレント・ゼフィルスが太陽を背に見下ろしてきていた。その視線にプレッシャーを感じる。

「てめえぇ…」

俊貴は怜莉を、シャルをラウラを、セシリアを傷つけた相手を睨む。相手の顔はバイザーで見えない。

だが、エムは背中を向けて飛びさっていった。

「…次は落とす」

その背中を見て呟き、ＩＳ学園へと飛んでいった。

キャノンボール・ファスト（後書き）

こんにちわ。

キャノンボールファスト回でした。

最近気づいたんですが、鈴の扱いが雑になってきてる…

俊貴の誕生日

「せーの」

「お誕生日おめでとう！」

シャルの声を合図にクラッカーが鳴り響く。

「あ、ありがとう」

夕方六時、場所は織斑家。キャノンボール・ファストが市のアリーナで行われていたため、学園に戻るよりこっちのが近いから、とここで誕生日会が始まった。

それはいい。
それは全然いいんだ
でも、

「何故増えたし…」

いつものメンバーはともかく、生徒会のメンバーの楯無さん、のほほんさん姉妹。更に、新聞部のエース・黛薫子さんもいて、リビングがいっぱいいっぱいだった。

…なんであのあとにこんな元気なんだ
違うな。あんな事件があったから騒ぎたいのか…

今回の亡国機業の目的も不明。

ＩＳで市街地戦闘をしたため、被害状況を調べる必要もある。そのため、学園関係者は、千冬さんも山田先生も慌ただしく動いていた。

戦闘に参加した俊貴たちも取り調べを受け、解放されたのは五時前だった。

「あ、あの俊貴さん！け、ケーキ焼いてきましたから！！」

「マジか！蘭、ありがとう！！ってか、今日どうだった？途中でめちゃくちゃになったけど大丈夫だったか？」

「は、はい！あの、かっこよかったです！あ、ケーキどうぞ！」

「ありがとう！」

蘭がくれた皿を受けとり、その上のケーキを食べる。

「うまっ！これうまいぞ！！蘭、一人で作ったのか？」

「は、はい！」

「蘭って料理上手いんだな。いいお嫁さんになるぞ」

「お、お嫁…！？」

ニコニコしながら俊貴はケーキを食べる。

そんな俊貴の言葉を聞いて真っ赤になる蘭。

それを見て、鈴がラーメンの丼を俊貴の前におく。

「俊貴、はいラーメン」

「なんで今……。まぁ食べるけどさ」

食べかけのケーキを横にずらし、ラーメンに手をつける。

「出来立てだから美味しいわよ。なんせ麺から手作りだからね、フフン」

鈴が自慢気に胸を張る。

ふん、無いもの張ってもしょうがないぞ

「なによ。なんか文句ある!?」

俊貴の思考を読んだのか鈴が俊貴に詰め寄る。

「な、何も…。ってか、普通に上手いな」

「フフン、当たり前よ」

俊貴の言葉を聞いて嬉しそうな顔になる鈴。

「むっ、鈴さん…」

「ん?あー、誰かと思ったら蘭じゃない。ちょっとは背伸びた?」

「あ、あなたに言われたくありません!」

一瞬で険悪な雰囲気の鈴と蘭。

中学の頃からの付き合いらしいけど、このふたりはいまいち仲がよくない。
理由は聞くと怒られそうだから聞かない。

そのいがみ合いを尻目に俊貴はラーメンをすする。

うん、さっぱりとして後味がいい。麺も歯応えあるし、海鮮のだし汁が広がってホッとする。

「鈴、これ上手いよ。ありがとう」

「ふ、ふん。ちゃんと私だって花嫁修行もしてんのよ」

「ふーん、なるほど」

「……軽くながしてくれちゃって…」

「は？」

「なんでもないわよ！」

あらら？鈴が怒っちゃったよ

まぁいいや、食べ終わったし片付けよう

丼をもってキッチンに向かう。

「セシリア」

「は、はい？」

キッチンに右腕に包帯を巻いたセシリアがいた。

傷は浅くなかったが、活性化治療を受けることで一週間ほどでもとに戻るらしい。

念のため入院したら、と勧めたが本人は猛反対。現在こうしてパーティーに参加している。

「傷、大丈夫？つらかったら休んでなよ。何かしてほしかったらオレに言って」

「このくらいはケガのうちに入りませんわ！心配してくれてありがとうございます！」

嬉しそうにニコニコしてるセシリア。

「そ、それより俊貴さん」

「ん？」

「お、お誕生日おめでとうございます。それで、こちらを」

「…箱？」

「ぷ、プレゼントですわ。開けてみてくださいな」

「うん」

しっかり梱包されて箱から包装紙を取り、ふたを開ける。

「んん？ティーセットか。高そうだな…」

「コホン！これはイギリス王室御用達のメーカー、エインズレイ、の高級セットでしてよ。それと、わたくしが普段愛飲している一等級茶葉もおつけしますわ」

「なんかすごいね。ありがとう。大事に使うよ」

「い、いえ、このくらいはなんでもありませんわ。そ、それよりも、今度一緒に…」

「俊貴くーん、ちゃんと食べてるー？」

「おっとと…、楯無さん、後ろから抱きつくのやめてくださいよ！危ないから」

「ふふん、いいじゃない。ちゃんと受け止めてくれるし、減るもんじゃない」

「減るんですよ！オレの理性とか純情とか諸々が！！」

「あら、それじゃあちょうどいいじゃない。傷心のおねーさんを慰めなさい」

「あー…」

亡国機業の人間を逃がしたって言ってたな

「気にしない方がいいですよ。オレだって逃がしちゃってますから」

背中に楯無の豊満な胸の膨らみが押し当てられているのを、気にしない様にしつつ励ましてみる。

「……」

黙って更に俊貴に抱きついてくる。

「次は捕まえれますよ。何たって生徒の長として振る舞うんでしょ？副会長として会長をサポートしますから、元気出してください」

背中の感触を気にしないように、苦笑いする俊貴。

「…まぁ合格点かな」

ふふ、と笑ってギュッと俊貴を抱き締める。

「ちょっと！更識会長！！」

セシリアが声を荒げる。

俊貴から楯無をはがそうとしているが、べったりとくっついた体はなかなかどいてくれない。

「は、離れてくださいな！」

「あん、楯無って呼んでよ」

「そんなことどうでもいいですわ！今すぐ俊貴さんから離れ……痛っ！」

「セシリア、右腕怪我してるんだから無理するなって。大丈夫？」

「だ、大丈夫…い、いえ！大丈夫じゃありませんわ。俊貴さん！」

「どっちさ…」

「こ、コホン。右腕を怪我してるので、お料理を食べさせてくださいな」

「いいよ」

楯無を背中にくっつけたまま、切り分けられていたケーキを一つ取って、セシリアに口を開かせる。

「あーん」

「あ、あー…」

「ああっ！セシリア、何してるの！？俊貴の誕生日なのに！！」

シャルが慌てて寄ってきた。

ぱくんとケーキを食べるセシリアは、瞳を閉じて満足そうに吐息を漏らす。

「ふう…。役得ですわ」

「と、俊貴！ずるいよ！って、楯無先輩も何してるんですか！ああもう！！」

忙しなくシャルはあれこれと喋ってる。…苦労人ってか、おかあさ

んみたいだな…

そう思いながら苦笑い。

「俊貴も何笑ってんのさ！もう！！」

「…ごめん」

怒られちゃった

「あらら。それじゃあセシリアちゃん、私たちは向こうに行きましょうか」

「ええ、わたくしは満足したので構いませんわ。はぁ……♪」

なんか満足したらしい二人が、俊貴から離れてリビングに向かう。

キッチンでシャルとふたりきりになった。

「あ、これありがとう。これから使わせてもらうよ」

「う、うん！大事にしてね」

詳しくは知らないが、現在の気温から湿度、天気、最新ニュースまでみれるフルスペック腕時計というやつらしい。横のボタンで、小型の空中投影ディスプレイの起動ができる。電池も空気電池と太陽光発電、体温発電機能まであるらしい。

文化は、前の世界よりも進んでるのを改めて感じる。

「シャルの誕生日教えてくれよ。絶対お返しするから」

「う、うん。その時はよろしく」

「でも、シャルも怪我なくてよかったよ。壁に叩きつけられてたから、かなり焦ったよ…」

あはは、と苦笑いする俊貴。

「し、心配してくれたの？」

もじもじと指をいじりながら上目使いで見てくるシャル。

「…当たり前だろ？仲間なんだし」

そういって、シャルの頭に手をおく。

「…仲間、かぁ…」

嬉しいけど、やっぱり特別扱いされたい乙女心。
頭を撫でられ頬を赤く染めながらもため息をつく。

「ど、どした？」

ため息を聞き逃さなかった俊貴が不安げに聞く。

「なんにもないよ…」

「そ、そっか…」

俊貴が落ち込み手を引っ込めた。

「…」

（すぐ落ち込むんだから…）

苦笑いしてシャルが頬をかく。俊貴の事をおそらく一番わかってるのがシャルだろう。その次に、楯無、ラウラと続く。

「ほーら、そんな顔しないでってば」

「ん…」

「あんまり落ち込んでると幸せが逃げちゃうよ。ほら、笑って笑って」

「…うん」

シャルは自分の口元に手を当てて、笑顔を作るように口の端を指で押し上げる。

その笑顔を見て、完全に心を撃ち抜かれる俊貴。

「…」

ボーッとシャルを見つめる。

「あ、えっとね、ラウラがあとで庭に来てくれって言ってたよ」

「…へ？あ、うん。わかった。ちょっと行ってくる」

声をかけられて我に返った俊貴。

「うん。またあとでね、俊貴」

また軽くシャルの頭に手を置いてから、外に出た。

「お、遅い！」

「うぇ！？ご、ごめん」

「あ、ああ、いや、別に…私が勝手に待っていただけだ。前言を撤回する」

「へ？そうか」

珍しい態度のラウラ。実直と融通の利かなさがラウラなのに…

「と、俊貴！」

「ん？…おわああ！？」

いきなりナイフが首もとを狙ってくる。

とっさにラウラの腕を掴んで止めようとしたが、ラウラから止めていた。

な、なんだ…？

「こ、このナイフをやろう！」

「…は？」

「誕生日プレゼントだ！私が実戦で使っていたものだ。切断力に長け、耐久性も高い。受けとれ！」

「う、うん！」

ラウラの手からナイフを受けとり、付属の鞘ももらう。

…殺しの道具、か

「あ」

「な、なんだ！？」

「グリップ、かっこいいなあって思って」

「そ、そうか。ホルスターもなかなかだぞ。ほら」

鞘にベルトを通すとそのままホルスターになる。

脇の下に配置するらしいそれは、最小動作で引き抜けるように、ナイフの向きが真横になるようになっていた。

「……戦士が己の武器を渡すという意味を理解してだな…」

「信頼できる武器をオレにくれるんだろ？なら、その信頼に答えれるようになってみせるよ」

「ふ、ふん。早く一人前になるんだな！」

「あ、ラウラ」

「な、なんだ!?」

「ありがとう。ラウラ」

「!!」

その言葉に照れてるのか耳まで真っ赤になる。

「ふ、ふん!」

鼻を鳴らして行ってしまった。

「ここにいたの。俊貴」

「ん?怜莉、どした?」

「あんたの誕生日でしょ。主役が外行っててどうするの」

「あ、ああ。ごめん」

「別に怒ってないわよ」

呆れたように笑う怜莉。

「はい、誕生日プレゼント」

そういって、袋を渡してきた。
わりと大きい袋の中に包む紙が見えた。

「開けていい?」

「いいよ」

頷き袋から取り出して、紙を広げていく。

「着物？」

「うん、欲しいって言ってたから。家にたまたまいい布があって、仕立ててもらった」

「おー！覚えててくれたのか！ありがとな。今度着てみるよ」

「うん。帯も入ってるから」

「あ、これか」

「その……私とおそろいのものなの…」

「へぇー、そうなのか。今度寮で着てみるから」

「うん。そのときは私に見せてよ」

「わかった。ありがとな」

色も落ち着いた感じだし、部屋着としてジャージと交互に使おうかな

「…そろそろ戻るか」

「うん」

俊貴と怜莉は一緒にリビングへと戻る。
そこでいつの間にか、皆で遊べるボードゲームを広げていた。おそらく鈴のものだろう。
それに庭から戻ってきた二人も混ざり、わいわいと賑やかに時が過ぎていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、よかった。売り切れはないや」
家から最寄りの自動販売機で、足りなくなったジュースの補給にきた。
誕生日の主役にそんなことをさせるわけにはいかない！とシャル達が言ってたが、特に何もしてないし、自分から志願した。
えーと、楯無さんがコーヒー、鈴がウーロン茶、セシリアが紅茶で怜莉が炭酸飲料、ラウラはスポーツ飲料で、シャルがオレンジジュースっと、あと…
取り出し口からジュースを取り両腕に抱える。
さって、戻ろっかな
と、歩き出してふと一つの視線を感じる。刺すような冷たい視線が背中越しからでも威圧感を感じる。
「…」

ばっと振り返って見たが、誰もいない。

…気のせい、か？

そう思って、前を向きまた歩き出す。

「と、俊貴！」

「ん？」

歩き出した俊貴の前にラウラが現れた。

「どした？」

「い、いや、缶ジュースを持つの手伝ってやろう」

赤くなりながらラウラが言う。だが、幸いにも暗いためそれがわからない。

「お、ありがとな。思ったより多くてさ」

微笑んでラウラに四本渡す。七本は自分で持っている俊貴。

「にしても、よくここにいたのわかったね」

「そ、それは…」

「え？」

「……言えるわけないだろう、ふたりきりになる機会をうかがって

いたなど…」

「そうなの？何かオレに用があったん？」

「な、なんで聞こえてるんだ！馬鹿！！」

ゴニョゴニョ言ってたため聞こえないと思ってたラウラが焦る。

「なんでって、二人しかいないのに話聞いてないのはまずいでしょ」

と、正論を言う俊貴。だが、よく思い出せ。お前はよく話を聞いてないぞ。

「ふ、ふん！当然だ！！嫁が亭主の話を聞かないのはおかしいからな」

「はは、そうだね」

ニコニコしながら同意する。

「ふん！帰るぞ！！」

「ああ、帰ろう」

前をスタスタ歩くラウラの背中を見ながら俊貴もついていく。

その二人を影から睨み付ける人影。

その人影は、ふんと鼻を鳴らして闇に消えた。

・・・・・・・・・・

「おっくー！」

缶ジュースを買って戻ってきた俊貴に、スローモーションで向かってくるのほほんさん。

「とうっ！」

床を蹴って俊貴へとダイブ。

「んな！？」

スローモーションなのを良いことに、テーブルに缶ジュースを置いていたら、急に速度をあげてダイブしてきた。

「うあああ！？」

慌てて全部の缶をテーブルに置き、のほほんさんのダイブを食らい床に押し倒される俊貴。

「んふふー、おっくー！……ん♪」

俊貴の鼻にキスするのほほんさん。

「…は？」

呆然とそれを見る俊貴。顔が赤い気がする。そして、微妙に酒臭い。

「んふふー、おっくーは私のものー♪んふふー」

やたらとご機嫌なのほほんさんは、俊貴の体に腕を巻き付けて抱き締める。

「え？…え？」

訳がわからない俊貴は呆然と倒れたまま天井を見上げている。

「本音！離れなさい！！」

虚さんがのほほんさんを俊貴からはがそうと引っ張るが、しっかり巻き付いていて離れない。

「…なんでこの人酔っぱらってんの？」

抱きつかれたまま体を起こしシャル達の方を見る。

「うふふ、私が間違えてお酒飲ませちゃったのよ」

扇子で口元を隠す楯無が言った。

…わざとか？わざとなのか？あんたは…

「……俊貴はなんで離そうとしないのかな？」

シャルがニコニコだが、額に血管を浮かばせて言う。

「そうだな。おかしいな」

ラウラも冷たい視線を向けてくる。

「俊貴さん、どういうつもりですの？」

うふふ、と笑ってるがこちらも血管を浮かばせてるセシリア。

「あんたどうなりたいわけ？」

呆れ気味な怜莉。

「……うふふ、おっくー！」

ギュッと抱き締めてくるのほほんさん。

お、おお！意外と胸がある！！

っ……しまった、意識したらまずい

鈴が何か言った気がするけど、胸に意識が集中しちゃって聞こえなかった。

「「「「俊貴！」」」」

「あ……アーッ！」

織斑宅に悲鳴が鳴り響いた。

俊貴の誕生日（後書き）

おはようございます。

ちょっと無理矢理感が否めない回でした。

どう進行していこうか迷っているので更新が遅くなるかもしれませんが、これからもよろしくお願いします。

楯無の妹

いつも通り学校の後、訓練を終えて自室でシャワーを浴びてベッドにダイブした俊貴。

「ふう…」

一息ついてから、ごろごろとベッドの上を転がる。

ピキーン

お、この感じ…ま、まさか！

そう思いながら、体を起こすと、部屋のドアが急に開いた。

「じゃじゃーん。楯無おねーさん参上ー」

「部屋間違えてませんか？」

「…ひっ」

急いでドアを閉める。

その直後、ドアに水の刃が突き刺さり真っ二つになった。

楯無の手には、蛇腹剣，ラスティー・ネイル，が握られていた。

「もー。おねーさんをないがしろにしちゃだめだゾ★」

抵抗しちゃダメなんだな、やっぱり…

うなだれる俊貴。

「部屋に入ってもいい？」

「どうぞ」

蛇腹剣を扇子に変えて部屋に入る楯無。

「それで用事はなんですか？」

自分のベッドに腰を下ろして楯無を見る。何かいつもと雰囲気が違う気がする…

「あら、眠るの？なら添い寝してお話ししましょうか。私もちょうど眠たくなってきてたし」

「眠りません！普通に話してください！！」

「あはは、からかいやすいなぁ、もう」

「……追い出しますよ」

ジト目で楯無を見る俊貴。

「いやん」

うん、オレハきっとこれからこの人に振り回されまくるんだろうな

「で、用件は何です？」

「その……お願い！」

ぱん！と手を合わせて、いきなり拝まれる。

「は？え？」

「妹をお願いします！」

「…はい？」

キョトンとする俊貴。

・・・・・・・・・・・・

「はぁ。妹さん…ですか。初等科の」

「そう。名前は簪。あ、これが写真ね」

そういって、見せられた携帯の写真には、見覚えのある顔が写っていた。

「…あれ？この子」

「え？知ってるの？」

「知ってるっていうか、二回ほど会って話しただけなんですけどね」

「なら、知ってると思うけど、妹ってその、ちょっとネガティブっていうか、えっと…」

珍しく言葉を選んでるみたい

「暗いのよ」

結局ばっさり言ったよ、この人…

「そ、そうですか」

「でもね、実力はあるのよ。だから専用機持ちなんだけど…」

「けど？」

「専用機がないのよねぇ」

「……は？」

それって専用機持ちじゃないよね？

「だから、日本の代表候補生なんだけど、専用機がまだ完成してなくてね。持ってないの」

「なんで完成してないんですか？」

「簪ちゃんの専用機の開発元は倉持技研なんだけど、そこの人員が君のＩＳのデータや追加装備に回っちゃってたから、未だに完成してないのよ」

「…オレのせいですか」

「そう！俊貴くんのせいなの！！」

「はっきり言わなくても……」

泣きそうになる俊貴。

倉持技研で不知火の追加装備を開発しているって聞いてたけど、ホントに開発してたのか
でも、前にためしで持ってきてくれた追加装備は不知火が拒否して付かなかったからなぁ
追加装備はいりません、って言ってたからたぶん無駄な時間を費やしてるんだろうな、倉持技研の人は

「それで、妹を頼むってどういうことですか？」

「あのね、昨日のキャノンボール・ファストの襲撃事件を踏まえて、各専用機持ちのレベルアップを図るために今度全学年合同のタッグマッチを行うのよ」

「それに簪さんと組んで出ろって事ですか？」

「そう！お願い！簪ちゃんと組んであげて！」

また拝んできた。

「そんな頼み込まなくてもやりますよ。」

「え、うん…。それじゃあ、いいの？」

しおらしい態度でそう聞いてくる。
いつもとのギャップのせいで、その姿が小さく見えた。
そして、その姿を見ると願いを叶えてあげたくなる。
なんだかんだ言いつつも、俊貴は楯無が嫌いじゃなくどっちかというと好きだった。
「簪さんにはオレから誘えばいいですか？」
「うん。極力私の名前は出さないでね」
「え？どうしてです？」
「あの子…私に対して引け目があるっていうか…その…」
もごもご口ごもる楯無。
「簪さんとあまり仲が良くない……ですね？」
「う…」
しょんぼりとうなだれる楯無を見て、確信した。
「じゃあ、なるべく自然を装って接触します」
「うん、お願いね。知ってるだろうけど、ちょっと気難しいところがあるから、言葉には気をつけてね」

「はい」

初等科四組更識簪と、記憶記憶。

「それじゃあお願いね？でも、無理はしなくていいから…」

「…らしくないですね。いつもならごほうびに添い寝してあげるとかなんとか言うくせに」

「そ、そう？あはは……ま、まぁ、そういうのも、してほしいならするけど…」

…なんだこの人は、ホントに楯無さんか？

「楯無さんこっち来てください」

「う、うん？え？俊貴くん？」

「いいから」

「う、うん…」

自分のベッドに座らせる。

「無理してるのは楯無さんの方。オレはちゃんと力になりますから」

そういって、ベッドの上に膝立ちして、楯無の背後に回る。

「肩揉みます」

「う、うん」

そういって、楯無の肩を揉み始める。

「凝ってますね。遅くまで仕事してます？」

「う、うん、まあ。あ、いたた…」

「仕事手伝いましょうか？」

「こ、こら。君には部活動貸し出しの仕事があるでしょうが」

「そうですけど、楯無さんに倒れられても困りますし、力になりたいんですよ」

「ま、まったく。ダメよ、仕事を放り出すような子は。おねーさん、嫌いになっちゃうから」

「…いいですよ、倒れられるよりは」

「むぅ、生意気言うようになったね」

と、少しはいつもの調子が出てきた楯無さん。
それから三十分ほどマッサージして解放した。

「んー！だいぶ楽になったわ。ありがとう」

「どういたしまして。一人で無理しないでくださいよ。ちゃんと力貸しますから、オレも頼ってくださいよ。…頼りないかもしれないけど」

あはは、と苦笑いして頬をかく。

「ふふ、そうさせてもらおうかな。でも、君は頼りになるよ」

扇子で口元を隠す楯無。
心なしか頬が赤い気がする。

「そうですか？…それじゃあ、簪さんのこと任せておいてください」

「うん、よろしくね」

姉としての礼儀なのか、楯無さんは一礼して去っていった。

「さて、とりあえず」

「代わりのドアをもらいに行こう…」

目の前に倒れる真っ二つのドアを見下ろす。

・・・・・・・・・・

ドアを申請しに行った後、夕食を食べに食堂に移動した俊貴。
そこで、簪を探して見たが見つける前に、シャル達に見つかって同席することになった。

「どうかしたの？誰か探してるの？」

と、辺りをキョロキョロしてた俊貴にシャルが聞く。

「え？…いや大丈夫。なんもないよ」

そういって、視線を料理に戻す俊貴。

「それはそうと俊貴さん、次は卵焼きをいただけますかしら？」

「ん、わかった。ほら」

右腕を使えないセシリアに食事を食べさせる。利き腕使えないのはキツいからな

「あ、あーん…」

口を手で隠して咀嚼するセシリア。恥ずかしいのか顔は赤い。

その間にも、俊貴は箸を探して周りを伺う。

だが、食堂に箸の姿はなくここにはいないようだ。

なんか鈴が言った気がするけど、まったく聞いてなかった。

「俊貴、茶碗蒸しはスプーンで食べれるでしょ？ね、セシリア？」

にっこり笑ってるけどなぜか威圧感を放つシャル。

「そ、それは…わ、わたくしは左手だとうまく食べられないのですわ！」

「そうか、では私が食べさせてやろう」

「ら、ラウラさん！？ちょっと…せめて冷ましてから……あつつつ

っ！」

ぐいっと熱々の茶碗蒸しを乗せたスプーンがセシリアの口にねじ込まれる。

怪我人だよ、セシリアは…

「あらあら、楽しそうですよねー」

「あ、山田先生。それに…千冬さん」

二人とも手に夕食のトレーを持っている。

「あんまり騒ぐなよ、馬鹿者が」

「わ、わたくしは怪我人ですのに…」

「オルコット。本来なら市街戦について謹慎処分があるところを特別に免除してやったんだぞ。勘違いするなよ」

「は、はい…」

ちなみに、俊貴もこってりしぼられた。

「ところで、お前たちはいつもこのメンツで食事しているのか？」

「あ、はい。大体は」

「そうか」

「あら？織斑先生、もしかして気になるんですかー？」

「山田先生、あとで食事の運動に近接格闘戦をやろうか」

「じょ、冗談ですよぉ！あ、あは、あははははー…」

山田先生、学習しようよ…。からかってひどい目にあってるでしょ…

「あんまり騒ぐなよ。…と言っても、十代女子には馬の耳に念仏か。まあ、ほどほどにな」

それだけいって、千冬さんは山田先生を連れて奥のテーブルに向かっていった。

そして、夕食の時間は過ぎていった。

・・・・・・・・・・・・

「…で、なんで全員ついてくるんだ？」

寮の自室へ戻る途中、ゾロゾロとついてくる一同に聞く。

「そ、それは…別にあんたのことを心配してる訳じゃないわよ！」

鈴。

「あー、えっと、ほら。たまには俊貴の部屋でお話しようかなって思って」

続けてシャルが告げる。

「そうよ、俊貴。こうやって全員でコミュニケーションを取ることも大切よ」

うんうん頷く怜莉。

「あの、俊貴さん?よろしければ包帯の交換を手伝って欲しいのですけれど」

「うん、いいよ」

それを聞き、表情が華やぐセシリア。

「おい、俊貴。お前はこいつを甘やかしすぎだ。傷の手当てくらい一人でできなくて何が代表候補生か」

おおぅ…きついツッコミだな

「ん?どうした?」

「いや、なんもないよ」

たまにラウラを見てると、キスのことを思い出してしまう。

あれ、結構恥ずかしい

「椅子とかあった方がいい?」

「ううん、ベッドでいいよ。ね、みんな?」

自室のドアをあけた俊貴の問いにシャルが答えて、話しかける。

「ま、あたしは座れればなんでもいいわよ」

「そうね、それにベッドの質がいいし」

「わたくしは、自分のベッドでないのが不満ですけど、まぁ、よろしくてよ」

「私も構わんぞ」

そう答えてシャル以外が入っていく。

「あ、何か飲み物買ってこようか？」

「いいって、そんな気を使うなって。買いにいくならオレいくし」

「もう！またそんなこと言う！」

「あ、えっと…」

いきなり語調の強くなったシャルに驚く。

「ごめん」

「い、いや、大丈夫だ」

シャルも我に返り、慌てて体を引っ込めた。

「その……俊貴も男の子だし、僕達みたいに普通より強い女子に守られるのイヤだよね…？」

「な、何でそんなことを…」

急にされた質問に首をかしげる俊貴。
シャルは不安げに俊貴を見上げている。

「そんなことないよ。ま、まあ、男らしくないと言われたら泣くけど、イヤではないよ」

「そ、そう?よかった…」

「う、うん…」

「…」

「…」

お互いうつむいたまま、沈黙が続く。
おぉ、ドキドキする

「じー…」

「へ?」

ドアの間から、鈴達がジト目で睨んでる。

「まーたシャルロットね…」

「俊貴、あんたって人は…」

「ひ、卑怯でしてよ!シャルロットさん!」

「ふん！」

あ、ラウラが拗ねた。

「ら、ラウラ？」

「なんでラウラにだけなのよ！」

「ラウラにだけ気を使うわけ！あんたは！！」

「と、俊貴さん！」

ハッハッハ

終わったぜ

楯無の妹（後書き）

こんちわ

ちょっと更新サボりすぎてましたね。
ペースを上げて行きたいと思います。
早めに上げてきますね。

簪と、怒るシャル

楯無に妹の簪さんを頼むと言われた翌日。

四時限目がおわり、昼休みに教室中が騒がしくなる。

さーて、簪さんにアプローチしよっかねー

ファーストフェイズ、ターゲットの発見を開始する。

ガタッと椅子を下げて、俊貴が立ち上がる。

しかし、さっそく障害が発生する。

「俊貴、食堂行こうよ」

いつもの優しい笑顔で話しかけてきたシャル。

…ふふ、まさか任務を始めて速攻任務失敗か

俊貴の最大の障害、ニコニコ笑顔のシャル。そ、そんな顔されたら断れない…

だ、だが！

楯無さんと約束したからには…！

「…シャル、ごめん。今日はちょっと用事があるんだ」

…オレは今どんな顔してるんだ？苦しい顔してるのか？

「そ、そうなんだ？じゃあ、どうしよっかな…」

「でゅっちー、私たちと行こうよー」

俊貴が苦渋の選択をして苦しんでる時に、のほほんさんが話しかけてきた。

「でゅ、でゅっちー？」

「行こうよー。えへへー」

のほほんさんは戸惑うシャルの腕に腕を回す。
それを避けない、シャルの人のよさが涙ぐましい。

「それじゃあ、れっつごー」

教室のドア前で待ってるのほほんさんグループと合流し、戸惑いながら俊貴を見るシャルを引っ張って学食へと向かっていった。

……障害が撤退。任務を続行する

楯無に聞いた情報だと、簪は教室でパン食派らしい。

パンも買った。スムーズに話が進むといいな

全学年合同タッグマッチの話は今朝のホームルームで説明された。

新たな障害が出る前に、目的地へ向かう

他の専用機持ちと組むことになる前に、教室を出ようとドアを開ける。

「と…」

「わるい、用事があるんだ」

ドアを開けたら鈴がいたが、話を切り出される前に立ち去る。

「……何か、あたし避けられてる？」

鈴がへこんで二組に戻っていった。

四組までもう少しだ

四組の表札を見て更に歩を早める。

そこへ、横からいきなり誰かが俊貴にタックルしてきた。

「ぐへっ！？」

そのタックルを喰らって廊下に倒れる俊貴。

「だ、誰だ？」

背中の痛みに耐えながら、自分にタックルをした相手を見る。

目の前には、腕組みをして、ふふん、と笑っている怜莉がいた。

「俊貴、私と組みなさい！」

「あー、ごめん。先約があるんだ」

「え？先約？……まさか、シャルロットじゃないわよね？」

前にそう言ったからシャルの名前が出たんか？

「…むぅ、やっぱり出遅れたかぁ…」

「…じゃ、じゃあ、オレは用事があるから」

手を上げて会釈し、その場から去る俊貴。

障害を突破。目的地へ到達

セカンドフェーズに移る

と、さっきからノリで始めた軍事ゴッコを一人でやる俊貴。

「ああ！一組の奥村くんだ！」

「え、うそうそ！なんで！？」

「よ、四組にご用でしょうか！？」

ドアを開けて中に入った瞬間に人が集まってくる。

ぐぬぬ…、この人波はキツイ

「えーと、更識さんっているかな？」

「「「え…」」」

女子達が固まる。

「更識さんって…」

「『あの』？」

一気に女子の壁が開く。その直線上、クラスの一番後ろの窓側席に、彼女はいた。

あー、オレの席と一緒だぁ
それに、やっぱあの子だな

写真で見てたし、前に会ったこともある水色の髪の眼鏡をかけた女子。

購買のパンを脇に避けて、空中投影ディスプレイを凝視しながらその手はひたすらキーボードを叩いていた。

「……」

なんかすげぇ勢いでキーボード叩いてる…ほんとに暗いのか…

ボーッと観察していたら、女子の一人がつぶやいた。

「えっと……もしかして、朝のホームルームで説明された、専用機持ちのタッグマッチの相手として更識さんを選んだ……とか？」

「お、当たり」

微笑んで頷く俊貴。ざわざわと波紋が広がる。

「え…。だってあの子、専用機持ってないじゃない」

「今までの行事、全部休んでるしさぁ」

「それに、あの子が専用機持っているのって、お姉さんの…」

「はいはい、教えてくれてありがとね。オレあの子に用があるから」

それ以上聞きたくなかったため、無理矢理言葉を遮って群衆から抜け出し、簪の席に向かった。

そして、近くの女子に頼んで椅子を貸してもらい、勝手に簪の前に座った。

「……」

返事がない。そのかわりにキーボードを打つ音がする。

「あ、あっと…」

改めて目の前の女子を見る。

セミロングの髪で、楯無と対照的に癖毛のハネが内側に向いている。

人よりも細く、どこか虚ろに見える瞳は、俊貴の方を見向きもせずディスプレイを見ている。

さらに長方形レンズの眼鏡が、なんだか人を寄せ付けない雰囲気を

放ってる。

「初めまして。奥村俊貴です」

「…」

その指が止まる。

「…知ってる」

！

反応してくれた

よかった

そして、いきなり立ち上がる簪。

「？」

右腕を少しあげてからおろすと、また席についてキーボードを叩き始める。

「…えっと」

「…私には、あなたを…殴る…権利がある…。けど、疲れるから…やらない」

…やっぱりそのことか

簪の専用機は俊貴の不知火の追加装備やらなんやらで時間を割いたために、未だに完成してないため仕方がないといえば仕方ない。

「…殴るなら殴ってくれた方が楽なんだけどな。オレが悪いのはわかってる」

「……いや」

チラッと俊貴の方を見て、またキーボードを打つ。

…殴られないのはいいんだけど、罪悪感が…

「…用件は？」

「おお、そうだった。今度のタッグマッチ、オレと組んでほしいんだ」

「いや…」

いっえーい、即答速攻大否定！

だが、諦めん！！

「そんなこと言わないで、頼むよ」

「…イヤよ。それにあなた、組む相手には…困ってない…」

「いや、…みんな実は決まってて…」

楯無さんに頼まれたなんて言えない…

どうする…

「…ホントに？」

そういって、俊貴をジッと見てくる。

流石は姉妹。どことなく心のなかを見透かされてる感じがする。

「…ホントだ」

「……うそ」

ボソッと何か言ったみたいだけど、聞き取れなかった。

「え？」

「…何もない」

またディスプレイに視線を戻す。

「ここにいたか、俊貴！」

いきなり四組のドアを開けたラウラが俊貴の方に向かってくる。

「話がある。ついてこい」

そういって、俊貴の首根っこを捕まえて、引きずっていく。

日本語おかしいよ。ついてこいじゃないよ、これは…

「ま、また来るから、更識さん」

引きずられたまま簪に手を振る俊貴。

「…」

それをチラッと見て、すぐにディスプレイに目線を戻す。

・・・・・・・・・・・・

「さて、俊貴。タッグマッチは当然私と組むのだろうな？」

一組まで引きずられて戻ってきた俊貴に、ラウラが仁王立ちで聞く。

「えーと、いや…その…」

「これが申込書だ。さっさとサインをしろ」

「…ごめん。オレは組むやつ決まってるんだ…」

「何…？」

「本当にごめん！相手は決めてるんだ」

「……」

眼を細めて俊貴を見るラウラ。

「…もう一度言ってみろ…」

「え？もう一度？」

「…ええい！」

ＩＳの部分展開をしてプラズマ手刀を呼び出すラウラ。

そして斬りかかってきた。

「うおわあぁ！？」

「やめろ、馬鹿者。肉の焦げる匂いは焼肉屋だけで十分だ」

素早くラウラの手首を取り窓に向かって投げ飛ばす、千冬。

「教官！これは夫婦の問題です！」

窓にふわっと着地して床に降りるラウラ。

うわぁ、猫っぽい…

「何が夫婦だ馬鹿者。私はお前のような不躾な義妹はいらん」

「！！」

その言葉を聞き、横に倒れるラウラ。

「ら、ラウラ！」

慌ててラウラに駆け寄る俊貴。

「…教官に嫌われた。教官に嫌われた……」

抱き上げる俊貴を無視してぶつぶつ繰り返すラウラ。その瞳がかなり虚ろ。

「おい、奥村。ボーデヴィッヒを席に運べ。もう授業をはじめるぞ」

「…はい。ラウラ、起きろ」

「……私はもうおわりだ…」

起き上がる気配のないラウラを抱え上げて、席まで運ぼうとする。

「……ご飯食べたら部屋においで」

この状態をほっとけずにそう言ってから、歩き出す。

「……うむ…」

呆然としながら返事だけしたラウラ。まだ立ち直れそうだ

「ああ！奥村くんがボーデヴィッヒさんをお姫様だっこしてる！」

「や、やっぱりボーデヴィッヒさんが特別、ってそういうことなのね！？」

「と、俊貴さん！？一体、何がどうなって…説明していただきたいですわ！」

「わあ、ラウラずるいよ！特別って何！？」

クラスメイトに始まって、セシリアにシャルが立ち上がって俊貴の方に群がってくる。

「席につけ、馬鹿者ども」

出席簿アタックが今日も教室に響いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ごめん！セシリア、ホントにごめん！」

俊貴の部屋に夕食後すぐに来たセシリア。
俊貴は頭を下げる。

「…は？」

間の抜けた声をあげられた。

「いや、だから、オレはタッグマッチを組む相手ってもう決めてるんだ」

「で、ですから、わたくしを…」

「え？」

何か会話が噛み合わないな

「あー…、そういうことだから、ごめん！」

「…ごめんで、済むと思っていますの!?」

スターライトｍｋ?を召喚した。

「ぎいやあああ！」

「わたくしと組まないというのなら、いっそここで…！」

セシリアが銃を俊貴に向けた瞬間に、ドアからめしっと音がした。

「…は?」

「「!?」」

轟音をあげてドアがものっそい勢いでぶっ飛んできて、セシリアに当たる。

また、ドアが……

泣きそうになる俊貴

「おい、馬鹿者。部分展開とはいえ、ＩＳの無断使用には変わりないぞ。罰として第一グラウンドをＩＳ装着して十周！当たり前だが、ＰＩＣはもちろん、補助動力もいれるなよ。いいな」

「…お、織斑先生…」

なんというタイミング。

ま、まさか張ってたのか?

っていうか、ドア蹴破って吹き飛ばすなんて、どんな力してんだ…

ドア……

「さっさと行け！」

「は、はい！！」

背筋をピンと伸ばして返事をしたセシリアは部屋から走り去っていった。

「おい、奥村」

「…はい」

「お前はいつも騒動の発端だな。いい加減、相手は一人に決めろ。馬鹿者」

「…はい」

「…。あとでドアの修理申請を出しに来るように。そこの馬鹿者の後でもいい」

入り口から部屋を覗くラウラの方を見る千冬。

「…一緒にドア申請しに行こうか」

「……うむ」

千冬の横を素早く通り抜けて、俊貴の後ろに隠れて千冬を覗き見る。

…可愛いな

「…今から申請だすならさっさとついてこい。馬鹿者ども」

「は、はい…」

苦笑いしながら頷き、背中にラウラをひっつけたまま千冬についていく。

・・・・・・・・・・・・

「ふう…、今月二回目の新しいドアさん」

ドアを取り付けて一息つく俊貴。

「…」

それをベッドに座り、手にホットココアを持っているラウラが見る。

「……」

背伸びして俊貴がラウラの正面に座る。

「ちょっとは落ち着いた？」

ホットココアをちびちびと飲むラウラに聞く。

どうやら、俊貴の煎れたココアが結構気に入ってるらしい。

本人は、シャルの煎れるココアも好きだが、俊貴の煎れたココアが一番好きらしい。初めて飲んだのが俊貴のココアだったというのもある。

「…うむ、少しは力が出てきた」

「そう、よかった」

その返事に微笑む俊貴。

「…」

そして、ラウラがうとうとし始めた事に気付く俊貴。

え、ええ…
寝ちゃいそうなんだけど…

「ラウラ？」

「……なんだ？」

眠たそうな眼を俊貴に向けるラウラ。

「…寝るなら送ってくよ」

「…眠くなどない」

そういうラウラの表情に説得力はない。
今にも寝ちゃいそうなラウラ。

「…」

こりゃいっても無駄だな

そう思って立ち上がり、うとうとラウラの手からコップをそっと抜き取り、小さなタンスの上に置く。

「ラウラ」

ペチッとラウラの顔に掌を軽く当てる。

柔らかいほっぺたの感触が伝わるが、ラウラはボーッと俊貴を見ている。

…ラウラがこんな眠そうなの初めて見たな

そう思いながら、ラウラの横にゆっくりと座る。

ホットココアを飲んだこともあるが、俊貴といると安心するラウラは気を緩めていて眠くなり始める。

「おーい、ラウラ」

「…」

急にラウラが俊貴の膝の上にパタリと倒れた。

「ら、ラウラ!?」

それに驚きビクッと体を揺らすが、ラウラが膝に倒れたためすぐ動きを止める。

「……どうすんだよ、これ」

身動きできなくなった俊貴が困り出す。

ふとラウラの寝顔を覗き込む俊貴。

「…可愛い寝顔してんな」

ぷにぷにと頬をつく俊貴。

「…う…ん」

それに寝返りをうつラウラ。

仰向けになってしまった。

「…どうすっなぁ」

どうやってラウラを起こすか、考えながら何となくラウラの頭を撫でる俊貴。

「にしても、ラウラ達に悪いことしたかな…」

ふと事情があるにせよ、ペアを断ったラウラ達にそう思う俊貴。

「楯無さんの頼みで、妹さんと組む事になったとはいえやっぱ皆に悪いよなぁ」

ため息をつく俊貴。

「うーん…、ラウラ達に話しとくか？いや、ダメだ。一度受けた約束を蔑ろにはできない」

「っていうか、それは理解してもらおうと逃げてるだけか…。みんなを傷つけるのはわかってたことだし、その罰は受けないと皆に失礼だ」

「…その通りだな」

「！？」

仰向けになり撫でられた状態のままラウラが俊貴を見る。

「な！？い、いつから起きて！？」

焦る俊貴。

「ふん。それに気づけんとはまだまだだな」

「…」

固まったまま動かない俊貴。

「…約束の中身は聞かん。だが、罰を受けると言ったからには途中で投げ出すことは許さん」

頭に手を置かれたまま俊貴をにらむラウラ。

「…。うん、途中で投げ出すことは絶対にしない。約束は守る」

約束は破らない。それは俊貴の自分で決めた守るべき目標。

「ふん、いい顔だ」

笑って俊貴を見るラウラ。

「…ところで、起きたならそろそろ膝から降りて欲しいなぁ」

苦笑いして俊貴がラウラに尋ねる。

「断る。これはお前の罰の一つだ」

ふふん、と頭の位置を直すラウラ。

「う…、それを言われると……」

反論できない俊貴。

「…」

「…」

沈黙。

そして、不意にラウラが口を開く。

「……私を意識するのか？」

今度は何かを期待するように俊貴を見るラウラ。

「…え？」

「私を意識するのか、と聞いてるのだ」

頬を赤くさせながら見上げてくるラウラに、急にドキドキし始めた俊貴。

か、可愛い…

普段のツンケンとした態度のラウラと、こうやって見せる甘えた感じのラウラ。それはまるで猫のよう。

「えーと、意識はするよ…」

照れた笑みを浮かべながら答える俊貴。

「そ、そうか。お前に意識されるのも、悪くないな」

仰向けが恥ずかしくなったのか、ゴロンと寝返る。

「…ふむ」

ゴツゴツ固い気もするが、悪くない感じがする俊貴の膝。

「あ、あまり触らないでくれる？」

ぺたぺたと俊貴の膝を触るラウラ。

そんなぺたぺた触んないで…オレは健全な男の子ですよ、ラウラさん

「何故だ？」

キョトンとするラウラ。

「何故って……。場所が場所だし、オレだって健全な男の子だからね？」

「……ふむ、ならちょうどいい。このまま既成事実を作るとしよう」

そういって、ゴロンと寝返り、うつ伏せになるラウラ。

顎を俊貴の膝に乗せてニヤリと笑う。

「え、えっと、既成事実を作る？な、何をしようとしてるのかな？ラウラは…」

ふふん、と挑発的な笑みを浮かべるラウラに、ドキリとする俊貴。

「ふふん、大丈夫だ。色々と聞いてるからな、私に任せろ」

そういって、俊貴へと手を伸ばすラウラ。

な、何をする気なんだ…

ドキドキしながらその手の行き先を見る俊貴。

「ふふん、抵抗しないなら肯定したととる」

そういって、俊貴の膝と肩に手を置き、顔を近づける。

コンコン

「「!?」」

いきなりのノックの音に驚く二人。

「俊貴、ラウラ知らない?」

ガチャっとドアを開けて入ってきたのはシャル。

「あ…」

そして、部屋の状態をみて固まる。

俊貴とラウラが近い。二人とも顔が赤い。

「……」

「……」

「……」

三人とも黙る。

「…何、してたのかな?」

ゴゴゴゴ、と音がしそうな勢いで、でも天使のような微笑みをするシャル。

「え、えっと、これは、その…」

俊貴が焦る。

「ふふん、既成事実を作ろうとしてたのだ。さぁ、続きを…」

俊貴の顔に両手を添えて、顔を近づけるラウラ。

「「!?」」

それに驚くシャル。

だ、誰かいてもお構いなしなのか!?

「ラウラ!」

シャルが素早くラウラの首根っこを掴み、俊貴から引き離す。

そして、俊貴をジッと睨み付けた。

「…俊貴なんて、…俊貴なんて知らない」

そういって、振り返ることなくシャルはラウラを引きずって部屋から出ていった。

「……」

ただ、俊貴はそれを呆然と見る事しかできなかった。

簪と、怒るシャル（後書き）

こんにちわ

とりあえず報告として、箒の登場を決定しました。

まだ出てはきませんが、ゴーレム?が終わってから出す予定です。

では、よろしくお願いします

傾く簪の心

「…」

ＩＳ学園のＩＳ整備室。
そこに入り浸る楯無の妹である簪。

「……各駆動部の反応が悪い。どうして…」

メカニカル・キーボードをひたすら打ちながら、空中投影ディスプレイを見る。

この整備室に一人でいるのは、未完成の機体を独力で実用化するためだった。

かつて、楯無が‘ミステリアス・レイディ’で行ったことだ。
姉ができて、私にできなくはない。なんて思わない簪だが、最低でもこのくらいはできないと、姉の影さえ踏めないと心に深く刻んでいた。

「コアの適性値も上がらない…。タイプがむいてないの…？」

リヴァイヴの汎用性を参考に全距離対応型に組み上げられているそのＩＳは名前を‘打鉄弐式’と言う。
少し前に、謎の組織からターゲットとして狙われて俊貴により守られた機体だった。

「……ふう」

ため息をつき簪はディスプレイを閉じてキーボードを片付ける。

帰ってアニメでも見よう…

簪の趣味、古今を問わずアニメを見ること。ジャンルは決まってヒーロー・バトルもの。悪の軍団を主人公が打ち倒す、シンプルさがたまらなく好きなのだ。

今日は何を見よう…

そんなことを考えながら整備室を出ようとした。

「おっ」

自動ドアが開いた先には、俊貴がいた。
手には缶ジュースを持ってる。

「良かった。ちょうどいいよ。紅茶とぶどうジュース、どっちがいい？」

「…」

その言葉を無視して整備室を出る簪。そのあとを慌てて追いかける。

「ねえ」

「……」

「おーい」

「……」

「簪さん」

名前を呼ばれた瞬間に足を止める。

「名前で、呼ばないで…」

「…じゃあ、更識さん」

「名字でも、呼ばないで」

「じゃあなんて呼べば…」

泣きそうな顔になる俊貴。

「私に…構わないで」

それだけ言って、また歩き出す。

（…くっ！まだまけない！）

半歩遅れてまた俊貴が追う。

「とりあえず、ジュースだけもらってくれる？二本もいらないし」

「……」

「どっちがいい？」

そういってニコッと笑う俊貴。

「……じゃあ、ぶどうの方…」

「はい」

嬉しそうに缶を手渡す俊貴。
受け取ろうとした簪の指に俊貴の指が触れる。

「っ…！」

びくっと身をすくませて手を引く簪。
それにキョトンとする俊貴の顔が気に入らなかったのか、わずかにむっとした顔で缶ジュースを奪い取る。

「おっとと」

「……」

取るものだけ取って、またまたすたすたと歩き出す。

「えーと…そこのお嬢さん！」

「……」

「ちょ、ちょっと君の事だって！」

「…何のつもり？」

「名前で呼ぶなって言うから…」

「…そんな呼び方されるくらいなら、名前の方がマシ…」

「そっか。じゃあ簪さん」

ふぅ、とため息をつき、足を速める。

「簪さん。オレと組んでよ」

「イヤ…」

「そんなこと言わないで」

「…大体、どうして私と組みたいの…？」

「え？えーと…」

楯無の名前は出せない。

（どうしよっか……。あ！）

「えーと、簪さんの事が知りたいから」

「っ！」

俊貴に平手打ちをして走り去る簪。

「…え？」

ただそれを呆然と見ている俊貴。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うーん…」

部屋に戻ってきた俊貴は、さっき簪に叩かれた頬をさする。

「なぜ叩かれた…」

考えを巡らせる。

俊貴はベストな答えだと思っていた。

「…あれ？どこで間違えた??」

首をかしげる俊貴。

コンコン

と、ドアがノックされる。

「はーい、誰ですか？」

「私よ」

ドア切り裂き魔が現れた。

「俊貴君、今失礼なことを考えたでしょう？」

「ハッハッハ、何をおっしゃる子猫ちゃん」

「……シュークリーム買ってきたから一緒に食べましょう？」

「あ、はい。どうぞ」

室内に楯無さんをエスコートする。

この人には水のごとく流される。ミステリアス・レイディなだけに楯無さんはそんなこと考えてる俊貴を無視して、机の上に広げたままの分厚い案内書に目をやる。

「俊貴くん。もしかして整備科に協力してもらうの？」

「オレじゃなくて簪さんの専用機のことで頼もうかなと」

概要案内書を読んで、ＩＳ開発・研究・整備について調べていた。

「うーん、それはちょっと難しいんじゃないかしら」

そう言いながら、ベッドに腰かける楯無。

「楯無さんがあの機体を自分で組んだから、ですか？」

それを以前聞いていた。

ミステリアス・レイディを、七割がたできてたとはいえ、一人で組み立てた。

束ねさん程ではないのかもしれないけど、十分天才だ。

「そう。たぶん意識しちゃってるのね。気にしなくていいのに」

「さすがに気にしないってのは無理ですよ。妹だったらなおさらそれをいしきしちゃうと思いますよ」

「そう？」

「たぶん。天才の姉がコンプレックスになるのもわかる気がする…」

どこか寂しげな顔をする俊貴。

「…。でも私は結構薫子ちゃんに意見もらってたからね。それに、虚ちゃんもいたし」

「あの二人って整備科なんですか？」

「そうよ。三年首席と二年のエース」

そうなのか

黛先輩はただの新聞部部員じゃなかったのか…

「俊貴くん、君も一回見てもらいなさい。不知火の模擬戦見たけど、武装のエネルギーとスラスター出力が安定してないわよ」

「…そうですか」

シュークリームを取り出す楯無を見て、紅茶の準備をする。

「それで、どう？簪ちゃんの様子」

「…叩かれました」

「えっ？」

なぜか驚いた顔をする楯無。その間に紅茶の出来上がり。

「あの子、そういう非生産的な行動にはエネルギー使いたがらないはずなんだけど…」

「そうなんですか…」

「お尻でも触ったの？」

「触りません！」

「じゃあおっぱい？」

「…オレをなんだと思ってんですか…」

「んもう、しょうがないなぁ。言ってくれればおねーさんが触らせてあげるのに」

「え？…じゃなくて！」

「うわあ！何で脱ごうとしてるんですか！」

「うふふ、冗談冗談。ちょっと迷ったの見てからかってみただけよ」

そういってクスクス笑う楯無。

…迷ってしまった自分が憎い…

「…お茶どうぞ。ぱっくのですけど」

「俊貴くんがいれてくれたのなら世界一美味しいわよ」

「…。お世辞でもありがとうございます」

「うふふ」

この人は…

「しかし、あの簪ちゃんがねえ……俊貴くん、脈ありなんじゃない？」

「…殴られたのにまた行くんですか？」

「女の子は押しに弱いのよ」

「…楯無さんもですか？」

「私は押し倒されたいわ」

「…」

赤くなる俊貴。

「嘘でしょ」

「そうよ？」

……もうやだ、この人
人間不振になりそう…

「とにかく、簪ちゃんとちゃんと組んであげてね。あと、機体の開発も手伝ってあげなさい」

「命令ですか…」

「命令されるの好きでしょ？」

「なんでですか！」

「やん。怒らないでよ、ウソウソ。それに、俊貴くんなら言わなくても手伝うつもりだったでしょ？」

「……」

そういって微笑んだ楯無。

「んー。お茶、ごちそうさま。それじゃあまたね」

楯無はそのまま部屋を出ていった。

「シュークリーム食べよ…」

「うがあああああ！」

「あはははは！引っ掛かったわね、カスタードはマスタードに入れ替えておいたわ！！」

ドアの隙間から満面の笑みの楯無。

ひ、ひどすぎる！

「…」

無言でドアを閉じて鍵をかける。

「あ、あれ？おこってる？」

ドアの向こうから不安気な声が聞こえる。

「怒ってません。お休みなさい」

それだけ答えて扉から離れていく。

「…やりすぎちゃった、かな」

苦笑いして、しょんぼりと帰っていく楯無。

「落ち込むならやらなきゃいいのに…」

そっとドアの隙間からその後ろ姿を見て苦笑いする俊貴。

・・・・・・・・・・・・

「……」

簪は自室でルームメイトの邪魔にならないように布団をかぶり、そのなかで携帯のＴＶを見ていた。

小さなディスプレイでは、ヒーローが悪の組織を倒している。その画面を見つめる顔は無表情だが、これでも十分に楽しんでいる。いつもなら。

殴っちゃった……

三度目では耐えられた。

だけど、四度目の時は感情が高ぶって、やってしまった。

どうして、あんなこと…

確かに自分の専用機は俊貴のせいで未だに未完成だ。

けど、本人に悪意があるわけではないのが、ここ最近の態度でよくわかる。

私…甘えてるの…？

他人に対して能動的な行動をとってしまうことは、簪にとっては甘えだ。

更識家に生まれ、物心ついた頃にはすでに自分と姉との差を自覚していた。

姉に次ぐ親からの期待、比較されることに屈折する心。けれど、誰にも泣き言を言ったことはない。ただただ心を閉ざしていった。

それなのに

そのはずなのに

奥村…俊貴…

心に入り込んでくる男の影。

人懐っこい笑み、泣きそうな顔、ころころ変わる自分と違う表情を見せる俊貴。

「……」

なぜだかわからない気持ちになって、簪は頬を赤く染める。

画面ではヒーローアニメは終わっている。

傾く簪の心（後書き）

こんにちわ。

他のも執筆してると時間が足りない…
1つ終わらせてからにするべきだった…

でも、途中で投げ出すことは絶対にしないのでよろしくお願いします。

開き始める心

俊貴と簪が出会って二週間経った。

「ねえ、オレと組んでよ」

「絶対、イヤ…」

毎日この調子で、俊貴が簪につきまとっているという噂はあっという間に広まった。

そのせいで、専用機持ち組は……

パート1、セシリア

「俊貴さん…わたくしと組まなかったことを後悔させてあげますわ。ふ、ふふ、ふふふふ！」

スターライトｍｋ？とビット四基による一斉射撃。しかも偏向射撃によるホーミングで、セシリアは動いてる射撃ターゲットを全て撃墜する。

「震えなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるレクイエムで！」

パート2、鈴

「見てなさいよ俊貴…泣いて許しを請うても許さないんだから！」

ぐぐぐっ……と握り拳を作る鈴は、その瞳を闘志でメラメラ燃やしていた。

パート3、ラウラ

ロッカールームでベンチに腰かけ、ラウラは自分のナイフを磨いていた。
ふと、持ち上げて、仕上がりを確認する。

ピカピカのそれは、触れるだけでも切れるほどのものだろう。

「……ふ」

ナイフの刃に映る自分の顔を見て、ラウラの口から笑みがこぼれる。
教官にはいらんと言われ、俊貴とはタッグを組めず、私は何をしているのか…

こうなったら…
ラウラの中で暗い炎が灯る。

私が見せてやろう。真の恐怖を、その全身に刻み付けてやるぞ、俊貴！

ロッカーの奥に貼ってあった俊貴の写真に、投げたナイフが突き刺さる。

「私は勝つ！勝って、完全に俊貴を私のモノにしてみせる！」

立ち上がり拳を握るラウラの目には迷いがなくなった。

そうだ！見ていろ俊貴！！

キッとロッカーの中の写真を睨む。

…あ

そこで自分のした事に気づく。

「あああああああーっ！」

一枚しかない写真。それも、ネガごと買ったものだということをすっかり忘れていたラウラは、穴の空いた写真を恐る恐る両手で持って青ざめた。

せ、せ、せっかく、この世で一枚だけの写真だったのに…

ネガごと買った自分好みの俊貴の写真。

…やってしまった

ネガはすでにコピー封じのため燃やした。つまり、この世に一枚しかない俊貴の写真、ラウラの無二のお気に入り。それが、ナイフで思いっきり穴を開けてしまった。

「て、テープ…テープで留めれば、まだ……」

慌ててロッカーを漁るラウラだが、出てくるのはナイフばかり。

「え…」

がばっとロッカーから顔を出すラウラは、大きな声で叫んだ。

「衛生兵！衛生兵ー！」

その目が涙目になってるのは気のせいじゃない。

パート４、シャル

「すー…はー…」

中央タワー上空二〇〇メートルから真下を見る。タワー外周に沿って配置されたターゲットの数は五七機。しかも、それぞれが自動射撃を行ってくる実戦モデル。

「行くよ、リヴァイヴ！」

真下に向かって急降下するシャルロット。その両手には長大な五九口径重機関銃‘デザート・フォックス’が二挺握られていた。

「……」

速度を落とすどころかさらに加速をしながら、シャルは重機関銃を振り回してターゲットを落としていく。

弾切れと同時に、シャルは銃を捨ててその手にアサルトブレードを一対呼び出す。

最高速を維持したまま、シャルは地上へと一直線に向かっていく。

その途中でターゲットを切り裂きながら、ぐんぐんと地表が近づく。

地表に激突する寸前、体を百八十度回転させたシャルは、脚部ブースターの噴射によって体を支えた。…と、同時に量腕のブレードをクロスして投擲、最後のターゲットに見事命中させた。

「僕は強敵だよ。俊貴」

にこっ。その天使の微笑みは、だがしかし絶対零度の冷気を放っていた。

パート5、怜莉

「怜莉ちゃん、げーっと♪」

「な、なんですか！更識先輩！」

廊下を歩いていたところを楯無に捕まってしまう。

「あん、楯無って呼んでよ」

「た、楯無先輩。なんですか？何か用ですか？？」

「怜莉ちゃんは私と組みましょう！」

「は！？」

「お願い！私、組んでくれる人がいなくて困ってるの」

「は、はぁ…」

手を合わせて拝んでくる。そんな楯無を邪険にすることも出来なく

て、怜莉は少し戸惑った。

「ね？」

「まあ、その、そういうことなら構いませんが…」

「そう！ありがとう。怜莉ちゃんは優しいねぇ」

困り顔から一転、楯無は眩しいくらいの笑みを浮かべる。

うっ…！だ、騙された…？

そんなことを疑っていると、楯無が怜莉の手を取って歩き出した。

「さあ、行きましょうー。そうしましょうー」

「ど、どこに行くんです？」

「検査室。今の怜莉ちゃんのフィジカル・データ、見てみたいの」

「はぁ…」

「さぁ！いこー！！」

楯無は戸惑う怜莉を引っ張って検査室へと向かっていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

専用機持ち組から敵視されているのをへこみながらも、ちゃんと楯無との約束を守る俊貴。

「簪さん、一緒に食堂行こうよ」

「…」

とある情報筋から、購買でパンが売り切れているということを聞いた俊貴は、速攻で四組に入って、簪の手を握る。

「奢るから」

「い、いや…」

怯えた小動物のように身を縮める簪。

…仕方ない、この手は使いたくなかったが時間がない！

タッグマッチのペア申請が今日の五時まで。

かなり強引に簪を連れ出す。

「きゃああっ！？」

簪の体を横にして持ち上げ、自分の体に引き寄せて抱き抱える。

要はお姫様だっこ。

「簪さん、軽いな」

「う、うるさいっ…。お、下ろしてっ…」

「掴まっててよ！」

「!?」

簪の抗議を無視して、そのまま学食へと走り出す。

すれ違う女子が大声を上げていたが、このさい無視。

一階に降り、渡り廊下を抜けて、三ブロックからなる大きな食堂ホールのドアを開ける。

「とーちゃーく!」

思いっきりドアを開けて大声をだした俊貴に、何事かと視線が集まる。

「離しっ……、っ…、……!」

何度も繰り返して頭を叩いてくる。しかも、脚まで暴れさせて俊貴の顔に蹴りが一発入った。

「痛っ!ちょっ、こら、暴れるな!」

「ふーっ…!ふーっ…!」

「あんま暴れるとパンツ見えるよ」

「!?」

その言葉で簪は動きを弱くして大人しくなった。

「…さない…許さない…許さない…」

ぎゅっと噛みしめた唇でそう呟く。

そんな簪を地面に下ろして、逃げられないように手を繋ぎカウンターに並ぶ。

「簪さんはなに食べる？」

「……」

「じゃあジャンボカツカレーね」

「…肉、きらいなの…」

諦めたのか反応してくれる。

よかったよかった

「じゃあ、海鮮丼？」

「う…、うど…」

「うどん？」

「うん……」

俊貴を一瞬チラッと見て、もじもじと呟く簪。

「ふむ。何かつける？」

「かき揚げは…欲しい…かも…」

「かき揚げね。うまいよね、ここの」

「う、うん…。美味しい…」

「よーし、じゃあチケット買って、料理受け取って、テーブル探すか！」

「あ…。テーブル、奥の方が、空いてる…から…」

「あ、ほんとだ。…簪さんは目がいいね」

「べ、別に…ふつう…」

カウンターから出された料理を受け取る。

「あれ？メガネはなんでしてるの？伊達めがね？」

「これは、携帯用ディスプレイ…」

「へぇ」

「空中投影ディスプレイは…高いから」

「そっか。さて、テーブル行こうか」

「……」

頷いて、簪は俊貴の後についてくる。

空いてる奥のテーブルに向かい合って座る。

「いただきます」

「い…いただき、ます…」

俊貴は唐揚げ定食。

「……」

簪はうどんの上のかき揚げを箸でつゆの中に沈めていた。なんだか、ワクワクしてる子供のような感じでそれを見ている。

「おー、かき揚げべちょ漬け派か。サクサク派のラウラに気を付けなよ」

「…違う…これは、たっぷり全身浴派…」

おおぅ…新しい派閥きたよ。

「それにしても、今日も唐揚げは旨いな。簪さん、食べる?」

「え…?」

驚き顔をあげる簪。その口に、箸でつまんだ唐揚げを運ぶ。

「……」

ぼーっとそれを見た後、チラッと俊貴を見て、また顔をうつむける。

「そ、そうやって…」

「へ？」

「いつも……女の子を落としてるの……？」

「は？」

あれか？お姫様だっこの事か？確かにここに来てから、結構してる気がするけど、落としたことはないぞ？

「んー…、まあ、食べなって。あ、肉嫌いだったか」

「と…鶏肉は、平気…」

「そっか、よかった。じゃあ、あーん」

「あ…ぁ、ん…」

戸惑いながらももちゃんと唐揚げを食べる箸。

でも、一個が大きかったようで、まだ半分唐揚げが残っている。

「…」

咀嚼してる箸を眺める。

そして、ぱくっと残りも食べる箸。

「うまいよね」

「……」

こくんとうなずく簪。

そして、また二人は自分の食事に戻る。

ちゅるちゅるとうどんを静かにすする音が聞こえた。

そして、どことなく嬉しそうな簪。

・・・・・・・・・・・・・・

「であるからして…」

五時限目の授業。初等科四組の、その最後列でぼーっと授業を聞く簪。

聞いてるというより、聞き流していた。頭に入ってるし問題ない。

授業は問題ない。問題は別にあった。

食堂での俊貴。

「…」

甦る記憶。

あーん、で簪に食べさせてくれた。

俊貴の使った箸で唐揚げを食べた。

か、間接……キス…まで、しちゃった…

簪が口をつけたのを、嫌そうなそぶり無しで気にせず食べていた。

「っ……」

ボッと顔が赤くなるのを感じて、簪は慌てて教科書で顔を隠す。

うう……、ううううっ……？

わからない。俊貴がわからない。動機もわからない。

それ以上に自分の心がわからない。

ど、どう…したい、の…？私…どうなっちゃうの…？

考えれば考えるだけ落ち着かず、小さく身を揺する。

こんなこと…初めてで…、全然…わからない…

また、不意に俊貴の笑顔を思い出す。

「っー」

簪はおかしな声が出そうなのを必死でこらえようと、自分の太ももをつねる。

『わかんないなら、とりあえずやってみようよ』

えっ…？

なぜか聞こえた俊貴の声。思わず顔をあげて、そっと周囲をうかがう。

『オレと組もう。簪さん』

い、いや…

『なんで？』

だ、だって…わからない…わからないもの…。私…は、わからないものは…いやだから…

『でも、そうやってたってわかんないままだよ？』

そう…だけど…

『怖いことなんてないよ。オレに任せて』

あ…ぅ…

アニメに出てきそうな言い回し。でもそれが何より心地いい。

「オレと組もう」

「う、うん！」

差し出された俊貴の手を掴む。

珍しく興奮している簪は、手をとると同時に立ち上がった。

…あ、れ？

ふと、違和感に気づく。

手を握っても消えない俊貴。

あれ?…あれ?…あれれ?

困惑する簪。

幻のはずの俊貴はにぃっと笑みを浮かべた。

「よし!組むって言ったね?じゃあダッシュで職員室だ。時間がないからな!!」

俊貴に手を引かれて、教室を飛び出す。

そして、やっと気づく。夢じゃなくて現実だったことに。

つ、つまり……五時限目からぼーっとしてて、…六時限目になって…終わって…奥村くんが来て…誘ってきて…夢と勘違いして……

気づいたときにはもう遅い。職員室の前まで到着していた。

「じゃあ、入るよ」

「ま、まっ…」

止められず俊貴に手を引かれて職員室の中へ。

申請をしてる時もずっと手を握られていて、訳がわからないままサインしていた。

「よし!じゃあ早速今日から整備室で一緒にやろう!」

「え、えっと…」

「ＩＳスーツに着替えてくるから、整備室で待ち合わせね！」

「あ、の…」

そのまま走っていってしまった俊貴。その背中を見つめながら右手を伸ばしていた。

…何のために？

そう思ったら恥ずかしくなって、急いで手を引っ込める。

「……」

数分前の出来事を思い出す。

職員室に入るとき、待って、と言えなかった自分。

でも、言えなかったじゃなくて、‘言わなかった’のではないか？

「…」

頭を左右に振る。

でも、違うという言葉は出てこない。

簪は生まれて初めて胸に甘いうずきを覚えていた。

開き始める心（後書き）

こんにちわ。

台風が接近してますね。
愛知にも明日？明後日かな、来るのは。

勘弁してほしいです。雨戸やら何やら準備するのめんどくさいんですよね。

まあ、そんなことはどうでもよくて、ペルソナ４がやりたい。

簪の想い

「よし！じゃあ早速簪さんの機体を見せてよ」

第二整備室で俊貴と簪が一緒にいた。

専用機持ちだけのトーナメント。それはレベルの高い試合になるわけで、俊貴たち以外にも機体を整備してる生徒もいる。

わいわいと騒がしい。楽しげな声と、怒号が飛ぶ所もある。みんな真剣だ。

「へー、上級生の専用機って初めて見る」

「あっちが…中等科のフォルテ・サファイア先輩……専用機は‘コールド・ブラッド’…。向こうは、高等科のダリル・ケイシー先輩と‘ヘル・ハウンド・ｖｅｒ２．５’…」

いつもと違いすらすらと説明する簪。

「それで…奥にいるのが…」

「うっ……。セシリア…」

そこにいたのはセシリア。どうやら整備しに来ていたようだ。

おそらく整備科の中等科と高等科の女子を相手に相談している。

ふと、俊貴の視線に気づきこっちを見た。

「あ、あはは…」

「ふんっ！」

手を振ってみたら、ぷいっと全力でそっぽを向かれた。
タッグマッチのペアを断ってから、セシリア達は俊貴に冷たい。

みんなを傷つけた罰は受けると言ったが、やっぱりへこむ。

ちなみに鈴は会うたびに蹴ってくるため、俊貴は鈴を避けている。

ラウラは思いっきり無視してくる。

そして、一番へこんだのがシャル。『なにかな、奥村くん』と他人行儀。

「…そろそろ、はじめないと…」

「う、うん。そうだね」

俊貴が頷くのを確認して、簪は、クリスタルの指輪をはめた右手を軽くつき出す。

「おいで…、打鉄弐式，…」

簪の体が光に包まれ、装甲を纏うと同時に浮遊する。

「おぉ…」

打鉄の後継機であり、発展型と聞いてはいたが、その外見はだいぶ

違う。
スカートアーマーは機動性を重視した独立ウィングスカートに換装されており、防御型の打鉄に比べて、弐式は機動型。
腕部装甲もスマートなものとなり、格闘戦における運動性を活かす構造になっている。
肩部ユニットはシールドではなく大型のウイングスラスターがひとつに、小型の補佐ジェットブースターが前後で二基搭載されている。
打鉄と共通なのが、頭のハイパーセンサーは同じなだけで、後はほとんど共通点がない。

「ってか、機体は完成してる？」

ＩＳを跪かせて装着解除した簪が、首を横に振った。

「武装が…まだ…。それに…稼働データも取れてないから…今のままじゃ実戦は無理…」

「そっか。ちなみに武装って？」

「マルチロックオンシステムによる高性能誘導ミサイル…。それと、荷電粒子砲もまだ…」

「荷電粒子砲か…。まだ一回も使ってないし、うーん…」

不知火の武装に荷電粒子砲があるのは確認したが、火力は高いがチャージに時間がかかるため一度も使用してない。というか、使用してない武装のが多い。

「うーん…、参考になるかわからんけど、オレのデータで良かったら使ってくれ」

「…うん」

不知火のコンソールを呼び出し、データを空中投影ディスプレイに映し出す。

「おーい、データ見ないの？」

さっきは正面を見ていたのに、今は横を向いている簪。

腕を引っ張って、データを見せる。

「どう？」

「…」

「ん？」

「ち、近い…。ちょっと、離れて…」

「あ、ごめん」

手を離して離れる。

「…」

簪は俊貴に触れられていた腕をさすりながら、ディスプレイを見る。

「…」

その目は真剣で、関連データをチェックしていく。

「出力も安定してる…。すごい…この機体……」

何かぶつぶつ言いながら、自分のキーボードを打ち始める。

・・・・・・・・・・・・

「スラスター出力……チェック…」

第六アリーナのピットで自らの専用機である、打鉄弐式、のコンソールを開きながら、すべての数値をチェックする。

簪が飛行テストをしたいと言い出し、第六アリーナに移動していた。途中からのほほんさんが手伝ってくれたおかげで、今日はかなり機体構築がはかどった。中等科になれば、整備科にいくだろう。それだけの能力が本音にある。

（それに…）

俊貴の不知火のデータも役に立った。

なぜかデータ互換性が想像以上に高かった。

「……」

けど、もしかしたらそんなことよりも、俊貴の存在自体が大きかったのかもしれない。

（な、何…考えてるの…。私…）

赤くなる頬を、ごしごしと擦って誤魔化す。
そうこうしてたら、俊貴からプライベート・チャネルが入る。
「どう?行けそう?」
「う…うん…」
「じゃあ、オレが先に飛ぶから、タワーの一番上で合流しよう」
「わ、わかった…」
簪は腰を落として偏向重力カタパルトに両足をセットする。
そして、ｇｏの合図と共に、簪は一気に機体を加速、第六アリーナの空へと飛び出した。
・・・・・・・・・・・・
「機体は大丈夫?」
「大丈夫…」
「そう、よかった」
俊貴と合流して会話。
「じゃ、じゃあ…戻るから…」
これ以上ここにいると、何かがおかしくなりそうで、簪は俊貴の返

事を待たずに急降下を始めた。

「おぉ、速いな。セシリアと同じぐらいか？」

「た、たぶん…、データ上は…」

ドギマギしながら答える簪。

まるで俊貴から逃げるように急降下の速度を上げていく。

…あれ？

簪の後ろを飛んでいた俊貴は、おかしな点に気づく。

簪が駆る打鉄弐式、その脚部ブースターのジェット炎がちらついている。

あれっておかしいよな？

そう思って通信回線を開こうとした刹那、打鉄弐式の右脚部ブースターが爆発した。

「！？」

突然の爆発衝撃と、ブースターの片方を失ったことにより姿勢崩壊で簪は大きく傾き中央タワーの外壁へと一直線に突き進んでく。

「っ！」

ディスプレイに浮かぶ、‘エラー’。システムダウンを起こしタワーの外壁に迫る。

反射的に目を閉じる簪。

しかし、強い声が突き刺すように飛んできた。

「簪っ！！」

綺麗な赤い翼を纏った俊貴が、簪と壁の間に割り込む。

（あ…）

簪の体を抱き留め、背中から外壁に衝突する。

「うぐっ……」

操縦者保護があるとはいえ、衝撃を完全に殺せず、俊貴は苦痛に顔を歪める。

「お…おくむら……くん…」

「……大丈夫？」

苦笑いしながらも痛みを悟られないようにする俊貴。
その俊貴が簪にはたまらなく格好よく感じる。

「あ、あ…あの…、あの…っ」

「簪は大丈夫？」

「え…？う、うん…」

「そっか。それならよかった」

壁から体を引き剥がす俊貴。

その外壁は大きくへこみ、一部が割れている。相当な衝撃があったのがわかる。

「……」

俊貴に抱かれたまま、簪は自分の心臓が痛いほど高鳴ってるのを自覚する。

初めて密着する男子の体。でも、嫌じゃない。それは俊貴だからだ、と簪は奥手ながらも思っていた。

・・・・・・・・・・・・

「…やっぱり報告書提出か」

ピットに戻り、タワー破損の表示に駆けつけた先生に事情を説明して体に問題がないかチェックされた後、レポート用紙十枚分に相当する書類を渡された。

「ふぅ…。これ嫌いなんだよね」

「……」

簪が何だか申し訳なさそうな顔で俊貴を見ている。

「気にしない気にしない。簪のせいじゃないし、機体の事故じゃしょうがないよ」

「ご、ごめんなさい…」

簪の気持ちを読んだ俊貴の言葉にうつむく簪。

「ほら、気にするなって」

「う……」

簪は両手をギュッと握ってうつむく。

…やっぱショックか。自分で調整した機体が事故起こしちゃったし命に別状がなくてよかった。

それに、一人での力の限界を分かってくれたら、今よりずっと成長すると思う。

「ねえ」

「な……なに…？」

「整備科の人に手伝ってもらおうよ」

「……」

「タッグマッチまで時間もないし、安全第一で…」

「う…、うん…。そうする…」

こくんと頷く簪。拒否されると思ったため、それにちょっと驚く。

「じゃ、じゃあ、のほほんさんはともかく、黛先輩にも声かけてみよう」

「し、知り合い…なの？」

「うん。新聞部ってことでなにかと会いに来るから、自然と」

「そ、そう……なんだ…」

気のせいか、簪がムスッとしたような。

「…」

「…」

会話がなくなる。

さっきまでいた先生も帰ったので、今はピットに俊貴と簪のふたり。

「え、えっと…」

なんか話題…話題…

「あ、ああっ、あ…！」

手を握りしめた簪が、ずいっと俊貴の前に迫る。

「ありがっ！……とう」

「！……」

「助けてくれて……ありが、とう…」

簪は俊貴から離れて横を向く。胸の上で絡めた両手は、指を弄んでいる。

「当たり前だよ。パートナーだろ」

「……」

にしし、と笑う俊貴を、じっと見てくる。

「…格好、いい…」

「ん？」

「な、何でも、ない…」

「…そっか」

ふと外を見るともう夜になろうとしていた。

「帰るか。このままここにいても風邪を引くし」

「う、うん…」

頷くが、簪は歩き始めない。

「……」

「どうかした、簪さん」

「い、いらない…」

「な、何が？」

よく見ると簪の顔が赤い。

「さん、は…いらない…。か、簪で…いい」

そういって走っていってしまった。

呼び捨てでいい、か。少しは信頼してくれてるのかな？

そう思って、背中を見送る俊貴。

・・・・・・・・・・・・・

い、言っちゃった…

簪は自室でシャワーを浴びて、胸を高鳴らせる。

更識家の女には、下の名前で呼ばせることは、重要な意味がある。

「…」

顔を真っ赤に染めた簪は、高鳴りっぱなしの心臓を包み込むように胸に触れる。

あまり大きくない膨らみ。

「本音は……いいなぁ…」

同い年だというのに、2カップもバストサイズが違う。
その姉の虚も、しっかりとした大きな膨らみをもっている。
それに、実の姉も…

「っ！」

そこまで考えて、急激に頭が冷えていく。
恋という熱に浮かされていた簪は、現実のコンプレックスに捕まってしまい、身を小さく震わせた。

楯無…姉さん…

憧れであり、けして手が届かない目標である存在…更識楯無。
優しい姉であり、優秀な人、強い人で、魅力的な人。完全無欠。

私は…あの人には敵わない…

そう思ったのはいつ頃だっただろう。

その背中を追わなくなり、その顔を見つめられなくなり、同じ名前を背負うことを苦痛に感じ始めたのは。

「…」

「平気…。姉さんは、姉さん…。私は、私…」

私を簪と呼んでくれる俊貴がいる限り。押し潰されたりはしない。
やっと見つけたヒーロー。笑顔の眩しい人。

「奥村、俊貴…」

その名前を呼んでみる。不思議な活力が奥底から湧いてくる。

簪の想い（後書き）

こんにちわ。

今月しかも今週。
テイルズの新作が発売しますね。
はい、更新遅れます。
テイルズ大好きな作者ですので、更新が遅れます。申し訳ないですが、更新は続けますので宜しくお願いします。

大会前夜

「ふー…」

シャワーを上がった俊貴。

「なんとかなって良かった…」

最初は打鉄弐式の開発進行度に焦っていたが、黛先輩たちの力を借りてなんとか形になった。楯無の力があったからでもあるが

ドアがノックされた。

「はーい」

ドアを開けると、楯無が立っていた。

「ちゃお♪」

「ども。楯無さん」

「入っていい？」

「はい」

「じゃあ、お邪魔しまーす」

楯無はいつものように優雅な足取りで部屋の真ん中まで行き、ベッドにダイブする。

…そこオレのベッド

「俊貴くーん」

「はい」

「マッサージ」

パタパタと足を動かす。

パンツ見えたー

でも、この人に抵抗するのは意味がない。それどころか、抵抗したらますます条件が悪くなっていく。

やむなく楯無の体に手を当てる。

「そういえば楯無さん、明日は誰と組むんですか？」

「ん？チーム発表されたでしょ？」

「え？知らないです。…ってか、足凝ってますね」

「こら。全校集会で私がありがたーい挨拶をしたでしょうが。聞いてなかったわね？」

「あははは、そんなことあるわけないじゃないですか」

「俊貴くん、自分で信じてない嘘はついちゃいけないのよ」

「…あい」

「やれやれ。私のパートナーは怜莉ちゃんよ」

「れ、怜莉!?」

まさかの怜莉。それに驚く俊貴。

「俊貴くん、お尻揉んで」

「な、何で!そこは虚さんかのほほんさんに頼んでくださいよ!」

柔らかく、美しいラインの楯無のヒップ。また鼻血を出してしまいそう

「だめよ。俊貴くんの方がうまいもの」

「…くっ、卑怯な…」

誉められて普通に嬉しい俊貴。

「無心よ、無心♪」

うふふっと笑いながら告げる楯無。

…やらねばやられるってか

いやいや、んなわけねーだろ

「俊貴くん」

「は、はい」

「パンツ脱ごうか？」

「あ、はい。……って違う！ああ！ほんとに脱がないで！！」

「その顔が見たかったのだぁ♪」

にひひーと笑った楯無は俊貴に飛びつき、頬に触れる。

・・・・・・・・・・・・

「すぅ…はぁ…」

簪は、さっき調理室で作ったカップケーキを持って部屋の前に立っていた。

カップケーキの入っている袋をギュッと握り締め心を落ち着かせる。

「えっ…」

俊貴の部屋が急に開いた。思わず簪は体を隠す。

「んー！楽になったわぁ」

「っ…！」

聞こえてきたのは間違えるはずのない、楯無の声。

ど、どうして…あの部屋に…？

壁に隠れながら、ドア付近の様子をうかがう。

「はいはい、普通にしててくださいよ。脱がれたらやりませんからね」

「えー、いいじゃない」

そういって楯無が俊貴の腕に腕を絡める。

その光景を見た瞬間、簪は息が止まりそうになった。

ふたり、とも……仲良さそう……それに、脱ぐ…？

心がズキズキ痛む。

無意識のうちに、更に袋を握り締める。

「それで、どう？簪ちゃんの機体、なんとかなった？」

…えっ？

「はい。なんとか」

…どういう、こと…？

聞いてはいけない、そう思いながらも聞き耳をたてる。

「私の機体データ、役に立ったでしょう？」

…！？

声が出そうになったのを、慌てて口を塞いで背中を壁に押し付ける。

そして、ずるずると崩れ落ちる。

奥村くんが、持ってきた…実稼働データサンプル…

不知火のものだと思っていたそれは、それは…

「ああ、もらったんですけど、渡してないです。オレのデータは渡しましたけど」

！

じゃ、じゃあ、あれはやっぱり不知火のデータだったんだ…

「あらら、どうして？」

「確かに、役立つとは思ったんですけど、やっぱ自分の力で完成させた方が自信もついていいかなって思ったんで。それに、後で楯無さんが関わってたなんてわかったらショックを受けるだろうし…」

簪のプライド。

それを傷つけないようにした俊貴の行動。それは嬉しくもあり、悔しくもあった。

姉さんに追い付けるかもしれない。打鉄弐式を自力で完成させたら。

でも、やはり姉さんの根回しで打鉄弐式は完成した。

それが簪の心を苦しめる。

その場にいるのが辛くなり、走り出した。
無我夢中で自分の部屋へと走り出す。
その目には涙が溜まり始める。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

朝…だ…

泣きはらして真っ赤になった目を擦り、もぞもぞと布団から抜け出す簪。

気分は最悪。

だが、今日は専用機持ちタッグマッチトーナメントの大会当日である。
休むわけにはいかない。

行かなきゃ…

ふらふらと洗面所に入り、冷水を顔に思いっきり浴びせる。
少しはしゃんとした気分で、眼鏡をかけ直す。

「…」

今日は、頑張らないと

そう思う。無理矢理にでも

トーナメント表は、開会式に発表されるから……相手はそのときに……

けれど、勝ち進めばいつか楯無と戦うことになる。
それに胸が痛む。

「…」

俊貴と楽しそうにしていた楯無。それが当て付けじゃないと分かってても、心がくじけそうになる。

私は…あの人には勝てない…。かないっこ…ない…

きつく、下唇を噛み締める。
その目尻にじわりと涙が浮かんでいる。

ヒーローが、いたなら

そう思わずにはいられない。

「っ…！」

夢に見るヒーロー、その姿が俊貴と重なり頭を振る。

とにかく、行かなきゃ…

簪は消えてしまいたいくらい惨めな気持ちを引きずって、部屋を出た。

大会前夜（後書き）

こんにちわ。

テイルズが楽しすぎて更新が遅れると思います。
申し訳ないです。

人物紹介編（前書き）

新たにオリジナルの新キャラがまだ登場しないので、とりあえず予定を早めて人物紹介をしていきたいと思います。

原作に登場するキャラは、年齢が２０歳前後になった、という事ぐらいで変更が特にないので省きます。

人物紹介編

やる、と言ってすっかり忘れてた人物紹介をやっとやります。すいません。

まず、最初は主人公のこの人から。

奥村俊貴　（男）　２１歳

神様の手違いで死んでしまい、ＩＳの世界に転生した主人公。死ぬ前は、理系大学の４年生だった。成績、運動神経共に平均よりちょっと上。

普段は温厚で人当たりも良く、誰にでも優しい性格。咄嗟の頭のキレは目を見張るものがあるが、恋愛関係の、しかも自分の事となるとかなりの鈍感さをはっきする。

困ってる人をほっとけない質で、面倒ごととかにも自分から首を突っ込んでいく。特に、親しい人達が傷つけられようものなら、普段からは想像できない程に激昂し、自分を犠牲にしてでも守ろうとする。

料理とマッサージが得意。料理は１人でも暮らせるようにとやっていた。マッサージは肩揉みから始まって、何故か上手くなってしまった。

たまに寒いダジャレを言うが、最近は軽く流されるようになってきた。

ちなみに、シャル、ラウラ、楯無の３人が気になってるのだが、ホントに誰が好きなのかわからず、答えを出すのがまだまだ先になりそう。

銀の福音戦で、神様に新たな力を授かった。赤い瞳が金色の瞳に変

わるようになった。ラウラのヴォーダン・オージェと同じような物で、脳への伝達速度の向上、動体反射を向上させる。

・搭乗ＩＳ‘不知火’

俊貴が神様からもらった特別なＩＳ。唯一、束が製作に全く関わってないＩＳのため、未知数な部分が多い。

他のＩＳと比べて全体の装甲が薄く背中の大型ウィングが目立つ、赤がベースで黒い部分やラインが入っている。

機動力、攻撃力、バランスの3タイプに変形することが可能で、機動力は背中の大型ウィングを展開して、その中にある小型ウィングを使って機動力を上げる。攻撃力は、両腕と両脚、腰、背中にビットが装着され、両肩にビームブーメランが取り付けられた。攻撃力特化のため、背中の大型ウィングは展開しないが、大剣と二門のプラズマビーム砲がついている攻撃的な形態。バランスはその間をとった形態で、本編ではまだ一度も使ってない。

展開装備はビームピストル、エネルギー刃の刀と、腰に二門の電磁砲、左腕にビームシールドがついている。ビームピストルは、ビームと実弾の2タイプに切り換えられる。

背中のウィングが、太陽光はもちろん、電気の光でも取り込みエネルギーに変換する事ができる。無駄にエネルギーを消費するような事さえしなければ、エネルギーを供給できるためずっと戦い続けれる。

ワン・オフ・アビリティーは‘ヴォワチュール・リミュエールシステム’。背中のウィングからエネルギーを放出し、赤い翼のように展開する。高密度、高圧縮されたエネルギーを放出する事で、音速の域に達する。その翼により物理、ビームのダメージを和らげる事ができる。

まだまだ謎の多い機体。

・如月怜莉　（女）　２１歳

初等科3組のクラス代表で、アメリカの代表候補生でもある。
ＩＳ適性は‘Ｓ’。
肩まで伸びた綺麗な赤い髪。少しつり上がった黒眼。口もへの字になって、気の強そうな感じを醸し出している。そして、制服を突き上げる二つの膨らみ。スカートから伸びるスラッとした綺麗な脚。
アメリカで作製されたＩＳ‘イフリートヴァニッシュ’の搭乗者で、銀の福音の搭乗者ナターシャとも親交がある。
気の強い性格なのだが、優しく面倒見が良い。料理もできるため弁当を自分で作ってきたりしている。たまに俊貴にも弁当を作ってくれる良い娘。
ＩＳ学園入学時は、専用機が完成してなかったため、クラス対抗戦やタッグマッチトーナメントの時は観戦するしかなかったが、臨海学校の時に完成してアメリカに戻って取りに行っていた。クラス対抗戦等で、戦っている俊貴を見て一目惚れした。それ以来、俊貴と何とか接触しようとするが切っ掛けがなく、専用機が手に入ってから自分の腕試しとかこつけて俊貴と接触することに成功した。それで、俊貴を巡る争奪戦に加わる事となった。
実は、日本の大手会社として有名な如月グループの娘で、お嬢様。
アメリカの‘地図にない基地（イレイズド）’と如月グループはＩＳの共同開発を行っている。その関係で、怜莉は‘イフリートヴァニッシュ’の搭乗者となった。

・搭乗ＩＳ‘イフリートヴァニッシュ’

全体が赤いＩＳ。
両肩のアーマーに刃がビームのブーメランが一つずつ装着されていて、腕のアーマーには二つずつ銃口がむき出しになっている。腰には刀のような武器が左右に一つずつ着いている。脚の爪先の方はクローが出るようになっている。背中には六本の推進翼があり、大型

スラスターから左右対象に展開している。
ビームライフルを常に展開していており、他にも荷電粒子砲やビームバズーカ等、攻撃にかなり特化している。
ワン・オフ・アビリティーは、‘エクセリオンモード’で、機体の性能を一時的に倍に上げて、更に武器の火力も倍になる。それに伴って、機体の色が赤くなる。だがその分エネルギーをかなり消耗する。そのため諸刃の剣でもある。

これから敵側のオリキャラになります。

・シュレイル　（女）　２１歳

緑色のＩＳ‘グリューネ’の搭乗者で、３人のなかでリーダー格にあたる。男の様な話し方で言葉使いは乱暴。射撃、格闘共に得意。
責任感も強く、仲間を大事にしている。
最近は、俊貴に勝てない事に頭を悩ませている。

・搭乗ＩＳ‘グリューネ’

全身緑のＩＳ。
どこで製作されたのか不明。
ビームライフルとビームソード、シールドを持ち、背中に二基のビットを装着している。
ドリル状のランスを所持しているが、俊貴と戦った時に破壊されて、それ以降一度も使っていない。
遠近両方いけるため万能な機体でもある。

・シャーリィ　（女）　２０歳

３機のＩＳの黒い機体‘セーブル’の搭乗者。

シュレイルの性格上、それに対抗するために自ずと気が強くなっていった。
ただ、女の子っぽい所もあり、ぬいぐるみを集めるのが趣味だったりする。

・搭乗ＩＳ‘セーブル’

ビームライフルとビームサーベル、シールドを所持している。背中に2門のビーム砲を搭載して、腰に2本の連結型のビームソードを装備している。
他の2機と違い、近接特化したＩＳ。

・キール

3機のＩＳで青いＩＳ‘キュアノス’の搭乗者。
大人しく気の弱い性格で、他の2人がよく勝手な行動を取るせいで、任務の成功のために慎重になった。
自分に自信がないために、よく2人に怒られる。

・搭乗ＩＳ‘キュアノス’

全身が青いＩＳ。
他の2機と違い、遠距離主体のＩＳでビームライフルはもちろん、バズーカと両肩にミサイルポッドを装備している。近接武器として、唯一大鎌を装備している。
この機体だけ変形機能を持ち、戦闘機の様に姿を変え高速機動が可能となる。

この3機は試験機として製作されたために、ワン・オフ・アビリティーが無い。ただ、ＩＳは未知数な物のため、発動する可能性はゼロではない。

・レナス　（女）　２６歳

灰色のＩＳ‘グリーズ’の搭乗者。
性格は冷徹で狡猾。興味を持った相手には執拗以上に追いかけ回す。興味を惹かれない相手だと、冷たくあしらい簡単にその命を奪う。まだ一度しか戦っていないが、今まで戦った中で手応えのあった俊貴に興味を抱いている。
シュレイル達の増援として加わった。３人よりは上の位。

・搭乗ＩＳ‘グリーズ’

全身灰色のＩＳ。
背中に搭載された6基のビットが特徴的な機体。ビームライフルと普通のよりも大きめのビームサーベル。左腕にビームシールドを装備している。武器の数は少ないが、それをカバーするどころか有利な状態にまで持っていける技量があるため、レナスは気にしていない。

人物紹介編（後書き）

次から2回目のタッグトーナメントが始まります。

第一回戦　ＶＳセシリア＆ａｍｐ；鈴

「それでは、開会の挨拶を更識楯無生徒会長からしていただきます」

司会用のマイクスタンドから一歩下がる虚。

俊貴も一応生徒会副会長なので、楯無とのほほんさんの間に整列している。

「ふあー…、ねむねむ…」

「ちょっ、のほほんさん、教頭が睨んでるよ！」

「ういー…」

小さく頷くのほほんさん。

起き上がりのようにふらふらと左右に揺れた。

……また、あの逆三角が睨んでる…

教頭は逆三角の眼鏡にひっつめ髪、お堅いスーツ、濃いめの口紅。

生徒の間では鬼ババア等と呼ばれているが、鬼と言えばこの学園には既にいる。

織斑千冬という鬼が。

…あ、死んだ

ものっそい勢いで千冬に睨まれた。

「どうも、皆さん。今日は専用機持ちのタッグマッチトーナメントですが、試合内容は生徒の皆さんにとってとても勉強になると思います。しっかり見ていてください」

相変わらず圧倒的な存在感を放つ楯無。

「まあ、それはそれとして！」

扇子を勢いよく開く。

「今日は生徒全員に楽しんでもらうために、生徒会である企画を考えました。名付けて‘優勝ペア予想応援・食券争奪戦’！」

綺麗に並んでいた生徒たちが騒ぎだす。

「…それ賭けじゃないの？」

「奥村副会長、安心しなさい」

「は？」

「根回しは既に終わっているから」

ニコッと笑う楯無。

そして、誰も反対しない教師陣に気づく。

あ、千冬さん頭痛そう

「それに賭けじゃありません。あくまで応援です。自分の食券を使

ってそのレベルを示すだけです。そして見事優勝ペアを当てたら配当されるだけです」

「それが賭けですよ！」

ってか、そんなこと聞いてないし！

不意に、のほほんさんが裾を引っ張ってきた。

「おっくー、全然生徒会に来ないからー。私たちで多数決とってすすめましたぁ」

「くっ…」

最近は整備室やら部活派遣やらで行ってなかった。

「では、対戦表を発表します！」

大型の空中投影ディスプレイが楯無の後ろに現れる。

「うわっ！？」

第一試合、奥村俊貴＆amp;更識簪　ｖｓセシリア・オルコット＆amp;凰　鈴音

ま、まさかいきなりセシリア達とは…

ってか、一試合目多くないか？

簪は大丈夫かな？いきなりだけど

両手をあげて騒ぐ女子に埋もれて、その姿を確認できない。
各ペアは同じピットで待機だから、後で声をかけないと
簪の姿を探す俊貴を見た、ラウラとシャルがムッとするのに気づかない。

・・・・・・・・・・

ピットに一緒に入ってきた俊貴と簪。
俊貴は平然とアリーナをモニターで見ているが、簪は緊張と昨夜の事でガチガチになっている。

「固いよ、簪。ほら、リラックスリラックス」

ニコッと微笑む俊貴。

「う、うん…」

今まで、専用機がなくてこういう行事に参加でき無かったこともあり、この全員に見られてる感が簪の動きを鈍らせる。

うーん…
ちょっと固そうだな
オレがフォローしよう

苦笑いして頬をかく俊貴。

「気楽にいこう。勝つのは二の次でもいい。ＩＳの感覚に慣れるの

が大事だから、勝ち負けなんてどうでもいい。だから、もっとリラックスして」

「……うん」

俊貴の言葉で、少しだけ体が軽くなるのを感じる。

「よし、じゃあとりあえず相手の注意点として、セシリアのＢＴ兵器による偏向射撃、鈴の衝撃砲に気を付けて」

そういって、データを送ってくれる俊貴。
ディスプレイにセシリアと鈴のデータが映し出される。

「こっちは、簪の機体が出来立てってこともあって意表をつける」

「うん」

「好きに動いていいよ。ちゃんと合わせる、ってか合わせて見せるから」

「…うん」

「さぁ、行こうか。」

俊貴が不知火を展開した。いつもと違い、背中の大型ウィングが折り畳まれて小型ウィングの様になっていた。それでも、大きさは普通のウィングスラスターで機動力も蜃気楼の時とあまり変わらない速さ。
攻撃重視の型で、両腕にビットが一基ずつ装着されていて、そのままでもビームを放つ事ができる。他にも腰と脚背中に二基ずつビッ

トがついている。
背中に大型の刃渡り九〇センチ程の剣と、二つのプラズマビーム砲がついた。

「それが……不知火の、攻撃特化型？」

簪も打ち鉄弐式を展開する。
俊貴の展開武装の多さに驚く。

まだ、荷電粒子砲や双剣、等がまだ量子化されてるため火力は申し分ない。

「そうだよ。実戦で使うのは初めてだけどね」

そういって、カタパルトに脚をのせる。

「…そう」

俊貴が自分の近くのカタパルトを開けて遠くの方を選んだため、自分の近くの開けてくれたカタパルトに脚を乗せる簪。

そんな些細な気遣いを俊貴がしてくれることが嬉しい簪。

「さぁ、オッズ最下位のオレ達の力見せてやろう」

さっきモニターに表示されたオッズで、倍率が一番低かった。
逆に、楯無と怜莉のペアが一番高かった。

ニッと笑う俊貴の顔を見て、ドキッとする簪。

「う、うん！」

慌てて前を向き、頷く簪。

『選手、入場してください』

アナウンスがピットに響く。

「奥村俊貴、不知火。行きます！」

そういって、カタパルトから放出される俊貴。

「さ、更識簪、…打鉄弐式……い、行きます」

言わなきゃ駄目なのかな？と、戸惑いながらも俊貴の真似してカタパルトから放出される簪。

・・・・・・・・・・

歓声がわくアリーナに両選手が登場した。

俊貴と簪、セシリアと鈴が向かい合って浮いている。

セシリアと鈴の二人は、簪の方をチラッと見てから俊貴の方を睨み付ける。

…に、睨まれてる

「な、なんか…睨まれ…てる？」

簪が俊貴の方に近づいて聞く。

「あぁ…うん。睨まれてるね」

苦笑いして答える俊貴。

その距離感にますます睨む目が強くなる。

「俊貴さん！逃げずにいらっしゃったようですわね！！」

セシリアがオープン・チャネルで通信をしてくる。

何故か鈴もオープン・チャネルを開いている。

「あたしとセシリアがあんた達をぼこぼこにしてやるわ！！」

鈴がビシッと指を俊貴に向ける。

「ま、負けない…！」

簪が強く返した。口調はいつも通りだが、その目は強く輝いている。

その簪に俊貴がニッと笑い、セシリア達が驚き簪を睨み付けた。

「はは、よく言った！なら、オレは簪の意思を阻ませない！！」

そういって、俊貴が二人を睨み付ける様に戦闘体勢をとった。それに合わせて簪も戦闘体勢に移る。

「な、何なんですの、あれは！？」

「ふざけんじゃないわよ！」

二人はそれに激怒。
メラメラと闘志を燃やす。

…しまった、つい嬉しくなって、二人を怒らせちゃったぞ

闘志を燃やす二人を知ってか知らずか、試合開始のアラームがアリーナに鳴り響く。

「行きますわよ！」
「いくわよ！！」

セシリアと鈴が同時に、俊貴達へと飛ぶ。

「簪！」
「うん！」

俊貴は真っ直ぐセシリア達に向かうが、簪は真上に上昇した。

「わたくしが行きます！」

セシリアが方向を変えて簪へと飛んでいく。

「でえええあああぁ！！」

鈴が双天牙月を連結させて俊貴へと振り回す。

俊貴は左側の大剣を抜き、双天牙月を受け止める。

「はあぁぁ！！」

肩の衝撃砲，龍砲，が俊貴に放たれる。

「よっと」

が、俊貴はサマーソルトキックで鈴を下から蹴りあげて、砲門が俊貴からずれた。

「うぐっ！」

「…はっ！」

息を吐きながら大剣で鈴へと振り下ろす。

「こ、こんのおぉ！！」

鈴が脚で俊貴の攻撃を妨げようと、蹴りを繰り出す。

だが、俊貴はその蹴りを脚のアーマーで受け止めそのまま蹴飛ばして距離を開ける。

「そこっ！」

両肩のプラズマビーム砲を鈴に向けて放つ。

「きゃああ！」

ビームが鈴に直撃し、エネルギーを削られる。

「くぅっ！やってくれるわね！！」

空中で体勢を立て直して俊貴を見る。

「まだまだ行くよ」

ニッと笑って大剣を構え直す。

「……上っ等！」

鈴も双天牙月を構え直す。

「あなた、俊貴さんの何なんですの！？」

簪へと向けてスターライトｍｋ？を放つ。

「…な、何って……ぱ、パートナー…」

自分に向けられるレーザーを素早くかわす簪。

「なっ！？」

避けられると思ってなかったセシリアは驚く。

その隙に背中の二門の連射型荷電粒子砲‘春雷’を向けて放つ。

「な！？」

荷電粒子砲を慌ててかわし、簪へとビットを放つ。

「…ビット……」

ビットを四基確認して、ロックしようと狙いをつける。

「甘いですわ！」

セシリアがビットに気をとられている簪へとレーザーを放つ。

「っ…！」

それをギリギリでかわした簪。

…まだ実戦が少なすぎて、うまくいかない…

セシリアのピットの攻撃と、スターライトｍｋ?による射撃をかわすので手一杯になる簪。

偏向射撃のせいで、なかなか反撃につなげられない。

「くっ…！」

次第に焦り始める簪。

「ふふふ！残念ながらあなたに俊貴さんのパートナーはふさわしくなくてよ！！」

「！」

それを聞き簪は、超振動薙刀‘夢現’を取りだした。

「やあああ！」

声をあげて薙刀を振り、セシリアのビットを一基破壊する。

そして、そのままもう一基を破壊する。

「…やりますわね」

「私は……パートナー…だから」

じっとセシリアをにらみ返す。

「生意気ですわ！！」

偏向射撃で簪を狙うセシリア。

「うっ…！」

二基減っても、偏向射撃のせいで回避で手一杯。

「もらいましたわ！」

セシリアのミサイルビットから簪へとミサイルが放たれる。

「しまっ……！」

ビットの攻撃を大きくかわしてしまった簪の隙を、逃すほどセシリアは甘くない。

直撃する…！

だが、簪に当たる前にミサイルは二発のビームで撃ち落とされた。

「悪いけど、簪は落とさせないよ」

鈴と戦いながらビットを使って簪へ向かうミサイルを撃ち落とした俊貴。

「俊貴……！」

「くぅぅ！俊貴さん！！」

ダメージを負わせれたのに、俊貴が阻んでくるとは思ってなかったセシリア。

（ま、まさか鈴さんを相手にしながらもビットで更識さんを守るなんて……）

俊貴の相手をしてる鈴はキツそうなのに、俊貴はリミュエールシステムすら使っていない。

「あっ！」

下から振り上げられた大剣によって双天牙月が弾かれ弧を描き地面に刺さる。

「はっ！」

鈴を蹴り飛ばして腰の電磁砲を向けて放つ。

「きゃああ！」

直撃し地面へと落下していく鈴。

「さて、二対一だ。簪の強さもわかったろ？」

簪の隣に移動してきた俊貴。

「う…」

その言葉にセシリアが焦る。

最近完成したＩＳでろくに稼働していない、ということで油断していた。俊貴の時もそれで負けたのに、それがわかってなかったようだ。

「一気に行くよ、簪」

「う、うん！」

俊貴は大剣を、簪は夢現を構えた。

「くっ…」

残りのビットを展開して迎撃の体勢をとる。

「避ける暇は」

俊貴は二段瞬時加速でセシリアの後ろをとる。

「なっ！？」

正面に放ったレーザーは外れ、慌てて後ろを向くセシリア。

「…与えない！」

遅れて簪は、後ろががら空きになったセシリアへと夢現を振り抜き、前へと通り抜ける。

「そういうことっ！」

俊貴も同時に動いていて、大剣で振り抜き後ろへと抜ける。

要は、二人の位置が入れ替わった。

「「おわりっ！」」

二人同時にセシリアのアーマーを斬り裂く。

「あああぁ！！」

セシリアはそれをかわせずに地面へと落下していった。

「へへっ」

ニッと笑い、俊貴が右手を突き出す。

「…」

その右手を見てから、俊貴を見て照れながらも自分の右手を俊貴の右手にコツンと軽くぶつける。

そこへ試合終了の合図が鳴り響いた。

『試合終了！勝者、奥村俊貴＆ａｍｐ；更識簪！！！』

わあああ！、とアリーナに歓声がわく。

ふっふっふ、見たか！
オッズ最低のペアの強さを！
オレ達に賭けた人達！
期待してろよ！！

そう思いながら、ピットへと向かう俊貴と、そんなことを考えてる俊貴の横顔を見つめる簪。

第一回戦　ＶＳセシリア&ａｍｐ；鈴（後書き）

おはようございます。

今回はタッグトーナメント一回戦でした。
原作ではすぐゴーレム戦ですが、まだゴーレムとは戦いません。

でも、専用機持ちが少ないからトーナメント自体もすぐ終わっちゃいましたが（笑）

第二回戦　ｖｓシャル＆ａｍｐ；ラウラ

全学年トーナメントの二回戦。

一回戦を勝ち進んだ俊貴と簪は、次の二回戦のためにピットに待機していた。

「あの空気には慣れそう？」

ベンチに座った俊貴が聞く。

「……ま、まだ…ちょっと…」

自信なさげにうつむく簪。

簪も俊貴の隣にちょこんと座る。だが、その間は十センチ程離れてる。

「そっか、まぁ無理に慣れようとしなくてもいいよ。ゆっくり慣れていこう？」

ニッと笑う俊貴。

「う、うん…」

こくんと頷く簪。

「さて、次は強敵だよ。初等科の中でトップ組だよ」

空中投影ディスプレイに、次の対戦相手が表示される。
そこに写っているのは、シャルとラウラ。

二回戦は、まさかのシャルとラウラだった。

「…ＡＩＣと…ラピッド・スイッチ……だよね？」

しゃべり方はいつもと変わりないが、その瞳は真剣に二人のデータを見ている。

「そうだよ。でも、二人ともの能力が高いし、普通に苦戦するよ」

俊貴が顎に手を添える。

「…どう…するの？」

顔をあげて俊貴を見る簪。

「ラウラのＡＩＣは、一対一なら絶大な効果を持ってる。でも、一対多の場合は動きを止めるのには余り向いてない。だから、ラウラの相手をしてない方がＡＩＣを使った時にラウラの妨害をする」

「…でも……私には…」

指をもじもじしながらいじる簪。

どうやら自信がないようだ。

「できるよ。簪なら」

自信喪失している簪へと即答。

「…」

じっと見てくる俊貴を見返す簪。

その目は簪を信頼している。

「……やって…みる」

その信頼と、何より俊貴が自分を頼ってくれた事に喜びを感じる。

「うん。でも、無理はしないように。あの二人は甘くないから、無理だと思ったら妨害はいい。そこでミスったら確実にやられる」

「…うん」

「あー…、余計に固まらせちゃったか。大丈夫。簪はやれることをやってくれ。オレもやれることをやる」

「…わかった。……後は……何か、ある？」

「うーん…、おそらくシャルがいるからこっちの作戦はバレてるだろうし……」

俊貴が腕を組む。

元ペアでルームメートだった事もあり、俊貴をよく知ってる。

そのため戦い方もよくわかってるだろう。

「…どう…するの？」

「……。こうしよう」

「！？」

いきなり耳元に顔を近づける俊貴に驚く簪。
耳元でボソッと聞こえる俊貴に、ドキドキしながら耳を傾ける。

「……」

「…どう？」

顔を離す俊貴。

「……やってみる」

ギュッと手を握りしめて強く頷く簪。

「わかった。じゃあ、そろそろ時間だよ」

ベンチから立ち上がり、カタパルトに移動する俊貴。

「…うん」

簪もその後に続いてカタパルトに移動する。

「行こう！」

「…うん！」

二人がアリーナへと射出された。

・・・・・・・・・・・・

歓声がわくアリーナに二回戦の選手、俊貴と簪、シャルとラウラが位置につく。

「「……」」

シャルとラウラは無言で俊貴を睨み付けている。

「…また……睨まれ…てる」

今度はラウラが簪まで睨んでるため、その剣幕に押されている簪。

「…うん、睨まれてる。でも、飲まれたらダメだよ」

俊貴が軽く肩をぽんと叩く。

「…うん」

不思議と俊貴の顔を見たら、落ち着くと言うか自信が出てきたというか、力がみなぎってきた。

「……おのれ、何なんだ。あの女は…」

その様子をみていたラウラがあからさまに不機嫌となる。

アラームが待ち遠しい。

「…」

シャルも無言でそれを見つめていた。

そこへ、試合開始のアラームが鳴り響く。

「行くぞ！シャルロット！！」

「うん！」

そのアラームを聞いて、ラウラが二人へと突っ込んでいく。

ラウラの後ろで、ガルムを構えるシャル。

「やっぱりラウラが前に来たか」

俊貴がすっと簪の後ろに移動した。

「「！？」」

俊貴がそれを迎え撃つと思っていた二人は驚き動きが鈍る。

「…はあぁ！」

超振動薙刀‘夢現’を横に振り抜く簪。

「ちっ！」

それを急停止からのバックステップでかわすラウラ。

「ラウラ！」

シャルの声と共に、ラウラがその場に伏せる。

「！」

そこにはシャルがガルムを簪に向けて立っていた。

「当たって！」

ガルムから弾丸が放たれ、夢現を振り抜いた簪に向かう。

が、当たる前に弾丸はビームにより撃ち落とされた。

「！」

「……俊貴」

シャルとラウラが、簪の後ろでアリーナの半分の高さで浮いている俊貴を苦しげに見る。

簪は後ろを振り返らずに、後方の視界を映すウインドウを見てホッとする。

「……なのか…」

ラウラがうつむいて何かをぶつぶつ言い始めた。

「…？」

それに気づいた俊貴がラウラを見下ろす。
前に立ってる簪も警戒しながらラウラを見ている。
「…お前は……より……なのか…」
はっきりと聞こえなかったが、ラウラは顔を上げてプラズマ手刀を展開して簪に突っ込んだ。
「！」
それを夢現で受け止めた簪。
「はあぁぁ！」
「っ！？」
力で無理矢理、簪の夢現を後ろへと弾いた。
そのせいで簪はバランスを崩して尻餅をついた。
「簪！」
「させないよ！！」
簪のフォローに回ろうとした俊貴をシャルが目の前に立ち塞がる。
その手にはショットガン二丁が握られている。

「……シャル」

迷いのある目でシャルを見る俊貴。

「悪いけど、行かせないよ」

ショットガンを俊貴に放つ。

「くっ！」

ビームシールドを展開しつつ、後ろへと後退する。

「あうっ！」

ラウラの攻撃を何とかかわしていた簪が、アリーナの壁に追い詰められた。

「簪！！」

「相手は私！！！」

簪のフォローに入ろうとした俊貴をまたシャルが阻む。

こんな時でも自分だけを見てほしくなるシャル。

ラウラとキスしようとさていたのを目撃し、そのあと俊貴が簪をペアに誘ってる、と聞いてシャルはそれからろくに俊貴と会話してない。その反動もあって、今シャルの心には俊貴と会った嬉しさと、自分を見てくれない悔しさが半々だった。

「うおおおっ！」

ラウラが俊貴へとワイヤーブレードを放つ。

「くっ！」

右腕と左足にワイヤーが絡まり、動きが鈍る。

「お前は私よりこいつのが大事なのか！？」

思いっきりワイヤーブレードを引っ張る。

「うおっ！？」

俊貴が地面の方へと引っ張られる。

左腕のビットで、右腕のワイヤーを撃って焼ききる。

「後ろがガら空きだよ！」

俊貴へとガルムを放つシャル。

「ぐあっ！！」

背中に直撃し、ウィングの二枚が破壊される。

更に、爆発により地面へと叩きつけられる俊貴。

「うっ……！」

呻くが、すぐに体勢を立て直す。

「はああっ！」

「！……っ」

立ち上がった俊貴にプラズマ手刀の切っ先を向けて突っ込んでくるラウラ。
それを下から刀を振り上げて弾く。

「まだまだぁ！！」

もう片方のプラズマ手刀を横から振り抜く。

「くっ！！」

無理矢理前に体重をかけて、ラウラに体当たりする。

「なに！？」

それによりバランスを崩し、攻撃の手を阻まれる。

「あの状態で…」

無理矢理攻撃を防ぐ俊貴に驚きつつも、照準を俊貴に合わせるシャル。

「…俊貴！」

ラウラが左目の眼帯を外して、俊貴へと手を向ける。

「ＡＩＣ…！」

ラウラのＡＩＣにより俊貴の動きが止まる。

「もらったよ！」

シャルのガルムから弾丸が俊貴へと放たれる。

「…っ」

それに気づいた俊貴だが、ＡＩＣで動けない。

…くそっ、避けれない、直撃コースだ…

「……俊貴っ！」

体勢を戻した簪が春雷を放ち、弾丸をかき消す。

そして、ラウラへと夢現で攻撃して俊貴へのＡＩＣをとく。

「助かったよ！」

俊貴の横にきた簪にお礼を言う俊貴。

「……うん」

頷きラウラを見る簪。

「反撃、いくよ！」

「…うん！」

俊貴と簪、二人が同時にラウラへと向かう。

「！？」

「二人同時！？」

シャルとラウラが驚き、ラウラは迎撃体制をとる。

「はああっ！」

俊貴が刀を取りだし、ラウラに斬りかかる。

「くっ！」

プラズマ手刀でそれを受け止める。

「…はっ！」

簪の夢現がラウラの装甲を切り裂く。

「ぐあっ！」

その斬撃にラウラが怯む。

「はっ！」

俊貴がその隙を狙ってラウラを蹴りあげる。

「うあっ！！」

「ラウラ！」

シャルがカバーに入った。

俊貴へと近接ブレードを取りだし斬りかかる。

「…シャル！」

振りかざされたブレードが俊貴の目の前を通りすぎ、地面を抉る。

「…させ…ない！」

簪が夢現を振り抜き、俊貴とシャルの間に割って入り春雷を放つ。

「うっ！」

その春雷をシールドで防ぐ。

「どけっ！シャルロット！！」

ラウラがシャルを横にどけ、レールカノンを放つ。

「きゃあ！」

簪にレールカノンが直撃し、アリーナの壁に叩きつけられる。

「簪！」

視界に写った簪を見る。まだ動けそうだ。

「出し惜しみしてる場合じゃない、か！」

俊貴が一斉にビットを展開した。

「ビット！？」

「ちょこざいな！」

シャルとラウラの周りを俊貴のビットが旋回し、ビームを放つ。

ビットで二人の動きを止めながら、俊貴は簪の元へと向かう。

「…俊貴…！」

「まだいける？」

「……大丈夫」

俊貴の問いに頷く簪。

ビットを戻し、簪を立たせてシャルたちの方を見る。

「……反撃」

「開始！」

簪が前、俊貴が後ろの陣形をとり二人へと突っ込む。

「シャルロット！」

「うん！！」

それを二人とも砲門を開き、迎撃。

だが、それは俊貴のビットで弾丸を撃ち落とされる。

「……そこっ！」

打鉄弐式の春雷を二人に放つ簪。

「っ…！」

「ちぃっ！！」

二人が左右に別れて回避した。

「逃がさない！」

ビットをその回避先に回り込ませてビームを放つ。

「うわっ！？」

「くっ！」

そのビームが直撃してよろける二人。

「やあぁぁ！！」

簪が再び春雷を放つ。

「きゃあ！」

「うあっ！」

春雷の荷電粒子砲が二人に直撃する。

地面に二人とも叩きつけられた。

「…ごめん」

俊貴の視界でシャルとラウラのアーマーと武装を次々とロックする。

不知火の攻撃特化時のマルチロックオンシステム。今までずっとこの攻撃特化スタイルを使ってなかったためデータ収集を兼ねて、このトーナメントを攻撃特化で出場した。

簪のマルチロックオンシステムにも使えるかもしれないしね

ーマスター、エネルギー充填完了。いつでもいけます

「了解！フルバースト！！」

全てのビットと四門の電磁砲、両手のビームライフルを一斉に放つ。

白いビームと蒼白い電磁砲がシャルとラウラに直撃する。

声をあげさせずに、二人のアーマーと武装を破壊した。

ビー、と試合終了の合図が鳴り響いた。

『シールドエネルギー消失を確認。勝者、奥村俊貴＆amp;更識簪！！』

「ふう、何とかなったね」

「…うん」

武器を量子化する。

「……戻ろうか」

シャル達の方へと行きたいのを我慢して、ピットに戻る。

「…負けちゃった」

その場にちょこんと座って、ピットに戻っていく俊貴の背中を見つめるシャル。

「ふん。相手の手がわかってると思ってたが、向こうも我々の手をわかってたか」

ラウラが立ち上がりシャルに手をさしのべる。

それに、ありがとうと答えて手をとり立ち上がる。

「新しいフォームに加えて、裏をかかれちゃったね」

「ああ。あの攻撃特化は厄介だ。それにタッグであの女も中々の実力だった」

「うん。甘く見すぎちゃったね」

シャルが苦笑いして答える。
ラウラは無表情だが悔しそうだ。

「俊貴の読みのが上だったわけだ」

シャル達は、前に俊貴が出てきて二人を相手にしつつ、簪がどちらかの隙を突いてくる、と思っていた。

だから、俊貴をラウラに任せてシャルは簪に注意する予定だったのだが、俊貴が後衛となりフォローに回った。
しかも、攻撃特化のため火力に申し分なしで簪のフォローにもってこい。

俊貴と簪のコンビネーションと、その力を見誤ったのが敗因だろう。

「…あーぁ、悔しいなぁ」

「…そうだな。もっと腕を磨かねばな」

そう話ながらピットに戻る二人。

第二回戦　ｖｓシャル＆ａｍｐ；ラウラ（後書き）

おはようございます。

ちょっと更新遅れました。テイルズやりすぎてたかも…

まぁでも、更新はしてきますのでよろしくお願いします。

第三回戦…！？

二回戦を何とか勝ち抜いた俊貴と簪。

簪はピットのベンチに一人腰かけている。

俊貴は破損したＩＳを修復しに整備室へと向かっていていない。

（……どうしよう。ついに、お姉ちゃんと戦う事になっちゃった）

簪は空中投影ディスプレイに映る楯無と怜莉をボーッと見つめる。

このペアはシードにはまり試合をしてない。

（どうしよう…、また昨夜の事を思い出しちゃった…）

昨夜、俊貴の部屋から出てきて仲良さそうにしているのを目撃してしまった。しかも、簪のＩＳ〝打鉄弐式〟の完成にも絡んでいた。

それは、完璧な姉に追い付こうと努力していた簪の心を傷つけた。

それを思い出してしまい、一旦は普通に戻った気持ちが落ち込んでくる。

（…私は、お姉ちゃんには、勝てない…）

その場に俊貴が居れば、少しは違ったかもしれないが一人のせいで簪はドンドンと深みにはまる。

・・・・・・・・・・・・

「後、どれくらいですか？」

整備室でＩＳを直している俊貴がモニターを見ながら、整備科の教員に聞く。

「五分もあれば大丈夫ですよ。慌てないでください。直るまで試合は始まりませんから」

教員が苦笑いしつつ答える。

「そうですか」

そこじゃないんですが
簪を一人にしてるのが不安なだけなんですが

次の相手が、楯無とあって一人にしとくと落ち込んでいきそうで不安をあおる。

「…まぁ、いいか。とりあえずオレピットに戻るんで、直ったら試合開始の合図出しちゃってください」

「…ちょっ、奥村くん！」

さっさと整備室から出ていった俊貴の後ろ姿に手を伸ばす教員。

「……はぁ、しょうがないなぁ、もう」

呆れつつも不知火の修理をする。

だが、第三回戦、決勝戦は、毎度の乱入者によりまた中止となる。

・・・・・・・・・・・・・

「織斑先生！」

「山田先生、状況は？何が起こっている？」

「しゅ、襲撃です！こ、これを！」

息を切らしながら、携帯を取り出す。そこに写っていたのは、先ほどアリーナの天井を破壊してきた〝敵〟の姿が写っている。

「こいつは…！？」

「以前現れた無人機と似たような機体だと思われます！」

「数は？」

「五機です！各アリーナのピットに上空からの降下によって出現、そこで休息をとっていた専用機持ちの生徒が襲われています！」

それを聞き千冬は顔を歪める。

「…早すぎる…。まだ〝あいつ〟は出せない……」

「…え？」

らしくない焦りかたで漏らした独り言を聞かれて、口を閉ざす。

「お、織斑先生！私たちはどうしたら！？」

懇願するように千冬を見る真耶。

ＩＳ学園において、予測外事態の対処における実質的な指揮、は、すべて千冬に一任されている。過去の実績に起因する。

「各セクションの状況は？」

「前回と同じく、最高レベルでロックされています」

「わかった。教師は生徒の避難を優先。同時にシステムロックを解除しろ。戦闘教員は全員が突入用意、装備はレベル？でツーマンセルを基本に拠点防衛布陣をしけ！後、奥村はどうした？」

「り、了解！お、奥村くんはまだＩＳが修理できてないらしくて、ＩＳは整備室で確認されてます」

「…ＩＳは？本人はどうした？」

「ピットに行くと言って連絡が取れてません」

「……まったく、何をしてるんだ。あの馬鹿者は」

頭を抱える千冬。

「…とりあえず、今言ったことを伝えろ。奥村を見つけたら修理が終わるまで隠れてろ、といっておけ」

「は、はい！」

背筋を伸ばして答え、機体をとりに格納庫へと向かう真耶。
その背中を見送ってから、千冬は思いきり壁を殴り付ける。

「やってくれるな…。だが、甘く見るなよ」

千冬はその目に怒りを宿しながら、はっきりとつぶやく。

・・・・・・・・・・・・

「あ、あ……あっ…」

突然の襲撃者、それにまったく対応できずＩＳ展開すらできてない簪。

歯をガチガチと鳴らしながら、怯えきって後ずさる。

（なに……これ…？なん、なの…？）

恐怖が簪の思考を止める。

「ひっ…！？」

壁にぶつかり止まる。

壁を見て、ゆっくりと前を向く。

「…」

漆黒の無人機‘ゴーレム？’が迫ってくる。

（たす…けて…。誰か、助けて…！）

目を閉じ祈るように念じる。

アニメのようなヒーローが助けてくれる、そう思ってただひたすらに念じる。

「…」

だが、現実は夢やアニメのようにいかない。

ゆっくりとゴーレム？が近づいてくる。

「…く、む…ら…く…」

ゆっくり伸ばされるゴーレムの腕。

その指が触れる瞬間、簪は全力で叫んだ。

「奥村くん！！」

「うおらあああ！！」

叫んだ後に、誰かの叫び声と共に、ゴーレムの伸ばされた腕が弾かれた。

簪を助けたのは、俊貴。

ただ、ＩＳを展開しておらず手には鉄パイプを何故か握っている。

無理矢理、排気管のパイプを引き抜いたようだ。

（お、奥村くん…奥村くんが、来てくれた…！）

そんな俊貴でも、簪には大きな存在だった。

簪の心のヒーロー。

（奥村くん…）

「うおおお！」

ＩＳを展開してないのに、鉄パイプ片手にゴーレムに向かっていく俊貴。

「くっ！」

俊貴の攻撃を右腕で簡単に受け止めるゴーレム。

「うわっ！？」

受け止めた右腕を横に振って俊貴を吹き飛ばす。

「簪！ＩＳを展開しろ！」

「は、はい！」

簪が慌てて打鉄弐式を展開する。

俊貴はその間にもゴーレムに鉄パイプで戦っている。

「ううっ！やべぇ！死ぬ！！これマジで死ぬ！！！」

両手で持った鉄パイプを振るい、ゴーレムに攻撃して攻撃されてを繰り返す。

ゴーレムから繰り出される一撃が重くて、受けるので手一杯。俊貴は喚きながら必死に戦う。

「こ、これ以上は…！」

「俊貴！」

そこへ簪が俊貴のとなりに移動してきた。

「いける？」

「うっ、うんっ！」

システムもチェックし終わり、戦闘体勢をとる。

（私、私は……一緒に戦いたい！）

そう願った瞬間、打鉄弐式のエネルギーが大きく膨れ上がる。

「行くよ…打鉄弐式！」

簪は、ＩＳを展開してない俊貴を守るためにゴーレムに突進。

背中に搭載された荷電粒子砲『春雷』を二門を脇の下からくぐらせ正面を向かせる。

「これなら、外さない…！」

零距離の荷電粒子砲の連射。

「！？」

だが、簪の攻撃はゴーレムの周囲に浮いた可変シールドユニットの防御で防がれた。

「簪、外へ出るぞ！」

「で、でも、アリーナのシールドがロックされてて…」

「大丈夫だ！ここに来るときにロックを外した！」

「あ…」

アリーナのシールドがロックされてなければ、俊貴はアリーナに入っては来れない。俊貴が今アリーナにいるのは、アリーナのロックが外れている事を意味する。

「行くよ！」

「う、うん！」

超振動薙刀‘夢現’を呼び出し、両手で支える。

鉄パイプを持った俊貴と、簪は同時に飛び出す。

・・・・・・・・・・・・

「でやあああ！」

怜莉が操る二刀で同時に払いあげをし、ゴーレム？は右腕部ブレードを弾かれる。

その衝撃で体勢が崩れる。

すぐ体勢を立て直そうとするが、その隙を楯無は見逃さない。

「もらったわ！」

特殊ナノマシンによって超高周波振動の水を螺旋状に纏ったランス‘蒼流旋’による一点突破の突撃、それがゴーレム？の体に突き刺さった。

だが、その体を貫通する前に左腕がランスを掴んで止める。

「怜莉ちゃん！背部展開装甲をオン！私を押して！！」

「わ、わかりました！」

水の螺旋は回転力を増し、甲高い音を立ててゴーレムの腕を削る。

「くっ！なんて硬い装甲を使ってるの！？」

「楯無さん、いきますよ！」

「ええ！」

怜莉の強力な推進力を受けて、楯無とゴーレムはアリーナ・ゲートへと突っ込んでいく。

「…」

加速していく三機のＩＳ。

楯無のミステリアス・レイディと怜莉のイフリート・ヴァニッシュがアリーナのシールド接近警告を発するが、二人はその表示を無視した。

「くらいなさい！」

楯無はさらにランスに装備されたもう一つの武装、四門ガトリングガンを射撃した。

ゴーレムは可変シールドユニットを使ってそれを防ごうとするが、その背中をアリーナ・シールドに叩きつけられた。

「くうっ！！」

その衝撃と、背後からの強力な推進に挟まれ、楯無は顔を激痛に歪める。

「楯無さん！」

「大丈夫よ！それより、このままこの無人機の装甲を突き破るの！」

「で、ですが…！」

「いいからやりなさい！」

怒号を受け、怜莉は困った顔をしたあと、目をつぶって出力をあげ

る。

「ぐ、う…」

背中に強烈な重量感がのしかかってくる。

でも楯無は攻撃の手を止めない。火花を散らして装甲にダメージを与える。

「楯無さん！」

「ふ、ふふん…。まだまだ、おねーさんの奥の手はこれからよ」

両手で支えていたランスを左手一本に任せ、楯無は真上に向かって右手を突き出す。

「最大火力、受けてみなさい…！」

ミステリアス・レイディの全身を纏う水が楯無の掌の上に集まる。

通常は防御にまわすアクア・ナノマシンを一点に集中させ、強力な攻撃力とする必殺の一撃。

「ミストルテインの槍」

「…」

エネルギーの流れを感知したゴーレムが大型ブレードで楯無を斬りつける。

「くっ…ああっ！」

ミストルテインの槍を作り出してるため、防御できない楯無はされるがままに斬撃を受ける。

しかし、その顔からは笑みは消えない。

「怜莉ちゃん」

「…はい」

「展開装甲をすべて防御に回しなさい。巻き込まれるわよ」

「…た、楯無さんは！？」

「ふふん、おねーさんは不死身なのよ」

そういって笑う楯無の笑顔はいつもと同じ笑み。

「いくわよ…！」

「ダメです！死ぬ気ですか！！」

返事はしない。ただ、微笑みを返す。

ーミストルテインの槍、発動ー

・・・・・・・・・・・・

突如、アリーナの外に出た俊貴と簪は、反対側のゲートの大爆発に

驚く。

「な、なんだ…!?まだ、他にもアレがいるのか?」

鉄パイプをギュッと握りしめて煙が上がっている方を見る。

…不知火、まだなのか!?

「奥村、くん!」

「おお!?」

急に簪に体を引っ張られて空中へと浮く。

そこへ、俊貴のいた場所にレーザーが飛んできた。

「…くそ!うっとうしいな!!」

「私が…!」

そういって、簪は俊貴をゆっくり地面に降ろす。

「簪!無茶だ!!」

「でも、今の奥村くんは邪魔…。向こうのゲート確認してきて…」

「……、わかった」

ＩＳを展開してない俊貴は、簪の言う通り足手まとい以外のなんでもない。守るものが自分だけなら、少しは簪も戦いやすいかもしれ

ない。

俊貴が返事をしたのを聞いた後、簪はゴーレムと斬り合いを始めた。

…楯無さん！怜莉！無事、だよな！！

そう願いつつ、ゲートへと向かう。

ゲートに近づくと、煙の中に誰かを発見した。

「楯無さん！怜莉！」

返事の変わりに帰ってきたのは予想外の物だった。

「うわっ！？」

ゴーレムの巨大な左腕が煙の中から現れ、俊貴の首を掴む。

「う…くっ…！」

煙の中からゴーレムが姿を現し俊貴を見上げる。

首を掴まれてもがくが、人の力では抵抗にもならない。だんだん息がしづらくなる。

「ぐあっ！」

そんな俊貴を地面へと叩きつけるゴーレム。

全身に伝わる衝撃。

その激痛に顔を歪める。

が、無理矢理体を起こして体勢を整える。

「…？」

ふと、ゴーレムの後ろの瓦礫で見覚えのある水色の装甲が見えた。

「…た、楯…無…さん？」

そう言葉にした瞬間、怒りが沸き起こってくる。

「てめえぇぇぇ！！！」

俊貴が怒り一色の怒号をあげ、左腕を掴む。

「来い！！不知火っ！！！」

そう叫んだ瞬間、俊貴の体を光が包む。

・・・・・・・・・・・・

（一人じゃ、勝てない…！）

薙刀と荷電粒子砲。その両方でゴーレムと戦っている簪だが、ゴーレムの性能に次第に追い詰められていく。

反対側のゲートを見に行った俊貴も気になる。

「…」

ゴーレムは超高密度圧縮熱線を雨のように降らせる。
それを脚部ブースターで回避する。
「…！？」
後退した先の瓦礫で、見間違うはずのない物を見た。
姉、楯無のミステリアス・レイディ。
「っ…！」
不安が一気に募り、そこを拡大する。
「！！」
楯無。
装甲をズタズタにされて、地面に倒れたまま動かない楯無。
（い…や…、うそ……うそ…）
叫びたい
でも、声がでない
名前を呼びたい
でも口が動かない
世界が歪む
簪の見ている世界が歪んでいく

気持ち悪い
気持ち悪い
気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

はきそうになりながらも、簪は視線をゴーレムに戻す。

「…」

無機質なライン・アイのバイザー。少女のようなボディライン。不釣り合いに巨大な左腕。右腕は何故かスマート。

そのすべてが

憎い

「……壊して……やる……」

ぼそりと漏れたつぶやき。

けれど、その響きには殺意が含まれている。

「うわあああああっ！！」

叫びながらゴーレムへと瞬時加速を行う。

少し遠くで誰かの怒号が聞こえた気がしたが、今はそれどころではない。

簪は、両手で振りかぶった薙刀をゴーレムに叩きつける。

金属音が響き、ブレードによって切断された薙刀が、回転しながら宙を舞い地面に突き刺さる。

「あああああっ！！」

だが、簪は止まらない。

荷電粒子砲を至近距離で向けて連射する。

「…」

着弾の衝撃でゴーレムが後退。
それを追い、距離を詰めて連射。

その繰り返し。

「ゆる…さ、ない…」

撃つ

撃つ、撃つ、撃つ

「許さない！」

可変シールドユニットが入り込む隙を与えず撃ちまくる。
強固な装甲がついに砕け、コアが露出した。

（これを吹き飛ばせば…！）

勝利を確信した簪。
荷電粒子砲のトリガーを引くが、そこからエネルギーは発射されない。
荷電粒子砲のエネルギーが切れた。
「っ…！」
顔をあげると、目の前にゴーレム。
「あうっ！」
ブレードで薙ぎ払われ、地面に叩きつけられた簪。
（つ、使える…武装…）
倒れたまま武装のウィンドウを呼び出す。
だが、残りの武装は八連装ミサイルポッド，山嵐，だけ。
でも、ゴーレムの強力なジャミングで、通常のロックオン・システムでは自動追尾機能が効かない。
いくら高性能爆薬を積んでても当たらないと意味がない。
（奥村くんに動きを止めてもらえば…）
そう思った瞬間、大きな爆発とともに俊貴が簪の隣に投げ捨てられてきた。

ＩＳを展開してはいるが、装甲が所々損傷している。
意識のない俊貴の頭を、別のゴーレムが掴みあげる。
「や…め、て…」
簪は涙を流して声を絞り出す。
（もう、ダメ…。私なんて、所詮……）
楯無の仇もとれず、無力に転がる自分が嫌で仕方ない。
でも、恐怖で立ち上がれない。怖くて顔を上げれない。
（奥村くん…ごめんなさい…）
ペアでごめんなさい
助けられなくてごめんなさい
役立たずでごめんなさい
生まれてきてごめんなさい
「うっ…。ううううっ…」
ひどく惨めな気分になりながら、自分の存在が消えてしまえばいいと願う。
そして、気づく。

ヒーローなんて、この世にいない
そう思ってしまったらもう絶望しかない。
ゆっくりとゴーレムが近づいてくる。
そして、ブレードを振り上げ、下ろす。
それをボーッと虚ろな瞳で見る簪。
なぜかその間が遅く感じる。
（ああ…）
死ぬのだろうか
そう思うとすべてがどうでもよく感じる。
なんの価値もない人生、つまらない時間だった。
「…」
解放感があるわけでもない。
心が空虚になったせいで恐怖心もない。
ゴーレムのブレードが体を斬る。

第三回戦…！？（後書き）

こんにちわ。

ゴーレム？前編でした。次は簪の見せ場ですね。
原作でも頑張ってましたが、こっちでも頑張ってくれます。

では、次もよろしくお願いいたします。

前へと進む意志

ゴーレム?により襲撃を受けたＩＳ学園。

その襲撃により、死を受け入れ願った簪。

ゴーレムの振り下ろしたブレードを虚ろな瞳で見る。

「…え?」

だが、その簪とゴーレムの間に割って入る人影。

そのおかげでブレードは簪に届かない。

その人影が簪を抱き締める。

「おねえ…ちゃん…?」

楯無だった。

大切な妹を守るために、最後の力を振り絞った。

かばって斬られた背中から血が流れ出す。

「おねえ…」

音を立てて体が崩れる。

「お姉ちゃん!お姉ちゃん!!」

倒れた楯無を抱き起こす。
背中に回した腕が、暖かな血で赤く染まる。

「やだ……やだよう……お姉ちゃあん…」

「あは…。そう呼ばれるの、何年ぶりかしら…？」

「おねえ…」

妹の無事を安心して嬉しそうに笑う楯無。

「どう、して…こんな…」

「妹を助けるのに、理由が必要…？」

「だって！だって…もう、無理なんだよぅ…」

「無理じゃ…ないわ」

「無理だよ！この世にヒーローなんか、いないんだよ！」

「そう、かしら…？」

笑みを浮かべる楯無。
その優しい表情。

「でも…、でもおっ…！」

涙が止まらない簪。
そんな妹を、楯無は優しく撫でる。

「ね…俊貴くん……」

「…え？」

そう言われて、俊貴の方を向く簪。

「くっ…！」

俊貴が自分の頭を掴むゴーレムの手を掴む。

「と…俊貴……」

思わず声を漏らす簪。

「うおおおおっ！」

声をあげて自分の頭からゴーレムの手を無理矢理放す。

「はあああああっ！！」

その手を引き裂く俊貴。
コードや部品がバラバラに散らばる。

「ううううっ…！うう…！」

肩で息をする俊貴。

その目は金色に輝き目の前のゴーレムを睨み付けている。

俊貴が目の前に立つゴーレムを蹴飛ばす。

「うあああっ！！」

俊貴が蹴飛ばしたゴーレムのコアを鷲掴みして無理矢理本体から引きちぎる。

「！……」

コアを本体から引きちぎられて機能停止するゴーレム。

「うううっ！！」

簪と楯無の前に立つゴーレムを睨み付ける俊貴。

「…」

俊貴を最優先ターゲットと認識したのか、目の前の二人を無視して俊貴へと突撃してくるゴーレム。

「！ううっ…」

その突撃を受け止め、地面を削りながら少し後退する。

「うがあああああっ！！」

ゴーレムの腕を掴み、地面に叩きつける。

そして、ゴーレムの装甲に刀を突き刺す。

「！……」

それにビクッと体を一瞬揺らして動かなくなる。

刀がコアに到達し、コアが破損したようだ。

「…ほら、ね？」

楯無が笑う。

「…うん……うん…」

簪は涙をポロポロ流して頷く。

「…早く、医務…室に」

そういってフラフラになりながらもアリーナの出口に向かう俊貴。

「ま、待って…！」

「……」

アリーナから出ていこうとした俊貴を止める簪。

それに何も答えずに振り返る俊貴。

「待って…行かない、で…。あなたのＩＳは、もう…限界…。それに……あなたも……」

その簪の言葉に首を横に振る俊貴。

「ど、どうして…？死ぬのが、怖く…ないの…？」

困惑する簪。

それに俊貴は不器用に笑う。

「怖いよ」

「だったら…どうして…！？」

「オレは、やれることをやらずにいる方が死ぬんだ」

「え…？」

「今逃げたら、オレの心が、信念が死ぬんだよ」

その言葉に強い意思を感じた。

俊貴の‘守る’という信念。例え守るのがシャル達じゃなくても。

それを聞いた簪に、返す言葉も、匹敵する想いがなかった。

「…ありがとう、行ってくる」

リミュエールシステムの赤い翼を纏う俊貴。

そのまま飛んでいった。

「どうして…」

俊貴の背中をただ見送る簪。

自分もあんな風に強ければ良かったのに
自分も戦える勇気があれば良かったのに

「私…」

その顔からこぼれる涙が楯無の顔に落ちる。

「卑怯者だ…」

戦えない理由ばかり思い浮かんで、前へと進めない。

「私…やっぱり、ダメだったよ…お姉ちゃん…」

悔しくて悔しくて仕方ないのに動けない。

『ダメなんかじゃないわ』

「……お姉ちゃん？」

楯無の声が聞こえた気がして、簪は慌てて腕の中の姉を見る。

だが、意識のない楯無は動かない。

『いいじゃない。弱くても、卑怯でも、みっともなくても。人間だもの』

確かに聞こえる楯無の声。

前に、俊貴とラウラの間で起きたＩＳによる精神干渉。

それが簪と楯無の間に起こっていた。

それを知らない簪は幻なんだろうかと思う。

でも、心に響く声はぬくもりと優しさに満ちている。

『だからね、簪ちゃん。弱さも小ささも受け入れなさい。受け入れたら、彼みたいに立ち上がれるわ。だって…』

「に、人間…だから…？」

『そうよ。それに……私の自慢の妹だもの』

楯無の優しい笑顔を感じた。

「…」

簪は楯無をゆっくりと地面に寝かせると、しっかりと自分の脚で立ち上がり俊貴の向かった先を見た。

「行ってくるね…お姉ちゃん」

涙はもう止まっている。

・・・・・・・・・・

「怜莉！」

俊貴は同じアリーナで気を失っている怜莉に気づいて駆け寄る。

「…と、俊貴…」

装甲に大した損傷がないため、楯無の技の衝撃で気絶したようだ。

装甲の損傷だと俊貴のがボロボロだ。

さらに、ゴーレムのせいで生身の方も激痛で悲鳴を上げている。

「まだ動けるか？」

「う、うん」

「よし、行こう。まだあの無人機は三機いるみたいだから」

「あれがまだ三機も…」

「…一機こっちに来た」

俊貴と怜莉の前にゴーレムが現れた。

怜莉が苦い顔をする。

「怜莉、オレがお前を守る」

「！」

守る

怜莉も、楯無さんも、簪も守る

「一度決めたことを守り通せなくて、何が男だ！！」

赤い翼を纏いゴーレムに刀で斬りかかる。
甲高い音をたててブレードが俊貴の刀を受け止める。

「くううぅっ！」

それを無理矢理押しのけ、ゴーレムを横一閃に切り裂く。

「浅かった…！」

有効打にならず焦る俊貴。

「でもっ！」

俊貴が体当たりでゴーレムを突き飛ばそうとする。

が、びくともせずに俊貴へと熱線を放つ。

「ううぅっ…」

ビームシールドでその熱線を受け止める。

「俊貴っ！」

怜莉がゴーレムの腕を切り裂き、熱線を途中で止める。

「助かった……！怜莉！！」

ゴーレムが標的を怜莉に変えて、ブレードを振り下ろす。

それに気づき俊貴が怜莉の前に割って入りブレードを受け止める。

「うらあああっ！」

その一撃を押し返して、反撃をしようとした俊貴にゴーレムの左腕が突き出されていた。

「やばっ…」

攻撃をくらう
そう思ったが、俊貴にゴーレムの攻撃は行われなかった。

「あ、あれ？」

「俊貴っ！離れてっ！！」

ゴーレムは俊貴を見ておらず斜め上を見上げている。

聞いたことのある声だったが、今までで一度も聞いたことない大声だった。

「簪！」

思わず笑みがこぼれる。

立ち直ってくれた事が俊貴には嬉しかった。

「早くっ！」

「うん！」

俊貴は怜莉と一緒にその場から離れる。
それを確認してすぐ打鉄弐式のミサイルがゴーレムを襲った。
「…」
エネルギーシールドで防いでいるが、ゴーレムの足を止めるのには充分だった。
「怜莉！」
「うん！」
俊貴と怜莉はその隙を逃さず、俊貴は左から、怜莉は右からゴーレムに向かう。
「「はあああああっ！！」」
同時にゴーレムを斬り裂く。
「！…」
紫電を発して胴体を真っ二つにされ爆発した。
「…ふう、きっついな」
「倒すのも一苦労ね」
ウインドウで不知火の状態を確認する俊貴。

怜莉も状態を確認する。

「損傷率七十%超え…。このままだとマズイかな…」

頬をかく俊貴。

「でもまだゴーレムはいるよね？」

「…うん、まだ他のアリーナに反応がある」

俊貴のレーダーにはまだ反応が一つ残っている。

「…どうするの？」

「行くさ。まだやれるからね」

「うん、行こう…」

俊貴の返事にすぐ頷く簪。そう答えるのがわかっていたようだ。

「じゃあ、残りのゴーレムもさっさと倒しましょう」

怜莉も頷く。

・・・・・・・・・・

（マルチロックオン・システムなら、二人のフォローが……できる）

ゴーレムに俊貴と怜莉が二人がかりで戦っている。

だが、簪のマルチロックオン・システムはまだ完全に扱えるだけのプログラムがない。

（それなら…）

簪は空中投影キーボード、それも、フルカスタムのものが上下二枚。

そしてキーボードを呼び出し一気に入力を始める。

「各弾頭の機動性、タイムラグ、爆発における相互干渉、発揮できる攻撃力…」

簪の目の前には数十枚のウインドウが開いている。

「すぅ…はぁ…」

息を吸い込み、はきだす。

「この‘山嵐’から、逃れられる…？」

肩部ウイング・スラスターに取り付けられた六枚の板がスライドして開く。

その中から八連装ミサイルが四十八発顔をのぞかせる。

「力を貸して、打鉄弐式！！」

すさまじい音を立てて、ミサイルが一斉に発射される。

「ダイレクトリンク、確立…！マニュアルロック、開始…！」

ゴーレムに向けてミサイルが一斉に放たれる。
直線的な動きでなく、複雑な三次元躍動をしながら急速接近していく。

「…」

ゴーレムは可変シールドユニットを展開し、同時に左腕の熱線でミサイルを撃墜しようとする。
が、完全マニュアル制御されたミサイルは、的確に回避を行い、可変シールドユニットの中枢部分を吹き飛ばした。
シールドを無くして、スラスターで回避をとろうとするゴーレムに、簪のミサイルが追い討ちをかける。

「…」

全身にミサイルが当たり装甲がどんどんと砕かれていく。
が、ゴーレムは左腕にエネルギーを集中させる。
ミサイルのマニュアル制御をして無防備な簪へと熱線を放つ。

「やらせない！」

怜莉が両腕のビームシールドを展開し熱線を防ぐ。
攻撃が通らない。そう判断したゴーレムは熱線を連射に切り替えてごり押しを始めた。

「うっ…、た、耐えて！」

連射による衝撃に耐える怜莉。

「オレもいるんだぞ！」

俊貴がゴーレムの左腕を荷電粒子砲で撃ち抜いた。

左腕を素早く切り落とし、誘爆を防ぐゴーレム。

「…」

痛みを感じないゴーレムはすぐに俊貴に向かってブレードを振り抜く。

「でやあああっ！」

荷電粒子砲を量子化して大剣を取りだし、地面を蹴りすぐ攻撃に出る俊貴。

大剣を真っ直ぐ真下に振り下ろしゴーレムの装甲を切り裂く。

「…」

その一撃でゴーレムの装甲からコアが現れた。

「終わらせてやる！」

金色に光るコア。

それを思いきり大剣で突き刺す。

「……」

ゴーレムの全身に紫電を走らせる。

そして、その場から離れる俊貴。

次の瞬間、ゴーレムは爆発。

轟音をたてて、アリーナに空気の振動が伝う。

ー残りのゴーレムの反応なくなりました。他の専用機持ちと教員が対処したと思われます

そっか、わかった。ありがと

「二人ともお疲れ。ゴーレムは全滅したみたいだよ」

俊貴が怜莉と簪の元に向かう。

「はぁ、やっと終わった…。あんなのの相手なんてもうしたくないわ」

「…うん」

怜莉の文句に簪が頷く。

確かに、固い装甲に稿威力の攻撃、高い機動力。そんな機体を相手にするのが楽な訳がない。

三人にかなりの疲労が溜まっていた。

「取り合えず、医務室に行こう。楯無さんも早く治療しないと」

「うん」

「うん…」

楯無の元に向かう三人。

前へと進む意志（後書き）

こんにちわ。

ゴーレム？後編でした。

と、いうわけで原作に追い付いてしまったのでオリジナル展開にしていきます。

解けるわだかまり

「ん…」

ぼんやりとした意識で、楯無は2回ゆっくりとまばたきをする。
白い天井と、窓から差し込む夕日の光が部屋に入ってきている。

「お、お姉ちゃん…」

呼ばれて、声のした方を向く。
そこには、椅子から立ち上がり楯無を心配そうに見る簪がいた。
目が覚めるまでずっと待ってたのだろうか。

「気が、ついた…？」

「うん…。ここは…？」

ボーッとする楯無は、簪にぼんやりとした口調で聞く。

「学園の、医療室…。奥村君が、運んでくれた…」

「そう……。あたたた」

まだボーッとするが、楯無は体を起こそうとした。
でも、背中から激痛がし、痛がる楯無に慌てた簪に止められた。

「う、動いちゃ、ダメ…。命に別状はないけど…傷、浅くないから…」

「うん…」

急に2人とも無言になる。

そんな中、2人は同じ事を考えていた。

こうして姉妹ふたりきりで話すのは何年ぶりだろう?、と。

ずっと妹に気を遣っていた姉。
ずっと姉を恐れていた妹。
でも、そんなことはまるで嘘だったかのように、ふたりは自然な沈黙に浸ってた。

(俊貴くんのおかげかなぁ…)

最初に簪と組むことを頼んだ時の事を思い出す。
今思い返すと、不思議なものだった。

(どうしてお願いしたのかしら…)

あの時は気がつかなかったが、妙な確信があった。

俊貴に任せておけば大丈夫、と。

(彼に…)

ゆっくりと、楯無の頬が赤みを帯びていく。

(甘えたかったのかしら…)

はっと自分が赤面していることに気がついた楯無は、妹に見られまいとして顔を背けた。

「お姉ちゃん…」

「な、なに？」

「どうしたの…？顔、赤いよ……？」

（ぎゃあ）

どうやらしっかりとばれてしまったらしい。

「ゆ、夕日のせいでしょ…」

「そう…」

また沈黙。

少し経ってから、簪が何度かためらった後、思いきって言葉を口にした。

「あ、あの、ね……お姉ちゃん…」

「ん？」

「…今まで…ごめんなさい…」

「気にしなくていいのに」

「で、でもっ…」

勝手なイメージで、勝手に壁を作って、ずっと避けていた。
簪はそんな今までの自分が恥ずかしくてたまらなくなる。

「私…ダメな妹だから……。今回も、打鉄弐式も、タッグマッチも……お姉ちゃんがいなかったら……」

「……聞いてたの？」

楯無が済まなそうな顔をする。
前日、俊貴と楯無の会話を簪が聞いていた事を初めて知った。

簪のタッグマッチ参加、打鉄弐式の完成、前へと進む意思。すべて、楯無のおかげ。

タッグマッチ参加は俊貴が諦めずにアタックしたからでも、それをさせたのは楯無。

姉として、妹を助けたいと思う。それは当然で、今回が簪を助けるチャンスだった。

「私…ホントにダメだから…」

「そんなことないわ」

楯無は痛みに耐えながら体を起こすと、今にも泣き出しそうな簪を抱き寄せた。

「あなたは、私の大切な妹よ。とても強い、私の妹…」

優しく頭を撫でられ、我慢していた簪の目から一気に涙が溢れ出す。

「お姉ちゃん…。おねえちゃぁん…」

「ん」

長年のわだかまりが解けた姉妹、２人だけの医療室。

それを夕日が優しく見守っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「シャル！ラウラ！」

俊貴が保健室のドアを勢いよく開けて、中に駆け込んできた。

「あ、俊貴…」

「どうした？そんなに慌てて」

保健室のベッドで横になっているシャルとラウラが不思議そうに聞く。

「２人とも怪我は！？」

不安げに２人を見る俊貴。

ゴーレムを殲滅し終わって、重体の楯無を医療室に運んだ後に、山

田先生から2人が保健室にいるというのを聞いた。
それを聞き、俊貴は急いで保健室まで来た。
「この程度で負傷兵扱いとはな」
ラウラがふん、と鼻を鳴らす。
「…」
シャルの方を見る。
「…ぼ、僕も大丈夫」
ぎこちなく笑うシャル。
パッと見で右腕に包帯を巻いてる以外は怪我がなさそうなシャル。
ラウラも体に包帯を巻いてるが、目立った怪我はしてないようだ。
「…良かった」
2人とも楯無程重傷じゃないのがわかり、俊貴はその場に座り込んで壁に背中を預けた。
「俊貴…」
ホントに心配してくれて、今心からホッとしてる俊貴を見て、シャルは嬉しさが込み上げてくる。
今日のタッグマッチまでろくに俊貴と接してなかった事で寂しさや、

パートナーに選ばれなかった怒り、悔しさ等があった。
それで、俊貴を拒絶した。
でも、そんな自分に俊貴は心配して駆けつけてくれた。
それがシャルの心に罪悪感を募らせる。

「2人とも！」

俊貴が急に正座して2人を見る。

「本当に、ごめんっ！！」

そのまま俊貴が頭を下げた。床に頭が着きそうなぐらい、というより床に額が着いてる。

「え？ちょっと、俊貴…？」
「な、何を謝るのだ？」

2人は急に謝られて驚き、混乱している。

「タッグマッチのパートナーの事も相談しなかったし、今日のゴーレムの時も2人を助けに行けなかった…」

「そんな…」

顔をあげずに言う俊貴。

「許してくれ、なんて言わないし、オレが言える立場じゃない。でも、理由はどうあれ、2人を傷つけたのは事実。だから、ごめん！」

「…私はそこまで怒ってないから、別にいいぞ。許す」

ラウラがふふん、と胸を張って言う。

「お前は私の嫁だからな」

というか、シャルを怒らせた原因を作ったのはラウラでもあるのだが、抵抗しなかった俊貴にも負い目があった。

ラウラはその事に何も感じてないようだ。

「…ありがとう、ラウラ」

「うむ」

「シャルを一番傷つけたってのはわかってる。だから、許せないなら許してくれなくていい。けど、その罰は受ける」

俊貴が顔をあげてシャルを見た。

「俊貴…」

許されようとしてる顔じゃない。

自分が悪い。だから、罰を受ける。

「…いいよ。許す。パートナーの件も何か理由があったから、更識さんと組んだんでしょ？」

「シャル…」

うれしい。

嬉しいのだが、どこか素直に喜べない。

「でも、変わりに1つ言うこと聞いてくれる？」

もじもじと指をいじりながら俊貴を見るシャル。

「あぁ。何でも聞くよ」

こくん、とうなずく俊貴。

もじもじしながら、シャルがゆっくり口を開いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

目の前に浮かぶ数枚の空中投影ディスプレイを見ながら、カスタムキーボードを指でカタカタと打つ女性。

天才、篠ノ之束。

空中投影ディスプレイに映し出されているのは、ゴーレム？の戦闘データ。それと、別のＩＳの稼働データ。

それを見ながらキーボードを打つ。

「うーん、稼働データは結構取れたかなぁ」

ディスプレイの情報を整理しながら呟く。

「でも、5体全部倒されちゃうとはなぁ…。やっぱ撤退するプログラムを残しとけば良かったかな」

鼻歌混じりでＩＳのコアをいじる。

登録されていないコア、つまり新しく製造されたコアはすべて束の手によるものだった。

コアは束にしか作れないのだから。

「まぁ、ＩＳは人が乗って初めて最大限の力を引き出せるわけだから、無人機って言う時点で戦力低下は仕方ないね」

ＩＳの無人化技術。これも束だけが持つ技術の1つだった。

もしそれが世界に公開されたら、大変なことになる。

それをホントにわかってるのか誰にもわからないが。

「しかし、とっくんのＩＳはよくわかんないねぇ。まるで、‘搭乗者の想い’に応えてるようだよ」

ゴーレム?が交戦によって得た俊貴のパーソナルデータを確認しながら、束は笑う。

今回の襲撃は、それが目的だった。

俊貴のパーソナルデータを手に入れ、不知火を解析するための、無人機による襲撃事件。

「でも、予想外だったなぁ。ちーちゃん」

あれだけの規模で無人機を投入したのには、千冬が出撃すると踏ん

での事だった。
初代‘ブリュンヒルデ’の座に導いた、日本製第一世代型ＩＳ‘暮桜’。現在行方不明で、束は千冬が持っているものだと思っていた。

「んー…」

顎に手を当てて、首をかしげる束。

「ああ、そっか。あそこにあるのか。ふふん」

ふと思いだし、はしゃぎだす。

よくよく考えれば、つじつまが会う。

そこへ、１人の少女が部屋に入ってきた。

背は普通そうで、華奢だが、胸は大きい。歳も２０前後ほど。
髪がポニーテールで、肩下まである黒い髪を結ったリボンが白色。
機嫌悪そうに見える目つき。

「姉さん」

「やあやあ、箒ちゃん。どしたの？」

「私が行きましょうか？」

「うーん、そうだね。箒ちゃんのＩＳのデータ収集も兼ねて、お願いしようかな」

「…はい」

たった1人の家族、妹である箒。

「目的地は、IS学園、とっくんまで」

「はい、わかりました」

頷き、腕に着けた鈴を鳴らして部屋から出ていった。

解けるわだかまり（後書き）

おはようございます。

ゴーレム編今回で終了となりました。

次からオリジナルとなります。

メイド…さん？

駅前のとある喫茶店。
その喫茶店の名前は@クルーズ。

「お、おかえりなさいませー。お嬢様ー」

そこに入ってきた2人の女性のお客さんにお辞儀をしてテーブルに誘導するメイドさん。
腰まである黒い髪に白いカチューシャをつけたメイドに誘導されて、テーブルに着いた。

「ご、ご注文が決まりましたら、お呼びください」

ニコッと笑っているが微妙に引きつった笑みを浮かべている。

ペコッとお辞儀して、キッチンへと向かう。

「…はぁ」

ため息をつきお盆をカウンターに置く。

そこへ、奥から金髪のメイドさんが出てきた。
手には、お盆を持ち、その上にコーヒー二杯が乗っている。

「俊貴。お客さんが注文待ってるよ」

金髪のメイドさんが黒髪のメイドに言った。

呼ばれた通り、そのメイドさんは俊貴。

金髪のメイドさんは、シャル。
ちなみにラウラもいる。

「…今行きまーす」

お盆を持ってお客さんの元へと向かっていった。

そもそも、何故ここで俊貴が働いてるかというと、タッグマッチでシャルと組まずに傷つけた罰として、ここで一緒にバイトする事になった。しかも、学園祭で女装した時に似合ってしまっていたために、メイドさんとして働くはめになってしまった。

しかも、ちょっと声が低いメイドさんと設定され、お客さんに男とバレてない。

ってか、気づけよ！
気づかれたらメンドーだけど気づけよ！

と、心の中で思う俊貴。

「お待たせしました。ご注文をどうぞー」

ニコッとぎこちない笑みを浮かべて注文を聞く俊貴。

「ご注文を確認します。コーヒー二つと、チーズケーキ1つ、ティラミスを1つ。以上でよろしかったですか？」

はーい、と返事が帰ってきた。

「では、少々お待ちくださいませー…」

ペコッと頭を下げて厨房へ向かい、注文を知らせる。

そして、新たに来るお客さんもないし、出ていくお客さんもいないため一息つく。

「俊貴、メイド服の着心地はどう?」

料理ができるまでに軽く一息つく俊貴に、シャルが隣に来て聞く。

「着心地…?思ったより動きやすいよ。後は、このヒラヒラがちょっと気になるぐらいかな」

と、レースがついたスカートを持ち上げる俊貴。

「それがあるから、可愛いんだよ」

ニコッと微笑むシャル。

「…そっかー」

まじまじと自分の着ているメイド服を見下ろしてみる。

黒と白のメイド服で、ガーターは履きたくなかったためニーソックスで代用。胸もシャル程ではないが、パッドを着けている。

はたから見れば完全に女の子である。

「チーズケーキとティラミスお願いしまーす」

厨房から、注文された品が出された。

「あ、はーい」

コーヒー二杯をすぐに準備して、チーズケーキ等をお盆に乗せてテーブルに運ぶ俊貴。

「お待たせしました。コーヒー2つと、チーズケーキと、ティラミスになります。」

それらをお客さんの前に置く。
ありがとうございまーす、とお客さんが言ってくれた。

「…では、ごゆっくりどうぞ。何か御用がありましたらお呼びくださいー」

一礼してテーブルから離れる。

「あ…」

カウンターの方に戻る途中で、水の少ないお客さんに気づく。

冷水の入った入れ物を持って、そこのテーブルに向かう。

「お水のおかわりどうですか?」

ニコッと微笑む俊貴。

その笑顔に魅了される男のお客さん2名。お、お願いします…、とコップを差し出して俊貴を見つめる。

そんな様子をシャルと、自分の仕事を終えて隣に来たラウラが見ていた。

「…何だかんだで、ちゃんと仕事はするんだな。俊貴は」

ラウラは相変わらず無表情で言う。

「うん。俊貴は律儀だからね。何だかんだ文句言ってもちゃんとやってくれるんだよ」

嬉しそうに言うシャル。

シャル自身、俊貴が女装する事を嫌がってるのは知ってたため、この罰にするか迷ったが、オーナーさんも困ってる様だし、もしかしたら俊貴も受けてくれるかもと頼んでみた。そしたら、それでシャルが良いなら、と俊貴はあっさり受けてくれた。

ただ、女装で、というのは伏せてたため、今日になり出された服を見て俊貴は呆然としていた。が、約束したから、と腹をくくって着てくれた。

優しいシャルは今も申し訳ない気がしていた。

そこへ、俊貴が呆然として戻ってきた。

「…ど、どうかしたの？」

不安げに聞くシャル。

「…男に、君かわうぃね！って言われた」

すごく落ち込んだ感じを醸し出す俊貴。

俊貴の後ろのテーブルをチラッと見ると、チャラそうな男2人がシャルに向かって手を振ってきた。
それを俊貴を楯にして隠れるシャル。

「あ、じんましん…」

俊貴の全身に浮かぶじんましんを見てシャルが焦る。

「あ、あはは…、だ、大丈夫…だよ」

自分の腕をさすりながら力なく笑う俊貴。

「…やはり、女装はやりすぎじゃないのか？」

「……うん。そうかも」

ラウラも俊貴の様子に不安の色を感じた。

シャルに罪悪感が募り始めてきた。

そんななか、また新たにお客さんが入ってきた事を知らせる鈴の音が店内に響く。

「…おかえりなさいませー、お嬢様」

その音に反応して俊貴が出迎えに行った。

「なんなんだ、あいつは。落ち込んだりちゃんと仕事したり…」

ラウラが思わず笑う。

「確かに…」

シャルも苦笑い。

「あっれー？」

「え？」

「俊貴くん？」

「え…？」

「は…？」

名前を呼ばれ、ちゃんとお客さんの方を見る俊貴。

「…うっ」

そこには、更識姉妹がいた。

ゴーレム？の襲撃事件の後から、２人の間の壁がかなりなくなったおかげで、こうやって２人で出掛けたりするようになった。

「…お……ど」

そして、楯無さんはまじまじと俊貴を見てきて、その隣にいた簪は

呆然としていた。
俊貴は、テーブルに誘おうとするが、言葉が続かない。

「ここでバイトしてたの?だったらおねーさんに教えてよー」

「…なんで…メイド服」

俊貴の格好に何も気にした風を見せない楯無と、女装でメイドの俊貴にテンパる簪。

…おちつけ、おちつけ、おちつけ、おちつけ。
とりあえず、テーブルに…

「こ、こちらへどうぞ…」

ぎこちなく笑顔を浮かべて2人をテーブルへと案内する俊貴。

「はいはーい」

「…」

楯無は以外な場所で会った俊貴にニコニコとなり、簪は俊貴の理解不明な格好と会えた嬉しさでテンパったままだった。

俊貴に案内されて席につく2人。

おしぼりと水を2つテーブルに置く。

「ご注文が決まりましたら、お呼びください…」

ぎこちない笑顔を浮かべて、ギギギっと振り返りカウンターに向かう。

「…」

「俊貴。あれって楯無さんと簪さん、だよね？」

シャルが話しかけてきた。

「…うん。この姿でも見ただけで気づかれたよ」

「ふーん…。注文決まったみたいだよ」

「…うん」

どこかシャルが不機嫌そうになったような気がしたが、待たせちゃ悪いためテーブルに向かう。

「…お待たせしました。ご注文をどうぞ？」

「じゃあ、アイスティーとストロベリーパフェを1つ」

「私は…、オレンジジュースとチョコレートパフェ…」

「ご注文を確認します。アイスティーとストロベリーパフェ、オレンジジュースとチョコレートパフェが1つずつ、でよろしかったですか？」

「はい。お願いねー」

「…かしこまりました」

ぺこっとお辞儀して厨房へ向かった。

「…やばい、帰りたくなってきた」

急激にそう感じ始めた。

「おい。仕事を放棄するきか？」

カウンターと俊貴の間に急に入ってきたラウラ。

「おわ！？」

それに驚き後ろに下がる。

「…」

ジッと俊貴を見るラウラ。

「と、途中で投げ出さないよ！約束は守る！！」

「ふん。それでこそ私の嫁だ」

ニッと笑い俊貴の頬をつくラウラ。

「ちょ…！やめっ…」

「あー！ラウラっ！！」

その光景を見たシャルが慌てて駆け寄ってきた。

「む…」

それに気づき、そそくさと逃げるラウラ。

「…もう！俊貴ってラウラに甘いよねぇ」

ぷぅっと頬を膨らませるシャル。

…か、可愛い

そのシャルの顔に思わず見とれる俊貴。

「…は！いやいや、アマクナイヨ？」

「カタコト…」

「チガウヨ」

「…」

「…痛ひ」

シャルが俊貴の頬を突いた。

「おーい。そこのメイドさーん！」

「はい？」

呼ばれた方に返事をして向く俊貴とシャル。

声の主は楯無さんだった。手を振って俊貴を呼んでいる。

「…行ってくる」

嫌な予感がしつつも俊貴が楯無達の方へと向かう。

「…なにか御用ですか？お嬢様」

「ねぇねぇ、俊貴くん。何でメイド服着て女装してるの？」

ぐっ…、やっぱり突っ込まれたか

「えっと、シャルの罰がここでこの格好でバイトする事で、今の状況です」

「罰…？」

「あー…」

よくわかってない簪と、心当たりのある楯無。

「よーし。原因はおねーさんだし、私が何とかしてあげよう！」

「「？」」

俊貴と簪は首をかしげる。

「ふふん。おねーさんに任せなさい！」

そういって、シャルを手招きする楯無。

「何ですか？楯無さん」

ニコニコ笑顔でシャルが3人のもとに来た。

「シャルロットちゃん。いきなりだけど、俊貴くんを勝手に借りちゃってごめんね？」

ぺこっと頭を下げる楯無。

「え？」

いきなり謝られて、訳もわからないシャルが焦る。

「いや、勝手に俊貴くんにタッグの相手押し付けちゃって」

「あ…。えっと、その事は良いんです。一緒に組めなかったのは確かに悔しいんですけど、俊貴と戦えてよかったですから。自分の腕がどのくらいかよくわかりました」

「…そう」

「でも、理由ぐらいは教えてほしかったです。何かモンモンとした感じが心に残ってて…」

シャルが指をもじもじと動かす。

「ごめんね、シャルロットちゃん」

「あ、いえ。もう良いんです」

「シャルロットちゃんは優しいなぁー！」

そういって立ち上がり、シャルに抱きつく楯無。

…なんだ、この人は。相手に抱きつかなきゃ気が済まないのか

そう思いながら、困惑するシャルを助けようと楯無を引き剥がしにかかる俊貴。

「んー？何かな、俊貴くん。もしかして、焼きもち？」

ヌフフ、と笑みを浮かべてシャルを抱き締める楯無。

「なっ！？」

それにドキッとしつつも引き剥がそうとした手が止まる。

「うふふ。シャルロットちゃんかな？」

シャルがドキッとして俊貴を見る。

「それとも、私かな？」

ニコッと笑う楯無。

それにムッとするシャル。

「いや、えっと…」

「…」

焦る俊貴に、無言で立ち上がり自分の腕を俊貴の腕に通して抱き寄せる簪。

顔が真っ赤になっているが、楯無とシャルを見る。

「え?ちょっ…」

それに驚く俊貴。

「あらら?簪ちゃん、そう来た?」

さすがの楯無も、簪がそう動くと思わず苦笑い。

シャルは更にムッとする。

メイド…さん？（後書き）

おはようございます！

ちょっと更新が遅れました。
うーん、ストックがだいぶなくなってきました。

更新がまた遅くなるかもしれませんが、ご容赦ください。

あ、あとオリジナル突入です。
もうすぐ予告してたあの人が登場します。

では、またよろしくお願いします。

俊貴と千冬

ゴーレム襲撃から3週間後、また静かで平和な時間が戻ってきた。

あれから、ゴーレムどころか、謎の3機や亡国企業も襲撃に来ない。

そんなある日の午前。

教室で千冬の授業を受ける。

ボーッと、黒板の前で教科書を持って授業をしている千冬を見つめる俊貴。

…やっぱ、千冬さんには話した方がいいのかな?この世界で生きてるのは千冬さんのおかげでもあるし、血は繋がってないけど弟として迎えてくれた恩もある。話そうか?

そんな事を考えながら、机に肘をつき頬杖をついてボーッと千冬を見つめていた。

「……」

それに気づいた隣の席のシャルがムッとしながら俊貴の方をジッと見る。

(なんでトロンとした目で織斑先生を…)

俊貴の頬をつつきたくなってきたシャルだが我慢。

更に、横を見てるシャルに気づいた千冬が、その目線を追い、俊貴の視線に気づく。

「…あー、何だ？奥村。わからないところがあったか？」

シャルが横を向いていた理由に気づき、ため息をついて俊貴に声をかける。

「…いえ、何でもないっす」

「…」

（あいつ、寝てるのか？）

上の空な返事が返ってきたため、訝しげに俊貴を見る千冬。

ツカツカと、俊貴へと向かう千冬。

「…奥村。起きろ」

俊貴の横に立ち声をかける千冬。

だが、トロンとした目はボーッと前を向いたままだった。

（…半分寝てるのか、器用なやつだな）

「…千冬さんに話が…」

「私に話…？」

俊貴から聞こえた言葉に耳を傾けるが、それから続きがこない。

「…全く」

教科書をパタンと閉じて、上に振りかぶり、勢いよく振り下ろした。

「がっ！」

脳天に教科書が直撃し、顔を机にぶつける俊貴。

「起きろ。馬鹿者」

そういって、黒板の方へと戻っていった。

「くうぅぅぅ…、相変わらず容赦ない一撃だー…。おっかねー…、ちょーこえぇー…、ってか、オレ寝てたのか…」

意識がボーッとしてたのは気づいてたけど、まさか寝ていたとは…

（ね、寝てたんだ…）

シャルが思わず苦笑いする。

そこへ、授業終了のチャイムが鳴り響いた。

「…授業を終了する。奥村、昼放課に私の所に来い」

教科書を閉じて、授業の用意を脇に抱える千冬。

「へ？あ、はーい」

脳天を擦りながら返事をする俊貴。
それを確認して、千冬は教室を出ていった。
「何だろうね？」
隣のシャルが声をかけてきた。
「…さぁ？わかんない」
何となく思い当たる節はあるが、憶測で物を言わない俊貴は首をかしげる。
「…ねぇ俊貴」
「ん？」
シャルが席から立ち上がり、俊貴の前に来た。
指をもじもじさせている。
「俊貴って、年上が好き？」
「は？」
もじもじ不安げに聞いてくるシャル。
「だって、織斑先生をボーッと見てたし、楯無さんとも仲良いし…」
「…うーむ、好きか嫌いかって言われたら、好きなのかな。嫌いじ

ゃないし」

腕組みをして真面目に考える俊貴。

楯無も千冬も嫌いじゃない。というか、おそらく好きだろう。

楯無は猫みたいに自由奔放な人だけど、何だかんだで力になってくれるし、千冬も厳しいけど心配してくれるし、何より孤独な俊貴を迎え入れてくれた大事な人でもある。

2人とも美人でスタイル良いし、嫌いなわけない

「そう…」

シュンとしてしまったシャル。

「でも、年下も好きかな。可愛らしいってか、守りたくなるって言うか、うーん…」

なんと言えばいいかわからない俊貴が言葉を考える。

「…」

「シャルみたいな年下の子も可愛らしくて好きってことかな」

ニコッと笑う俊貴。

「え!?す…、好き!?」

シャルがそれに驚きつつも、赤面する。

「うん」

あれ？何か変な事言ったかな？

何故か赤くなったシャルに焦りつつも頷く俊貴。

「えへへ、そっか。嬉しいなぁ」

赤面しつつもニコニコ笑顔のシャル。

満足したのか、そのまま自分の席に着き、ニコニコなまま次の授業の準備をしだした。

「…まあ、機嫌がよくなったし良いか」

ニコニコなシャルを見る俊貴。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・、

昼の放課。

俊貴は千冬に呼ばれたため、生徒指導室に来た。

「おう。そこに座れ」

俊貴に目の前の椅子に座るよう指示する千冬。

「はい」

うなずき椅子に座る俊貴。

千冬も俊貴の前に座る。

「早速本題に入る。何か私に言うことがあるのか？」

授業中に聞いた俊貴の寝言。それを聞いてみる千冬。

その寝言を発した本人は、それを聞かれるとわかっていたようで表情を変えずに口を開く。

「あります。オレの事で話すことがあります。」

「…どういうことだ？」

いまいちどういうことか想像できない千冬が首をかしげる。

・・・・・・・・・・・・

千冬に、この世界に来た時からの事と、なぜこの世界に来ることになったのかを説明した。

それを聞き、千冬は信じられないという表情をしているが、束も知らないＩＳに、急に現れて学園を襲撃した謎のＩＳ達の事も理解できなくはないため複雑そうな顔をする。

「…さすがに信じられないですよね？」

あはは、と苦笑いする俊貴。

いきなり、自分は元々この世界の住人じゃない、とか神様にＩＳを

もらったとか言われても信じられるわけがない。

それは俊貴にもよくわかっていた。だから、話すか話さないか迷っていた。

そもそも、千冬が俊貴を弟として迎えなかったら話そうとはしなかった。でも、千冬は俊貴を弟として迎えてくれた。

だから、この世界唯一の家族になってくれた千冬に、自分の事を話さないのはダメだ、と判断し覚悟を決めて話した。

「…確かに、信じろと言われても信じ難いな」

千冬が頭を押さえる。

「ですよね…」

力無く笑う俊貴。

「…だが、お前が学園に来る以前の情報の少なさ、急に現れだしたデータのないＩＳ達。お前の言う通りなら辻褄は合う。全てを信じることはまだできないが、信じよう」

ふっと笑ってくれた千冬。

「！…ほ、ホント、ですか…？」

思わず立ち上がり、聞き返す俊貴。

「ああ、信じるさ。お前の性格も私なりに理解してるつもりだ。嘘を言ってるとは思いにくい」

「あ、ありがとう……ございます…」

全てじゃなくても、信じてくれる。それが俊貴には堪らなく嬉しかった。話しても信じてもらえない。もしかしたら気味悪がられて嫌われるかもしれない。

そう思ったら、なかなか言いづらくなっていった。

孤独が何よりも辛い俊貴は、この世界でできた家族を失いたくなかった。

でも、千冬は少しでも信じてくれた。

思わず顔を見られたくなくてうつむく。

「…しょうがないやつだな。さっさと話せば楽に慣れたものを」

呆れつつも立ち上がり、俊貴の横に移動して抱き締める。

「ち、千冬さん!?」

いきなり抱き締められて慌てる俊貴。

「良いから抱き締められてろ。馬鹿者」

千冬の履いてるヒールのせいで、俊貴の顔が豊満な胸に埋まる。

顔に柔らかい感触が当たっていて、俊貴の鼓動を速める。

それに加えて、千冬の温もりを感じる。

「…私の両親がいないのはしってるだろ?」

「え？…はい」

「だからなのか、お前に家族や知人が誰もいない事に疑問はもったが、何処か親近感がしたんだ」

「…だから、ほっとけなくて弟として迎えてくれたんですか？」

「ああ。…たぶん、それだけじゃないかもしれんがな…」

「え？」

耳元でボソッと言った千冬の言葉。

それに加えて、抱き締める力が少し強くなった。

「何でもない」

「…そうですか」

何とか胸から脱出した俊貴が答える。

1人は寂しいんだよね、千冬さん。強がってても、物心ついた頃には両親不在で家に1人。寂しくないわけがない。

「…オレ千冬さんの事大事なんで、そばにいます」

「…それは私じゃなくて別の奴に言うべきだろ。馬鹿者」

千冬が珍しく動揺して俊貴を離す。

あ、顔が赤くなってる

千冬の顔が赤くなってる事に気づく。

「弟として」

イタズラっぽく笑う俊貴。

「…仕返し、というわけか」

フッと笑う千冬。以前、俊貴に言って勘違いさせた、身内になるか？という話。

その仕返しか、と千冬。

「…いえ、そうじゃないんです。ただ、オレの中で答えが出ないだけなんで、もしかしたら、という可能性、の話です」

「…おいおい、私がお前を好きみたいじゃないか。何だそれは」

千冬が珍しく焦る。

図星ではあるため、何とか悟られないようにごまかす千冬。

一緒に生活しだして、俊貴無しで生きてけるかと言われると微妙な感じとなっていた。

それに気づかせたのは最近。

「…でも、オレはたぶん千冬さんの事好きだと思います」

「…だが、お前のその感情は姉として、の可能性が高い。違うか？」

「たぶん、そうだと思います。シャルやラウラに感じてるのとは微妙に違うのかもしれません」

「…そうか」

その俊貴の言葉にがっかりする自分がいることに気づいた千冬。

（私は、いつのまにか俊貴を弟ではなく男として見てたのか？）

その事に千冬が気づく。

弟だからほっとけない。変な女に引っ掛かってほしくない。

心配だから。急にいなくなってしまいそうで、また1人になるんじゃないのか。

千冬の心にそんな考えがあった。

「でも、この世界で孤独なオレを弟にしてくれた千冬さんには言い表せない程感謝してます。だから、千冬さんのそばにどんな形であれ居たい。恩返しがしたいんです」

俊貴がニッと笑う。

その笑顔を見て、思わずドキッとする千冬。

（温かいな…。こいつは）

そう思い、シャル達が好きになる理由がわかる気がした。と、言うよりうすうす気づいてた理由が確信となった。

「…もう1度、抱き締めて良いか？」

思わずそう口走っていた。俊貴はともかく言った千冬も驚いている。

「え？……良いですよ」

恥ずかしい。

恥ずかしいけど、間違いなく千冬の本音だとわかり頷く。

初めて見た千冬の戸惑う顔。

今まで隠してきた寂しさを意外にもあっさりと出してしまった千冬が一番動揺していた。

「…」

そんな千冬を俊貴は優しく抱き締めた。

「千冬さん、ありがとうございます」

抱き締めたまま微笑んで言う俊貴。

「…」

俊貴に抱き締められて驚くが、すぐに千冬も微笑み抱き締められる。

いつ以来だろう。こうやって抱き締めてもらったのは。千冬が中学生のときには既に両親はいなかった。それ以来抱き締めてもらってなかった。

久々に感じる人の温もりに落ち着き、ホッと安心する千冬。

（…こいつは、ホントによくわからないやつだ）

そう思いながらも、恥ずかしくて抱き返せない千冬。

…やべぇ

千冬がドキドキしながらも俊貴の温もりを感じてる頃、俊貴自身は焦っていた。

これやべぇ…

む、胸が…

千冬さんの柔らかい感触が伝わって、や、ヤバイ…！！

何も考えずに行動に移した詰めの甘さがここにきてでた。

体を離そうと思ったが、千冬が意外にも体を俊貴に預けてきたため離すに離せない。

そのせいで、俊貴の胸で千冬の胸が形を歪める。

しかも、女の人特有の良い匂いが俊貴の脳を痺れさせる。

全身の感覚が鋭敏になり始める。

や、ヤバイ！

これはマズイ！

「…」

「…えっと」

「…いい。何も言うな。全く、しょうがないやつだな。本当に」

俊貴の頭にポンと手を置いた後、ゆっくり体を離す千冬。
顔がやはり赤くなっている。

「…処理、手伝ってやろうか？」

「！？い、いえ！大丈夫なんで…！！」

焦って後ずさりする俊貴。

千冬がニッと笑う。

「嘘だ、馬鹿者」

「……」

少し期待をしてしまった俊貴は恥ずかしさのあまり後ろを向き、ドアの方へと向かう。

「俊貴」

ドアノブに手をかけた時に千冬が名前を呼んだ。

顔だけ千冬の方に向く。

「ありがとう」

そう言った千冬の顔は優しく、いつもとは正反対のものだった。

それにドキッとして、ドアノブから手を滑らせた。

「…へへっ」

だが、ニッと笑う俊貴。

「ふん、もうすぐ授業だ。早く教室に行け」

手を向けて、しっしっと俊貴を教室に戻させる。

はーい、と返事をして生徒指導室から俊貴が出ていった。

「…はぁ。どうするんだ、これ」

自分の胸に手を当てる千冬。未だに鼓動が高鳴っている。

「…ますますあいつらに渡すのが難しくなったじゃないか」

臨海学校の時、シャル達に言った言葉が強味を増してしまった。

「…はぁ、どうしたものか」

頭を抱える千冬。

俊貴と千冬（後書き）

こんにちわ。

千冬に自分のことをばらす回でした。
夏休みあたりにばらそうとも思ったのですが、上手く繋げれなくて、
1話ごとばらす回としました。

一応、千冬には信じてもらえてます。

次に、予告通りツンデレさんを出します。
出番、次は少ないです。

ですが、次第に多くなる？かと思います。

では、読んでいただきありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

また波乱の予感！？

午後の授業も終わり、夕方。

第３アリーナでＩＳを展開する俊貴とシャル、ラウラ、セシリア。

ゴーレム戦で、やはり力不足なのが目についたため特訓のレベルを上げよう、ということでタッグでの模擬戦を行うこととなった。

その申請を既に出してあるため、第３アリーナには他の生徒はおらず、観客席に様子を見に来た先生達や生徒がちらほらいるぐらいだった。

普段のアリーナだったら、生徒が多くて模擬戦がやれないのだが、充分すぎる広さがある。

「さあ、始めましょう！」

俊貴のとなりに浮かんでいるセシリアが言う。

その顔は、まだ模擬戦が始まってないのに満足気で嬉しそう。

「よし、始めよう」

「うん」

ニコニコなセシリアと対照的に、ラウラとシャルは表情を引き締める。

俊貴と組んだセシリアは完全に浮わついている。それが、セシリア

の悪い癖だと言うことに本人は気づいていない。

「…これが地面に落ちたら試合開始。ＯＫ？」

セシリアの悪い癖に気づいてる俊貴が不安そうにしたが、空の弾を取りだして皆に見せた。

「いいよ」
「問題ない」
「ＯＫですわ」

３人が頷く。

それを見て俊貴もうなずき、空の弾を上に軽く飛ばす。

回転しながら最高点にまで上がり、地面へと落下していった。

そして、カァーン、と高い音を立てて地面に落下した。

「はあああ！」

いち早くそれに反応したのがラウラ。
右腕のプラズマ手刀を展開し、２人へと突っ込む。

それを迎え撃つ俊貴。
刀を取りだし、プラズマ手刀を受け止める。

その隙に、セシリアは高度を上げて狙撃体勢に入る。

スターライトｍｋ？を構え、ラウラへと照準を合わせる。

「うっ！ラウラ、セシリアが！」

ビットに阻まれて、セシリアの邪魔ができないシャルがラウラに注意をする。

ビットから放たれるビームをかわすのに手一杯なシャル。

「くっ！わかってる！！」

俊貴に攻められ続けるラウラが焦りながらも、照準を定まらせない様に動く。

俊貴の刀が不意に、ラウラの左側から向かってきた。

「！」

左腕のプラズマ手刀を展開して、それを受け止める。

「そこっ！」

俊貴は両手で刀を振るため、ラウラに受けられてがら空きとなった体に向けて、ラウラが右腕のプラズマ手刀を俊貴に向けて突きを繰り出す。

「うおっ！」

踏み込んでいた右足で地面を蹴り、バックステップでかわす。

「逃がさん！」

ラウラがワイヤーブレードを俊貴へと放つ。

「くっ！」

右腕にワイヤーブレードが絡まる。

「もらいましたわ！」

「しまった！」

うっかりその場に止まったままワイヤーブレードを放ってしまったため、セシリアに照準を合わせられ、スターライトｍｋ？からレーザーが放たれた。

「うあっ！」

かわせず、レーザーがラウラの右肩に直撃する。

「ラウラ！」

俊貴のビットに阻まれているシャルが焦る。

「ラウラと戦いながら、僕の邪魔ができる、なんてっ！」

死角から飛んでくるビームを、警告音を頼りにシールドを使いながら防ぐ。

シャルは、ビットを俊貴が操っていると思っていた。

だが、実際に俊貴はビットを操縦してはいない。

不知火に任せた自立制御で、ビットは不知火が操っていた。

だから俊貴はラウラとの戦闘に集中できていた。

「よっと！」

ワイヤーを左手で掴みラウラを引き寄せる。

「なっ！？」

俊貴に引き寄せられて、地面と水平に飛ぶラウラ。

その視線の先には、腰の電磁砲をこちらに向けて立つ俊貴。

「くっ！」

右腕のプラズマ手刀でワイヤーを切り捨て、右足を軸に方向を真上に変えて瞬時加速するラウラ。

ラウラがいた場所へと、青白い閃光が２つ飛んでいった。

「…やるな、ラウラ！」

高い位置から俊貴の方を見下ろすラウラ。

左目の眼帯を外していた。

「俊貴さん！」

「うん」

俊貴の真横に降りてきたセシリア。

セシリアは‘ブルー・ティアーズ’を４基展開した。

俊貴もシャルの相手をさせていたビットを全て自分の周りに戻した。

「…何をする気だ」

「気を付けて、ラウラ」

シャルとラウラ２人の位置は俊貴達を前後で挟んだ位置。挟撃できる位置ではあるのだが、如何せん下手に動けない。

「セシリア、ＯＫ？」

「いつでもいけますわ」

フフっと笑うセシリア。

「じゃあ、いくよ」

「はい！」

俊貴が赤い翼を展開し、大剣を構えてラウラへと突っ込む。

それに合わせて、セシリアと俊貴のビットが援護射撃を行う。

「くっ！」

そこら中からビームがラウラに向かって飛んでくる。

ラウラはそれを避け、避けれないビームはプラズマ手刀で切り裂いていく。

そして、残像を残して向かってくる俊貴が、大剣の刃を背中の方に向ける。

「でやあぁぁ！」

「！？しまっ」

気づいた時には遅かった。

俊貴は頭上で、大剣を振り下ろそうとしていた。

斜めに大剣を振り下ろして、ラウラの装甲を切り裂く。

「ラウラっ！」

煙をあげて地面へと落ちていくラウラ。

「うふふ、ここまでですわね」

「！」

後ろを振り返ったシャルが驚く。セシリアがニコッと笑い、シャルの頭にスターライトｍｋ？を向けた。

「…降参」

苦笑いして武器を量子化したシャル。

「おっと、ラウラ大丈夫か？」

地面にぶつかる前に俊貴がラウラを抱き止める。

「ああ、大丈夫だ」

頭に手を乗せて返事を返すラウラ。

「そか、良かった。お疲れさん」

地面に着き、ラウラを降ろす。

「ああ」

俊貴の手を借りて地面に降りるラウラ。

ＩＳをしまう４人。

「ふぅ、やはりビットは中々厄介だな」

眼帯を着け直し、髪を横に流すラウラ。

綺麗に横に靡く銀髪が俊貴の目を引く。

「うん。僕なんて殆ど何もできなかったよ」

シャルがしゅんと落ち込む。

「ふふん、わたくしと俊貴さんのコンビネーションは完璧でしてよ」
腰に手を当て胸を張るセシリア。
そこまでコンビで動いたつもりもないけど…
と、言いそうになったのを飲み込む俊貴。
言うとセシリアが不機嫌になるから。
「あはは、そうだね…」
苦笑いする俊貴。
「さて、観客も帰りだしたし、今日はここまでにしよう」
観客席にいた生徒達がだんだんとアリーナから出ていく。
先生方はまだ一応様子をみている。
「そうだな、帰ろう」
「うん」
「ですわね」
3人も頷く。
「よし、じゃあ着替えに行こう」

俊貴達４人は、更衣室に向かって行った。

「…」

それを観客席から見下ろすポニーテールの少女。

「ふん」

鼻を鳴らして観客席から出ていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第３アリーナから出て、寮へと向かう俊貴。
模擬戦後で、少し疲れた体でゆっくりと歩く。

「うーん…、やっぱ不知火にビットを操作させるのは卑怯かなぁ」

今日の模擬戦のデータを空中投影ディスプレイで見る俊貴。

シャルを完全に抑えれてしまっていた。
タッグトーナメントの時は、ビットを自分で操作してたため完全に抑えれる程余裕はなかった。

「うーん…」

どうするかなぁ？
模擬戦は使わないどくか。亡国企業が来たりした時に使おうかな。
模擬戦は自分の力でやんないとな。

そう決めて、俊貴は小さな簡易キーボードを取りだして、調整をし

だす。

忘れないうちにやることやっとかないとな

キーボードをカタカタと打っていたら誰かが近くに走ってきた。

「ん？」

俊貴の横で止まったため、俊貴はその誰かの方を向く。

「こ、こんにちわ…」

そこに立っていたのは、簪だった。

もじもじしながら俊貴を見る簪。

「おう、こんちわ。どした？」

キーボードをしまい、ディスプレイを閉じる。

「何、してたの？」

首をかしげて見上げてくる簪。

眼鏡越しの上目使いに思わずドキッとする俊貴。

楯無が狙ってやる上目使いと違って、簪のは狙ってない。楯無のでもドキッとするから、正直関係ないというか、上目使いに弱いのだろう。

「あれだ、今日やった模擬戦のデータを元に不知火を調整してたん

だ」

少しどもりながら説明した。

「へぇ…、模擬戦かぁ…」

と、もじもじしている簪。

…？

あれ？何か様子が変だな

「簪もやるか？模擬戦」

「！……いいの？」

嬉しそうな笑顔になる簪。

タッグを組んでから、こうやって笑顔を見せてくれる様になったのが俊貴には普通に嬉しかった。

思わずつられて笑顔になる。

「いいよ。オレ達専用機持ちは不測の事態の要になる。その時にちゃんと対処できるようにならないと」

そういって、俊貴が上をみた。

空が夕焼けで赤く染まり始めていた。

「…そうだね」

ゴーレム戦の時を思い出す簪。
確かに俊貴の言う通り、3人でやっと1体を倒せる状態だった。
それだと、これから先1人で相手をすることになったら生き残れない。
その対処のためだと、簪も理解した。
簪の前へと進もうとする意志が表情に出ていた。
それを見て、俊貴は嬉しくて笑みを浮かべた。
「さあ、もう夜になるし帰ろう」
「…うん」
もう秋。
夕方になると涼しくなってきていた。
木の葉もだんだんと色が変わりはじめて地面に落ち始めている。
「おい」
並んで歩く俊貴と簪に向けて誰かが声をかけた。
「ん？」
その声のした方を振り返る2人。
「…」
電灯の下で、灯りに照らされたポニーテールの少女が腕をくみ俊貴

達の方を見ていた。
つり上がった目で2人を、というより俊貴を見ていた。

「…誰？」

見覚えのない少女に聞く俊貴。
簪も俊貴を見た後に、その少女の方を見た。

学園の制服を着ているため、ここの生徒なのだろうか。

俊貴の問いに答えず、道路に敷かれた落ち葉を踏み鳴らして近づいてくる。

「…」

何となく少女の纏う雰囲気が普通じゃないため、簪を自分の影に隠すように立つ。

「…」

ぎゅっと、俊貴の服を両手で掴み様子をうかがう簪。

「奥村俊貴、だな？」

俊貴を睨み付けながら言う。
声からも強気な印象を感じた。

「そうだけど、君は？」

学園で俊貴を知らない者はいない。

行事があるたびになにかと目立つ俊貴。更には、生徒会にまで所属するようになって、俊貴を知らない者は学園にはいない。

なのにこの少女は、確認をした。
それにより、俊貴に警戒される。

「私は初等科の篠ノ之箒だ。」

俊貴の全身を見た後、鋭い目付きを更に鋭くする。

「はぁ」

そんな無愛想な自己紹介に苦笑いする俊貴。ふと、違和感を感じた。

「私と一緒に来い」

「「は？」」

俊貴と箒は同時に同じ声を漏らした。

「良いから付き合え」

四の五の言うな。と目が俊貴に訴えかける。

「あー、何で？」

訝しげに聞く俊貴。

気になる事が少しある。

「…うるさい。お前が必要なんだ。さっさと付いてこい」

ふん、と顔を背ける。

「…俊貴」

服を掴む力が増し、不安げに俊貴を見る簪。

おお、可愛い…

そう思いながらも、俊貴はその少女の方に向き直る。

「今日じゃないとダメなの？もう日も暮れちゃったし」

掌を上に向けて肩をすくめる俊貴。

「むっ…」

いつのまにか、夕焼けで赤く染まっていた空は暗くなり、夜が顔をだしはじめていた。

「明日、会えない訳じゃないでしょ？」

俊貴が意味ありげに微笑む。

「…ふん。わかった、明日にする」

俊貴達に背を向けて、ツカツカと歩いていってしまった。

「…」

俊貴が無言でその背中を見つめる。

「俊貴……、どうか…した？」

じっと背中を見る俊貴を、簪が不思議そうに見上げる。

「…いや、何もないよ。帰ろう」

簪の頭を撫でてから、寮へと歩き始める俊貴。

思わず赤くなって固まる簪。

だが、固まった簪に気づかず距離が離れていく。

それに気づき、慌てて俊貴の横に急いで並ぶ簪。

「ねぇ…」

チラッと俊貴を見てすぐ目線を前に戻す簪。

「ん？」

俊貴も目線を動かさずに返事をした。

「何…考えてるの？」

チラッと見ただけで俊貴が何かを考えてる事に気づいた簪。

やはり俊貴と直接接した時間が長かったため、俊貴の事がよくわか

ってる。

この域に達してるのは、シャルと楯無だけだったのが、簪も加わった。

「考えてるよー。色々とね」

ニコッと笑う俊貴。

「…例えば？」

「そうだなぁ、今日の簪の晩御飯はうどんかなぁ？とか」

「！……違う」

赤くなったと思ったら顔をすぐ背けた簪。

「あれ？じゃあ、何だろう…」

首をかしげる俊貴。

「…ばか」

はぐらかされた事に気づいた簪が、呆れながらため息をつく。

「？」

首をかしげる俊貴。

また波乱の予感！？（後書き）

こんにちわ。

箒登場しました。
思ったより時間かかっちゃいました。

あとオリキャラ1人登場します。

ＶＳ箒！

シャル達と模擬戦をした翌日の朝。
俊貴は自室のベッドで眠っていた。

「ん…」

久しぶりにお腹の上に重さを感じ、目をさます。
体が重い。お腹の方に重さを感じる。
とりあえず、理由はわかってるし何とかしようか。
布団をバッとどける。

「…」

うん。
頷き、素早く布団を戻す。
まぁ、予想通りだな。

ラウラがいた。
それはいい。
全裸だった。

「何故だ…何故服を着ない…」

布団に潜り込んで来る時は決まって全裸。前に見た、猫のパジャマ着てくれればいいのに…

「…また、オレが寝てから忍び込んだな」

昨晩は、夕飯を食ってから簪を部屋まで送って、自室に戻った。んで、風呂入ってからジャージに着替えて、シャルがラウラを連れて部屋に来た。
それから3人で話して、シャル達が部屋に帰った後すぐ寝た。

ラウラも一緒に部屋に戻っていった。可能性としてあるのは、やっぱりラウラが、オレの寝た後に来たのが高いだろう。

「とりあえず、起こすか」

布団を掴む。

すーはー、と深呼吸して布団をめくる。

「…うーん……」

「起きろ、ラウラ」

「…朝か？」

布団をめくられ、朝の日射しを受けてまどろみながら目をさますラウラ。

「そうだよ」

ラウラが上半身を起こした瞬間に素早く布団をラウラに被せる。
よし、これで少しは落ち着ける。

「おはよう、俊貴」

目を擦りながらオレに挨拶するラウラ。

「おはよう、ラウラ」

朝のまどろみを目をこすって吹き飛ばしたラウラが、いつもの表情で見てくる。

「今日も元気だな」

「う、うるさい！」

慌てて毛布を掴み体に被せる。
あ、朝なんだ！しょうがないんだ！！

「処理してやろう」

「は？」

何を言ってるんだ？
っていうか、最近同じ台詞を聞いたぞ。

「大丈夫だ。やり方は聞いている」

「いやいや、そうじゃなくて。そんなことしなくていいから！」

「何故だ？」

何を言っているのだ？と言わんばかりの表情をするラウラ。

「嫁を気持ちよくするのも亭主の役目だ」

「…は？」

「ふふん、私に任せろ」

自信たっぷりに四つん這いでオレへと近づいてくるラウラ。
そのラウラの頬を赤く染めながらも笑う顔に思わず見とれる。

「ま、待った！だ、大丈夫だから！してもらわなくても大丈夫だから！！」

慌てて後ずさる。

「…そうか」

そういって、その場に座るラウラ。

…ホッとしたような、残念なような…

複雑な気持ちを抱き、苦笑いする。それを首をかしげて不思議そうに見てくるラウラ。

「さて、私は部屋に戻る」

「あ、うん」

「またくるぞ」

そういって、立ち上がり布団を脱ぎ全裸で部屋から出ていった。

「…何で全裸で出てくんだ…」

頭を抱える。

・・・・・・・・・・・・・

「ねえ、俊貴」

「な、何でしょうか？シャルロットさん…」

朝食をとり、教室に行って席に着いたら既に隣の席にシャルがいた。

顔は笑顔なのだが、額に血管が浮かび出ている。

そのシャルの雰囲気におされる。

「朝、ラウラが部屋に居なかったんだ。どこ行ってたか、知ってる？」

ニコニコなのに、怖い。

「え、えっと…」

「俊貴の部屋に居たのだ」

ぐあっ！

なんというタイミング。
制服姿のラウラが来た。
シャルがおはよう、とラウラに挨拶した。
ラウラも、おはようと返事をする。

「…そうなんだ？」

「はい…」

「へー」

ニコニコ顔がムスッとなってしまった。

「何だ、シャルロットも来れば良いじゃないか。３人で寝よう」

「は！？」
「え？」

何、だと！？

オレが驚いた声をあげたが、シャルは何故か食いついた。

（そっか、その手があったか…）

自分も潜り込むなんて、全く考えてなかった。

「…はっ。いやいや、僕はそんなことしないよ！」

オレとラウラの視線に気づいたシャルは慌てて否定する。

（うぅ…、思わず考えちゃったよ…）

俊貴の布団に潜り込む妄想をして、恥ずかしくなったシャル。もちろん、そこにラウラはいなくて、俊貴と2人。

もうちょっと、気づくのが遅かったら顔がにやけていただろう。

そこへ教室の扉を開けて、ポニーテールの少女が教室を見回す。その少女に教室中の視線が集まる。

「奥村俊貴はいるか？」

その少女が俊貴の名前を呼んだ。

「オレ？」

名前を呼ばれ、オレは立ち上がってその少女の元に行く。

そこにいたのは昨日の夜に会った箒だった。

「へぇ、昼間に学校内に入ってこれるんだな」

ニッと笑う。

それを見て、つり上がった目が鋭くなり、オレを睨み付けてくる。

「…何が言いたい？」

「別に。で、何のよう?」

さらーっとその睨みを受け流す。

不満気な顔をした箒だが、ふう、と一息つき口を開いた。

「お前が逃げてないか、確認しに来たんだ」

「…逃げないよ。オレに逃げる理由がない」

何をするか聞いてはないけど、逃げてもオレの得になることはない。

「ふん。放課後、ちゃんとアリーナに来いよ。いいな」

と、人差し指を俊貴にビシッと向けて言い放つ。

「オレはいいけど、箒はいいの?」

「…何がだ?」

また睨み付けてきた。

「まぁ、良いなら良いけどね」

肩をすくめる。

「…ふん、余計なお世話だ。」

プイッと体ごと横を向いて、そのままいってしまった。

「……」

昼放課に生徒会行くか。

頭をかき、席へと戻っていく。

「ふぅ」

椅子に座り、指でトントンとリズムよく机をならす。

「おい、今のは誰だ？」

ラウラが腕を組んで、冷酷な目で見下ろしてくる。

「あ、あれは…箒だ。昨日知り合った。」

口の端をひくつかせて答えた。

「箒？清掃用具と何の関係があるんだ」

更にジト目で見下ろすラウラ。

「…名前だよ。あのこの。箒って言うんだ」

「…」

名前だと思わなかった様で、口をポカンと開けて驚くラウラ。

「名前で呼ぶんだね。昨日会ったばっかりなのに」

またムスッとしてるシャル。

「ちょっと事情があるんだよ…」

苦笑いする。

「何か最近、俊貴って隠し事ばっかりだよね」

今度はシュンと落ち込んでしまった。

「あ、いや、その…。違うんだ！隠し事とかじゃなくて、あの子苗字を教えてくれなかったんだ！」

く、苦しい…

さすがにごまかせないか…？

苦笑い。確認しなくても、顔が引きつってると思う。

「そうなんだ…？」

「ああ、そうなんだ…」

「そっか…、じゃあしょうがないね」

シャルが申し訳なさそうな顔をする。

あぁ…、ごめんよ、シャル…。ホントは知ってるんだ。でも、あの子にも事情があると思うから、黙ってたいんだ。

「ホームルームを始める」

そういって、千冬が山田先生を連れて教室に入ってきた。

朝のガヤガヤした教室は、それだけで静かになった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

昼放課。

俊貴は生徒会室に来ていた。生徒会室にある棚から1冊の冊子を取り出した。

「えーっと…」

パラパラとページをめくる。

「お、あったあった」

今在学中の全生徒の名前が載っていた。

その名簿を隅々まで見る。

「…やっぱりか」

冊子から顔をあげる。

まぁ、予想通りだったか。

パタンと本を閉じて元あった場所に戻す。

「…さて、どうしたもんかね」

頭をかき、生徒会室からでていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

放課後。

第４アリーナで向かい合う俊貴と箒。

箒は既にＩＳスーツに身を包んでいた。

…制服の時にも思ったけど、やっぱ胸でかい。

ＩＳスーツを押し上げる2つの山。腕を組んでいて、その上に乗っかっているのを思わず見てしまう。

「来たな」

「ああ、来たよ」

オレは制服のまま。スーツにならなくても不知火は性能が落ちたりしないからな。まぁ、防御面はないけどね。

「では、始めるぞ」

箒の全身を光が包んだ。

そして、光がおさまった瞬間に箒はＩＳを展開していた。

真紅の装甲に身を包んだその機体は、アリーナのライトを反射して赤い装甲が眩しい。

ーマスター、あの機体情報がないです
と、久しぶりに脳に直接話しかけられる。
はぁ？じゃあ、あのＩＳも歪みが原因でできたのか？
ーわかりません。ただ、可能性はあります
でもなぁ…
「何をボーッとしてる。さっさとＩＳを展開しろ」
一向にＩＳを展開しないオレに箒は展開を促す。
「あ、ああ。今展開する」
そういって、不知火を展開した。
…この機体、近接特化かな。腰の左右に1本ずつの日本刀型ブレードがあるだけで、他に何もないし
怜莉のイフリートヴァニッシュに似ている気がしてそう考える。
「…展開したな。行くぞ」
右の刀を抜き構える箒。
「…やっぱりこうなるのか」
まぁ想定内なんだけど、やっぱ説明はないんだな。

そう思いながら、腰から2丁のハンドガンを取り出す。

「はあぁ！」

ハンドガンを取り出したのを見て、即俊貴へと突っ込んでくる箒。

「はやい！」

予想外の機動力に反応が遅れた。

「はっ！」

斜め下から上へと切り上げてきた。

それを後ろへと瞬時加速でかわす。

「逃がさん！」

箒は距離が空いてるのにも関わらず、突きを放つ。

「っ！？」

突きが放たれると同時に、周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、光の弾丸となり俊貴へと向かってくる。

左腕を体の前に向けてビームシールドを展開。

そのビームシールドに光の弾丸が何発も当たる。

右の刀‘雨月’は、対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出する。射程距離はアサルトライフル程。だが、

このＩＳの機動性なら問題ないだろう。

ぎ、ギリギリもったなシールド…

シールドをしまい、俊貴がハンドガンを箒にむける。

そして、トリガーを引きビームを箒に放つ。

「…ふん」

左の刀を抜き、横に薙ぎ払う。

すると、あの赤いレーザーが帯状になり、ビームの弾丸を打ち消し、更に俊貴へと向かっていく。

「な、何っ!?」

体を反らして、その斬撃をかわす。

左の刀‘空裂’は、対集団仕様の武器で、斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつける。振った範囲に自動で展開する。

…エネルギーを供給すれば、どっちの刀でもエネルギー刃が出る仕組みか。

俊貴に避けられた斬撃は、観客席の前に展開されたシールドに当たって打ち消される。

観客席にいたシャルとセシリアがびっくりする。

ラウラと怜莉はそれを冷静に見ていた。

「…」

それを見てから、箒の方に向き直る。

「なんだ、怖じ気ついたのか？」

オープンチャネルで通信をしてきた箒がふっと笑う。

「まさか！」

オレもふっと笑う。

何故か心が昂ってきていた。強い相手と会えたからなのか、ドキドキしながらもワクワクしてるのに気づく。

おいおい、どこの戦闘民族だよ…オレは

そう思いながら苦笑い。

でも、心はワクワクしてテンションが上がる。

「この‘紅椿’を相手に、いつまでその表情ができるか、見物だな！」

両手に刀を持ち、構える箒。

「上等おっ！」

瞬時加速で、一気に間合いをつめる。

その間にも箒は、空裂を左脇にもっていき、居合いの構え。

ある程度近づいた瞬間に、箒は空裂を振り抜いた。

「！」

そこから飛んできた斬撃を見切り、速度を落とさずに向きを変えて避け、更に瞬時加速で箒へと突っ込む。

「避けた！？」

直線で向かってきた俊貴に、バカなやつだと思いながら斬撃を繰り出したのに、あっさりかわされたため動揺。

俊貴を見失った。

が、ピピッとＩＳが後ろに俊貴を捉えた。

「この距離なら！」

斬撃を飛ばせない距離に位置取り、ハンドガンからビームを連射する。

「くっ！！」

細かいビームを何発もアーマーに受ける。

「うっとおしい！！」

箒がくるりと一回転した。

その瞬間、爪先の展開装甲が開き、エネルギー刃を発生させる。

「なっ！？」

シールドを展開して防ぐ。

何なんだ！全身武器なのか、このＩＳは！！

他に武器はあるだろうと思ってたが、まさかの展開装甲。

「ふん！」

踵落としのような格好で、エネルギー刃の斬撃を繰り出す。

「っ！」

ハンドガンを思わず楯にしてその攻撃を防ぐ。

銃身を切り裂かれ、俊貴の頬をかする。

ハンドガンが紫電を放ち始めたため手放し、頬から流れる血を拭う。

「…」

一旦目を閉じて、ゆっくりと目を開く。

赤から金へと瞳が変わる。

ヴォーダンオージェの発動。最近では、感情が昂った時じゃなくても自在に発動できるようになった。

「…ヴォーダンオージェ、か。面白い」

事前に聞いてた情報の１つ。何故か、俊貴に発現した力で原因は不

明。

「どれだけ変わるか、見せてもらおう！」

箒がここに来たのは俊貴のデータを取るため。ある程度のデータは取れているが、細かいデータを集める事と、箒自信のデータ、紅椿のデータを取るのに丁度良かった。

箒は空裂を使って斬撃をオレへと飛ばしてきた。

オレは不知火を高速機動から高火力へと切り換えて、背中から大剣を取り出す。

「はっ！」

そのまま大剣を、飛んでくる斬撃に合わせて振るう。

「斬撃を切り裂く、か…」

「！」

斬撃を囮にして、オレの後ろを取っていた箒。

オレは位置を確認して大剣をグッと握り直す。

箒も二刀流で構えていた。

「はあぁ！」

「うおぉ！」

オレは振り返り様に大剣を横に振るう。

箒は空裂を縦に振り下ろす。

バチチッと紫電を発して2人の武器が衝突する。

「はっ！」

大剣を刀で横に流し、脚を振るう。

爪先からエネルギー刃が飛び出す。

それを体を反らして、かわす。

「まだまだ！」

雨月で俊貴へと突きを放つ。

赤いレーザーが集まり、球となってオレに向かってくる。

球を見切り、大剣で球を切り落としていく。

そして、瞬時加速で箒へと体当たり。

「ぐっ！！」

体当たりを受けて怯む。

怯む箒に向けて、大剣を振り抜く。

「きゃああ！」

腕のＩＳアーマーを切り裂かれる。

「狙い撃つ…！！」

腰と、背中の電磁砲４門を箒に向ける。

「くっ！」

それに気づいたようで、箒は片腕と肩の展開装甲をエネルギーシールドに切り換えた。

「！」

４門から放たれた電磁砲はエネルギーシールドによって遮られた。

だが、オレは高火力から高機動に切り換えて一気に間合いをつめる。

大型ウィングから赤い翼が顕れる。

「赤い、翼…！」

その機動力と、翼の美しさに見とれ反応が遅れる箒。

「はああぁ！」

大剣を振り下ろす。

「くっ…」

それを雨月と空裂を交差して受け止める。

攻撃が通らない。

そう判断して、オレは大剣を引き、今度は斜め下から上へ向けて振り抜く。

「うっ…」

空裂で受け止める。

この距離で斬撃は飛ばせないからな。判断力もある。

「貫くっ！」

雨月を引いて、素早くオレへと突く。

当然、光の弾丸となりオレへと向かってくる。

「おっと」

後ろ斜め上に飛び、球をかわす。

そして、大剣を片手で持ち、ビームライフルを呼び出す。

「当てる！」

トリガーを引き、ビームを箒へと放つ。

「しまっ…！」

雨月にビームが当たり、手から弾かれる。

それに気をとられる箒だが、隙をついて突っ込んでくる俊貴に気づき、両手で空裂を握り斬撃を繰り出す。

それをビームシールドで受け止め、無理矢理上へと腕を振り斬撃をどかす。

「な、なにっ！？」

その予想外の弾き方に焦る箒。

そんな隙を逃すほどオレはぬるくないよ。

瞬時加速で一気に距離をつめる。

俊貴の残像を何個も残す。

「うおおお！」

「くっ…はぁぁ！」

俊貴の横に振り抜いた大剣と、箒の縦に振り下ろした空裂がぶつかる。

が、剣の腕は箒のが上のようで、空裂を素早く引き、今度は斜め下から上へと振り抜く。

「くっ！！」

ギリギリ反応できて、大剣で防ぐ。

だが、十分な、防御とはならなかったため後ろへと大剣を弾かれた。
その勢いにより、後ろへと後退する。
「もらった！」
空裂を腰の位置に引き、俊貴を見る。
斬撃、か
「させるかぁー！」
無理矢理大剣を振り下ろす。
「！？」
それどころか、大剣を箒に向けて投げ飛ばした。
「ちぃ！」
斬撃を飛ばし、大剣の軌道をずらす。
振り抜いた空裂を、手首を返してもう一度横に振り抜く。
「…いない！？」
斬撃は誰もいない場所を通りすぎていった。
「こっちだ！」

高火力へと切り換えたオレは、刀を握りしめて箒へと振り下ろそうとする。

「くっ！」

後ろに現れたオレへとぐるりと回転して、空裂を振り抜こうとした。

「そこまでだっ！！」

と、急にアリーナ中のスピーカーから千冬の声が聞こえた。

ビクッと体を震わせて、オレと箒は攻撃の手を止める。

「侵入者を包囲、生徒の安全を最優先にしろ！」

ＩＳを装備した教師達が一斉に箒を囲み、オレの前に２人の教師が箒から守るように立つ。

…何で気づかれたんだ。アリーナの申請も、シャル達と模擬戦って記入したし…

あ、教師が立ち会ってたか…

でも、全生徒を把握しきれてないと思ってたから油断した。

まずいな…

「なんのつもりだ？」

箒が周りを囲む教師たちを睨み付ける。

「大人しくしろ。抵抗しなければ傷つけん。」

千冬が箒の前に歩いてきた。
スーツなのに、打鉄の近接ブレードを握っている。
こえぇ…
そう思いながら、シールドロックが何故か外れている事に気づく。
なんでだ?まぁ、いいや
不知火、プライベート・チャネルを開いてくれ。
ー了解しました、マスター
少しして、視界にウィンドウが開き箒の顔が表示された。
「…なんだ?」
睨み付けてくる箒。
「逃げろ」
「は?」
オレの言ってる事がよくわかってなかったのか、呆気にとられている箒。
だが次の瞬間、アリーナの壁が爆発した。
「なんだ!!」
千冬が爆発した壁の方を見た。

他の教師たちもそっちに気をとられた。

「アリーナのシールドロックは外れてる！今のうちに早く！！」

「…礼は言わんぞ！」

そういって、箒は瞬時加速で爆発した壁から、アリーナの外へ出ていった。

「な！？待てっ！！」

千冬がそれに気づき怒号をあげる。

教師たちが何人か箒の後を追っていったが、追い付かないだろう。

通常の紅椿の機動力でも、セシリアのブルーティアーズの高機動パッケージと同等。展開装甲を使うと、不知火の通常状態と同等。

訓練機の打鉄やラファール・リヴァイヴでは追い付けない。

教師のＩＳも確認済み。

外にさえ出ちゃえば、箒は逃げれる。

ばれないようにアリーナの外へと飛ばしたビットを戻す。

「…あらら、逃がしちゃって、しょうがないなぁ。俊貴くんは」

それを観客席で見てた楯無が呆れながらも、俊貴っぽいなぁ、と微笑む。

「俊貴。生徒指導室へ来い。事情聴取だ」

「はーい…」

不知火を戻す。事情聴取されるのは予想通りだったため、覚悟はしてた。でも、嫌なものは嫌だ。

アリーナの外に出ると、箒を追って外に出ていた教師達が戻ってきていた。

さすがは、紅椿か

そう思いながら、学校へと向かう。

ｖｓ箒！（後書き）

おはようございます。

箒戦でした。

このあと、箒がどう絡んでくるか今考え中です。

そして、戦闘。

途中で止められはしましたが、戦闘回。

難しいですが、やはり戦闘は考えるの楽しいです。

では、今日はこの辺で。

良かったら感想ももらえると作者は喜びます。

セシリア、攻めに転じる！？

夕方。
生徒指導室の椅子にむかいあって座る俊貴と千冬。
千冬の斜め後ろには、書記として1人教師がノートパソコンに向かって座っている。

「呼び出されたからアリーナに？」

千冬が腕をくみ、俊貴を鋭い目で見る。
何処か見透かされてる感じがして苦手。

「はい。今日の放課後、アリーナに来いと言われたんで、アリーナの使用申請も念のため出してから行きました。」

この事情聴取は、放課後に篠ノ乃箒との戦闘についての物だった。

「で、行ったら試合になったと？」

「まぁ、そういうことです」

「ふむ…」

千冬が頭に手をあてる。

何か考えてるのだろうか。
しばらく沈黙が、生徒指導室に続く。

「奥村。お前は誰と戦っていた？名前は知っているのか？」

「知ってます。たぶん、千冬さんも知ってると思います」

まぁ、たぶんだけどさぁー

「何？私も知ってる…？」

心当たりを探ってるのか、目を閉じて腕を組みなおし首を少し傾げる。

「束さんに妹がいますよね？」

「あ、ああ。いるが、それと何のか…」

言葉を途中でとぎり、ハッとしたような表情となる千冬。

「まさか、その妹と戦っていたということか？」

「はい。束さんの妹、箒と戦っていました。」

「…何が目的でお前と戦っていた？」

「オレのデータをとるのが目的だって言ってました」

「データを？」

と、千冬が首を傾げる。

「オレの知ってることはそれだけです。」

「そうか、わかった。寮へ速やかに戻れ」

「はい」

ペコッと一礼して部屋から出ていく。

あの空気、苦手なんだよねー

頭をかき、寮へと歩を進める。

千冬も指導室から出て、その後ろ姿を見た。

「…まだ言ってない事あるだろ」

そう呟き微笑む千冬。

気づいてないと思っている俊貴だが、アリーナの壁を壊した事は千冬にバレていた。

「まぁ、今回は見逃そう」

束の妹を捕まえる事にならずに済んだ事が、何処かホッとしていた。

「にしても、懐かしいな。束に箒、鈴音。箒がこの学園にいたら幼馴染みが揃い踏みだな」

フッと笑い、千冬も廊下を歩き出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夕食も終えて、自室に戻ってきた俊貴。
うあー、と言いながらベッドに倒れこむ。

疲れた！
今日は疲れた！
ラウラが朝から忍び込んでくるし、箒は強いし、取り調べされるし、
飯食ってるとき質問攻めされるし！！

もう、疲れた！！

「…もう寝てやるもんね！」

そういって、枕に顔を埋める。
すると、当然息苦しくなる。

「ぶはぁ！死んでしまうわ！！」

と、言いながら俊貴は仰向けになり空気を吸い込もうと口を開く。

「…」

「ん？」

ふと、視界の隅に人がいるのに気づく。

「ご、ごきげんよう…」

セシリアが部屋の入り口に立っていた。その顔は、オレの意味不明

な行動に訝しげな顔をしている。

「…ごきげんよう」

ニコッとぎこちなく笑う。
セシリアもぎこちなく笑みを返してくる。

「え、えっと、セシリア。ど、どうかした？」

わざわざ部屋に来たということは、何か用があるんだろう。
でも、何か変な空気になってる。

「あ、ああ。そうでした、俊貴さん。ケーキ食べませんか？」

ちょっと買いすぎてしまって、と微笑みながらケーキの箱を見せるセシリア。

買いすぎた、というよりあえて多く買って俊貴と一緒に食べようと考えていた。

「ケーキ？食べる！！」

甘いもの、大好きだ！
それを知ったセシリア達は、甘いものをちょくちょく持ってきては一緒に食べる口実として利用していた。

「紅茶いれるから、セシリアは座ってて」

ベッドから立ち上がり、簡易キッチンへ向かう。
お湯を沸かす。

「お手伝いしますわ」

ニコッと微笑みオレのとなりに来たセシリア。
手にはまだケーキの箱を持ったままだった。

「じゃあ、小さい皿出してくれ。机出すからそこに置いて」

「わかりましたわ」

…あれ？セシリアって、あんな可愛いかったか？

セシリアの笑顔を見てドキッとしたのを隠すために、少し足早に移動して机を部屋に設置する。

あー、椅子がねえな
どうすっかな…

「どうかしましたか？」

小さい皿とケーキの箱を持ったセシリアが首をかしげてオレを見てくる。

「ん。椅子がないことに気づいた。椅子の代わり、ベッドでいい？」

頬をかき苦笑い。

「大丈夫ですわ。」

またニコッと微笑む。

なんだ？なんでこんな可愛いと感じるんだ？

「じ、じゃあ、座って待ってて。沸いたみたいだし、すぐ紅茶淹れるから」

あらかじめティーポットに熱湯をいれて温めておき、やかんで沸騰し始めたお湯を確認。ティーポットの湯を捨てて、細かい茶葉をいれる。

その間に、お湯がボコボコに泡が出てきて沸騰する。

「さて、後2分ぐらいかな」

その沸騰した湯を素早くティーポットに注ぐ。

ティーポットと常温のカップを2つ持ちセシリアの元に向かう。

「もちょっと待って。紅茶もうすぐできるから」

セシリアの前にカップを置く。

「はい。俊貴さんはどのケーキが良いですか？」

セシリアがケーキの箱を開けて俊貴に見せる。

箱のなかには、苺のショートケーキとレアチーズケーキ、洋なしのタルトが入っていた。

3つ？

「セシリアのおみやげだし、先にセシリアが選びなよ」

そう言いながら、ティーポットから紅茶をカップに注ぐ。

「そ、そうですわね。では、わたくしはタルトをいただきます」

「あい、どうぞ」

箱からタルトを取りだしセシリアの皿の上に優しく置く。

ありがとうございます、と微笑んでくれたセシリア。

「じゃあ、オレはレアチーズかな」

と、レアチーズを取りだして自分の皿にのせた。

「よし、じゃあいただきます」

「いただきます」

2人でそういって、フォークでケーキの先っぽを切り食べる。

「おお！これ上手いな！！」

「ええ。駅の地下街にある人気のお店の物ですから。運よく買えたんですけど、あいかわらず人混みで大変でした」

「へぇ、そんなに人気なのか。でもこれだけ上手いと確かに人気なのも納得だな」

うんうんと頷く。

「…」

「……ん？」

ふと、セシリアが見てきていたことに気づく。

「…食べる？」

「えぇ！？い、いえそんな」

ハッとしたセシリアが慌てだす。

それを無視して、オレはレアチーズを一口サイズに切り、セシリアの方にフォークを向ける。

「あーん」

そういって、微笑む。

「…あーん」

照れながらも口を開くセシリア。

そこへフォークを持っていく。

「ん」

口に運ばれたケーキをドキドキしながら味わうセシリア。

「どう？」

「お、おいしいですわ。ふふ」

味はドキドキしすぎて正直わからない。
でも、俊貴の使ったフォークで、俊貴に食べさせてもらう事が嬉しくて、セシリアは顔を緩めて微笑む。

「で、では、わたくしも俊貴さんに食べさせてあげますわ」

「え？いいの？」

「ええ、ええ。もちろんですわ」

自分のケーキを1切れ切って楽しそうにしながら俊貴の口元へと運ぶ。

「はい、あーん」

これを断るのは失礼だ。
うん、食べよう。

差し出されたケーキをぱくっと食べる。
洋なしの甘酸っぱい味が生きてるタルト。

「上手い！この店ヤバイな！！」

「本当においしいですわよね。ここのケーキは」

上機嫌なセシリア。
いれてもらった紅茶を口にする。

こうでもしないと、にやけた顔が俊貴に見られそうだったから。

「あら？この紅茶、どこかの高級品ですか？」

紅茶を飲んだセシリアが紅茶を見下ろす。

「へ？いんや、市販の簡単に手に入る茶葉だよ」

高級品なんて買えないしね

「そうですの？すごく美味しいですわ」

食べさせ合いをしてポカポカする心と、紅茶のおかげで体までポカポカしてきて頬を紅く染める。

「そうか、よかった。おかわりもあるぞ」

「ええ、いただきますわ」

「ん」

ティーポットからカップに紅茶を注ぐ。

「ミルクティーにするか？」

「え？」

「少し時間がたっちゃって味が濃くなってるからミルクティーにすると、渋味も抑えられるから。そのままでいいならいいけど」

「じゃあ、ミルクティーにしますわ」

「ん、わかった」

立ち上がり、冷蔵庫から牛乳パックを取りだし牛乳を注ぐ。

「ありがとうございます」

「おう」

2人してニコッと微笑む。

そうこうして、2人は和やかにケーキを口に運んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ケーキを食べ終わり、一息つく俊貴とセシリア。

残った苺のショートケーキは2人て半分こして食べた。

「ごちそうさま、セシリア」

「いいえ、気に入っていただけたようでよかったですわ」

何故かさっきからニコニコなセシリア。

何か良いことあったのかな？

（し、幸せですわ）

俊貴と好きなものを食べ2人だけで同じ空間にいる。それがセシリアの心をポカポカにさせ、頬を紅くさせる。

「んー？何かセシリア顔赤いな」

ふと、セシリアの顔を見た時紅くなってる頬に気づく。
立ち上がり、セシリアの正面に移動して手をそっとセシリアの額に添える。

「わひゃ！？」

「んー、熱はないな。紅茶で温かくなったんかな？」

セシリアが変な声をあげたけど気にせずに自分の熱と比べる。
物を食べた後とあって、体温は上がってるが熱はないだろう。

「あ、あの…」

「へ？あ、ああ！ごめん！」

上目遣いで見上げるセシリアの額に手を添えたままだった。
慌てて手を引っ込めて謝る。

「い、いえ」

照れつつも上目遣いでチラッと俊貴の方を見るセシリア。
何かセシリアの様子が変だな

「どうかしたの？」

「い、いえ…何もないです」

視線を外し、うつむくセシリア。

「何もないって、そんな顔する？」

苦笑いする。

「えっと、１つお願いしても良いですか？」

「いいよ、何？」

「…ひ、膝を貸してもらっても良いですか？」

モジモジしながらうつむき気味で聞くセシリア。

「ひ、膝？」

な、何で膝…

膝、枕？

「まぁ、いいけど」

頬をかきセシリアの隣に腰をおろす。

断る理由もないし、いっか

「し、失礼しますわ」

と、言ってセシリアは予想通り俊貴の膝に頭をのせた。

頭に少し固いけど、のせ心地の悪くない感触がする。俊貴の匂いが強くなり、心が落ち着く。

「…」

チラッとセシリアの顔を見てみると、頬が皿に紅くなってるが、ニコニコ笑顔で嬉しそうな表情をしていた。

セシリアも笑うと可愛いな。笑ってなくても、可愛い気もするけど

無意識に手がセシリアの頭に触れていた。

「!?」

俊貴の手が自分の頭に置かれてかなり驚くセシリア。ドキドキしすぎて、心臓が張り裂けそう。

ただ、下手に動くと俊貴の手が離れそうで、何とか静止したままいるセシリア。

（こ、こんな…！ああ！幸せすぎますわ！！）

心のなかでグッと拳を握るセシリア。

俊貴さんの膝枕＋なでなで。こんな幸運が他に有りますか！！

（うあー…、いい匂い、女子特有のこのいい匂いってなんなんだろう）

撫でて、セシリアのいい匂いにだんだんと冷静でいられなくなり始めた。

（心頭滅却、心頭滅却、心頭滅却、心頭滅却）

心のなかでやましい気持ちを消そうとする。

（あー、そういえばセシリアってスタイルよかっ、ダメダメダメ！
そんなこと考えたらダメだ！！）

頭を横に勢いよく振る。

「ど、どうかしましたの？」

セシリアが顔を俊貴の方に向けて聞く。

「ど、どうもしてないよ！」

慌てて否定する。

「そうですか」

仰向けになり、不思議そうに俊貴を見上げるセシリア。

（な、なぜ仰向けになったし）

仰向けになったために、制服を押し上げる2つの山が仰向けなのに
強調される。

それを見てしまった俊貴が、セシリアにばれないように視線をさ迷
わせる。

い、今胸を?
うふふ、わたくしの魅力にやっと気づいて頂けたようですわ。

「俊貴さん」

「は、はい!?」

ドキッとする俊貴。

「うふふ、触ります?」

「はい、…って何を!?」

「わかってるくせに、うふふ」

「うっ…」

顔を紅くして視線を逸らす俊貴。

「こっちに向こうかしら」

と、俊貴のお腹の方に向きを変えようとしたセシリア。

「!?だ、ダメだって!」

慌ててセシリアの頭と肩に手を置いて、向きを変えさせないようにする。
向かれるとマズイ

「むぅ…」

思った以上に俊貴の力が強く、向きを変えれない。諦めて仰向けのままムッとして、俊貴を見る。

「大人しくしててよ」

やれやれと苦笑い。

「良いですけど、何をしようと？」

「は？いや、大人しくしてないと膝枕やめるよ」

「あ、ああ。そっちですか。…わ、わかりましたわ」

「？」

両頬を抑えて顔を背けたセシリア。

それを不思議そうに見る俊貴。

（にしても、どうする…、このままじゃ完全にピサの斜塔が斜めじゃなくて直立になるぞ…）

と、悩ましいセシリアに俊貴は頭を悩ませる。

そんなこと知らずに、セシリアは熱くなった顔を手で覆ってモヤモヤとする。

シャルロットさんには先に同室で一緒に寝られ、ラウラさんには先にキスをされて、後から来た楯無さんにまで同室をとられて、パートナーをその妹さんにとられた

わたくし、俊貴さんとドッキリイベントが無いですわ！

と、思考を巡らせる。

俊貴のはだかを1番初めに見たということはすでに薄れていた。

あのときは、今より俊貴が好きではなかった。

うぅ…、このモヤモヤをどうすれば…

わ、わたくしも攻めないと！！

「と、俊貴さん」

また仰向けになり俊貴の方を向く。

その表情はトロンとしていて、恍惚と俊貴を見る。

「な、何？」

それにドキッとしながら返事を返す。

「あ、明日は休みですし泊まってもよろしいですか？」

「んなっ！？」

まさかの言葉に俊貴が固まる。

かなり動揺しているのがよくわかる。

「だ、だって、ズルいじゃないですか！わたくしだって…」

と、潤めになりながら言う。

（うっ…、その表情はずるい）

効果は抜群。

俊貴はかなり動揺する。

「ダメ、ですか？」

「う…、えっと」

（あ、あれか？オレは金髪に弱いのか？）

「…はぁ、いいよ。ただ、バレないように来てよ？」

ため息をつく俊貴。

（今日疲れてるからそこまで元気ないし、たぶん大丈夫だろう）

「えっと、何故です？」

「は？風呂入らないの？」

「あ！そ、そうですわね！！お風呂入らないといけませんわね！！」

起き上がり、紅くなりながらその頬を両手でおさえる。

「うん、ちょうどいい時間だし行ってきなよ」

「はい。待っててくださいよ？」

「わかってるから、行っておいで」

苦笑いする俊貴。

待っててくださいよ！！、ビシッて音が聞こえそうな勢いで指を指すセシリア。

はいはい、と苦笑いしてセシリアを見送る。

「では、また来ますわ」

嬉しそうな顔をして部屋から出ていった。

「はぁ…、とりあえず風呂はもうはいれないし、シャワー浴びよ」

立ち上がり、クローゼットからジャージを取りだしてシャワー室に向かう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「寝ちゃってる…」

急いでお風呂に入り、急いで着替えて、急いで俊貴の部屋にバレないように来たセシリア。

ベッドの上で眠る部屋の主を見て呆然とする。

「な、何で眠ってるんですの！？お風呂に入ってこいって言っておいて、期待させてこれですの！！」

キィィー！
としたい衝動を何とか抑える。

「はぁ…、せっかくコレ着けたのに…」

俊貴が寝てて見られていないため、パジャマのスカートをピラッと捲る。そこから白いレースの下着が見えていた。セシリアの勝負下着だった。

「この人はほんとに自由ですわね。わたくしのお父様とは全く正反対ですわ」

母にたいして卑屈な父を思い出し、俊貴と無意識に比べてしまう。相手の様子をうかがって生きる父。情けない。父ならもっと堂々としてほしかった。もっと威厳をもってほしかった。嫌いで嫌いでしょうがなかった。

俊貴は逆。女尊男卑なこの社会で、ＩＳを操縦できる事もあるだろうけど、女性に対して卑屈になるどころか男子といるのかのように振る舞う。ちゃんと、気をきかす時は気をきかすけど、恋愛沙汰となると全く駄目な唐変木。
でも、その姿は父と違う。
理想とも少し違うけど、好感を抱き俊貴といると安心できる。
父と違って落ち着ける、セシリアにとって大事な場所。

でも、そんな父は、両親は死んでしまった。

「…あれ？わたくし、泣いてる？」

頬に伝う冷たい感触に気づき、手で拭う。

いくら嫌いでも、やっぱり親子。
勉強して両親の遺産を守ったセシリア。
一方的に嫌いだといってきた。
でも、嫌いだけど、好き。

それにいまさら気づき、セシリアは無意識に涙を流す。

「あ、あれ？止まらない…」

必死に涙を止めようとするが、止まるどころかドンドン流れてくる。

「…セシリア？」

上半身だけ起こし、半分だけ開いた目でこちらを見る俊貴。

「…っ！な、何でもないですわ！！」

慌てて俊貴に背を向ける。
こんな顔見られたくない。

「…」

後ろでのそのそ動く音がした。

「…？」

それに振り返ると目の前に俊貴がいた。
ただ、顔は眠そうなまま。

「っ！」

ふいに俊貴が抱き締めてきた。
それに慌て、パニックになるセシリア。
顔が真っ赤になってるのが、確認しなくてもわかる。

「理由は知らん。でも、泣きたいなら泣け。胸貸してやるから」

と、耳元で眠そうだけど優しく語りかけてきた俊貴。

「！」

「強がって、無駄に自信家で、プライド高くて、大人びてるかと思ったら、無理に背伸びして子供っぽい。」

「！うぅっ…」

俊貴の言うことが自分の事だとすぐわかった。
普段からは、わかってなさそうなのに、しっかりセシリアの根本のところが俊貴には見えていたようだ。

「でも、努力家だって知ってる。成績落ちてきて、それを気にして1人で練習してたのも知ってる。」

「ううぅ」

「オレはセシリアの味方。力になれるならなる。だからさ、セシリア。泣け。今日は一緒にいるから泣け」

ポンポン、と軽く頭を撫でて抱き締める力を強くする。

「う、うあああぁぁ」

頭を撫で始めた後、その温かさに更に涙が止まらなくなる。

大声で泣くセシリアを、ただぎゅっと何も言わずに抱き締め、頭を撫でる俊貴。

それを少しだけドアを開けて中を見る人影。

「…」

それは、寮長の千冬。

たまたま通ったら泣き声が聞こえた。

俊貴の部屋で女の泣き声が。

思いきりドアを蹴破ろうかとも思ったが、もし俊貴が泣かせた訳ではなかったらと考えて、こっそり覗いてみた。

そしたら、俊貴とセシリアが抱き合って、セシリアは号泣。俊貴は何か悟ってるような感じで頭を撫でてる。

「…今日は見逃してやろう」

そっとドアを閉めて巡回に戻る千冬。

ん?見逃すの二回目か?

そう思って俊貴の部屋のドアを振り返る。

思ったよりその泣き声も小さく、様子を見に来る生徒もいない。

しょうがないな。聞かなかったことにしよう

フッと笑って巡回に今度こそ戻る千冬。

セシリア、攻めに転じる！？（後書き）

こんにちわ。

今回ちょっと重くなっちゃいましたね。
でも、まだ重い話が少しした後にあるのですが（笑）

戦闘をそろそろ持ってこないとなぁ…

2人の金髪

朝。
時間にして5時半。
まだ日が顔を出したばっかで、少しだけど鳥もそらをかけていた。
そんな中、金髪の少女がある部屋の前で立ち往生していた。ドアノブに触れるか触れないか、で手をもてあます。

「どうしよう」

部屋を出てここまで来るのは大丈夫だった。
でも、目的の部屋に着いた瞬間に急に緊張し始めた。
あわわ、どうしよう?勢いで来ちゃったけどドキドキしてきちゃったよ…

高鳴る胸を抑えて、ドアノブに手を伸ばす。

「すー、はー」

深呼吸して、決心。
ドアノブに触れて、一瞬ためらう。
だが、すぐにドアノブを回しドアを開けた。
あ、開けちゃった!

そう思いつつも部屋に足を踏み入れる。

「あれ？」

部屋の中に入り、目的の人物の寝ているベッドを見る。
そこには、何故か不自然に盛り上がったベッドがあった。

胸の位置まで両手を持っていき、不安気にベッドに近寄る。

ゆっくりと近づき、枕の方が少しずつ見えてくる。

「え…」

見えてしまった。
見たくなかった、ベッドの中身。

そこに見えたのは、俊貴。
それはいい。
俊貴の腕で眠るセシリアがいた。

「な、なんで？」

セシリアがこの部屋に、しかも同じベッドで、更に腕枕されてる意味がわからない。
パニックになるシャル。

え？え？
どういうこと？
なんで？

「うーん…」

「なっ！」

俊貴が寝返りをうち、セシリアの顔に近づく。

それを見てシャルが焦る。

あわわ！

そ、それ以上は！！

「え、えーい！」

パニックに陥ったシャルは、２人の足元から布団の中へ浸入。

俊貴の後ろに無理矢理入った。

「こ、これで良し…」

ぬくぬく温かい布団。俊貴の背中に抱きつくようにする。

「って、良くないよ！ど、どうしよう、この状況…」

今になって状況に気づく。

１人だけなら充分な広さなのだが、今は３人も同じベッドにいるせいで、なかなかに狭い。

「う、うーん…」

「わ、わわ！」

急にまた俊貴が寝返りをし始め、今度はシャルの方を向いた。
寝返りをうったせいで、セシリアの頭の下から腕が抜けてボスっと枕に落ちる。

ううっ、と声が聞こえたけど起きてないみたいだ。

シャルはシャルでパニックになっていた。

俊貴に抱かれるような体勢になってしまい、ドキドキする。

俊貴のいい匂いがすごくする。
この誰かに抱かれて眠る感覚。
お母さんが死んでしまってから忘れかけていたこの温かさ。
だんだんと安心して、心地よくなってくる。

「…ちょっとだけ」

そう呟き、俊貴の腕に抱かれたまま眠りにはいるシャル。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1時間後。

窓から日の光が入ってくる。

その光を受けて、俊貴がうぅーん、と唸りながら目をさます。

「…ん？」

ぼんやりしながら、目の前の抱き心地の良い物をぎゅっと抱き締める。

あれ？何か抱いてたかな？

そう思いながらも、その抱き心地の良さに気分がよくなってくる。

ふにふにしていい匂い。

「んん…」

何故か自分とは違う声が聞こえた。

「おー？」

薄目を開けて目の前にある物を確認する。

そこには、金髪の少女がオレの腕に抱かれて眠っていた。

「…？」

目をこすり、その少女の顔をよく見る。

し、シャルか？

それに気づき急に胸がドキドキしてきた。顔が熱い。

お、おお？なんでシャルがここに？

とりあえず落ち着こうと、シャルに腕枕してる左腕はそのままに仰

向けになる。

「は？」

そして、視界に入った右側の金髪。

顔だけ右に向けて、セシリアがいるのを確認する。

「…」

うん、とうなずきまた天井を見つめる。

セシリアは、昨日の夜泣き始めちゃったから慰めて、ベッドで寝かせた。

「あれ？オレ自分のベッドで寝たよな？」

廊下側のベッドが自分のベッドで、今寝てるのは廊下側のベッド。

うん、オレのだ。

ということは、入ってきたのはセシリアで、その後に何故かシャルも入ってきた。そういうこと？

「で、でも…この状況…」

左右の金髪美少女。

しかも、２人ともが谷間の見える状態。

あ、あうあう

こ、これは朝じゃなくても直立だ！！

「とか、いってる場合かぁ！！」

思わず両手で頭を抱える。
そのせいで、シャルの頭もボスっとベッドに落ちる。

「あ、シャルごめん」

慌ててそっと頭を持ち上げて、腕を通し元に戻す。

「あれ？戻す意味なくね？」

と、自分の行動の意味不明さに気づく。

「なにー？」

隣で1人騒ぐ俊貴の声に気づき、シャルが目をこすって起きる。

少し眠るつもりが普通に寝てしまったシャル。

「お、おはよう、シャル」

ぎこちなく笑みを浮かべてシャルに挨拶する。

「おはよう、俊貴。」

すぐ状況を理解したシャルだが、俊貴の方に詰めよりぎゅっと服を掴む。

「しゃ、シャル？」

ドキッとして、体温が急に上がる感じがした。
おそらく顔が真っ赤になってる気がする。

「んー？なぁに？」

ぐはぁ

上目遣いで俊貴を見るシャル。
効果は抜群だ！

「何ですの？朝ですか？」

セシリアが目をこすり、上半身を起こす。

「あ、ああ。朝だよ」

ビクッとして俊貴が、ぎこちなく振り返る。
胸の方にシャルが引っ付いてるため、上手く隠しながら振り向く。

「おはようございます」

みなりを整えつつニコッと笑うセシリア。

「お、おはよう」

服からシャルの手を優しく放し、上手く体を使って隠しながらセシリアの方に振り返る。

「せ、セシリア。いつオレのベッドに入ってきた？」

「えっと、俊貴さんが慰めてくれて、わたくしをベッドに寝かせてくれて、俊貴さんが眠ってから隣にお邪魔しましたの」

クスッと笑うセシリア。

「慰めた？」

シャルが横から顔をひょこっと出して聞く。

「！？」

「しゃ、シャルロットさん！？」

驚く2人。

セシリアが、シャルを見た後、俊貴をキッと睨み付ける。

「えっと、これは、その…」

どう説明すればいいのかわからない。

起きたらシャルがいた。それだけなのだが、そのまま言ったらたぶん納得されない気がする。

「まぁ、心の広いわたくしは気にしませんの。あの、熱い抱擁忘れませんわ！」

セシリアが、自分の体を抱き締めるようにする。

こころなしか顔が赤い気がする。

「え？熱い抱擁？？」

シャルが服を掴む力を強めた。

後ろに少し引っ張られる。

「そうですわ。涙を流すわたくしを優しく、でも力強く抱き締めてくれて、慰めていただきましたの」

微笑み幸せそうな顔をするセシリア。

な、何かツヤツヤしてる！？

セシリアの顔がツヤツヤになってる。

（うう…、また知らないうちに俊貴がフラグを立ててる。何で僕にはそれがないの！？）

焦るシャル。今日部屋に忍び込んだのも嬉し恥ずかしイベントを、みたいなきた期待をしていたからだった。ラウラと楯無、簪の３人がやたらと俊貴とフラグを立てていた。

（で、でもこのままじゃ僕、負けちゃうよ！）

「…じゃ、じゃあ僕も！」

後ろからガバッとシャルが俊貴に抱きつく。

（あわわ、すごくドキドキしてる）

自分から抱きついといて、この後どうしようと焦る。

「ぬ、ぬぬ…」

俊貴が真っ赤になりつつもどうするべきか悩む。

せ、背中に柔らかい感触が…！！

「シャルロットさん！」

セシリアが怒り出した。

そして、何故か俊貴へと抱きつきにかかる。

「あぁぁぁ…」

前後に柔らかい感触を受けて、俊貴の思考がごちゃごちゃになる。

「あー…」

限界に達した瞬間に、鼻血を吹き出し倒れる俊貴。

「と、俊貴！大丈夫！？」

「俊貴さん！」

真っ赤になって鼻血を出し倒れる俊貴を揺する2人。

「だ、大丈夫だから、2人とも部屋に戻ってくれ」

あはは、と苦笑いする。

これ以上なにかされたら理性がもたない。
どっちかがいなかったら完全に落ちてたがな！

「で、でも…」

心配そうに顔を覗き込む2人。

「大丈夫。だから、先に着替えて教室に行ってて」

「わかった」
「わかりましたわ」

2人ともまだ不安そうにしていたが、渋々部屋から出ていった。

「はぁ…、朝から刺激が強すぎた。」

ティッシュを数枚とって鼻をおさえる。

「…とりあえず着替えるか」

鼻血が止まったのを確認して、ゴミ箱に屑を投げ捨て制服に着替えを始めた。

2人の金髪（後書き）

こんにちわ。

うっかり土曜日に更新し忘れてしまいました。申し訳ないです。

和む昼休み

シャルとセシリアのおかげで盛大に鼻血を吹き出した朝。
鼻血も止まって、制服に着替え教室に入ってきた俊貴。
それに気づき、シャルとセシリアがオレの前に早足で来た。
2人とも心配そうな顔をしている。

「やぁ、お2人さん。約束通りちゃんと来たよ」

ニコッと笑って挨拶。
2人に心配かけちゃったし、大丈夫だとわかってもらわないと。

「鼻血止まったんだね」

ホッとしてるシャル。

「うん、止まった。だから、もう心配いらないよ」

シャルの頭を撫でる。
それに顔を紅くして上目遣いでオレを見上げてくる。

「わ、わたくしも心配してたんですよ！」

セシリアが焦ってずいっと俊貴の方に詰め寄る。

「あ、ああ。ごめんね」

セシリアも頭を空いてる方の手で撫でる。

2人とも顔を紅くしてトロンとしてる。

「あぁー！奥村くん！！2人だけ撫でるのはズルいんじゃないかな！！」

と、黒板の前で2人を撫でる俊貴に気づき、クラスメイト達がドンドンと詰め寄ってくる。

こ、これは厄介なことになったぞ…

「おい、俊貴。どういうつもりだ。亭主である私を差し置いてその2人を撫でるとは」

腕組みをして、圧倒的威圧感を放つラウラが俊貴を見下ろすように睨み付けてきた。

「な、なんだ？この圧倒的な威圧感は…。な、何者なんだ！？」

そう言った瞬間、俊貴の頭に出席簿が降り下ろされた。

こ、この一撃は…

「扉の前で何をしている。馬鹿者」

出席簿を手に持ち、腕組みをしてこちらを見る千冬が後ろにいた。

頭を擦りながら振り返り、呆れ顔の千冬を確認。

「さぁ、ホームルーム始めるぞ。席につけ」

そういって、生徒をかきわけて壇上へ移動する千冬。

生徒達も席につき始めた。

「もう、そんな時間だったのか」

チラッと壁にかけられた時計を見る。時間は8時55分を指そうとしていた。

ホームルームの始まる時間。

「おい、奥村。早く席につけ。山田くんが入ってこれないだろう」

「へ？」

そう言われて後ろを振り返ると、困った顔した山田先生がいた。

俊貴が振り返った事に気づき、あはは、とぎこちなく笑みを浮かべている。

「山田先生すいません。どうぞ、お入りください」

ペコッと頭を下げ、山田先生を教室の中へ手を取って誘う。

あ、どうもありがとうございます。と律儀にお礼をいって俊貴に手をとられたまま教室に入る。

「何をしている、馬鹿者。さっさと席につけ」

山田先生が中に入り手を離したのを確認して、俊貴の頭に出席簿を再び降り下ろす。

「あだっ」

思わずつんのめる。

「山田くんも、手をとられただけでそんな赤くなるな」

はぁ、とため息をつく千冬。

「は、はい。すみません…」

恥ずかしそうにもじもじする山田先生。

その間に、オレは自分の席に着く。

「何やってるの、俊貴は。怒られるに決まってるのに」

隣のシャルが小声で耳打ちする。

「ああ、ホントだよ。なんでエスコートしたんだ、オレは」

と、頭を抱える。

何か山田先生って、オドオドしててほっとけないんだよなぁ。だからかな?

「…僕にはしてくれないくせに」

ボソッと呟いたシャル。

「え？何？」

「な、何でもないよ」

思わずドキッとして、焦って手をブンブン振るシャル。

「デュノア、何だ。何か有るのか？そんな手を振って」

「ひっ…、な、何でもないです！」

ビクッとして慌てて立ち上がるシャル。

「すいません、オレが余計な事言ったせいなんで、シャルは悪くないです」

「奥村…、お前、後で指導室来るか？」

呆れ顔でジト目の千冬。

「お、おとなしくしてます」

スッと座る俊貴。

「デュノアも座れ。で、続きだが…」

と、ホームルームを続ける千冬。

「ごめんね」

「いいや、気にすんな。オレが聞き返さなきゃ何もならんかったからな」

すまなそうに頭をかきながら言う俊貴。

「ううん。そんなこと…」

と、シャルが言葉を途中で止めた。

「また怒られないように、話聞いてようか」

「うん」

そのやりとりを最後にホームルームは終わった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「とっしーきくーん！」

昼放課、教室の扉を勢いよく開けて楯無さんが入ってきた。

手には重箱を持っている。

ブンブンと空いてる方の手を振り、俊貴の方へと向かってくる。

「どうも。どうかしたんですか？」

ノートやらを机に片付けながら、楯無に挨拶する俊貴。

「いや、何もないけどお昼一緒に食べましょう」

何もなくないじゃん。

「良いですよ。ここで食べます？移動しますか？」

苦笑いしながら答える俊貴。

「そうねぇ。屋上に行きましょう」

扇子を取りだし、上を扇子で指す楯無。

「いいですよ」

片付け終わり、立ち上がる俊貴。

「簪ちゃんも一緒だから」

「簪も？そうですか。」

それを聞き少し嬉しくなる。

楯無と簪。２人の間にあった溝が、ゴーレム戦以降塞がりつつあった。それが俊貴にはたまらなく嬉しかった。やっぱ家族は仲良くないとな。

「あ、あの…」

「ん？」

俊貴と楯無の２人は声のした方を振り返る。

そこには、シャルが手にお弁当箱を持って上目遣いで俊貴たちを見

ていた。

「楯無さん、シャルも良いですよね？」

「いいよ♪」

ニコッと笑うシャル。それを聞いたシャルも嬉しそうに笑う。

「シャル、行こう」

俊貴がシャルに手を差し出す。

「うん！」

ニコニコしながら、俊貴の手をとる。

俊貴に連れられて一緒に教室から出ていく。

そして、教室の外でピタッと足を止める俊貴。

「あ、オレ昼食持ってなかった。先行っててください。買ってきますんで……って、シャル？」

手を離して購買に行こうとした俊貴の手を、シャルはギュッと握ったまま上目遣いで見上げてきた。

「あ、あのね、俊貴の分も作ったんだ」

スッとお弁当を見せる。

シャルの言った通り、いつもより大きな包みになっていた。

「あ、そうなんだ？わざわざありがとう。シャル」

「うん、どういたしまして」

ニコッと嬉しそうな笑顔を見せるシャル。

「あらら、やっぱりシャルロットちゃんは手強いわねぇ」

バッと扇子を開き口元を隠す。

「お姉ちゃん」

「あ、いらっしゃい簪ちゃん。」

呼ばれて振り向くと手にパンを持った簪が立っていた。
一緒にいる俊貴に気づき、その手を握るシャルにも気づく。

「俊貴…と、デュノアさん」

一瞬簪の顔が曇った気がした。
俊貴とシャルが軽く会釈した。

「さ、行こ」

楯無は場が荒れる前に屋上へと誘う。
俊貴達も頷き、屋上へとついていく。
・・・・・・・・・・

屋上に着いた5人。途中でラウラが加わった。
ラウラもパンを持って、階段に立っていた。

楯無とエンカウントし、威嚇するラウラをシャルと俊貴がなだめつつ屋上まで来た。

「いただきます！」

『いただきます』

楯無の後に続いて、４人が手を合わせて食べ始める。

俊貴はシャルにもらったお弁当の蓋を開く。

白いご飯に、卵焼きとウィンナー、ブロッコリーにキャベツときゅうり、ミートボール。

卵焼きをつまみ口に運ぶ。

「うん、うまい！さすがはシャルだ」

だし巻き卵のようで、噛むとだしの味が口のなかにひろがる。

「えへへ、ありがとう」

満面の笑みを浮かべるシャル。

「おい、俊貴。これを食べろ」

ラウラがパンをスッと俊貴に差し出す。

「あ、ありがとう」

苦笑いして差し出された焼きそばパンを１口かじる。

購買の焼きそばパン、旨いんだよなぁ。

「ふふん、これで間接キスだな」

俊貴の食べた場所にかじりつくラウラ。

「な、何だとっ！？」

迂闊だった。
その事を考えてなかった。

「お、じゃあ次は私ね！はい、あーん」

拒否は認めないよ、と言わんばかりの笑みを浮かべて楯無が箸に唐揚げをつまみ俊貴に差し出す。

「あ、あーん」

やむなくその唐揚げをもらう。

「どう？」

「美味しいです」

「でしょ♪」

満足そうに扇子を開く。

「…」

そのやりとりを見ていた箸だが、俊貴に食べてもらう物がなかった。

（…お弁当作ろうかな）

そう考え始める箸。

そんな感じで、和気あいあいとしながら昼食の時間は過ぎていった。

和む昼休み（後書き）

こんにちわ。
更新がスローペースになってしまいました。
たぶん、今週はもっと落ちるかもしれません。ＦＦが出るし…

ああ、時間がもっとほしい！

病は気から？

5日前。

真っ白な空間に1人の少女が突っ立っていた。
黒い髪をサイドでちょこっと束ね、肩まで伸びた綺麗な髪。日本人らしい割と控えめな体つき。

「ん…」

その少女がゆっくりと目を開けた。

ー目覚めたか

その空間に声が響いた。

「私は何でここに？」

呆然とする意識のなか、少女は口を開く。

ー汝は、汝に向けられた重圧に耐えきれず、……に助けを求めていたのではないのか？

「……」

ボソッと呟く。

ー汝の…は、……だ。汝がどちらに進むかは汝が決めるべきだ。我はそれに従おう。

「私は…」

ー承知した

その空間に一筋の黒い光が差し込んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

５日後。
土曜日。
俊貴は、学生寮ではなく家にいた。

織斑家の自室。
千冬と共に、夏休みの時に家具を買いに行き、ベッドと机、椅子、クローゼットを買ってきて自分で部屋に置いた。

鼻血を吹き出した日の学校終わりでこっちに戻ってきていた。

「ふあぁ…」

大あくびをして上半身を起こす。
ポリポリと頭をかき、窓の外を見る。

空は既に日が登り、青く澄み渡っていた。

時計の方を見ると、時間は7時半。
もう千冬さんは起きてるだろう。

また大あくびをして、ベッドから降りダイニングへと向かう。
階段をおり、のそのそとダイニングの扉を開ける。
「おはよう」
と、挨拶して部屋に入ったが返事が帰ってこい。
「？」
ダイニングを見回しても千冬の姿はない。
とりあえず、洗面台に移動して歯みがき。
歯みがきを終え、またダイニングに戻る。
でも、千冬さんはいない。
「もう出てったのかな？」
そう思い、トースターに食パンを1枚入れて焼く。焼き上がる間に、牛乳をコップにいれて、苺ジャムを取り出す。
チャンネルを取り、テレビの電源をつける。
少しして画面がつき、ニュースが始まる。
それをボーッと見ていたら、チーン、と焼き上がる音がした。
それをボーッと取りに行き、ジャムを塗りたくりかぶりつく。

１０分後、朝食を終えて食器を片付ける。
そして、また洗面台へと向かい歯を磨く。

歯みがき後、自室に戻りクローゼットから白いパーカーとジーンズを取り出して着替える。
脱いだジャージを手にとり、洗濯機へと向かう。
階段をトタトタと降りて、脱衣所にある洗濯機へと放り込む。

「？」

ふと、脱衣かごにはいったままの布に気づく。

「！！」

こ、これは！

その布を手に取り、ドキドキする。
千冬の下着がかごに入ったままだった。

あれほど洗濯機に入れといてって言ったのに、千冬さんはー！

しょうがないな、と言いながらネットに入れる。

で、でかっ…

ブラジャーをネットにいれる。

「な、なに考えてんだ、オレは」

首を振り、洗濯機にいれる。

「洗うものはもうないかな？」

とりあえず、脱衣かごを確認。
他にはなにも入ってない。

「なし」

洗濯機の蓋を閉めてスイッチオン。

そのまま脱衣所から出る。

「さて、何しよっかな」

家にいてもやることは特にない。
掃除するか？テレビ見るか？何か作るか？

うーん、と唸りながら階段を上がり、自室を目指す。

「ぅーん…」

階段を登りきり、千冬の部屋の方から声が聞こえた。

「あれ？千冬さんいるのかな」

千冬の部屋の前に立ち、こんこんとノック。
が、返事が帰ってこない。
あ、あれ？寝てるのか？
「千冬さーん」
名前を呼んで返事を待つが、帰ってこない。
「開けるよ？」
そういってから、ガチャッと扉を開ける。
部屋は思った通り、余り物がない部屋で俊貴の部屋とそんなに変わらない感じだった。
「千冬さん」
「う…ん、何だ？」
ベッドで横になっている千冬の横に行く。
「ん？千冬さん、顔が赤いですね。」
そういって、オレは千冬さんの額に左手を置いた。
「なっ！？」
それに驚く千冬。

でも、その手の冷たさが気持ち良い。

「熱があるじゃないですか！いつからですか！！」

オレは自分の熱と比べて、千冬さんの熱のが高い事に気づき、口調を強める。

「け、今朝から…」

しんどそうに言う千冬さん。

「朝からですか。ちょっと待っててください」

あまり千冬の頭に響かないように静かに、素早く部屋から出ていく。

「？」

それをボーッと見送る千冬。

少しして、俊貴がダダダー、と部屋に戻ってきた。

手には、水桶と体温計、ペットボトルのスポーツドリンクを持っていた。

「熱計ってください。後、これ飲んでください」

体温計を千冬さんに渡し、スポーツドリンを手の届く場所に置く。

「…ん」

千冬さんは体温計を受け取って、脇に差し込む。

それを確認してから、水桶に浸けていたタオルをしぼり千冬の額にそっと乗せる。

「ん…」

冷たいタオルにビクッとしたが、その冷たさが今は心地よかった。

「他に欲しいものありますか?買ってきますから」

微笑み聞く。

ピピピ、と体温計が音を鳴らす。

千冬から受け取り、体温計を確認する。

「38℃、か…。熱もありますね。咳とかダルいとかありますか?」

「咳はないな。ただ、寒気とダルさはある…」

うーん、風邪っぽいなぁ。

「あ、何か食べますか?」

「…いい。少し寝かせてくれ」

「わかりました。とりあえず家にはいますから、用があったら呼んでくださいね」

千冬さんの携帯をスポーツドリンクの隣に置き、部屋から出ていった。

そっと静かに扉を閉めてダイニングへと向かう。

「風邪っぽいから、ホットレモン作るか。」

レモンあったかな？

風邪薬はよくならない様なら使うか。

そう考えながら、ダイニングに着く。

そのままキッチンに向かい、やかんを取り出して水をいれ、コンロに置き沸騰させ始める。

「レモーン」

ガチャッと冷蔵庫を開けて、中を確認する。

レモンが3個入っていた。

それを手にとり、調味料の棚に移動して砂糖とはちみつを取り調理台に置く。

そして、包丁、まな板を出して、まな板の上にレモンを置き、半分に切り、片方を3枚の輪切りにした。

もう片方のレモンを絞り、ティーポットにいれた。

下準備をしていたらお湯が沸き、やかんを持ちティーポットにお湯を注ぐ。

そこに、はちみつと砂糖を入れてかき混ぜ、輪切りにしたレモンをいれる。

「さって、味はっと」

少し待ち、ティーポットから自分のマグカップに少しだけホットレモンを注ぐ。

「ん、あっち…」

沸いたばっかりなのもあり、熱い。でも、体を温めるには充分で、やわらかい酸味がした。はちみつのおかげで酸っぱすぎずちょうどいい感じに出来上がっていた。

「よし、とりあえずこれを持っていって、様子を見てみよう」

おぼんにティーポットとマグカップを乗せて、再び千冬の部屋へ向かう。

「入るよー」

一応声かけとかないとね。

ガチャッと扉を開けて中に入る。

「…何だ？」

まだ起きていたようで、千冬がオレの方を向く。

「ホットレモン作ったから飲んで。体温まったら寝れるかもしれな

いから」

そういって、ティーポットからホットレモンをマグカップに注ぐ。

「飲めそう？」

マグカップを千冬の方に近づける。

が、のそのそとダルそうにする千冬を見て、一旦マグカップを置いた。

「ちょっと寒いかもしれないけど」

そういって、オレは起き上がろうとする千冬の腕を掴み優しく起き上がらせる。

「すまんな」

「気にしない気にしない」

ニッと微笑む。

枕を腰の方に置いてもたれれる様にして、千冬を起こす。額のタオルも落ちるため、先に外して桶に浸ける。

そして、マグカップを千冬の手に握らせた。

それを千冬は少しずつ飲み始める。

「うまい」

一旦口を放して言って、また飲み始める。

「そう、よかった」

ホッとしながらも、千冬を見る俊貴。

「おかわりも有りますよ」

「…いや、今はいい。置いといてくれ」

「うん。またお昼前に来るよ。お粥でいい？」

「いや、私に構わずに、したいことをしてろ」

看病してくれるのは正直嬉しい。

でも、そのせいで俊貴の休みを無駄にするような事をしたくない。

「うん、オレはしたいことを今してるんだよ」

そう思っていた千冬は、その俊貴の言葉に驚き、呆れつつも喜びが心にあることに気づく。

「看病したいからしてるんだ。だから、気にしないで」

また優しく微笑まれた。

やはり、その笑顔に弱い部分があるのに改めて気づかされる。

「…すまんな」

「いいからいいから。寝る？」

「あぁ、少し眠くなってきた」

俊貴のホットレモンのおかげで体が温まり、眠気が少しずつやってくる。

俊貴は千冬が横になるのを手伝い、枕を元の位置に戻した。

「すまんな…」

「謝るの禁止。病人は大人しく看病される！」

水桶からタオルをしぼり、また千冬の額に優しく乗せる。

「…」

今日は言われるがままにした方がよさそうだ。

そう思って目を閉じる千冬。

「また、お昼前に来るよ」

「うん」

…え？うん？

千冬からは普段絶対聞けない返事に驚きつつも、ギャップにドキッとした。

でも、余計な事をしないように、と何事もなかったように部屋から出ていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

お昼前。
お粥とティーポットをおぼんに乗せて、千冬の部屋に来た。
お昼前にくる、と言っておきながらも心配でちょくちょく覗きに来ていた。

あ、あれだ、タオルを変えてあげないとダメだからな！

「ん…」

そう思いながら、千冬の額のタオルをまた取り換える。

それによって起きたのか、千冬が俊貴の方を向く。

「気分はどうですか？」

「ああ。朝よりはだいぶ楽だが、まだダルさと寒気はとれない」

「じゃあ、あと半日も寝てれば治りますよ」

ニコッと笑う俊貴。

「…何か食べるものはあるか？」

自分で起き上がり、上半身を起こす千冬。

「あ、お粥作ってきたよ。梅干しでもいい？」

おぼんにのったお粥を千冬に差し出す。

「大丈夫だ」

「じゃあ、どうぞ」

お粥をおわんに移してレンゲと一緒に渡す。

「ありがとう」

「どういたしまして」

しおらしい千冬さんもいいな。
思わず顔が緩む。

「…あつ」

熱いお粥を頬張り、小さく呟く千冬。
ふーふー、とお粥を冷ます。

「かわいい…」

ボソッと思わず溢す俊貴。

「！…ふん」

それを聞いてしまった千冬。
熱のおかげで顔が赤くなったのを悟られなかった。

「お茶も持ってきたんだけど、いる？」

「ああ、もらおう」

一旦お椀を膝に置き、俊貴から湯飲みを受けとる。

それをズズッと飲む。

そして、湯飲みを置き、またお椀を持ち食べ始める。

数十分後、お粥を食べ終わった千冬。

お椀を俊貴に渡す。

「…」

「？」

どこかもじもじする千冬。

「どうかしたんですか？」

「いや、その、服がな…」

「え？」

よく見ると、千冬の着ている白いパジャマは汗でぐっしょりとしていた。

「…あー、オレ洗い物してくる」

着替えたいのか、と気づき俊貴は空になったお椀などをおぼんに乗せる。

「ち、ちょっと待て」

ぎこちなく言う千冬。

「え？」

「着替えるのはいいんだが、濡れたままなのは気持ち悪い。ふ、拭いてくれるか？」

「えぇ！？」

まさかのお願いに固まる俊貴。

「せ、背中が拭けんから拭いてくれ」

「……、せ、背中だけですよ」

前まで拭くと確実に鼻血が出る！

そう思っていたら、千冬は何も言わずに上を脱ぎ始めた。

「あわわわ…」

思わず顔を背ける。

「早く拭いてくれ、寒い」

「は、はいっ！」

ドキッとしつつも、タオルを手に持ち背中を向けてる千冬に近づく。

白い綺麗な肌が目にはいり、ゴクッと喉を鳴らす。

「ふ、拭くよ？」

「あ、ああ」

ドキドキしながらタオルで千冬の背中を拭く。

こ、これは背中だけでも鼻血が！

ってか、ブラジャーしてない！！

「あわ、あわわ、あわわわ」

ガチガチになりながら千冬の背中を拭いていく。

「お、おい、もういいぞ。背中が痛い」

すでに汗は拭えていて、白い背中が少し赤くなっていた。

「ご、ごめん！」

慌ててタオルを放し、口をパクパクさせる。

「あ、洗い物してくる！」

焦りつつもおぼんを持って、部屋から素早く出ていった。

「…少し、やりすぎたか」

ふふっと微笑みタオルで体を拭き始めた。

・・・・・・・・・・・・・・

夜。

半日寝てすっかり体も軽くなり、寒気もなくなった千冬が1階におりダイニングへと向かう。

扉を開けてダイニングへと入ると、俊貴がキッチンで晩御飯を作っていた。

トントントンとリズムよくまな板を打つ音が聞こえてくる。

「あ、もう動いても平気なの？」

千冬に気づいた俊貴が手を止めこえをかける。

「ああ。おかげさまでな」

ダイニングのテーブルから椅子を引き腰かける千冬。

「何か飲む？」

「いや、スポーツドリンクを飲んできたから大丈夫だ」

「そっか。おかゆ食べれる？」

「ああ、食べる」

「ちょっと待ってて」

「ああ」

俊貴が再び調理に移りだした。

（風邪を引いたのはいつ以来だろう）

ふと、そう考える千冬。

俊貴が家に来る前に、こうやって体調を崩したことはなかった。

だから、今日風邪をこじらせた事に俊貴以上に千冬自身が１番驚いていた。

（気が緩んでる、と言えばそれまでだが、１人じゃないということが私にとってこれほど大きいとはな…）

今までは１人だったからこそ風邪を引かなかったし、引けなかった。

１人だと誰も看病してくれない。

弱ってる時に、近くに誰もいない。

それが千冬に気を張らせて、体調を崩させない要因だった。

でも、俊貴が来た。

家族が１人増えた。

優しい家族が1人、側に居てくれるようになった。

それにより、千冬は今までよりも気が緩み体調を崩した。

（一緒にいてくれる人を求めてたのか。私は）

目を閉じ、俊貴が居てくれて良かったと思う。

「はい、おかゆ。今度は卵にしたよ」

千冬の前に、卵のおかゆの入った土びんとお椀が置かれた。

「ありがとう」

「うん」

ニッと笑ってから、俊貴も自分の分のご飯を持ってきた。

どうやら俊貴はおかゆを自分の分も作ったようだ。

「なぜおかゆ？」

「食べたくなったから。こっちも食べる？」

塩で味付けしたシンプルなおかゆ。

「…いい。」

まったく、無駄に気を使って。

自分だけ普通に料理を食べる事が、千冬に悪いと思っていた俊貴は同じように自分もおかゆを作った。

ただ、それは千冬に申し訳なさを募らせる。

「あー…、気にしないでください。オレがしたくてしてるんで」

千冬の心境を読み取った俊貴が苦笑いする。

「そんな顔してると、お風呂に付いてきますよ」

と、いたずらっぽく笑う俊貴。

「じゃあ、背中を流してもらおう」

「え…」

千冬の返しに表情が固まる俊貴。
それを見て千冬も笑う。

「私から一本とろうなんて百年早い」

「…あい」

しゅんとする俊貴。

「まったく。ほら、食べるぞ」

「うん」

と、2人しておかゆをもぐもぐと食べ始めた。

病は気から？（後書き）

こんにちわ。

最近のんびり回ばっかでしたが、次は戦闘回です。っても、主人公はあんまり活躍しないのですが（笑）

新キャラも登場します。それでおそらく場が更に荒れる気がするのは気のせいですかね。

あ、あと活動報告の方も更新したのでそちらも見ていただけると嬉しいです。

もう1人の転生者

月曜日。

整備室の一角。

そこでＩＳの調整をする黒髪の少女。

空中投影ディスプレイを見ながら、キーボードをカタカタと打つ。

「おい新入り。機体の調子はどうだ？」

その少女の後ろから、男勝りな声が聞こえてきた。

少女が振り向くと、そこにいたのはシャーリィとキールを引き連れたシュレイルだった。

「…問題はないよ」

少女がまた空中投影ディスプレイに視線を戻す。

「ふん。まぁお前が出る幕はないがな。オレ達3人で充分だ」

それにシャーリィが、当然！と頷く。キールはそれに苦笑。

「…」

チラッと3人の方を見たが、すぐに視線を戻す。

「何を言ってるの？あなた達3人、束になっても勝てた事がないの

に」

さらに3人の後ろから声が聞こえてきた。

カンカン、と少女の隣に移動して3人を見る女性。

レナスだった。

「なっ…！で、でもあんただって勝ってないでしょ！！」

シャーリィが敵意むき出しでレナスを睨む。

「あら、私は1人で相手したのよ。3人で相手したあなた達はいったいどうなのかしらねぇ？」

腕組みをしてクスッと笑うレナス。

「くっ…」

言い返せず、苦い顔をする3人。

「自分のＩＳの調整でもしたらどう？」

「言われなくても！」

ふん、と鼻を鳴らし3人が機体の調整をしに行った。

「…ごめんねぇ。協調性の欠片もなくて」

「いえ、気にしてません」

「そう」

レナスをちらっとも見ない少女。

「ところで、ＩＳを使ってみてどう？」

少女は一週間前に突如現れ、ＩＳを何故か持っていた。持っていたのにも関わらず、少女はＩＳを一度も使ってなかったようで、初期化と最適化を６日前に行ったばかり。一次移行してこの５日間ずっと訓練をしていた。

ただ、使ったことないのにも関わらずシュレイル達と互角に戦う力を持っていた。

「どうもこうもないです」

つん、とした返事にレナスが苦笑いする。

「あらそう」

「…でも」

レナスの方に振り返る少女。

「空を飛ぶのは気持ちいいです」

口元を緩めて微笑む少女。

「そう」

レナスもクスッと微笑む。

おしいわね。〝ここ〟じゃなかったら、〝向こう〟だったらもっとゾクゾクしたのに。

〝彼〟と一緒。

この子もゾクゾクさせてくれそう。

「さて、私も準備しようかしら」

「あなたも、出るんですか？」

「えぇ。私も出ないと上から怒られちゃうもの」

クスッと笑ってから自分のＩＳの整備に向かうレナス。

「…ねぇ、ホントにいるの？」

ディスプレイから視線をはずし、整備室の窓から見える空を見上げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

昼。

ＩＳ学園の初等科１組。

その窓側の１番後ろの席に座る俊貴がボーッと空を見上げる。

何だろう、この感覚。

何か懐かしいような、でも嫌な予感もする。

「俊貴、どうかしたの？」

隣の席のシャルがボーッと空を見上げる俊貴に声をかける。

「んー？何か、嫌な予感がするんだよ」

空から視線をシャルに移し、ぎこちなく微笑む。

「不安そうだよ？」

席を立ち、俊貴の前に移動するシャル。

「不安、か。確かに不安なのかも」

今感じてるこの胸騒ぎは不安の現れなのかもしれない。

ＩＳで戦ってる時点で、いつ死んでもおかしくはないんだけどな。

「じゃあ、僕が手を握ってあげる」

有無を言わさず、シャルは机の上の俊貴の手に自分の手を重ねて包み込むように握る。

あ、なんだろうすごく落ち着く。

自分の手の上からシャルの温もりを感じる。

その温もりが、俊貴を落ち着かせる。

「ありがとう」

「うん」

2人して微笑み合う。

それを見つめるラウラ、セシリア、鈴の3人。

「やっぱりあの2人、怪しいですわ」

「怪しいな」

「怪しいわね」

うんうんと頷くラウラと鈴。

「まぁ、俊貴は私のだがな」

と、腕組みをして勝ち誇った顔をするラウラ。

「な、何ですって!?」

セシリアがムッとしてラウラを見る。

「忘れたか?俊貴の唇を奪い、同じ布団で眠った私がリードしている」

「くっ!」

キスが大きい。

ただ、3人はキスしたのがラウラだけだと思っていた。

シャルが同じ布団で寝て、裸で同じ風呂に入り、キスしたことを知らない。

「これは勝負するしかないわね」

鈴が２人に火花を散らす。

「ふん、良いだろう」

「望むところですわ！」

２人ともそれに食いつき、にらみ合う。

「…何してんだ、あれ」

「さぁ？」

何故かにらみ合う３人を見る俊貴とシャルが苦笑いする。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今日も何事もなく終わる、そう思っていた。

だが、それは授業中に不知火による警告音によって崩れた。

ーマスター、北方に熱源５。こちらに向かってきます。

またか。しかも１つ反応が増えてるし。

しょうがない、行くか。

「織斑先生、外に行ってきます。」

そう言った俊貴を訝しげに見る千冬。

「またか。今度は何だ？」

「所属不明の３機です。」

「やつらもしつこいな。行ってこい。対処はする。」

「りょーかいです」

立ち上がり、窓を開ける。

「おい！扉から出てけ！」

窓から出てこうとした俊貴を静止するよう言ったが、そのまま俊貴は窓から出ていった。

飛び降りたと思ったら、そのまま一気に上昇して飛んでいく。

「デュノア、オルコット、ボーデヴィッヒ。奥村を追え。」

『はい！』

３人が同時に返事をして立ち上がり、ちゃんと扉から出ていった。

ラウラが窓から出ようとしたのは内緒。

「授業は中止。各自自習をしろ。連絡が来るまで教室から出た者は罰を受けてもらう」

そう言い残して、教室から出ていく千冬。

そして、教室が騒がしくなる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

目の前から、４機のＩＳが自分達に向かってくる。

ＩＳ学園に所属している専用機。
そのうちの１機が、捕縛対象。生きてさえいればどのような状態でもいい、との命令。
だが、その命令を受けてからかなり経つ。

「来たぞ、あいつら」

先頭を翔る緑のＩＳ‘グリューネ’の搭乗者シュレイルが、すぐ後ろにつく２人に声をかける。

「あいつ！今度こそ！！」

シャーリィが、不知火を拡大表示して睨み付ける。

「いいかげん決めないと、上から怒られちゃうしね」

キールもギュッと拳を握る。

「ふん。あいつらの出番、オレらが無くしてやろう！」

シュレイルが、後方に、遅れて飛んでいる２人をチラッと見て鼻で

笑う。

気に入らない。後から合流してきてリーダー気取りのレナス。突如現れて、自分達のＩＳよりも高性能のＩＳを持つ２人。それが気に入らない。

「当然！」

「うん！」

シュレイルの言葉に頷く２人。

「３人とも、来たよ！」

俊貴が横を飛ぶ３人に声をかける。

「じゃあ、予定通り各個撃破で」

「うむ」

「ですわね」

シャルが作戦を確認、ラウラとセシリアが頷く。

「よし、行くよ！！」

俊貴が速度を上げて３機へと向かう。

その後について３人も速度を上げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

3機はやはり、俊貴達に勝てずおされ始めていた。

焦る3機。

「！」

だが、3機を助けるようにレーザーが数本空から降り注ぐ。

「くっ！やっぱり来たか…」

俊貴が上を見上げた。

そこには、灰色のＩＳ，グリース，を駆るレナスが俊貴を見下ろしていた。

ふふん、とレナスは意味ありげに笑みを浮かべている。

「？」

それを警戒しながらも、首を傾げる。

（今回、私は君の相手じゃないんだなぁ）

そう思いつつも、俊貴にレーザーの銃口を向ける。

案の定、俊貴はすぐに身構えた。

ーマスター！真横から攻撃がきます！

「しまった！」

完全に5機目のＩＳの事を忘れていた。

その5機目のＩＳが、俊貴の真横から突っ込んできた。

そして、手に握られた両刃の剣を振り下ろす。

それを、ギリギリでビームシールドを展開して防ぐ。

「…！お、おまえ」

搭乗者の顔に見覚えがある。

忘れるはずのないその顔。

でも、この世界にいるはずがない。

顔が似てるだけか？

そう思って、ビームシールドで剣を横にずらし、腹部を脚で蹴り飛ばす。

「うっ！」

蹴られて後ろに下がる。

「…」

距離がとれて、改めてそのＩＳを見る。

全身が黄色い装甲で、シャルのＩＳより明るい感じがする。俊貴のＩＳと違って、割と装甲が厚い。背中の２本の大型ウィング、両肩の横に物理シールドが１枚ずつ浮いている。

「…」

じっとその搭乗者を見る。

すると、その搭乗者と目が合う。

「お兄、ちゃん？」

「！」

その少女が不安げに声をあげた。

それに心臓がドキッとした。

体が重りを付けているように重くなった。背中に冷や汗が流れる。

聞き間違い？いや、はっきり‘お兄ちゃん’って聞こえた。

鼓動の早くなる心臓。

いるはずない。いるはずないんだ！

「お兄ちゃんでしょ？お兄ちゃんなんでしょ！」

少女が俊貴に詰め寄る。

それに気づいたシャル達とシュレイル達。

「か、奏か？」

俊貴も1歩前に出て名前を呼ぶ。

「そうだよ！お兄ちゃん！！私は奏だよ！！」

奏が剣を量子化して笑顔で俊貴に近づいてくる。

「な、なんでここに？」

ここに、しかもオレの事を知っててここにいる奏。確実に他人の空似じゃない。可能性として1つ。

オレと同じ、1度死んでこっちの世界に来たとしか思えない。

「私ね」

「おい！お前、何してんだ！！」

2人の間にシュレイルが割って入った。

奏を庇うように腕を横に伸ばし、オレを睨み付ける。

「邪魔しないで！」

剣を素早く取りだし、奏はシュレイルを斜めに切り裂いた。

「なっ！てめぇ…」

背中のウィングと装甲を斬られて、体勢を崩し地面へと落ちていく

シュレイル。

「私ね、死んじゃったんだ。」

ぎこちなく笑みを浮かべて、奏が何事もなかったように答えた。

…こえぇ、やっぱ奏だ。このおっかなさは確実に奏だ！

背筋がゾッとする。

「あんた、何してんのよ！！」

シャーリィとキールが奏に突っ込んでくる。

シャーリィは手にビームソードを、キールは飛行形態へと変形し、ビームの銃口を向ける。

キールがミサイルポッドの蓋を開けて、ミサイルを発射する。

「…」

近くにいた俊貴もまとめて攻撃しようとしていた。

それに気づいた奏が、静かにミサイルを睨み付けて、左手に電磁砲を取り出す。

そして、電磁砲を放った。

向かってくるミサイルをまとめて撃ち落とす。

電磁砲を量子化し、剣を両手で持つ。

そこへ爆煙の中からシャーリィが飛び出してきた。

シャーリィは、ビームソードを真横から振り抜こうとした。

それを奏は体勢を低くしてかわし、下から斜め上に剣を振り上げた。

「！」

腰から肩までの装甲を斬られ、バランスを崩す。

その隙を突き、奏はくるっと回転しかかと落としでシャーリィを地面へと思いきり叩き落とした。

「…」

そのまま上空を飛んでいたキールに気づき、剣を量子化、両手に槍を構え狙いをつける。

「な、何を…」

槍をこちらに向けている奏に気づいたキール。

無用心にも、そこで動きを止めてしまった。

（馬鹿な子…）

クスッと笑うレナス。

次の瞬間、槍を思いきり引き、キールへと放つ。

「え！？」

自分に向かってくる槍。

慌てて回避しようとするが、間に合わず翼を貫通。

制御がきかなくなり、動きが乱れる。

ふいに、キールの頭上に影がかかる。

「!?」

「邪魔するから悪いの」

ニコッと笑ったあと、キールへと取り出した黄色の大きなハンマーを降り下ろす。

「がっ!」

背中を思いきり打たれて、キールも地面へと落ちていく。

そして、肩にハンマーを担ぎ高みの見物をしていたレナスを見上げる。

レナスはクスッと微笑む。

「拾ってくれた感謝はしてるんで、このまま帰ってくれませんか？レナスさん」

トントン、とリズムよくハンマーを上下させる。

「願ってもない事ね。私、あなたとも戦ってみたかったのよ。だから、今日は退くわ。次に会ったとき、あなたとは敵同士ってことね」

満足そうに言うレナス。

「そうですか。じゃあ手加減はしません」

ハンマーをレナスに向けてニッと笑う奏。

「ええ、楽しみにしてるわ。それにあなたも」

俊貴の方を見下ろし、クスッと笑い飛んでいった。

あれ？今回オレ何もしてない…

ー奏さんにもってかれちゃいましたね

うん、相変わらずだな。あいつも

こっちに来ても全く変わらない妹、奏に思わず苦笑いする。

上昇して、奏の横へと飛ぶ。

「とりあえず、オレと学園に来てくれるか？」

「うん。一緒なら行く」

ニコッと笑顔の奏。

「じゃあ、一緒に来てくれ」

「うん！」

大きく頷き、俊貴の手を取る。

それに苦笑いしつつ、呆然としていたシャル達の方を向き、オープンチャネルを開く。

「学園に戻ろう」

「あ、うん」

3人は我に返り、前を飛ぶ俊貴と奏を追いかける形で学園へと戻っていった。

もう1人の転生者（後書き）

おはようございます。
妹来ちゃいました（笑）

奏も俊貴と同じくＩＳをもらってからきました。
そして、奏参戦で悪化していく俊貴の周り。
うん、カオス。

夕方。

例の４機に混ざっていた、俊貴の妹。
俊貴に気づき、戦闘を中止したと思ったら、次には俊貴との再会を邪魔するシュレイル達を撃ち落とした。

おかげで、俊貴達は何もしていないのだが戦闘は終了。
ＩＳ学園へと妹を連れて戻る事となった。

そして、今は生徒指導室。
詳しい話を聞くために、俊貴と妹を呼び出して今に至る。

「…」

「…」

引き気味で目の前に座る２人を見る千冬。
俊貴は苦笑い。

ニコニコ笑顔で俊貴の腕に自分の腕を組み、肩に頭を乗せて満足そうにしている妹。

「あー、お前の妹でいいのか？」

千冬が訝しげに妹を見る。

（なぜ、こんなにベッタリなんだ。この妹は）

何処と無く腹立だしい。

「あ、はい。妹の奏です。ほら、自己紹介しろ」

肩から奏の頭をどけて、自己紹介するよう促す。

ぶー、と口を尖らせるが、千冬の方を見てニコッと笑う奏。

あ、営業スマイルだ。

外面の良い奏の笑顔にまた苦笑い。

「奥村奏、１８歳。正真正銘妹でーす！」

「そ、そうか」

ニコニコな奏にたじろぐ千冬。

あ、あの千冬さんが奏にたじろいでいる！？

内心衝撃を受けつつも、また腕を絡ませてきた奏にため息。

「ん？待て、おかしくないか？」

と、千冬が１つの疑問に気づく。

「なぜ、‘お前’の妹が‘ここ’にいる？」

それは当然の疑問。

俊貴の妹となれば、このＩＳの世界でなく、俊貴が死んだ方の世界

の妹になる。
この世界に俊貴の肉親はいない。
なのに、‘ここ’にいる妹。
それは当然、疑問となる。

「えっと、私はお兄ちゃんが突然死んじゃってから6か月経って、1週間前に死んだの」

「1週間前!?じゃあ最近ここに来たのか?」

「うん。ここに来て、たまたまあのシュレイルとか言う人達の近くで倒れてたのを拾われたの。」

「何でそんなところに…」

「さあ?言われた通り、光の中に入って目が覚めたらそこにいたからわかんない」

さらっと言って笑う奏。

「ちょっと待て。向こうから、ここに来たのはわかった。だが、何故お前は死んだんだ?」

そこが千冬は気になっていた。

俊貴の話では、ここに来たのは転生とやらがどうとかいっていた。
なら、この妹も転生でこの世界に来たわけだが、死因が何なのか気になった。

「お兄ちゃんが死んで、妹の私にそのプレッシャーが移ったの。で、

その期待に答えようと頑張ってた私は、頑張りすぎとストレスで逝っちゃったの」

「！……」

自分の死因を明るく話す奏。

だが、俊貴は顔を曇らせる。

オレのせいか。

オレが死ななきゃ奏に負担はかからなかった。ストレスも溜め込まなかった。奏はオレのせいで…

頭の中が奏を死なせてしまった罪悪感で一杯になる。

「あ、お兄ちゃんのせいじゃないよ！悪いのは両親！あの2人、やっぱり頭おかしいよ。私達は人形じゃないのに」

と、言う奏の顔は暗くなっていた。

「…どういうことだ？」

今まで明るかった奏が一気に暗くなったのを見て、普通じゃないことが起こっていたのではないかと千冬は不安になる。

「お兄ちゃん？」

「あ、ああ…」

頷く俊貴。

俊貴の顔は先程から暗い。

「家の両親は2人してエリートっていうか、まぁあれです。優秀なんですよ。父が警察の上層部、母が有名な検察官。おかげで、モラルを守れ、秩序を保て、とか結構厳しかったんです」

（両親が警察の関係者、か…）

「で、オレは警察、奏は検察官と両親の道を辿れって言われてきたんです。そのために勉強して、良い大学に入って、死ぬまで勉強をしてきたんです。」

「でも、オレ達はそのレールの上を走るのが嫌だった。仕事仕事で、オレ達はろくに構ってもらえなかったのに、自分達は勝手にオレ達の将来を決めた。それでも、テストとか成績が良いと誉めてもらえた。だから、一生懸命勉強して誉めてもらおうと2人で頑張ってたんだけど、やっぱりほんとに自分がしたいことじゃないから限界が来た」

「自分のしたいこと。オレはそれがまだわからなかったけど、自分のしてることに疑問をもっちゃって、そのまま迷走。わけわかんなくなっちゃって、ストレスで1度道路にぶっ倒れたんだ」

「お兄ちゃんはお節介だから首突っ込まなくてもいいことに首突っ込んでたこともあって、疲労も溜まってたってお医者さんが言ってた。でもね、家の両親は心配で駆けつけるどころか、病院に行った私に電話で様態を聞いて、ストレスと疲労で倒れたって知ったら、『馬鹿馬鹿しい。そんなことで私の時間を使うのか。お前は本当に親不孝ものだな』って伝言残したきりで、1度も入院中にお兄ちゃんの見舞いには来なかった。」

「あの時は、正直死にたかった。２人が誉めてくれるから、笑ってくれるから、言われるがままに言う通りにしてきたのに、その伝言を聞いた瞬間にオレの中でなんか崩れちゃったんです。」

「その後からお兄ちゃんは完全に自分の意思を無くしちゃったんです。誰にも迷惑をかけないよう無理して、疲れてるのに私の世話までして、なんの力にもなれない私が憎くてしょうがなかった」

奏がギュッと拳を握って震える。

「たださっきも言ったけど、お兄ちゃんはお節介だったのもあって、ほっとけば良いことまで首を突っ込んじゃう。体に染み付いた習慣みたいで、意思がなくても助けちゃってたの。だから、私もお兄ちゃんの近くで、お兄ちゃんの負担を減らそうと同じ大学に進学してほとんどお兄ちゃんと一緒にいたの」

「そのおかげで、少しずつだけどストレスも減ってオレも前のように自分の意思を持てるぐらいまで回復したんです」

「でも、やっぱりそれを両親は良しとせず、私をお兄ちゃんから引き剥がして違う大学に転校させられた。意思のない方が思い通りにさせれるから。」

「今までべったりだった奏がいなくなって、また意思がなくなりかけたんです。でも、その時にオレは死んだ」

「死んで、輪廻を司る神様に会った時に、変わるチャンスなんじゃないか？オレの決められた人生をやり直すチャンスなんじゃないか？って思って、今に至るんです。」

「そうか…」

何とも言えない気持ちになる千冬。

ただ、自分と同じ道に進んでしっかり生きてほしいと両親は思っていたのかもしれない。でも、伝わらない。子供と接しないからます伝わらない。それで溝が深くなり、取り返しの付かないとこまでいってしまった。最後には、2人とも無くしてしまってもう手遅れ。

「それで、お兄ちゃんがいなくなって矛先が全部私に来ちゃった。そこではじめて知ったの。お兄ちゃんはこんなプレッシャーを、苦痛を1人で受けてたんだって。それに気づいたらもう地獄だったよ。私、ちっともお兄ちゃんを助けれてなかったんだってわかって後悔と怒りしか感じなくなった。」

「その状態で1週間前に、私もストレスで死んで、特別にその神様が私にもチャンスをくれた」

「で、お兄ちゃんのことをそこで聞いて、同じ世界に行って今度こそ助けてあげよう！と思ってここに来たの。」

と、1区切りつける。

「今までほとんど兄妹2人で生活してたのか？」

今の俊貴を見てると、意思がなくなっていたなんて思えない。

だから、ほんとに変わるチャンスとしてこっちに来た事があらためてわかる。

「うん。お兄ちゃんが家事をしてくれてたから食べるのに困らなかったし、私も料理できないから掃除とか洗濯を手伝ってた。たまにお母さんがいたけど、お母さんもお兄ちゃんに任せっきりでほとんど自分でやらなかった」

「そうか…」

2人の過去。
それは重い。両親が蒸発した千冬もそうそうないが、2人も充分すぎるぐらいキツい。

「でも、私が来たからにはお兄ちゃんに楽してもらうわ！助けてあげれなかった分をここで助けるから！！」

ギュッと腕を絡ませて笑顔で言ってくる奏。

奏自身も俊貴に助けられてきた。
それは、奏にとって嬉しくもあり、力になれない自分が悔しくもあった。
でも、そばにいてくれる兄。親と違って、いつも近くに居てくれる頼れる優しい兄。
助ける。今度は自分が。辛かった兄を今度こそ助ける。
そのために手段は選ばない。
使えるものは使う。

「では、お前のＩＳも俊貴と同じ」

「うん、もらったの。おかげですぐお兄ちゃんを探し出せた」

と、耳に付いた黄色のひし形のイヤリングを千冬に見せる。
それが待機形態の奏のＩＳのようだ。
「まだ1次移行しかしてないけど、そう簡単にはやられないと思うよ！」
自信満々に言う奏。
「…ところで、妹をここに連れてきたってことは」
「はい。ここに転入させてもらえないですか？」
「え？私もお兄ちゃんと同じ学校に通えるの！？」
目をキラキラさせて笑顔で聞く奏。
「転入させるのは良い。だがな、外国が黙ってはないだろうな。仮にも日本の組織。日本が専用機を数台も所持してるというのは脅威でしかないからな」
「…どうすればいいんですか？」
「まぁ日本の代表候補生としておこう。すでにお前もいれて2人いるが、所属なしで下手な国の候補生になるよりはいい。」
「ですね。奏もそれでいいか？」
「うん、いいよ。」

さらっと同意する奏。

「今日はもう遅いから、明日奏には転入試験を受けてもらうが、いいか？」

「転入試験？今からでも良いんですけど」

「ダメだ。明日行う」

「えー」

不満そうにぶーぶー言う奏。

「千冬さんの言う通りにしろ。奏」

「…あーい」

やむなく頷く奏。

（ブラコン、なのか？）

と、奏に対して思う。

無理もないと言えば、無理もない。親に頼れず、１番近くにいた俊貴を頼る。俊貴はちゃんと奏を助けていた。兄に依存するのに時間はかからなかっただろう。

「後、奏の部屋だが」

「あ…」

それは全く考えてなかった。
月曜日で週が始まったばっかのため、千冬の家に行くわけにもいかない。

「お兄ちゃんの部屋が良い！」

『は？』

俊貴と千冬が同時に驚く。

「だ、ダメなの…？」

不安そうに言う奏。

「…千冬さん」

「そうだな、まだ入学すると決まった訳ではないから、他の生徒と一緒にするよりは良いか」

それにいきなりすぎて、部屋を決めるのに時間もかかる。とりあえず、本人がいいと言ってるし俊貴と同室でいいだろう。

「やった！」

嬉しそうに笑う奏。

「よし。事情もわかったし、もう帰って良いぞ。」

ふぅ、と軽くため息をつき立ち上がる千冬。

「はい、それじゃあ帰ります」

「帰りまーす」

2人も立ち上がって、扉へ向かう。

「おう、気を付けて帰れ」

『はーい』

2人同時に返事をして部屋から出ていった。

1人だけになった千冬。

「あいつも苦労してたんだな」

「ここに来て、あいつは今楽しいのか？」

と、誰も返事をしてくれない空間に問いを投げ掛ける。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俊貴の自室。

奏を連れて、部屋に戻ってきた。
奏は部屋の中を嬉しそうに見回している。

「へぇー、これが学生寮？ホテルみたい！」

窓側の誰も使ってないベッドに倒れ込む奏。

「な。それはオレも思ったよ。」

自分の机にカバンを置いて、中身を入れ換える。

「あー…、風呂はどうする？シャワーだけならここにあるけど、風呂となると入れるかわからんぞ」

まだ部外者だし。

「お風呂かぁ。入りたいけど、しょうがないか。シャワーで良いよ」

残念そうな顔をしたが、すぐに笑顔に戻る。

「あ、そうか。今から入れば良いのか」

と、思い出したように奏の前に移動する。

訳のわからない奏が首をかしげる。

「今、大浴場は男が使える時間なんだ。だから、今入れば良い。男はオレだけだからでっかい風呂貸し切りだぞ」

と、笑顔で言う俊貴。

「お兄ちゃんも入るの？」

「いや、入らんよ。オレは外で待ってる」

妹だからって、さすがに一緒には入れん。

「じゃあ、入らない」

「は？」

「一緒なら入る。一緒じゃないなら入らない」

ふん、と顔を背ける奏。

な、何故一緒に？オレと入ってなんの得があるんだ。でも、風呂入りたいだろうし…

「…じゃあ入るか」

「えっ！ホントに！？」

目を輝かせて立ち上がる。

「ほんとほんと。早く準備して行くよ。交代の時間が来ちゃう」

「うん！」

２人とも着替えを持ち、風呂へと向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わり、大浴場。

俊貴と奏は大浴場の湯船につかっていた。

２人の距離は遠い。

俊貴が奏から離れていくため、距離が遠かった。

そもそも、俊貴は入るつもりはなかったのだが、奏が入らないなら入らないと駄々をこね始め、やむなく一緒に入った。

年頃の女の子が、兄とはいえ男と一緒に風呂って。なに考えてんだ、奏は。

はぁ、とため息をつく。

「ねえ、何でそんな遠いとこにいるの？」

不満そうに言う奏。

「逆に言うけど、何故近づく必要がある？」

さりげなく近づく奏から、そっと離れる俊貴。

「ほら、離れてた分の溝埋めようよ！」

「嫌だね」

「フニャチン」

「あ？」

「何も？」

あのやろう、今バカにしたぞ。確実に兄をバカにしたぞ。

「ねぇ、お兄ちゃん」

「ん？」

何事も無かったように話しかけてきたため、こいつは…、と思いながらも返事。

「ここで今幸せ？」

「……そうだな。幸せなのかな。向こうにいた頃よりは確実に楽しいから幸せなのかも」

言われるまで考えたこともなかった。

だから、言われて気づいた。向こうにいた頃は感情を殺してた。でも、こっちは感情を殺す必要がない。

それがこんなに楽しいのか、と改めて思う。

「ふーん」

（私が来る前から楽しかったなんて…）

何処と無く苛つく。

「まぁ、でも気になってた事が取り除けたよ。向こうで、オレのせいで1人になった奏の事が心配だったんだ。ここに来たのは予想外だったけど、元気そうでよかった」

ニッと笑う俊貴。

「お兄ちゃん…！」

嬉しそうにしながらバシャバシャ水音をたてて近づいてくる奏。

「うわわ！く、来んなって！！」

慌てて後ろへと後ずさる。

「…」

立ち止まり、じわっと目に涙をためて悲しげに俊貴を見る。

「えっと、来んなじゃなくて、あれだ！恥ずかしいから近づいてほしくないんだ！」

焦りまくる俊貴。

「フニャチン」

「は？」

バシャンと水音をたててその場に座る奏。

「おい、こら。フニャチンって言ったな、今。」

今度ははっきり聞こえたため、奏を睨み付ける。

「ふん、フニャチンにフニャチンって言って何が悪い！」

鼻を鳴らして顔を反らす奏。

「おいこら！知りもしないで何を言ってんだ、お前は！！」

「え？見せてくれるの？」

期待した目をする奏。

「見せるか！！」

怒鳴る俊貴。

おい、奏こんなんだったか？こんな変態っぽかったか？

ふと、思い出す俊貴。

奏、風呂に侵入してきてたな。布団にも潜り込んで来てた。あ、そういえばファーストキスもコイツに盗られたんだ…。寝てたからノーカンって事にしとこう。

あれ？何かラウラとしてること一緒じゃね？

「お兄ちゃん？」

「ん？ああ、何だっけ？」

無意識に手が目頭を押さえていた。

「ホントに明るくなったよね」

優しく微笑んでくれる奏。

「…ああ。こっちでオレに関わってくれた人達のおかげだよ。それに神様も。変わるチャンスをくれた。」

「私が元に戻らせれなかったのは悔しいけど、元のお兄ちゃんに戻ってくれて良かったよ。」

「お前にも感謝してんだぞ?向こうにいる時、お前だけが支えだったから、お前がいなかったらと思うとゾッとするよ」

微笑む俊貴。

「え?えへへ、そっかぁ。えへへ」

照れながら顔を赤く染める奏。

「さて、オレはもう出るよ。外で待ってるから」

立ち上がり、タオルを腰に巻いて脱衣所へと向かって歩き出す。

「あ、私も出るー!」

奏も立ち上がり後を追ってくる。

「くっつくなよ」

「フニャチン」

コツン、と額を軽く小突く。

あたた、と額をさする奏。

妹、奏！（後書き）

こんにちわ。

昨日あげるつもりが、急用であげれませんでした。もうしわけありませんでした。

皆さんも体調に気を付けて、怪我とかをしないようにしてくださいね。

奏の転入試験

夕方。
第３アリーナで、ＩＳを展開している奏。
今日は、奏のＩＳ学園への転入試験を行う予定だった。
そのため、奏は俊貴に連れられて第３アリーナに来た。

「ねえ、お兄ちゃん。試験ってＩＳの試験なの？」

ソワソワしながら聞く奏。

「そうだよ。ＩＳの適性検査も兼ねての試験。」

「適性検査？そんなのなんの意味があるの？」

「参考程度だよ。値は訓練とかで変化するから絶対値じゃないけど、自分のランクがどの程度なのかってのがわかるんだ。だから、ちゃんとやれよ」

「うん、わかった。ところで、お兄ちゃんはどのくらい？」

「オレはＡだったよ。」

「Ａね。じゃあ私はＳかな♪」

フフっといたずらっぽく笑う奏。

「そうだな」

苦笑いする。

「おう、待たせたな」

千冬がアリーナに入ってきた。一緒に山田先生がＩＳスーツを着てついてきていた。

山田先生が試験官か。強さは充分だろうなぁ。ってか、山田先生ぐらいじゃなきゃ相手にならない可能性もありそう。

シュレイル達と戦っていた奏の事を思いだし、そう思う。

たぶん、ＩＳ適性Ａ以上は確定だな。

「奏。お前の試験官は山田真耶先生だ」

千冬がとなりに立つ山田先生を紹介する。

どうも…と、ぎこちなく笑みを浮かべながら一礼する山田先生。

ぷるんと弾む山田先生の巨乳に目がいく俊貴。

やっぱこの人のＩＳスーツ姿はヤバイな。普段着てる服も中々ヤバイけど。

と、思わず山田先生に見とれる俊貴。

「ん？」

一礼されたため、奏も山田先生に一礼して顔を上げ、ボーッと前を見る俊貴に気づく。

その視線の先に山田先生。

（この乳好きめ…ってか、あの人でかっ）

前から俊貴の好きなタイプに気づいていた奏は、山田を睨み付けるが、その胸の大きさに驚く奏。

「おい、兄妹そろってどこを見てる」

『えっ？』

2人の同じ視線の先に気づいた千冬が呆れながら言う。

「あ、いや、えっとボーッとしてました！」

「お兄ちゃんは、山田先生のおっぱいを見てました！私はその視線の先を見ただけです！」

「はぁ！？」

まさかの奏の報告に焦る俊貴。

「お、奥村くん…」

恥ずかしそうに赤面して胸を腕で隠す山田先生。

「はぁ…。奥村はこっちこい」

ため息をついて俊貴を呼ぶ。

は、はい、と返事をして千冬の方に移動する俊貴。

隣に来た俊貴の首ねっこを掴む千冬。

「？」

な、なぜ？

キョトンとしている俊貴をそのままに、千冬が耳元でボソッと呟く。

「山田くんのは触らせんが、私のを触るか？」

「ええっ！？」

「うるさい」

ごんっと俊貴の頭をどつく千冬。

「さて、私たちは上で見ているから思う存分戦ってくれ」

「お兄ちゃん連れてっちゃうんですか？」

「ここにいても邪魔なだけだからな」

俊貴の首ねっこを掴んだまま観測室に移動する千冬。

ズルズルと俊貴を引きずって行く。

「奏ー。しっかりなー」

奏へと声援を送る。

「わかってるよー」

微笑み手を振る奏。

（…ってか、なんであの人はお兄ちゃんを引きずってるの？）

後ろ姿を見ながら、ムッとする奏。

「さて、奥村さん。準備はいいですか？」

俊貴たちがアリーナから出ていったのを確認した山田先生が奏に問いかける。

「あ、はい。いいですよー！」

奏がブンブンと手を振って答える。

「じゃあ、始めましょう！」

「いっくぞー！」

奏が大剣を取りだし、山田先生へと突っ込む。

それを迎撃するために、山田先生が両手にマシンガンを持ち一気に

放つ。

「そんなものっ！」

弾の嵐を全く意にも介さず、まっすぐ山田先生へと突っ込んでいき、大剣を横に振り抜く。

「キャッ！」

ギリギリ、マシンガンを盾にして斬撃を防ぐが、銃身を真っ二つにされて、慌てて投げ捨てる。

次の瞬間に、マシンガンは爆発して爆煙を放つ。

「はあぁぁ！！」

奏は素早く大剣を振り上げ、山田先生へと振り下ろす。

それをサイドステップでかわす。その間にも、近接ブレードをとりだす準備をする。

「ほっ！」

手首を捻り、大剣を横へと振り抜く。

「わっ！？」

ギリギリで近接ブレードを取りだし、大剣との間に割り込ませて防ぐ。

が、受けた大剣は重くて支えきれない。
山田先生は、壁の方へと吹き飛ばされた。

「追い討ち、追い討ちー♪」

大剣を量子化して、電磁砲を向けて放つ。

「ひっ！？」

体勢を立て直した瞬間に、アラート音が鳴り電磁砲に気づく。
地面を蹴り、真上へと回避。

「逃がさなーい♪」

すでに山田先生の前へと移動していた奏。手には1本ずつ、剣を握っていて、右手を左に、左手を右に交差し、笑みを浮かべていた。

山田先生が、思わず顔を引きつらせて短く唸る。

そして、奏はその剣を振り抜いた。

「きゃあ！」

装甲を破壊し、シールドエネルギーも削る。

「まだまだぁ！」

今度は斜め上から交差するような振り下ろす。

斜めに、体の装甲を斬り割かれ、ＩＳスーツが露になる。

「おいおい、えげつないな」

観測室で見下ろす千冬が苦笑いする。まさか、ここまでの適性を持ってるとは思ってなかった。

「我が妹ながら、恐ろしい…」

俊貴も苦笑い。

だが、グッジョブ！装甲からこぼれる巨峰が！！

「あだっ」

げんこつで頭を殴られた。

「お前は考えてる事が顔に出すぎだ」

「バカな！完璧なポーカーフェイスのはずなのに…」

「…馬鹿者」

やれやれ、と頭を抱える千冬。

「だが、試験は充分だ。そろそろ止めてこい」

と、奏の方を指差す千冬。

指差された方を見ると、既にボロボロの山田先生の装甲を斬り刻んでいく奏がいた。

奏は剣を投げ捨て、山田先生の腕を掴みアリーナの中央へと投げ飛ばす。

アリーナ中央で倒れる山田先生へと電磁砲を放つ。

「あっ…」

いくら装甲がまだ残ってると言っても、電磁砲を直撃すればただでは済まない。

山田先生は、背筋が凍りつくのを感じた。

次の瞬間、電磁砲が当たり爆発、煙をあげる。

「…やり過ぎちゃった？」

アハハ、と苦笑いする奏。
つい追い討ちをかけてしまった。

あれか？お兄の視線をもってったからか？

「はぁ、やりすぎだ。バカ」

「んん！？」

急に上から声をかけられ、そっちを見る。

そこには、山田先生を脇に抱えた兄の姿があった。背中には赤い翼を出現させている。

「あは。つい、ね」

頭をかく奏。

それを聞き、はぁ、とまたため息をつく俊貴。

「あ、あの奥村くん」

「はい？」

地面へと下降していく途中で山田先生が声をかけてきた。

山田先生の方を見ると、なぜか頬を赤く染めて恥ずかしそうにこちらを見上げてきていた。

「もうちょっと、お腹の方で抱えてくれると先生助かります」

「え？」

お、そういえばさっきから手に柔らかい感触が。

無意識に感触を確かめるように揉む。

「あっ…！」

その瞬間に山田先生から艶やかな声が聞こえた。

…お、オレはエベレストを鷲掴みしてるのか！？
それに気づいた瞬間に、動きを止めて固まる。

「お、奥村くん、も、揉むのは良くないと思いますぅ」

上目使いで俊貴を見上げる山田先生。
眼鏡越しの上目使いで、更に俊貴を硬直させる。

そのままの体勢で固まる俊貴。しだいに山田先生の息づかいが色っぽくなってくる。

て、手が動かない…、固くなっちまう！

「こんの、あほ兄ー！！」

「ぷげらっ！？」

俊貴を横から蹴り飛ばし、壁に激突させる奏。

しっかり山田先生を自分の体を盾にして怪我させないようにする俊貴。

「お、奥村くん？大丈夫ですか？」

俊貴に抱き止められるような形だった山田先生が、顔をのぞきこんでくる。

「はい、大丈夫です。それよりも、山田先生は怪我はないですか？」

頭を擦りながら苦笑いする俊貴。

「は、はい。おかげさまで大丈夫です。ありがとうございます」

ペコッと頭を下げてお礼を言う山田先生。

「い、いえ、オレのせいなんで山田先生がお礼を言うのは」

「お兄ちゃん。」

俊貴の言葉を遮り、奏が呼ぶ。
嫌な汗が流れ始めてきた。

「は、はい…」

ゆっくり前を向くと、大剣を手に持つ笑顔の奏が立っていた。

「て、てへぺろ」

その笑顔に、ぎこちなく笑顔を返す俊貴。その間に、さりげなく山田先生を横に移動させる。

「おら！このクソ兄貴！！」

「あ、アッー！！」

ここから、奏の暴れるにより俊貴がボコボコにされるとか、されないとか。

奏の転入試験（後書き）

こんにちわ。

新作を作成中で更新遅れてます。
ただ、もう少しでこの小説終わりにしようと思ってます。

とりあえず、打ち切りはしないのでそれまで読んでもらえると嬉しいです。

転入生、奏

朝のホームルーム。
教壇に立つ千冬と山田先生。

「あー、また転校生だ。入ってこい」

転校してきたメンバーを1度見てから話す千冬。

その呼び掛けのあと、ドアを開けて黒髪で微妙にツインテールの少女が笑顔で入ってきた。

千冬の隣まで来て、生徒達の方を見る。

「自己紹介しろ」

「はーい。奥村奏です。趣味はお兄ちゃんをいじることでーす。よろしくおねがいしまーす！」

俊貴へと笑みを浮かべて一礼する奏。

案の定、その自己紹介に教室中がざわざわしだす。

「お兄ちゃんって誰？」
「奥村って名字だから」
「もしかして！？」

そんな内容のざわざわを黙って聞いていた俊貴の方へと教室中の視線が集まる。

「…あ、あはは」

力なく笑みを浮かべる俊貴。

あのやろう、何て趣味してやがる。ってか、ここで言う事でもないだろが、バカちんめ。

頭を手でおさえる俊貴。

「あ、あとお兄ちゃんに手を出した人は許しません」

『え？』

「むっ…」

シャルとセシリアが同じ声をあげ、ラウラがピクッと眉を動かす。

ああ、なんか面倒な事になりそうな予感が…

両手で頭を抱える俊貴。

「…奥村はあの席だ」

ため息をつき千冬が空いている真ん中の方の席を指差す。

はーい、と返事をして自分の席へと歩き出す奏。

その姿を、呆気にとられたようなクラスメイト達の視線が追う。

あーあ、転入初日に変な奴って思われてんじゃんか。どうすんだよ、

あと2年。

頬杖をつき、奏の方を見る。

椅子に座り、俊貴の方へと振り向き笑顔で手を振ってくる。

「あ、あはは…」

それを見て思わず苦笑いする。その笑みはかなりひきつっていただろう、と確信する俊貴。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1時限目が終了し、奏の席の周りにクラスメイト達が群がっている。
やはり転校生というのは話題になるようで、奏に興味津々のようだ。
それを自分の席から不安げに見る俊貴。隣にはシャルとラウラがいる。

「ねえ、俊貴」

「ん？」

シャルが声をかけてきた。
ボーッと見てたため、若干うわの空な返事をする。

「妹、なの？」

「ああ。残念ながら妹だ」

頬をかき苦笑いする俊貴。

（ブラコン、なのかな）

シャルがジッと奏の方を見る。

周りの生徒に質問攻めを受けているが、それを笑顔で何ともないように返事をしている。

「…自己紹介でやらかしてたから不安だな」

俊貴も奏の方を見る。

それにつられてラウラも奏の方を見た。

ふいに、奏が3人の視線に気づきこちらを向いた。こちらを、というか完全に俊貴を見ている。

「うっ…」

奏と視線が合い、思わず苦笑いする俊貴。

ニコッと笑い手を振ってくる奏。その笑顔だけ見れば、とても可愛らしいのだが。

それを見て、周りの女子達がざわつく。

「あはは…」

苦笑いしたまま手を振り返す。

「俊貴ってやっぱり年下に甘いんだね」

「え？」

奏の様子を見て、シャルが気づく。

俊貴へのあのなつき具合と、依存。もしかしたらもしかするかもしれない、と一応危険予備軍に加える。ちなみに、それに含まれるのが、のほほんさん、黛先輩、山田先生だ。

特にのほほんさんが怪しい。

同じクラス、生徒会のメンバーでもあり一緒にいる時間も少なくない。それに、俊貴ものほほんさんに対して結構優しい気がする。

『ん？』

ふと、シャルとラウラは奏から放たれる鋭い視線に気づく。

奏も視線があった事に気づき、プイッと向きを変えてしまった。

「あー、ごめんな。あいつ、物心ついた頃でも近くにオレしかいなくてさ、何か変になつかれたというかなんというか…」

なんと説明すればいいのか、言葉を選びながら話す俊貴。

「ああ。見ればわかる。私たちに敵意むき出しだ」

ラウラが、ふん、と鼻をならして腕を組む。負ける気はない、と言いたげな顔をしてる。

「ごめん。できれば兄離れしてほしいんだけどな」

はぁ、とため息をつく。

「でも、あの子の気持ちもわからなくもないかな。ご両親が普段家にいなくて、1番近くにいたのが優しくしてくれる兄だもん。好きになるよ」

シャルが微笑む。前に俊貴の家庭事情を聞いていた。

「うーん、それは嬉しいけど、度が過ぎてるっていうか異常にべったりなんだよなぁ」

ホントに困ってるようで微妙な顔をする俊貴。

「おっくー」

「ん？」

横からスローモーションのごとくスピードで向かってくるのほほんさん。

「どーん」

「もぷ」

そのまま俊貴に体当たり。

「もう…。のほほんさん、俊貴に抱きつくのやめたほうがいいよ。危ないし」

呆れながらシャルが言う。
本心は、抱きついてほしくないのだが、ストレートに言えないため遠回しに言う。

「えっへへー、でゅっちー妬きもち？」

俊貴に抱きついたまま、シャルの方を向くのほほんさん。

「なっ！？」

珍しくシャルが動揺する。
あたふたして視線をあちこちに移している。

「と、とりあえずどいてくれるか、のほほんさん。」

のほほんさんの胸が当たって焦る俊貴。意識してしまってしょうがない。

「おい、俊貴。やっぱりお前は胸が好きなのだな」

ラウラが腕組みをして冷たく見下ろす。

「好きじゃないって言ったら嘘になるけど、気にするな。男だからしょうがないんだ」

のほほんさんを引き剥がそうとする俊貴。

「んんー、おっくーのいけずー」

ぶー、と口を尖らせてやむなく離れる。

はぁ、とため息をついて一息つく俊貴。

そこへ授業開始のチャイムが鳴る。

それと同時に、教室の扉を開けて千冬と山田先生が入ってきた。

「授業始めるぞ」

教壇に立つ千冬。

皆席につき、授業の準備を始める。

転入生、奏（後書き）

こんにちわ。
更新遅れて申し訳ないです。

今続きを作成中ですので、できしだいすぐに更新させていただきます。

あとどのくらいになるかはわかりませんが、これからもよろしくお願いします。

俊貴ｖｓ奏

奏が転入してきた日の午後。
第３アリーナに整列する１組と２組。
その列の前に立つ千冬と山田先生。

「今日は模擬戦を行う。専用機持ちは専用機持ちで行う。訓練機でも専用機とやりたい者は私に言え。」

その千冬の一言で、ほとんどの生徒が勢いよく挙手した。
それに驚き引く、千冬と山田先生とオレ。

「あたし奥村くんと模擬戦したいでーす！」
「わたしもー！」
「ウチもー！」
「あたしは、むしろ撃墜されたい！」

おい！何か変なのいたぞ！！

誰が発したのかわからなかったが、おかしな人がいるようだ。

「あー…、よし。では、こうしよう。奥村１人と訓練機５人ずつで回すとしよう。」

『やったー！』
「えぇ！？」

まさかの提案に焦るオレと、歓喜の声をあげる生徒たち。
これはオレが1人キツイだけじゃ…
「あと、奥村。時間に間に合わなかったら、わかるな？」
千冬がフッと怪しく笑みを浮かべる。
「…はい」
オレだけキツイよ…
折檻されたくないし、始めから全力でいこう。
不知火、高火力でよろしく。
ー了解しました、マスター。
「よし、では模擬戦を始める。」
『はい！』
千冬の呼び掛けに、生徒たちが大きく返事をした。
ははっ、そんないい返事できないよ…
がくっと肩を落としうなだれる。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「しんどい…」

エネルギーは特殊なエネルギー生成により問題ないのだが、オレ自身が疲れてきていた。
授業開始から３０分。
５人１組の模擬戦を今、５組終わらせて６組目に入ろうとしていた。
ふぅー、と息をはき、準備ができた６組目の生徒たちを見る。

「ん！？」

そのメンバーの中に、奏がいた。

「ちょっ、なんでお前がいんだ！」

専用機は専用機とやるんじゃないのか！？
あ、だからオレのとこに来たのか…

「相手してよー、お兄ちゃん」

ニッといたずらっぽく笑う奏。
わ、笑えねぇ…

ーマスター、やるしかないかと。

わーってるよ。

はぁ、とため息をつき目の前で笑みを浮かべてこっちを見る奏の方を見る。

…なんか、魔王とその手下達みたいな雰囲気だな。

奏を中心に、左右に2人ずつ浮いてる。その並びが何ともそう見えた。

やるか！

ヴォーダン・オージェを発動。赤から金へと瞳が変わり、ビットを展開。

そのビットで手下Aと手下Cのスラスターを撃ち抜き、バランスを崩した所に電磁砲を放った。

その放たれた電磁砲が直撃し、煙をあげて地面へと降下していく手下AとC。

オレは更に手下BとDに狙いを定めてビットを放つ。

死角からの射撃を受けて、BとDは装甲を破損。体勢の維持ができず、あちこちに飛び回る。

それを一発ずつピンポイントで撃ち抜き、地面へと落ちていくBとD。

「へぇー、お兄ちゃんもやるねぇ。ほとんど一瞬じゃん」

奏はどうやら周りを片付けるのを待っていたようで、やっと前へと出てきた。

「さぁて、お楽しみといきましょー！」

奏が大剣を取りだして肩に担ぐように構えた、オレを一刀両断しそ

うな雰囲気を醸している。

「…楽しかねぇよ」

ビットを奏の周りに集結させて、バラバラの軌道で飛び回らせる。

（撃ってこないなー）

ビットからいつ射撃が来るかなと思っていたが、どうやら撃つ気はなくて牽制に使っていたようだ。

「こっちからいくよー！」

大剣の刃を背中の方に向け、オレの方へと突っ込んでくる。

その速度は、パックをつけたセシリアのブルーティアーズと同等。

それを見て、オレも大剣を取り出す。

そして、奏の振る大剣にタイミングを合わせてオレも大剣を振る。

「はっ！」

奏が大剣を素早く引き、右脚で蹴りを繰り出す。

オレは左腕を前に向けて、その蹴りを受け止める。

そのまま奏の脚を左へと弾く。

「あわわっ！？」

ぐるんと一回転する奏。

その間に、大剣を構え直し縦に振り下ろす。

「きゃあ！」

オレの方に向き直った瞬間に、大剣を振り下ろしたため、体の装甲が切り裂かれる。
更に連撃をいれようと大剣を横に引くが、奏は素早く距離を開けた。

「うーん、さすがにそう簡単にはいかないかー。」

視界の端に映ったＩＳの状態を確認する奏。
残りエネルギーはまだいいや。破損状態がちょっとまずいかも。
ボディアーマーが赤く点滅し、警告を発している。おそらく、次にボディに攻撃を食らうと完全に壊れるだろう。

（さすがはお兄ちゃん、てことかな）

シュレイル達とは大違いだと笑みを浮かべる。

「まだまだいくよー！」

「…ああ」

大剣を持った手をブンブン振る奏に苦笑いする。

「瞬時加速ー！」

突きの構えで大剣を持ったと思ったら、瞬時加速で一気にオレへと突撃してきた奏。

「…」

その速さは普通じゃないが、今のオレには大した事ない。

大剣をぐっと握り、間合いに入るのを待つ。

そして、間合いに奏が入った瞬間に、大剣を下から上へと思いっきり振り上げて、突きの構えをしていた大剣を逸らして弾く。

「！…でぇりゃあ！！」

ただ、奏は大剣を弾かれてもすぐに反応して、手に巨大なハンマーを取りだして振りかぶって、オレへと思いきり振り下ろした。

「うおっ！？」

その反応に驚くが、ギリギリでハンマーとオレとの間に大剣を割り込ませて防ぐ。

が、その重さが尋常じゃない。下に引っ張られているかのような錯覚を受けるほどで、体がプルプルしてきた。

「ちっ！」

周りに放っていたピットを使って、奏を狙う。

「よっと」

「はっ！？」

力任せに思いきりハンマーを振り抜く奏。
オレはそれに耐えきれずに、壁の方へと吹き飛ぶ。
オレを吹き飛ばした奏は、ピットから放たれるレーザーをすんなりとかわす。

「くっ」

体勢を立て直して、壁にぶつかるのを防ぎ、ピットの攻撃をかわしている奏を見る。

スラスターをうまく使って細かく動き、ピットから放たれるレーザーをかわしている。

「我が妹ながら、恐ろしいやつだな」

その動きを見て、苦笑いしつつ大剣を背中に戻して、双剣を取り出す。
そして、瞬時加速で奏の元へと向かう。

「！おかえり、お兄ちゃん」

ニコッと笑いながらハンマーを振り上げる。

「その笑みと、振り上げてるもんはおかしい！！」

そう言いながら、オレは右手の刀を振る。

「えへへ」

笑いながらハンマーを振り下ろしてきた。
大きな音をたてて、右手の刀とハンマーがぶつかる。
そこまではいい。
オレは、右手で支えきれなくなる前に、左手の刀を奏へと振る。
「うわっ！」
奏はオレの斬撃を受けて、胴体のアーマーが壊れる。
それにより、ハンマーを押す力が弱まる。
その隙を逃さず、オレは一気に右手の刀を振り抜きハンマーを弾く。
「はい、アーマーの損傷率が半分いったからここまで。」
奏に掌を向けて、戦闘中止を呼び掛ける。ＩＳを全壊させると修理に時間もかかるし、模擬戦も長引くため、エネルギー切れはないし損傷率が半分を越えると終了と事前に決めていた。
「ちぇっ。でも、お兄ちゃん強いね」
ハンマーを量子化して近くに飛んでくる奏。
「…まだまだだよ。オレもやられる事はあるし、上手くできないこともある」
双剣を量子化して肩を回す。
「そうなの？」

「そうなの」

視界の端の時計を見て、残り時間を確認する。もう残り３０分をきっていた。

「時間ないな。奏も早く整備室行って修理しといで。オレはさっさと次の組を終わらせないと」

「はいはーい。また後で来るよー」

オレにブンブンと手を振って、整備室へと向かっていく奏。

「あいよー」

軽く手を振って見送ると、次の組が入れ替わりで入ってきた。

そこにシャルの姿があった。

「あ、あれれ？」

「えへへ、来ちゃった♪」

ニコッと笑うシャル。

その笑顔に射ぬかれるオレ。

えへへ、来ちゃった♪……か。

「…奏も来たし、やるしかないか」

はぁ、とため息をつき気持ちを無理矢理切り替える。

俊貴ｖｓ奏（後書き）

おはようございます。

次の話からラストへと向かっていきます。

一応構成はできてるんですが、まだ文章にしてないので時間を頂きますが、よろしくお願いします。

大事な話

生徒指導室に呼ばれ、訳のわからないまま椅子に座らされる俊貴と奏。

その前には、腕組みをしてこちらを見ている千冬。

「えっと、奏が何かしましたか？」

「何で私が悪さしたみたいになってんのよ！！」

文句をいって、右の拳がオレの頭にねじ込まれる。

「オレが何かしたならお前を呼ぶ必要はない。でも、ここにはオレとお前の２人いる。奏１人だと素直にここに来ないから、オレが巻き込まれたと

「なんっ…！」

ムッとする奏。

「おい、兄妹喧嘩は後にしろ。あと、俊貴の読みは半分外れだ。奏に用はあるが、お前の言う通り１人だと来なそうだから一緒に来てもらった」

「私に何のようですか？」

納得いってないような顔をしている奏。

「お前はこの４機と一緒にいたんだろう？」

そういって、空中投影ディスプレイが表示されそこにシュレイルやレナスのＩＳが映っていた。

「いたけど、それが？」

「お前はコイツらのアジトというか、居場所がわかるか？」

「えー…、たぶんＩＳが場所を覚えてると思うけど」

奏が空中投影ディスプレイを映し出した。
そこに地図が表示される。

「あー、ここだったかな」

ＩＳ学園を表していた地図がスクロールされて、離れた場所の山付近を映し出した。

そこに見覚えがある気がする。

「このただの山にやつらがいるのか？」

「確かここに何か基地作って、ＩＳの調製とかしてました。」

「ふむ、座標は……。よし、ここへ軍に要請を出す。」

座標を映しとる千冬。

「もしかしたら、専用機持ちのお前達にも声がかかるかもしれんからその時は頼むぞ」

「はい」
「めんどくさー」
素直に返事する２人。
奏は、まあしょうがないやつだからな。
「よし、話は以上だ。」
『はい』
２人して部屋を出ていった。
「１つ厄介事がこれで消えてくれればいいんだがな」
はぁ、とため息をつき外を見る。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
千冬からの呼び出しの後、オレは自室に戻ってきた。おまけ付きでな。
左腕にピッタリ引っ付いている奏。
「えっと、俊貴…」
それを、ひきつった笑顔で見るシャル。
「言うな、シャル。めんどくさいことになるから」

はぁ、とため息をつき苦笑いする。
これで、シャルが奏に何か言ったら絶対シャルに絡む。
それはダメだ。シャルを傷つけるに決まってる。シャルだけは傷つけさせない。

「う、うん…」

ぎこちない笑みを向けてくれるシャル。

「あ、あのね、織斑先生に何で呼ばれたの？」

奏に構うな、という意思を読み取ったのかシャルは本題に入った。

「ああ。ファントム・タスクとは別の、謎の４機のアジトを奏が知ってるんじゃないか、て話だった。」

「あの新型ＩＳばっかりを狙ってきた？」

「そう。で、奏のおかげでアジトの場所が判明して、日本の軍を動かすらしい。それにオレ達日本の代表候補生も駆り出される可能性があるって話だった」

「え、俊貴も出るかもってこと？」

シャルが不安そうな表情で聞いてくる。

「お兄ちゃんがそう言ったでしょ」

冷たく言い放つ奏。

「あ…、えっと、ごめんね」

シャルがしゅんとしてしまった。
それにムカッとくる。

「そもそも、何当たり前の様な顔してお兄ちゃんの部屋に入ってきてるの?あんた、お兄ちゃんの何?」

「えっと、私は、俊貴の…」

シャルがもじもじしながらオレの方をチラチラ見る。

「何?何なの?何で呼び捨てなの?」

オレの腕から離れてシャルに詰め寄る奏。

「あ、あう…」

シャルが完全に奏のペースにのまれてる。
戸惑って視線をさ迷わせるシャル。

「おい、バカ妹。シャルを困らせるな」

奏の首根っこを掴んで、シャルから離す。

そして、シャルの前に立って壁のようになる。
シャルは俊貴の後ろ姿を見ながら、思わず顔を緩め笑顔になる。

「むぅ…、何で庇うの？」

逆に、奏は不機嫌になる。

「庇うさ。シャルはオレにとって大事な存在だから」

「え？」

シャルは立ち上がり、胸の前で両手を組んだ。

「大事な人？何それ、好きってこと？」

奏はオレを真剣に見てくる。

好き？…だろうな。じゃなきゃ、悩まないし守りたいなんて思わない。シャル達がオさレに好意を寄せてくれてるのは薄々気づいてた。それでも、ホントに誰が好きなのか、今でも悩んでる。セシリアもラウラも怜莉も、楯無さん、簪…皆守りたいし、オレは好きだ。でも、その中でホントに一番好きなのが誰か。

「…」

答えずにうつむくオレを、奏とシャルがじっと待つ。

「ちょっと考えさせてくれ」

答えを出さずに、曖昧なままにしてたんだ。そろそろ答えを出さなきゃ皆に悪い。皆前に進めない。そのために、オレは…

「わかった。」

奏は頷き、部屋から出ていった。

「シャルもごめんな。」

「ううん、僕は…」

「ちゃんと答えだすから」

「う、うん…。じゃあ、僕も部屋に戻るね」

ぎこちなく笑ってシャルは部屋から出ていった。

「……」

シャルを見送ってから、ゆっくりベッドに腰掛ける。

・・・・・・・・・・・・・・・

その夜。
オレは考えに煮詰まり、気晴らしに屋上へと来ていた。
ごろんと屋上の床に寝転び、黒い空に瞬く星を見る。大きさ、輝きともにまばらだが1つ1つがしっかりと輝いている。

「ホントに好きな人、か…」

はぁ、とため息をつき目を閉じる。
星の姿は消えて真っ暗になる視界。そこに浮かぶ、セシリアやシャル達。

「オレの中で一番でかい存在…」

うーん、と目を閉じたまま寝返りをうつ。

「わわっ！？」

何かにぶつかった、というか人にぶつかったようで目を開けると、白かった。黒い視界から白い視界に移り、何故か良い匂いと柔らかい感触がする。

「んあ？」

顔をあげると、顔を真っ赤にしたシャルがいた。
どうやら、シャルのミニスカートに顔をぶつけたようだ。

「ご、ごめん、気づかなくて…」

慌てて謝り、ちゃんと座り直す。

シャルも指をいじりながら頷きチラチラと見てくる。

「い、いいの。勝手に横に座っただけだから」

そう言いながら、オレの様子をうかがう。

「邪魔そうだし戻るね」

またぎこちなく笑顔を浮かべてシャルが立ち上がった。

「っ…」

それを見て、何故か心が沈む。

「ど、どうかした？調子悪いの？」

顔を歪めたオレに、心配そうにしゃがみこんで聞いてくるシャル。

それを見て、今の気持ちが何となくわかった。

「ああ、そうか」

それに気づき、頭をおさえる。

「なに？頭が痛いの？大丈夫？」

シャルが不安そうに聞いてくる。

「ごめん、もう大丈夫だから」

頭から手を離し、はぁ、とため息をつきあぐらをかく。それと同時に情けなさが募る。何で気づかなかったんだか、オレは…

気づいた事に嬉しいのか情けないのか微妙な顔をした。それを見て、大丈夫そうだと判断したのかシャルはまた立ち上がった。

「じゃ、じゃあまたね」

「待って」

振り返り、扉の方へ行こうとするシャルの手を掴む。

「え？」

そのままオレの方に抱き寄せた。

「…え？」

シャルは呆然としたまま耳元で声をあげた。

「わかったんだ。答え」

呆然としたままのシャルに話しかける。

ちゃんとわかってくれるかな？いや、わかってもらえる。簡単だ。

はっきりと言えばいいんだから。

「答え？……誰が好きなのかっていう？」

シャルも理解してきたのか、オレに寄りかかったまま聞く体勢に入った。

「そう。その答えが出たんだ。」

ここまでしたら、逆にいう必要も無い気がするけど、やっぱ言わなきゃな。

「…それは、僕が一番に聞いてもいいの？」

その答えは、少なくとも6人は傷つける。

でも、その答えがないままだと誰も前に進めない。皆一緒に聞かな

くてよかったのか、そう言いたいんだろう。

「いい。シャルに、シャルじゃなきゃダメなんだ」

ピクッとシャルがオレの腕の中で揺れた。

「…わかった。」

シャルはすーはー、と一度深呼吸して目を閉じた。

覚悟ができたのか、シャルはゆっくりと目を開けた。

「オレは、シャルが好きだ。」

「……」

そう言うと、シャルはまたピクッと体を揺らした。

「な、なんで僕なの？」

オレの胸元をぎゅっと握って噛み締めるように言う。

「さっきの笑顔、それから不安そうな顔。それ見たら何か胸が苦しくなったんだ。あぁ、またシャルを不安にさせてる。また苦しめてるって気づいたんだ。」

「…うん」

「で、気づいたんだ。オレはそんなシャルの顔見たくないんだって。オレの見たいのは、いつものシャルのかわいい笑顔なんだ。それで、

シャルのそんな顔見たくないから、守りたいから今まで必死にやってきたんだってわかった。」

「うん…」

「ラウラ達の事も同じように考えた。でも、やっぱシャルのが想いが強くてさ。」

「うん…」

話してたら、だんだんとシャルの声がかすれてきた。オレの服を掴む力も強くなる。

「…遅かったよな。ごめん」

「…うん」

「でもさ、ここにシャルが来てくれなかったら煮詰まったままで答えが出なかったかもしれない」

「ふふ…、引き寄せられたみたいな感じだね」

「だな。でも、ごめんな。ここまで遅くて」

「ホントだよ。俊貴ってアピールしてるのに気づいてくれないし」

ぐすぐすしながらも、声は明るくなるシャル。

「ごめん」

「いいよ、ちゃんと気づいてくれたから」

えへへ、と笑いながらシャルはオレの背中の方に腕をまわして抱き締めてきた。

「好きだ」

「うん、僕も」

ぎゅっと、2人はその存在を確めあうかのように抱き締める。

それを遠巻きのスコープ越しで見る影。

「…茶番だな」

嘲笑うようにボソッと呟く。

ーマスター、ロックされてます！方向は2時の方角です！！

「！」

脳内に響く不知火の声に、顔をあげる。

ただ、夜ということもありよく見えない。

「！！」

ふと、その空に不自然に星の見えない箇所と一瞬だけ光が見えた。

「くっ！」

慌ててシャルを横に突き飛ばす。

「きゃあ！」

シャルが驚き呆然としてるが、それどころじゃない。急いで不知火を展開しようとする。

だが、それも間に合わず夜空から一筋のレーザーが放たれる。

「あぐっ…」

そのレーザーはオレの脇腹を貫通し、屋上を少し破壊した。

「俊貴っ！！」

その光景を見ていたシャルが慌ててオレに駆け寄ってきた。

涙目でオレの顔を見下ろし、名前を呼んでくれる。

「…に、げろ、…シャル」

おそらくまだ空にいるんだろう。狙いはわからないけど、何故かバレずに学園の近くまで侵入できている。ステルスモード使用、さらに遠距離射撃。何となく思い当たる奴はいる。

思考を何とか働かせるが、だんだんと考えられなくなり、シャルの顔もボヤけてくる。

「俊貴！！」

シャルが必死にハンカチで傷口を抑えて出血を抑えようとしている。

「いいから……にげろ…」

熱い。脇腹が熱い。でも、体は少しずつ冷えていく感じがする。

何とか手を動かしてシャルを扉の方へ向かわせようとするが、力が入らない。

「……ふん、甘いな。気づいてからの行動が鈍い」

「きゃあぁ！！」

急に声が聞こえたと思ったら、シャルが空へと浮いていく。聞き覚えのある声、そして見たことのある青い機体。

「くっ…シャル…！！」

意識が途切れる前に、手を伸ばすが届かない。

「大事な女を返してほしかったら追って来い。場所は言わなくてもすでにわかってると思うがな」

そう言い残して一気に離れるサイレント・ゼフィルス。

「しゃ……る…」

遠くなるシャルに手を伸ばすが、オレの意識は長くもたず真っ暗になった。

大事な話（後書き）

お久しぶりです。

最終話に向けて、執筆中です。
正直、バイトとか卒研とかどうでもいい。
ただ、続きを早く書いて更新したい。
でも、そうはいかないのが現実。

文句を言う前に、やることやって小説を書きますかね。

と、いうわけで次までしばらくお待ちください。

意識不明と半壊

シャルがサイレント・ゼフィルスにさらわれた翌日。

ＩＳ学園はドタバタとしていた。昨夜、いきなり現れたサイレント・ゼフィルスに対応するために教師陣を出撃させたが、既にレーダーから反応はロストしていた。

そこに一緒にいたはずのシャルロットの反応も消えていた。

屋上にいたのは、脇腹から大量に血を流して気を失っていた俊貴だけだった。

俊貴を急いで治療室に運び、緊急手術を行い傷口を塞ぎ一命をとりとめた。

だが、血を流しすぎたせいなのか意識が戻らない。

報せを聞いたセシリア達が、保健室にまで駆けつけて呼び掛けるが全く目が覚める気配がない。

できれば傍にいたい、と思うが状況が状況のためそうもいかない千冬。

「ステルスモードにしてまで、デュノアをさらう必要がどこにあるというのだ…！」

拳を壁に思いきり叩きつける。

今、デュノアは実家であるデュノア社とも縁を切っている。デュノア社は、ＩＳの開発にも遅れが生じていて他の企業よりも一歩後ろを進んでいるのに加え、貴重なＩＳのテストパイロットを失ってい

る。デュノア社に用があるにしても、ファントムタスク側に得があるとは思いにくい。

さらうのなら、オルコットや如月だろう。

「それとも、デュノアでなければいけない何かがあったのか？」

窓から俊貴の眠る保健室を見下ろす。まだオルコット達が声をかけているようだ。

「…俊貴を狙ったのか？」

デュノアでなければならない理由として考えつく事はそこ。俊貴にとってデュノアの存在の大きさ。本人が気づいてるのかどうかは知らん。だが、アイツはデュノアに対して深い感情があるのは見ててわかる。更識姉妹、ボーデヴィッヒも似た感じではあるがデュノアだけは別格。それを見ていてとてもわかる。

「それに気づいていた、とでも言うのか？そもそもどうやってその情報を得たんだ。」

はぁ、とため息をつく。

まだ他にもやることはある。

ファントムタスクと関係があるかどうかは不明だが、前から現れていた謎のＩＳ４機。その本拠地が判明し、軍が動こうとしていて、それと一緒に日本の候補生である簪と奏に出撃命令が下っていた。

それに俊貴も入っていたが、今の状態のため不可能。

「この事も知っていて行動しているのか？だとするとスパイがいる

と考える方が自然だ」

だが、スパイをしているような人間が思い当たらない。山田くんは無理だ。他の先生方もない。生徒？いや、まさかそんなはずはない。生徒にスパイが混ざっていたら調べるのに時間がかかるな。

「スパイじゃないとしたら一体…。いや、今はそれどころじゃない」

考えてもわからない。なら、いい。やれることをやる。

「会議室に行こう」

チラッともう一度だけ俊貴の方を見てから、千冬は視線を前に戻し部屋から出ていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

倉庫のような広い空間。

そこに展開したラファール・リヴァイヴ・カスタム？で駆けるシャルロット。だが、装甲は既にボロボロで、シャルロットも呼吸が荒くなっている。

「余計な手間を増やすな。大人しく閉じ込められていろ」

シャルロットの前に立ち塞がるサイレント・ゼフィルス。銃口がシャルロットに向けられている。

「…何で僕を誘拐したの？」

考える時間を稼がなきゃ。残りエネルギーも少ないし、ダメージを

受けすぎちゃった。これで乗りきるのは正直キツイかも。

「言う必要はない」

あっさりと僕の質問は返された。
どうしよう、なにか手は…

「残念、時間切れだ」

急に後ろから声が聞こえてきた。振り返るとサイレント・ゼフィルス。

「えっ？」

僕に向かってスターブレイカーが振り下ろされた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わり、再びＩＳ学園。

会議室に集まった簪と奏。
その２人の前に立ち、腕組みをする千冬。
「先生、何ですか？話があるならさっさとしてくれませんか？私、あの人達を潰しに行かないといけないんで」
あからさまに不機嫌な奏が千冬を睨み付ける。
だが、千冬はそんな奏を軽く受け流す。

「落ち着け馬鹿者。大事な兄が重傷で、その傷を負わしたのが奴らでも、お前1人を敵地に送り込む訳にはいかん」

1人を敵地に送り込んで、更に頭数を減らすわけにはいかない。

「…まあ、あの人達の所に行かせてくれるならいいや。で、話は？」

奏が大人しく机に腰をおろした。

簪はそれをチラッと見てから、千冬の方に向き直る。

千冬は簪の方を見た。

見た目いつもと変わりはなさそうだが、不安だろうし奏と一緒で怒りもあるだろう。

「お前達2人は、これから予定通り例の基地に進入するのに参加してもらう。」

2人が頷き返事する。

「もともと、俊貴を含めた3名1小隊で別行動をしてもらう予定ではあったが、知ってる通り俊貴が動けん。そのため、お前達だけで行ってもらう」

「それはいいけど、私達別行動って何すればいいんですか？」

奏の問に、千冬はスクリーンを下ろして部屋を暗くし、そのスクリーンに映像を映した。

これから進入する山と、そこにできている入り口の様な場所が映っ

ている。

「本隊がここから正面突破をはかる。」

入り口を指し棒で軽く叩く。

「それに混ざりながらデュノアを探せ。お前達は前に出る必要はない。候補生と言うこともあるが、戦場に慣れてない者が前に出て落とされるのはよくない。」

「……」

奏が千冬を睨み付ける。

言いたいことはわかる。兄を傷つけた相手を無視して、シャルロットを助けろと言われて、奏が納得できるわけがない。

だが、今回はたまたま運がよくて俊貴は生き伸びた。そう考えてしまうと、まだ未熟な生徒達を戦地に向かわせるのが不安でしょうがない。

「…戦闘をするな、と言ってる訳ではない。状況をちゃんと読み、何をするのが一番かよく考えろ。無意味に感情に任せて戦闘を行うのが一番よくない。それを胸に、行動をしろ」

「ふん…。いいよ、従ってあげる」

顔を背けるが了承してくれた奏。

「…更識、おまえは？」

「従います……」

小さく、だが強い意思をもった表情で頷く簪。

「作戦時間は１１３０。ここの校庭に本隊が集合する。お前達もそこに並び、一緒に目的地へと迎え」

「はい」「ふん」

「以上だ。解散」

簪と奏、２人は会議室から出ていった。

千冬はスクリーンを戻し、部屋の明かりをつける。

「…」

窓から青く広がる空を見上げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん…」

ゆっくりと目を開けるシャル。

ぼんやりとする視界の中、ジッと動かずに前を見る。

あれ？ここは……どこ？

だんだんと意識がはっきりしてきた。それにより、灰色の天井が見えてくる。所々黒く汚れている。

「……あれ？」

ふと、体が動かない事に気づき腕の方を見てみる。

「縛られてる…」

自分の両腕に黒い手錠がはまり、そこから鎖が伸びベッドに縛りつけられていた。

脚の方も同じように黒い足枷をつけられて鎖で繋がれていた。

「…リヴァイヴ！」

ＩＳを展開しようとするが、反応がない。

「あ…、あの時全壊されちゃったの？リヴァイヴ…」

ここに入れられる前に、サイレント・ゼフィルスに不意を突かれて気絶したのを思い出した。

その時に、もしかしたら装甲を破壊されてしまったのかもしれない。

１つ確実なのはエネルギーが切れてしまってる事だ。

「どうしよう、これじゃ逃げれないよ…」

何とか抜け出せないかもぞもぞと動いてみるが、抜け出せる気が全くしない。

「おやおや、フランスの令嬢がはしたない格好で」

「！」

声のした方を見ると、檻越しにレナスがこちらを見ていた。薄い笑みを浮かべている。

そして、言われた事に気づき自分の体を見ると、もがいたせいで制服が乱れていた。更に、先程の戦いでＩＳスーツを着なかったために、制服が所々破れてピンクの下着が見えていた。

「うぅ…」

何とかそれを直そうとするが直るどころか悪化する。

「ふふふ、可愛いわ。」

頬に手を当てて満足そうな顔をすらレナス。

見られて恥ずかしさで顔が赤くなる。

「シャルロットちゃん、そのまま大人しくしててね。じゃないと、五体満足でいられなくなっちゃうから」

クスッと笑みを浮かべるレナス。

「…何で僕を捕らえたの？」

サイレント・ゼフィルスに聞いても答えてくれなかった。

「…あなたじゃなきゃダメなのよ。彼の本気をださせるためには、シャルロットちゃん。あなたじゃなきゃ彼は本当に本気になってく

れないの」

急に真顔になったレナス。

「彼って、俊貴の事？」

「そう。奏ちゃんも私をぞくぞくさせてくれたけど、俊貴くんほどぞくぞくさせてはくれなかったのよ。今一番楽しみなのは、彼との勝負。もう私達に時間はないでしょうし、最後に彼との全力勝負で幕を降ろしたいわ」

「…時間がない？」

「そう、奏ちゃんがＩＳ学園へ行った瞬間から、私達に時間は無くなったのよ」

どことなく切ない表情のレナス。

「ここの場所がバレたから？」

「…そう。例えこれから来る軍を、私達四人で退けたとしても、まだ他にも軍は存在するし、乗りきれるとも限らない。だから、私達に時間はない。」

「…」

「でも、彼と戦えるかなんてわからなくなってしまったけどね」

「え？」

「あら、覚えてない？エムが彼を射ったおかげで、彼は意識が戻らないらしいわ」

呆れた表情で頬に手を当てるレナス。

「そんな…！」

気にはなっていた。でも、まさか意識が戻らないほどとは思わなかった。一気に不安になってきて、今すぐ俊貴に駆け寄りたい。でも、それを阻む手錠と足枷。

「エムが今学園を見張ってるわ、念のためね」

…念のため？もしかして、ここを攻めてくるのがＩＳ学園の、日本の軍だってわかってるの？それで主力が抜けた学園を、サイレント・ゼフィルスが落とそうとしてるの？

「まあ、ただではやられるつもりはないってことね。彼との勝負の邪魔してくれたエムに腹は立つけど、彼と戦えないんだったらどうだっていい。」

「…」

「大人しくしてなさいな。終わったら逃がしてあげるから」

そういって、レナスは出ていった。

「俊貴…」

ボソッと、俊貴の名前を呟いた。

意識不明と半壊（後書き）

こんにちわ。

最終話に近づいてきました。
とりあえず、もうストックないです（泣）
困った…

ペースを少しあげてみますので、次までお待ちください。

簪・奏ｖｓシュレイル・シャーリィ・キール

とある山に建てられた基地。

その周辺に響く爆音。
日本軍により、レナス達の基地侵攻作戦が始まっていた。

向こうは、ＩＳ３機のみが迎撃に出ていた。
日本軍はその倍を越える、１２機。

だが、そのなかに専用機はない。すべて、打鉄とラファール・リヴァイヴで編成されていた。

その１２機の後ろから様子を伺う2機の専用機。
簪の打鉄弐式と、奏のライトニング・シュヴァルツ。

「何よ。あの3機の足止めすらできないなんて、日本軍弱すぎるわ！」

奏が顔をしかめて文句を言う。
戦闘はなるべく避けろと言われているため、戦えない奏はイライラしている。

「落ち着いて…、まだ出る時じゃない」

簪がイラつく奏をなだめる。

「わかってるわよ！」

奏が怒鳴るように言う。

（なんでお兄ちゃんじゃなくて、こんな根暗と一緒なのよ…。絶対あの3機許さない…）

奏は少しずれた怒りを燃やす。

「…！奥村さん、左！！」

簪が焦って奏に声をかける。

「は？」

言われた方を見ると、黒いＩＳがビームソードを持ってこちらに向かってきていた。

「どけぇ！」

セーブルを駆るシャーリィが思いきり奏に体当たりしてきた。

「きゃっ！？」

奏は体勢を崩し、その場に倒れる。

シャーリィはすぐにその場から跳んで距離を開ける。

「っ…！よくも私をっ」

激昂して立ち上がり、奏はシャーリィを追って飛び出した。手には大剣を握っている。

「奥村さん！ダメっ！！」

簪がそれに気づき声をあげるが、奏は無視して飛んでいってしまった。

「もうっ…！誰かに似て、１人で無茶する…」

誰とは言わないけど、文句を呟く簪。

超振動薙刀'夢現'を取り出して両手に構える。

そして、奏を追って飛び出す。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「起きませんね…」

セシリアがベッドで眠る俊貴の顔を覗きこむ。

「起きないわね」

鈴もセシリアの横に顔を出して覗きこむ。

「おい、起きろ。俊貴」

ラウラがその横から顔を覗かせて、俊貴の頬を指でつつく。

「こら！寝てる人に何してんの！ラウラ！！」

怜莉がラウラの腕を掴んで止めさせる。

「でも、なんで起きないのかしら？」

セシリアが椅子に座り、頬に手を添える。

「さあ？輸血もしたしなんででしょうね」

鈴も椅子に座り、腕を組む。

「やっぱりこ」

「だめ」

何かしようとしたラウラを遮り、怜莉がラウラを椅子に座らせる。

ラウラは不満そうに怜莉を見るが、すぐに俊貴へと視線を戻す。

「こうすれば戻ると思うなぁ」

急に入ってきた楯無が、俊貴の唇にキスをした。

『なっ！？』

セシリア達が驚愕する。

ラウラは髪を逆立てて猫のように威嚇する。

「また貴様はー…」

「……起きないか、やっぱり」

楯無が苦笑いしながら口元を扇子で隠す。
ラウラはさらに威嚇する。

「たっちゃーん、おっくうは今充電中なんだよ。でゅっちーを助けに行かないといけないから」

袖を揺らしてのほほんさんが俊貴の横にきた。

「シャルロットちゃん？」

楯無が扇子を閉じる。

「うん。おっくうにとって大事な大事な、とっても大事なでゅっちーを助けるために、今は充電しないとダメなんだよ」

ねー、と俊貴に語りかけながら頭を撫でるのほほんさん。

「…」

それを聞き一斉に黙るセシリア達。
のほほんさんの言いたい事を何となく理解した皆はうつむく。

「さぁてと、私は教室に戻ろーっと」

鼻歌混じりでのほほんさんは出ていった。

「…この空気、どうすんのよ」

鈴が思わずボソッと呟く。

「私たちも教室に戻りましょう」

セシリアが立ち上がる。

他のみんなも立ち上がって、一緒に教室に戻っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあぁぁ！！」

大剣を思いきり降り下ろそうとする奏。

「シャーリィ、伏せろ！」

「うん！」

シャーリィが言われた通りしゃがむ。

その瞬間、後ろにいたシュレイルが奏に向けてミサイルを2発放った。その隙にシャーリィは横へと移動する。

「うっ！」

が、奏に当たる前にミサイルは2発の電磁砲によって撃ち落とされた。

「1人で無茶しないで…」

簪が奏の横に降りてきた。

「余計な事しないでよ」

ふん、と顔を背ける奏。

「…別に、あなたのためじゃない。」

そういって、簪は夢現を構える。

「ふん、私の邪魔はしないでよね」

奏も大剣を構え直す。

「…そっちこそ」

「ちっ！何ごちゃごちゃ話てんだ！！さっさと落ちろ！！」

シュレイルが再びミサイルを2人に向けて放つ。

「！」

2人は左右に別れて飛び、そのミサイルをかわす。2人のいた地面に当たって爆発する。

そのまま2人はシュレイルへと左右から挟み撃ちするように向かう。

「させないっ！」

奏の真横からまたシャーリィが邪魔に入る。ビームソードを奏へと向けて振る。

「！さっきからあんたは邪魔なのよ！！」

奏はそれに反応し、大剣をシャーリィへと横に薙ぐように振り抜く。
2人の剣がぶつかり、紫電を散らす。
「はあぁ！」
簪は、シャーリィが奏の邪魔に入ったのを小さなウィンドウを開いて確認し、そのまま自分はシュレイルへと向かい後ろへ引いた薙刀を振る。
「なめるなぁ！！」
シャーリィ達の方を見ていたシュレイルは、ＩＳからの警告音で気づいたのか2基のピットを使い、ビームを放つ。
「…っと」
放たれたビームを、円を描くように飛び回避。
それにより、シュレイルとの距離が少し開いたため、また距離をつめる。
今度はシュレイルもビームソードを取り出して、迎撃の体勢をとる。
「あぁぁ！」
「はあぁぁ！！」
2人同時に武器を振る。
そしてお互いにぶつかり合う瞬間、簪の夢現によりシュレイルのビ

ームソードは真っ二つに切り裂かれた。

「な、何!?」

それを見て、焦るシュレイル。

超振動薙刀の刀身が超高速で振動することで、シュレイルのビーム刃を発生させる刀身ごと切削。耐えきれずにビームソードが真っ二つとなった。

「まだ…!」

背中に搭載された2門の荷電粒子砲を、シュレイルへと向けて一斉に放つ。

「くっ!」

身動きできずに、シュレイルは両腕をからだの前で交差して防御の体勢をとる。

が、シュレイルは後ろから飛んできたキールに掴まれ空へと急上昇して荷電粒子砲をかわした。

「…」

簪はそれを目視で追う。

「シュレイル、油断しすぎだよ」

シュレイルを離してキールが忠告する。

「すまない、助かった」

その忠告に頷き、刀身の折れたビームソードを捨ててビームライフルを取り出す。

「向こうは？」

「あらかた撤退したよ。やっぱ量産機より専用機のが厄介だね」

そういって、キールも飛行型から人形へとキュアノスを変形させた。

「シャーリィは？」

シュレイルが簪の様子を伺いながらキールに聞く。

「えっと、奏と交戦中……。あ！」

その瞬間、爆発音が響く。

「なんだ！？」

慌ててその爆発のした方を見る。

すると、地面に大きな円形のクレーターが出来ており、灰色の煙があがっていた。

「やられたのか！？」

慌ててシャーリィの反応を探すシュレイル。

「いや、簪のハンマーが地面を破壊しただけ。シャーリィはあそこ」

と、キールが煙の上がるクレーターの右の方を指差す。

そこには、手ぶらで、地面を蹴りこちらに飛んでくるシャーリィの姿が見えた。

「無事か？」

「何とかね。アイツといい、アイツの兄といい強さがおかしいわ」

苦い顔をするシャーリィ。

「だが、いつまでもやられてばかりというわけにもいかない」

シュレイルが2基のピットを展開し、ビームライフルを構える。

「…そうね。あたしもそう思う」

シャーリィも背中の2門のビーム砲を2人に向け、ビームライフルを構える。

「うん、そろそろ見返してやらないと」

キールも両手にビームライフルとバズーカ、両肩のミサイルポットを開く。

「何をする気…？」

簪が3人をズームで見る。

すべての砲門が、自分と簪に向けられている事に気づく。

「簪！避けなさい！！」

「っ！？」

急に奏に怒鳴られ驚くが、言われた通りにその場から一気に離れる。

次の瞬間、３機から放たれたビーム、ミサイルが２人へと飛んできた。

それは２人の周辺もろとも狙った攻撃で、周囲に爆発が巻き起こる。

幸いにも、奏のおかげで大体の攻撃が外れ、追尾してきたミサイルを落としたり、逸れてこちらに飛んできたビームをかわすだけで済んだ。

「外れた！？」

不意の一斉砲火をすんなりとかわされ、戸惑うシュレイル。

「弾の補充急いで！」

シャーリィがビームソードを取り出して奏へと向かう。

シャーリィは基本的に接近戦のため、弾は正直どうでもいいらしい。

「キール、私も前に出るから弾の補充後、私とシャーリィの援護頼む！」

そういって、シュレイルは巨大なランスを取り出した。

「わかった！」

そういって、キールはバズーカのりロードを行う。

「ったく、しつこいのよ！あんたらは！！」

奏が向かってくるシャーリィへと瞬時加速する。

「裏切ったくせに何を！！」

シャーリィが斜めにビームソードを振り下ろした。

「別に、あんたらの仲間になったつもりはないわ！お兄ちゃんを探すついでに少し手を貸したげただけ！！」

奏も大剣を思いきり振る。

2人の武器がぶつかり合い、紫電を散らす。

「っ！」

奏の攻撃の重さに顔を歪めるシャーリィ。

その重さに腕が震えてくる。

「はあぁ！」

奏が剣を思いきり振り抜いた。

「うあっ」

シャーリィはビームソードを後ろへと弾かれ、大きな隙ができる。

その隙を逃さず、奏が追い討ちをかける。
大剣を斜めに高く放り投げ、両手に斧を1つずつ取り出し、シャーリィを斧で切り裂く。

「ぐぅぅ！」

アーマーを切り裂かれのけ反る。

「まだまだ！」

斧を投げ捨て、剣を取り出して再びシャーリィへと切りつける。

「しまった…！」

ブースターを破壊された。

「まだよ！」

剣を投げ捨て、上から降ってきた大剣を掴み、そのままシャーリィを斜めに切り裂く。

更に、大剣を捨て手を空に掲げる。

その瞬間、巨大なハンマーが現れ奏の手の中に収まる。

「潰れろおぉー！」

ハンマーを素早くシャーリィへと降り下ろす。

「ひっ…！？」

大きな音をたて、ハンマーは地面へとシャーリィごと叩きつけられ煙をあげる。

「ふん、私の邪魔するからそうなるのよ」

ハンマーをくるくると回転させる奏。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さっきの音は！？」

簪と交戦中のシュレイルが後ろから援護してくれているキールに聞く。

「シャーリィがやられちゃった！」

キールの悲痛な声が聞こえてきた。

「なんだとっ！？奏のやつっ！！」

小さなウィンドウで奏を捉え、歯を噛み締める。

「今は……私が相手」

風を薙ぎ、簪の薙刀がアーマーの前を横切る。

「っ！お前を潰して、奏も潰す！！」

「…ムリ」

簪が背中の荷電粒子砲を放つ。

「そんなものっ！」

横へと飛んでかわす。

「うわっ！？」

「！？」

後ろからの声に振り返ると、キールのスラスターから煙があがっていた。

シュレイルの避けた荷電粒子砲がキールのスラスターに当たってしまったようだ。

「キール！」

「…」

簪は後ろを振り返ったシュレイルの隙を逃さずに、ミサイルポットを開き2人をロックオン。

「完成した山嵐。受けてみて…！！」

一斉に6機のミサイルポットからミサイルを放つ。

それを、ＩＳからの警告音で気づくシュレイル。

「ミサイル!?だが、ミサイルなら!!」

キールのいない方へと飛び、ビームライフルを取り出してミサイルに狙いをつける。

「なにっ!?」

ミサイルは複雑な動きで、かつ素早くシュレイルの方へと向かってくる。

「狙いがっ…」

定まらない狙いに背筋が凍る。

狙いが定まるまで持ってくれるはずもなく、ミサイルはシュレイルに直撃する。

「シュレイルっ!!」

キールがシュレイルの援護に回ろうとする。

が、キールは自分へと向かってくるミサイルに気づく。

飛行形態へと変形し、距離をとろうと飛ぶ。

「逃がさないっ…!」

簪は残っているミサイルをすべてキールへと向ける。

「くっ!なんて動きなの…」

死角からも的確に飛んでくるミサイルに苦い顔をする。

「そこっ！！」

簪がキールの進行方向へと荷電粒子砲を放つ。

「！」

キールはそれを急停止してかわす。

だが、その場に止まった事によりミサイルがアーマーに直撃する。

「うわあああぁぁ！！」

次々とアーマーに直撃し、爆発していく。

「へえ、あんたもやるじゃない」

奏が簪の隣に飛んできた。

「…俊貴のおかげ」

ミサイルポットをしまい、薙刀を手にとる。

「お兄ちゃん？どういうこと？」

「俊貴が…マルチロックオンのデータをくれたから、私の…山嵐は完成した。…俊貴がいなかったら…無理だった」

俊貴の、ピットによるマルチロックオンのデータをもらい山嵐の参考データとして使った。そのおかげで、山嵐のマルチロックオンシ

ステムは完成した。

「…お人好しは変わってない、と」

ため息をつく奏。

「……、まだやることがある」

簪が小さなウィンドウを開く。

そこにこの基地の構造が３Ｄで映し出されている。

「わかってるわよ。シャルロット・デュノアを探すんでしょ？」

簪からその３Ｄ映像が送られてきた。

「あらら、皆やられちゃったのね。」

基地の奥からレナスが出てきた。

地面に倒れて気を失っているシュレイル達を見る。

「レナスさん…」

「うふふ、奏ちゃん。私を楽しませてね」

ＩＳを展開するレナス。

響・奏ｖｓシュレイル・シャーリィ・キール（後書き）

こんにちわ。
現在最終話執筆中です。

出来しだい更新しようと思ってます。
最終話まであと少しですが、読んでもらえると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0659u/

IS reve

2011年12月24日11時46分発行